仙台市文化財調査報告書第45集

茂庭

1983年3月

仙台市教育委員会
仙台市開発局

仙台市文化財調査報告書第45集

茂庭（もにわ）

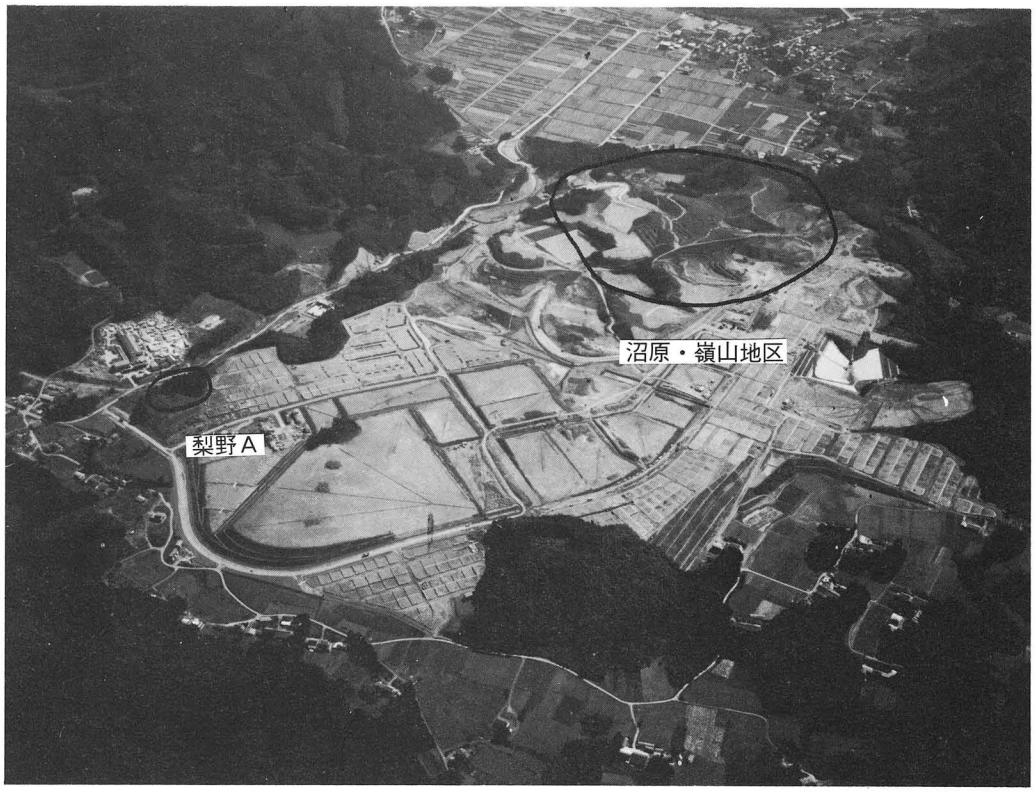
茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告

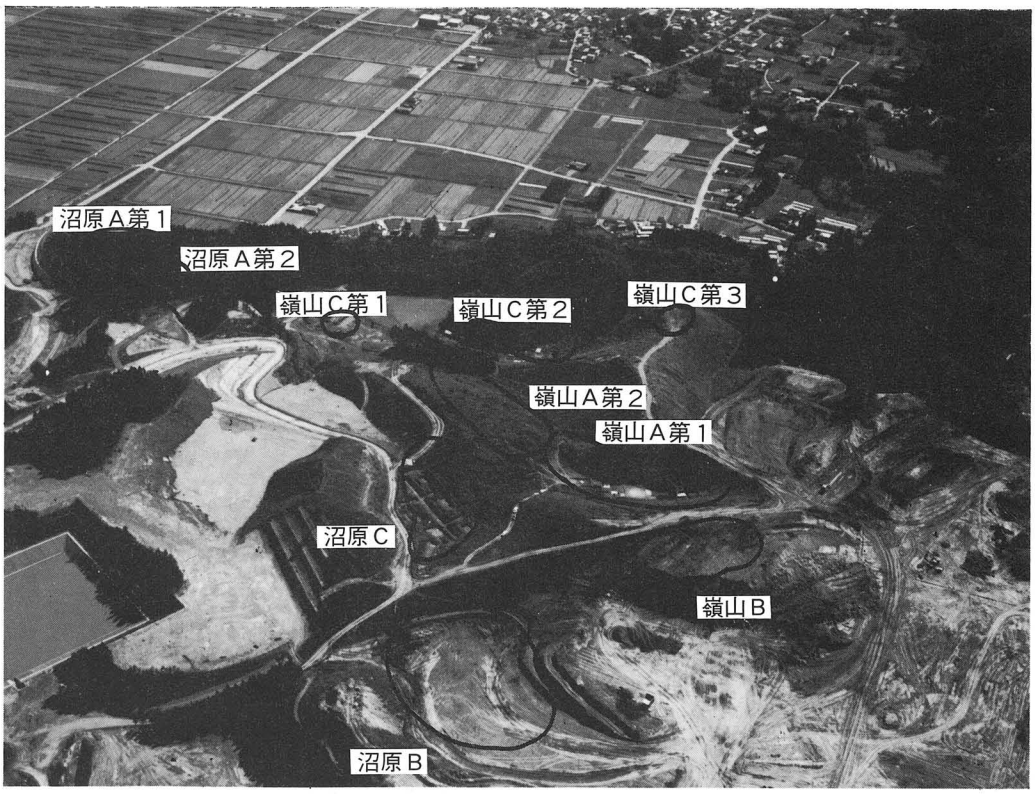
梨野（なしの）A遺跡
沼原（ぬまはら）A遺跡
沼原（ぬまはら）B遺跡
沼原（ぬまはら）C遺跡
嶺山（みねやま）A遺跡
嶺山（みねやま）B遺跡
嶺山（みねやま）C遺跡

１９８３年３月

仙台市教育委員会
仙台市開発局

表紙題字　藤井 黎　筆





茂庭造成団地遺跡群航空写真（北西上空より）

梨野A遺跡　2号住居跡

嶺山C遺跡　製鉄遺構

序　　文

名取川の中流にある小さな河谷盆地、ここ茂庭は、古来、二口越え・笹谷越えや関山越えとの連絡路、茂庭道等の街道筋にあって、物資移入の中継地として伝え聞く、由緒深いところであります。「仙台領･古城書上」という古書には茂庭氏の居城と伝える茂庭東館、けんとう城、峯館、茂庭（西・大・小）館等の遺跡もあって、この地は、さながら中世の世界を髣髴させるところともなっています。

このようなここ茂庭地区に、昭和48年、仙台市は、将来の人口増加や住宅難解消に備えて、新しい住宅団地の造成計画を立案し、生出集落の北方､標高100～200m内外の丘陵森林帯約130haが対象となりました。仙台市開発局と同教育委員会は再三にわたる協議を重ね、昭和51年、文化財分布調査、昭和53年、その予備調査を実施、そして、昭和54～57年の３ケ年を費やする本調査・整理調査となったのであります。調査の結果、とりわけ、梨野Ａ遺跡は縄文時代中期頃の住居跡が良好な保存状態で発見されるに至り、文化財保存活用の立場から、約4,000㎡については、このニュータウンのコミニティーパークとして保護・保存・活用に資するということで協議が整い、本市初のサイトパークの誕生となったのであります。

さて、本報告は、茂庭ニュータウン建設に伴うこれまでの発掘調査の成果を詳細にわたってまとめ上げた、貴重な記録保存のための報告書であります。文化財の保護、保存、啓発に大きく貢献するものと確信してやみません。これまでの発掘調査、整理作業に係わっていただいた大勢の方々をはじめ、御助言、御指導をいただきました学識者の方々に対し、深心なる感謝と御礼を申し上げますとともに、本書が大いに活用され、文化財保護・啓蒙と愛護精神向上の一助となることを念じて序とする次第であります。

昭和58年３月

仙台市教育委員会
教育長　藤　井　　黎

例　　言

1．本書は仙台市茂庭字梨野東、大堤、立石、嶺山、沼原地区茂庭住宅団地造成工事事業に伴う梨野Ａ遺跡、沼原Ａ遺跡、沼原Ｂ遺跡、沼原Ｃ遺跡、嶺山Ａ遺跡、嶺山Ｂ遺跡、嶺山Ｃ遺跡発掘調査に関する本報告書であり、すでに公表された略報告書に優先するものである。尚、梨野Ｃ遺跡に関しては昭和55年度略報（仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅰ）をもって本報告とした。

2．報告書作成のための整理は佐藤甲二、柳沢みどりが担当し、斎野裕彦、田中則和、篠原信彦、吉岡恭平、主浜光朗、荒井格がこれを補佐した。また、直接整理に参加しなかった職員からも全面的な協力を得た。また、編集は、整理参加職員の協力を得て、佐藤甲二、斎野裕彦が行った。

3．本文の執筆は佐藤甲二、斎野裕彦、柳沢みどり、田中則和、篠原信彦、吉岡恭平、主浜光朗が担当した外、下記の方々、諸機関にお願いした。（敬称・略）

梨野Ａ遺跡の花粉分析	竹内貞子	斎藤報恩会自然史博物館
梨野Ａ遺跡６号ピット出土の接合資料	後藤秀一	多賀城跡調査研究所
梨野Ａ遺跡出土土器底部圧痕	松岡敦子	
鉄滓分析	鴇田勝彦	宮城県立古川工業高校　教諭
骨の同定	高橋　理	東北大学考古学研究室大学院生
リン分析、C_{14}年代測定	パリノ・サーベイ社	

上記部分外の本文執筆担当者名は文末に記した。

4．報告書の作成は、埋蔵文化財整理室（仙台市福田町一丁目15の１、高砂公民館内）で実施し、下記のとおり分担した。

図面整理：佐藤甲二、斎野裕彦、木戸春夫、熊谷信一、叶文俊、佐藤栄作

遺物実則・トレース：柳沢みどり、佐藤甲二、斎野裕彦、田中則和、篠原信彦、吉岡恭平、主浜光朗、荒井格、後藤秀一、横山裕平、阿部朝衛、佐川敏行、佐藤広史、宍戸美智子、佐藤幸子、石黒伸一郎、斎藤秀寿、山田しょう、工藤久美子、柿沼敏朗、阿部多津子、吉田康子、山田富士子、松岡敦子、平照子、菅原美智子、千葉ひろみ、千葉きよ子、木村繁子、石垣純子、佐藤真貴、松本純子

遺構写真：佐藤甲二、斎野裕彦、篠原信彦、渡部弘美、加藤正範、結城慎一

遺構トレース：佐藤甲二、斎野裕彦、斎藤秀寿、大場拓俊、佐藤栄作、熊谷信一、相沢浩二、松木仁、大友透

遺物写真：佐藤甲二、田中則和、吉岡恭平、斎野裕彦、柳沢みどり、小島真弓

5．発掘調査及び遺物整理において、下記の方々及び機関に助言協力を賜った。(敬称・略)須藤隆(東北大学助教授)、丹羽茂、阿部ひろし(宮城県文化財保護課)、庄子貞雄、山田一郎(東北大学農学部)、藤沼邦彦、岡村道雄(東北歴史資料館)、後藤秀一(多賀城跡調査研究所)、阿部朝衛、桑月鮮、梶原洋、佐川敏行、佐藤広史、柳沢和明、田中敏(東北大学大学院)、野崎準(金属博物館)、長谷川真(姫路市教育委員会)、長谷川徹(苫小牧市埋文センター)、横山裕平(石器談話会)、石岡憲雄(埼玉県立歴史資料館)、樫村友延(いわき市教育文化事業団)、宮城豊彦(東北学院大学講師)、松井章(奈良国立文化財研究所)、東北学院大学考古学研究部、鴇田勝彦、三宅宗義(古川工業高校教諭)、中島正一(多摩市教育委員会)、檜崎彰一(名古屋大学教授)、馬目順一、中川高、山口博之(山形市立第七小学校教諭)、本堂寿一(北上市立博物館)、佐藤庄一(山形県教育委員会)

6．石器の材質の同定は仙台市科学館佐々木隆氏にお願いした。

炭化種子の同定は大阪市立大学教授粉川昭平氏にお願いした。

炭化材の同定は奈良国立文化財研究所光谷拓実氏にお願いした。

鉄滓の定光分析、化学分析、X線回折は東北金属工業株式会社にお願いした。

7．本報告書中の土層の土色については「新版標準土色帳」(小林、竹原：1973)を使用した。

8．本報告書に使用した建設省国土地理院発行の地形図は図中に示した。

9．本報告書中使用の用語として

(1)．「埋土」という用語は明らかに遺構構築する際に人為的に埋め房されたものに用い、それ以外のものに関しては「堆積土」という用語を用いた。

(2)．ローマ数字使用の層位名は基本層位を表わす。それ以外の層位名(算用数字、カタカナ等)は堆積土、埋土の層位を表わす。

(3)．「復元土器」とは、①口縁部から底部まで連結するもの　②口縁部から体部の円周が連続して復元し得るものである。

(4)．遺構名の略語として1号住居跡は「1住」、1号土壙は「1D」、1号ピットは「1P」、1号風倒木痕は「1風」等とした。

(5)．土器観察表内の( )付法量は、図上復元数値である。

(6)．土器接合表内の「＋」は接合、「－」は同一遺物関係を示す。

(7)．第Ⅶ～Ⅷ群土器の分類基準・説明・観察表・考察において「深鉢」・「浅鉢」…は各々「深鉢型土器」・「浅鉢型土器」の意味で使用しており他の器形においても同様である。

10．本報告書中図版内の表現として

(1)．方位は全て磁北を北としている。

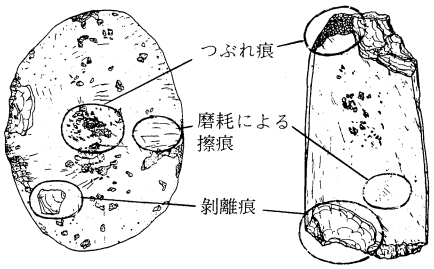
(2)．斜面部に関しては、傾斜角ほぼ30°を基準として、未満のものは 、以上のものは、

を使用した。

(3). 「P」は土器、「S」は石器・自然礫、「F」は鉄滓を表わす。

(4). 転回して器形の復元実測を行ったものについては、中心線を1点鎖線で示した。

(5). 磨製石斧・礫石器の実測図の範例



打撃痕の分類

11. 全資料は仙台市教育委員会にて一括保管してあるので活用されたい。

本　文　目　次

序文
例言
調査経過 …… 1
Ⅰ．調査に至る経過 …… 1
Ⅱ．調査概要 …… 2
立地と周辺の遺跡 …… 4
Ⅰ．地形と地質 …… 4
Ⅱ．歴史的環境 …… 12
石器の分類基準 …… 19

梨野Ａ遺跡 …… 25
Ⅰ．遺跡の立地 …… 27
Ⅱ．調査の方法と概要 …… 27
１．調査の方法 …… 27
２．調査の概要 …… 28
Ⅲ．基本層位 …… 32
Ⅳ．縄文時代の遺構と遺物 …… 35
１．ピット・土壙の分類基準 …… 35
２．土器の分類基準 …… 37
３．遺構と遺構内出土遺物 …… 41
（１）縄文時代早期 …… 43
1号土壙……43　2号土壙……43　1号ピット……43
2号ピット……43　3号ピット……43
（２）縄文時代中期・後期 …… 45
1号住居跡……45　2号住居跡……54　1号炉跡……79
1号埋設土器……80　2号埋設土器……80　3号埋設土器……80
4号ピット……89　5号ピット……89　3号土壙……89
4号土壙……96　5号土壙……96　6号土壙……96
（３）縄文時代晩期 …… 105
7号土壙……105　8号土壙…… 112

9号土壙…… 112　10号土壙…… 112
（4）時期不明 …… 121
4号埋設土器…… 121　6号ピット…… 121　11号土壙…… 123
12号土壙…… 123　13号土壙…… 123　14号土壙…… 123
15号土壙…… 123　16号土壙…… 142　17号土壙…… 142
18号土壙…… 142　19号土壙…… 142　20号土壙…… 142
4．出土遺物 …… 156
（1）土器 …… 156
（2）土製品 …… 230
（3）石器 …… 236
Ⅴ．古墳時代の遺構と遺物 …… 275
1．遺構と遺構内出土遺物 …… 275
2．出土遺物 …… 275
Ⅵ．その他の遺物 …… 278
Ⅶ．考察 …… 279
1．縄文時代の遺物と遺構の分布　－出土土器を中心として－ …… 279
2．縄文時代中期の土器 …… 289
3．第Ⅷ・Ⅸ群土器―後期初頭の土器と前葉の土器― …… 296
4．縄文土器の底部 …… 312
5．接合資料について　－6号ピット出土の接合資料について－ …… 320
6．出土石器について …… 323
Ⅷ．まとめ …… 324

沼原A遺跡 …… 325
Ⅰ．遺跡の立地 …… 326
Ⅱ．調査の方法と概要 …… 326
1．調査の方法 …… 326
2．調査の概要 …… 326
Ⅲ．基本層位 …… 331
Ⅳ．遺構と遺構内出土遺物 …… 335
1．縄文時代 …… 335
1号土壙……335　2号土壙……336　3号土壙…… 337

4号土壙……341　5号土壙……342　6号土壙……343
7号土壙……345　8号土壙……345　9号土壙……346
10号土壙……346　11号土壙……347
2．平安時代 ……348
1号住居跡……348
3．時代不明 ……358
12号土壙……358
Ⅴ．出土遺物……359
1．土器 ……359
2．石器 ……359
3．鉄滓 ……360
Ⅵ．まとめ……375

沼原Ｂ遺跡 ……377
Ⅰ．遺跡の立地……378
Ⅱ．調査の方法と概要 ……378
1．調査の方法 ……378
2．調査の概要 ……380
Ⅲ．基本層位……381
Ⅳ．遺構 ……383
1号土壙……383
Ⅴ．出土遺物……384
1．土器 ……384
2．石器 ……384
Ⅵ．まとめ……391

沼原Ｃ遺跡 ……393
Ⅰ．遺跡の立地……394
Ⅱ．調査の方法と概要 ……394
1．調査の方法 ……394
2．調査の概要 ……394
Ⅲ．基本層位……396

Ⅳ．遺構 …… 397
1号土壙 …… 397
Ⅴ．出土遺物 …… 401
1．土器 …… 401
2．石器 …… 401
Ⅵ．まとめ …… 404

嶺山A遺跡 …… 405
Ⅰ．遺跡の立地 …… 406
Ⅱ．調査の方法と概要 …… 406
1．調査の方法 …… 406
2．調査の概要 …… 406
Ⅲ．基本層位 …… 410
Ⅳ．縄文時代の遺構と遺構内出土遺物 …… 412
1号土壙 …… 412　2号土壙 …… 412　3号土壙 …… 413
4号土壙 …… 413　5号土壙 …… 414　6号土壙 …… 414
7号土壙 …… 415　8号土壙 …… 415　9号土壙 …… 416
10号土壙 …… 416　11号土壙 …… 417　12号土壙 …… 417
13号土壙 …… 418　14号土壙 …… 418　15号土壙 …… 419
16号土壙 …… 419
Ⅴ．出土遺物 …… 420
1．土器 …… 420
2．石器 …… 420
Ⅵ．まとめ …… 425

嶺山B遺跡 …… 427
Ⅰ．遺跡の立地 …… 428
Ⅱ．調査の方法と概要 …… 430
1．調査の方法 …… 430
2．調査の概要 …… 430
Ⅲ．基本層位 …… 430
Ⅳ．遺構 …… 433

1号土壙…… 433
Ⅴ．出土遺物…… 435
1．土器 …… 435
2．石器 …… 435
Ⅵ．まとめ …… 438

嶺山C遺跡 …… 439
Ⅰ．遺跡の立地…… 440
Ⅱ．調査の方法と概要 …… 440
1．調査の方法 …… 440
2．調査の概要 …… 440
Ⅲ．基本層位…… 444
Ⅳ．遺構と遺構内出土遺物…… 447
製鉄遺構…… 447
Ⅴ．出土遺物…… 461
1．土器 …… 461
2．土製品 …… 461
3．石器・石製品 …… 462
4．鉄製品 …… 462
Ⅵ．まとめ …… 473

分析・同定結果 …… 477
沼原A・嶺山C・梨野各遺跡出土炭化材樹種同定結果 …… 478
仙台市嶺山C遺跡出土鉄滓の分析調査 …… 479
梨野A遺跡包含層の花粉分析…… 495
沼原C遺跡出土の骨片 …… 504
梨野A・沼原A・嶺山C各遺跡のC_{14}年代測定結果…… 506
梨野A遺跡試料リン分析結果…… 507

周辺遺跡の表採資料 …… 509
1．門野山囲遺跡 …… 510
2．嶺岸遺跡…… 515

考察・まとめ…… 517
沼原・嶺山地区の層位関係と土壙・土壙群について …… 518
沼原Ａ・嶺山Ｃ遺跡の土師器、赤焼土器、須恵器…… 540
茂庭造成団地工事地内遺跡群について…… 543

挿図目次

調査に至る経過

第１図　仙台市域地図……１

立地と周辺の遺跡

第１図　地形区分図……５
第２図　対象地区地形図……７
第３図　対象地区地質図……９
第４図　仙台市付近の地質層序概略……10
第５図　周辺の遺跡……15・16

石器の分類基準

第１図　石器の計測基準……24

梨野Ａ遺跡

第１図　地形・グリッド配置図……26
第２図　遺構配置図……28
第３図　基本層位Ｋ－13(b)東壁セクション図……33
第４図　土壙の分類基準……36
第５図　遺構配置図(Ｉ～Ｑ－６～９グリッド)……41
第６図　遺構配置図(Ｊ～Ｐ－９～15グリッド)……42
第７図　１号土壙出土遺物……43
第８図　１号～３号ピット・１号・２号土壙平面図…44
第９図　１号住居跡平面図……47
第10図　１号住居跡炉・P_6平面図……48
第11図　１号住居跡炉内出土土器……51
第12図　１号住居跡出土石器(1)……52
第13図　１号住居跡出土石器(2)……53
第14図　２号住居跡・炉平面図……57・58
第15図　２号住居跡埋設土器……59
第16図　２号住居跡出土土器(1)……65
第17図　２号住居跡出土土器(2)……66
第18図　２号住居跡出土土器(3)……67
第19図　２号住居跡出土土器(4)……68
第20図　２号住居跡出土土器(5)……69
第21図　２号住居跡出土土器(6)……70
第22図　２号住居跡出土土器(7)・土製品……71
第23図　２号住居跡出土石器(1)……72
第24図　２号住居跡出土石器(2)……73
第25図　２号住居跡出土石器(3)……74
第26図　２号住居跡出土石器(4)……75
第27図　２号住居跡出土石器(5)……76
第28図　２号住居跡出土石器(6)……77
第29図　２号住居跡出土石器(7)……78
第30図　１号炉跡平面図……79
第31図　１号・２号埋設土器平面図……81
第32図　１号埋設土器……82
第33図　２号埋設土器……83
第34図　３号埋設土器平面図……84
第35図　３号埋設土器・出土土器……85
第36図　３号埋設土器……86
第37図　３号埋設土器出土石器(1)……87
第38図　３号埋設土器出土石器(2)……88
第39図　４号ピット平面図……90
第40図　４号ピット出土土器、５号ピット平面図…91
第41図　５号ピット出土土器……92
第42図　３号土壙平面図……93
第43図　３号土壙出土土器(1)……94
第44図　３号土壙出土土器(2)……95
第45図　４号土壙平面図・出土土器(1)……97
第46図　４号土壙出土土器(2)・石器……98
第47図　５号土壙平面図……99
第48図　５号土壙出土土器・石器……100
第49図　６号土壙平面図……101
第50図　６号土壙出土土器(1)……102
第51図　６号土壙出土土器(2)……103
第52図　６号土壙出土土器(3)・石器……104
第53図　７号土壙平面図……106
第54図　７号土壙出土土器(1)……109
第55図　７号土壙出土土器(2)……110
第56図　７号土壙出土土器(3)……111
第57図　７号土壙出土石器・８号土壙平面図……113
第58図　８号土壙出土石器……114
第59図　９号土壙平面図……115

第60図　9号土壙出土土器……116
第61図　9号土壙出土石器(1)……117
第62図　9号土壙出土石器(2)・10号土壙平面図…118
第63図　10号土壙出土土器……119
第64図　10号土壙出土石器……120
第65図　4号埋設土器……122
第66図　6号ピット平面図……124
第67図　6号ピット出土石器(1)……125
第68図　6号ピット出土石器(2)……126
第69図　6号ピット出土石器(3)……127
第70図　6号ピット出土石器(4)……128
第71図　6号ピット出土石器(5)……129
第72図　6号ピット出土石器(6)……130
第73図　11号土壙平面図・出土土器……133
第74図　12号土壙平面図……134
第75図　12号土壙出土土器・石器(1)……135
第76図　12号土壙出土石器(2)……136
第77図　12号土壙出土石器(3)……137
第78図　13号土壙平面図・出土土器(1)……138
第79図　13号土壙出土土器(2)・14号土壙平面図…139
第80図　15号土壙平面図……140
第81図　15号土壙出土土器……141
第82図　16号土壙平面図・出土土器……143
第83図　17号土壙平面図・出土土器……144
第84図　18号土壙平面図……145
第85図　18号土壙出土土器・19号土壙平面図……146
第86図　19号土壙出土土器……147
第87図　19号土壙出土土製品・石器……148
第88図　20号土壙平面図……149
第89図　20号土壙出土土器(1)……150
第90図　20号土壙出土土器(2)……151
第91図　20号土壙出土土製品・石器……152
第92図　第Ⅰ群土器(1)……158
第93図　第Ⅰ群土器(2)……159
第94図　第Ⅰ群土器(3)……160
第95図　第Ⅰ群土器(4)・第Ⅱ群土器(1)……162
第96図　第Ⅱ群土器(2)……163
第97図　第Ⅱ群土器(3)……164
第98図　第Ⅱ群土器(4)……165
第99図　第Ⅱ群土器(5)・第Ⅲ群土器(1)……167
第100図　第Ⅲ群土器(2)……168
第101図　第Ⅳ群土器……169
第102図　第Ⅴ群土器(1)……171
第103図　第Ⅴ群土器(2)……172
第104図　第Ⅴ群土器(3)……173
第105図　第Ⅴ群土器(4)……175
第106図　第Ⅴ群土器(5)……176
第107図　第Ⅴ群土器(6)……177
第108図　第Ⅵ群土器(1)……179
第109図　第Ⅵ群土器(2)……181
第110図　第Ⅵ群土器(3)……182
第111図　第Ⅵ群土器(4)……183
第112図　第Ⅵ群土器(5)……185
第113図　第Ⅵ群土器(6)……187
第114図　第Ⅶ群土器(1)……189
第115図　第Ⅶ群土器(2)……190
第116図　第Ⅷ群土器(1)……193
第117図　第Ⅷ群土器(2)……194
第118図　第Ⅷ群土器(3)……195
第119図　第Ⅷ群土器(4)……198
第120図　第Ⅷ群土器(5)……199
第121図　第Ⅷ群土器(6)……200
第122図　第Ⅷ群土器(7)……202
第123図　第Ⅷ群土器(8)……203
第124図　第Ⅷ群土器(9)……207
第125図　第Ⅷ群土器(10)……208
第126図　第Ⅷ群土器(11)……209
第127図　第Ⅷ群土器(12)……210
第128図　第Ⅷ群土器(13)……211
第129図　第Ⅷ群土器(14)……212
第130図　第Ⅷ群土器・突起(1)……214
第131図　第Ⅷ群土器・突起(2)……215
第132図　第Ⅸ群・Ⅹ群土器……216
第133図　第Ⅺ群土器(1)……219
第134図　第Ⅺ群土器(2)……220
第135図　第Ⅺ群土器(3)……221

第136図　第Ⅺ群土器(4)…… 222
第137図　第Ⅺ群土器(5)…… 223
第138図　第Ⅻ群土器…… 224
第139図　第ⅩⅢ群土器(1)…… 226
第140図　第ⅩⅢ群土器(2)…… 227
第141図　第ⅩⅢ群土器(3)…… 228
第142図　第ⅩⅢ群土器(4)…… 229
第143図　土製円盤(1)…… 233
第144図　土製円盤(2)…… 234
第145図　土製円盤(3)・土錘…… 235
第146図　各グリッド石器出土状況…… 237
第147図　石鏃の型式分類及び出土数量…… 238
第148図　石鏃とポイントの長幅及び型式相関図… 239
第149図　石錐の長幅関係図…… 240
第150図　ポイントⅢ類と石鏃βⅢ④類の
　幅／厚　長／厚相関図…… 241
第151図　「不定形石器」長幅関係図…… 242
第152図　剥片の長幅関係図…… 243
第153図　礫石器　長幅／重量関係図…… 245
第154図　出土石器(1)…… 249
第155図　出土石器(2)…… 250
第156図　出土石器(3)…… 251
第157図　出土石器(4)…… 252
第158図　出土石器(5)…… 253
第159図　出土石器(6)…… 254
第160図　出土石器(7)…… 255
第161図　出土石器(8)…… 256
第162図　出土石器(9)…… 257
第163図　出土石器(10)…… 258
第164図　出土石器(11)…… 259
第165図　出土石器(12)…… 260
第166図　出土石器(13)…… 261
第167図　出土石器(14)…… 262
第168図　出土石器(15)…… 263
第169図　出土石器(16)…… 264
第170図　出土石器(17)…… 265
第171図　出土石器(18)…… 266
第172図　出土石器(19)…… 267
第173図　出土石器(20)…… 268
第174図　出土石器(21)…… 269
第175図　出土石器(22)…… 270
第176図　出土石器(23)…… 271
第177図　出土石器(24)…… 272
第178図　出土石器(25)…… 273
第179図　出土石器(26)…… 274
第180図　35号土壙平面図…… 276
第181図　35号土壙出土土器…… 277
第182図　土師器・中世陶器…… 278
第183図　接合関係図・
　口縁部資料グリッド別分布図 …… 282
第184図　群別資料グリッド別分布図…… 284
第185図　第Ⅷ群土器……299・300
第186図　六反田遺跡後期初頭土器……299・300
第187図　岩手県八天遺跡出土遺物…… 303
第188図　東北各地の
　大木10式土器～後期前葉土器…… 303
第189図　第Ⅷ・Ⅸ群土器分布図…… 308
第190図　編物模式図…… 313
第191図　底部拓影(1)…… 316
第192図　底部拓影(2)…… 317
第193図　底部写真(1)…… 318
第194図　底部写真(2)…… 319
沼原A遺跡
第１図　地形・グリッド・トレンチ配置図…… 327
第２図　遺構配置図…… 330
第３図　基本層位……
第４図　１号土壙(1)……
第５図　１号土壙(2)・２号土壙…… 336
第６図　３号土壙(1)…… 337
第７図　３号土壙(2)…… 338
第８図　３号土壙(3)…… 339
第９図　３号土壙(4)…… 340
第10図　４号土壙(1)…… 341
第11図　４号土壙(2)・５号土壙…… 342
第12図　６号土壙(1)…… 343
第13図　６号土壙(2)…… 344

第14図　7号土壙・8号土壙…… 345
第15図　9号土壙・10号土壙…… 346
第16図　11号土壙…… 347
第17図　1号住居跡……349・350
第18図　1号住居跡出土土器(1)…… 353
第19図　1号住居跡出土土器(2)…… 354
第20図　1号住居跡出土土器(3)…… 355
第21図　1号住居跡出土石器(1)…… 356
第22図　1号住居跡出土石器(2)・鉄滓…… 357
第23図　12号土壙…… 358
第24図　出土土器(1)…… 361
第25図　出土土器(2)…… 362
第26図　出土土器(3)…… 363
第27図　出土土器(4)…… 364
第28図　出土土器(5)…… 365
第29図　出土土器(6)…… 366
第30図　出土土器(7)…… 367
第31図　出土土器(8)…… 368
第32図　出土土器(9)…… 369
第33図　出土石器(1)…… 370
第34図　出土石器(2)…… 371
第35図　出土石器(3)…… 372
第36図　出土石器(4)…… 373
第37図　出土石器(5)・鉄滓…… 374

沼原B遺跡
第1図　地形・グリッド・トレンチ配置図…… 378
第2図　基本層位……382
第3図　1号土壙……383
第4図　出土土器(1)……385
第5図　出土土器(2)……386
第6図　出土土器(3)……387
第7図　出土土器(4)……388
第8図　出土石器(1)……389
第9図　出土石器(2)……390

沼原C遺跡
第1図　地形・トレンチ配置図…… 395
第2図　土層柱状図…… 396
第3図　1号土壙……399・400
第4図　出土土器(1)…… 402
第5図　出土土器(2)・石器…… 403

嶺山A遺跡
第1図　地形・グリッド配置図…… 407
第2図　遺構配置図…… 408
第3図　基本層位…… 411
第4図　1号土壙・2号土壙…… 412
第5図　3号土壙・4号土壙…… 413
第6図　5号土壙・6号土壙…… 414
第7図　7号土壙・8号土壙…… 415
第8図　9号土壙・10号土壙…… 416
第9図　11号土壙・12号土壙…… 417
第10図　13号土壙・14号土壙…… 418
第11図　15号土壙・16号土壙…… 419
第12図　出土土器(1)…… 421
第13図　出土土器(2)・石器(1)…… 422
第14図　出土石器(2)…… 423
第15図　出土石器(3)…… 424

嶺山B遺跡
第1図　地形・グリッド・トレンチ配置図…… 428
第2図　グリッド配置図…… 431
第3図　基本層位…… 431
第4図　1号土壙…… 434
第5図　出土土器(1)…… 436
第6図　出土土器(2)・石器…… 437

嶺山C遺跡
第1図　地形・グリッド・トレンチ配置図…… 441
第2図　基本層位……445・446
第3図　製鉄遺構…… 448
第4図　製鉄炉…… 450
第5図　1・2号土壙…… 453
第6図　西平坦面…… 454
第7図　製鉄遺構出土土器(1)…… 457

第８図　製鉄遺構出土土器(2)…… 458
第９図　製鉄遺構出土土器(3)…… 459
第10図　製鉄遺構出土土器(4)…… 460
第11図　出土土器(1)…… 463
第12図　出土土器(2)…… 464
第13図　出土土器(3)…… 465
第14図　出土土器(4)…… 466
第15図　出土土器(5)・羽口(1)…… 467
第16図　出土羽口(2)・石器(1)…… 468
第17図　出土石器(2)…… 469
第18図　出土石器(3)…… 470
第19図　出土石器(4)…… 471
第20図　出土石製品・鉄滓…… 472
第21図　出土鉄滓分布図…… 476

分析、同定結果
仙台市嶺山Ｃ遺跡出土鉄滓の分析調査
第１図　製鉄・鉄器製作過程と鉄滓の発生…… 479
第２図　$FeO-Fe_2O_3-SiO_2$ 3元系状態図…… 486
第３図　製練滓のTi/Fe－砂鉄の
Ti/Fe－鉄収率の計算図表…… 487
第４図　宮城県下出土滓の
製練滓・鍛治滓の区分…… 488

梨野Ａ遺跡包含層の花粉分析
第１図　梨野Ａ遺跡包含層の
主要花粉ダイアグラム……501・502

周辺遺跡の表採資料
第１図　表採資料(1)…… 511
第２図　表採資料(2)…… 512
第３図　表採資料(3)…… 513
第４図　表採資料(4)…… 514

考察・まとめ
沼原・嶺山地区の層位関係と土壙・土壙群について
第１図　沼原・嶺山地区の
基本層位対応関係……519
第２図　土壙の上端長軸と深さの関係…… 522
第３図　土壙の長軸方向…… 527
第４図　形態分類…… 530
第５図　配列と土壙群(1)…… 534
第６図　配列と土壙群(2)…… 535

表 目 次

立地と周辺の遺跡

第１表　遺跡・地名表……14

第２表　文献……18

石器の分類基準

第１表　石鏃の分類……19

第２表　スクレイパーの分類……21

梨野Ａ遺跡

第１表　２号住居跡
第Ⅴ群土器類別出土数量表……64

第２表　６号ピット石器計測表(1)……131

第３表　６号ピット石器計測表(2)……132

第４表　７～66号ピット遺構観察表……153

第５表　21～34号土壙遺構観察表……154

第６表　７～66号ピット出土遺物数量表……154

第７表　21～34号土壙出土遺物数量表……155

第８表　出土土器数量表……156

第９表　群別土器出土地点別数量表……156

第10表　出土層位と遺構内出土の土製円盤……231

第11表　土製円盤の重量分布……231

第12表　形態分類……231

第13表　土製円盤の加工度と大きさ……231

第14表　土製円盤の加工度と形態……231

第15表　石器出土数量表……237

第16表　石錐観察表……240

第17表　ポイント観察表……241

第18表　スクレイパー出土数量表……241

第19表　礫の形態と出土点数……245

第20表　礫石器の類型と礫の形態及び出土点数…245

第21表　礫の形態及び使用痕・石材の関係……245

第22表　接合および同一母岩資料……246

第23表　基本層出土
口縁部の層位別数量……280

第24表　基本層位内での
群別土器の割合……280

第25表　第Ⅴ・Ⅷ・ⅩⅢ群土器の
Ⅳ層細別層別の割合……280

第26表　グリッド別
出土数量表(群別及び口縁部数)……283

第27表　土壙形態別検出数……287

第28表　底部の編物圧痕型式と数量……312

沼原Ａ遺跡

第１表　縄文時代
弥生時代土器出土数量表……360

第２表　平安時代土器出土数量表……360

第３表　石器出土数量表……360

沼原Ｂ遺跡

第１表　縄文時代土器出土数量表……384

第２表　石器出土数量表……384

沼原Ｃ遺跡

第１表　遺物出土数量表……401

嶺山Ａ遺跡

第１表　土器出土数量表……420

第２表　石器出土数量表……420

嶺山Ｂ遺跡

第１表　遺物出土数量表……435

嶺山Ｃ遺跡

第１表　縄文時代土[illegible]・
石器・石製品出土数量表……462

第２表　平安時代土器出土数量表……462

第３表　鉄滓出土地点及び数量表……476

分析・同定結果
沼原A・嶺山C・梨野A各遺跡出土炭化材樹種同定結果
第1表　炭化材樹種同定表…… 478
仙台市嶺山C遺跡出土鉄滓の分析調査
第1表　供試鉄滓と調査項目…… 480
第2表　供試鉄滓のX線回折…… 481
第3表　鉄滓の化学分析結果……482・483
梨野A遺跡包含層の花粉分析
第1表　梨野A遺跡包含層の花粉・胞子出現率表‥499・500
沼原C遺跡出土の骨片
第1表　骨片同定表…… 504
梨野A・沼原A・嶺山C各遺跡のC_{14}年代測定結果
第1表　C_{14}年代測定結果一覧表 …… 506
梨野A遺跡試料リン分析結果
第1表　リン分析資料表……508
考察・まとめ
沼原・嶺山地区の層位関係と土壙・土壙群について
第1表　沼原A遺跡の
灰白色火山灰の分析結果……518
第2表　配列分類表……532
茂庭造成団地工事地内遺跡群について
第1表　各遺跡の時代別変遷……543
第2表　各遺跡の縄文時代の土器・石器
総出土数量表……544

写真目次

梨野A遺跡
1　調査前全景…… 29
2　54年度調査遠景…… 29
3　55年度調査遺構完掘状況(1)…… 29
4　55年度調査遺構完掘状況(2)…… 30
5　55年度調査遺構完掘状況(3)…… 30
6　56年度調査1号住居跡完掘状況……30
7　基本層位K－13(b)東壁セクション……33
8　1号住居跡炉検出状況……49
9　1号住居跡炉石組部底面……49
10　P_6内遺物出土状況……50
11　1号住居跡完掘状況……50
12　2号住居跡完掘状況……60
13　2号住居跡床面埋設土器……60
14　2号住居跡炉全景(1)……61
15　2号住居跡炉全景(2)……61
16　7号土壙出土遺物状況…… 107
17　7号土壙底面遺物出土状況(1)…… 107
18　7号土壙底面遺物出土状況(2)…… 108
19　7号土壙完掘状況…… 108
20　35号土壙完掘状況…… 277
21　六反田遺跡後期初頭土器他…… 301
沼原A遺跡
1　第1地点全景…… 328
2　第1地点発掘風景(1)…… 328
3　第1地点発掘風景(2)…… 328
4　第2地点発掘風景…… 329
5　第2地点全景(1)…… 329
6　第2地点全景(2)…… 329
7　1号住居跡完掘状況…… 351
8　1号住居跡カマド内遺物出土状況…… 351
9　1号住居跡カマド完掘状況…… 351
沼原B遺跡
1　調査前全景…… 379
2　54年度調査全景…… 379
3　55年度調査全景…… 380
4　水没状況…… 392
沼原C遺跡
1　全景…… 395
2　1号土壙骨片出土状況(1)…… 398

3　1号土壙骨片出土状況(2)…… 398
4　1号土壙完掘状況…… 398
5　遺跡全景…… 404

嶺山A遺跡
1　第1地点調査前全景…… 409
2　第1地点調査後全景(1)…… 409
3　第1地点調査後全景(2)…… 409
4　第1地点調査風景…… 426

嶺山B遺跡
1　調査前全景…… 429
2　遺跡遠景…… 429
3　遺跡よりの遠景…… 432
4　発掘風景…… 433

嶺山C遺跡
1　調査前遠景…… 442
2　調査風景…… 442
3　調査後全景…… 442
4　製鉄遺構全景…… 449
5　製鉄炉炉底検出状況…… 451
6　製鉄炉炉底部セクション…… 451
7　製鉄炉内土器出土状況…… 451
8　1号土壙セクション…… 453
9　2号土壙セクション…… 453
10　西平坦面カマド内遺物出土状況…… 455

分析・同定結果
仙台市嶺山C遺跡出土鉄滓の分析調査
鉄滓の鉱物顕微鏡組織Ⅰ…… 491
鉄滓の鉱物顕微鏡組織Ⅱ…… 492
鉄滓の鉱物顕微鏡組織Ⅲ…… 493
鉄滓の鉱物顕微鏡組織Ⅳ…… 494
梨野A遺跡包含層の花粉分析
梨野A遺跡包含層中の主要花粉…… 503
沼原C遺跡出土の骨片
1号土壙出土骨片…… 505

周辺遺跡の表採資料
1　門野山囲遺跡遠景…… 510
2　嶺岸遺跡遠景…… 510

調　査　経　過

Ⅰ．調査に至る経過

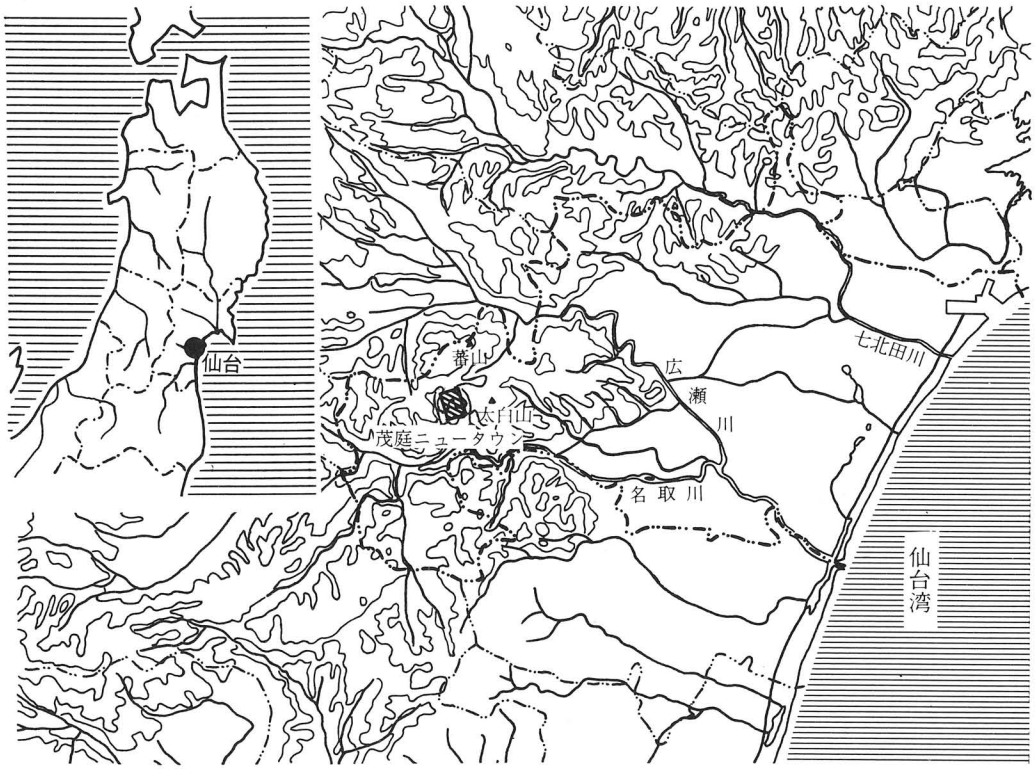
仙台市は年々都市化が進み、その結果として人口の増加、市街地の拡大等の種々の現象が生じてきている。

仙台市は将来の人口増加に伴う住宅難に備えて大型の市営団地を計画し、その造成地の選定を急いでいたが、昭和48年に仙台市西部丘陵地帯の茂庭地区を決定した。昭和51年には基本計画案が作成され、南北本郷地区―梨野地区間、東西大堤川―岩ノ川間の標高約100～200m の丘陵地約130haが造成対象地域とされた。

当地域内には周知の４遺跡（峯館跡、西館跡、向根遺跡、梨野Ａ遺跡）が含まれていたが、より詳細な文化財分布資料が必要となり、昭和51年７月、仙台市開発局より造成予定地内の文化財の分布調査依頼を仙台市教育委員会が受け、当年12月に仙台市教育局社会教育課文化財係（現文化財調査係）は、東北学院大学考古学研究部の協力のもとに文化財分布調査を行った。

その結果を基にして仙台市開発局、仙台市教育委員会の間で協議が行なわれ、峯館跡、西館跡、向根遺跡の３遺跡は造成工事から除かれ、残りの遺跡に関しては記録保存を前提とする発掘調査を行うこととして、昭和53年度より造成地内の発掘調査が行なわれた。

佐　藤　甲　二



第１図　仙台市域地図

Ⅱ. 調 査 概 要

昭和53年度調査は、初年度である為、予備調査を主とする発掘調査を実施した。分布調査で確認された内の４地点が調査対象となり、調査は10月23日に開始され12月６日までの約１ヶ月間行なわれた。調査対象総面積約1,600㎡、調査総面積は約350㎡であった。炭窯跡を除く他の２地点の調査では遺構、遺物の検出、出土は皆無で、また２基の炭窯跡も20年ほど前まで使用されていた新しいものと判明した。

昭和54年度調査からは本格的な調査が実施された。梨野Ａ遺跡(西側急斜面部)、梨野Ｃ遺跡、沼原Ａ遺跡第１・第２地点、沼原Ｂ遺跡第１地点、嶺山Ａ遺跡第１・２地点の５遺跡７地点が調査対象で、調査は５月７日に開始され12月10日までの約７ヶ月間行なわれた。調査対象総面積約8,000㎡、調査総面積は約5,000㎡にのぼる。沼原Ａ遺跡第１地点の調査では縄文時代の土壙６基、平安時代の住居跡１軒が検出され、第２地点の試掘調査では縄文時代の土壙が確認された。沼原Ｂ遺跡第１地点の調査では縄文時代の遺物を出土する層が認められ、嶺山Ａ遺跡第１地点の試掘調査でも縄文時代の遺構が確認された。しかし、梨野Ａ遺跡、嶺山Ａ遺跡第２地点、梨野Ｃ遺跡の調査では若干の小土器片を出土したのみで遺構、遺物包含層は検出されなかった。本年度調査では当初遺跡の可能性は薄いだろうとされていた沼原Ａ遺跡第２地点、嶺山Ａ遺跡第１地点のような谷部・窪地部より、縄文時代の土壙が検出された。この為、次年度調査は出来得る限り他の谷部・窪地部にも調査を加えることとした。

昭和55年度調査は造成工事に係る遺跡調査最終年度で、昨年度よりの継続調査である梨野Ａ遺跡(東側緩斜面部)、沼原Ａ遺跡第１・２地点、沼原Ｂ遺跡第１地点、嶺山Ａ遺跡第１地点と今年度新たに調査を加える沼原Ｂ遺跡第２地点、沼原Ｃ遺跡、嶺山Ｂ遺跡、嶺山Ｃ遺跡第１～３地点の７遺跡11地点が調査対象となり、調査は４月７日から11月28日までの約８ヶ月間行なわれた。調査対象面積15,500㎡、調査総面積は6,500㎡にのぼる。梨野Ａ遺跡では縄文時代の多数の土壙、ピット、古墳時代の土壙が検出された。沼原Ａ遺跡第２地点、嶺山Ａ遺跡第１地点、嶺山Ｂ遺跡からは昨年度沼原Ａ遺跡第１地点で検出された土壙と同様な縄文時代の土壙群が検出された。また嶺山Ｃ遺跡第２地点では、多数の鉄滓と伴に平安時代の製鉄跡が検出された。

昭和56年度調査は梨野Ａ遺跡の東側公園化に伴う遺跡範囲確認調査で、丘陵東側平坦部を中心として４月７日から９月６日までの約５ヶ月間調査が行なわれた。調査対象面積4,600㎡、調査面積は300㎡であった。その結果新たに縄文時代の住居跡も検出され、梨野Ａ遺跡が縄文時代の集落跡であることがより明らかになった。

以上、昭和53年度に始った造成団地に伴う発掘調査は昭和56年までの４ヶ年をもって完了した。調査地点17ヶ所、調査総対象面積30,000㎡、調査総面積は12,000㎡である。調査遺跡内に

は分布調査では発見されず、調査過程の中で新たに追加した遺跡が多く含まれる。その内の多くは縄文時代の土壙群を中心とする谷部・窪地部の遺跡であった。これら土壙はいわゆる「陥穴」、「落し穴状遺構」、「Tピット」と呼ばれる土壙に類似しており、当時の人々の行動範囲等を知る上で貴重な資料と成り得るものであったが、大半の地区ですでに造成工事が進んでいた為、沼原、嶺山地区の一部でしか十分な調査を行なえず大きな悔いを残す結果となった。今後、丘陵地帯の調査に対しては時前の分布調査以外に詳細な試掘が必要であること、また調査に際しては広範囲な調査が必要であることを痛感する。

4年間の調査期間中、開発局宅地課江刺衙課長を始めとする宅地課、工事関係者、地元の皆々様にはなみなみならぬ御協力、御便宜を賜わり、厚くお礼申し上げます。また調査開始から終了までの長期に渡って発掘調査に参加下さいました地元有志の皆様にも心から感謝申し上げます。

佐　藤　甲　二

発掘調査参加者（敬称略、五十音順）

相沢清一　阿部正也　天野エリ子　石垣純子　石垣富一郎　板山つねお　蛯原千賀子　大井ふみよ　太田恵知子　太田平治　太田ゆき子　大本春子　叶文俊　木戸春夫　熊谷信一　後藤タミ　後藤浩樹　斎藤真理　桜井信子　佐々木やえ子　佐藤いつ子　佐藤栄子　佐藤栄作　佐藤喜恵子　佐藤しげ子　佐藤勢子　佐藤正（故人）　佐藤広史　佐藤わくり　庄子勝子　鈴木みつ子　鈴木洋子　住吉惣右ェ門　清野仁子　高橋研一　武田藤雄　武田美津子　田中敏　玉川可奈子　千葉きよ子　長尾きよみ　長島栄一　中根三千子　成田寿（故人）　南雲祐美　南雲直二　沼田いな子　沼田卯太郎　沼田金作　沼田今朝夫（故人）　沼田とし子　根本ときわ　長谷川徹　早川笙子　細川隆　真壁三郎　巻野俊夫　松浦光子　松本寿一　三浦チヅ子　嶺岸さかえ　嶺岸倉治　嶺岸たけお　嶺岸ハル子　嶺岸わくり　村山タマ子　横山利夫　横山由紀恵　吉川明宏　柳沢和明

遺物整理参加者（敬称略、五十音順）

相沢浩二　相沢史子　阿部多津子　天野エリ子　石垣純子　石黒伸一朗　石山真理子　大友透　大場拓俊　柿沼敏朗　叶文俊　木戸春夫　木村繁子　工藤久美子　熊谷信一　斎藤秀寿　佐藤栄作　佐藤幸子　佐藤順　佐藤真貴　宍戸美智子　菅原恵美子　平照子　高橋研一　田村富美江　千葉きよ子　千葉ひろみ　松岡敦子　松木仁　松本純子　森剛男　山田しょう　山田富士子　吉田康子

立地と周辺の遺跡

Ⅰ．地形と地質

1．地形と遺跡の立地

宮城県南部、宮城野海岸平野の西方には標高300～400m以下の丘陵地が発達している。この丘陵地は陸前丘陵といわれ奥羽山脈より派生するものである。仙台市西方では、陸前丘陵を北から順に七北田川、広瀬川、名取川が東流し、下刻作用により中流域に4～5段の河岸段丘を形成している。これら3河川により開析を受けた丘陵地は河川により分割されていることや開析の度合い、起伏などにより分けられ、それぞれ名称を与えられている。

仙台市においては、北西部の七北田川と広瀬川の河間丘陵地と西南部の広瀬川と名取川の河間丘陵地に大別され、さらに七北田－広瀬河間丘陵地は七北田丘陵（主に七北田川右岸の西田中、桜ヶ丘、南光台に広がり東縁を長町－利府構造線に画される）と国見丘陵（広瀬川左岸の国見、大石原に広がる）とに、広瀬－名取河間丘陵地は青葉山丘陵（青葉山、八木山に広がり、北東縁を広瀬川により形成された段丘群に、東南縁を長町－利府構造線に画される）と、蕃山丘陵（青葉山丘陵の西方、茂庭、梨野、折立、高田に広がる）とに分けられている。これらの丘陵は河川水の浸食による開析を受けており、開析の度合いは蕃山丘陵において最も顕著であり、次いで七北田丘陵で著しく、国見丘陵、青葉山丘陵では前二者ほど開析は進んでいない。青葉山丘陵は洪積世青葉山礫層の堆積面である青葉山面を残しており、標高は200～100mと東方へ低下している。青葉山礫層は国見丘陵でも部分的にのせている所がある。また蕃山、七北田、国見丘陵では定高性のある丘陵面及び丘頂面が認められる。蕃山、国見丘陵では西風蕃山(372.5m)、太白山(320.7m)、亀ヶ森(344.5m)、権現森(314.2m)など、標高300m前後ないし300mを越える丘頂があることから標高370m前後を蕃山面とし、定高面の存在を推定する考え方もある[註1)]。また国見丘陵には定高性の丘陵面である国見峠面(230m±)があり、これは蕃山丘陵では標高240～200mの丘頂面(佐保山面)、七北田丘陵では標高230～130mの丘頂面に相当し、国見丘陵に比べ蕃山、七北田丘陵の開析度が高いことを示している。さらに国見丘陵では国見峠面の下位に標高180～160mの定高丘頂面(中山面)が、七北田丘陵では標高120～100mの定高丘頂面が認められている。これらのことは、七北田丘陵（蕃山面がなく標高200mを越す所の少ない）、国見丘陵（権現森はあるが定高丘陵面が広がる）に比べ蕃山丘陵の起伏が大きいことを示している。

今回茂庭住宅団地造成工事に伴ない調査対象となった梨野、沼原、嶺山地区(以下「対象地区」という。)は、仙台市役所の西北西約8km、北に蕃山、西に亀ヶ森、東は太白山を望む蕃山丘陵のほぼ中央に位置する。標高は120～250m、東西0.9km、南北1.5km、面積約130haの丘陵地である。対象地区は北に梨野平坦面(湖成の堆積面)、南に比高差約40mの茂庭低地(段丘面)が広

第1図　地形区分図

※『地形・表層地質・土じょう 仙台[註1]』を参考として作成した。　　Scale 1：100,000

がり、東を大堤川、西を岩ノ川に画され、特に大堤川、岩ノ川は急崖を形成しており、周囲から独立しているかのような景観を呈する。

対象地区は起伏の大きい蕃山丘陵にあるが周囲に比べやや低く、標高120～250mと約130mの高低差をもちながらも、全体として比較的起伏が緩やかな丘陵地といえる。宮城氏によれば、対象地区は「巨大な崩壊地であり、巨大崩壊は、少なくとも2万年以前に梨野集落の背後にある急崖を主滑落崖[註2)]として発生した。その全体としての方向は、ほぼ北北西－南南東であり、崩壊により生産された地すべりブロックは、7個内外の地塊になって移動した。崩壊地内の凹地(窪地)は地すべりブロックの境界に集中しているが、これは、崩壊発生前から既にあった開析谷が地すべりブロックどうしの示差的な移動[註3)]によって、せき止められたものと考えられ、凹地(窪地)の底面高度はスベリ面の位置をしめしているものと推定[註4)]」している。このように、大略2万年以前の巨大崩壊により形成された対象地区の現地形は、北半において標高200mを越える所が多く、北西端で標高237.6m(丘陵頂部A)、北端部中央で257.5m(丘陵頂部B)、北東端やや南寄りで210.2m(丘陵頂部C)を測る。これら3つの丘頂からは南西及び南へ伸びる尾根線が認められる。それは丘頂Aから対象地区西端中央へ(尾根線A)、丘頂Bから南西端へ(尾根線B)、丘頂Cから東端中央(尾根線C)へと伸びており、南へいくほど丘頂高度は低下する。対象地区南半においても標高が200mを越える所が見られるが、これは尾根線Bから伸びる丘頂である。また尾根線間では、尾根線AとBの間に狭い谷が入り込み、尾根線BとCの間には6ヶ所の窪地が形成されている。これらの窪地は茂庭・梨野窪地群[註5)]といわれ、対象地区の大きな特徴となっている。窪地は尾根線Cと大堤川の間に1ヶ所あるが、対象地区東方の一の宮川付近、西方の高田付近にもありそれぞれ一の宮川窪地群[註5)]、高田窪地群[註5)]といわれている。

対象地区における発掘調査は8遺跡17地点で行なわれた[註6)]。梨野A遺跡を除き全て尾根線B－C間の南半部にある。梨野A遺跡は対象地区の北東端、丘陵頂部Cの北の丘陵緩斜面に位置する。標高は180～190mと東方へゆるやかに傾斜する。大堤川は遺跡北方で流路を東から南へ変え、遺跡東縁の急崖下を南流する。遺跡の西には谷があり、西縁はこの谷への急峻な斜面となっている。沼原A遺跡は対象地区の東南端に位置する。第1地点は標高125m前後のほぼ平坦な丘陵緩斜面に、第2地点は第1地点に続く標高125～130m、東南方へ開く谷地形に立地する。第1地点の東縁と南縁は急崖となっている。第2地点の西北には標高168m前後の丘陵頂部があり、ここから東方と南方へ尾根が伸び、第1地点の北と東南、第2地点の北は急峻な斜面となっている。沼原B遺跡は対象地区中央やや南寄りの窪地に立地する。第1地点は標高160～165mの窪地東南縁辺部、第2地点は標高156m前後の窪地ほぼ中央部である。遺跡西方には尾根線Bが走り、西北方に標高208.3mの丘頂(丘陵頂部D)、西南方に標高201.6mの丘頂(丘陵頂部E)があることから周囲の丘陵との比高は30～50mである。沼原C遺跡は対象地区南半のほぼ

1．梨野A遺跡　2．沼原A遺跡第1地点　3．沼原A遺跡第2地点
4．沼原B遺跡第1地点　5．沼原B遺跡第2地点　6．沼原C遺跡
7．嶺山A遺跡第2地点　8．嶺山A遺跡第1地点　9．嶺山B遺跡
10．嶺山C遺跡第1地点　11．嶺山C遺跡第2地点　12．嶺山C遺跡第3地点
13・14　炭窯　15・16　昭和53年度調査地点

第2図　対象地区地形図

中央の東南方へ開く谷地形に立地する。標高は160～164m、遺跡北に標高188.3mの丘頂(丘陵頂部F)、西に丘陵頂部Eがあるため、遺跡北及び西は急峻な斜面となっている。沼原C遺跡に隣接して対象地区南半中央には他に嶺山A遺跡、嶺山B遺跡が位置する。嶺山A第2地点は沼原C遺跡の南に隣接する。標高160～165m、東南方に舌状に張り出す丘陵緩斜面に立地する。嶺山A第1地点は標高162～172mの窪地に立地する。沼原B遺跡と同様に西方を尾根線Bが走る。遺跡北方に丘陵頂部E、東南方に標高186.1mの丘頂(丘陵頂部G)があることから周囲の丘陵との比高は15～40mである。嶺山B遺跡は丘陵頂部Eから嶺山A遺跡第2地点へかけての急峻な斜面の中位、標高186～189mにあるテラス状の丘陵緩斜面に立地する。嶺山C遺跡は対象地区南端のほぼ中央に位置し、3地点に分かれている。第1地点は越河堤の北岸、標高128～130m南方へ開く谷地形に立地、第2地点は越河堤西岸、標高130m前後の東方へ開く谷地形に立地している。第2地点の周囲の丘陵との比高は30～50mである。第3地点は第2地点の西、丘陵頂部Gから南へ伸びる尾根に立地する。標高は172m程である。以上のように、調査は立地からみると、丘陵緩斜面4地点、谷地形4地点、窪地及び窪地の縁辺3地点、丘頂から伸びる尾根1地点において行われた。

2．地質と水理

対象地区及びその周辺には、新生代新第三紀、新生代第四紀の地層が見られる。新第三紀層は名取層群、梨野層、三滝玄武岩質安山岩類(以下「三滝安山岩類」)である。名取層群は新第三紀中新世に形成された層群であり、対象地区では南端と東西を画する岩ノ川、大堤川に見られる。「茂庭住宅団地環境影響評価」[註5)]によれば、対象地区で見られる名取層群は下部層(N_{T1}層)、中部層(N_{T2}層)、上部層(N_{T3}層)に分けられており、N_{T1}層は太白山周辺に広く分布する旗立層に相当する。細粒砂岩、シルト岩より成る海成層である。N_{T2}層は旗立層上部に相当し、やや凝灰質の細粒砂岩を主体とする海成層であるが砂岩は若干の浮石(パミス)を含むことから、火山の影響をいくらか受けているものと考えられる。N_{T3}層は主に浮石質の凝灰岩、雲母を含む凝灰質砂岩より成る陸成層である。このように対象地区の名取層群はN_{T1}層が海成、N_{T2}層が火山の影響をいくらか受けている海成層、N_{T3}層が陸成層と移行することから、海退期を明瞭に示す層群と考えられる。この名取層群の上部には梨野層がのっており、両者は不整合関係にある。梨野層も名取層群と同様に新第三紀中新世に形成された層であり、対象地区のほぼ全域及び梨野付近に分布している。主として浮石質の粗粒凝灰岩から成る陸成層である。さらに梨野層は安山岩礫を含むことから、若干の小礫を含む下部層(N_{S1}層)と種々の大きさの角礫を含む上部層(N_{S2}層)とに分けられ、N_{S1}層は対象地区南半に、N_{S2}層は北半に見られる。次に三滝安山岩類は対象地区西南端と岩ノ川が茂庭低地へ出る所に分布している。これは梨

※『茂庭住宅団地環境影響評価』[註5)]を一部改変

C	溜　池	N_{S2}	上　部
B	盛　土	N_{S1}	下　部
A	沖積層	N_{T3}	上　部
T	段丘礫層	N_{T2}	中　部
M_T	三滝安山岩類	N_{T1}	下　部

梨野層　名取層群

第３図　対象地区地質図

第4図　仙台付近の地質層序概略

地質時代		地層名		分布
第四紀	完新世	沖積層		
	洪積世	段丘堆積物		名取川流域に分布
第三紀	鮮新世	仙台層群		仙台市北西～南部に分布
	中新世	白沢層 梨野層	三滝安山岩類	梨野から北方中心に分布
		名取層群	綱木層	調査地域北方に分布
			旗立層	茂庭～太白山周辺に分布
			茂庭層	茂庭西方に分布
			高館層	名取川南方から岩沼方面に分布

※『茂庭住宅団地環境影響評価[註5)]』を一部改変

野層堆積後に地下深所より貫入してきたものである。貫入の時期は新第三紀中新世末～鮮新世の初めと考えられる。新第三紀層は以上の3層である。鮮新世に属する仙台層群に相当する層は見られない。新第三紀層は梨野層、名取層群と不整合関係にあるが2万年以前の巨大崩壊(地すべり)により、地質構造は複雑な様相を呈していると考えられる。

新生代第四紀層としては、主として段丘礫層と沖積層がある。対象地区の南に広がる茂庭低地は、各取川によって形成された段丘面である。段丘を構成する砂礫層の厚さは5m前後であり、名取層群を被っている。仙台市近郊では、段丘は古期から青葉山、台ノ原、上町、中町、下町段丘と5期に分けられており、茂庭の段丘面は、中町段丘に対比[註7)]されている。また、茂庭低地の標高は60～80mであるが、低地北端では標高がやや高くなっており、これを三滝安山岩類の貫入の影響とする考え方もあるが、南方傾下の傾動運動[註8)]とも考えられる。

第四紀完新世(沖積世)に堆積した沖積層は、梨野平坦面や大堤川の谷に分布する。層厚は薄い。対象地区においては沼原B遺跡の調査の結果、窪地の中央部の第2地点で、主に黄褐色～暗褐色のシルト質粘土層が認められた。層厚は地表下1.8mまでしか確認されなかったが、沖積層と考えられる。また第四紀の堆積層としては降下火山灰層の存在がある。調査地域の中で丘陵緩斜面に立地する梨野A遺跡、嶺山A遺跡第2地点、尾根に立地する嶺山C遺跡ではほとんど認められないが、沼原A遺跡、沼原B遺跡、嶺山A遺跡、嶺山C遺跡などでは調査の結果、

地山層より上層に堆積する各層は、完新世の降下火山灰層と判断された[註9)]。また地山層は、斜面等から梨野層が崩壊して堆積したもので、完新世及び洪積世の火山灰層が地山下層に存在することは十分に考えられる。

次に対象地区における水理地質であるが、蕃山丘陵では太白山周辺に旗立層、綱木から鈎取にかけては、名取層群に属する綱木層、蕃山周辺には三滝玄武岩、対象地区と梨野には梨野層が分布している。太白山周辺は地下水に乏しいとされているが、これは三滝玄武岩はもとより旗立層、鋼木層が固結の進んだ岩石により構成されていることによる。これに対し梨野層は浮石質の凝灰岩を主体とする火山性の堆積物で全体に粗粒であることから透水性が良い。対象地区の基盤は梨野層と名取層群で構成されており、上層の梨野層が透水層、下層の名取層群が不透水層であることから梨野層が地下水の滞水層となることが考えられている。しかし、対象地区においては、一様に梨野層中に滞水されているとは考えられず巨大崩壊時に生じた複雑な地質構造に水理が左右される面が強く、ある条件下において地下水は湧水として地表に流出している。湧水は対象地区内には少なく、その縁辺部に見られ溜池となっているものもある。東縁大堤川沿いには、スズ湧水、涌沢湧水等があり、スズ湧水は近接する梨野A遺跡との関連が考えられる。

斎　野　裕　彦

註

1．経済企画庁『地形・表層地質・土じょう　仙台』 1967

2．主滑落崖：崩壊の移動域と不動域を分ける崖(宮城豊彦氏による。)

3．示差的な移動：隣り合う地塊が相対的に逆方向に動くこと(宮城豊彦氏による。)

4．宮城豊彦 「仙台都市圏の地形的基盤―とくに仙台周辺の古期崩壊地形について―」『東北文化研究所研究紀要』第12号　P．176～184．1981

5．仙台市開発局他 『茂庭住宅団地環境影響評価』 1976

6．昭和53年度調査分及び梨野C遺跡を含めた遺跡数及び調査地点数である。以下においては、これらを除いて記述する。

7．中川久夫他 「仙台付近の第四系および地形(1)」『第四紀研究』第1巻第6号　P.219～227．1960

8．田山利三郎 「北上山地の地形学的研究其一　A．仙台市近傍の河岸段丘」『斎藤報恩会学術研究報告』第17号　P．1～83．1933

9．調査地点で確認された降下火山灰層は、1次堆積層ではなく、主に2次堆積層であるとの判断をしているが、火山灰の1次堆積・2次堆積の区分については不明瞭な点がある。また嶺山A遺跡第1地点採取の基本層Ⅳ～Ⅶ層の土壌サンプルについて、山田一郎氏により、完新世の降下火山灰を主体とする層であろうとの所見を得ている。

Ⅱ．歴 史 的 環 境

仙台市西南部の蕃山、坪沼、高館各丘陵及びこの間を東流する名取川流域の段丘面は、現在まで正式な発掘調査が行なわれた遺跡は少なく、ほとんど踏査等により発見された遺跡で、その数も少ない。これら遺跡の立地は狭い段丘上、丘陵末端斜面上、谷底平野、盆地を中心としている。しかし、人来田地区以東の名取川左岸になると段丘面がしだいに発達し出し、富田付近になると名取川両岸に沖積面がみられるようになる。左岸沖積面北側には青葉山丘陵から延びる緩やかな、数段から成る段丘面がひろがり、これら段丘面、沖積面には数多くの遺跡が立地する。

蕃山丘陵南端の茂庭地区には、名取川左岸に比較的広い段丘面（茂庭低地）がみられ、遺跡の多くはこの周辺部に立地している。

茂庭地区の遺跡を中心として名取川流域の赤石、西多賀、富沢、柳生周辺及び坪沼丘陵そして一部名取市北部も混え、旧石器時代から中世に至る各遺跡の立地、分布を概観して行くこととする。

旧石器時代の遺跡は名取川左岸山田地区段丘上に位置する山田上ノ台遺跡（8）、北前遺跡（9）で旧石器時代の調査が行なわれ、旧石器時代前期、後期の遺物を出土している。

縄文時代早期になると茂庭造成地内梨野A遺跡（1）、嶺山B遺跡（6）で遺物が出土している他は茂庭地区では認められず、名取川の段丘上に位置する川添東遺跡（11）、北前遺跡、山田上ノ台遺跡、三神峯遺跡（12）等で、坪沼盆地内では館前東遺跡（13）、中沖遺跡（14）で遺物の出土、散布がみられる。北前遺跡では、末葉の集落跡が検出されている。縄文時代前期の遺跡は早期の遺跡と重複している場合が多い。茂庭地区では造成地内の梨野A遺跡、沼原A遺跡（2）で若干の遺物を出土しているにすぎないが、三神峯遺跡で前葉の住居跡が、北前遺跡では末葉の土壙群が検出されている。縄文時代中期になると茂庭造成地内の各遺跡で遺物が出土しており、梨野A遺跡からは後葉の住居跡が検出されている。他に茂庭地区では、段丘面に位置する人来田遺跡（16）、人来田A遺跡（17）、新熊野遺跡（18）で遺物の出土、散布がみられ、人来田遺跡では中葉の住居跡が検出されている。山田地区では山田上ノ台遺跡で末葉の大集落が形成されている。また、中葉～末葉の時期には丘陵末端斜面上、段丘上以外にも大野田地区の六反田遺跡（19）、山口遺跡（15）、下ノ内遺跡（20）にみられるような沖積面の自然堤防上に遺跡が形成されるようになる。六反田遺跡では中葉末の住居跡が、下ノ内遺跡では末葉の住居跡が検出されている。縄文時代後期に於いては茂庭造成地区では中期と同様に各遺跡で遺物を出土し、他に茂庭地区では丘陵末端斜面上に位置する嶺岸遺跡（22）、門野山囲遺跡（23）で遺物の散布がみられる。この時期になると大野田地区六反田遺跡周辺の沖積地自然

堤防上には遺跡数が増加し、六反田遺跡では初頭の集落が形成されている。縄文時代晩期もまた茂庭造成地内の各遺跡で遺物を出土しており、梨野Ａ遺跡では後葉の土壙墓が検出されている。他に茂庭地区では、後期と同様に嶺岸遺跡、門野山囲遺跡で遺物の散布をみる。名取川流域段丘面、大野田周辺の沖積地で遺物の出土、散布地はあるが、住居跡あるいは大規模な遺跡は現在までのところ確認されていない。以上の他に茂庭地区には縄文土器を散布する向根（25)、新組（26)、塩ノ瀬（27)、人来田Ｃ（28）の各遺跡がある。尚、この時代に造成団地内で特徴的なのは、丘陵地緩斜面部、谷部、窪地部に立地する沼原Ａ、嶺山Ａ・Ｂの各遺跡から土壙群(晩期か？)のみが検出されており、これら丘陵部が居住域とは全く異なる活用のされかたをしていた点である。

弥生時代の遺跡としては茂庭造成地内の沼原Ａ遺跡（中期後半）で、他に茂庭地区では門野山囲遺跡、坂ノ下遺跡(33)、人来田遺跡、人来田Ａ遺跡で、赤石地区では名取川段丘上の大苗遺跡（31）で（以上時期不明）遺物の出土、散布をみるにすぎず、遺跡数は減少する傾向を示す。しかし、大野田地区や仙台市東部の沖積地の自然堤防上、浜堤上には南小泉遺跡、藤田新田遺跡、今泉遺跡、西台畑遺跡(以上中期後半)、山口遺跡、六反田遺跡、下ノ内遺跡（以上後期）等の中期後半以後の遺跡が多くみられるようになる。山口遺跡では後期の遺物包含層中のプラント・オパール分析で、周辺に水田跡の可能性を十分求められる結果が出ており、この時代になると、生活、生産の場が、丘陵上、段丘上から沖積地へという大きな変換期を迎える。

古墳時代の遺跡としては茂庭造成地内の梨野Ａ遺跡より中期の土壙を出土しているが、他に茂庭地区では向根、坂ノ下、町田(38)、新組、人来田Ｂ(37)、人来田Ｃ、塩ノ瀬の各遺跡で遺物が散布するが時期は不明である。この時代以後になると沖積面も安定の度合を高め生活の舞台の中心は完全に丘陵上や段丘面から沖積地へと移る。沖積地自然堤防上や、段丘末端上には遠見塚古墳、名取市雷神山古墳といった大型古墳が造営され始め、前期には名取川右岸、柳生地区の自然堤防上に位置する安久東遺跡（35)、名取市清水遺跡（36）に集落が形成され、左岸大野田地区や西多賀地区の自然堤防上、段丘上には中期から後期にかけて大野田古墳群（39)、三神嶺古墳群（40）等の古墳群が形成される。右岸中田地区では後期になると栗遺跡（41）のような大集落や安久諏訪古墳（42）等の古墳が多く造営される。

古墳時代終末から奈良時代にかけての遺跡は茂庭地区では丘陵斜面部に梨野横穴群（47)、向根横穴群（48）が、奈良時代の遺物散布地としては梨野Ｂ遺跡（53)、本郷遺跡（54)、向根東遺跡(55)、中ノ瀬遺跡(56)がみられる程度であるが、名取川左岸西多賀周辺や大年寺周辺、右岸熊野堂周辺の丘陵斜面や、段丘斜面には横穴群が群集する。この時期には名取川と広瀬川の合流点北西約１kmの自然堤防上には、多賀城創建前の官衙跡と推定される郡山遺跡が作られている。奈良時代の集落では名取川左岸の六反田遺跡、山口遺跡、下ノ内遺跡、右岸の名取市清

第1表　遺跡地名表

No	遺跡名	種別	立地	年代	文献	位置
1	梨野A遺跡	集落跡	丘陵	縄文(早･前･中･後･晩)･古墳･平安･中世		B4
2	沼原A遺跡	狩猟域	丘陵	縄文(前･中･後･晩)･弥生･平安		C4
3	沼原B遺跡	狩猟域	丘陵	縄文(中･後･晩)		C4
4	沼原C遺跡	散布地	丘陵	縄文(中・後)		C4
5	嶺山A遺跡	狩猟域	丘陵	縄文(後･晩)･平安		C4
6	嶺山B遺跡	狩猟域	丘陵	縄文(早･後･晩)		C4
7	嶺山C遺跡	生産跡	丘陵	縄文(後･晩)･平安		C4
8	山田上ノ台遺跡	集落跡	段丘	旧石器(前･後)･縄文(早･中･後)･平安･近世	23	D8
9	北前遺跡	集落跡	段丘	旧石器(前･後)･縄文(早･中)･古墳･平安	29	D8
10	青葉山遺跡	包含地	丘陵斜面	旧石器(後)	16 26	A7
11	川添東遺跡	包含地	段丘	縄文(早･前･中･晩)	8	E2
12	三神峯遺跡	集落跡	段丘	縄文(早･前)	22	D10
13	館前東遺跡(根添館)	包含地	丘陵	縄文(早)	(11) (28)	G2
14	中沖遺跡	包含地	台地	縄文(早)･平安		H2
15	山口遺跡	集落跡 水田跡	自然堤防	縄文(早～晩)･弥生･古墳･奈良･平安･中世	24	D11
16	人来田遺跡	集落跡	段丘	縄文(中)･弥生	5 19	D5
17	人来田A遺跡	包含地	台地	縄文(中)･弥生	8	D5
18	新熊野遺跡	包含地	段丘	縄文(中)		D4
19	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文(中･後･晩)弥生･古墳･奈良･平安	27	D12
20	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文(中･後)･弥生･平安		E11
21	上野遺跡	包含地	段丘	縄文(中)･奈良・平安	16 30	E9
22	嶺岸遺跡	包含地	丘陵	縄文(後・晩)	31	C4
23	門野山囲遺跡	包含地	丘陵	縄文(後・晩)・弥生・平安	16	D4
24	泉崎浦遺跡	水田跡	後背湿地	縄文(後)･古墳～平安	18	D11
25	向根遺跡	包含地	台地	縄文･古墳･平安	16 30	C4
26	新組遺跡	包含地	台地	縄文･古墳･平安	8	D4
27	塩ノ瀬遺跡	包含地	丘陵斜面	縄文･古墳･平安	8	E4
28	人来田C遺跡	包含地	台地	縄文･古墳･平安	8	E6
29	綱木遺跡	包含地	谷底平野	縄文	5	A6
30	佐保山東遺跡	包含地	丘陵麓	縄文･平安	20	B7
31	大苗遺跡	包含地	段丘	縄文･弥生	8	E1
32	船渡前遺跡	包含地	段丘	縄文・弥生・奈良・平安	7	E9
33	坂ノ下遺跡	包含地	台地	弥生･古墳･平安	8	D5
34	泉崎前遺跡	水田跡	後背湿地	弥生･平安		D11
35	安久東遺跡	集落跡 古墳群	自然堤防	弥生～中世	13	G12
36	清水遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～中世	25	H12
37	人来田B遺跡	包含地	台地	古墳･平安	8	E5
38	町田遺跡	包含地	台地	古墳･平安	8	D4
39	大野田古墳群	古墳	自然堤防	古墳	27 32	E12
40	三峯古墳群	円墳	丘陵	古墳	2 3	D10
41	栗遺跡	集落跡	自然堤防	古墳	17 33	G12
42	安久諏訪古墳	円墳	自然堤防	古墳	26	G12
43	裏町古墳	前方後円墳	段丘	古墳	9	D10
44	教塚古墳	円墳	自然堤防	古墳	26	D11
45	兜塚古墳	前方後円墳	段丘	古墳	1 6	B12
46	富沢金山窯跡	窯跡	段丘	古墳～平安	12	D10
47	梨野横穴群	横穴古墳	丘陵斜面	古墳末～奈良		B5
48	向根横穴群	横穴古墳	丘陵斜面	古墳末～奈良		C5
49	愛宕山横穴群	装飾横穴古墳	丘陵斜面	古墳末～奈良	10	A12
50	大年寺横穴群	横穴古墳	丘陵斜面	古墳末～奈良	1 4	B12
51	土手内横穴群	横穴古墳	丘陵斜面	古墳末～奈良	3	C10
52	熊野堂横穴群	横穴古墳	丘陵斜面	古墳末～奈良		E8 F9
53	梨野B遺跡	包含地	丘陵斜面	奈良・平安		B4
54	本郷遺跡	包含地	丘陵斜面	奈良・平安	14	C4
55	向根東遺跡	包含地	台地	奈良末～平安	8	C5
56	中ノ瀬遺跡	包含地	台地	奈良末～平安	8	D5
57	中谷地遺跡	水田跡	後背湿地	平安		D12
58	鳥居原遺跡	水田跡	後背湿地	平安		D12
59	八幡西遺跡	集落跡	段丘	平安	18	E9
60	茂庭東館跡	城館	丘陵	中世	11	D5
61	茂庭本館跡	城館	丘陵	中世	11	C5
62	茂庭峯館跡	城館	丘陵	中世	11･14 28	C4
63	茂庭西館跡	城館	丘陵	中世	11･14 28	C4
64	茂庭大館跡	城館	丘陵	中世	11	C2
65	茂庭小館跡	城館	丘陵	中世	11	B2
66	富沢館跡	城館	自然堤防	室町	11 15	E10
67	黒崎城跡	城館	丘陵	中世	11	F8
68	小(古)館跡	城館	丘陵	中世	11 15	F8
69	熊野堂大館跡	城館	丘陵	中世	11	F8
70	高館城跡	城館	丘陵	中世	11･15 28	G9
71	大館山館跡	城館	丘陵	中世	11 15	H8
72	桑島館跡	城館	丘陵	中世	11･15 28	H9
73	熊野那智神社	神社跡	丘陵中腹	中世・近世	15	H9
74	高田カナクソ遺跡	生産跡(製鉄？)	丘陵	中世・近世		C3
75	西館裏(仮称)遺跡	生産跡(製鉄？)	丘陵斜面			C3
76	ノマヤマ遺跡	生産跡(製鉄？)	丘陵斜面			G4
77	北原遺跡	生産跡(製鉄？)	谷底平野			G5
78	梨野D遺跡	包含地	台地			B3
79	町北東遺跡	包含地	台地		8	D4

第5図　周 辺 の 遺 跡（国土地理院1/25,000「仙台西南部」「仙台東南部を複製）

水遺跡が調査されている。

平安時代の遺跡としては茂庭造成地内では沼原A遺跡、嶺山A遺跡、嶺山C遺跡（7）、梨野A遺跡より遺物を出土し、沼原A遺跡では住居跡、嶺山C遺跡では製鉄跡が検出されている。周辺部では梨野B、向根、本郷、向根東、門野山囲、坂ノ下、町田、中ノ瀬、新組、人来田B、人来田C、塩ノ瀬の各遺跡で遺物の散布がみられ、茂庭地区では弥生～奈良時代の遺跡数に比べ平安時代の遺跡数が増加している。これは赤石地区、坪沼盆地に於いても同様の傾向を示しており、この時期に丘陵地帯への進出が目立つ。また、これら遺跡は丘陵中でも河川沿いの段丘面の発達した場所や盆地性の場所にのみ集中する傾向を示している。沖積地ではほとんどの遺跡が奈良時代の遺跡と立地の変化はなく、従って重複する遺跡が多く見受けられるが、丘陵地同様遺跡数は増加する。山口遺跡では自然堤防上に集落が形成され、これに接する後背湿地より水田跡が検出されている。またこれに隣接する泉崎浦遺跡（24）、泉崎前遺跡（34）、中谷地遺跡（57）、鳥居原遺跡（58）からも同時代と考えられる水田跡が検出されている。

中世になると茂庭低地周辺の丘陵上には、東館跡（60）、本館跡（61）、峯館跡（62）、西館跡（63）が、高田地区西側の丘陵上には大館跡（64）、小館跡（65）の館跡が密集し、高館丘陵東麓の城館群とともに名取川流域中世山城の集中地点となっている。沖積地にも平城は点在しているが、この時期の一般集落跡の調査例は貧しい。尚、山口遺跡では水田跡が検出されている。

この他に茂庭地区では高田周辺の丘陵斜面上に位置する高田カナクソ遺跡(74)、本郷周辺の丘陵末端斜面上に位置する西館裏(仮称)遺跡(75)でかなりの鉄滓の散布をみるが、時代は不明である。造成地内嶺山C遺跡で平安時代の製鉄跡が検出されていることから、平安時代以後茂庭地区の丘陵地帯が鉄の生産の場としてひろく利用されていた可能性は十分考えられ、これは中世に於ける茂庭地区の城館の集中と大きな関りを持つ、一つの要因と成り得るかも知れない。また茂庭の南側の坪沼、高館丘陵中のノマヤマ遺跡（76）、北原遺跡（77）でも鉄滓、羽口の散布が認められる。

佐　藤　甲　二

第2表　文　　献

No	編著者	標題	所載書誌	発行年月
1	清水東四郎	宮城県内の古墳及び横穴	宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告書第12集	1924．3
2	松本彦七郎	陸前国名取郡西多賀村の三石器時代及至直後遺跡(上・下)	考古学雑誌20の２ノ４	1930．２．４
3	伊東信雄	仙台市内の古代遺跡	仙台市史３	1950．8
4	小林清治	本編　1	仙台市史１	1954．3
5	宮城県教育委員会	埋蔵文化財緊急調査概況	宮城県文化財調査報告第18集	1969．3
6	宮城県教育委員会	東北新幹線関係遺跡分布調査報告書	宮城県文化財調査報告書第27集	1972．3
7	宮城県教育委員会	船渡前遺跡	宮城県文化財調査報告書第49集	1972．3
8	宮城教育大学考古学研究会	名取川水系分布調査	宮教考古４	1972．6
9	仙台市教育委員会	仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書	仙台市文化財調査報告書第７集	1974．3
10	仙台市教育委員会	仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書	仙台市文化財調査報告書第８集	1974．5
11	柴桃正隆	仙台領古城館	宝文堂	1974．7
12	古窯跡研究会	富沢窯跡・仙台三神峯丘陵所在埴輪窯跡調査報告書	古窯跡研究報告３	1974．9
13	仙台市教育委員会	仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報	仙台市文化財調査報告書第10集	1976．3
14	仙台市教育委員会	仙台市茂庭住宅団地計画地内文化財分布調査報告書		1977．1
15	名取市史編纂委員会		名取市史	1977．3
16	仙台市教育委員会	埋もれた仙台の歴史	仙台市文化財パンフ第２集	1978．3
17	仙台市教育委員会	栗遺跡発掘調査報告書	仙台市文化財調査報告書第14集	1978．3
18	仙台市教育委員会	年報　1	仙台市文化財調査報告書第23集	1980．3
19	加藤孝	萩の台遺跡発掘調査概報	萩の台遺跡発掘調査団	1980．3
20	宮城県教育委員会	東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ	宮城県文化財調査報告書第71集	1980．9
21	東北歴史資料館	名取の里　熊野信仰と一切経		1980．9
22	仙台市教育委員会	三神峯遺跡発掘調査報告書	仙台市文化財調査報告書第25集	1980．12
23	仙台市教育委員会	山田上ノ台遺跡発掘調査概報	仙台市文化財調査報告書第30集	1981．3
24	仙台市教育委員会	山口遺跡発掘調査報告書	仙台市文化財調査報告書第33集	1981．3
25	宮城県教育委員会	東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ	宮城県文化財調査報告書第77集	1981．3
26	氏家和典	古墳時代	宮城県史34	1981．10
27	仙台市教育委員会	六反田遺跡発掘調査報告書	仙台市文化財調査報告書第34集	1981．12
28	藤沼邦彦	日本城郭大系第３巻	新人物往来社	1982．2
29	仙台市教育委員会	北前遺跡	仙台市文化財調査報告書第36集	1982．3
30	仙台市教育委員会	仙台平野の遺跡群Ⅰ	仙台市文化財調査報告書第37集	1982．3
31	仙台市教育委員会	仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ	仙台市文化財調査報告書第40集	1982．3
32	仙台市教育委員会	年報　3	仙台市文化財調査報告書第41集	1982．3
33	仙台市教育委員会	栗遺跡	仙台市文化財調査報告書第43集	1982．8

石器の分類基準

茂庭団地造成地地内の各遺跡から石器が出土しているが、梨野A遺跡以外の遺跡からの出土量は、125点と極少数である。梨野A遺跡からは、第Ⅰ～Ⅳc層の各層位、遺構等から総計4168点の石器が出土している。なお、梨野A遺跡の場合、Ⅳc層のみが縄文時代早期の遺物包含層と認定され、Ⅳa、Ⅳb層は縄文時代に限定される遺物包含層であり、他は縄文時代早期～晩期および古墳時代、平安時代、中世の遺物の混在した堆積層である。

茂庭団地造成地地内の各遺跡の出土石器の分析を行う場合、石器の出土量が安定している梨野A遺跡の出土石器を対象とし、分類基準を設定し、それを梨野A遺跡以外の遺跡にも適用する形をとった。

大まかな分類を以下のように規定し、さらに細分類した。

1．打製石器　加撃によって石器製作がなされているもの。

2．磨製石器　研磨によって石器製作がなされているもの。

3．礫石器　自然礫を素材とし、それに使用痕が付されているため、石器と認定されたもの。

4．石製品　研磨等によって、ある定形的な形態が作り出されているもの。

5．砥　石

1．打製石器

(1) 石鏃

長幅および型式相関図（第148図 239頁）によるAのまとまりを石鏃とした。さらに第147図(238頁)のように、下表に基づき「尖頭部側縁形態」と「基部形態」を分類の基準とし、細分類した。

第1表　石鏃の分類

基部形態	尖頭部側縁形態	細分型式
α類：肩部をつくり基部が突出するもの	Ⅰ類：平坦かややふくらむもの	①
	Ⅱ類：ふくらむもの	②③
β類：基部が丸味をおびるもの	Ⅲ類：ふくらむもの	④⑤
	Ⅳ類：平坦かややふくらむもの	⑥⑦⑧
γ類：基部が平坦なもの	Ⅴ類：平坦かややむくらむもの	⑨⑩⑪
ω類：基部が凹状のもの	Ⅵ類：内弯するもの	⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲
	Ⅶ類：ふくらむもの	⑳㉑㉒㉓㉔
	Ⅷ類：側縁部の中位以下が角ばっているもの	㉕㉖㉗㉘㉙
	Ⅸ類：側縁部の中位以下が丸味をおびているもの	㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴

※　尚、アメリカ型石鏃㊵と先端部が丸味をおびているもの㊶は個別に扱った。

(2) 石錐

Ⅰ類　先端部と基部の境界が不明瞭で、全体的形状が細身のポイント状を呈するもの。全面調整である。

Ⅱ類　先端部及び基部を入念にほぼ全面調整し、しかもその境界が明瞭なもの。

Ⅱ－a_1　先端部が基部の長さ以上のもの。

Ⅱ－a_2　先端部が二ヶ所に作り出されているもので、一ヶ所のものはⅡ－a_1に等しい。

Ⅱ－b_1　先端部が基部の長さ未満のもの。

Ⅱ－b_2　先端部が二ヶ所に作り出されているもので、一ヶ所のものはⅡ－b_1に等しい。

Ⅲ類　先端部の長さが基部の長さ以内のもの。全面調整である。

Ⅲ－a　基部が不規則な方形状を成す。

Ⅲ－b　基部が三角形状を成す。

Ⅳ類　素材（石核、剝片、破損した剝片）に部分的に調整を加え整形し、一部に錐部を作出しているもの。

Ⅳ－a　大形のもの。

Ⅳ－b　小形のもの。

(3) 石匙

Ⅰ類　所謂横型のもの。

Ⅱ類　所謂縦型のもの。

Ⅲ類　つまみ部が不明瞭なもの。

(4) ポイント

長幅および型式相関図（第148図 239頁）によるBのまとまりをポイントとした。

Ⅰ類　細長く左右対称形で、基部が作り出されている。全面調整である。

Ⅱ類　やや細長く左右対称形であるが、基部は特別作り出されてはいない。尖頭部のみ背腹両面とも調整が加えられている。

Ⅲ類　左右対称形で、基部は丸味をおびている。背腹両面とも全面調整に近い。

Ⅲ′類　ほぼ左右対称形で、基部は丸味をおびている。調整は背面の場合、尖頭部及び周辺に及ぶが、腹面は主要剝離面を残し、尖頭部に若干の調整を加える程度である。

Ⅳ類　ほぼ左右対称形であるが、形態が三角形、五角形等のもの。ほぼ全面調整である。

Ⅴ類　所謂斜軸尖頭器、左右非対称形である。調整はⅢ′類に近く、腹面に調整が加えられていないものもある。

Ⅵ類　剝片の一部にわずかに調整を加え、尖頭部を作り出しているもの。左右非対称形である。

(5) 篦状石器

Ⅰ類　撥形を呈し、両面加工で最大幅は刃部近くにある。刃部は平坦である。

Ⅱ類　短冊形を呈し、片面加工で最大幅は刃部近くにある。刃部は弧状を成す。

Ⅲ類　短冊形を呈し、両面加工で最大幅は刃部近くにある。刃部は弧状を成す。

(6)　ピエス・エスキーユ

Ⅰ類　4ヶ2対の刃部を有するもの。

Ⅱ類　2ヶ1対の刃部を有するもの。

(7)　スクレイパー

従来、不定形石器、スクレイパー等と規定されて来た石器であるが、この中には定型的な石器として細分類される石器、さらに新器種としてこの種の石器の範疇から独立していく石器が含まれている可能性がある。事実、近年ピエス・エスキーユはスクレイパーの範疇から独立しつつあるし[註1)]、切断調整石器、二次加工がある石器、微細な剝離痕がある石器、ノッチ等は、その属性がかなり限定されてきている[註2)]。本報告ではピエス・エスキーユは(6)でとり扱い、他は第2表のようにとり扱った。尚、石器の出土数量についてはスクレイパーとして一括せず、「不定形石器」、切断調整石器、二次加工がある石器（S・F）、微細な剝離痕がある石器（M・F[註3)]）、「スクレイパー」[註4)]として扱った。本報告の「スクレイパー」の細分型式Ⅷ類・Ⅸ類・Ⅹ類は、理論的に可能な分類であり、それに対応する分類は本報告では充分検討することができなかった。又、「不定形石器」のⅠ類の細分型式のいくつかは、将来定形的な器種として、独立した位置が与えられていく可能性がある。

第2表　スクレイパーの分類

「不定形石器」													切断調整石器	S・F	M・F	「スクレイパー」		
Ⅰ類									Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	Ⅴ類	Ⅵ類	Ⅶ類	Ⅷ類	Ⅸ類	Ⅹ類
A	B	C	D	E	F	G	H	I									

Ⅰ類　調整が全周あるいは全面に及び、定形的な形態を形づくっているもの。

Ⅰ－A　長×幅×厚＝1.6～3.2×1.2～3.5×0.5cm。形態は歪んだ四角形ないし円形を呈するが、四角形に片寄る傾向がある。同一打面で剝離が進行した結果得られる薄手の剝片を素材としている。調整は打面を除く側縁や先端部に加える場合が多い。

Ⅰ－B　長×幅×厚＝2.2～3.3×1.8～2.8×0.5～1.0cm。形態は円形ないし楕円形を呈し、断面形はレンズ状である。調整は両面とも全面調整もしくは部分調整である。

Ⅰ－C　長×幅×厚＝2.5～4.0×2.4～4.3×0.9cm。形態は歪んだ円形ないし楕円形を呈し、断面形はレンズ状もしくは蒲鉾形を成す。調整は両面とも全面調整もしくは部分調整である。刃部は敲打によるものか、全周潰れているのが特徴的である。

Ⅰ－D　長×幅×厚＝3.0～3.8×2.4～2.8×1～1.4cm。形態は歪んだ楕円形で断面形は蒲鉾形を呈す。剝片を素材とし、調整は粗く、背面のほぼ全周をめぐる。

Ⅰ－E　長×幅×厚＝1.6～2.2×1.0～1.7×0.6～1.0cm。形態は円形を呈している。剥片を素材とし、背面のほぼ全面を調整している。石材は黒曜石に片寄る傾向がある。

Ⅰ－F　長×幅×厚＝3.6～6.4×2.8～6.8×1.1～1.7cm。形態は歪んだ円形あるいは楕円形を呈す。剥片を素材とし、全周あるいは一部に、やや粗雑な調整を加え刃部を形成している。断面形は蒲鉾形を呈す。

Ⅰ－G　長×幅×厚＝3.7～5.6×2.6～3.4×1.5～1.8cm。形態は長楕円形を呈し、厚味がある。粗雑な調整が全周をめぐる。断面形は蒲鉾形を呈す。

Ⅰ－H　長×幅×厚＝1.7～2.0×1.4～2.0×0.3～0.7cm。形態は円形を呈し、調整は両面とも全面に及ぶ。断面形はレンズ状を呈す。

Ⅰ－I　長×幅×厚＝2.7～3.1×1.9～2.1×0.7～0.9cm。三角形状を呈し、その頂点に石匙に類似したつまみ部を作出している。断面形は不規則な楕円形を呈す。

Ⅱ類　尖頭部をつくり出したもの。

Ⅲ類　縦長の剥片の一側縁あるいは二側縁に調整を加えたもの。

Ⅳ類　横長の剥片の短軸の一側縁と長軸の一側縁、あるいは長軸の一側縁に調整を加えたもの。

Ⅴ類　切断面に再調整のある石器

Ⅵ類　二次加工のある石器。不規則な剥離痕が無造作に刃部をつくり出しているもの。

Ⅶ類　微細な剥離痕のある石器。1㎜弱の剥離痕が連続するもの。

Ⅷ類　石器の未製品

Ⅸ類　完成した石器あるいは未製品の欠損品

Ⅹ類　二次調整部を素材の一部に無造作につくり出したもの。

この他、ノッヂ、デンティキュレイトがあるが、それらについては出土遺物の項で述べることとする。尚、Ⅷ類、Ⅸ類、Ⅹ類は「スクレイパー」として、他の各類は「不定形石器」として便宜的に大別した。

2．磨製石器

石斧

敲打痕が認められるものがあるが、石斧の型式との特徴的な関連性は認められなかったので、ここでは石斧の形態分類のみを提示する。

Ⅰ類　最大幅は刃部近くにあるが、両側縁はやや開く程度である。側面観の胴部は扁平で、刃部は蛤刃を呈す。

Ⅱa類　短冊形で、基部は面を成す。側面観は胴部中央部よりやや刃部寄りに最大厚があり、刃部は蛤刃を呈す。

Ⅱb類　短冊形で、基部は点を成す。側面観は胴部中央部よりやや刃部寄りに最大厚があり、

刃部は蛤刃を呈す。

3．礫石器

肉眼観察による使用痕分類と、礫の分類とを個別に行い、その後にその相互の傾向性を検討し、礫石器としての分類を行った。

使用痕

a類　**磨痕**　ツルツルしている。時には擦痕が認められる場合もある。

b類　**敲打痕**　打痕（b－1類）敲打痕の集積

凹痕（b－2類）敲打によって凹部を形成しているもの。

c類　**「擦痕」**　敲打と磨きの複合によりカット面を形成しているもの。

d類　**掻疵痕**　掻疵、押圧痕の類

礫の形態

A類　直径10～13cm内外で球状を呈するもの。

B類　平面形の形状は直径が10cm内外の円形で、断面形は細長い楕円形で扁平なもの。

C類　長さ対幅が2：1で、平面形及び断面形が楕円形状を呈するもの。大きさは長さ7cm内外のもの（α）と長さ10～15cm内外のもの（β）とがある。

D類　長さ（L）対幅（W）が2＜L＜3～4：W＝1で、断面形が三角形状を呈するもの。大きさは長さ15cm内外に集中する。

E類　平面形及び断面形が不規則な楕円形状を呈するもの。長さ対幅が2：1のものと、2＜L＜3～4：W＝1のものとがある。前者の大きさは長さ10～15cm（β）に、後者は長さ18cm内外（γ）に集中する。

F類　E類以上に不規則で、不整な自然礫に近い。大きさは長さ7cm内外のもの（α）と10～15cm内外のもの（β）と18cm内外（γ）に集中する。

G類　大形で平面形か円形、楕円形、長楕円形等を呈す。重量が2～10kgのもの。

H類　断面形が長方形ないし正方形の角礫。

礫石器の分類

Ⅰ類　C－α類、F－α類に打痕、磨痕が認められるもの。

Ⅱ類　A類に磨痕の他、打痕、凹痕が組み合わされる場合のあるもの。

Ⅲ類　B類、C類、E類、F類の一部に、凹痕と磨痕の他に、打痕が組み合わされるもの。

Ⅳ類　D類とF類の一部に「擦痕」及び磨痕が組み合わされるもの。まれにC－β類にも認められる。

Ⅴ類　H類に磨痕が認められるもの。

Ⅵ－1類　G類の凸面に凹痕、磨痕、打痕が認められるもの。

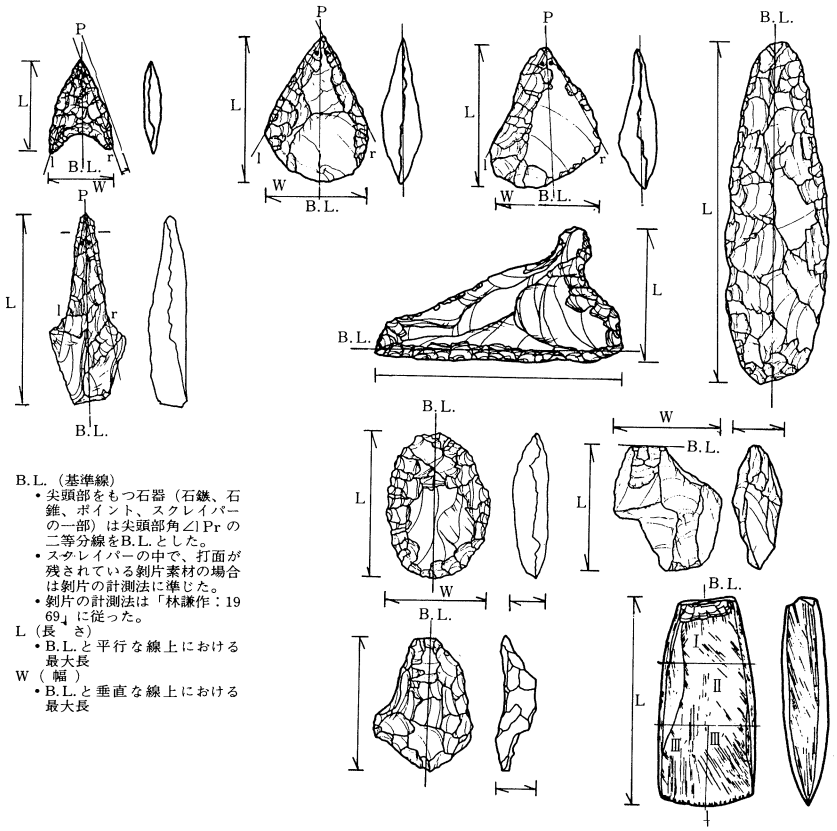
Ⅵ－2類　G類の凹面、やや僅かな凹面に磨痕が認められたもの―石皿。「中央を凹めた皿形の石器」[註5)]の定義を充分満足するものではないが、ここでは便宜的に石皿の名称を付け加えておく。

4．石製品　円板状に整形したもの。擦痕が認められるものもある。

5．砥　石　打製石斧様石器を砥石に転用したと考えられるものもある。

柳　沢　みどり

尚、石器の計測法は以下による。



B.L.（基準線）
- 尖頭部をもつ石器（石鏃、石錐、ポイント、スクレイパーの一部）は尖頭部角∠lPrの二等分線をB.L.とした。
- スクレイパーの中で、打面が残されている剝片素材の場合は剝片の計測法に準じた。
- 剝片の計測法は「林謙作：1969」に従った。

L（長　さ）
- B.L.と平行な線上における最大長

W（幅）
- B.L.と垂直な線上における最大長

注

1．岡村道雄　「縄文時代石器の基礎的研究法その具体例その1」『東北歴史資料館研究紀要』第5巻　1979

2．阿子島香　「切断調整石器」『聖山』東北大学文学部考古学研究室　1979

3．本文中のM・Fは1㎜弱の剝離痕が規則的に連続するもの。S・Fは剝離痕が無造作に連続するもの。

4．尚、遺構出土遺物数量表のスクレイパーは、「不定形石器」「切断調整石器」「スクレイパー」を一括して扱っている。

5．永峯光一　石皿『日本考古学辞典』1962

第1図　石器の計測基準

梨　野　A　遺　跡

（ C － 180 ）

遺跡所在地：仙台市茂庭字大堤22

調 査 期 間：1次調査　昭和54年10月22日～11月12日

2次調査　昭和55年4月7日～8月8日

3次調査　昭和56年4月6日～9月6日

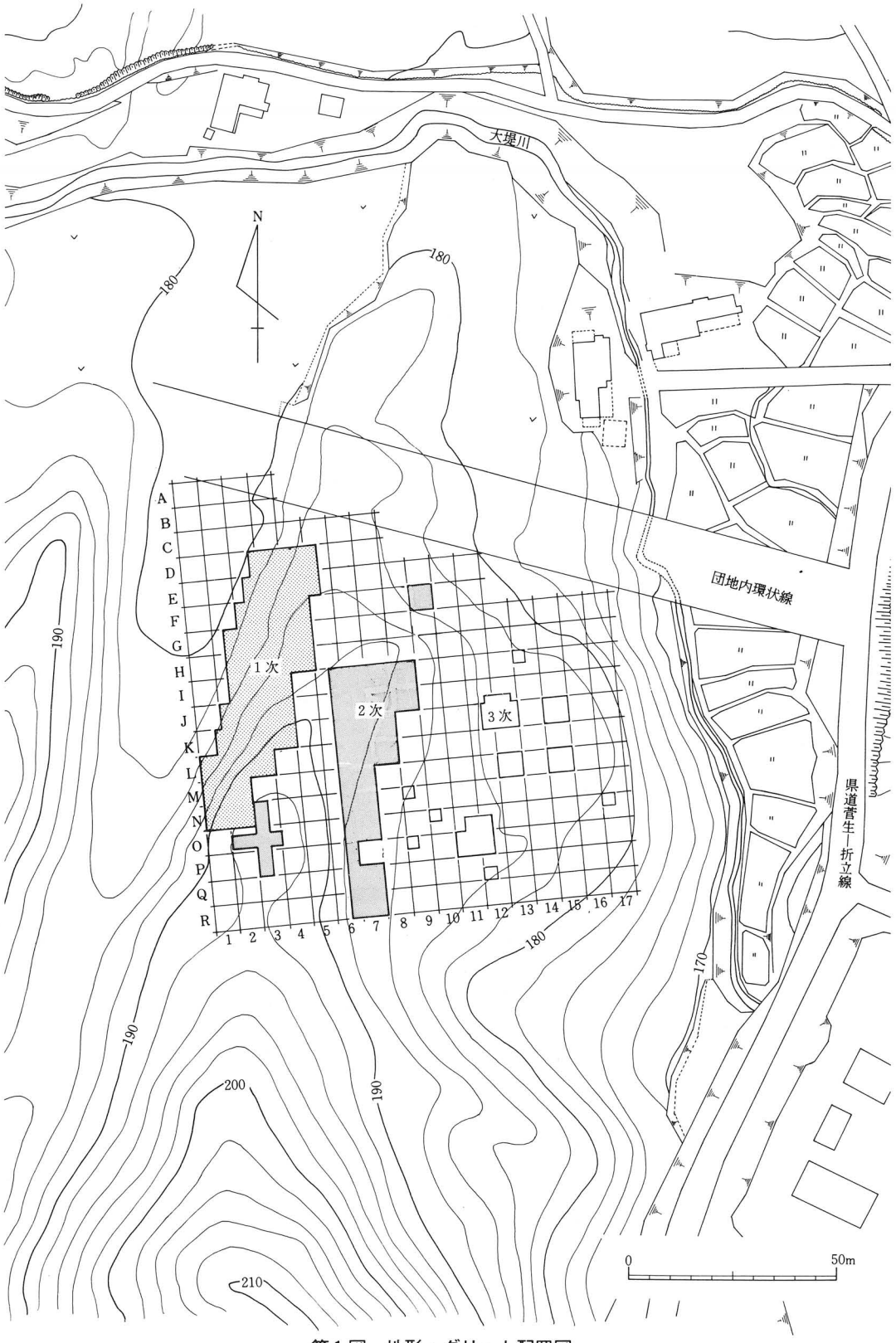
対 象 面 積：1次調査　1250㎡　　2次調査　2400㎡

3次調査　4600㎡

発 掘 面 積：1次調査　1050㎡　　2次調査　970㎡

3次調査　300㎡

担 当 職 員：佐藤甲二・篠原信彦・渡部弘美・加藤正範・斎野裕彦



第１図　地形・グリット配置図

Ⅰ．遺跡の立地（第１図、写真１）

梨野Ａ遺跡は以前より縄文時代の遺物散布地として仙台市の遺跡台帳に登録されていた遺跡で、造成工事地内の北東隅、県道管生－折立線梨野バス停より南西約150mの丘陵上に位置する。

丘陵は標高約210mを頂部として北側に舌状に張り出す。遺跡は丘陵やや南側の東側斜面部に入り込んでいる浅い谷の北側、標高180～190mの間の丘陵北面から東面にかけての緩斜面上に立地する。緩斜面の標高182～184mの間には、北側、東側にほぼ平坦な面が広がっている。

丘陵の北側は梨野平坦面へと続く斜面となり、南側は茂庭丘陵地帯へと連なる。丘陵の西側には浅い谷が、東側には大堤川に開折された深い谷が南北に走る。名取川の支流大堤川は、梨野平坦面で東流していたものが、遺跡北東約30mの地点で大きく方向を変え、茂庭低地へと南流し、梨野Ａ遺跡を乗せる丘陵を北から東へ巻くようにして流れる。大堤川と遺跡との比高差は約10～15mで、東側谷部には湧水点がみられる。

当丘陵は以前雑木林であったと言う。戦後開墾され、団地用地買収前までは、緩斜面は畑地として、急斜面は杉の植林地として利用されていた。開墾時にはかなり削平をしたとも言われている。尚、丘陵北側は東西に走る団地内還状線によってすでに寸断されている。遺跡はこれより南側が造成団地用地となっており、北側は現在も個人所有の畑地となっている。

佐　藤　甲　二

Ⅱ．調査の方法と概要

梨野Ａ遺跡は昭和54年～56年までの３年次に渡って調査が行なわれた。調査対象部分は団地内環状線の南からほぼＲラインまでの標高180m～192mの間、8300㎡である。１次（昭和54年度）・２次（昭和55年度）調査は団地造成工事に伴う事前調査で、丘陵西側急斜面部、丘陵東側緩斜面部が調査対象部分であった。３次（昭和56年度）調査は、丘陵東側平坦部の公園化に伴う遺跡範囲確認調査であった。

１．調査の方法（第１図）

ほぼ南北方向（Ｎ－６°－Ｗ）に南北軸（Ａ～Ｒ）、これを直交する東西軸（１～17）による６×６mのグリッドを設定し調査を行った。各グリッドは４分割し、北西方向より右廻りにａ・ｂ・ｃ・ｄの小グリッドを設けた。

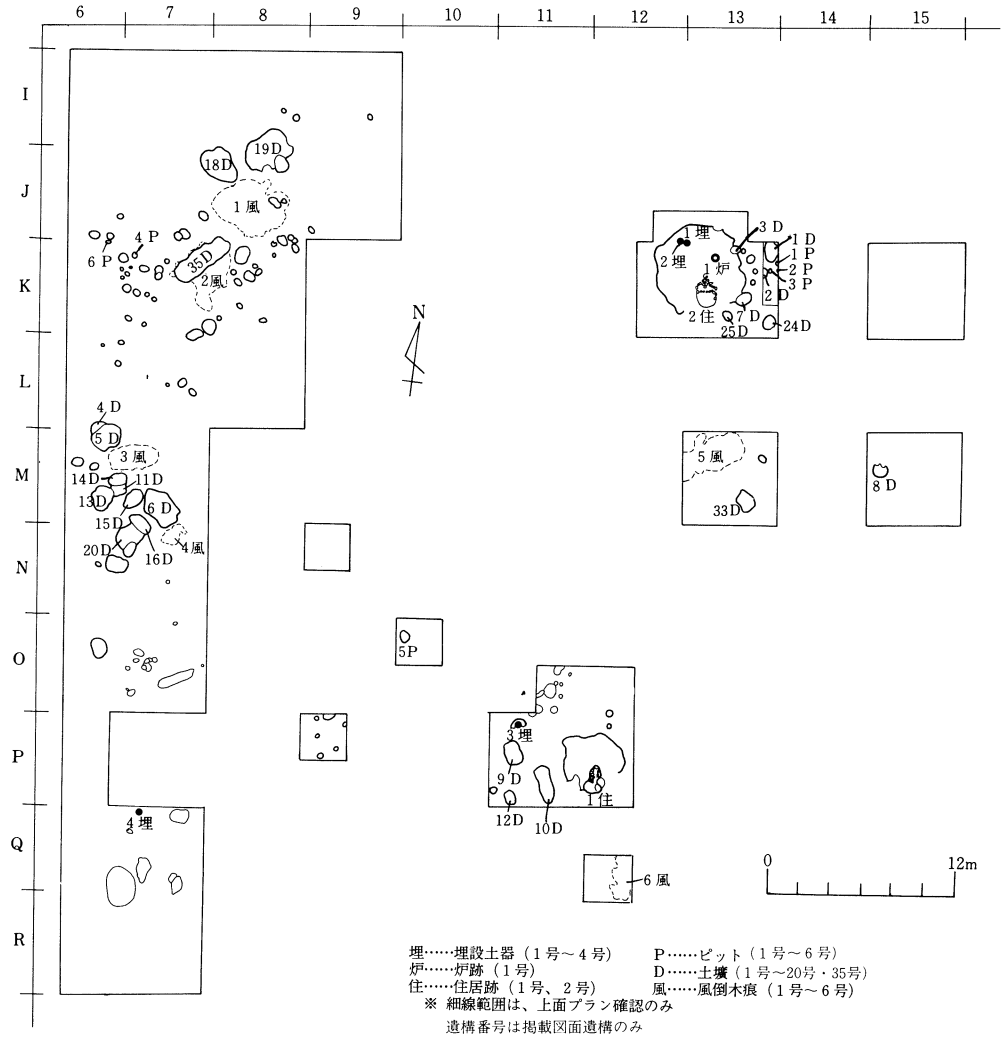
2. 調 査 の 概 要

1次調査(第1図、写真2)

10月22日より11月12日の約半月間行なわれた。西側丘陵急斜面部約1300㎡が調査対象面積でDラインからNラインまでの約1,000㎡を調査したが、20～30cmの表土(Ⅰ層)排土後地山(Ⅵ層)となり、遺物は磨滅の激しい小土器片が数点表土中より出土したのみで、遺構は皆無であった。地山は、植林の根によって凹凸状であり、調査前より露出している部分もみられた。

2次調査(第1・2図、写真3～5)

4月7日より8月8日までの約4ヶ月行なわれた。丘陵東側の標高186m～190mの間の緩斜面部約2400㎡が調査対象面積で、Ⅰ～R－6(東側)～9グリッドを中心として約1000㎡を調査し



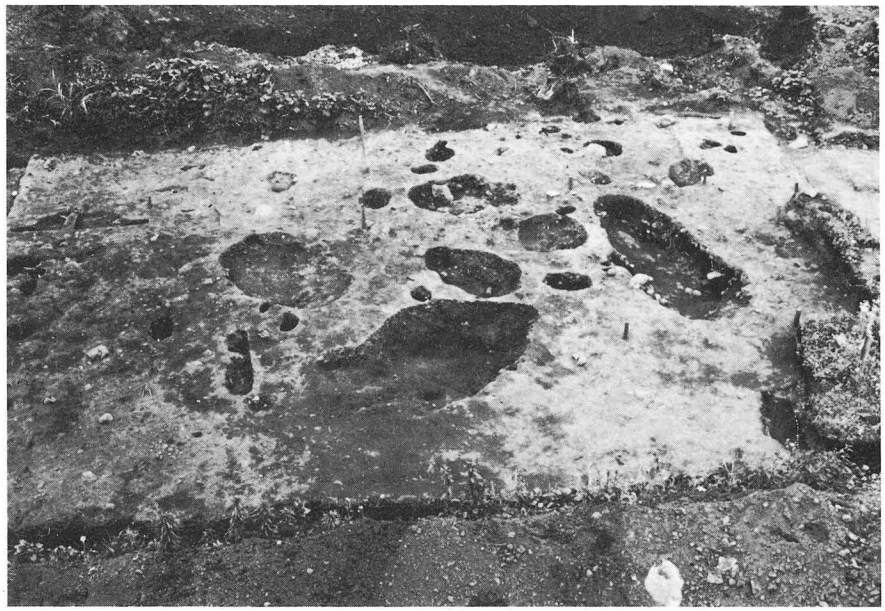
埋……埋設土器(1号～4号)　　P……ピット(1号～6号)
炉……炉跡(1号)　　D……土壙(1号～20号・35号)
住……住居跡(1号、2号)　　風……風倒木痕(1号～6号)
※ 細線範囲は、上面プラン確認のみ
遺構番号は掲載図面遺構のみ

第2図 遺 構 配 置 図

1．調査前全景
（北東より）

2．54年度調査遠景
（北西より）

3．55年度調査遺構
完掘状況（1）
（南東より）



4．55年度調査遺構
完掘状況（2）
（東より）

5．55年度調査遺構
完掘状況（3）
（北より）

6．56年度調査1号住
居跡完掘状況
（東より）

た。表土排土後、ほとんどが直接Ⅲ層となり、K－7グリッドⅢ層上面で、古墳時代の土壙1基が検出されたが、他のグリッドではⅢ層上面より遺構は検出されなかった。Ⅲ層中には多量の縄文時代の遺物が含まれ、これを排土した段階で、Ⅴ層(地山漸移層)・地山層となり、J－8、K－7・8、M－6・7、N－7グリッドを中心として、縄文時代の埋設土器1基、ピット49個、土壙22基が検出された。Iラインでは、表土が10cm前後で直接地山となる部分もみられ、遺構も希はくな状態であった。この為、北側の1段下った部分にF－10グリッドを設定し調査したが、耕作による削平が進んでおり、表土下約10cm前後で地山となり、遺構は検出されなかった。南側、O・Q・R－7グリッドは、造成工事部分よりはずれる為、遺構のひろがりをみることを主としたので、遺構上面プラン確認のみに調査をとどめたが、土壙、ピット状の落ち込みがⅤ層上面で確認された。しかし、Oライン以南では出土遺物量も少なくなり、Rラインでは遺構も検出されず、地山も削平を受けている状態で、遺構はRライン以南にはひろがらない様子であった。また丘陵尾根上、及び東側急斜面の状況をみる為に、丘陵尾根上のN～P－2・3グリッドに幅3mの十字状のトレンチを入れたが、西側急斜面同様、植林による地山凹凸状を呈しており、遺物、遺構は皆無であった。遺構以外では地山上面で風倒木痕が4基検出されている。

3次調査(第1・2・6図、写真6)

4月6日より9月6日までの約5ヶ月間行なわれた。造成工事によって削平された部分を除く残りの約4600㎡が調査対象で、この内、東側平坦部標高182～184mを中心とする300㎡を調査した。今回の調査は公園化に伴う梨野A遺跡の性格把握、遺跡の広がりを主体とする調査であった為、平坦部に入れたK－13・15、M－13・15グリッドを中心として丘陵際にも数ヶ所の調査区を設けた。その結果、P－12(d)、K－13グリッド地山上面で縄文時代の住居跡(1・2号)の一部が検出され、O－11・12、J－12・13、K－12グリッドの一部を新たに拡張した。またK－13，P－11グリッドを中心としてⅣb層上部で、縄文時代の埋設土器2基、炉跡1基、Ⅴ層及び地山上面で、縄文時代の埋設土器1基、ピット17個、土壙12基が検出された。O－11(d)グリッドでは地山上面でピット、土壙状の落ち込みが検出されたが上面確認のみでとどめた。遺構以外では風倒木痕2基が検出された。丘陵際のI－14(a)、O－17(a)、Q－12(d)ではⅠ層下に若干のⅢ層をみるが、地表下約20～30cmですぐに地山となり、地山は地表等高線とほぼ同様に、北東側、東側、南東側に下っていく。M－13、15グリッドに於いてもM－15グリッド西側で土壙が1基検出されたのみで、周辺部同様地山がすぐに顔を出す状態であり、15ラインより以東、Iラインより以北、Rラインより以南は、遺構がひろがる可能性はうすい。

3次調査では新たにK－13グリッドを中心に縄文時代包含層(Ⅳ層)が認められ、K－13グリッド東側では早朝の包含層Ⅳc層が検出された。55～57号ピット、24号土壙北側から地山が徐々

に北東に落ち込んで行っており、この部分にⅥc層が認められた。東側M－15グリッドではⅣc層が確認されなかった点より、Ⅵc層はK－13グリッド北東側に若干分布する程度であろうと考えられる。

尚、K－13グリッド地山上面検出2号住居は、J－12・13、K－12グリッドではⅥb層中で上面プランをおさえることが出来たが、当住居を復元住居とする計画もあり、Ⅳb層中以下の調査、炉の埋土の掘り下げは行なわなかった。同理由により、K－13グリッド東側に検出されたⅣc層も4×2mの部分の掘り下げを行なったのみである。

9月6日全てのグリッドの埋戻しが完了し、3ヶ年に渡る梨野A遺跡の調査は完了した。検出遺構は縄文時代の住居2軒、炉跡1基、埋設土器4基、ピット66個、土壙34基、古墳時代の土壙1基であった。遺構以外では風倒木痕が6基検出された。出土遺物は、Ⅲ層、Ⅳ層を中心として平箱約100箱分が出土したが、その大部分は縄文時代の土器破片資料であった。

佐藤甲二

Ⅲ. 基本層位（第3図. 写真7）

現表土層より地山層まで大別6層から成り、これらはさらに11層に細別される。

第Ⅰ層　現表土層で、2層に細別される。

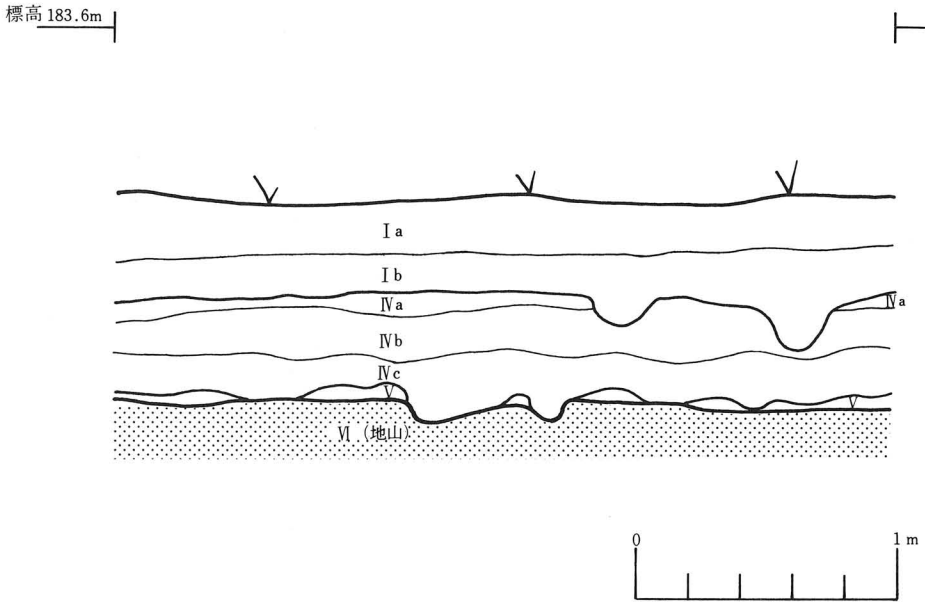
Ⅰa層　黒褐色（10YR 2/3）シルト層。粘性弱く、しまり不良。
表土及び畑地耕作土。草、木の根を多く含む。厚さ約10～20cm。

Ⅰb層　黒褐色（10YR 2/2）シルト層。粘性なく、しまり不良。
畑地耕作土。Ⅱ層をブロック状に含む、Ⅰa層とⅡ層の混合土。厚さ約5～15cm。

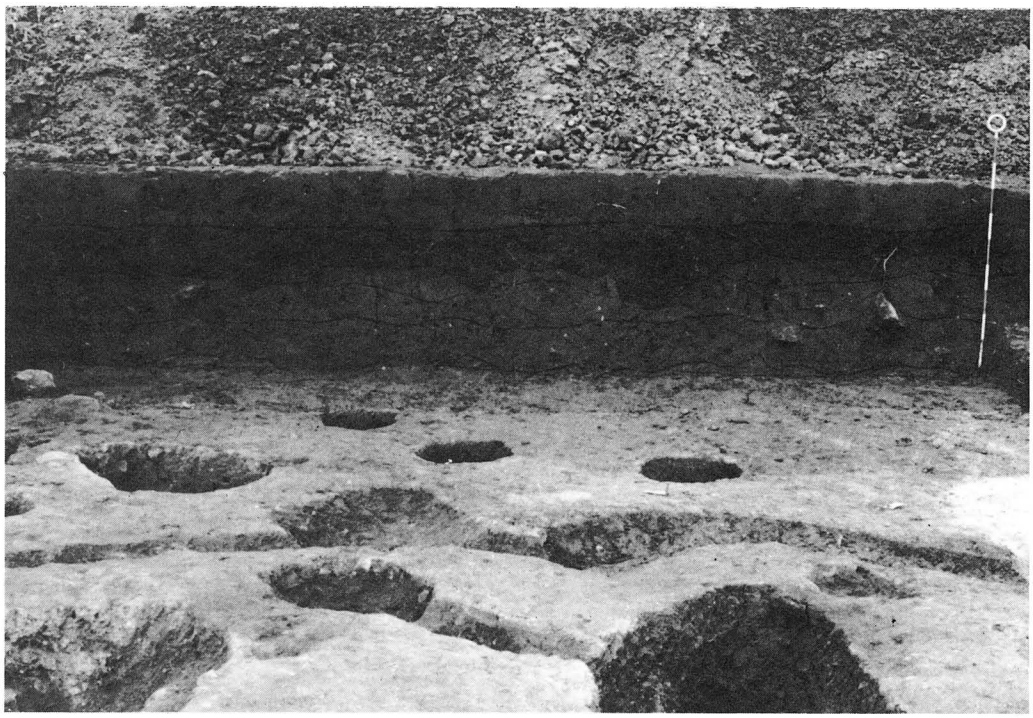
第Ⅱ層　黒色（10YR 2/1）シルト層。粘性弱く、しまりやや不良。
開墾時前の旧表土（雑木林の時期の腐植土）。ほとんどが耕作によって削られている。O－7、J・K－12・13、M－13グリッド等で部分的にしか分布せず。厚い部分で約5～6cmの薄い層。磨滅風化した小土師器片を数点含む。

第Ⅲ層　にぶい黄褐色～黒褐色（10YR 4/3～2/3）粘土質シルト。粘性は地点によって異る。しまり不良。
Ⅳ層以下の層の二次堆積層。加えて雑木林の時期に於いて木の根の攪乱を受けており、多量の地山ブロックを含む。Ⅲ層の下層は直接地山となる場合が多い。西側急斜面以外の全調査地点に分布する。厚さ約10～20cm。多量の縄文時代の遺物を含む。

第Ⅳ層　縄文時代の遺物包含層で3層に細別される。



第３図　基本層位　K—13(b)　東壁セクション図



７．基本層位　K—13(b)　東壁セクション

Ⅳa層　暗褐色(10ＹＲ¾)粘土質シルト層。粘性強く、しまり良好。

Ⅳb層漸移層。Ｊ・Ｋ－12・13、Ｍ－13、Ｎ－９、Ｏ－10、Ｐ－９グリッドに分布。部分的には厚い場合もあるが、約５cm前後の薄い層。

Ⅳb層　暗褐色(10ＹＲ⅜)粘土質シルト層。粘性やや強く、しまり良好。

Ⅵa層と同一グリッドに分布。厚さ約10～30cmと安定していない。Ｐ－９グリッドでは下層で若干しまりが不良な部分がみられ、これをⅥb′層とした。

Ⅳc層　暗褐色(7.5ＹＲ⅜)シルト質粘土層。粘性強く、しまり良好。

Ｋ－13グリッド東側のみに分布が認められた。厚い部分で約20cm。縄文時代早期末葉の遺物のみ出土。

第Ⅴ層　褐色(10ＹＲ⅘)粘土層。粘性強く、しまり良好。

地山漸移層。厚さ約２～３cm。無遺物層。

第Ⅵ層　黄褐色～褐色(10ＹＲ⅝～⅚)粘土層。粘性強く、しまり良好。

褐色・淡黄色・にぶい黄色(10ＹＲ¾・５Ｙ⅞・2.5Ｙ⅞)凝灰岩層

地山層。地山層には粘土層、凝灰岩層、粘土中に多量の風化凝灰岩ブロックを含む粘土層と凝灰岩層の混合層から成り、Ｍ－13グリッド南西側深掘区(２×２ｍ、深さ約１ｍ)の結果では、上層より粘土層、混合層、凝灰岩層の層序となるが、調査地点のほとんどは地山層が直接凝灰岩層、混合層となり、わずかにＫ－13、Ｐ－９グリッドを中心とする部分にしか粘土層は分布しなかった。従って、本来分離すべき３層を一括してⅥ層とした。尚、粘土層、混合層とも無遺物層である。

以上、基本層序は第Ⅰ層から第Ⅵ層まで順序だって認められた調査地点はなく、非常に不安定な堆積状態を示す。ほとんどのグリッドはⅠ層→Ⅲ層→Ⅵ層の層序から成り、表土下約20～40cmで地山となる。わずかに東側緩斜面部から平坦部に移行する部分に入れたＪ・Ｋ－12・13、Ｏ－10、Ｐ－９グリッドで堆積土が厚く（Ｋ－13グリッドの場合表土から地山まで約１ｍ)、これらグリッドを中心としてⅣ層が認められた程度であった。

Ⅳ．縄文時代の遺構と遺物

1．ピット、土壙の分類基準

Ⅰ．平面規模による分類

ピット66個、土壙34基が検出されたが、この両者は平面規模の差により分類しており、堆積土、出土遺物、配置等からの分類ではない。従って土壙と名称したものより規模の小さなものとしてピットの名称が与えられている。土壙もその平面規模により、小型、中型、大型の３つに分けた。これらは全て上端最大値(長辺、長軸等)を分類基準としており、その分類値を次のように置いた。

ピット：0.7m未満のもの。

小型土壙：0.7m以上、１m未満のもの。

中型土壙：１m以上、２m未満のもの。

大型土壙：２m以上のもの。

ピットと土壙との分類値を0.7mに置いたのは、この値未満の場合、下端最大値が全て0.5m未満となり、加えて上端最大値に対して比較的深いものが多いという点で、0.7m以上のものとは多少差異を見い出せるという点からである。しかしながら、小型土壙と中型土壙、中型土壙と大型土壙との分類値は、いたって便宜上の値である。

Ⅱ．土壙の形態分類

土壙は上端平面形、下端平面形、底面積、断面形の上から形態分類を行ったが、平面形に関しては、当遺跡検出土壙のほとんどが整形を呈していない(ピットも同様)という点より、分類では、例えば不整円形も円形として取り扱った。また余りにも不整形なものに関しては分類より除外し、明らかに壁の一部が崩壊したと認められるものについては上端平面形を復元した状態で分類した。

上端・下端平面形は円形、楕円形、長楕円形に分類される。これらの分類の一応の目安として、長軸÷短軸の値が1.2未満のものを円形、1.2以上2.0未満のものを楕円形、2.0以上のものを長楕円形とした。

底面積は上端面積より大きいものと小さいものに分類され、さらに小さいものは、上端面積と比較して広いものと狭いものに分類される。

断面形はフラスコ状、U字状、ややひらいたU字状、スリ鉢状、舟底状に分類される。

以上、上端平面形、下端平面形、底面積、断面形の組み合わせにより土壙は以下のA～Fま

での７類型に分類される。

A類：上端・下端平面形とも円形を呈す。底面積が上端面積より大きい。断面はフラスコ状を呈す。

B類：上端平面形楕円形、下端平面形円形を呈す。底面積が比較的広い。長短軸断面はややひらいたＵ字状のもので、壁角度は長軸が短軸に比べ若干ゆるやかになる。

C類：上端・下端平面形とも楕円形を呈す。底面積、長短軸断面ともＢ類と同様、壁角度は長短軸ともほぼ等しいもの。

D類：上端平面形楕円形、下端平面形長楕円形を呈す。底面積、長短軸断面ともＢ類と同様。壁角度は短軸が長軸に比べ若干ゆるやかになる。

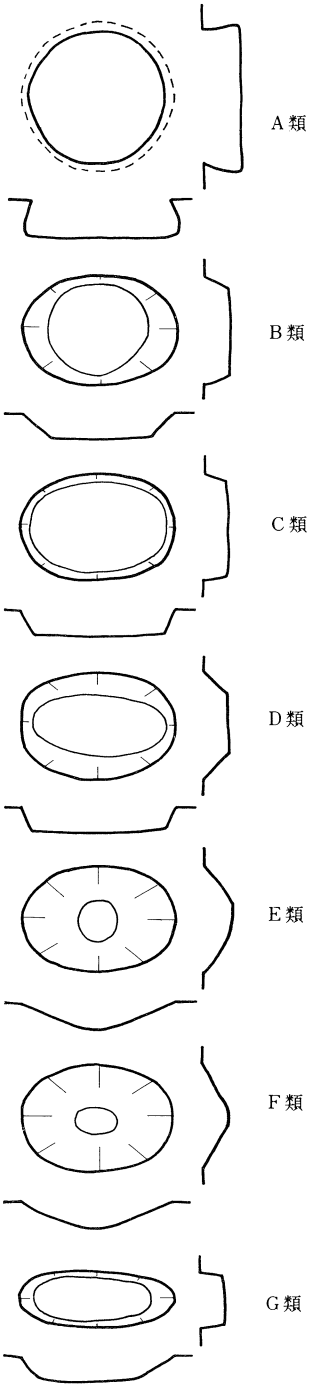
E類：上端平面形楕円形、下端平面形円形を呈す。底面積が狭い。長短軸断面が若干スリ鉢状を呈し明確な下端を持たない。壁角度は長軸が短軸に比べゆるやかになる。

F類：上端・下端平面形とも楕円形を呈す。底面積、長短軸断面、壁角度ともＥ類と同様。

G類：上端・下端平面形とも長楕円形を呈す。底面積は比較的ひろい。長軸断面舟底状、短軸断面Ｕ字状で、長短軸壁角度の差異が大きい。

以上、土壙形態を７類型に分類したが、これら土壙の深さは浅く、深さ÷上端長軸の値が0.2前後のものがほとんどで、0.5以上(0.56)のものは、C類の小型土壙１基しか認められなかった。

佐　藤　甲　二



第４図　土壙の分類基準

2．土器の分類基準

梨野Ａ遺跡出土の縄文土器の分類に際しては、時期区分としての「群」を、第Ⅰ群～第ⅩⅢ群まで設定した。これら各群は、器形、部位形態、文様(文様構成、文様帯、文様形態、文様要素)胎土等によりさらに「類」に細分した。

第Ⅰ群土器

早期中葉に位置づけられる貝殻・沈線文系土器群である。文様の特徴により以下の２類に分けられる。

第１類　沈線文のもの

第２類　貝殻腹縁圧痕文のもの。文様構成によってａ、ｂに分けられる。

ａ．貝殻腹縁圧痕文が沈線、「く」字状連続刺突文に沿って文様を構成するもの。

ｂ．貝殻腹縁圧痕文が単独に文様を構成するもの。

第Ⅱ群土器

早期末葉に位置づけられる条痕文系土器群である。胎土に植物繊維を含み、内外面の文様より以下の４類に分けられる。

第１類　外面縄文、内面条痕文のもの。隆線の有無によりａ、ｂに分けられる。

ａ．外面に隆線を持つもの。　ｂ．外面縄文のみのもの。

第２類　外面縄文、内面無文のもの。

第３類　内外面とも無文のもの。隆線の有無によりａ、ｂに分けられる。

ａ．外面に隆線をもつもの。　ｂ．内外面とも無文のみのもの。

第４類　外面沈線文、内面条痕文のもの。

第Ⅲ群土器

前期中葉に所属する土器群である。半截竹管状の施文具による鋸歯文と刻みを持つ隆線を特徴とする。

第Ⅳ群土器

中期前半に所属する土器群である。半截竹管状の施文具による連続刺突文を特徴とする。

第Ⅴ群土器

中期後葉に所属する土器群である。文様構成の特徴により以下の２類に分けられる。

第１類　文様のあるもの。その文様帯によりａ、ｂ、ｃ、ｄに分けられる。

ａ．口唇部に文様帯を持つもの。　ｂ．口唇部直下から体部まで文様帯を持つもの。

ｃ．口唇部直下が無文帯となり、その下部から体部まで文様帯を持つもの。

d．口縁部が無文帯となり、体部に文様帯を持つもの。

第２類　地文のみのもの

第Ⅵ群土器

中期末葉に所属する土器群である。文様構成の特徴により以下の３類に分けられる。

第１類　口縁部～体部に文様帯を持つもの。文様形態によりａ、ｂ、ｃ、ｄに分けられる。

ａ．隆沈文による楕円形文様区画を持つもの。

ｂ．隆線文・沈線文・隆沈文による「Ｓ」字状文を持つもの。

ｃ．隆線文・沈線文による「コ」字状文を持つもの。

ｄ．隆線文・隆沈文による方形区画文を持つもの。

第２類　口縁部のみに文様帯を持つもの。文様形態によりａ、ｂ、ｃに分けられる。

ａ．波状口縁頂部から垂下した隆線文が頸部で横位にめぐるもの。連続刺突文の有無により二分される。

①、連続刺突文の施文されているもの。②、連続刺突文の施文されないもの。

ｂ．頸部に横位の隆線文がめぐり、口唇部直下から隆線文が垂下しているもの。

第３類　地文のみのもの。

第Ⅶ群土器

大木10式末葉から後期初頭にかけての土器で、所属時期を確定できないものである。細片等のため文様構成を明確にしえないものが多いための便宜的な分類である。

第Ⅷ群土器

後期初頭の土器群で器形より深鉢Ⅰ～Ⅷ類、壺Ⅰ・Ⅱ類、浅鉢Ⅰ～Ⅲ類・小型鉢・蓋に分けられる。これらは、文様形態より以下のように分類され、さらに表出技法により細分される。

第１類　渦状・弧状磨消縄文（磨消撚糸文を含む）、渦状・弧状沈線文のもの。

ａ．磨消縄文により表出されるもの。　ｂ．沈線文により表出されるもの。

第２類　渦状・弧状隆線間研磨文、弧状隆沈線文のもの。

ａ．渦状・弧状隆線間研磨文のもの。　ｂ．渦状・弧状隆沈線文のもの。

第３類　「Ｘ」状・三角形状・斜行文のもの。

ａ．磨消縄文により表出されるもの。　ｂ．沈線文により表出されるもの。

ｃ．隆線間研磨文により表出されるもの。　ｄ．隆沈線文により表出されるもの。

第４類　並行直線状の磨消縄文と横位直線状の沈線文。

ａ．沈帯磨消縄文のもの。

ｂ．横位直状沈線のもの（口縁部）。b_1：１本のもの。　b_2：２本のもの。

ｃ．縦位並行沈線間磨消縄文のもの。

第５類　連続刺突文が文様単位の主体となるもの。

ａ．沈線間連続刺突文のもの。

ｂ．連続刺突文が単独で文様要素となるもの。

第６類　連続刺突隆線文・連続刻み隆線文のもの。

ａ．連続刺突隆線文(鎖状隆線文－「鎖」が短沈線状のものを含む)のもの。

ｂ．連続刻み隆線文のもの。※ａ・ｂ類とも一部は「方形区画文」に含まれる可能性あり。

第７類　方形区画文のもの。

ａ．沈線文や縦位隆沈線により構成されるもの。

ｂ．連続刺突文により構成されるもの。

第８類　上位区画帯文のもの。

ａ．沈帯により口縁部と体部を区画するもの。

ｂ．隆沈帯により口縁部と体部を区画するもの。

ｃ．鍔状隆帯により口縁部と体部を区画するもの。

ｄ．隆帯により口縁部と体部を区画するもの。

第９類　下位区画隆帯文のもの。

隆帯により体上部文様施文部と体下部研磨部を区画するもの。

第10類　口縁部縦位装飾文のもの。

ａ．研磨した口縁部に縦位隆沈線文が下垂するもの。

ｂ．研磨した口縁部に縦位隆線文が下垂するもの。

第11類　突起のあるもの

ａ．貫通孔のあるもの。a_1　盲孔。a_2　頂部：凹孔・盲孔。a_3　頂部：溝状沈線文。

ｂ．貫通孔のないもの。b_1　盲孔。b_2　頂部：凹孔・盲孔。b_3　頂部：溝状沈線文。

※観察表中の文様名称は施文順序に分解しているため１～11類の名称と細部において多少異なる。

第Ⅸ群土器

広義の後期前葉の土器に属するが、下記の１・２類を第Ⅷ群土器より分離して狭義の後期前葉の土器とした。

第１類　突起より縦位「Ｓ」字状沈線文の下垂するもの。

第２類　突起及び口縁部を文様起点として多条弧状並行沈線文の施文されるもの。

第Ⅹ群土器

後期後葉の土器である。大波状口縁と瘤状小突起の配列を特徴とする。

第Ⅺ群土器

中期から後期に属する粗製土器(「地文」のみの土器で「文様のない突起」をもつものを含む。)口

縁部の断面形態により、以下の４類に分けられ、さらに地文の種類によって細分される。

第１類　口縁から体上部にかけて内弯する深鉢。

a．縄文のもの。　b．縄文＋綾絡文のもの。　c．格子状沈線文のもの。

d．クシ目状沈線文のもの。　e．撚糸文のもの。　f．網目状撚糸文のもの。

第２類　口縁部が直線的に外傾する深鉢

a．縄文のもの。　b．内外縄文のもの(波状口縁のものを含む)。

c．撚糸文のもの。　d．網目状撚糸文のもの。　e．縄文＋綾絡文のもの。

第３類　口縁部が外反する深鉢のもの

a．縦位縄文のもの。　b．撚糸文のもの。

第４類　内弯する浅鉢

a．縄文のもの。

第Ⅻ群土器

中期から後期に所属するミニチュア土器である。

第ⅩⅢ群土器

晩期後葉に所属する土器群である。形態的特徴より以下の３類に分けられる。

第１類　深鉢形土器。頸部の有無によりａ、ｂに分けられる。

a．無頸のもの。口頸部を形成する屈曲点を有しない。口縁部直下の文様帯の有無で二分される。

１．口頸部直下に文様帯がある。２．口頸部直下に文様帯がない。

b．有頸のもの。口頸部を形成する屈曲点を有する。頸部の文様帯の内容により三分される。

１．文様帯を区画する沈線等が施文されず、頸部は無文となる。２．文様帯を区画する沈線等が上下に一条ずつ施文され、頸部は無文となる。３．文様帯に４～５条の沈線が施文される。

第２類　鉢・深鉢形土器。頸部の有無によりａ、ｂに分けられる。

a．無頸のもの。体部から口縁部へ直線的あるいは外反気味でひらくもの。

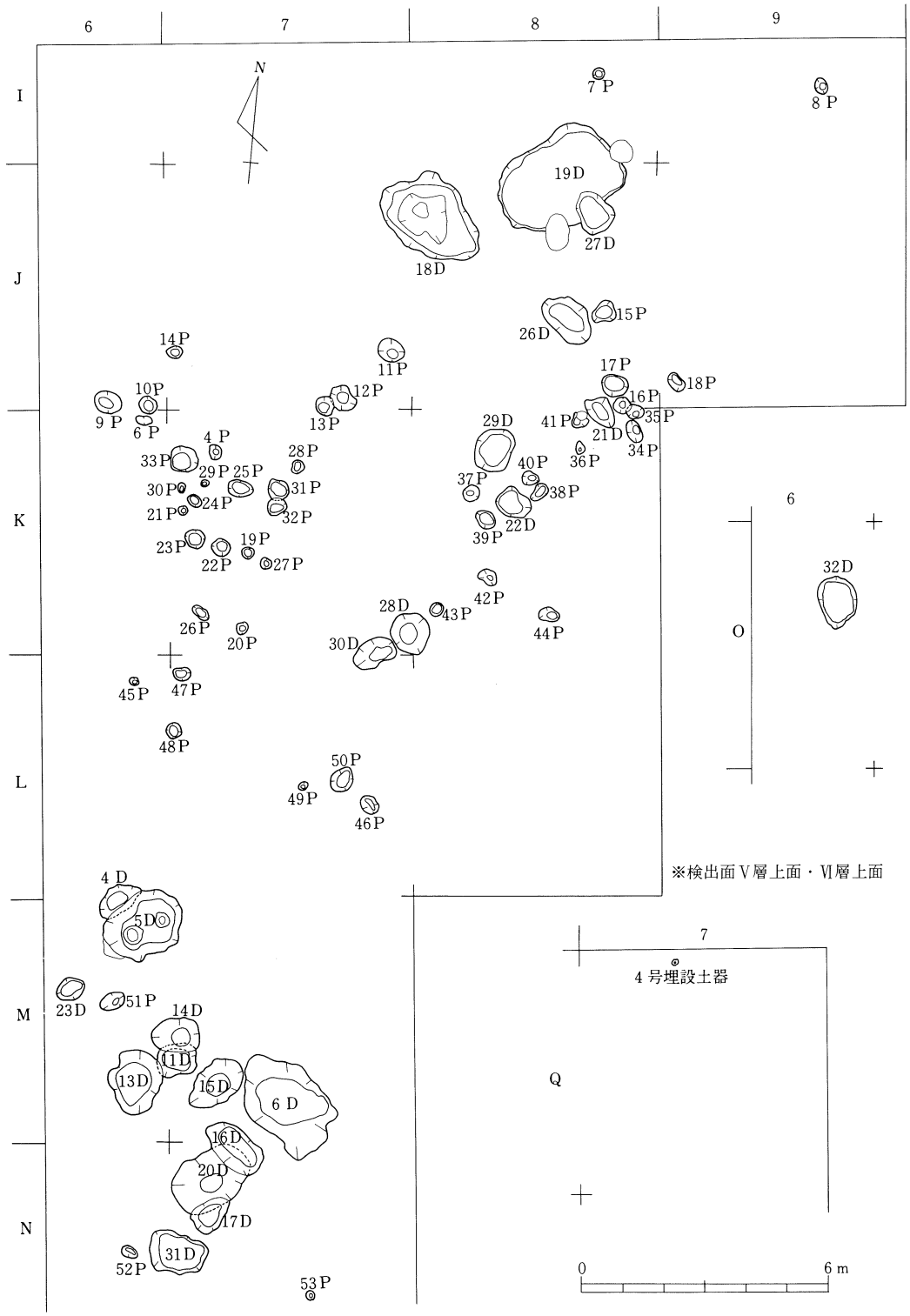
b．有頸のもの。頸部が器高の半分以上を占め、短い体部を持つものと、そうでないものとに二分される。

１．頸部が体部の器高の$\frac{1}{3}$以下である。頸部は直線ないし内弯気味で直立ないし外傾する。２．頸部が体部に比し大きく、直線ないし外反しながら大きく開くもの。

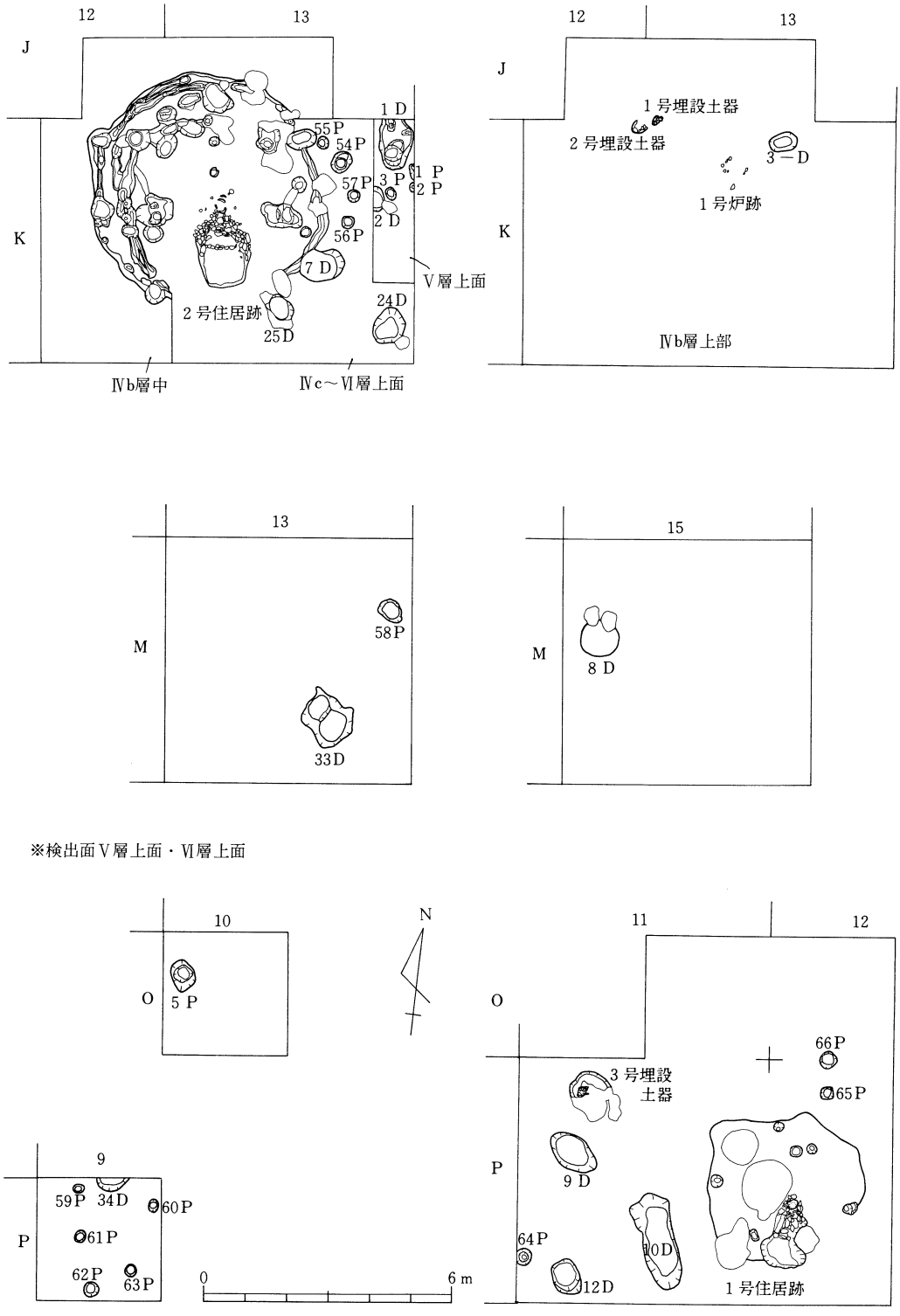
第３類　壺形土器。

佐藤甲二・主浜光朗・田中則和・吉岡恭平

3. 遺構と遺構内出土遺物



第５図　遺構配置図（Ｉ～Ｑ－6～9グリッド）



第６図　遺構配置図（Ｊ～Ｐ―9―15グリッド）

（1）縄文時代早期

Ｋ－13グリッド東側Ⅳc層（早期包含層）排土後に、Ⅴ層上面で検出された。検出遺構はピット３個（１～３号）、土壙２基（１・２号）で、３号ピット以外は完掘していない。　土壙は小型、中型のＣ類に属すると思われる。

１・２・３号ピット（第８図）

深さが10cm以下の浅いピットである。３号ピットは上端規模約30×25cm、上端、下端平面形とも楕円形、深さ９cmのピットである。１～３号ピットとも堆積土は単層で出土遺物はない。

１号土壙（第７・８図）

北側の一部を未掘であるが、中型Ｃ類の土壙で、底面には大小ピット状の落ち込みが３個検出された。堆積土は２層から成り、堆積土１層より第Ⅱ群土器を４点出土した。

２号土壙（第８図）

西側部分未掘の為、正確な規模は不明であるが、上端長軸規模約70cm前後の小型Ｃ類の土壙になると思われる。浅い、底面平坦な土壙である。堆積土は２層から成るが出土遺物はない。

以上、ピット、土壙の所属時期は、Ⅳc層中に第Ⅱ群土器しか含まない点より、早期末葉に位置づけられる。

佐　藤　甲　二

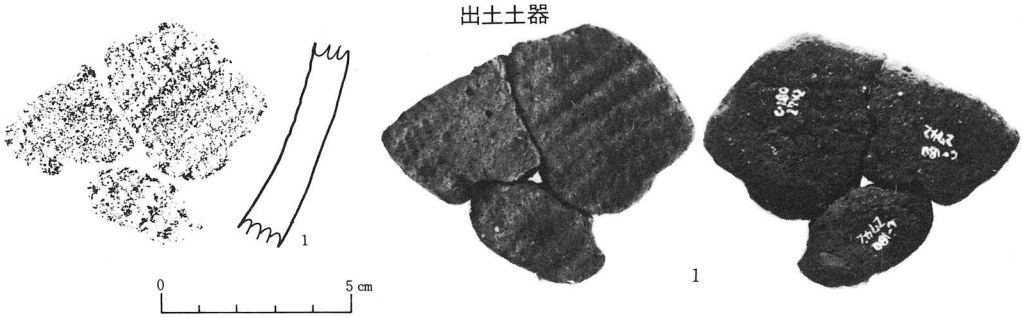
１～３号ピット、１・２号土壙観察表　　※（　）内は残存数

遺構名	地区名	検出面	堆積土	平面形態 上端	平面形態 下端	平面規模cm 型	平面規模cm 上端	平面規模cm 下端	深さcm	壁角	底面状態	上端長軸方位	分類	備考
１・２Ｐ	Ｋ－13(b)	Ⅴ層上面	1	――	――	―	――	――	10.7	――	――	――	――	東側未掘
３Ｐ	Ｋ－13(b)	Ⅴ層上面	1	楕　円	楕　円	―	31×24	20×17	9	120°	平　坦	N-25°-W	――	――――
１Ｄ	Ｋ－13(b)	Ⅴ層上面	2	不整楕円	不整楕円	中	(125)×85	(110)×70	17	113°	凹凸状	N-12°-W	Ｃ	北側一部未掘、底面ピット３
２Ｄ	Ｋ－13(b)	Ⅴ層上面	2	楕円？	楕円？	小	――	――	13	115°	平　坦	――	Ｃ？	西側一部未掘

１～３号ピット、１・２号土壙土層註記表

遺構名	堆積土	色調	土質	粘性	しまり	備考
１・２・３Ｐ	1	7.5YR¾　暗褐色	粘　土	強　い	良	焼土粒。炭化粒。凝灰岩粒微量。１～２cmの小礫。
１Ｄ	1	7.5YR¾　暗褐色	粘　土	強　い	やや不良	焼土粒。炭化粒微量。２～３cmの小礫多量。凝灰岩粒少量。
	2	10YR¾　褐　色	粘　土	強　い	不　良	２～３cmの小礫多量。地山ブロック。
２Ｄ	1	7.5YR¾　暗褐色	粘　土	強　い	良	焼土粒。炭化粒。凝灰粒微量。１～２cmの小礫多量。
	2	10YR¾　褐　色	粘　土	強　い	やや不良	１～２cmの小礫少量。地山ブロック多量。

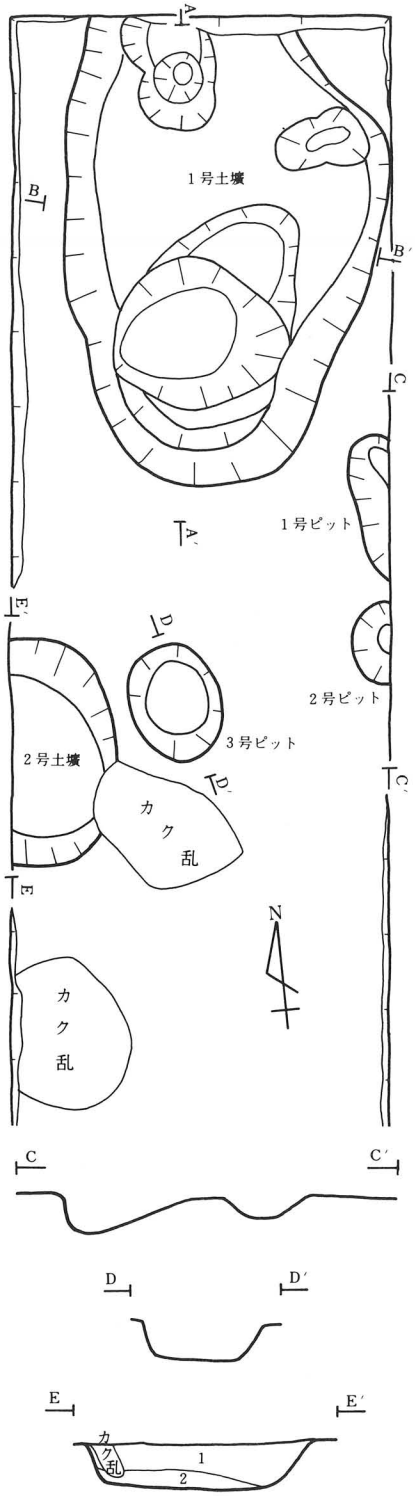
出土土器

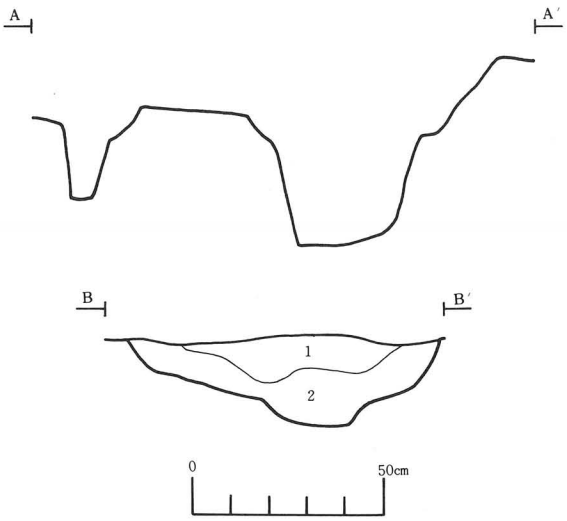


観　察　表

図	遺構名	堆積土	部位	外面施文	内両施文・調整	器厚mm	胎土	焼成	外面色調	分類	備考
1	１Ｄ	1	体部	横位ＬＲ多条縄文	条痕文	8～10	繊維多量。石英多量。砂粒。	不良	褐　色	Ⅱ1b	外面磨滅

第７図　１号土壙出土遺物





1号土壙完掘状況（南より）

2号土壙、3号ピット完掘状況（西より）

第8図　1号～3号ピット、1号・2号土壙平面図

（2）縄文時代中期・後期

検出遺構は住居跡2軒(1・2号)、炉跡1基(1号)、埋設土器3基(1～3号)、ピット2個(4・5号)、土壙4基(3～6号)の12遺構である。

縄文時代中期の遺構は、1・2号住居跡、3号埋設土器、5号ピット、3号土壙、縄文時代後期の遺構は1・2号埋設土器、4号ピット、4・6号土壙で、1号炉跡、5号土壙は、縄文時代中期か後期のいずれに所属するか不明である。

検出面は、1号炉跡、1・2号埋設土器、3号土壙がⅣb層上部、2号住居跡がⅣb層中で、他は全てⅥ層(地山)上面で検出された。

土壙の規模は、小型1基(3号)、中型1基(4号)、大型2基(5・6号)のものがあり、土壙形態は全てC類である。

1号住居跡(第9～13図．写真8～11)

P－11・12グリッドⅢ層排土後、Ⅵ層上面で検出された。後世の攪乱により、すでに壁面、床面はなく炉、ピット、貼床の一部を検出したのみで、周溝の有無は不明である。

住居はⅥ層(地山凝灰岩層)を約10～15cm程掘り込み粘土を入れ貼床としているが、上部はすでに削平されている。貼床は残存の良い部分で厚さ約10cmある。住居南東側では掘り込み及び貼床は検出されなかった。

平面形：掘り込み部及び貼床残存部より推測すると、4×4mのほぼ円形の住居かと考えられる。

ピット：9個検出された、P_4・P_6は貼床排土後に検出されたが、P_4に関しては上部での見落しの可能性が強い。これらピットの形態、規模、埋土、配列に規則性を見出すことは出来なかった。

〈P_6〉貼床排土後に検出された。上端長軸規模約20cm、深さ約10cmの浅いへこみ状のピットである。内部より剝片が8点重り合って出土した。これら剝片は同一母岩のものであるが、接合関係は認められなかった。

炉

住居南側に位置する。かなり上部に攪乱を受けており炉内土器残存高から推測すると、炉は10cm以上上部が削平された状態かと考えられる。炉は軸長1.8m、最大幅1.1mの縦長なダルマ形を呈する複式炉で、堆積土は3層からなる。

構造：北側より土器埋設部、石組部、掘り込み部に分けられる。

〈土器埋設部〉深鉢形土器(体部上半は攪乱により欠失)が埋設され、土器上部周辺に石をめぐら

しているが、石組部との境界部にまでめぐらしたかは不明である(土器の埋土イは石組部側で石組と伴にかなりくずれている)。土器内堆積土、埋土上部は焼土粒、木炭粒が多く認められ、土器自身二次加熱痕が顕著に認められる。また周辺の石も焼けている。

〈石組部〉底面が土器埋設部より約30cm、掘り込み部より約10cm低い平面形台形状の石囲い部である。底面西側にはやや大きめな扁平な礫を２個敷き、その周辺にやや扁平な小礫を敷いているが、東側には礫が敷かれておらず、当初からなかったのか、取り除かれたのかは不明である。北壁は崩落が激しく現状をとどめず、東壁についても滑落状を呈するが、壁面はやや大きめの扁平な石を下部に置き、南壁を除く３壁にはその上に数段石を積み上げたものと考えられる。西壁には長さ約45cm、幅約25cm、厚さ約10cmのかなり大型の扁平な石を使用しており、東壁上部の石には２個の礫石器が利用され、また南端の石には平面規模70×60cmもあるような地山自然礫を利用している。壁面、底面の礫は火を受けた痕跡を残し、特に北壁側礫は明瞭である。

〈掘り込み部〉上端平面形不整楕円形、下端平面形不整形を呈す。石組部より一段高くなっており底面は若干起状を持つ。焼面は認められない。

掘り方：石組部を一段低くし、土器埋設部、石組部、掘り込み部を同時に掘り下げている。石組部は西側壁面を広めに掘り上げ(東壁は削平の為不明)、この後埋土ハ・ロ層を壁面上部・床面に入れ、形を整え石を据えている。埋土ロ・ハ層と貼床、埋土イとの新旧関係は攪乱により不明である。

構築順序：①石組炉を大きめに炉部分を掘り上げる(掘り方)

②土器を設置する

③土器埋設部及び石組部西側壁面・床面に埋土を入れる

④石組部に石を入れる(南壁・北壁下部→床面→東西壁下部→東西北壁上部)

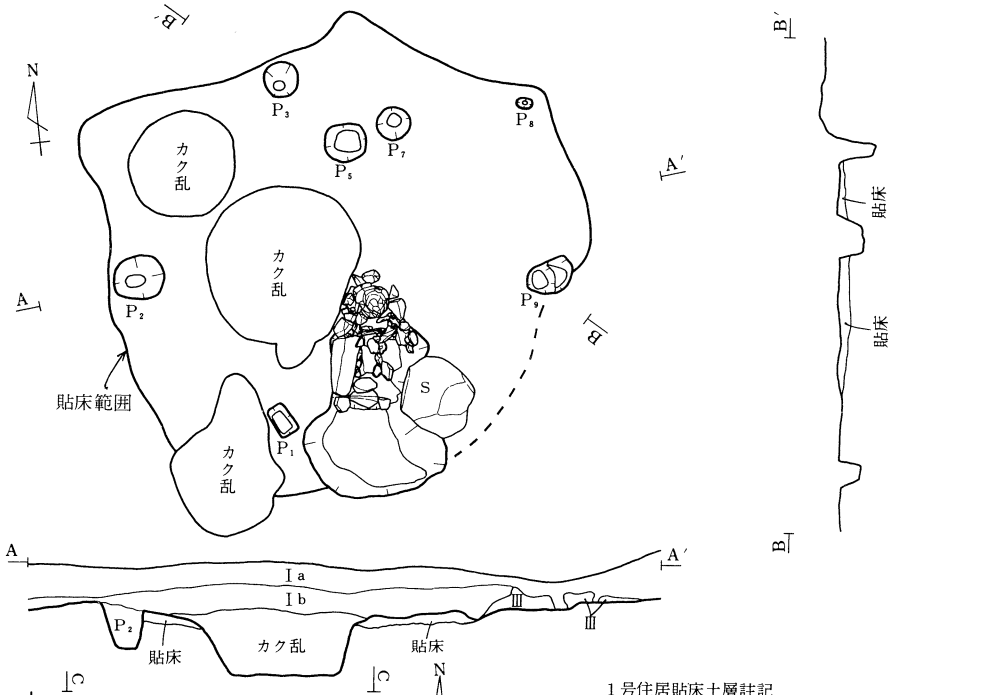
⑤土器埋設部上部に石をめぐらす

出土遺物：炉土器埋設部土器１点、炉石組部使用礫石器２点、P_6 内剥片８点の外に貼床中より剥片１点、炉埋土中より磨滅土器片(時期不明)２片が出土したのみである。

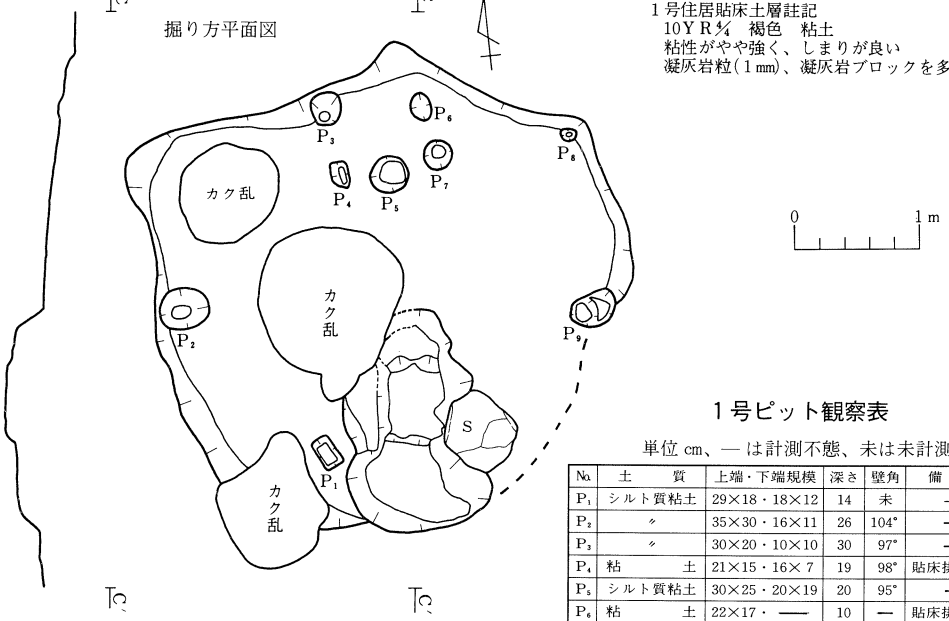
所属時期：唯一の時代決定遺物であった炉内土器が、体部上半欠失の上、地文のみという状況で、遺物よりの所属時期決定は無理であるが、複式炉を持つ点、検出及び周辺グリッドの出土遺物の点からみて、中期後葉から末葉のいずれかの時期に所属するかと考える。

佐　藤　甲　二

2号住居跡貼床面平面図



1号住居貼床土層註記
10YR¼ 褐色 粘土
粘性がやや強く、しまりが良い
凝灰岩粒(1㎜)、凝灰岩ブロックを多量に含む



1号ピット観察表

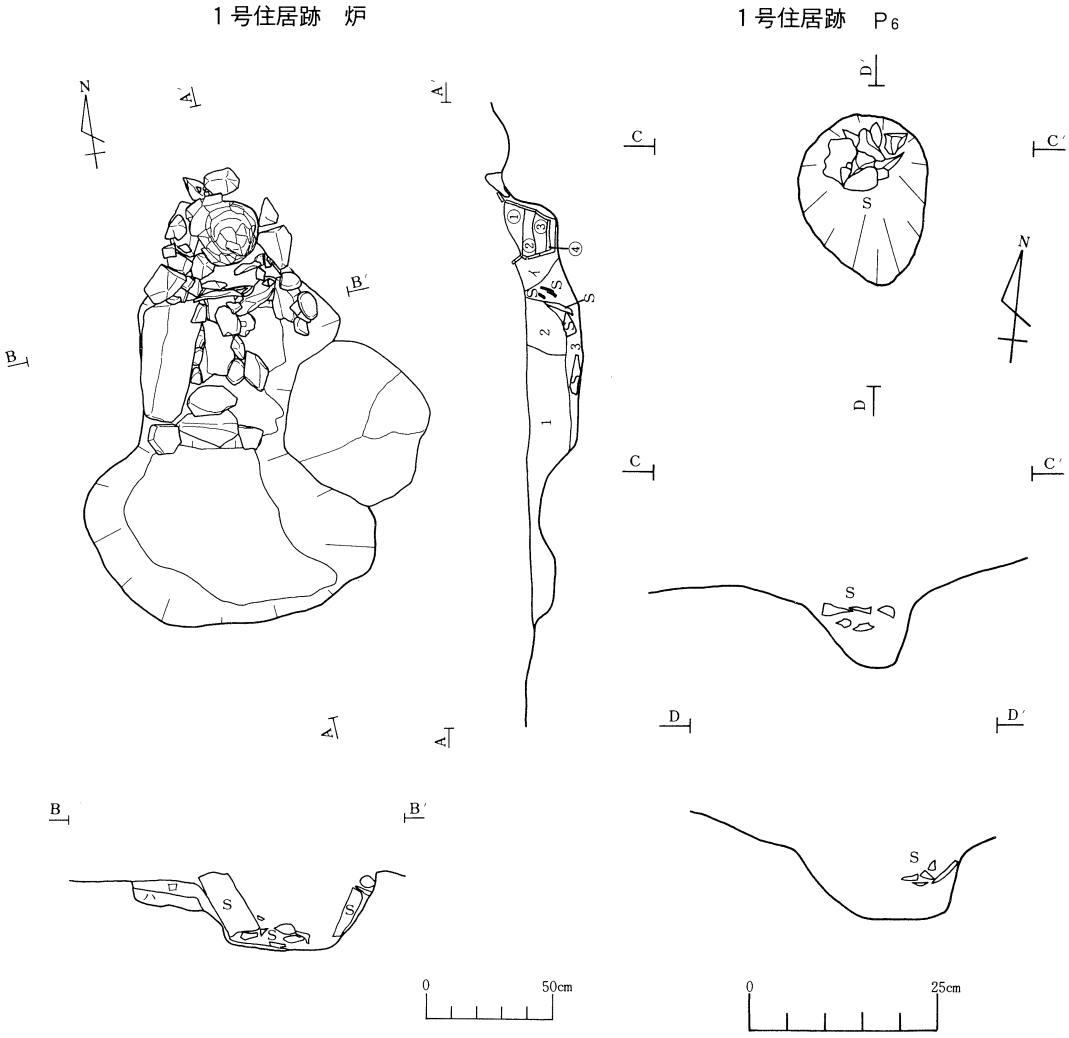
単位 cm、— は計測不態、未は未計測

No.	土　質	上端・下端規模	深さ	壁角	備　考
P1	シルト質粘土	29×18・18×12	14	未	———
P2	〃	35×30・16×11	26	104°	———
P3	〃	30×20・10×10	30	97°	———
P4	粘　土	21×15・16×7	19	98°	貼床排上後検出
P5	シルト質粘土	30×25・20×19	20	95°	———
P6	粘　土	22×17・——	10	—	貼床排上後検出
P7	シルト質粘土	27×27・11×11	48	100°	———
P8	〃	16×13・7×6	10	—	———
P9	〃	39×25・15×11	19	101°	———

1号住居跡観察表　※( )内数値は推定値

地区名	検出面	平面形	規模m	堆積土	床面	周溝	ピット	主柱穴	炉	炉中軸方位	備　考
P—11・12	Ⅵ層上	円形？	(2×2)	—	貼床	—	10	—	複式炉1	N—6°—E	カク乱により壁面・床面すでに削平

第9図　1号住居跡平面図



1号住居跡炉観察表

※（　）内は残存数　単位：m

平面形	規模	堆積土	掘り方		石組部				掘り込み部			
			規模	埋土	平面形	上端・下端規模	深さ	東西・南壁角	上端・下端平面形	上端・下端規模	深さ	壁角
ダルマ形	1.8×1.1	3	1.8×1.1	3	台形	(0.55)×0.5・0.4×0.3	0.25	120°・145°	不整楕円形・不整形	1.15×0.7・0.6×0.6	0.15	145°

1号住居跡炉土層註記表

	層	色調	土質	粘性	しまり	備考
堆積土	1	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	強い	良	1cm凝灰岩ブロック多量。
	2	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	強い	良	焼土粒。炭化粒。2～3cm凝灰岩ブロック。
	3	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	強い	やや良	焼土粒。炭化粒。凝灰岩粒。
土器埋設部土器内	①	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	やや強い	良	凝灰岩粒。
	②	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	やや強い	良	焼土粒。炭化粒。1～2cm礫少量。
	③	10YR2/2　黒褐色	シルト	強い	良	焼土粒。炭化粒。
	④	10YR1/2　黒色	シルト	強い	良	焼土粒。炭化粒。
埋り方埋土	イ	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	強い	良	炭化粒。焼土粒。草の根が混じる。
	ロ	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	やや強い	良	1cm凝灰岩ブロック。
	ハ	2.5YR4/3　オリーブ褐色	シルト質粘土	やや強い	良	1～5cm凝灰岩ブロック。

第10図　1号住居跡炉・P6 平面図

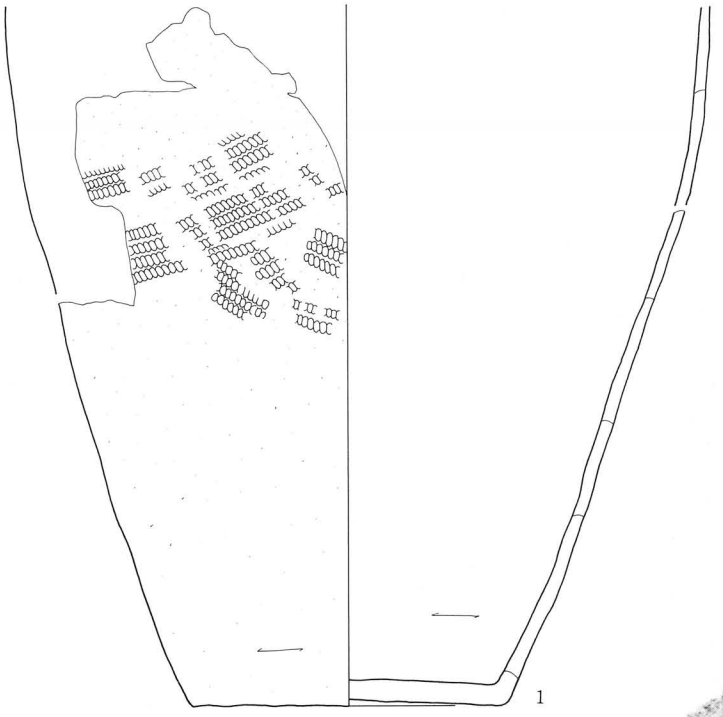
８．１号住居跡　炉　検出状況

９．１号住居跡　炉　石組部底面

10.　P_6内遺物出土状況

11. 1号住居跡完掘状況

出土土器

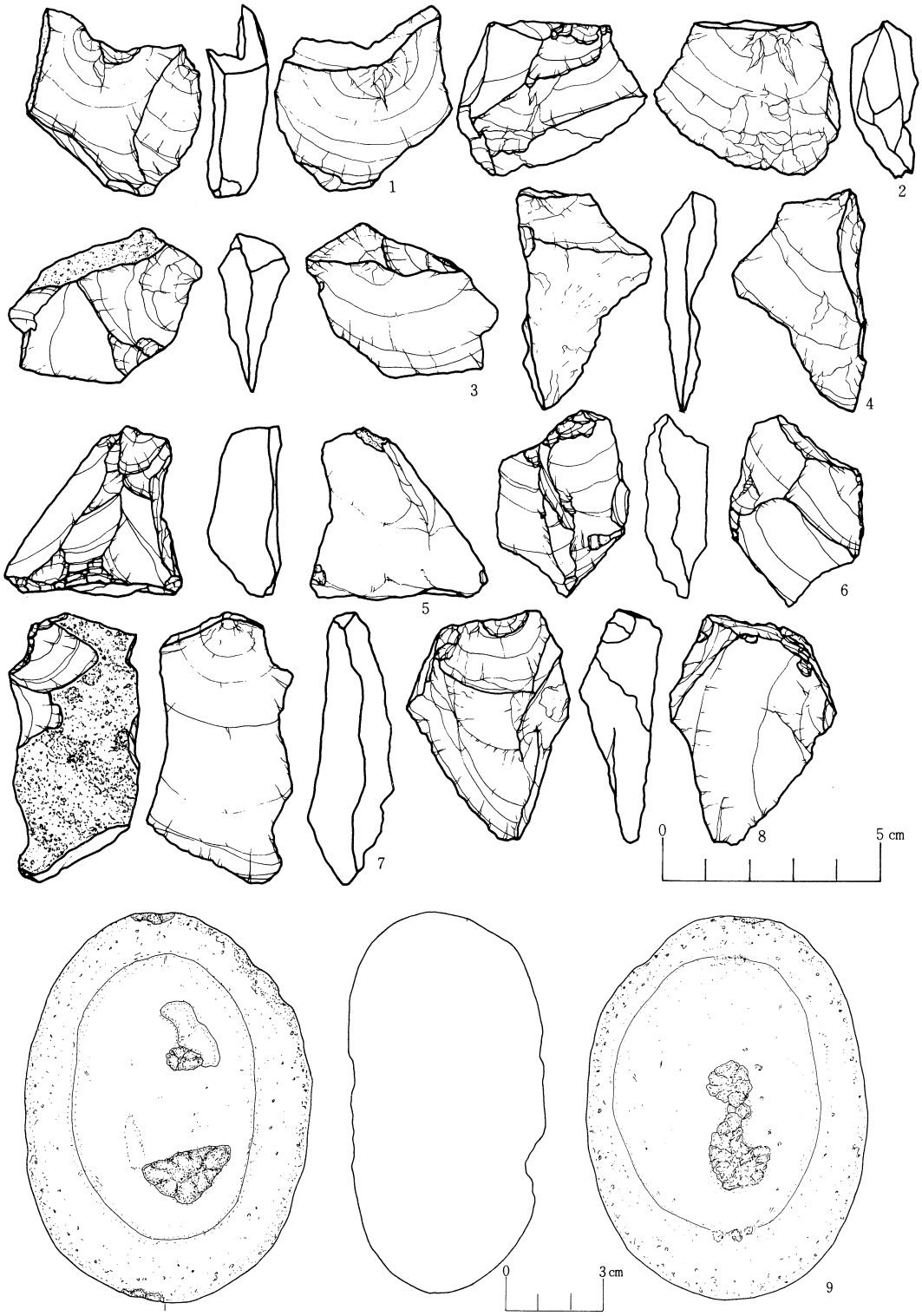


観　察　表

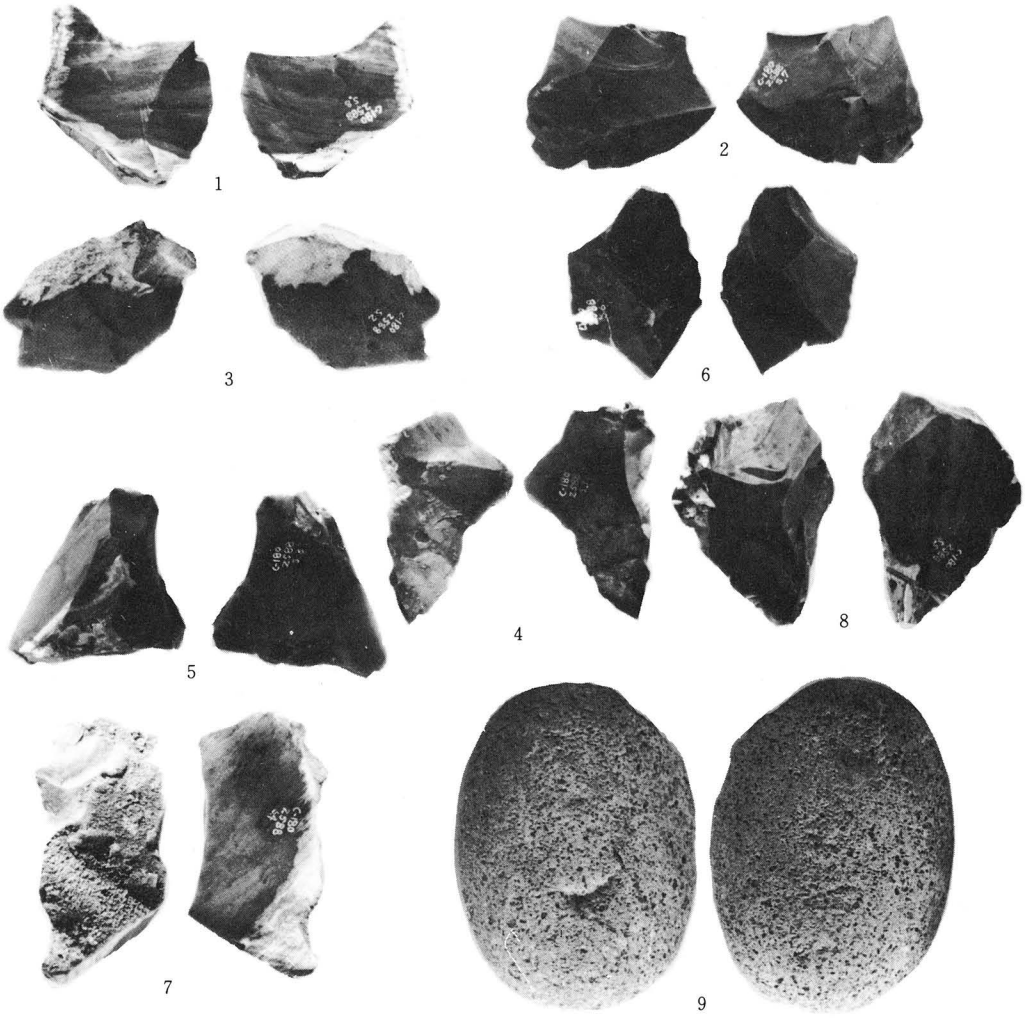
図	出土地点	層位	部　位	器形	法　量	施　文	調　整	備　考
							底　部	
1	炉土器埋設部	——	体部下半～底部	深鉢	残存高 28.0cm	外面：横位ＬＲ縄文（高さ15cmまで） 内面：横位磨き（体部末端）	著しい剝落のため外面調整不明、内面に細かいキレツ入る。	内外面の剝落激しい（二次加熱か）

第11図　１号住居跡炉内出土土器

出土石器



第12図　1号住居跡出土石器（1）



観察表

単位：mm. g

図	出土地点	堆積土	名　称	長さ	幅	厚さ	備　考	石　材	登録番号
1	P_6	堆積土	剝　片	36.5	40.0	10.2	同一母岩分類番号 No.—39	チャート	2588
2	P_6	堆積土	剝　片	35.0	44.0	15.0		チャート	2588
3	P_6	堆積土	剝　片	30.0	47.0	15.5		チャート	2588
4	P_6	堆積土	石　核	30.0	51.0	12.5		チャート	2588
5	P_6	堆積土	石　核	39.0	40.5	16.0		チャート	2588
6	P_6	堆積土	S・F	44.0	30.5	14.0		チャート	2588
7	P_6	堆積土	剝　片	62.5	34.0	18.2		チャート	2588
8	P_6	堆積土	石　核	52.5	38.0	17.5		チャート	2588

図	出土地点	長さ	幅	厚さ	重量	礫の形態	使用痕・他	分類	石　材	登録番号
9	炉石組部	117.5	86.0	60.0	610	C	磨面（a）—両面中央部 敲打痕（b－2）—両面に各2個 敲打痕（b－1）—側面の上下端	Ⅲ	安山岩	S・3

第13図　1号住居跡出土石器（2）

2号住居跡(第14～29図．写真12～15)

K－13グリッドを中心とするK－12、J－12・13グリッドに位置する。K－13グリッドでは住居上面プランが確認出来ず、住居床面(Ⅵ層上面)で住居の検出をみた。その後の拡張により、K－12、J－12・13グリッドでは、Ⅳb層の中頃で住居上面プランが検出された。尚、2号住居は保存を前提とした調査であった為、炉掘り方部分は未掘である。

住居は3号土壙、7号土壙及び攪乱により壁、周溝、ピット、床面の一部が切られている。

平面形：K－13グリッドでは壁が検出されなかったが周溝より推測するに、上端平面形は5.6×5.6mのほぼ円形かと思われる。住居西側部分は拡張が行なわれている。

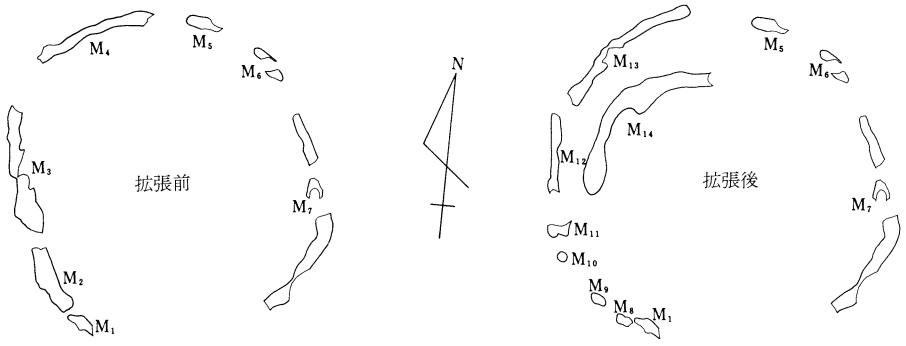
堆積土：2層から成り、2層はa・b・cの3層に細分される。

壁：住居西側、北側で検出され、良好な部分では壁高約50cmで、壁面も垂直ちかく立ち上がる。

床面：Ⅵ層(粘土層、混合層)を床面としているが、地形がゆるやかに西から東へ下る為に、西壁ではⅥ層を10～20cm掘り下げ、東側ではⅥ層上面を床面としている。床面状態はほぼ平坦であるが、西側拡張部床面は約5cm程高くなっている。また床面中央部付近では若干踏み固められたような状態を呈している。

周溝：周溝は全周せず、所々止切れており、住居南側では炉掘り方に切られている。長短合せてM_1～M_{14}までの14条検出された。これらはほぼ上端幅約20cm、深さ約10cm、断面U字形を呈しているが、M_8～M_{11}のように浅いへこみ状のもの、M_3・M_4・M_{12}・M_{13}のように底面の起状が激しく小ピットを連続させたようなものもある。またM_2のように中央に高まりを持ち2重周溝状のものもある。これら周溝の切り合い、組み合せより、住居の拡張前の周溝はM_1～M_7で、拡張後の周溝はM_8～M_{13}で、M_1、M_5～M_7は拡張後も使用されている(下図参照)。

周溝平面略図



M_{14}は独立し、連続性の認められない孤状の幅広い溝で、M_3、P_7～P_{10}、P_{12}を切っている。拡張後以後のものと考えられる。一応周溝の名称を付けたが、他の周溝とは性格の異なるものと思われる。後世の攪乱の可能性もある。

ピット：P_1～P_{20}の20個検出された。いずれも柱痕は認められなかった。この内、上端規模40cm以上、下端規模20cm以上、深さ40cm以上を持つものはP_4、P_7、P_8、P_9、P_{11}、P_{17}、P_{19}の7ピットである。配置、推積土より、P_4、P_8、P_{17}、P_{19}の4本が主柱穴と考えられる。これら主柱穴は炉中軸線上を狭んで左右に2本づつ配されている。ただし北西主柱穴P_8に関しては隣接して同規模なP_7、P_9、P_{11}がある上、M_{14}に上部を切られ、これらの新旧関係も不明で、断定は出来ない。また、北西主柱穴は拡張時に移動したことも十分考えられるし、この周辺に何らかの施設があった可能性もある。

住居北側、炉のほぼ中軸線上に位置するP_{15}は、上記7ピットより平面規模が小さいが深さ40cm以上もあり、主柱穴と何らかの関連性を持つ柱穴である可能性もある。

検出ピット中、住居拡張後のものと断定出来るものは、西壁際のP_1、P_5、P_6である。これらは壁面、周溝に付随したような状態のピットで、上端平面規模、形態がほぼ等しく、また等間隔に並んでいる。

炉

住居中央南側に位置する。軸長2.2m、最大幅1.3mの瓢形を呈する複式炉で、堆積土は3層から成る。

構造：北側より土器埋設部、石組部、掘り込み部に別けられる。

〈土器埋設部〉深鉢形土器の体部（径39cm、第16図）が埋設され、上面に5～10cmの小礫が土器を外周している。土器内堆積土は2層で、ともに多量の焼土粒を含む。土器内底面には焼土面、土器内面には二次加熱痕がみられる。また、上面土器外周礫は焼けており、周辺には焼土が散在している。土器北側には深鉢形土器体部破片（第14図P－1、第20図6）が一部まわっており、また石組部埋設土器との間にも土器片がまわっていることが確認されており、土器の入れ替えが行なわれている。

〈石組部〉上端、下端平面形とも三角形を呈す。住居床面から底面までの深さは約40cmで、掘り込み部底面より1段下り、境には支切り石として10cm大の礫11個をめぐらしている。底面は平坦で礫は敷れていない。北、東、西壁には、20cm前後の大型の礫を2～3段ほど組み上げ、上部に10cm大の礫を並べている。礫と礫との間には小礫や粘土がつめられている。

北壁中央上部には深鉢形土器（第17図）が斜位に埋設されている。土器上半内外面に二次加熱痕らしき変色がみられ、土器を囲む礫は焼けていた。土器内堆積土中には多量の焼土粒を含む。

壁面の礫には火を受けた痕跡がみられたが、床面には焼面が明瞭には認められなかった。

〈掘り込み部〉上端、下端平面形とも方形を呈し、住居床面よりの深さは約30cmである。底面は平坦で固くしまっており焼面は認められない。

中央、南壁際にピットが検出された。両ピットとも上端径約30cmのほぼ円形のもので、深さ

は中央ピットが約７cmと浅く、南壁際ピットが約25cmとやや深い。両ピットとも炉主軸線上に位置する。

掘り方：Ａ・Ｂ・Ｃの小規模な３トレンチを入れたのみで、他は未掘の為全貌は不明であるが、掘り方検出プランから推測すると、上端規模長さ3.m、最大幅2.5ｍの大きなものである。掘り込み部外側に入れたＡ～Ｃトレンチより、掘り込み部底面の東西外側には、深さ約20cmの溝状の落ち込みが認められた。尚、掘り方埋土は４層からなる。

構築順序：１.掘り方。２.石組部土器設置。３.土器埋設部土器設置。４.土器埋設部、石組部、掘り込み部周辺に埋土を入れる。５.石組部と掘り込み部の間に礫を並べる。６.石組部壁面に礫を積み上げる（東西壁→北壁）。７.土器埋設部、石組部の上部に礫を並べる。

埋設土器：住居ほぼ中央、炉のほぼ中軸線上に位置する。北東部に一部攪乱を受けていたが、径22cmの深鉢形土器体部部分（第18図）が埋設されている。掘り方は土器よりやや大きめの、上端、下端平面形円形、上端規模径約30cm、下端規模径約20cm、深さ10cmである。土器内堆積土は焼土粒、木炭粒を含み、土器内底面、土器内面は若干焼けていた。土器周辺及び埋土上部には礫がまばらにみられ、土器の周りに礫が回っていた可能性もある。

その他：住居南端に大型の自然礫がみられ、礫の下部はⅥ層中にかなり食い込んでいる。また礫上部のレベルより、この礫は住居構築時には地表面に顔を出していたと考えられる。従って住居はこの礫を意識して構築された可能性が強い。

出土遺物：堆積土、床面、住居内施設より、土器、石器、土製円盤が出土している。土器は炉土器埋設部土器、炉石組部土器、埋設土器の他、復元土器１点、口縁部破片100点、体部破片1034点、底部破片29点の総計1167点である。石器は200点出土しており炉掘り方Ｃトレンチ内では、同一母岩資料（剝片）が６点が出土した。土製円盤は堆積土中より１点のみ出土した。

出土土器のほとんどは第Ⅴ群土器であるが、堆積土１、２層中には他群土器も混在している。第Ⅴ群と判別された土器は、復元土器４点、口縁部破片20点、体部破片83点の総計107点である。

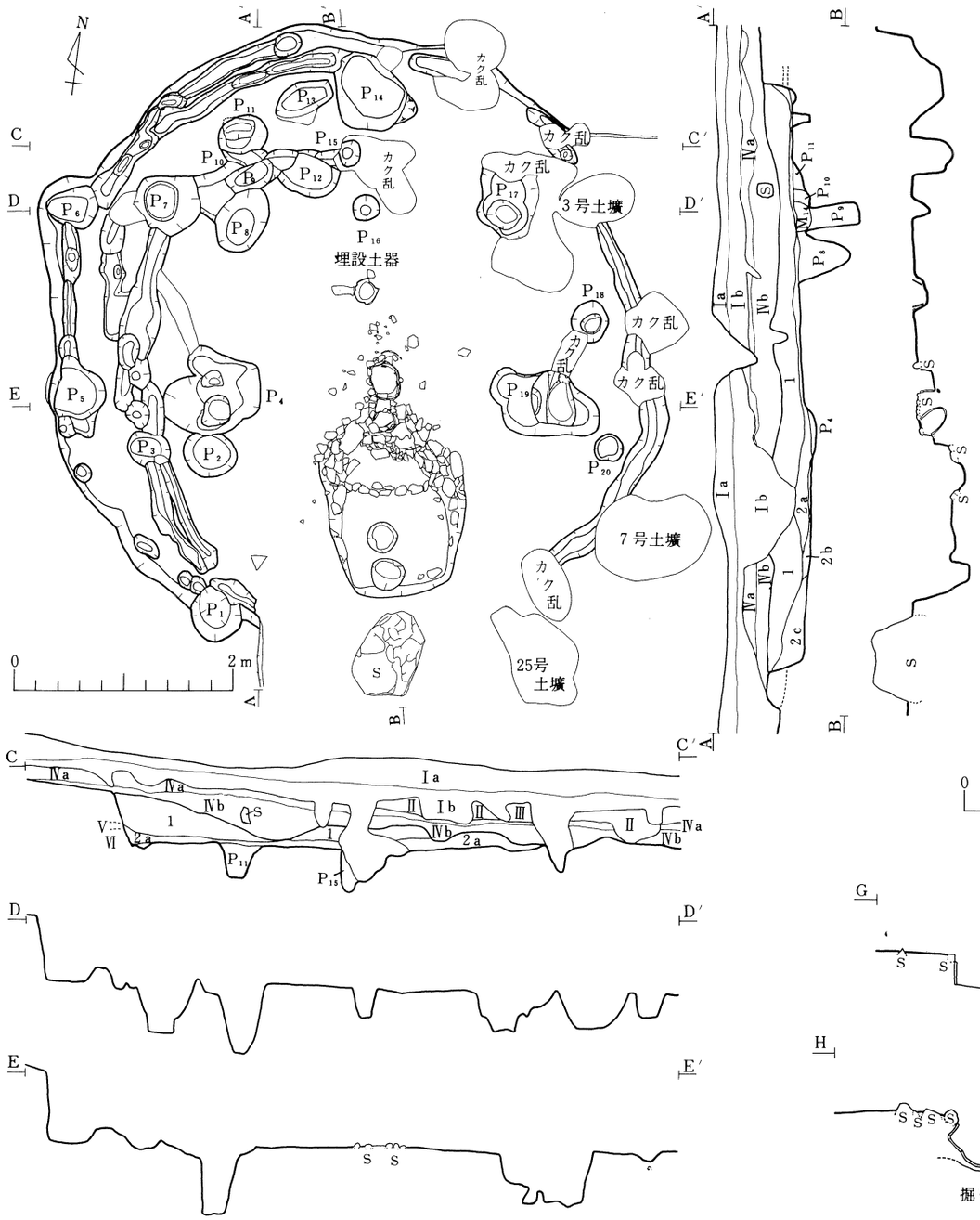
炉土器埋設部土器（第16図）

体部のみ残存している内弯ぎみの深鉢で最大径39cmを計る。沈線文による楕円文と「∩」文が上下に施され、それらの間に沈線文が縦位に施文されている。地文としてＬＲ縄文が施文されている。文様は12単位構成であり、１単位のみ縦位の沈線が見られない。

炉石組部土器（第17図）

口縁部が欠損している内弯ぎみの深鉢で、底径10cm、最大径29.5cmを計る。底部は平底で磨かれている。地文としてＬＲ縄文が施文されているのみである。

2 号 住 居 跡

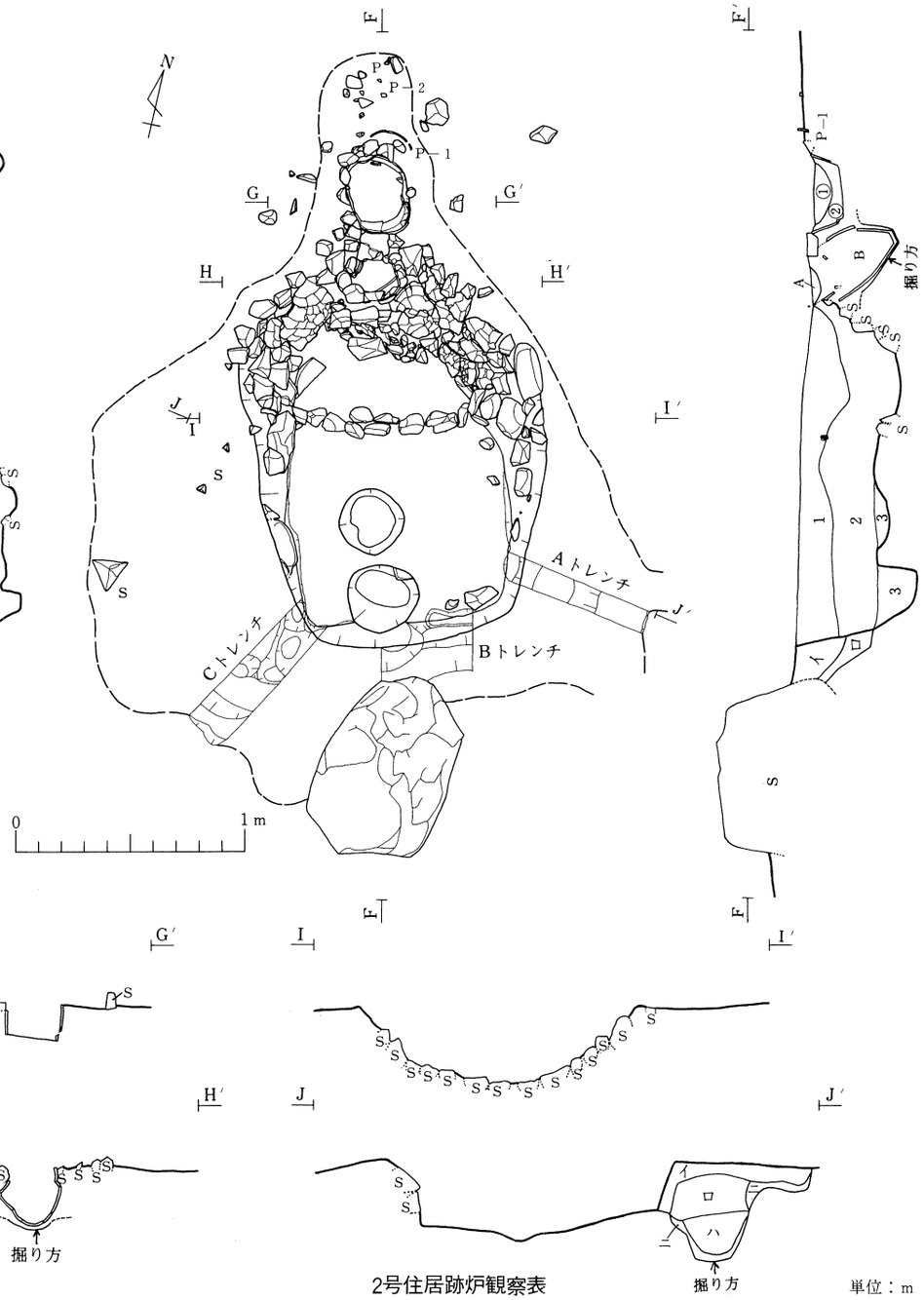


2号住居跡観察表

単位：m

地区名	検出面	平面形	規模	堆積土	床面	壁高	壁角	周溝	ピット	主柱穴	建替・拡張	炉	埋設土器	炉主軸方位
J・K－12・13	Ⅳb中	円形	5.6×5.6	大別2（細別4）	Ⅳ層直上	0.5	100°	2	20	4	1回以上	複式炉1	1	N－6°－W

炉



2号住居跡炉観察表

単位：m

平面形	規模	堆積土	掘り方		石組部				掘込み部				
			規模	埋土	平面形	上端・下端規模	深さ	壁角	平面形	上端・下端規模	深さ	壁角	その他
甕形	2.2×1.3	3	3×2.5	4	三角形	1.3×0.9・0.8×0.3	0.4	130°	正方形	1.7×1.6・1.5×1.5	0.3	110°	底面にピット2

第14図　2号住居跡・炉平面図

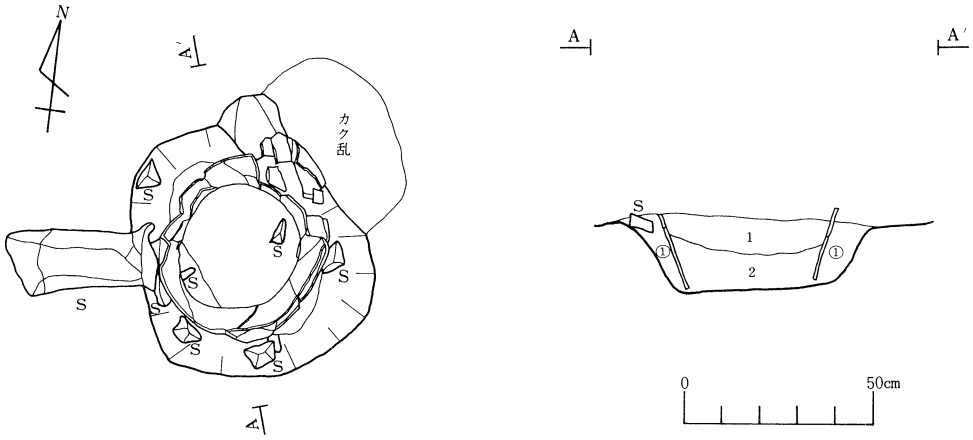
2号住居跡土層註記表

堆積土	色調	土質	土質	しまり	備考
1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	やや強い	良	焼土粒・炭化粒多量。凝灰岩粒。
2a	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	強い	良	凝灰岩粒。焼土粒。炭化粒。
2b	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	やや強い	やや良	2～3cm凝灰岩ブロック多量。焼土粒。炭化粒。
2c	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	強い	良	凝灰岩粒。焼土粒。炭化粒。

2号住居跡炉土層註記表

層位		色調	土質	粘性	しまり	備考
堆積土	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	やや強い	やや良	1cm炭化物多量。焼土粒。1cm凝灰岩ブロック。
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	やや強い	やや不良	1cm炭化物・粘土粒多量。1cm凝灰岩ブロック。
	3	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	強い	不良	2～3cm地山ブロック・炭化粒・焼土粒多量。
石組部土器内	A	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	やや強い	やや不良	炭化粒。焼土粒。
	B	7.5YR2/3 極暗褐色	粘土質シルト	強い	やや不良	焼土粒多量。炭化粒微量。
土器埋設部土器内	①	7.5YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	やや強い	やや良	焼土粒・炭化粒多量。
	②	5YR3/4 暗赤褐色	粘土	強い	不良	焼土粒多量。炭化物少量。
掘り方埋土	イ	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	やや強い	良	焼土粒。0.5～1cm凝灰岩ブロック多量。
	ロ	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	やや強い	良	焼土粒。炭化粒。凝灰岩粒。1cm凝灰岩ブロック。
	ハ	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	強い	やや不良	焼土粒・炭化粒・凝灰岩粒微量。
	ニ	10YR4/4 褐色	粘土	強い	やや不良	地山ブロック多量。

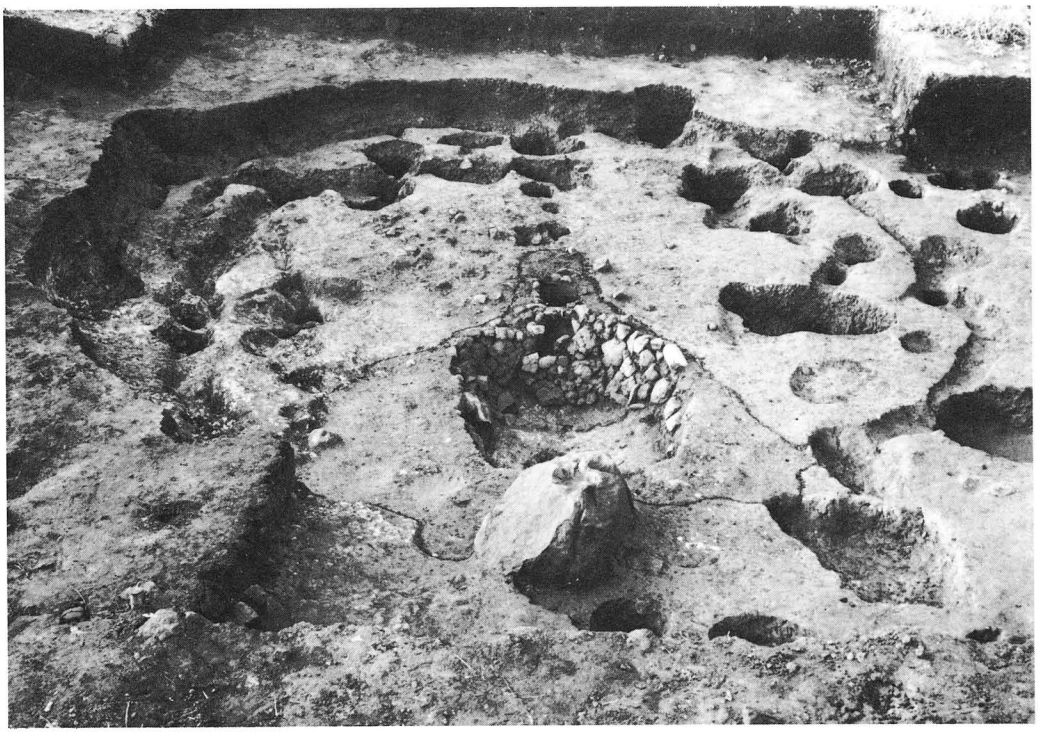
2号住居跡埋設土器



2号住居跡埋設土器土層註記表

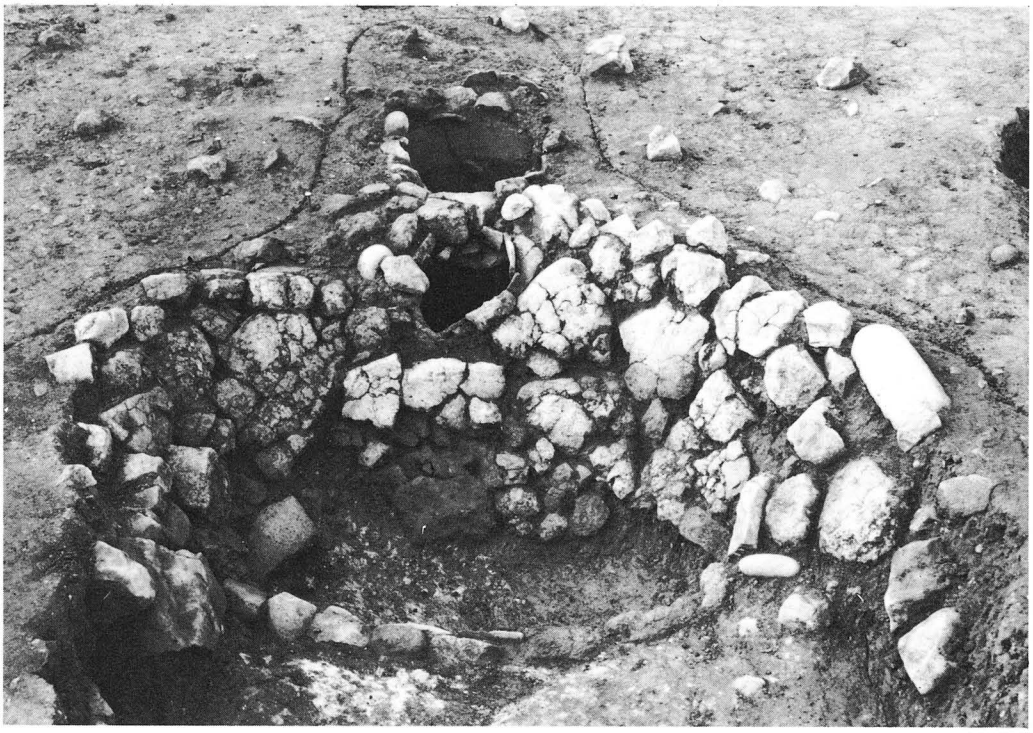
層位		色調	土質	粘性	しまり	備考
土器内堆積土	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	強い	良	焼土粒。炭化粒少量。凝灰岩粒。
	2	7.5YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	強い	やや良	焼土粒・炭化粒多量。地山ブロック。
埋土	①	10YR4/4 褐色	粘土	強い	やや不良	2～3cm円礫少量。地山ブロック多量。

第15図　2号住居跡・埋設土器

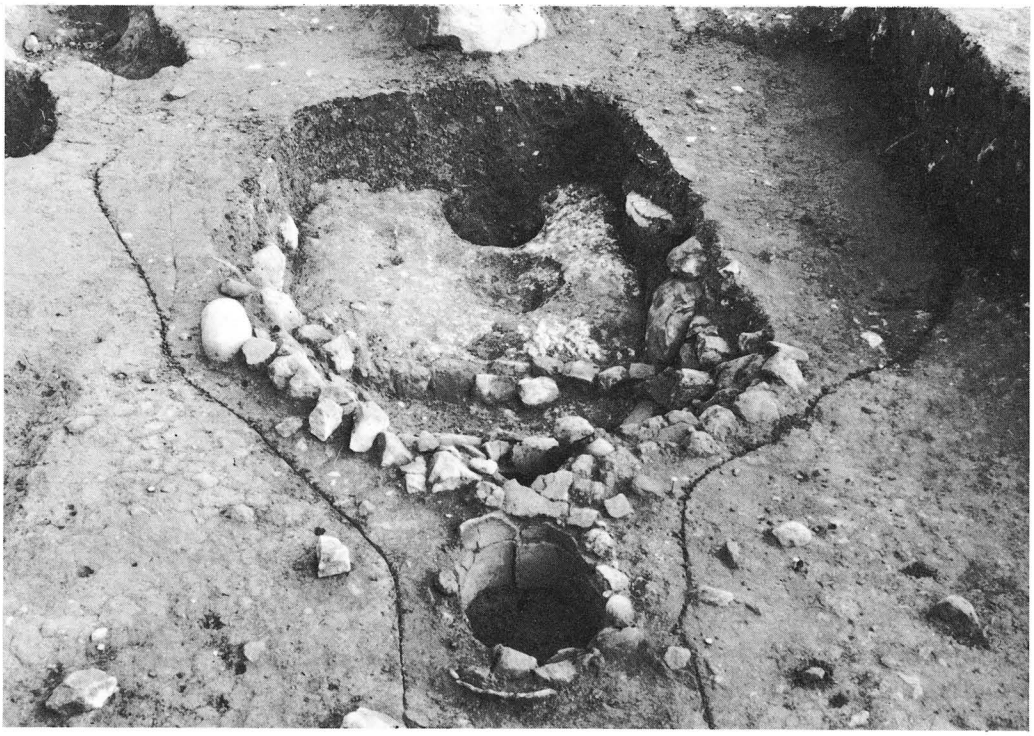


12．２号住居跡完掘状況（南より）

13．２号住居跡床面埋設土器（北より）



14．２号住居跡炉全景(1)（南より）



15．２号住居跡炉全景(2)（北より）

2号住居跡ピット観察表

単位：cm、（ ）は残存数

No.	土　質	上端規模	中端規模	下端規模	深さ	壁角	柱　穴	重　複	備　考
P_1	粘土質シルト	37×30	——	4×4	12	—	——	————	底面擂鉢状。$M_{1,8}$に付随。
P_2	粘土質シルト	49×40	——	35×30	10	130°	——	————	————
P_3	粘土質シルト	40×32	——	29×19	23	100°	——	————	$M_{2,3}$に付随。
P_4	粘土質シルト	90×80	30×28	23×18	68	95°	主柱穴	————	————
P_5	粘土質シルト	60×46	——	47×40	31	80°·135°	——	————	住居壁際オーバーハング。$M_{11,12}$に付随
P_6	粘土質シルト	47×40	——	33×24	22	105°	——	————	————
P_7	粘土質シルト	(60)×(60)	36×32	31×28	58	105°	主柱穴？	M_{14}に切られる。	————
P_8	粘土質シルト	63×(45)	——	35×23	67	95°	主柱穴？	M_{14}に切られる。	————
P_9	粘土質シルト	(45)×(25)	——	33×16	60	100°	主柱穴？	M_{14}に切られる。	————
P_{10}	粘土質シルト	——	——	——	16	—	——	M_{14}に切られる。P_{11}を切る。	上端・下端規模、壁角計測不能。
P_{11}	シ　ル　ト	46×(40)	30×30	24×8	43	100°	主柱穴？	P_{11}に切られる。	————
P_{12}	粘土質シルト	(52)×40	——	(42)×29	22	105°	——	M_{14}に切られる。	————
P_{13}	粘土質シルト	55×31	——	42×18	15	110°	——	————	————
P_{14}	シ　ル　ト	78×63	——	64×42	24	115°	——	————	————
P_{15}	粘土質シルト	(24)×(21)	——	10×8	40	135°	——	————	上端規模カク乱により不明。
P_{16}	粘土質シルト	23×23	——	11×9	27	100°	——	————	————
P_{17}	粘土質シルト	(54)×54	34×28	25×16	40	110°	主柱穴	————	上端長軸規模カク乱により不明。
P_{18}	シ　ル　ト	39×(34)	20×17	17×12	30	100°	——	————	————
P_{19}	粘土質シルト	106×63	42×30	35×21	53	100°	主柱穴	————	————
P_{20}	粘土質シルト	29×25	——	21×16	8	100°	——	————	————

2号住居跡出土遺物数量表

※（ ）内数値は復元土器数

出土地点	遺物／層位	土器												土製円盤	石器																	
		復元土器	口縁部	体部	底部	群別 Ⅱ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅻ	不明		剝片石器 石鏃	石錐	石匙	ポイント	ピエスキー・ユ	スイクパレー	S・F	M・F	フレーク	チップ	石核	石斧	礫石器 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅴ	Ⅳ-1	
住居内堆積土	1	1	69	673	23	1	43(1)	1	8	6	3	704		6	1	1	2	11	11	4		52	2	5	2		1	2			
	2		10	129	4		15	1				127	1	3				3	1			8	1	1					1	2	
	床　直		3	44	1		8	1				39		1					1	2	1	6	3				1	1			
ピット	P_1			1								1																			
	P_2		1	2								3																			
	P_3			1								1																			
	P_4		1	3								4							1			1									
	P_5			6			2					4														1					
	P_6			2			1					1							1												
	P_7			1								1																			
	P_8			2			1					1										2									
	P_9			1								1																			
	P_{11}			8								8		1						1											
	P_{12}		1	1								2																			
	P_{14}		1	8			3					6										2									
	P_{15}		1	2								3						2				1									
	P_{17}		1	1			1					1																			
	P_{18}																		1			3									
	P_{19}		3	17			6					14		1			1					2	1								
周溝	M_2			2			1					1																			
	M_3			5								5																			
	M_7			1								1																			
	M_{14}			2								2		1					1												
炉	堆積土 検出面		4	29	1		3					31				1				1		9									
	堆積土 1		1	54		1	4					50		2					1		1	5									
	堆積土 2		1	12			2					11		1								5									
	堆積土 底面																					1									
	土器埋設部	1					1(1)																								
	土器埋設部 ①			2								2							1												
	石組部	1					1(1)																								
	石組部 A			6			2					4							1			1									
	石組部 B			3			3															2									
	掘り方埋土 検出面		2	5			7																								
	掘り方埋土 イ			2			1					1																			
	掘り方埋土 ハ		1	9			1					9						1	2			7									
埋設土器		1					1(1)																								

埋設土器(第18図)

体部のみ残存している。体部が外傾する深鉢で最大径22.5cmを計る。隆沈文による「C」字文を3単位とそのすき間をうめる形で縦位楕円文が1単位施文されている。地文としてＬＲ縄文が施文されている。

床面直上及び住居跡内施設出土土器(第19図、20図、21図1～4)

隆線文及び隆沈文によって文様が施文されるもの(第19図1～5)

1は横位の隆線文から隆沈文による「∩」文が施文されているもので、地文としてＬＲ縄文が施文されている。2は横位の隆沈文と縦位沈線文が施文されており，地文としてＬＲ縄文が施文されている。3、4は縦位の隆沈文が施文されている。地文はＲＬ縄文である。5は縦位の隆線文と隆沈文による楕円文あるいは「∩」文が施文されており、地文はＲＬ縄文である。

沈線文によって文様が施文されるもの(第19図6～10、20図、21図1～4)

第19図6～10、20図1・2は口縁部資料である。これらの土器を第Ⅴ群土器の分類基準によって分類してみると、第1類：文様のあるものである。a類、b類は確認されない。

c類：口唇部直下が無文帯となり、その下部から体部まで文様帯をもつもの。

第19図6は内弯する波状口縁で横位の渦巻文と楕円文あるいは「∩」文が施文されている。地文はＲＬ縄文である。7は外反する、8・9は直立ぎみの平縁で「∩」文あるいは楕円文が施文されている。7・8は二条の沈線文間に地文が施文されている。7のみ地文がＲＬ縄文と判別された。

d類：口縁部が無文帯となり、体部に文様帯をもつもの。

第19図10は直立ぎみの平縁で横位沈線文が二条以上施文されている。第20図1は外反する波状口縁で口縁下部の二条の横位沈線文で口縁部と体部を区画し、体部に沈線文による渦巻文あるいは楕円文が施文されている。2は外反する波状口縁で口縁下部に沈線文が施文されている。

第20図3～7、21図1～4は体部資料である。第20図3～5は沈線文による「∩」文が施文されており、「∩」文の間に縦位沈線文が施文されている。5のみ地文がＲＬ縄文と判別された。6は二重の沈線文の間にＬＲ縄文を施文した「∩」文が施文されている。7は縦位の沈線文が施文されている、地文はＬＲ縄文である。第21図1・2は縦位沈線文が施文されている。1はＲＬ縄文、2はＬＲ縄文が施文されている。3は二条の沈線による変形楕円文あるいは「∩」文が施文されている。地文はＬＲ縄文である。4は楕円文あるいは「∩」文が施文されている。地文はＬ縄文である。

住居跡堆積土出土土器(第21図5～11、22図1～6)

隆線文及び隆沈文によって文様が施文されるもの(第21図5～10)

5は橋状の把手がつけられ、その貼付部分から隆線文が施文されている。6は隆線文による

楕円文あるいは「∩」文が施文されている。7・8は隆沈文による楕円文が施文されている。地文としてＲＬ縄文が施文されている。9・10は隆沈文による渦巻文が施文されている。地文として9はＬＲ縄文、10はＲＬ縄文が施文されている。

沈線文によって文様が施文されるもの(第21図11、22図１～５)

第21図11、22図１～４は口縁部資料である。これらは前述のものと同様にａ類、ｂ類はない。

ｃ類：第21図11、22図１～３は、11・１・２が外傾し、３が内弯する平縁で「∩」文が施文されている。地文としてはＬ縄文、他はＬＲ縄文が施文されている。

ｄ類：第21図４は外反する波状口縁である。口縁上部に沈線文が一条施文されている点で他のｄ類土器と若干異なっているが、口縁下部に二条の沈線文が施文されて口縁部と体部を区画していることからｄ類とした。体部に沈線文で楕円文あるいは渦巻文が施文される。

第22図５は体部資料である。縦位の沈線文と楕円文が施文されている。地文はＬＲ縄文である。

第22図６は、第Ⅴ群土器第２類、地文のみのものに分類される。外傾ぎみの小型の深鉢であり、口径11.5cm、底径５cm、器高10cmを計る。ＲＬ縄文の地文が施文されている。

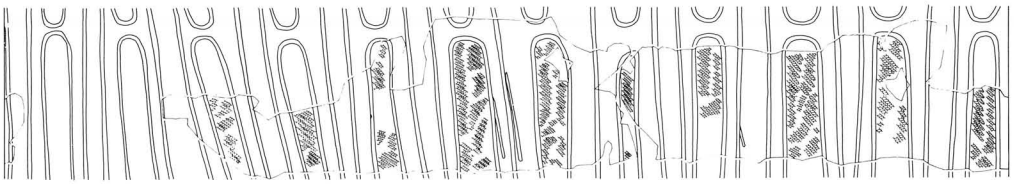
所属時期：時期決定遺物は炉土器埋設部土器、埋設土器の２点である。これらは第Ⅴ群土器で住居の所属時期は中期後葉である。

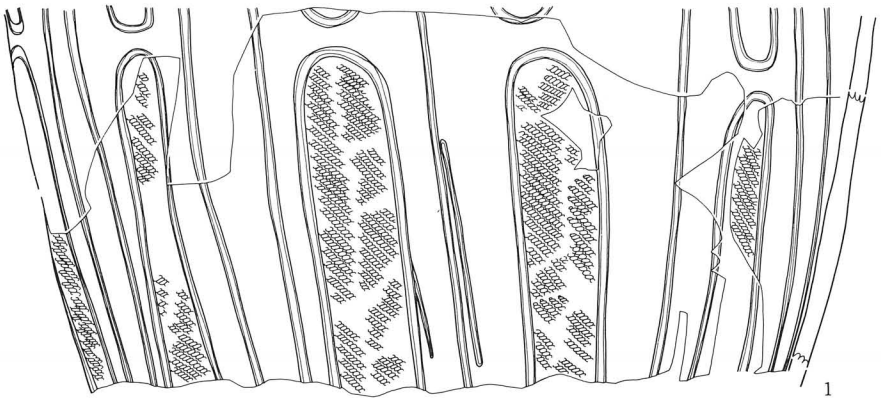
佐藤甲二・主浜光朗

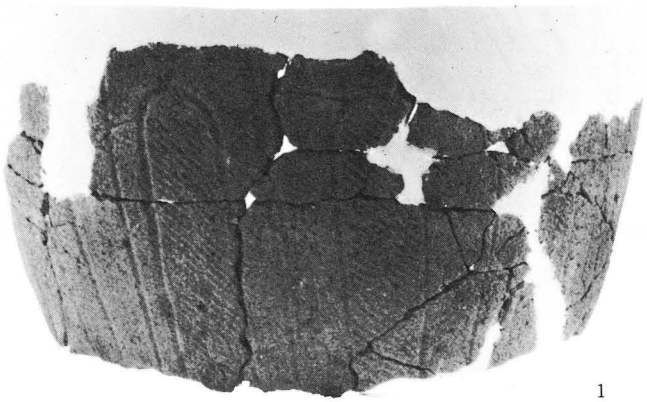
第１表　２号住居跡第Ⅴ群土器類別出土数量表

分類 / 出土位置	第１類												第２類	計
	口縁部							体部						
	a	b_1	b_2	c_1	c_2	d	不明	1	2	3	4	不明		
施設内・床面直上	—	—	—	1	4	4	2	2	—	7	23	1	1	45
堆積土	—	—	—	1	5	5	—	2	—	16	32	—	1	62
計	—	—	—	2	9	9	2	4	—	23	55	1	2	107

出土土器





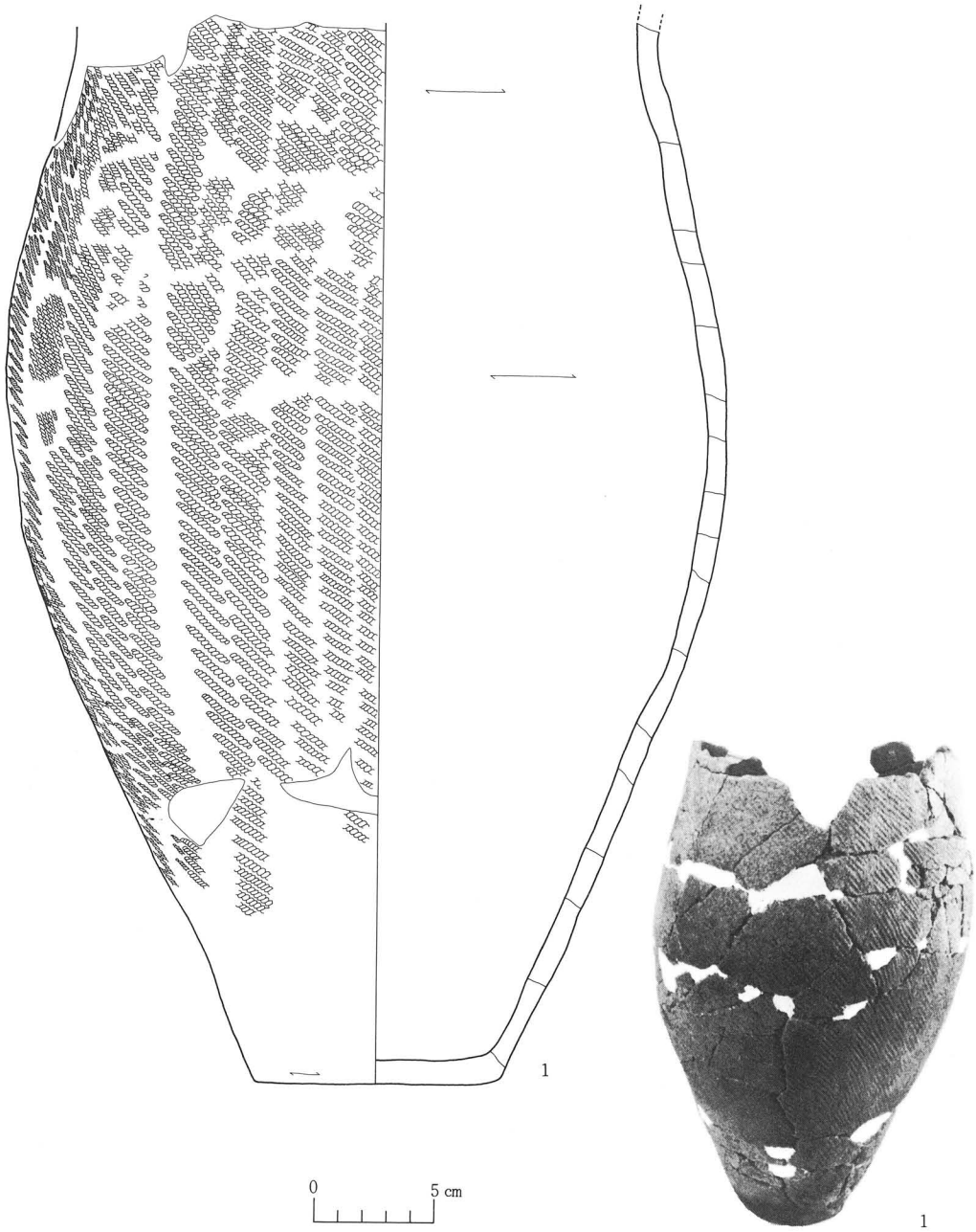


観　察　表

単位cm

図	出土地点	層位	部　位	器　形	器　高	口　径	施　文　・　調　整	分類	備　考
					——	——			
1	炉土器埋設部	——	体　部	深　鉢	底　径	最大径	縦位ＬＲ縄文→沈線文→磨き	Ⅴ1・4	内面二次加熱痕
					——	39.0			

第16図　２号住居跡出土土器（１）

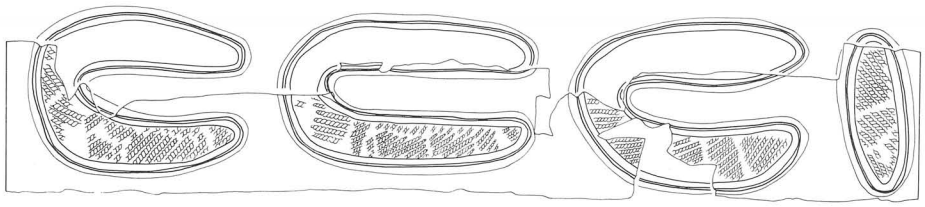


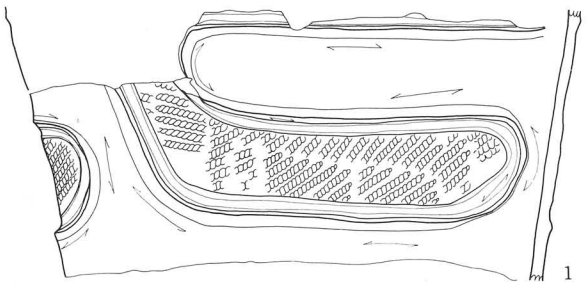
観　察　表

単位：cm

図	出土地点	層位	部　位	器　形	器　高	口　径	施　文　・　調　整	底　部	分類	備　考
					——	——				
1	炉石組部	——	体部～底部	深　鉢	底　径	最大径	縦位ＬＲ縄文→磨き	平底で磨かれている	Ｖ２	内外面二次加熱痕？
					10.0	29.5				

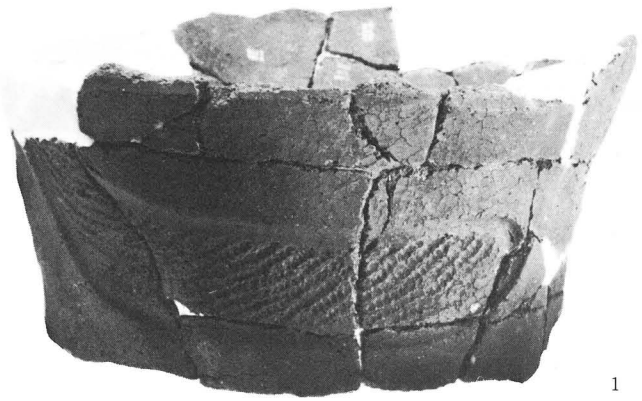
第17図　２号住居跡出土土器（２）





1

0　5 cm



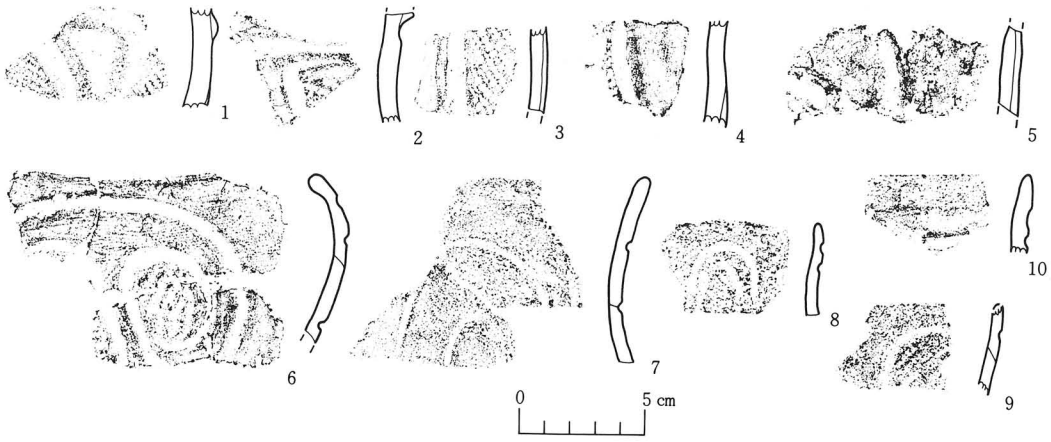
1

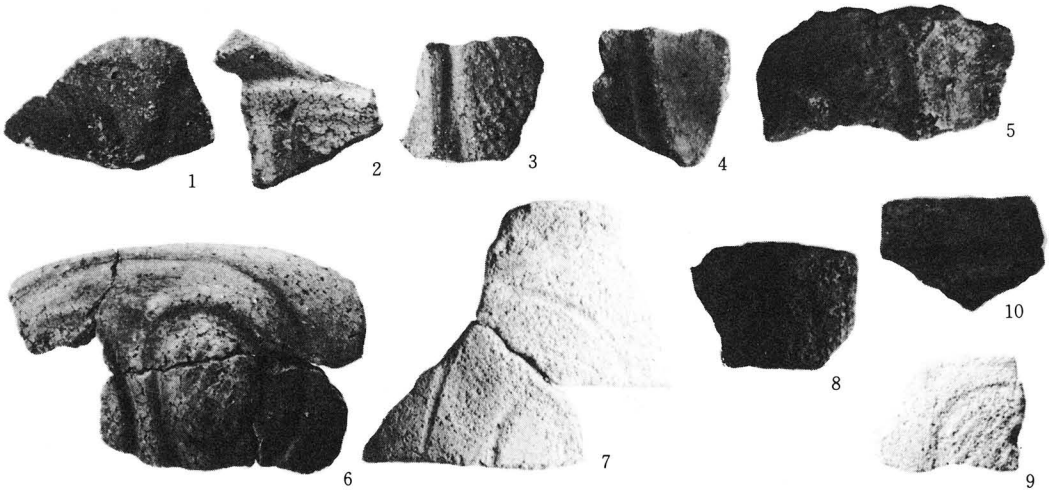
観　察　表

単位：cm

図	出土地点	層位	部　位	器　形	器　高	口　径	施　文　・　調　整	分類	備　考
					——	——			
1	埋設土器	——	体　部	深　鉢	底　径	最大径	隆線文・縦位・横位・斜位ＬＲ縄文→沈線文→磨き	V1・3	内面二次加熱痕
					——	22.5			

第18図　２号住居跡出土土器（３）

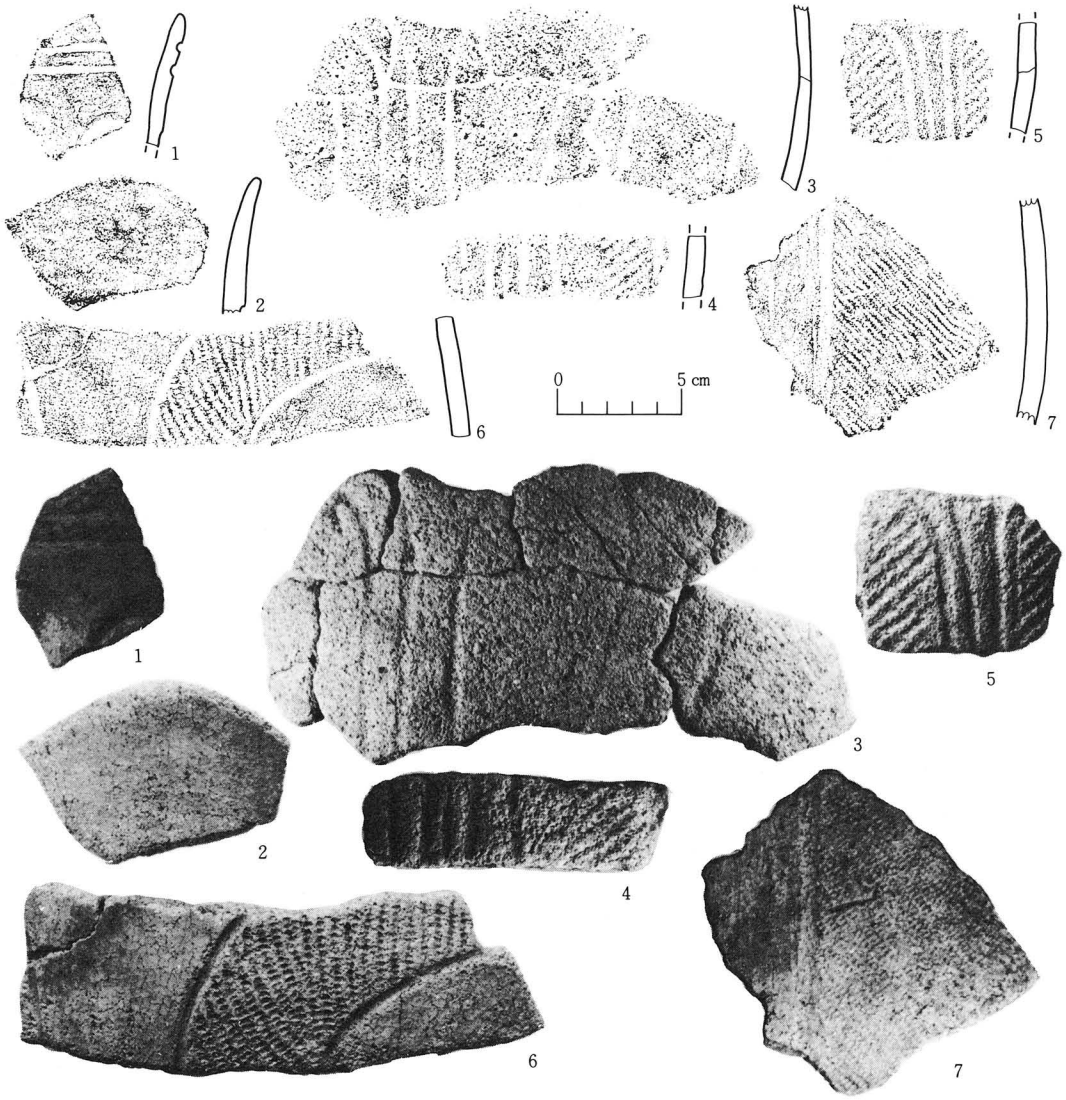




観　察　表

図	出土地点	層位	部　位	器　形	施　文　・　調　整	分類	備　　考
1	炉石組土器内	A	体　部	深　鉢	縦位ＬＲ縄文・隆線文→沈線文→磨き	V1・3	———
2	P_{14}	堆	体　部	深　鉢	縦位ＬＲ縄文・隆線文→沈線文→磨き	V1・3	———
3	P_{6}	堆	体　部	深　鉢	横位ＲＬ縄文・隆線文→沈線文	V1・3	———
4	炉	2	体　部	深　鉢	縦位ＲＬ縄文・隆線文→沈線文→磨き	V1・3	———
5	炉	1	体　部	深　鉢	縦位ＲＬ縄文・隆線文→沈線文→磨き	V1・3	———
6	P_{19}	堆	口縁部	深　鉢	縦位ＲＬ縄文→沈線文→磨き	V1c	———
7	炉掘り方	検出面	口縁部	深　鉢	不明縄文・沈線文→磨き	V1c	———
8	——	床直	口縁部	深　鉢	横位ＲＬ縄文→沈線文→磨き	V1c	———
9	炉	検出面	口縁部	深　鉢	不明縄文・沈線文→磨き	V1c	———
10	炉掘り方	埋ハ	口縁部	深　鉢	沈線文→磨き	V1d	———

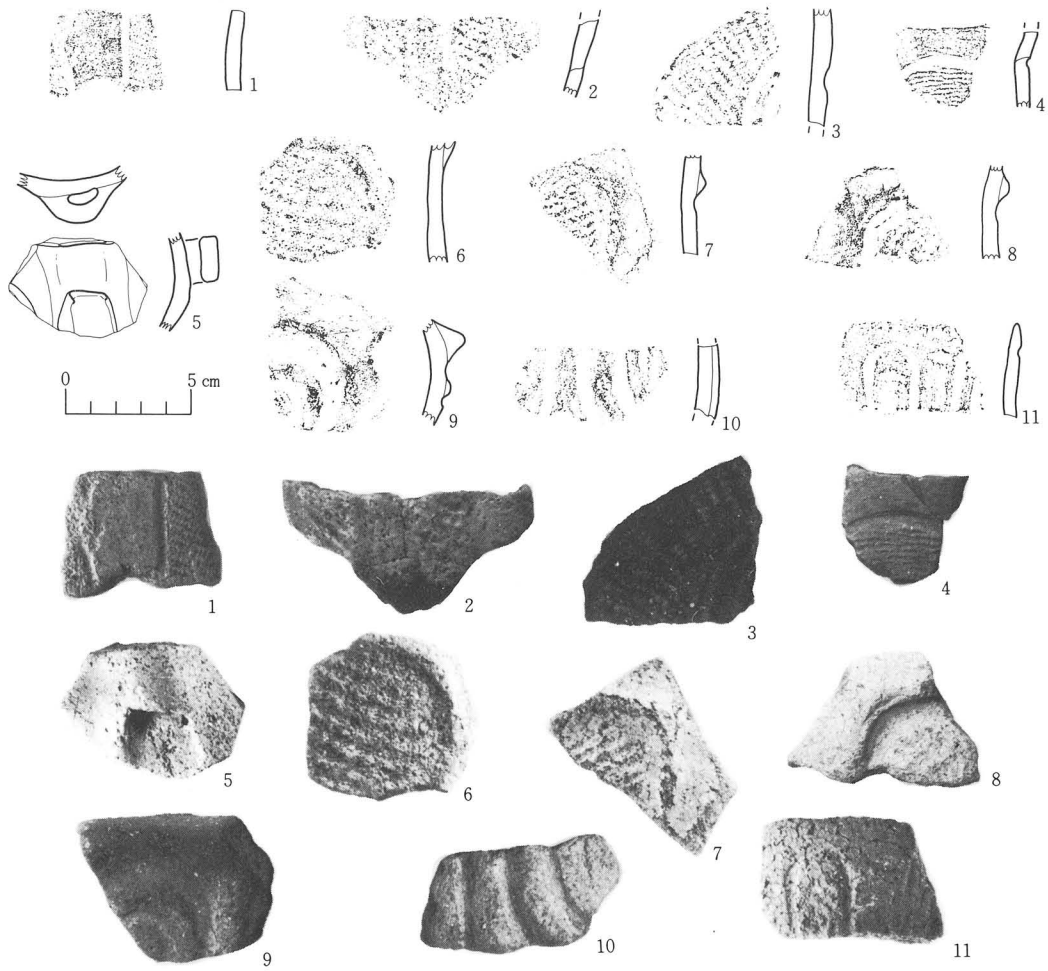
第19図　２号住居跡出土土器（４）



観　察　表

図	出土地点	層位	部　位	器　形	施　文　・　調　整	分類	備　　考
1	炉	検出面	口縁部	深　鉢	沈線文→磨き	V1d	——
2	P_{17}	堆	口縁部	深　鉢	沈線文→磨き	V1d	——
3	炉掘り方	検出面	体　部	深　鉢	不明縄文→沈線文→調整（不明）	V1·4	P－2
4	炉掘り方	検出面	体　部	深　鉢	不明縄文・沈線文→磨き	V1·4	——
5	炉石組土器内	A	体　部	深　鉢	縦位ＲＬ縄文→沈線文→調整（不明）	V1·4	——
6	炉掘り方	埋イ	体　部	深　鉢	縦位ＬＲ縄文→沈線文→磨き	V1·4	炉土器埋設部土器 外周 P－1
7	——	床直	体　部	深　鉢	縦位ＬＲ縄文→沈線文→磨き	V1·4	——

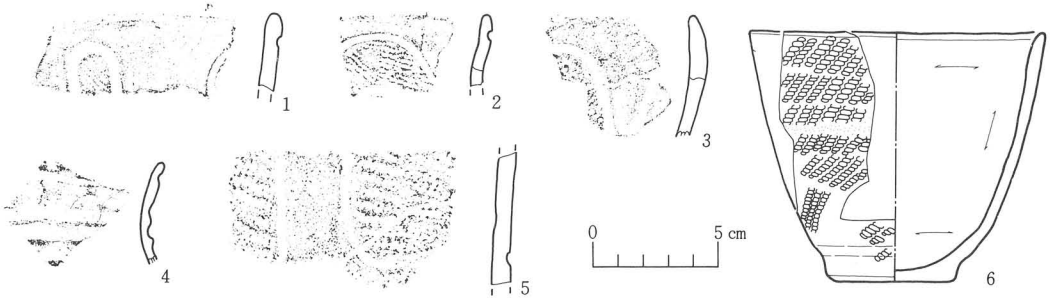
第20図　２号住居跡出土土器（５）

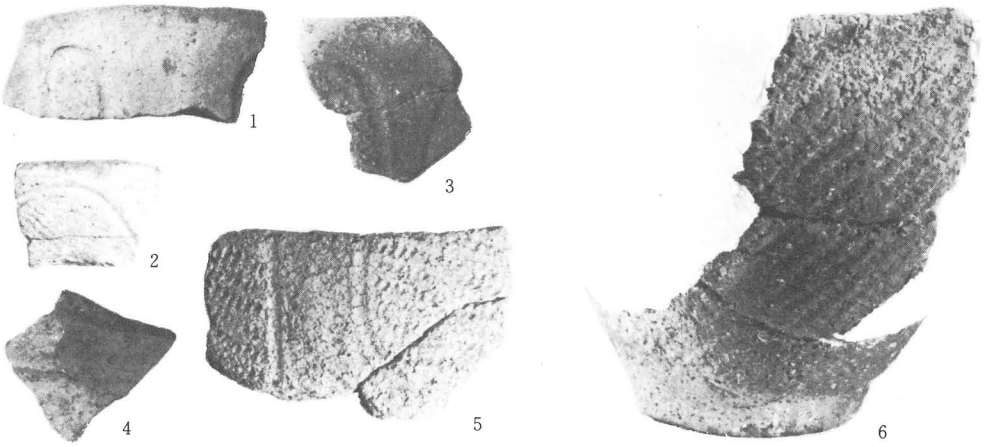


観　察　表

図	出土地点	層位	部　位	器　形	施　文　・　調　整	分類	備　　考
1	——	床直	体　部	深　鉢	横位ＲＬ縄文→沈線文→磨き	Ⅴ1・4	———
2	P_8	堆	体　部	深　鉢	横位ＲＬ縄文→沈線文→磨き	Ⅴ1・4	———
3	炉	2	体　部	深　鉢	縦位・斜位ＬＲ縄文→沈線文→磨き	Ⅴ1・4	———
4	炉	検出面	体　部	深　鉢	斜位Ｌ縄文→沈線文→磨き	Ⅴ1・4	———
5	堆積土	2	体　部	——	把手の貼付→隆線文→沈線文→磨き	Ⅴ1・3	———
6	堆積土	2	体　部	深　鉢	不明縄文・隆線文	Ⅴ1・3	———
7	堆積土	2	体　部	深　鉢	縦位ＲＬ縄文・隆線文→磨き	Ⅴ1・3	胎土中に金雲母を含む
8	堆積土	1	体　部	深　鉢	隆線文・縦位ＲＬ縄文→沈線文→磨き	Ⅴ1・3	———
9	堆積土	1	体　部	深　鉢	縦位ＬＲ縄文・隆線文→沈線文→磨き	Ⅴ1・1	———
10	堆積土	1	体　部	深　鉢	横位ＲＬ縄文・隆線文→沈線文	Ⅴ1・1	———
11	堆積土	2	口縁部	深　鉢	縦位ＬＲ縄文→沈線文→磨き	Ⅴ1ｃ	———

第21図　２号住居跡出土土器（６）



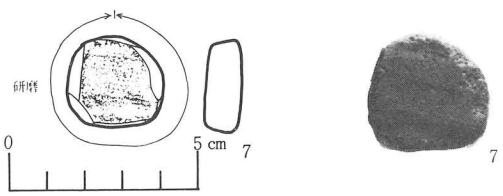


観　察　表

単位：cm

図	出土地点	層位	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	堆積土	1	口縁部	深鉢	縦位L縄文→沈線文→磨き	V1c	———
2	堆積土	1	口縁部	深鉢	横位・斜位LR縄文→沈線文→磨き	V1c	———
3	堆積土	1	口縁部	深鉢	縦位LR縄文→沈線文→磨き	V1c	———
4	堆積土	1	口縁部	深鉢	沈線文→磨き	V1d	———
5	堆積土	1	体部	深鉢	斜位LR縄文→沈線文→磨き	V1・4	———
6	堆積土	1	口縁部～底部	深鉢	器高 10.0 / 口径 (11.5) / 底径 5.0 / 縦位RL縄文 / 底部 平底、ナデ調整	V2	P_{17}出土のものと接合

出土土製品

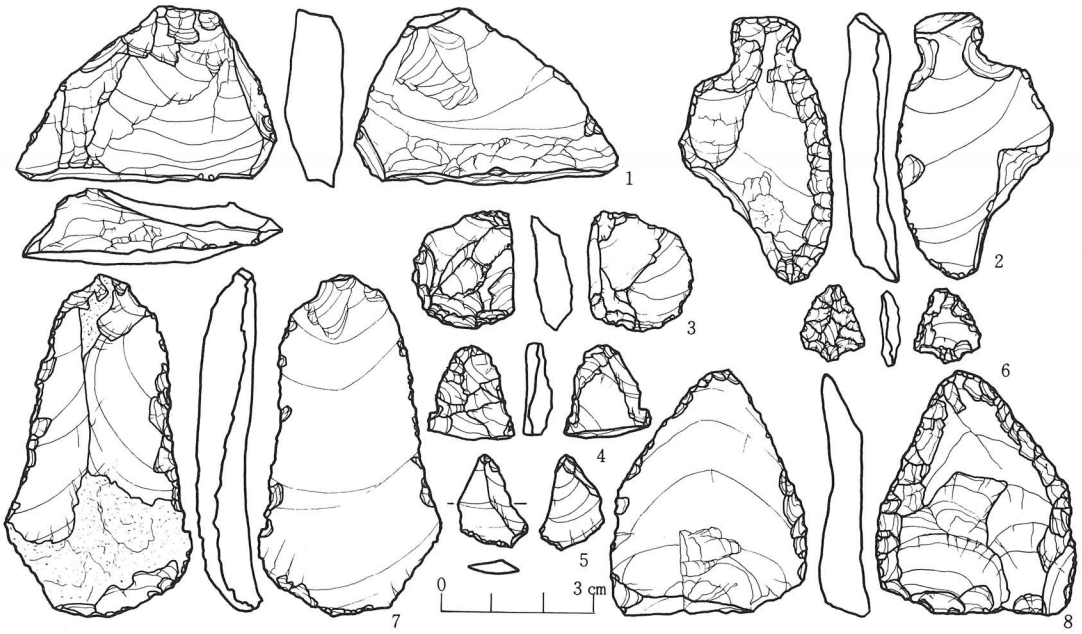


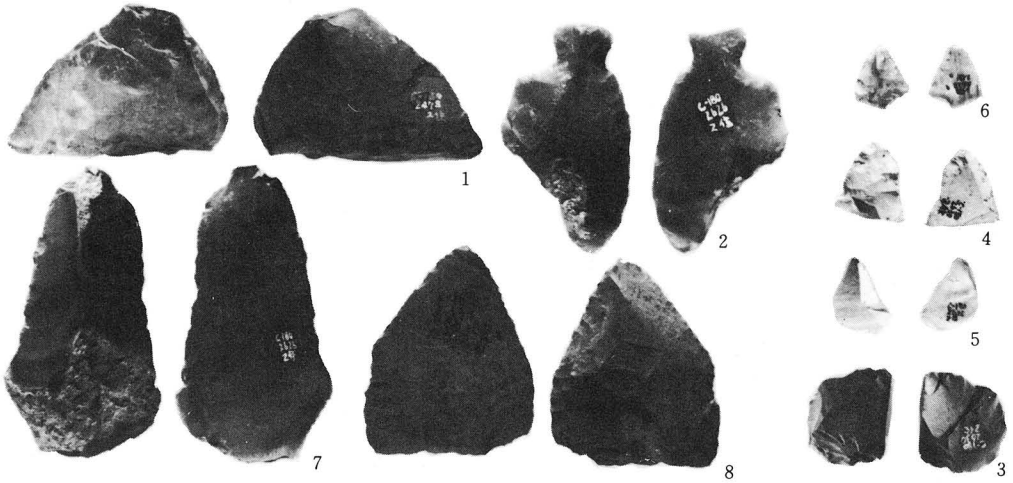
観　察　表

図	出土地点	層位	大きさ mm		厚さmm	重量g	形態	打欠回数	研磨率	部位
7	堆積土	2	小型	29×29	7	6.1	円形	———	100%	体部

第22図　2号住居跡出土土器(7)・土製品

出土石器



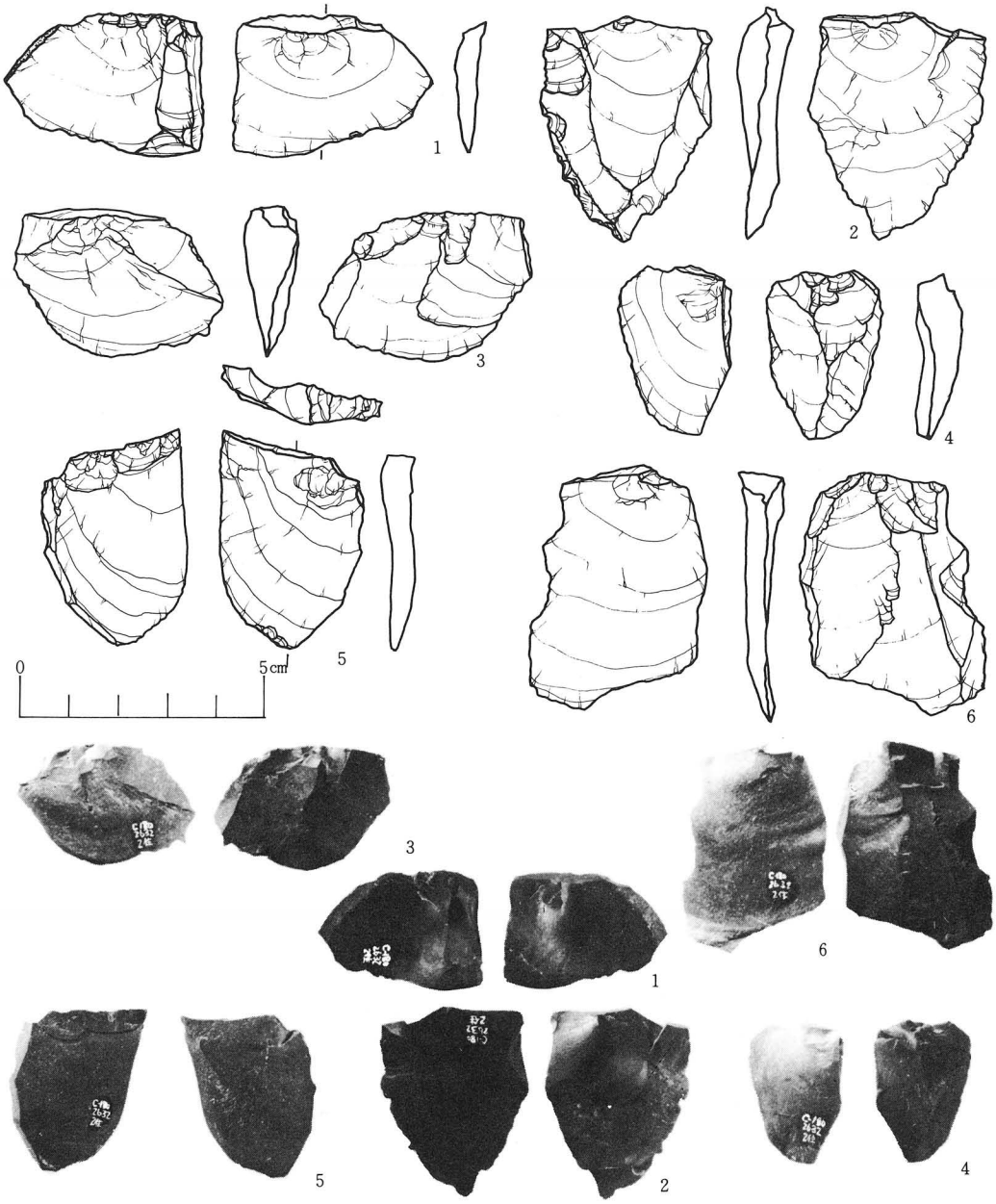


観察表

単位：mm

図	地 土 地 点	層 位	名 称	長 さ	幅	厚 さ	備 考	分類	石 材	登録番号
1	炉	検出面	S ・ F	35.0	51.5	15.0	——	Ⅵ	珪質頁岩	2478
2	炉	検出面	石 匙	52.5	30.0	8.2	——	Ⅱ	チャート	2626
3	炉掘り方	埋 ハ	ピエス・エスキーユ	23.0	20.0	7.0	——	Ⅱ	珪質頁岩	2630
4	炉掘り方	埋 ハ	スクレイパー	(19.0)	(17.0)	(5.3)	一部欠損している	Ⅹ	珪質凝灰岩	2630
5	炉掘り方	埋 イ	M ・ F	18.3	13.5	2.5	——	Ⅶ	珪質凝灰岩	2625
6	炉	2	石 鏃	15.2	12.5	3.0	——	Ⅱα②	珪質凝灰岩	2628
7	炉	1	スクレイパー	61.5	36.5	10.5	——	Ⅲ	珪質頁岩	2625
8	炉石組土器内	A	スクレイパー	48.5	39.0	8.0	背腹両面に黒色の付着物がある	Ⅱ	珪質頁岩	2679

第23図　2号住居跡 出土石器（1）

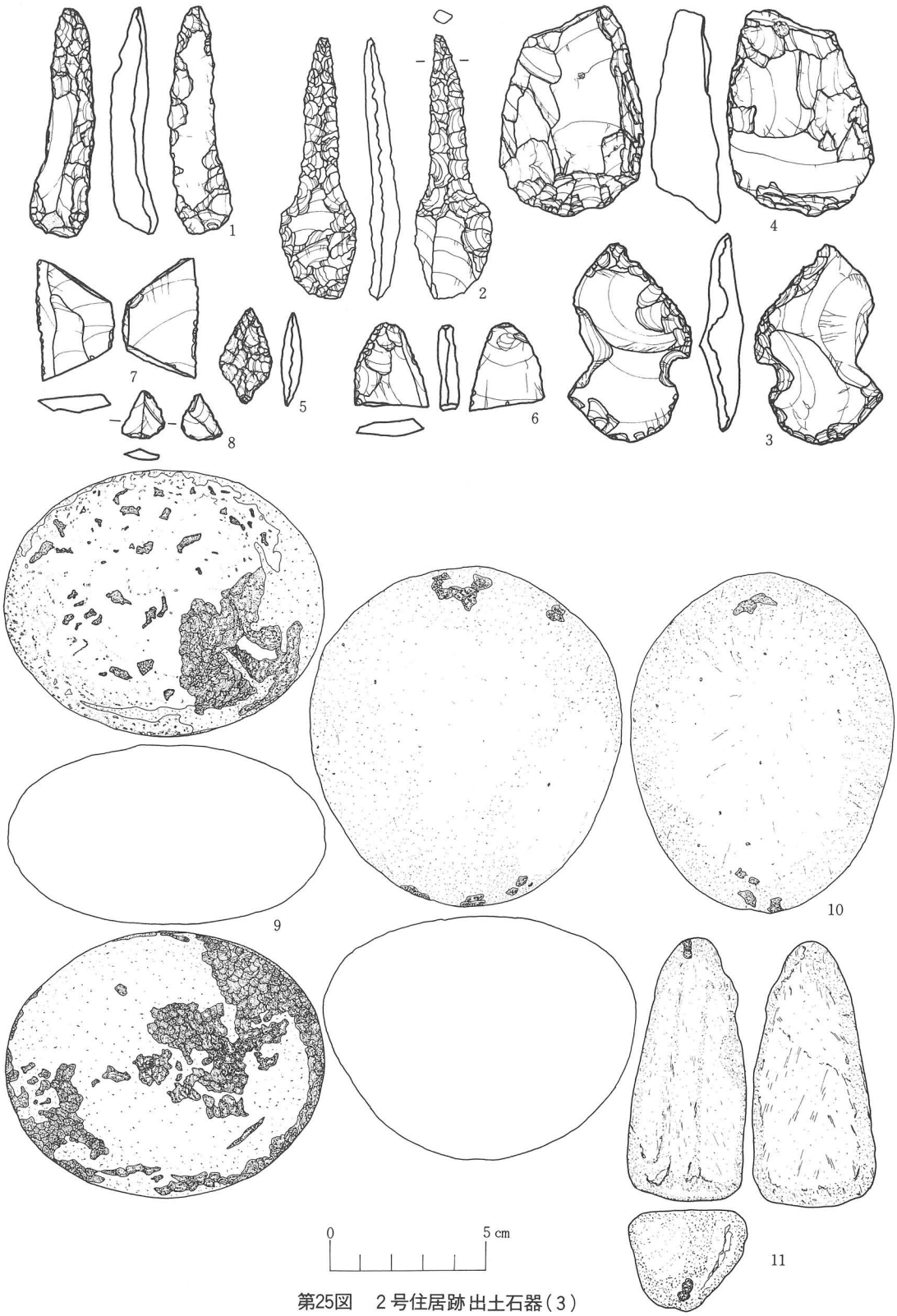


観察表

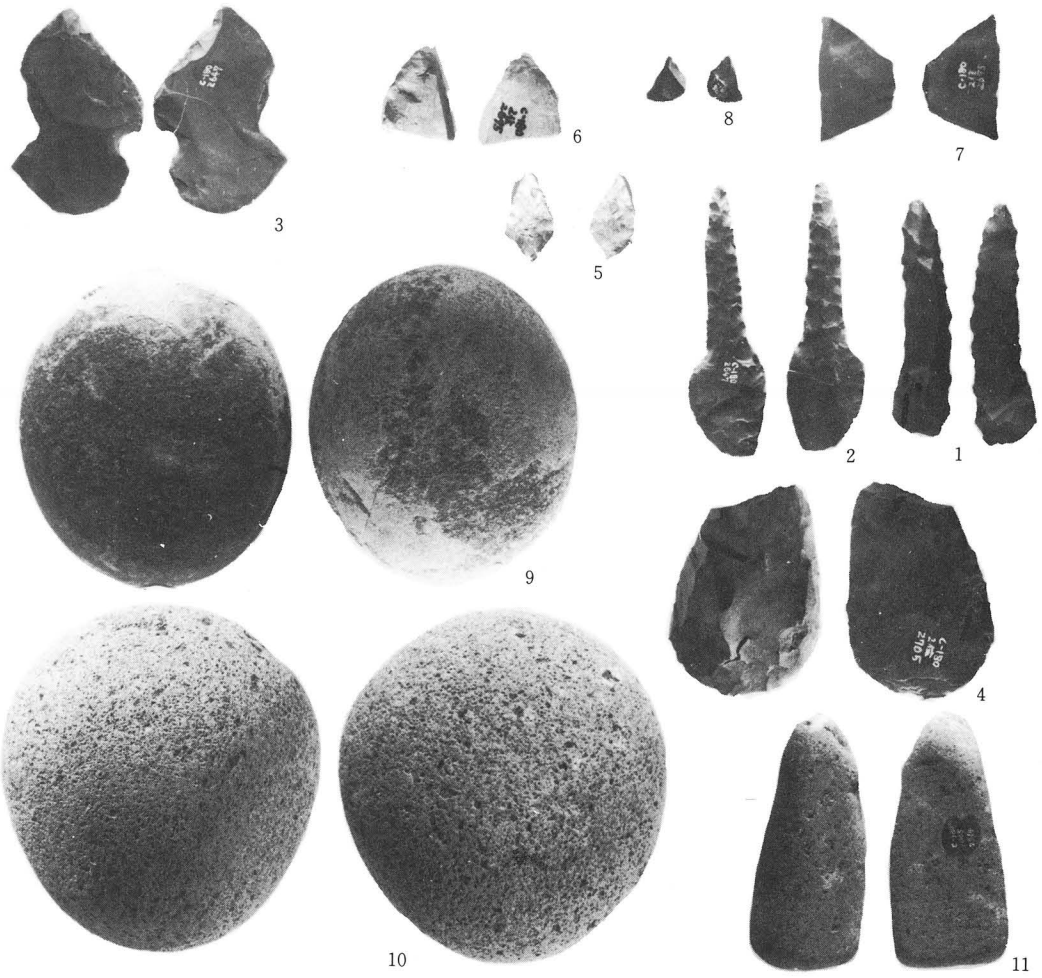
単位：mm

図	出土地点	層位	名称	長さ	幅	厚さ	備考	石材	登録番号
1	炉掘り方	埋ハ	剝片	29.0	40.5	4.5	同一母岩（分類番号 No.42）	珪質頁岩	2632－1
2	炉掘り方	埋ハ	剝片	47.0	34.7	9.0		珪質頁岩	2632－2
3	炉掘り方	埋ハ	剝片	30.5	42.6	11.0	同一母岩（分類番号 No.43）	珪質頁岩	2632－3
4	炉掘り方	埋ハ	剝片	35.0	22.0	9.0		珪質頁岩	2632－4
5	炉掘り方	埋ハ	剝片	41.5	29.2	5.0	同一母岩（分類番号 No.44）	珪質頁岩	2632－5
6	炉掘り方	埋ハ	剝片	48.5	36.0	9.5		珪質頁岩	2632－6

第24図　2号住居跡出土石器（2）



第25図　２号住居跡出土石器（３）



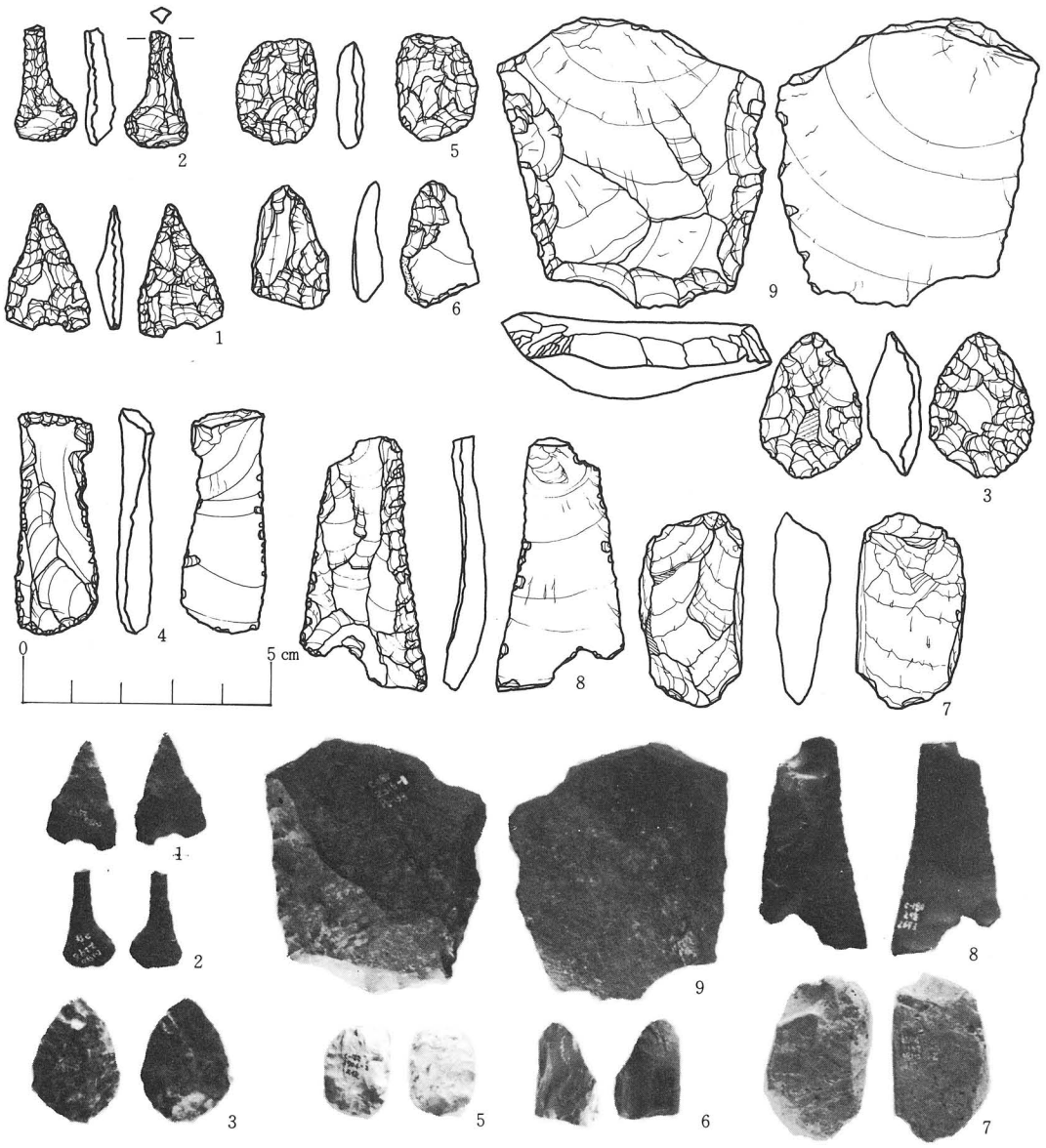
観察表

単位：mm. g

図	出土地点	層位	名称	長さ	幅	厚さ	備考	分類	石材	登録番号
1	P_{19}	堆	スクレイパー	55.0	14.5	9.0	——	Ⅱ	珪質頁岩	2485
2	M_{14}	堆	石錐	64.0	18.2	7.0	——	Ⅱa1	珪質頁岩	2647
3	M_{14}	堆	ノッチ	48.0	29.0	10.5	——	——	珪質頁岩	2647
4	——	床直	スクレイパー	51.0	34.0	16.0	——	Ⅹ	珪質頁岩	2705
5	——	床直	石鏃	22.5	12.0	4.5	——	Ⅱα③	珪質凝灰岩	2695
6	——	床直	スクレイパー	20.5	17.5	4.0	一部欠損している	Ⅹ	珪質凝灰岩	2695
7	——	床直	S・F	28.5	18.0	4.0	両端が欠損している	Ⅵ	珪質頁岩	2695
8	——	床直	M・F	11.5	9.8	2.5	——	Ⅶ	珪質頁岩	2505

図	出土地点	層位	長さ	幅	厚さ	重量	礫の形態	使用痕・他	分類	石材	登録番号
9	——	床直	102.0	85.8	57.6	730	C	敲打痕(b—1)により礫の表皮が剝落している 表皮は風化している	Ⅲ	安山岩	2709
10	——	床直	108.6	97.2	79.1	1,180	A	全面磨痕(a)がある 一部に敲打痕(b—1)がある	Ⅱ	安山岩	2708
11	P_5	堆	84.8	37.4	33.0	60	F	底面に敲打痕(b—1)	Ⅰ	安山岩	2714

第26図　2号住居跡出土石器(4)

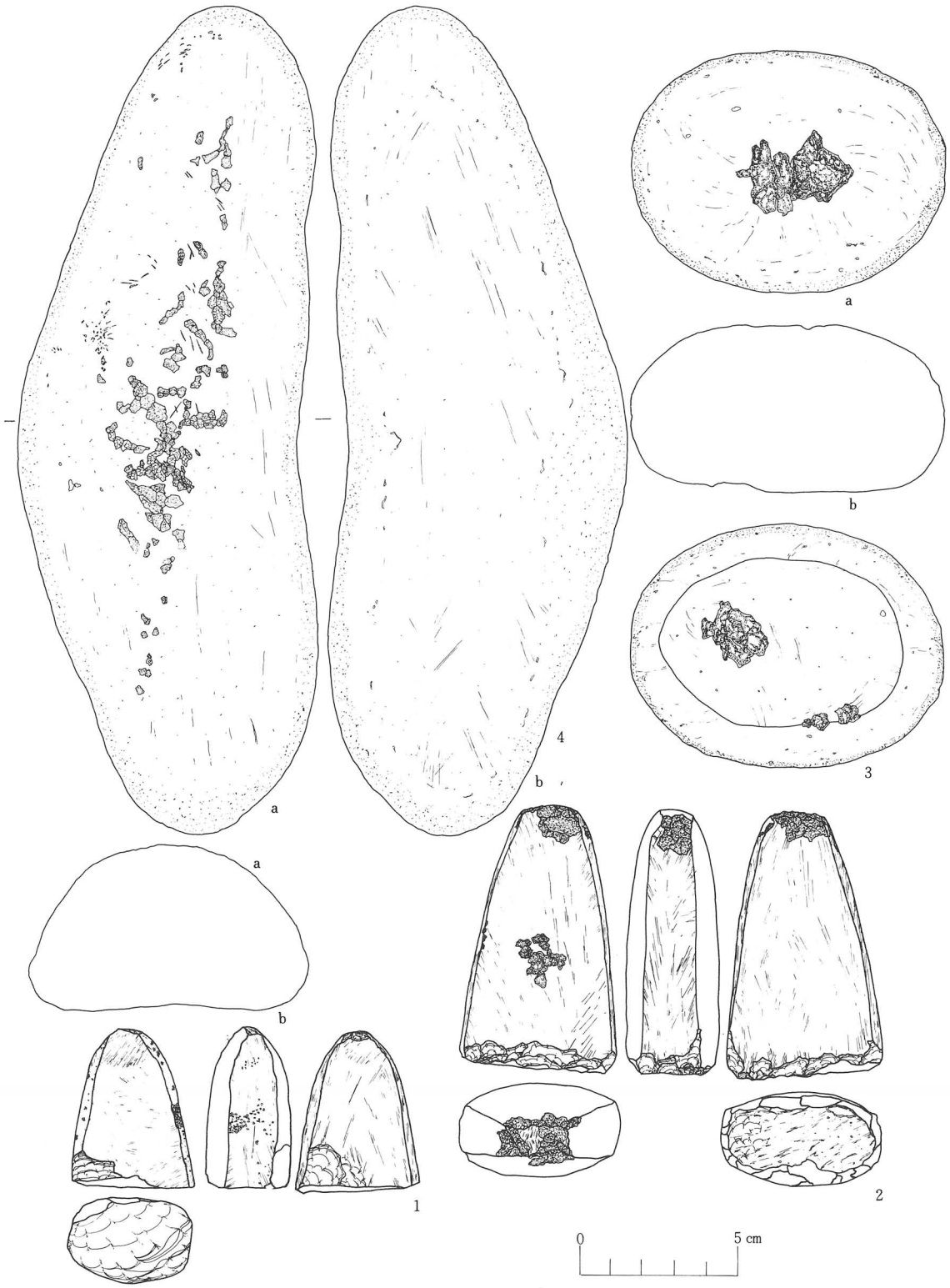


観察表

単位：mm

図	出土地点	層位	名称	長さ	幅	厚さ	備考	分類	石材	登録番号
1	堆積土	1	石鏃	26.0	18.0	5.2	脚部欠損	Ⅶω㉓	珪質頁岩	2659
2	堆積土	1	石錐	24.0	13.0	5.5	尖頭部欠損	Ⅱα1	珪質頁岩	2296
3	堆積土	1	ポイント	29.8	20.5	11.0	———	Ⅲ	チャート	2704①
4	堆積土	1	スクレイパー	45.0	17.0	6.7	———	Ⅲ	珪質頁岩	2316 Ps—140
5	堆積土	1	ピエス・エスキーユ	22.0	16.0	5.5	———	Ⅰ	珪質凝灰岩	2704②
6	堆積土	1	スクレイパー	25.0	15.5	6.2	———	Ⅹ	珪質頁岩	2700
7	堆積土	1	ピエス・エスキーユ	39.2	22.0	11.5	———	Ⅱ	珪質凝灰岩	2412 Ps—179
8	堆積土	1	スクレイパー	(52.5)	(25.0)	(6.3)	一部欠損	Ⅲ	珪質頁岩	2693
9	堆積土	1	スクレイパー	59.0	52.5	15.8	———	IF	珪質頁岩	2316 Ps—138

第27図　2号住居跡出土石器(5)



第28図　2号住居跡出土石器(6)

観　察　表

単位：mm、g

図	出土地点	層位	長さ	幅	厚さ	欠損部	備考	分類	石材	登録番号
第28・29図1	堆積土	1	(51.3)	(39.3)	(26.7)	Ⅱ・Ⅲ	——	Ⅱb	安山岩	2412
第28・29図2	堆積土	1	(85.0)	(50.0)	(30.0)	Ⅲ	基部A、Ⅱの胴部片面の中央部B、欠損面に磨痕(a)	Ⅱa	安山岩	2316 Ps−133

図	出土地点	層位	長さ	幅	厚さ	重量	礫の形態	使用痕・他	分類	石材	登録番号
第28・29図3	堆積土	1	99.0	78.0	53.5	590	C	a・b両面の中央部に磨痕(a)と敲打痕(b−2)	Ⅲ	安山岩	2316 Ps−137
第28・29図4	堆積土	2	395.0	142.0	76.0	6,000	G	a・b両面に磨痕(a)、a面、凸面に敲打痕(b−1〜b−2)	Ⅵ−1	砂岩	2424

第29図　2号住居跡出土石器(7)

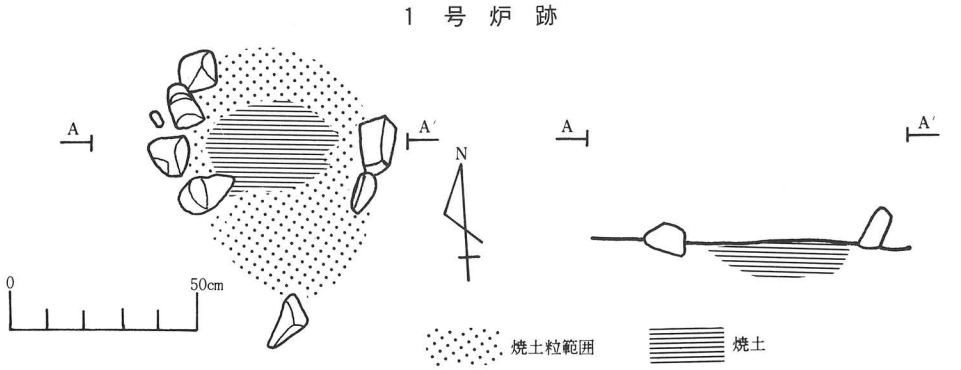
1号炉跡(第30図)

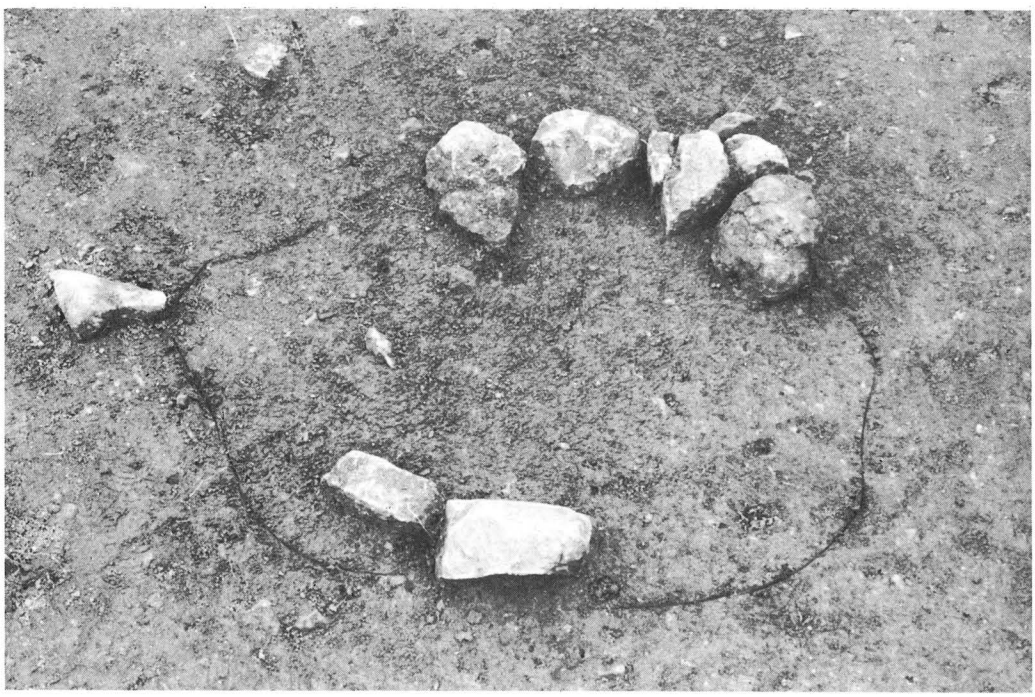
K－13グリッド北西側に位置し、Ⅳb層上部で単独で検出された。約65cmの円形範囲に焼土粒、木炭粒がひろがり、内側には内面が強く焼けた15cm前後の角礫が西側に4個、東側に2個、浮いた状態で南側に1個並んでいた。礫の内面には焼土面がみられる。

検出礫より推定するに、礫外周径60cmのほぼ円形を呈する石囲いの炉であったと思われる。礫の掘り方は明確ではなかったが、ほぼ礫の大きさと大差ないと考える。

出土遺物は皆無であったが、ほぼ同一検出面西側で、1・2号埋設土器(後期初頭)、東側で3号土壙(中期末葉)が検出されており、そのいずれかの時期に所属するかと思われる。

佐　藤　甲　二





第30図　1号炉跡平面図

1号・2号埋設土器(第31～33図)

K－12グリッド北東隅に位置し、Ⅳb層上部で隣接して検出され、両土器ともⅣb層中に南東側(1号)、北東側(2号)にやや倒れた状態で斜位に出土した。1号埋設土器(第32図)は上部がかなりくずれた状態で、口縁部を欠失する。2号埋設土器(第33図)は北東側がボロボロで、わずかに土器の輪郭を残すような状態であった。ともに深鉢形土器で、底部に焼成後の外面からの穿孔がある。検出面、2号埋設土器内には、15cm前後の角礫がみられるが、K－12グリッドⅥa層からⅣb層中にかけて、同じ大きさの自然礫が多く含まれており、自然のものか、人為的なものなのかは判別出来なかった。両土器ともこれに伴う掘り方、遺構は検出出来なかった。

土器内堆積土はともに黒褐色(10YR2/3)粘土質シルトの単層で、若干の炭化粒、焼土粒を含む。礫を除いては出土遺物はない。2号埋設土器内堆積土底部付近のリン分析結果(507頁参照)では、P_2O_5が基本層Ⅳa・Ⅳb層より多少高い値を示しており、底部穿孔をも考え合わせるに、1・2号埋設土器は単棺墓の可能性も十分に考えられる。

所属時期は1号埋設土器が第Ⅷ群土器であることより、1・2号埋設土器とも後期初頭である。

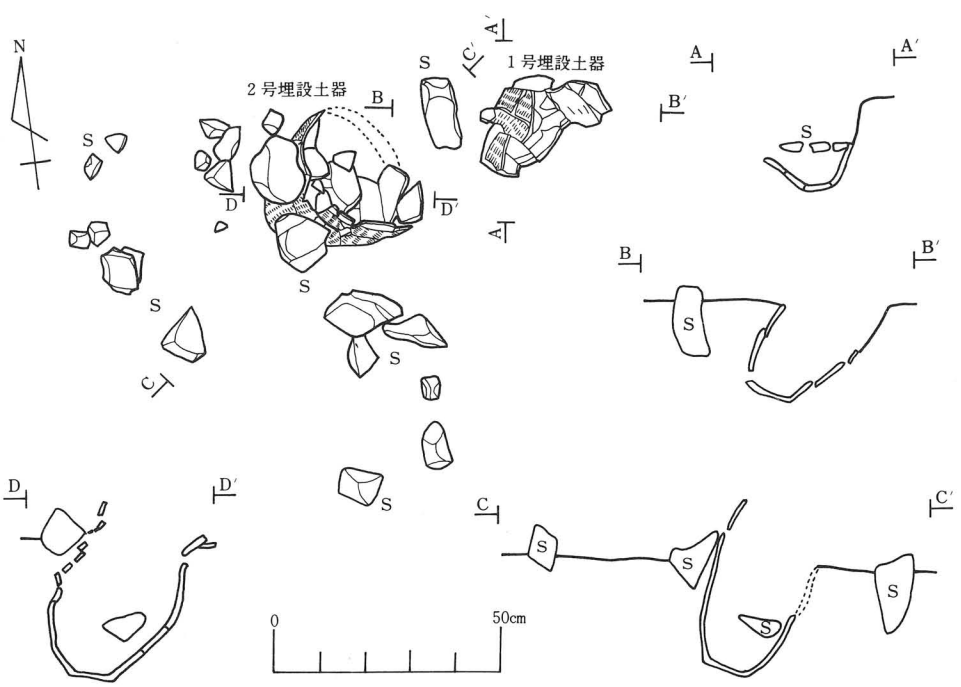
3号埋設土器(第34～38図)

P－11グリッド北西隅に位置し、Ⅵ層上面で検出された。上部、南側を木の根によってかなり破壊されている。体部上半が崩れた状態の深鉢形土器が、上端最長部約1m、深さ約15cmの土壙西側に埋設され、土壙東側上部には10～20cmの円礫、角礫が11個集中して出土した。集中礫には積み方に規模性がなく、上面、下面が木の根によって攪乱されていることより、原位置は保たれてないが、当遺構に伴ったものと考えられる。埋土は細別2層からなるが、土器周辺の1a層が1b層より多少汚れている程度でほぼ同質であり、土器設置後、土壙全体に埋土が入れられたと考えられる。

出土遺物は、検出面、埋土中より土器片30点、石器3点が出土している。埋設土器内からは当土器の破片以外は出土していない。尚、11個の集中礫中には、磨痕のある凹石1点(第38図2)大型の敲打痕・磨痕のある礫1点(第37図3)が含まれる。

所属時期は埋設土器が第Ⅵ群土器であることより、中期末葉である。

佐　藤　甲　二



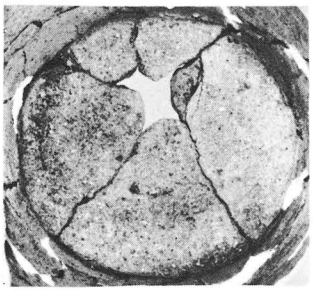
第31図　1号・2号埋設土器平面図

出土土器

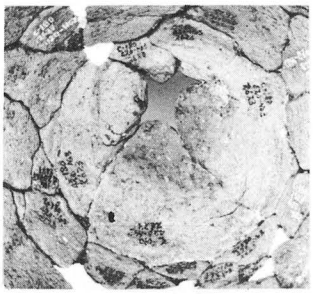
0　5 cm

1

底部写真



外面



内面

1

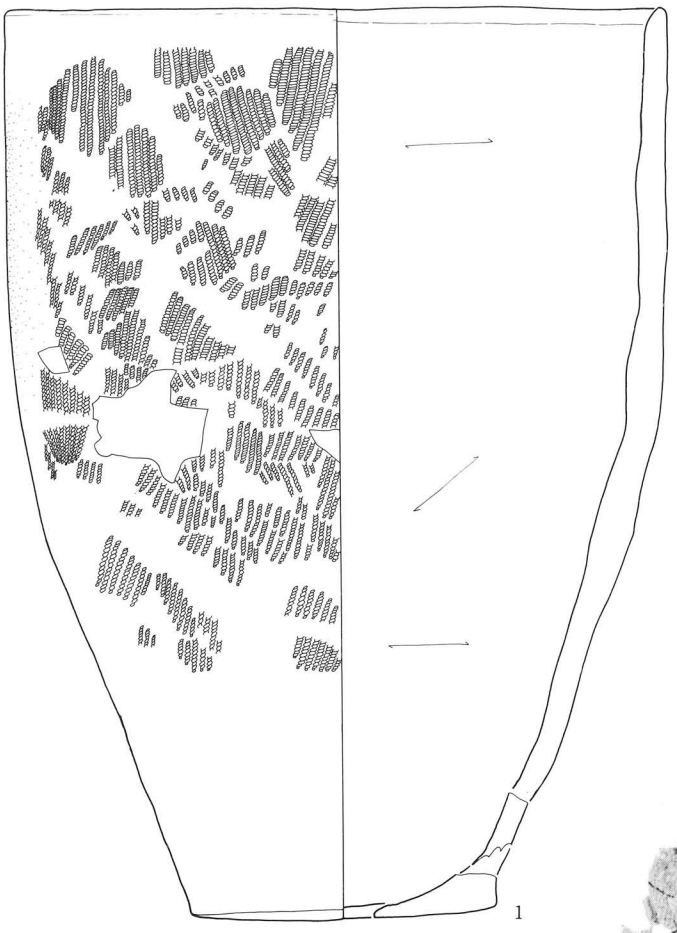
観　察　表

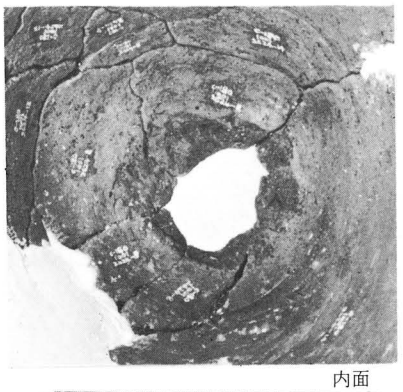
単位：cm

図	遺構名	層位	部位	器形	残存高	底径	施文・調整		分類	備考
					35.7	11.0		底部		
1	1号埋設土器	Ⅳb層上部確認	体部～底部 体部½欠損	深鉢Ⅳ？	最大径 29.7(体部上半)		横位LR縄文→弧状沈線間磨消縄文(単位間連結)＋盲孔(輪形隆文？)＋縦位波状沈線文	研磨 穿孔	Ⅷ1a＋1b	地文の原体は太さの異なるものを撚り合せている。焼成後底部外面より穿孔

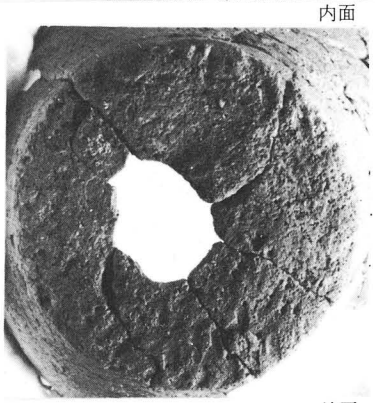
第32図　1号埋設土器

底部写真





内面



外面

0　5 cm

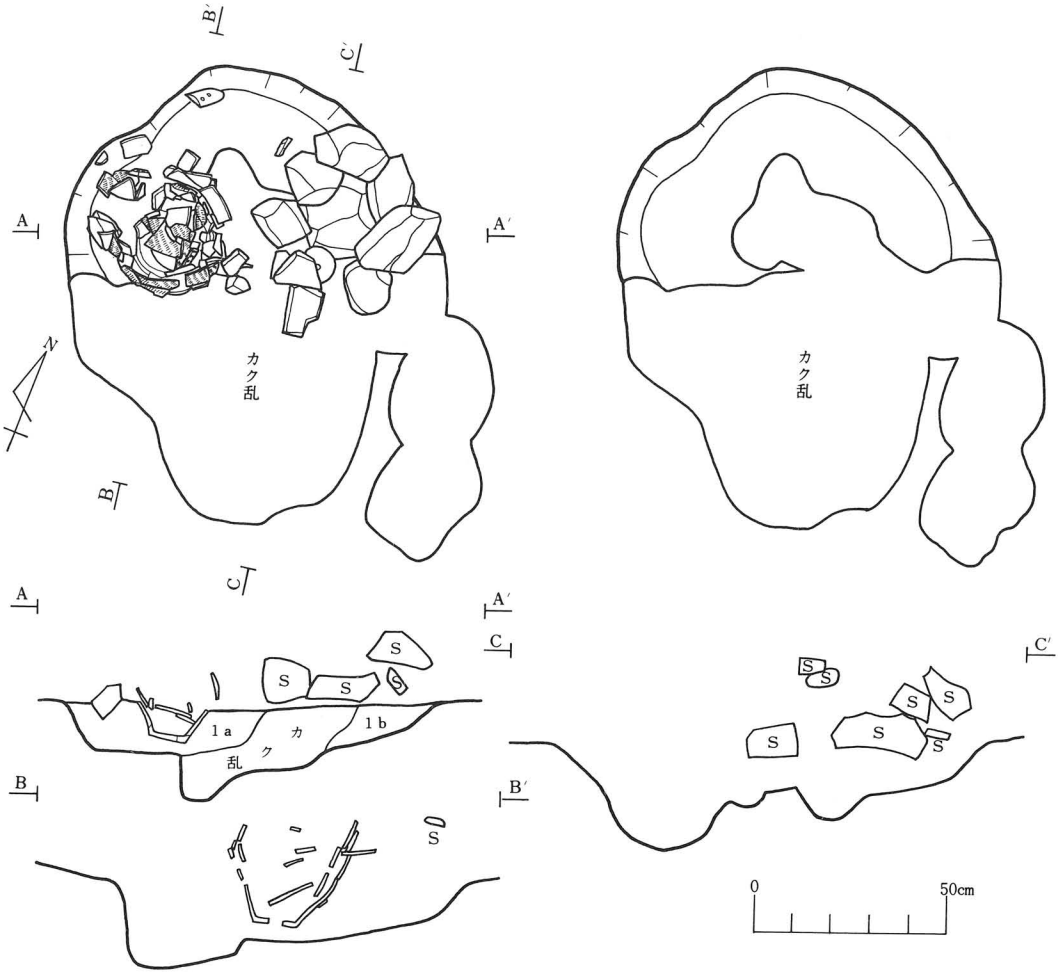
観　察　表

単位：cm

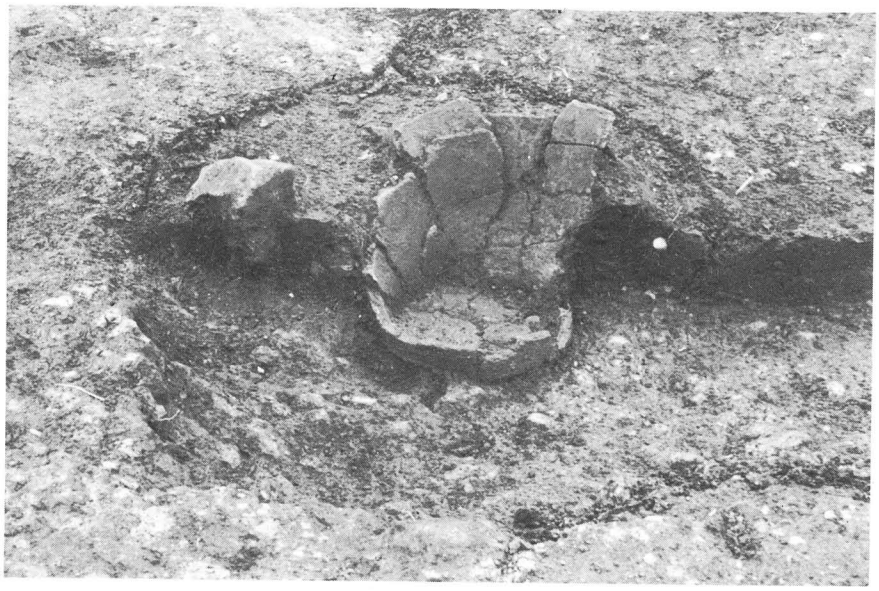
図	遺構名	層位	部位	器形	器高	口径	施文・調整	底部	分類	備考
					36.3	26.1				
1	2号埋設土器	Ⅳb層上部確認	口縁部・体部の¼欠損	深鉢	底径	最大径	縦位RL縄文(2段3条)→横位研磨(口縁部・体下部)	編物痕→研磨	X1a	0.5~2mmの砂粒多(白色粒含)
					12.0	26.1	(内面)体部上半：横位削り→研磨・下半：斜位削り→研磨	穿孔		焼成後底部外面より穿孔

第33図　２号埋設土器

3号埋設土器



第34図　3号埋設土器平面図



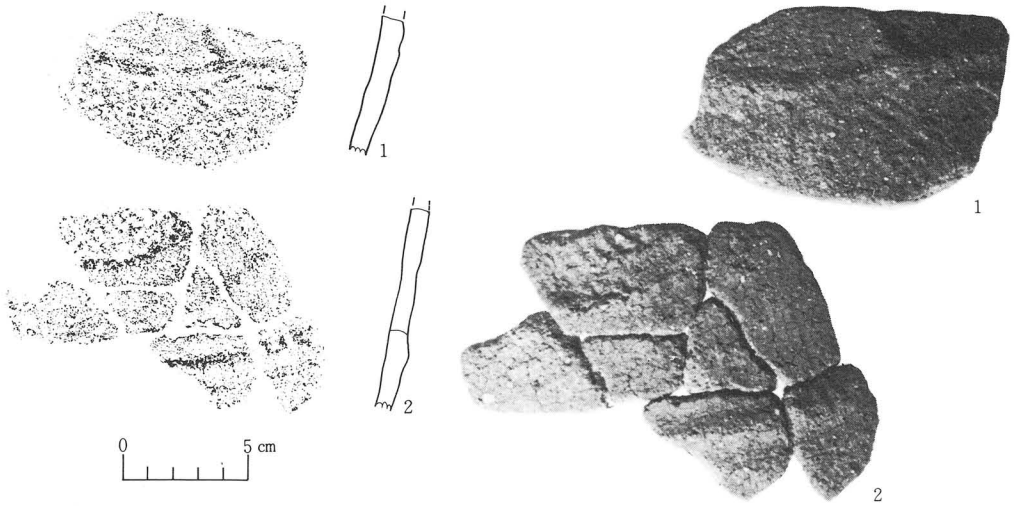
3号埋設土器土層註記表

埋土	色調	土質	粘性	しまり	備考
1a	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	やや強い	やや良	炭化粒少量。凝灰岩粒。焼土粒少量。
1b	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	やや強い	やや良	1a層と同質だが、炭化粒、焼土粒ほとんど含まず。

3号埋設土器出土遺物数量表　※（ ）内数値は復元土器数

遺物／埋土	土器						石器				備考
	復元土器	口縁部	体部	底部	群別 Ⅵ	群別 不明	スイクバレー	剝片	礫石器 Ⅲ	礫石器 Ⅳ－1	
検出面	—	—	2	—	—	2	1	—	1	1	埋土1b層は無遺物層
1a	1	2	26	—	2(1)	17	1	1	—	—	

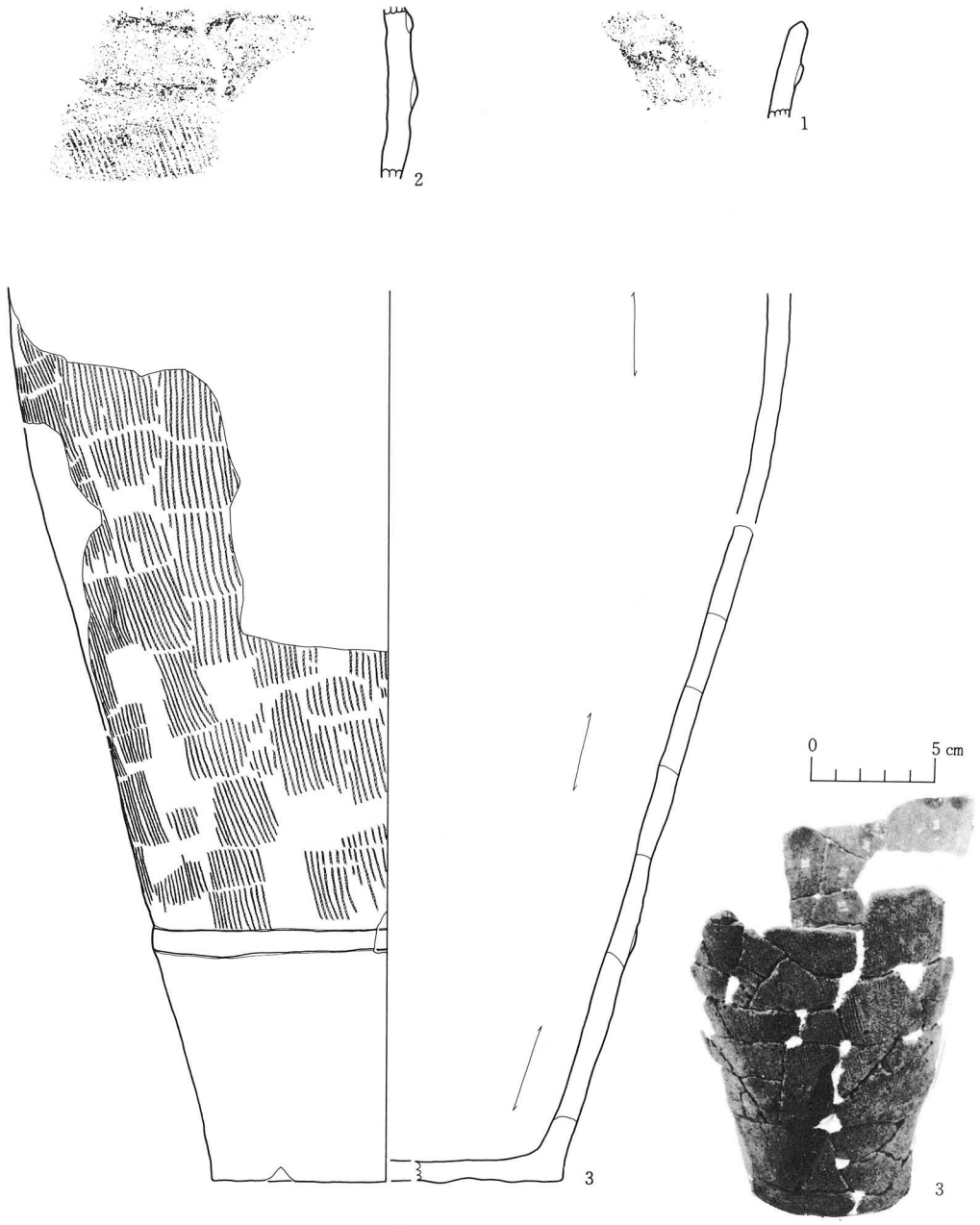
出土土器



観察表

図	遺構名	埋土	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1・2	3号埋設土器	1a	体部	深鉢	隆線文→縦位ＬＲ縄文→磨き	Ⅵ1b or c	同一遺物

第35図　3号埋設土器出土土器



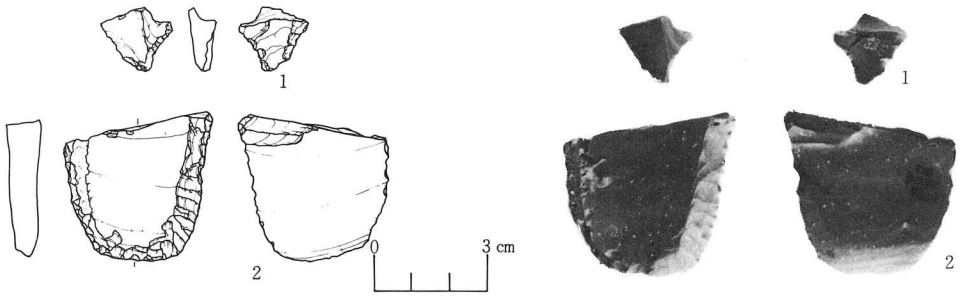
観　察　表

単位：cm

図	遺構名	埋土	部位	器形	底径	施文・調整	底部	分類	備考
					14.5				
1・2・3	3号埋設土器	1a (1・2は土器内)	口縁部欠損 体部½欠損	深鉢	最大径 (32.5)(体部上半)	縦位R撚糸文→隆線文→調整(不明)	摩滅のため不明	Ⅵ1b or c	同一遺物？

第36図　3号埋設土器

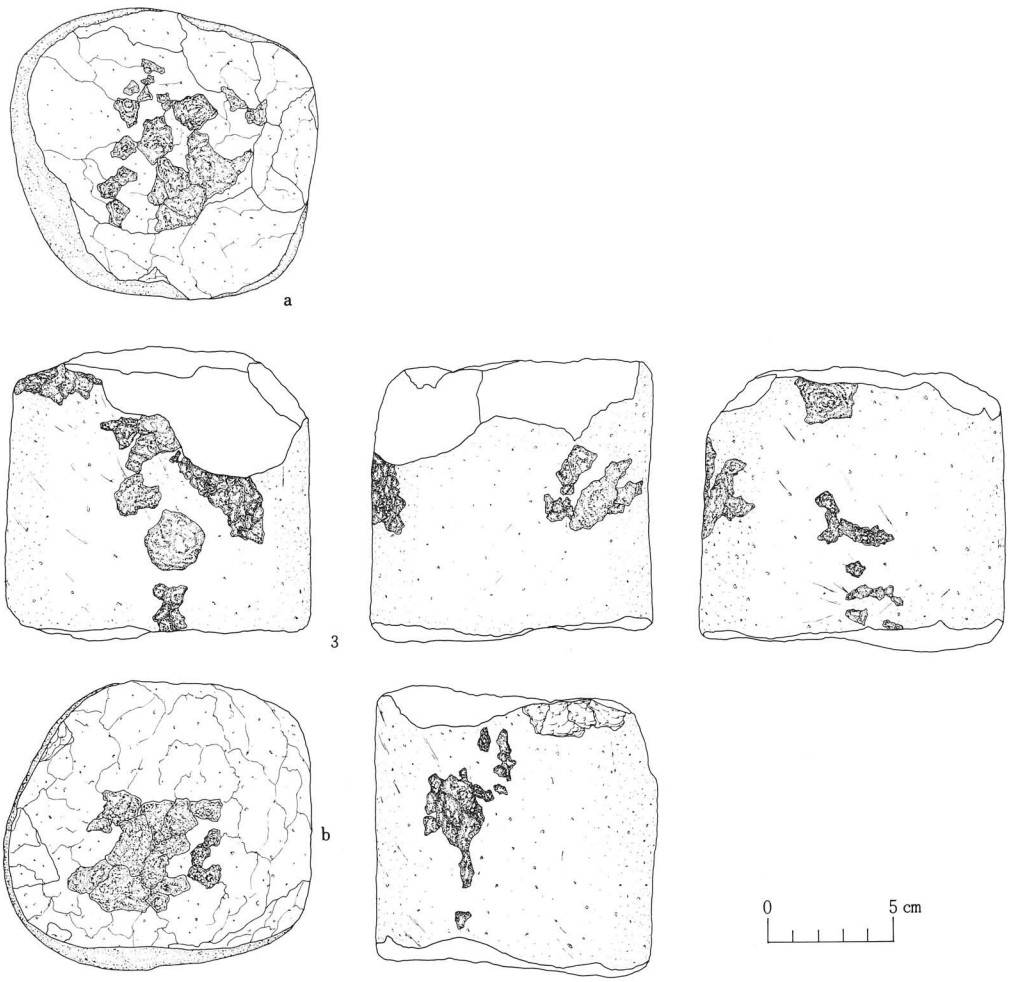
出土石器



観察表

単位：mm

図	遺構名	埋土	名称	長さ	幅	厚さ	備考	石材	登録番号
1	3号埋設土器	1 a	スクレイパー	(17.5)	(18.0)	(7.0)	欠損	珪質頁岩	2355
2	3号埋設土器	検出面	スクレイパー	40.5	40.0	8.0	欠損後一部調整	珪質頁岩	2586

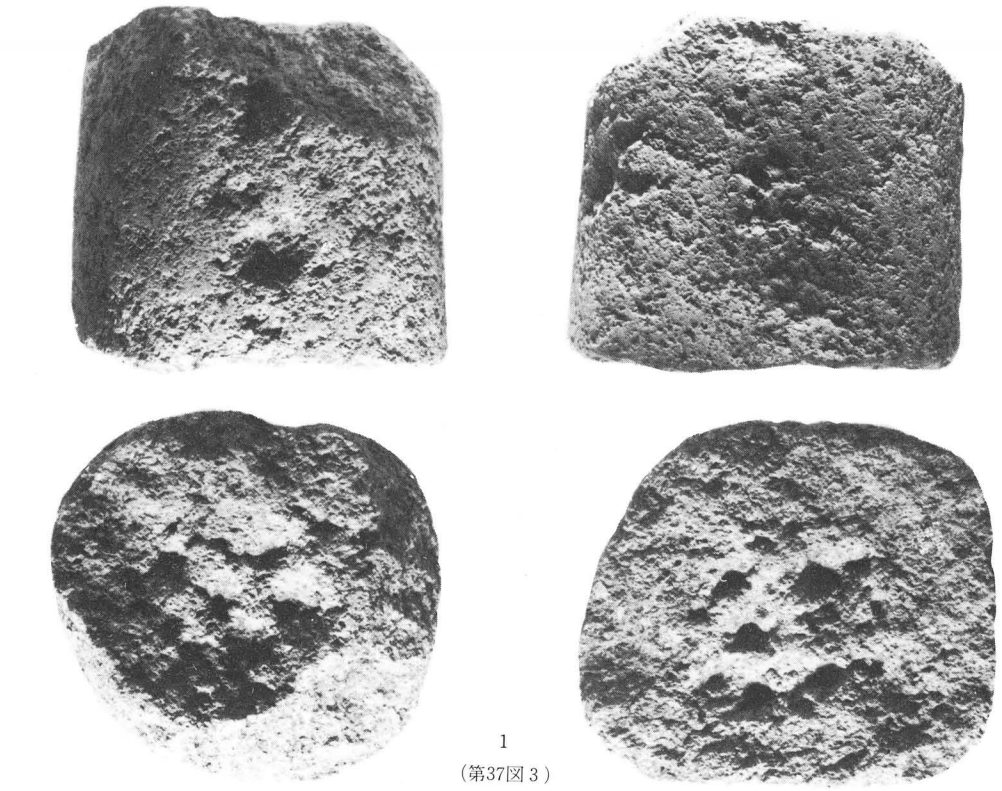


観察表

単位：mm.g

図	遺構名	埋土	長さ	幅	厚さ	重量	礫の形態	使用痕・他	分類	石材	登録番号
第37図3 第38図1	3号埋設土器	検出面	115.0	121.5	111.5	1950	G	a、b面に深い敲打痕(b－2) 側面はほぼ全面磨痕(a) 数ヶ所にやや深い敲打痕(b－2)	Ⅵ－1	凝灰岩	2345

第37図　3号埋設土器出土石器(1)



観 察 表

単位：mm.g

図	遺構名	埋土	長さ	幅	厚さ	重量	礫の形態	使用痕・他	分類	石材	登録番号
2	3号埋設土器	検出面	111.5	84.0	47.5	610	C	a、b両面に磨面(a)と敲打痕(b－2) 側面に敲打痕(b－1)	Ⅲ	安山岩	2344

第38図　3号埋設土器出土石器(2)

4号ピット(第39～40図)

K－7グリッド北西側に位置し、Ⅵ層上面で検出された。上端長軸規模37cm、上端平面形楕円形、下端平面形円形、深さ20cmのピットである。堆積土は単層である。

底面上約10cmで、ほぼ完形の小型浅鉢形土器が1点横位で出土した。土器の表面には赤色顔料が塗られている。リン分析の結果では(507頁)、P_2O_5は土器内、土壙内で特に多いという結果は得られなかった。小型浅鉢形土器はピット上面に置かれていたものが、落ち込んだことも考えられる。

他に小土器片8点(第Ⅵ群土器を含む)が出土したが、混入遺物と考える。小型浅鉢形土器の所属時期には後期初頭、後期前葉のいずれに属するか決し難い点もあるが、一応広義の後期前葉の土器として位置づけたい。従い土器の所属時期より、当土壙は後期前葉に属する。

5号ピット(第40～41図)

O－10グリッド北西隅に位置し、Ⅵ層上面で検出された。上端長軸規模70cm、上端・下端平面形とも不整楕円形で、中段(不整円形、径40cm)を持つ深さ68cmの深いピットである。上端は崩落している可能性もあり、本来上端は下端と中段との延長上にあり、円形に近い形状を呈していたとも考えられる。堆積土は3層から成るが、堆積土2層出土の土器片と、堆積土3層出土の土器片が接合(第41図2)している点より、堆積土2・3層の堆積にはほとんど時間的差異はないと考えられる。

遺物は各堆積層より土器片18点、石器11点(全てフレークとチップ)が出土している。

堆積土2・3層出土の観察可能な土器片の全てが第Ⅴ群土器であることより、当ピットは中期後葉に属する。

3号土壙(第42～44図)

K－13グリッド北側に位置し、Ⅳb層上部で検出された。2号住居跡の北東側を一部切っている。上端長軸規模70cm、上端・下端平面形とも楕円形、深さ52cm、長短軸断面ともU字形を呈する深い小型C類の土壙である。

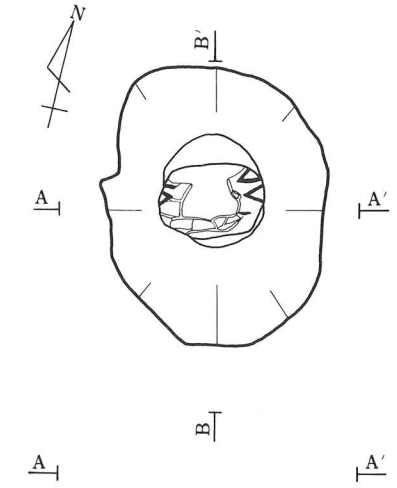
Ⅳb層上部で土器片を中心とした遺物の集中がみられ、遺物を取り除いた段階で遺構上面プランが検出された。堆積土は単層で、人為的に埋め戻された様相を示している。従って遺物は土壙埋めたて後に上面に置かれたとも考えられる。

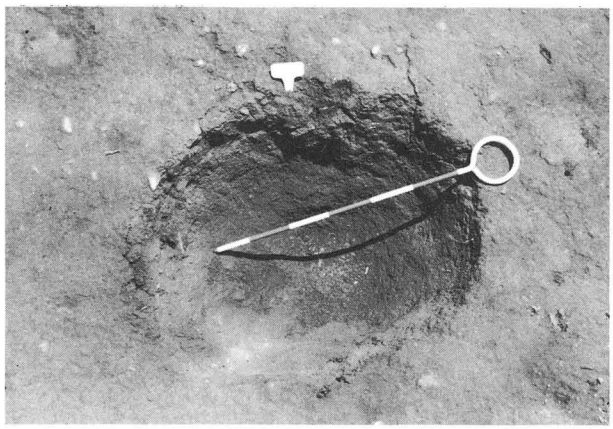
出土遺物は全て土壙上面及び堆積土上部からで、土器片の何点かは接合し、深鉢形土器2点(第43図1、第44図1)、小型の深鉢形土器1点(第43図2)が実測可能な復元土器となった他、土器片12点、石器5点が出土した。

復元土器、土器片のほとんどが第Ⅵ群土器に包括されることより、当土壙は中期末葉に位置づけられる。

佐　藤　甲　二

4 号 ピ ッ ト





4号ピット観察表

地区名	検出面	平面形態		平面規模cm		深さ cm	壁角	底面状態	上端長軸方位	備考
		上端	下端	上端	下端					
K－7（a）	Ⅵ層上面	楕円	円	37×30	15×13	20	120°・115°	若干凹凸状	N－6°－W	―――

4号ピット土層註記表

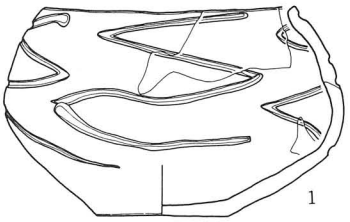
堆積土	色調	土質	粘性	しまり	備考
1	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	やや強い	やや良	炭化物、小礫

4号ピット出土遺物数量表 ※（ ）内数値はほぼ完形土器数

遺物 ＼ 堆積土	土器						
	ほぼ完形	口縁部	体部	底部	群別 Ⅵ	群別 Ⅸ	群別 不明
1	1	―	8	―	1	1(1)	7

第39図　4号ピット平面図

出土土器



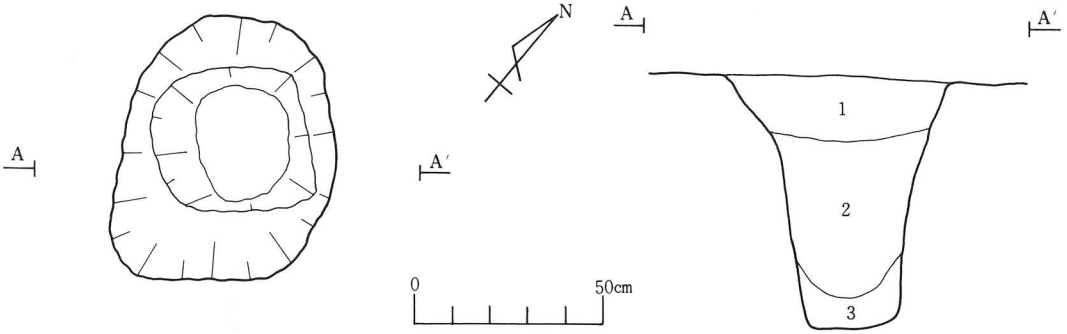
観　察　表

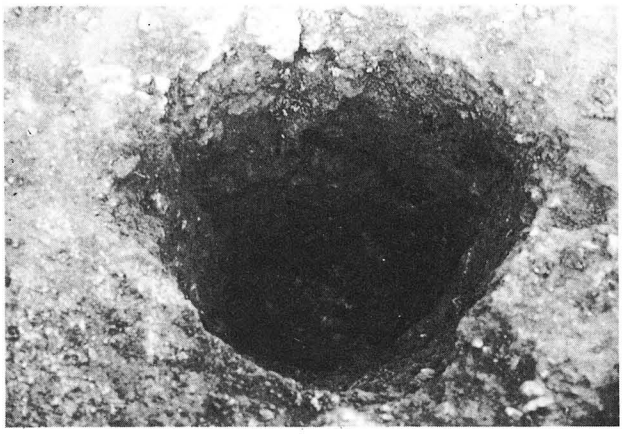
単位：cm

図	遺構	堆積土	部　位	器形	器高	口径	施　文　・　調　整	底部	分類	備　考
					8.4	10.0				凹部に赤色顔料残存
1	4Ｐ	1	口縁部・体部の一部欠損	浅鉢	底径	最大径	縦位波状沈線文（５単位）→研磨（ていねい）	無文（研磨）	※ Ⅸ	体部内面に黒褐色の付着物
					5.2	13.4				胎土に金雲母を少量含む

※図１の遺物については、現段階では、Ⅷ群～Ⅸ群土器の幅で捉えざるをえないが便宜的に広義の前葉とし、Ⅸ群土器に含めた。

５号ピット





第40図　４号ピット出土土器・５号ピット平面図

5号ピット遺構観察表

地区名	検出面	平面形態		平面規模cm		深さ	壁角	底面状態	上端長軸方位	備考
		上端	下端	上端	下端	cm				
0－10(a)	Ⅵ層上面	不整楕円	円	68×56	29×25	68	100°	平坦	N－38°－W	中段あり

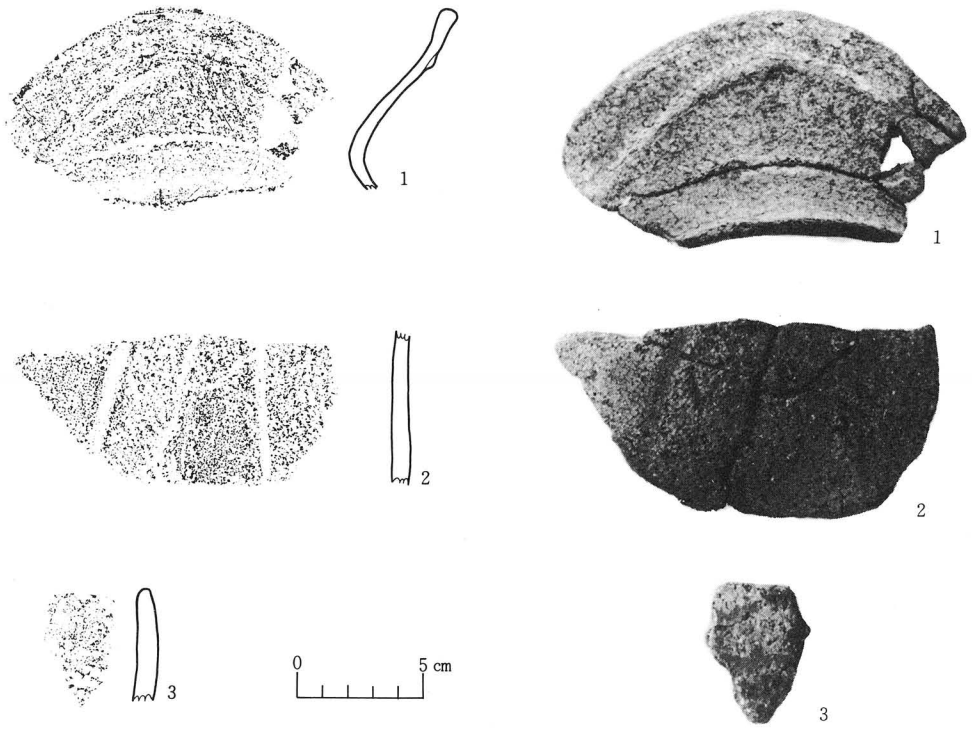
5号ピット土層註記表

堆積土	色調	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	やや強い	やや良	凝灰岩粒(2mm)多量。
2	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	やや強い	良	1cm大の凝灰岩多量。炭化粒少量。
3	10YR3/4 黒褐色	粘土質シルト	やや強い	良	砂を多量。礫多量。

5号ピット出土遺物数量表

堆積土＼遺物	土器							石器	
	復元土器	口縁部	体部	底部	群別 V	群別 XI	群別 不明	剥片	チップ
1	—	1	12	—	3	1	9	3	4
2	—	1	3	—	2	—	2	2	2
3	—	—	1	—	1	—	—	—	—

出土土器

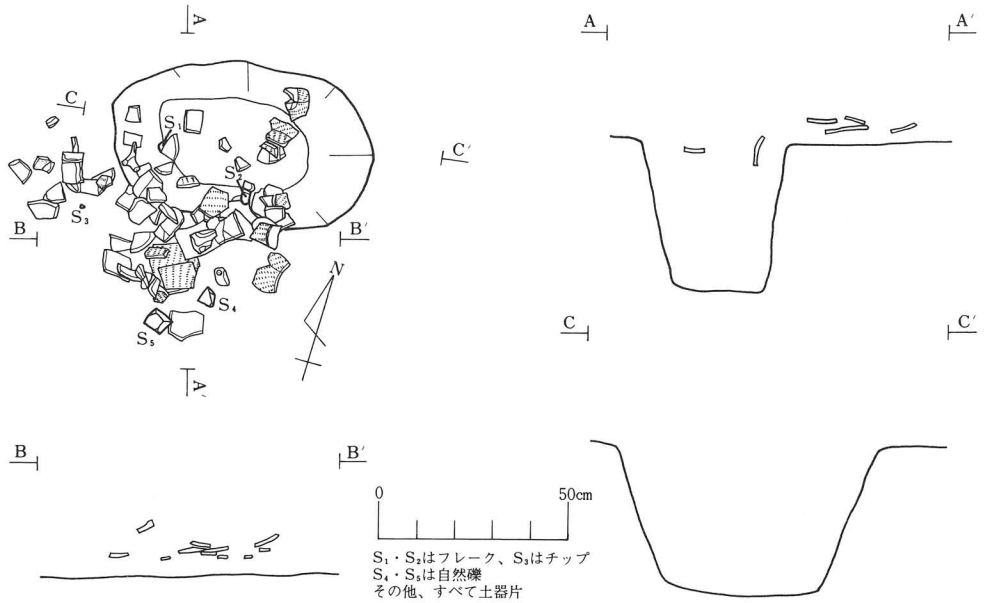


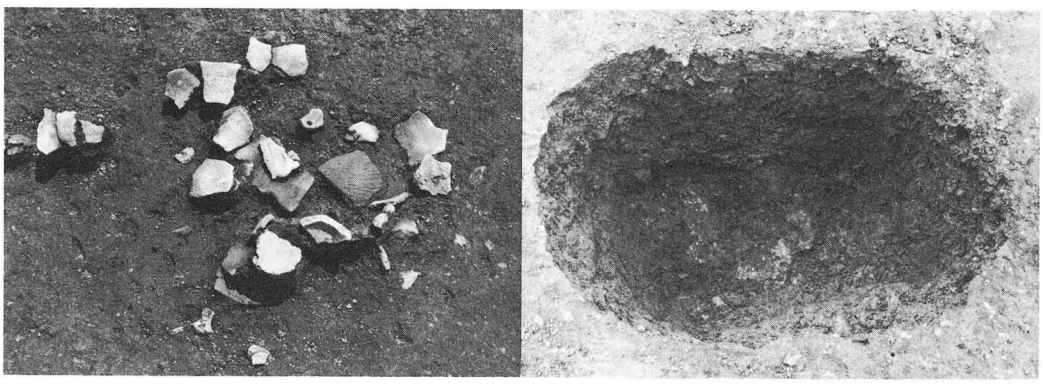
観察表

図	遺構名	堆積土	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	5P	2	口縁部	深鉢	隆線文→磨き	Ⅴ1d	———
2	5P	3	体部	深鉢	縦位LR縄文→沈線文→磨き	Ⅴ1・4	堆積土2層出土のものと接合
3	5P	1	口縁部	深鉢	横位LR縄文→研磨(口縁部)	Ⅺ1a	———

第41図　5号ピット出土土器

3 号 土 壙





3号土壙観察表

地区名	検出面	堆積土	平面形態		平面規模 cm			深さ	壁角		底面	上端長	分類	備考
			上端	下端	型	上端	下端	cm	長軸	短軸	状態	軸方位		
K−13(a)	Ⅳb層上部	1	楕円	楕円	小	72×42	42×42	40	110°	95°	平坦	N−77°−W	C	2住を切る

3号土壙土層註記表

堆積土	色調	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	やや強い	やや不良	炭化物・焼土粒

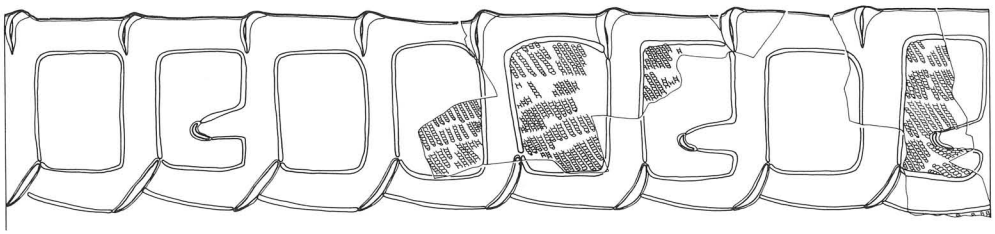
3号土壙出土遺物数量表

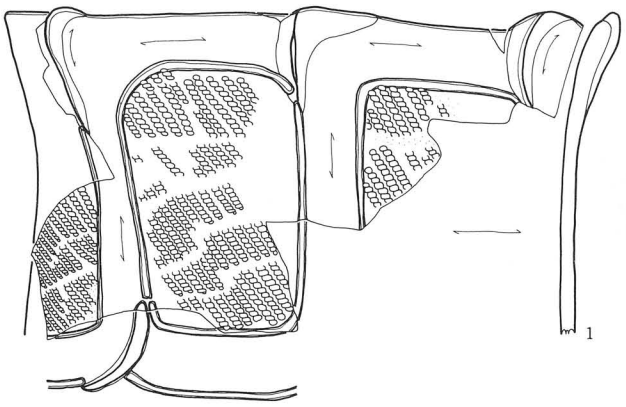
※( )内数値は復元土器数

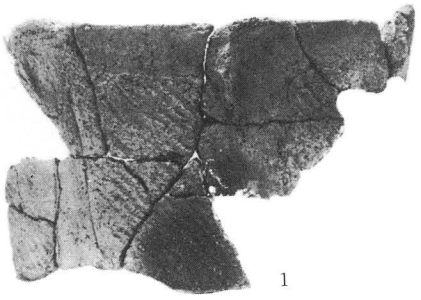
遺物 / 堆積土	土器						石器		
	復元土器	口縁部	体部	底部	群別 Ⅵ	群別 不明	ピエース・エスキユ	剝片	チップ
検出面	2	2	8	2	5(2)	9	1	3	1
上部	1	—	—	—	1(1)	—	—	—	—

第42図　3号土壙平面図

出土土器



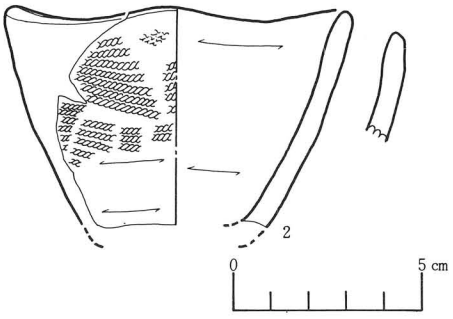


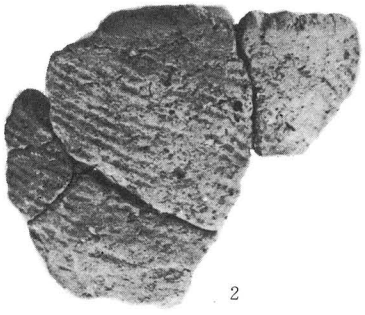


観　察　表

単位：cm

図	遺構	層　位	部　　位	器形	口径	施　文　・　調　整	分　類	備　考
1	3 D	検出面	口縁～体部上半	深鉢	24.5	沈線文→隆線文→縦位ＬＲ縄文→磨き	Ⅳ1b	――



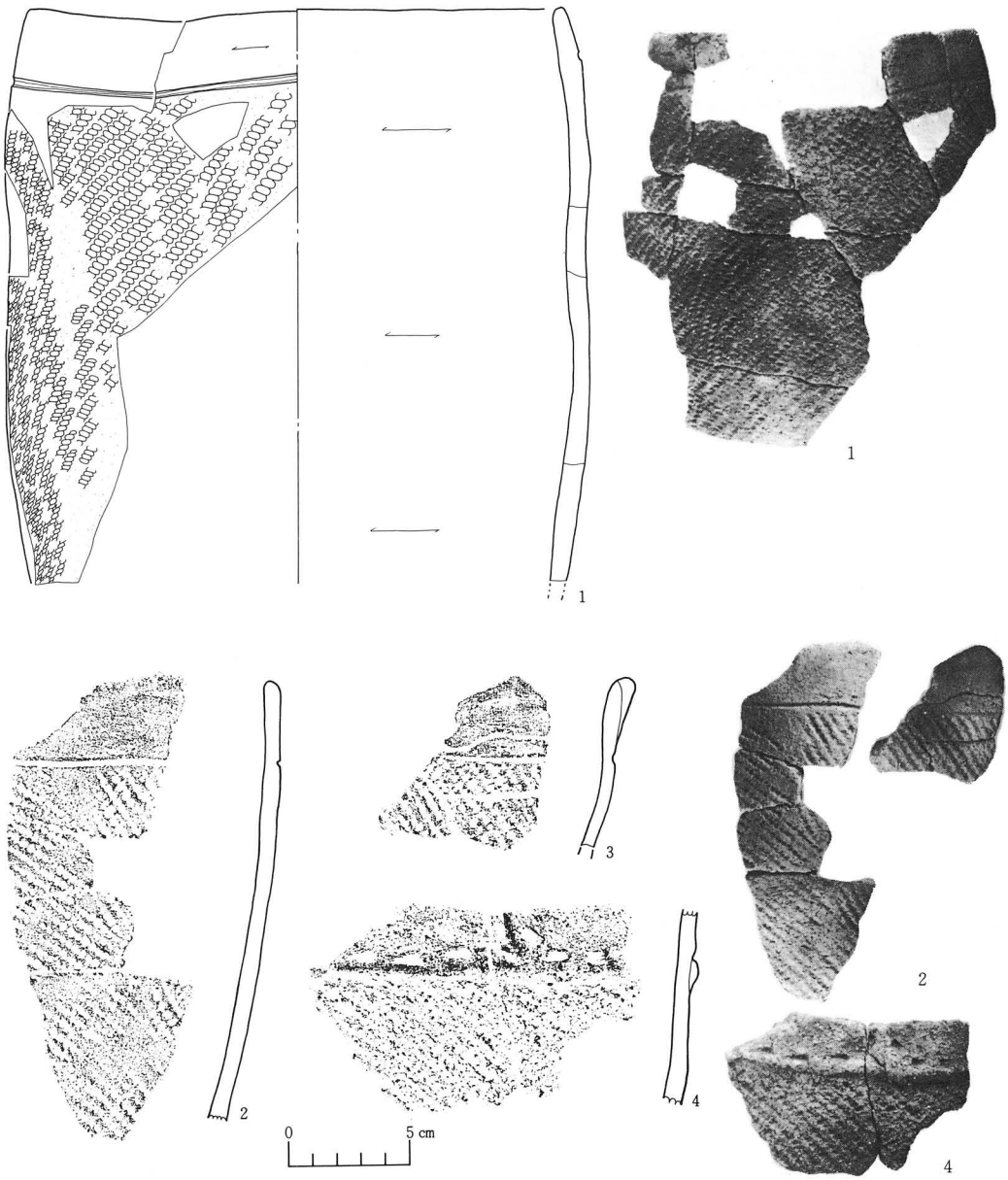


観　察　表

単位：cm

図	遺構	堆積土	部　位	器　形	口径	施　文　・　調　整	分　類	備　考
2	3 D	検出面	口縁～体部	(小型)深鉢	9.2	斜位ＬＲ縄文→磨き	Ⅵ1・3	――

第43図　３号土壙出土土器(１)



観　察　表

単位：cm

図	遺構	堆積土	部　位	器形	施　文　・　調　整			分　類	備　考
					口　径	最大径			
1	3D	1層上部	口縁～体部	深鉢	22	24	縦位LR縄文→沈線文→磨き	Ⅵ3	――
2・3	3D	検出面	口縁～体部	深鉢	縦位LR縄文→沈線文→磨き			Ⅵ3	波状口縁
4	3D	検出面	体　部	深鉢	隆線文 → 縦位LR縄文 →磨き→刺突文			Ⅵ1・3	――

第44図　3号土壙出土土器（2）

4号土壙(第45～46図)

M－6グリッド北東隅に位置し、Ⅵ層上面で検出された。5号土壙を一部切る。上端長軸規模112cm、上端平面形不整楕円形、下端平面形楕円形、深さ43cmの中型C類の土壙である。

堆積土は2層から成るが、1層下面で大型の扁平礫(第45図S1、第46図2)の上に逆位の底部穿孔土器(第45図P1、第46図1)が密着した状態で出土した。扁平礫は表裏面とも磨かれており(礫石器Ⅵ－2類)、その上に赤色顔料を塗っていた痕跡をとどめる。底部穿孔土器は体部下部より上を人為的に切り取られている底部破片で、焼成後穿孔が外面より行われている。これら底部穿孔土器と扁平礫は当初より土壙内に埋置されていたと考える他に、土壙上面に据えられていたものが土壙内空洞化に伴い落ち込んだ可能性もある。

上記出土遺物の他に堆積土1層中より土器片35点(第Ⅵ、Ⅷ群土器を含む)、石器2点が出土している。

底部穿孔土器と赤色顔料を塗った特異な大型扁平礫が出土した点より、当土壙は墓壙の可能性が強い。所属時期は堆積土中に第Ⅷ群土器を含むことより、後期初頭と考えられる。

5号土壙(第47～48図)

M－6グリッド北東隅に位置し、Ⅵ層上面で検出された。4号土壙に北西側上端を一部切られている。上端長軸規模204cm、上端・下端平面形とも不整楕円形、深さ50cmの大型C類の土壙である。土壙底面には上端規模50×46cm、44×34cm、下端規模34×24cm、20×14cm、深さ10cm、14cmの浅いへこみ状のピットが2個検出されたが、内部よりの出土遺物はない。堆積土は2層から成るが、自然堆積状態を示す。

遺物は堆積土2層を中心として土器片55点(第Ⅴ、Ⅷ、Ⅺ群土器を含む)、石器18点が出土しているが、全て自然堆積遺物と考えられる。

当土壙は4号土壙に切られており、4号土壙の年代より、後期初頭以前に所属すると考えられる。

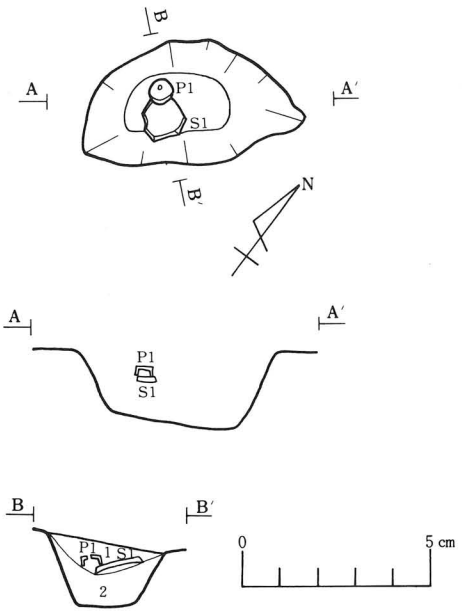
6号土壙(第49～52図)

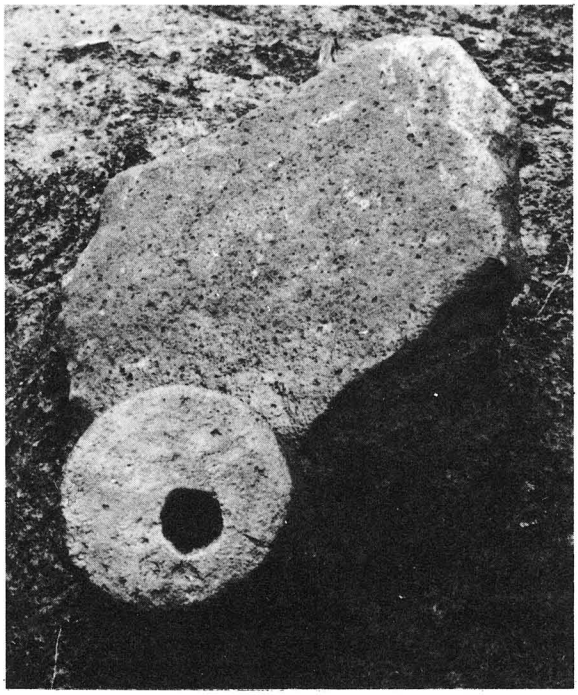
M－7グリッド南端に位置し、Ⅵ層上面で検出された。上端長軸規模282cm、上端・下端平面形との不整楕円形、深さ62cmを呈する大型C類の土壙である。上端南側は多少崩落した可能性がある。底面には3ヶ所の浅いへこみ状の落ち込みが検出され、東壁際落ち込み内底面上から、口縁部の一部を欠失した小型深鉢形土器(第50図1、第Ⅷ群土器)が直立でつぶれたような状態で出土した。堆積土は5層から成り自然堆積状態を示す。

小型深鉢土器以外には堆積土1・2層を中心として土器片295点(第Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅺ群を含む)、石器38点を出土している。出土量が多いが全て自然堆積遺物と考えられる。

小型深鉢土器の年代より当土壙は後期初頭に所属する。　　佐藤甲二

4 号 土 壙





4号土壙観察表

地区名	検出面	堆積土	平面形態		平面規模cm			深さ cm	壁角	底面状態	上端長軸方位	分類	備考
			上端	下端	型	上端	下端						
M－6(b)	Ⅵ層上面	2	不整楕円	楕円	中	112×66	56×32	43	125°	平坦	N－57°－E	C	5Dを切る

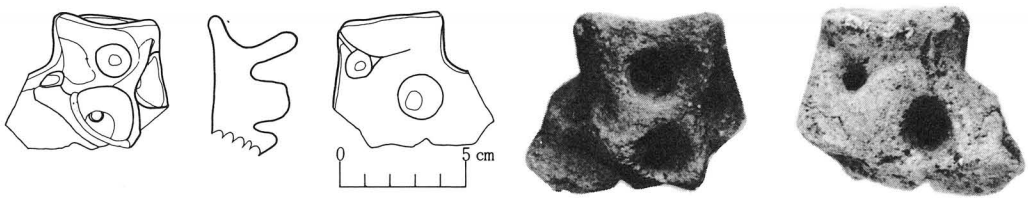
4号土壙土層註記表

堆積土	色調	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	弱い	やや良	炭化物
2	10YR4/4 褐色	粘土	やや強い	やや良	——

4号土壙出土遺物数量表

遺物 / 堆積土	土器							石器		備考
	復元土器	口縁部	体部	底部	群別 Ⅵ	群別 Ⅷ	群別 不明	剥片	礫石器 Ⅵ－2	
1	—	4	30	2	1	3	32	2	1	堆積土2層は無遺物層

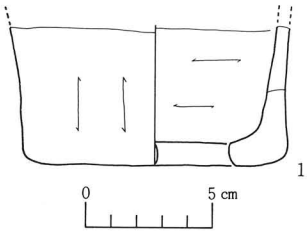
出土土器

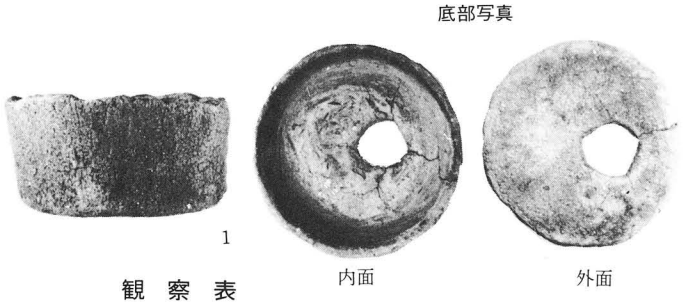


観 察 表

図	遺構名	堆積土	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	4D	1	突起(口縁部)	深鉢	(円筒突起:「8」字状盲孔・盲孔$_2$(内面)盲孔(頂部)凹孔)	Ⅷ11b$_{1+2}$	——

第45図　4号土壙平面図・出土土器(1)

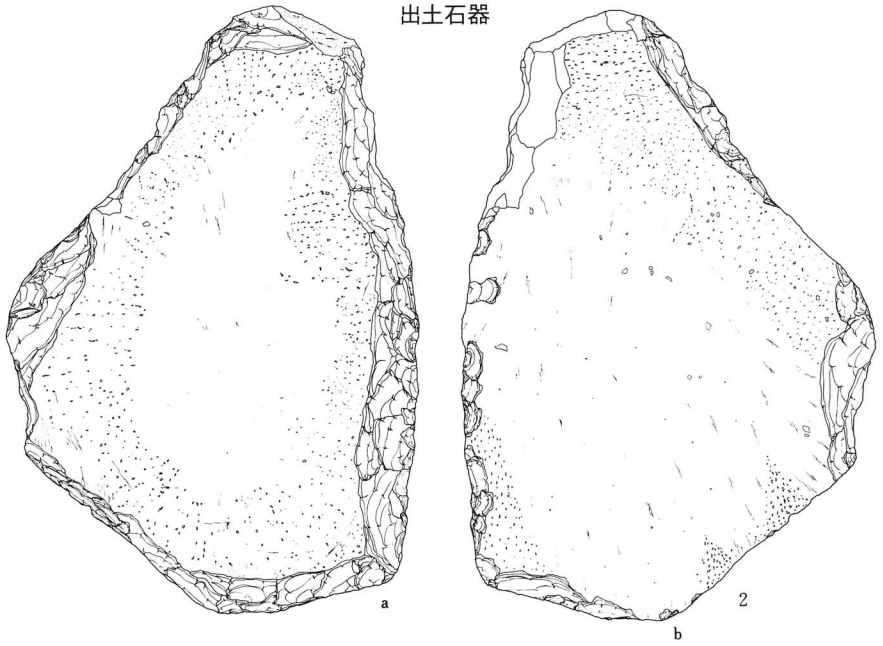


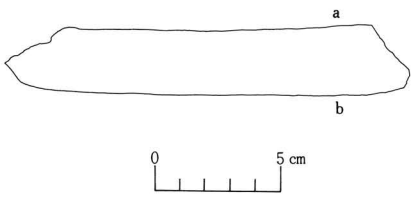


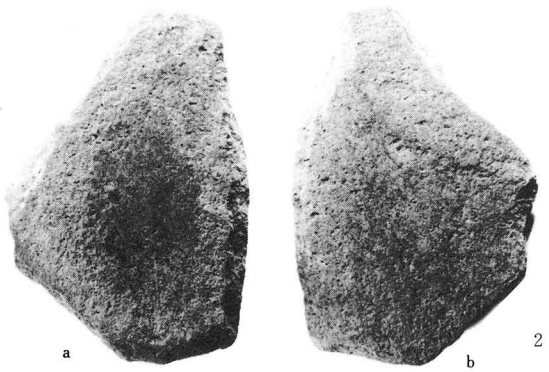
観　察　表

図	遺構	層位	部位	器形	法量 底径	施文・調整	施文・調整 底部	備考
1	4 D	堆1	体部下半～底部	深鉢	10.3～10.5cm	外面：縦位研磨 内面：横位ナデ状磨き	穿孔一径約3cmの不整円形・断面は直立に近く面は平滑 外面：縦位磨き・内面：ナデ＋棒状擦痕（幅約1mm）	残存する上端ラインは水平・平坦で作為的

出土石器





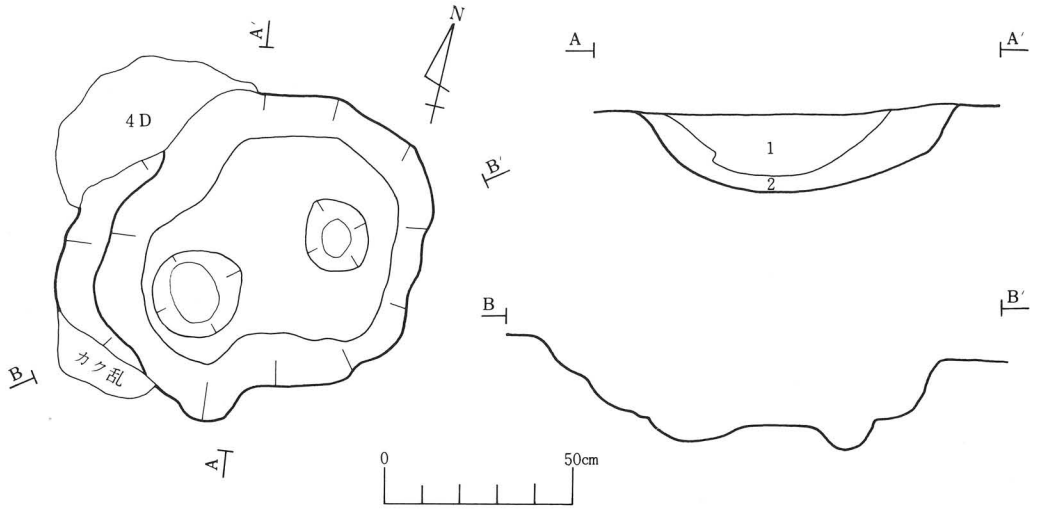


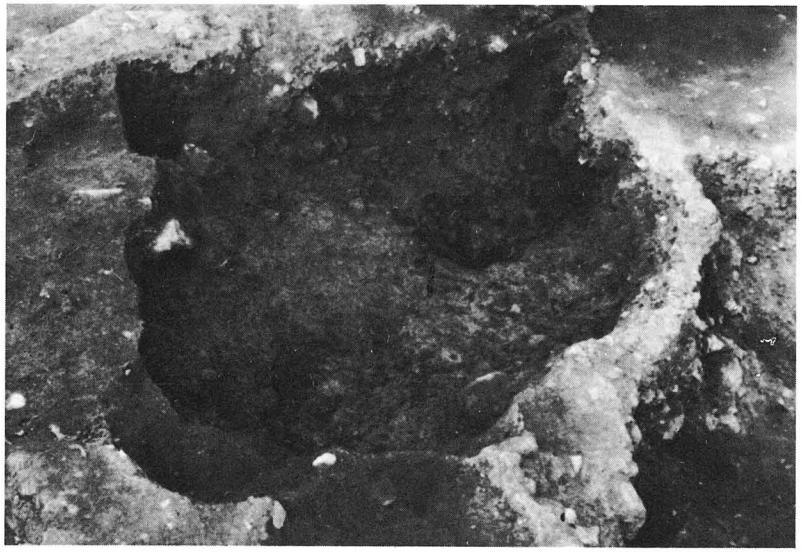
観　察　表

図	遺　構	堆積土	長さ	幅	厚さ	重量	礫の形態	使用痕・他	分類	石　材	登録番号
2	4 D	1	265	215	55.0	5,500	G	a、b両面とも中央部がツルツルし光沢があり赤色顔料様のもの付着	Ⅵ-2	凝灰質シルト岩（やや珪化）	1056

第46図　4号土壙出土土器（2）・石器

5 号 土 壙





5号土壙観察表

※（ ）内は残存数

地区名	検出面	堆積土	平面形態 上端	平面形態 下端	平面規模 cm 型	平面規模 cm 上端	平面規模 cm 下端	深さ cm	壁角	底面状態	上端長軸方位	分類	備考
M－6（b）	Ⅵ層上面	2	不整楕円	不整楕円	大	204×(152)	146×120	50	115°	若干凹状、ピット2	N－52°－E	C	4Dに切られる

5号土壙土層註記表

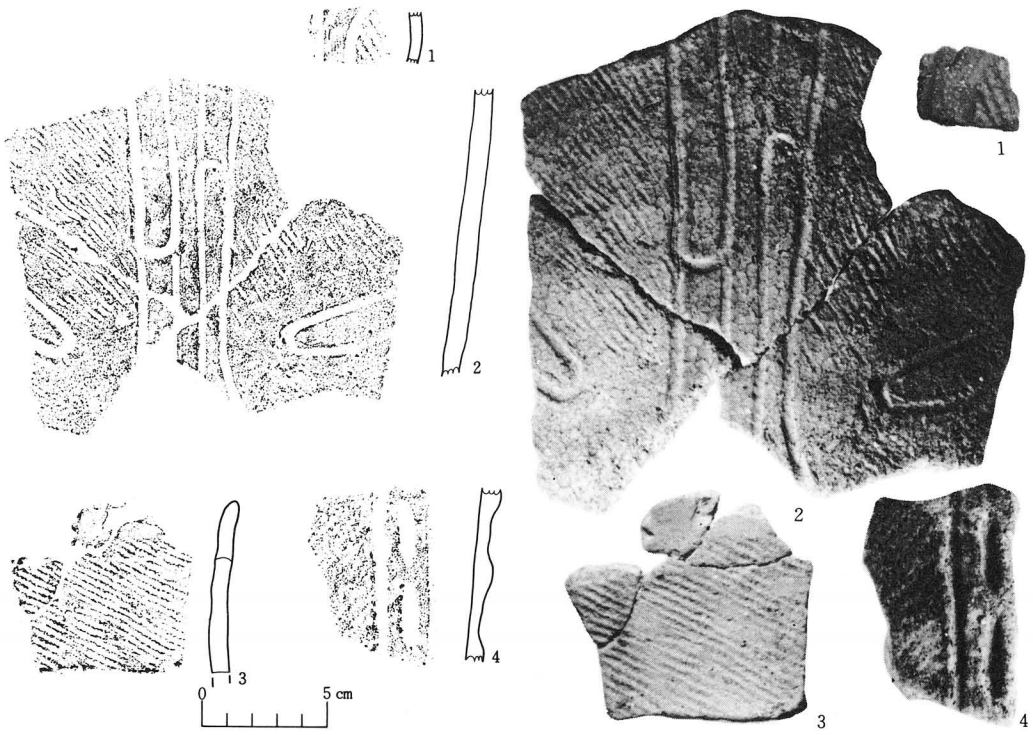
堆積土	色調	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR 褐色	粘土質シルト	やや強い	不良	礫
2	10YR 暗褐色	シルト	やや良	やや良	炭化物。凝灰岩粒多量。

5号土壙出土遺物数量表

堆積土＼遺物	土器 復元土器	土器 口縁部	土器 体部	土器 底部	土器 群別 V	土器 群別 Ⅷ	土器 群別 Ⅺ	土器 群別 不明	石器 石匙	石器 スイクレー	石器 S F	石器 剝片	石器 礫石器Ⅲ
1	—	—	2	—	—	—	—	2	—	2	—	6	—
2	—	3	43	7	1	5	1	46	1	3	1	4	1

第47図　5号土壙平面図

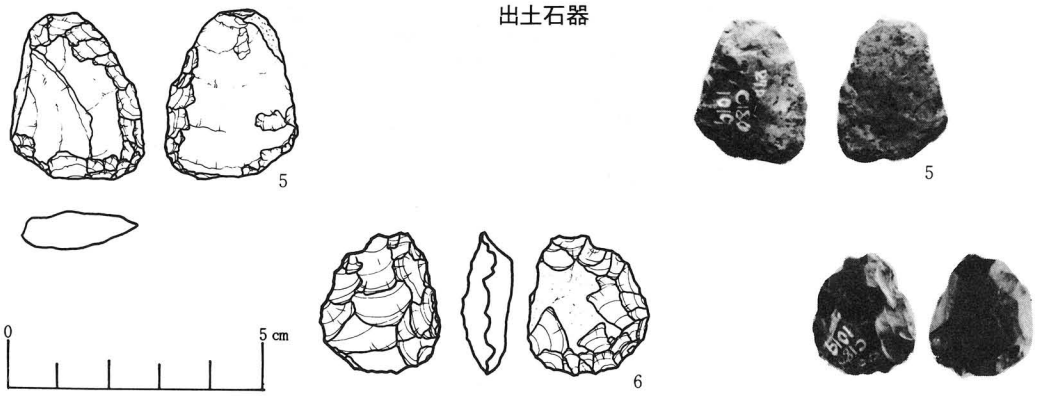
出土土器



観　察　表

図	遺　構	堆積土	部　位	器　形	施　文　・　調　整	分　類	備　考
1	5 D	2	体部	深鉢	縦位ＬＲ縄文→沈線文→磨き	Ⅴ1･4	——
2	5 D	2	体部	深鉢	縦位ＬＲ縄文→長楕円形沈線間磨消縄文	Ⅷ 1 a	——
3	5 D	2	口縁部	深鉢	縦位ＬＲ縄文→研磨	Ⅺ 3 a	——
4	5 D	2	体部	深鉢	横位ＬＲ縄文→縦位並行沈線間鎖状沈線文	Ⅷ4ｃ＋5ａ	——

出土石器



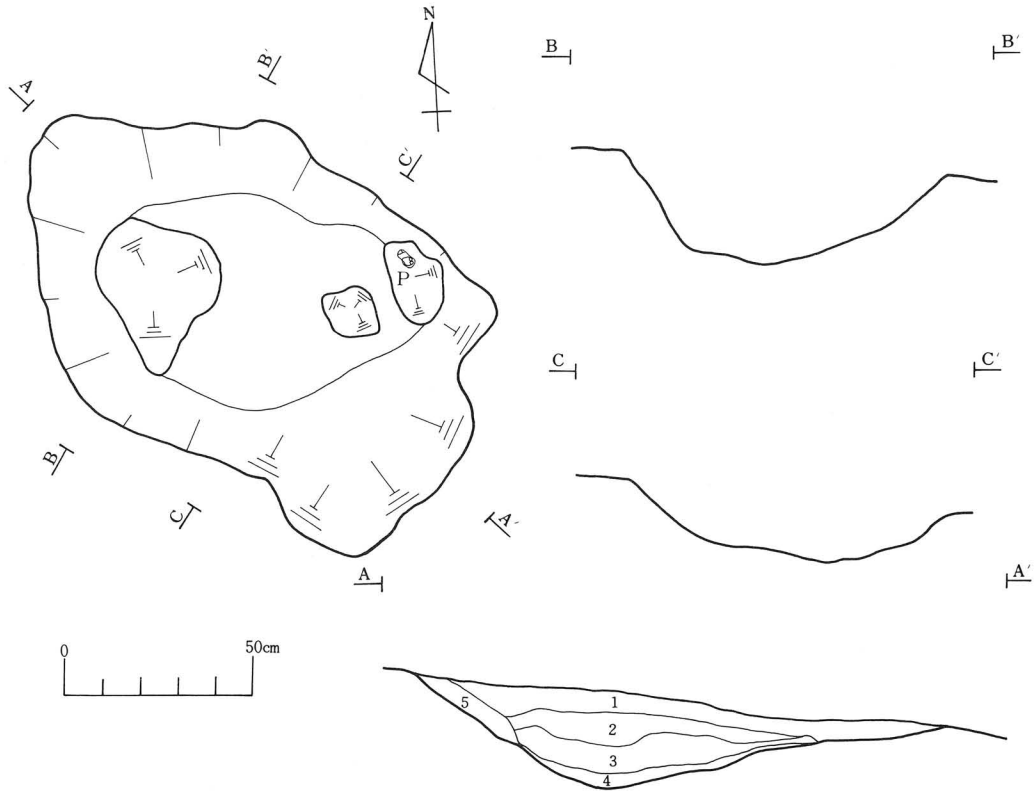
観　察　表

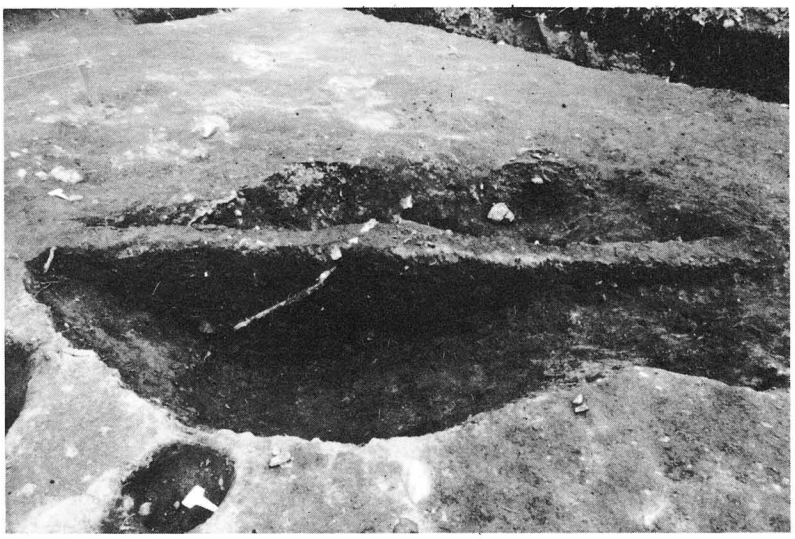
単位：mm

図	遺構	堆積土	名　称	長さ	幅	厚さ	備　考	分類	石　材	登録番号
5	5 D	2	スクレイパー	33.2	26.7	7.5	同一母岩(分類番号No27)	Ⅹ	流紋岩質岩	1019
6	5 D	2	スクレイパー	28.0	24.0	9.0	——	Ⅰ－B	珪質頁岩	1019

第48図　5号土壙出土土器・石器

6 号 土 壙





6号土壙観察表

地区名	検出面	堆積土	平面形態 上端	平面形態 下端	平面規模 cm 型	平面規模 cm 上端	平面規模 cm 下端	深さ cm	壁角 長軸	壁角 短軸	底面状態	上端長軸方向	分類
M－7（c）	Ⅵ層上面	5	不整楕円	不整楕円	大	282×178	184×114	62	140°	125°	若干凹状、浅い窪み3	N－41°－W	C

第49図　6号土壙平面図

6号土壙土層註記表

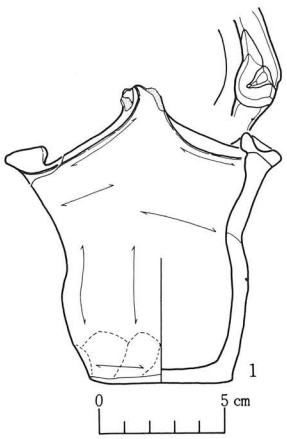
堆積土	色調	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR 3/3 暗褐色	シルト	弱い	不良	小礫。炭化物。
2	10YR 3/3 黒褐色	粘土質シルト	やや強い	やや良	炭化物多量。焼土粒少量。
3	10YR 3/3 暗褐色	粘土質シルト	やや強い	やや良	橙色粒。炭化物。
4	10YR 3/4 暗褐色	粘土	強い	やや良	炭化物。焼土。
5	10YR 4/3 黄褐色	粘土	強い	やや良	

6号土壙出土遺物数量表

※（ ）内数値は復元土器数

遺物／堆積土	土器										石器										備考
	復元土器	口縁部	体部	底部	群別 V	VI	VII	VIII	XI	不明	石鏃	石錐	ピエス・エスキーユ	スイクパレー	S・F	M・F	剝片	チップ	石核	礫石器Ⅳ	
検出面	—	—	35	—	—	—	—	—	—	35	—	1	—	2	—	—	—	—	1	—	
1	—	22	106	7	1	2	—	13	1	118	1	1	—	—	—	1	10	—	2	1	堆積土3～5層は無遺物層
2	—	—	118	6	1	4	1	6	4	108	—	—	1	2	1	1	11	1	1	—	
底面	1	—	—	1	—	—	—	1(1)	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

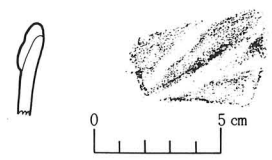
出土土器

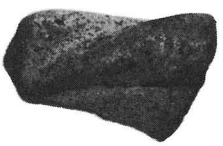


観察表

単位：cm

図	遺構	堆積土	部位	器形	器高 (12.5)	口径 (11.0)	施文・調整	底部	分類	備考
1	6D	底面	口縁部・体部の一部欠損	深鉢	底径 5.7	最大径 11.0 (口径)	(大小突起—小突起の頂部に盲孔) →全面研磨 ・体部末端は削り→研磨 ・底部内面はナデツケ	無文 周縁部、削り（7単位)→研磨	Ⅷ11b$_2$	波状口縁 体部下半中央辺に黒色付着物（幅2cm）

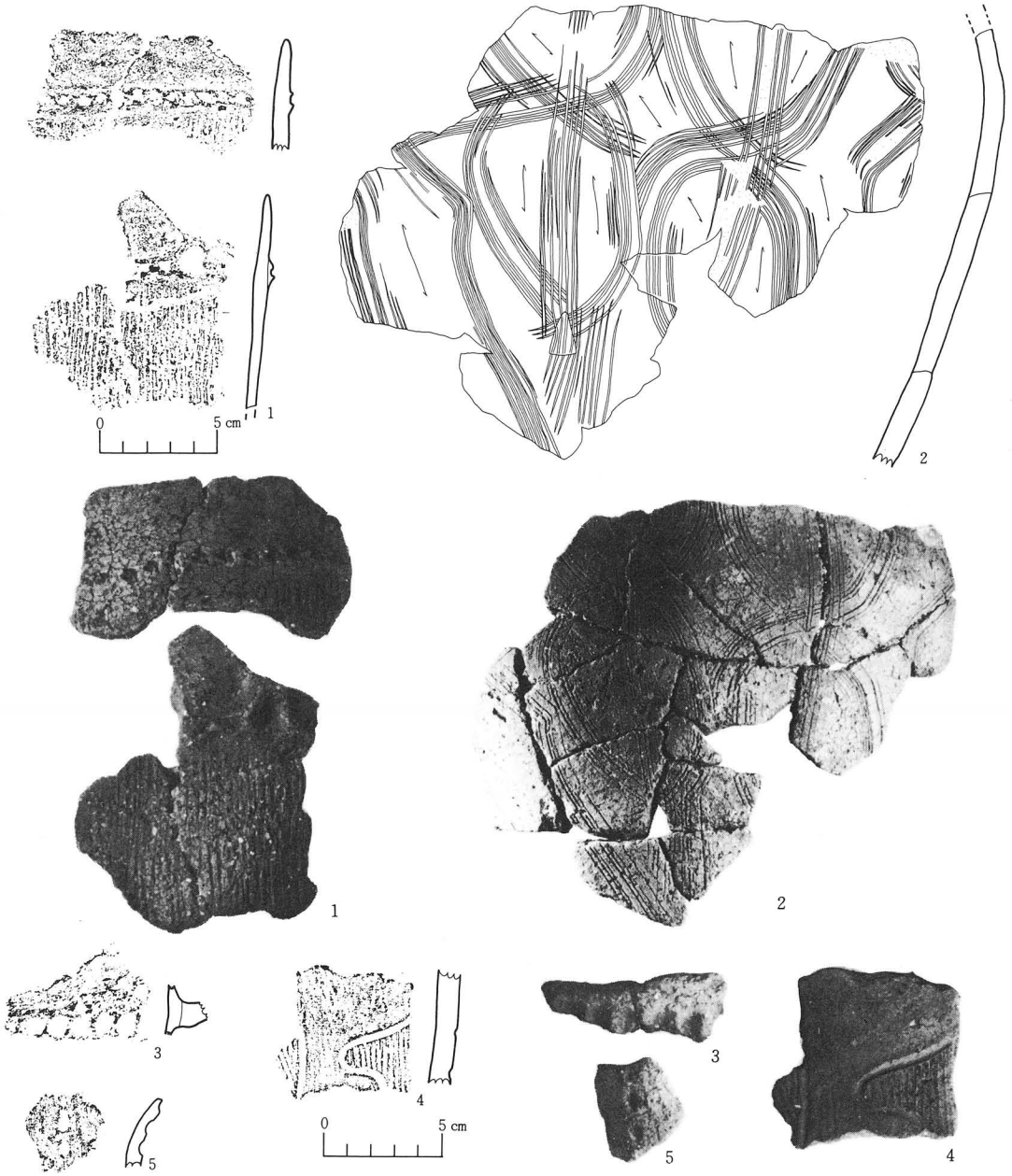




観察表

図	遺構	堆積土	部位	器形	施文・調整	分類	備考
2	6D	2	口縁部	深鉢	外面：研磨　内面：弧状隆沈線文	Ⅷ2b	磨滅している

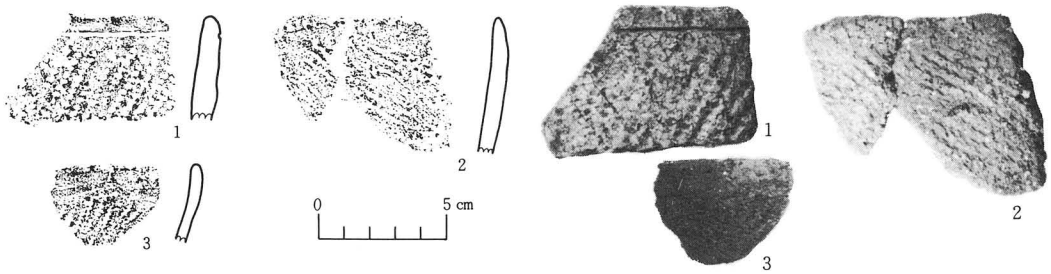
第50図　6号土壙出土土器（1）



観察表

図	遺構	堆積土	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	6 D	1	口縁部	深鉢V	「横位隆線＋小円形・不整三角形刺突文」→縦位細沈線文→研磨（口縁部）	Ⅷ 6a	——
2	6 D	1	体部	深鉢	研磨→縦位「8」状細沈線文（∫→∫→|） 縦位弧状細沈線文	Ⅷ 1b	0.1～2mmの灰白粒を多量に含む
3	6 D	2	体部	深鉢	（鍔状隆帯）連続鱗状刺突文	Ⅷ8c＋5b	——
4	6 D	2	体部	深鉢	斜位R撚糸文→弧状沈線間磨消撚糸文	Ⅷ 1a	——
5	6 D	2	注口部？	？	連続刺突文	Ⅷ 5b	——

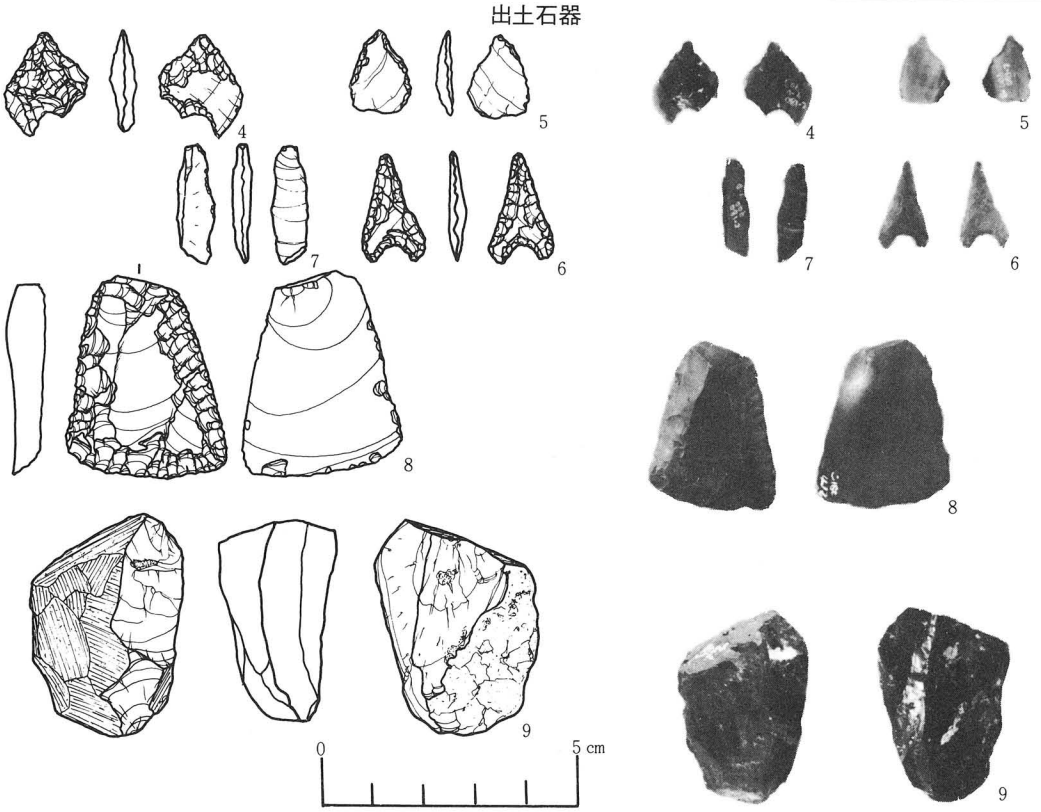
第51図　6号土壙出土土器（2）



観　察　表

図	遺構名	層　位	部　位	器　形	施　文　・　調　整	分　類	備　　考
1	6 D	1	口縁部	深　鉢	縦位ＲＬ縄文・沈帯？→ナデ状研磨	Ⅷa ？	―――
2	6 D	2	口縁部	深　鉢	縦位Ｌ撚糸文→研磨(口縁部)	Ⅺ1e	―――
3	6 D	2	口縁部	浅　鉢	縦位ＲＬ縄文→研磨(口縁部)	Ⅺ4a	―――

出土石器



観　察　表

単位：mm

図	遺構名	堆積土	名　　称	長　さ	幅	厚　さ	備　　考	分類	石　材	登録番号
4	6 D	2	石　　鏃	(20.0)	(17.0)	5.0	脚部一部破損	Ⅶω㉓	珪質頁岩	903
5	6 D	2	石　　鏃	16.5	11.5	3.0	薄手の剝片を素材	Ⅳβ⑦	メ　ノ　ウ	900 ②
6	6 D	2	石　　鏃	21.5	12.0	3.0	―――	Ⅵω⑭	珪質頁岩	900 ①
7	6 D	2	Ｍ　・　Ｆ	23.2	7.0	3.5	ピエス・エスキーユのスポールの可能性がある	Ⅶ	珪質頁岩	900 ③
8	6 D	検出面	スクレイパー	39.0	32.0	7.5	―――	Ⅲ	珪質頁岩	412
9	6 D	1	石　　核	40.0	31.0	23.5	―――	―	真 珠 岩	450

第52図　６号土壙出土土器(３)・石器

(3) 縄文時代晩期

縄文時代晩期の遺構としては土壙4基(7～10号)を検出したが、8号土壙に関しては、土壙規模、形態より一応当時期とした。

検出面は4土壙ともⅥ層(地山)上面である。土壙規模では小型(7・8号)、中型(9号)、大型(10号)、土壙形態ではA類(7・8号)、C類(9号)、G類(10号)に属する。

7号土壙(第53～57図、写真16～19)

K－13グリッド南東側に位置し、Ⅵ層上面で検出された(東側の一部はⅤ層上面)、2号住居跡を一部切っている。東側壁面はかなりの崩落状態を示し上端平面形不整楕円形であるが、上端平面形は下端平面形と同様にほぼ円形であったと考える。上端復元径約80cm、下端径約85cm、深さ35cm、断面フラスコ状の小型A類の土壙である。底面は平坦で、東側には上端規模径7cm、深さ約25cmの円形の小ピットが1個垂直に掘り込まれていた。堆積土は東壁際で地山ブロックが多くみられたが、単層であった。

土壙上部より小型深鉢形土器(第53図P1、第54図)1点、底面より鉢形土器(第53図P3、第56図1)、壺形土器(第53図P2、第55図1)各1点が出土した。小型深鉢形土器は口縁を¾欠失し、底部に焼成後の穿孔(内面より)がある。鉢形土器は体部を½欠失する。壺形土器は完形であるが体部に2ヶ所焼成後の穿孔(外面より)がある。土壙中央を中心とする上部から底面にかけて、10cm以下の小角礫や20cmもある大角礫が多く出土し、小型深鉢形土器はこの角礫に混じるような状態で出土し、底面出土の鉢形土器と壺形土器は、鉢形土器に壺形土器が横たえられた状態で、北西壁際底面に置かれており、この部分の底面は強く壁側に張り出している。堆積土中には上部から下部まで炭化物が多く含まれ、この中には、クリの実が含まれていた。(大阪大学理学部粉川昭平教授の御教授による。)

リン分析の結果(507頁参照)では、土壙内堆積土、土器内の土壌からはP_2O_5が、K－13グリッド東壁基本層Ⅳa～Ⅴ層より高い値を示している。

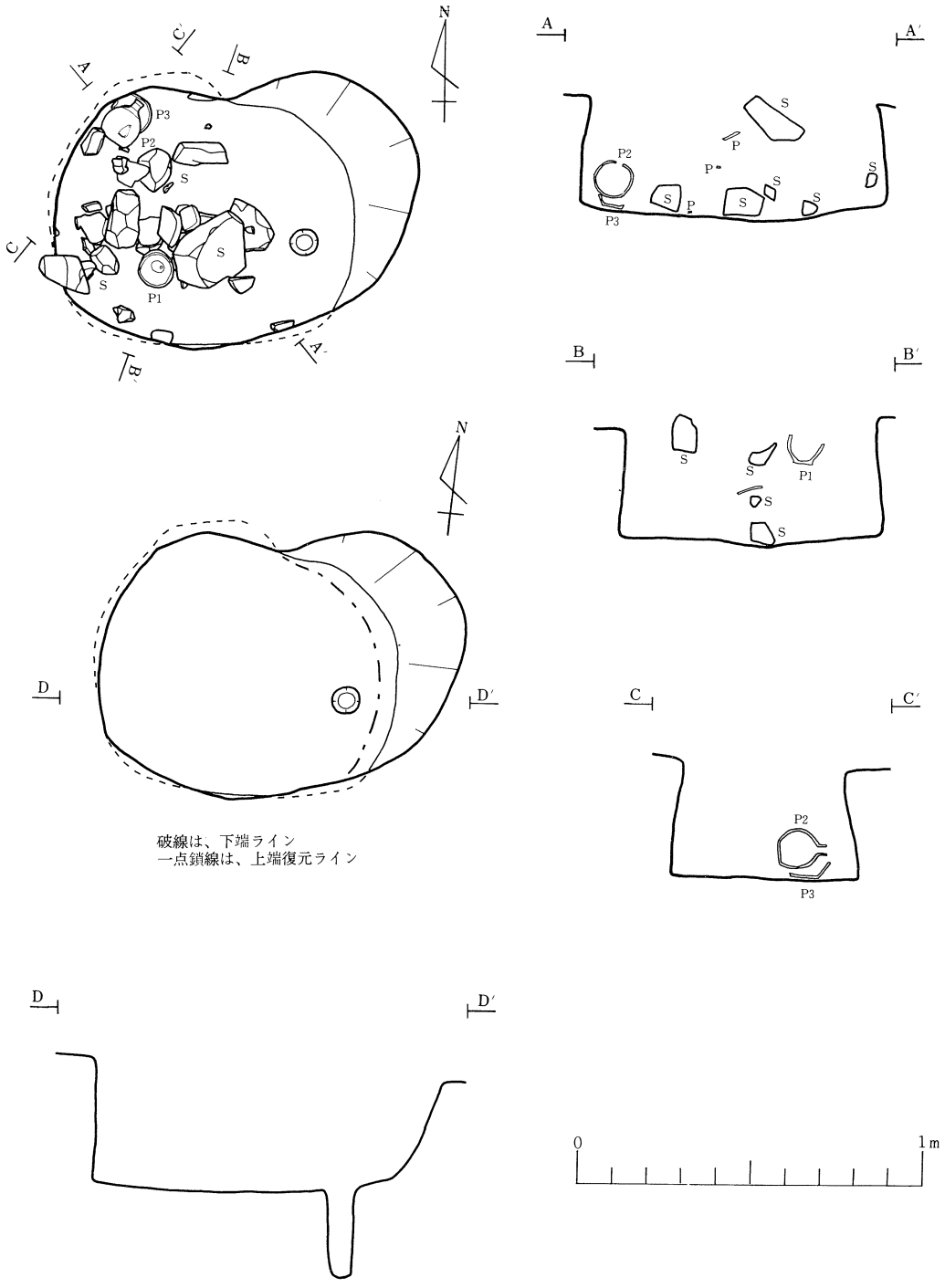
出土遺物は上記3土器の他に土器片57点(第Ⅱ・Ⅴ・Ⅷ・XⅢ群土器を含む)、石器40点を出土している。底面より剥片4点が散在して出土したが、底面より第XⅢ群土器以外の可能性もある土器片も出土している為、当土壙に伴うかどうかは不明である。

リン分析結果及び穿孔土器出土より、当土壙は墓壙であると考える。また、上部検出小型深鉢形土器及び多数の角礫は、土壙上面に置かれていたものが落ち込んだ可能性もある。

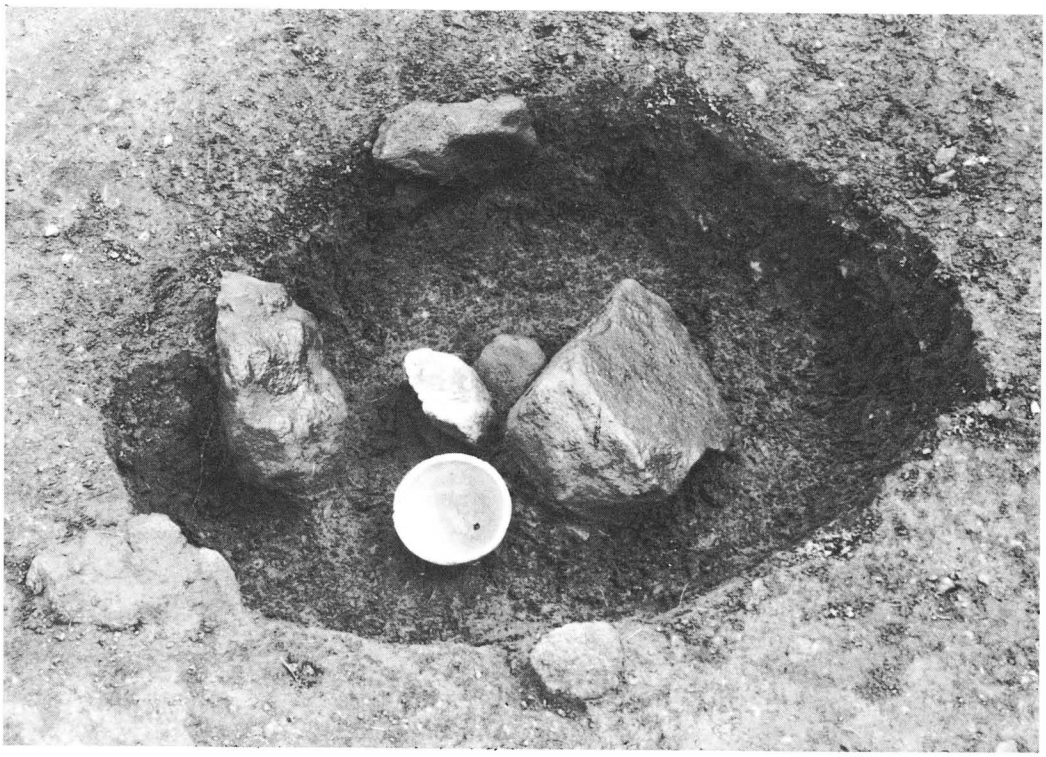
小型深鉢形土器、鉢形土器、壺形土器が全て第XⅢ群土器に属することより、当土壙は晩期後葉に所属する。

佐藤甲二

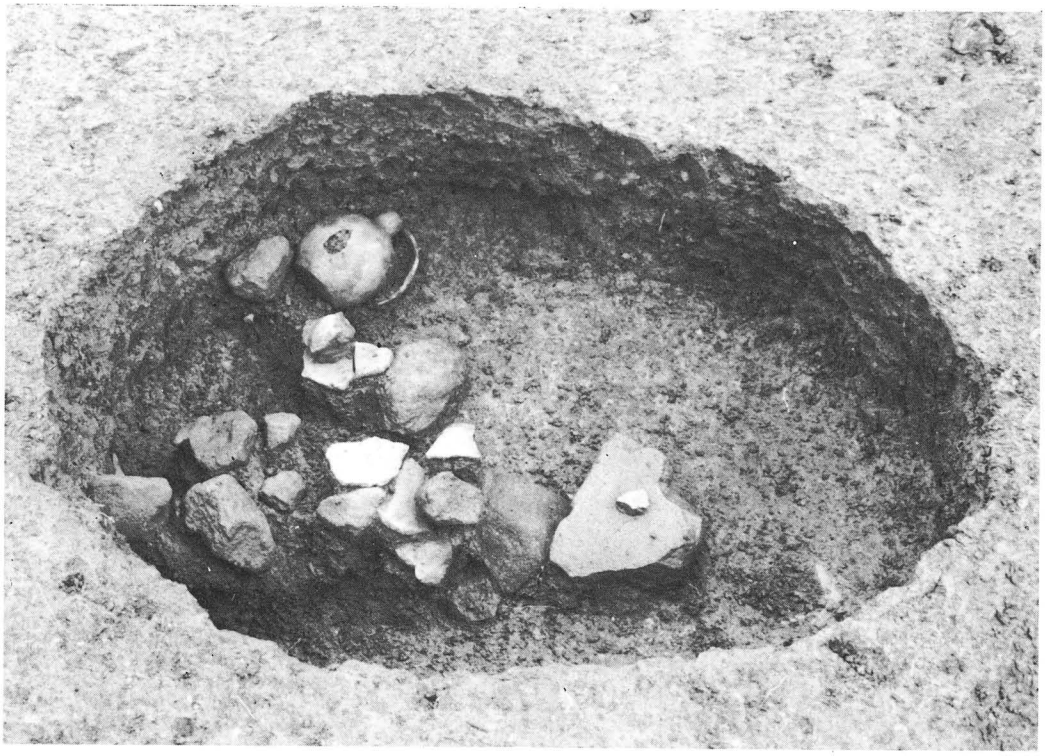
7 号 土 壙



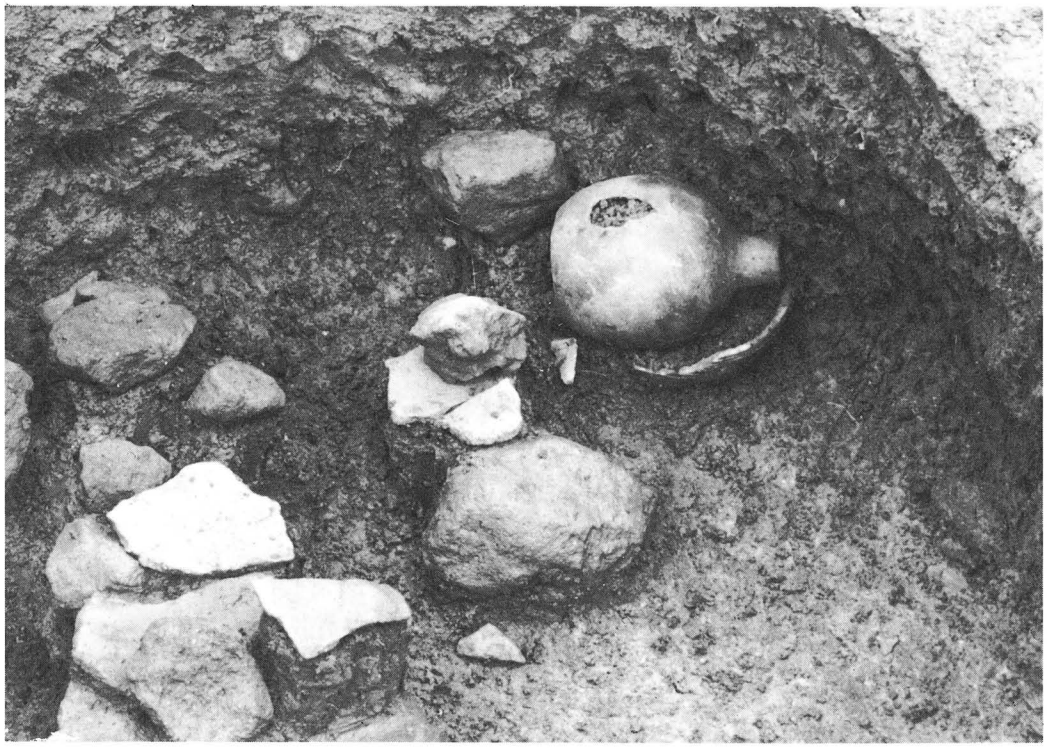
第53図　7号土壙平面図



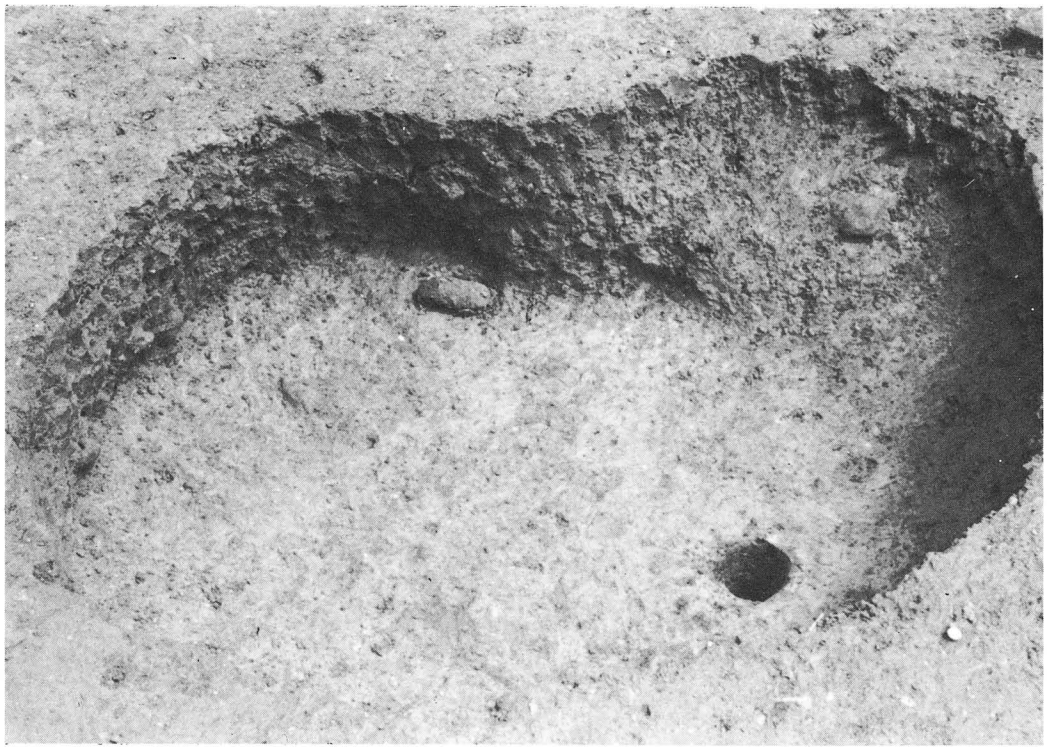
16．７号土壙遺物出土状況（南から）



17．7号土壙底面遺物出土状況(１)（南から）



18. 7号土壙底面遺物出土状況(2)（南東から）



19. 7号土壙完掘状況（南から）

7号土壙観察表

地区名	検出面	堆積土	平面形態 上端	平面形態 下端	平面規模cm 型	平面規模cm 上端	平面規模cm 下端	深さ cm	壁角	底面状態	分類	備考
K−13(c)	V〜Ⅵ層上面	1	不整楕円	不整円	小	110×78	88×83	35	85°	平坦、ピット1	A	東壁崩壊

7号土壙土層註記表

堆積土	色調	土質	粘性	しまり	備考
1	7.5YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	やや強い	やや良	1cmの炭化物ブロック多量。焼土。炭化粒。

7号土壙出土遺物数量表

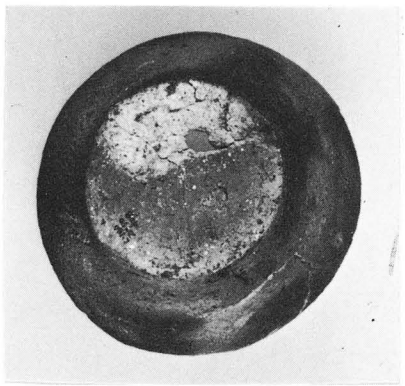
※( )内数値は完形・復元土器数

遺物／堆積土	土器 完形・復元土器	土器 口縁部	土器 体部	土器 底部	土器 群別 Ⅱ	土器 群別 Ⅴ	土器 群別 Ⅷ	土器 群別 XIII	土器 群別 不明	石器 石鏃	石器 スイクパレー	石器 M・F	石器 剥片	石器 チップ	石器 石核	自然遺物
検出面	—	—	6	—	—	1	—	—	5	—	—	—	—	—	—	——
上部	1	3	39	1	2	—	1	3(1)	38	1	2	1	22	9	1	炭化堅果類(クリ)
下部	—	1	3	1	—	—	—	—	5	—	—	—	—	—	—	炭化材(クリ)
底面	2	—	—	—	—	—	—	2(2)	—	—	—	—	4	—	—	——
ピット内	—	—	3	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—	——

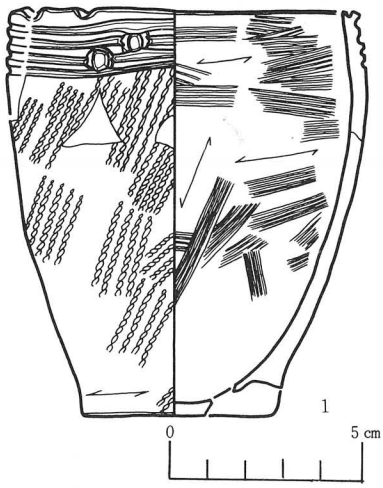
出土土器

底部写真

内面

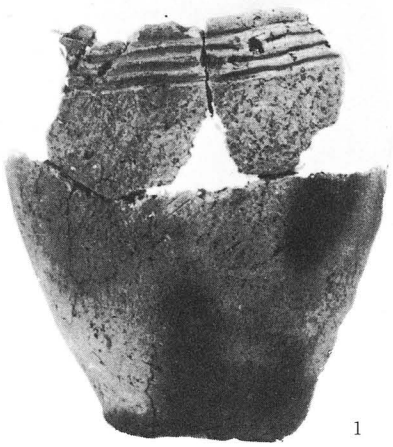


外面



1

0 5 cm

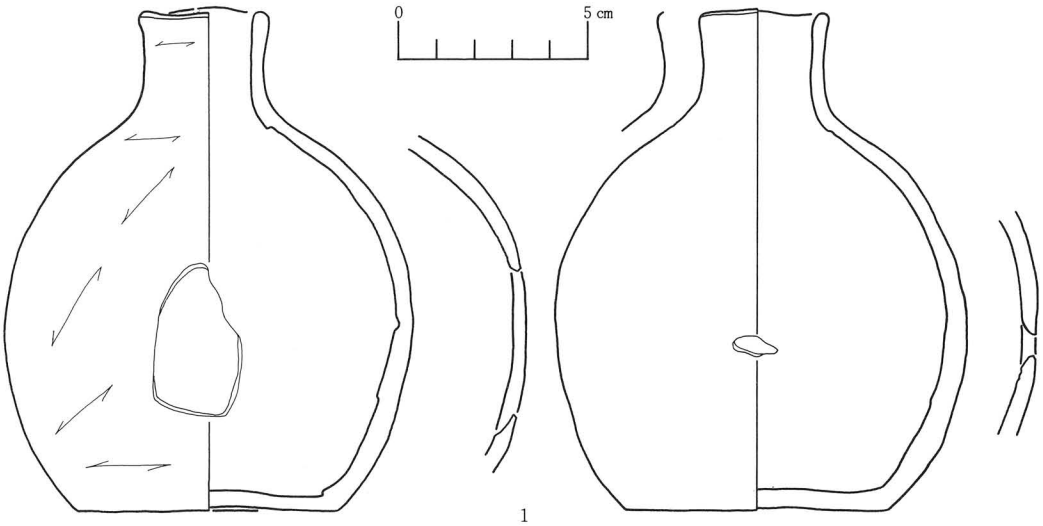


1

第54図　7号土壙出土土器(1)

観　察　表

図	遺構名	堆積土	口　径	器　高	施　文　・　調　整	胎土	分　類	備　考
第54図1	7 D	上部	(9.2cm)	10.9cm	口 唇 部　刻み目＋沈線	砂粒少	Ⅻ 1 a 1	底部内面より穿孔
			最大径	底　径	体部上端　区画沈線２条、工字状文（沈線の一部を円形に彫去）			
			9.5cm	5.1cm	体部下半　縦位撚糸文L			



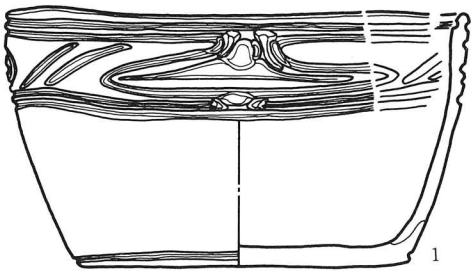
1

1

観　察　表

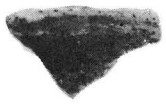
図	遺構名	堆積土	口　径	器　高	施　文　・　調　整	胎　土	分類	備　　考
1	7D	底面	3.5cm	13.5cm	平縁　外面全面研磨（ヨコ・ナナメ方向）	砂　粒やや少	Ⅻ 3	体部に外面からの穿孔２ヶ所あり
			最大径	底　径	内面体部中央に頸部内面を研磨した際の工具の先端の痕跡がめぐる。			
			10.9cm	6.9cm				

第55図　７号土壙出土土器（２）



観　察　表

図	遺構名	堆積土	口　径	器　高	施　文　・　調　整	胎　土	分　類	備　考
1	7 D	底面	12.3cm	6.8cm	内面１条沈線　　平縁	砂粒多	XIII 2 a	—
			最大径	底　径	体部上半　区画沈線２条、工字状文（反転する沈線の一部を上下逆向きに彫去）			
			——	8.7cm	体部下半　研磨、下端１条沈線			



観　察　表

図	遺構名	堆積土	部　位	施　文　・　調　整	胎　土	分　類	備　考
2	7 D	下部	体　部	斜位ＬＲ縄文	砂粒多	XIII 1	外面に炭化物付着
3	7 D	下部	口縁部	沈線２条、他に沈線もあるが全体不明	砂粒多	XIII 2b1	赤色顔料付着

第56図　７号土壙出土土器（３）

8号土壙（第57～58図）

M－15グリッド西壁際に位置し、Ⅵ層上面で検出された。北側の一部に攪乱を受けている。上端・下端平面形とも円形、上端径約90cm、下端径約94cmで、上端面積より底面面積の大きい断面フラスコ状を呈する、深さ35cmの小型A類の土壙である。堆積土は4層から成り、堆積土4層中には炭化物が含まれる。

堆積土3・4層中より小土器片12点（全て時期判別不可）、石器1点を出土したが混入と考えられる。堆積土4層上面から約15cmの扁平角礫が1点出土している。

所属時期は時期決定遺物を欠き不明であるが、7号土壙と規模、形態が酷似していることより、また当グリッド内基本層位出土遺物より、7号土壙と同一時期のものと考えられる。

9号土壙（第59～62図）

P－11グリッド西側に位置し、Ⅵ層上面で検出された。上端長軸規模130cmで、上端・下端平面形とも楕円形、深さ30cmを呈する中型C類の土壙である。南東側壁は多少崩落状態を示している。土壙南西壁際で約30cm前後の大型角礫が検出されたが、当土壙に伴うものかどうかは不明である。堆積土は3層から成る。検出面から堆積土1層上面にかけて、口縁部から体部下半までの約½を残存する一括土器1点（第59図P1、第60図）が検出され、その直下からは大型で盤状の礫（礫石器Ⅵ－1類、第59図S1、第61図）が1点、斜位で出土した。

堆積土各層から上記出土遺物以外に、土器片54点（第Ⅷ・Ⅸ群土器を含む）、石器13点が出土した他、15cm前後の角礫が多く含まれていた。

一括土器と礫石器は当土壙上面に置かれていた可能性が強く、従って当土壙の所属時期は、一括土器が第XⅢ群土器であることより晩期後葉に属すると考えられる。

10号土壙（第62～64図）

P－11グリッド南側に位置し、Ⅵ層上面で検出された。上端長軸規模237cm、上端・下端平面形とも不整長楕円形、深さ25～40cmを呈する大型G類の土壙で、底面は長軸に沿って南から北へ傾き深くなる。壁面は長軸壁ではゆるやかに立ち、短軸壁では急角度で立つ。堆積土は3層から成る。

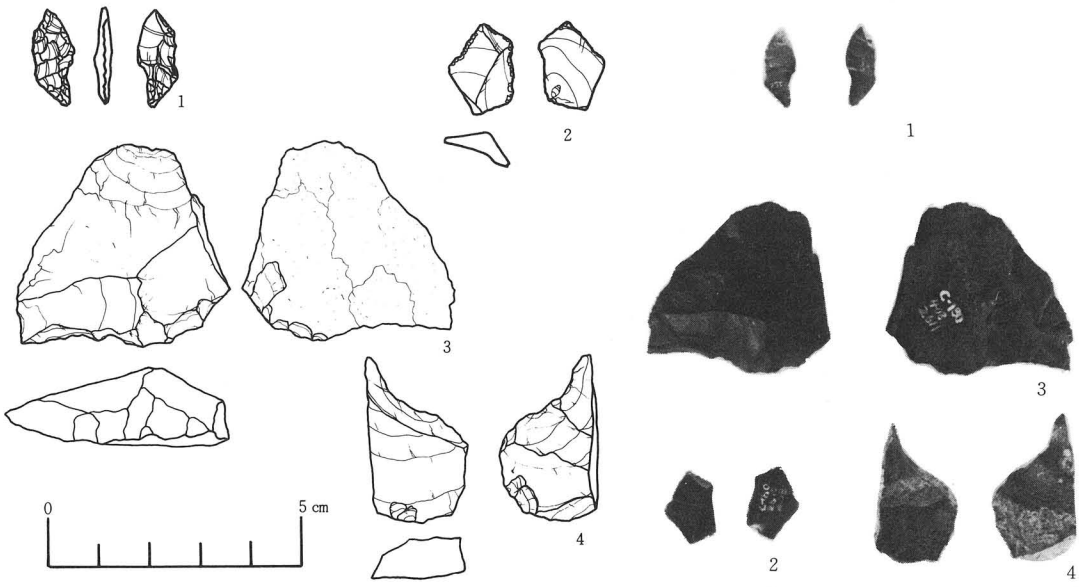
土壙北東際検出面で体部下半を欠失する深鉢形土器1点（第62図P1、第63図）が、横位でつぶれたような状態で出土し、同一面東側より大型で盤状の礫（礫石器Ⅵ－1類、第62図S1、第64図3）が1点出土した。

堆積土1～2層からは上記出土遺物以外に、小土器片44点（第Ⅵ・Ⅷ・XI群土器を含む）、石器7点を出土した他、多量の15cm前後の角礫が含まれていた。

10号土壙は9号土壙と形態こそ異なるが、出土遺物の点でかなり9号土壙と似た様相を示している。当土壙も、上面に置かれていた可能性が強い深鉢形土器が、第XⅢ群土器であることより、晩期後葉に所属すると考えられる。

佐　藤　甲　二

出土石器

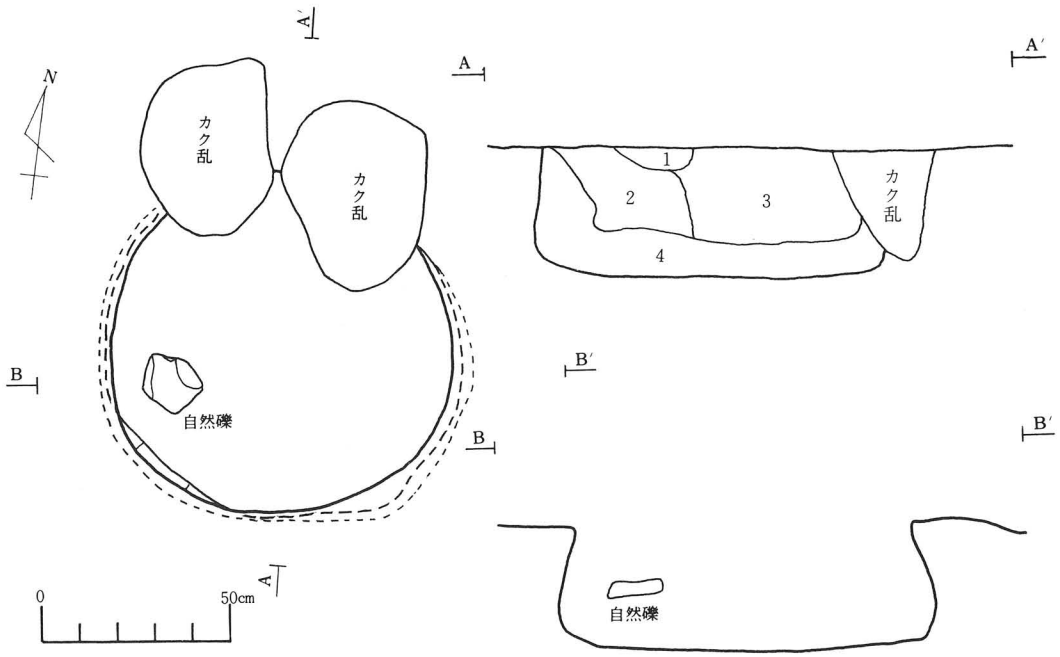


観　察　表

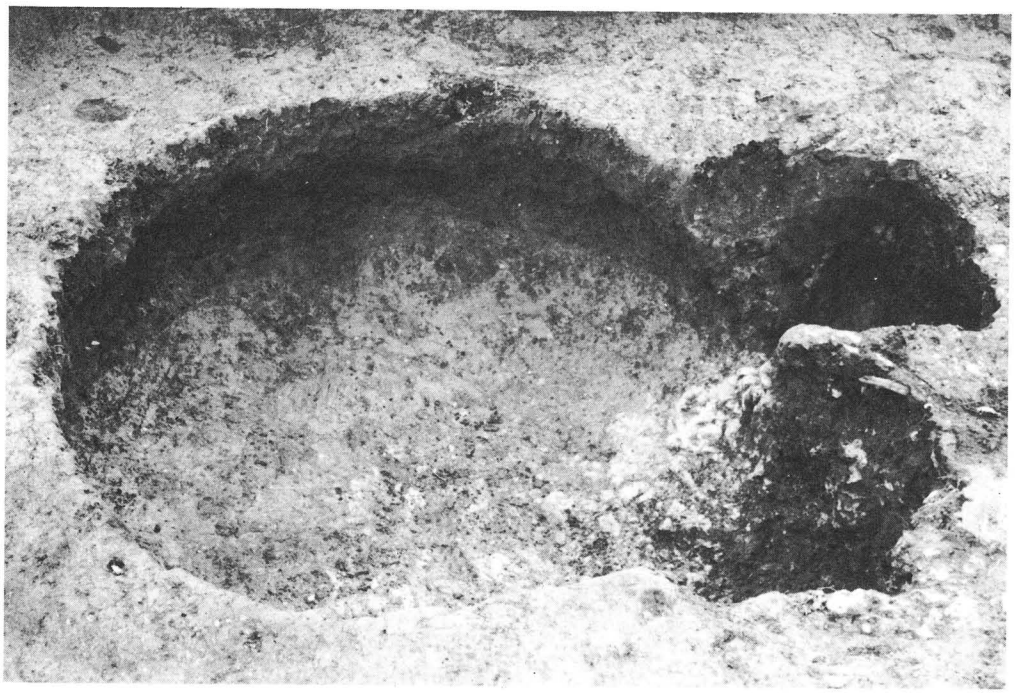
単位：mm

図	遺構名	堆積土	名　称	長　さ	幅	厚　さ	備　考	石　材	登録番号
1	7D	1	石　鏃	19.0	8.0	3.0	脚部のみ	珪質頁岩	2608
2	7D	1	M・F	18.0	12.5	4.5	———	珪質頁岩	2610
3	7D	1	スクレイパー	40.5	42.5	15.0	———	珪質頁岩	2611
4	7D	1	石　核	23.0	32.0	8.0	———	珪質頁岩	2608

8　号　土　壙



第57図　７号土壙出土石器・８号土壙平面図



8号土壙観察表

地区名	検出面	堆積土	平面形態		平面規模 cm			深さ cm	壁角	底面状態	分類	備考
			上端	下端	型	上端	下端					
M−15(a)	Ⅵ層上面	4	円	円	小	90×90	94×94	35	85°	平坦	A	カク乱に切られる

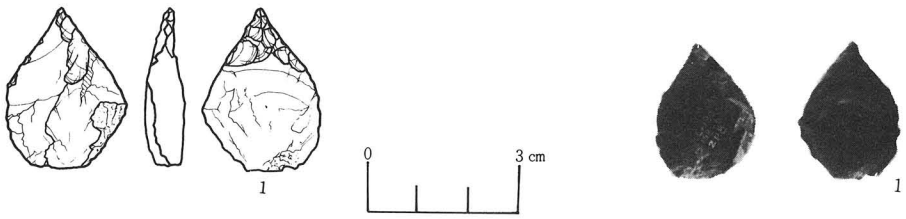
8号土壙土層註記表

堆積土	色調	土質	粘性	しまり	備考
1	7.5YR3/4 暗褐色	粘土質シル	やや強い	やや良	1mm地山ブロック少量。
2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	やや強い	良	焼土粒多量。1cm炭化物多量。5mm大の地山ブロック少量。
3	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	やや強い	やや良	炭火粒少量。1cmの地山ブロック少量。
4	7.5YR3/4 褐色	シルト質粘土	強い	やや良	1cm炭化物多量。1cm地山ブロック少量。地山ブロックは壁及び床面の崩壊土。

8号土壙出土遺物数量表

堆積土＼遺物	土器					石器	備考
	復元土器	口縁部	体部	底部	群別不明	ポイント	
3	—	1	8	—	9	1	堆積土1・2層は無遺物層
4	—	1	2	—	3	—	

出土石器



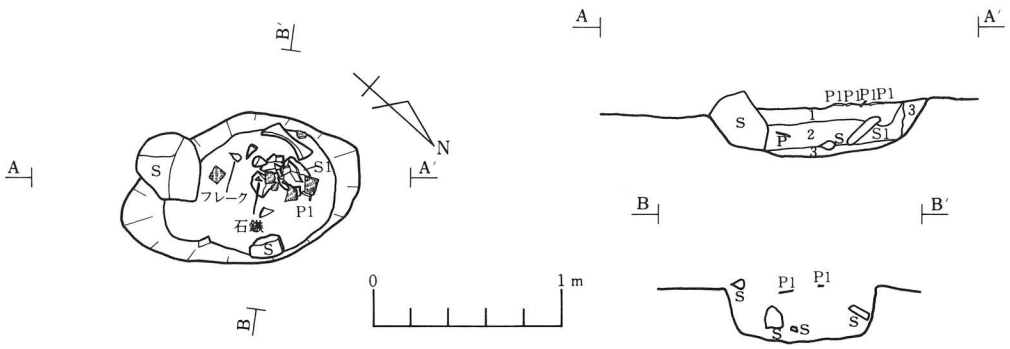
観察表

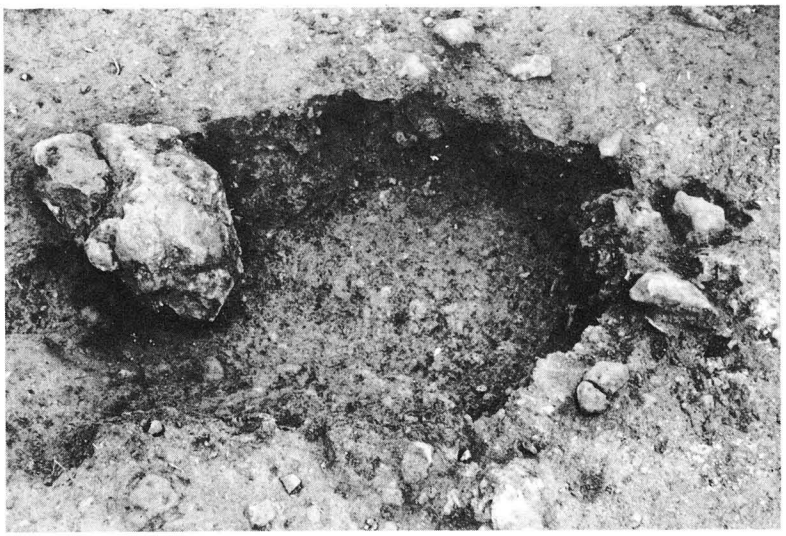
単位：mm

図	遺構名	堆積土	名称	長さ	幅	厚さ	備考	分類	石材	登録番号
1	8D	3	ポイント	32.0	24.0	8.0	尖頭部にわずかな調整	Ⅵ	珪質頁岩	2118

第58図　8号土壙出土石器

9 号 土 壙





9号土壙観察表

地区名	検出面	堆積土	平面形態 上端	平面形態 下端	平面規模 cm 型	平面規模 cm 上端	平面規模 cm 下端	深さ cm	壁角	底面状態	上端長軸方位	分類
P−11(a)	Ⅵ層上面	3	楕円	楕円	中	130×80	92×68	30	115°	若干凹状	N−33°−W	C

9号土壙土層註記表

堆積土	色調	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR⅔ 黒褐色	シルト質粘土	やや強い	やや良	凝灰岩。炭化粒少量。
2	7.5YR¾ 暗褐色	シルト質粘土	やや強い	やや良	1cm炭化物。
3	5YR⅔ 暗赤褐色	粘土質シルト	やや弱い	良	———

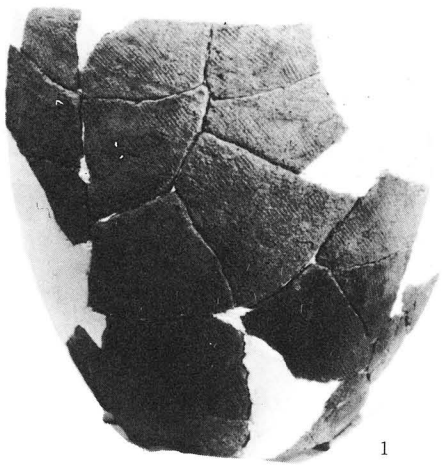
9号土壙出土遺物数量表

※（ ）内数値は復元土器数

堆積土＼遺物	土器 復元土器	土器 口縁部	土器 体部	土器 底部	土器 群別 Ⅷ	土器 群別 Ⅸ	土器 群別 XIII	土器 群別 不明	石器 石鏃	石器 S・F	石器 剥片	石器 石核	石器 礫石器 Ⅵ-1
検出面	1	2	14	1	1	2	1(1)	14	—	—	1	1	—
1	—	—	8	—	—	—	—	8	—	1	1	—	—
2	—	1	18	—	—	—	—	19	1	—	8	—	1
3	—	—	10	—	—	—	—	10	—	—	—	—	—

第59図　9号土壙平面図

出土土器

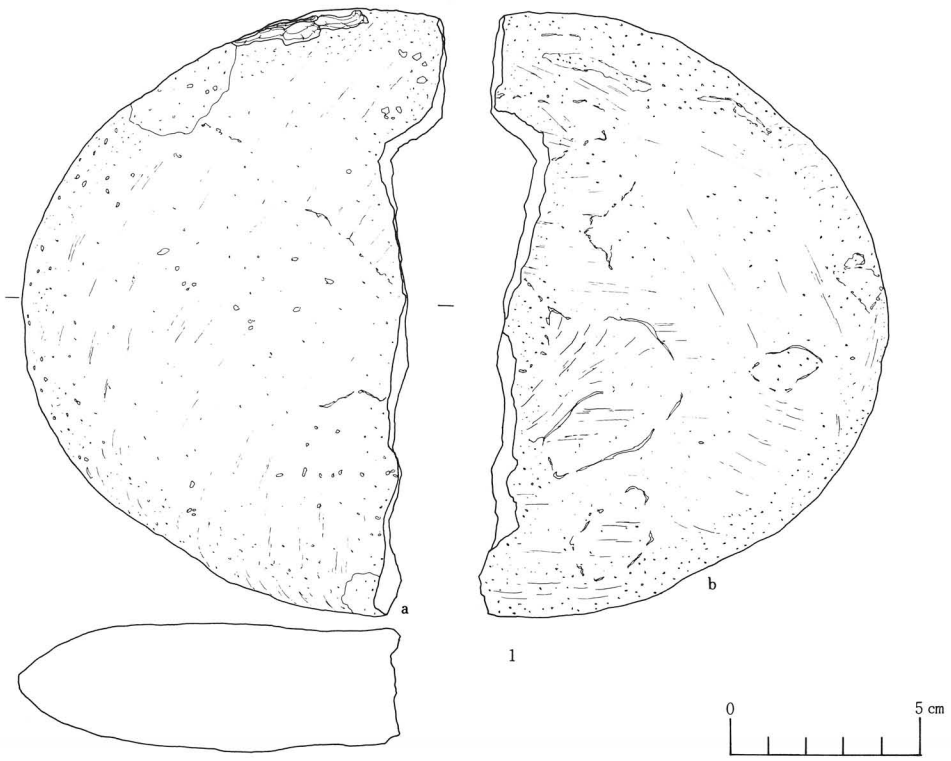


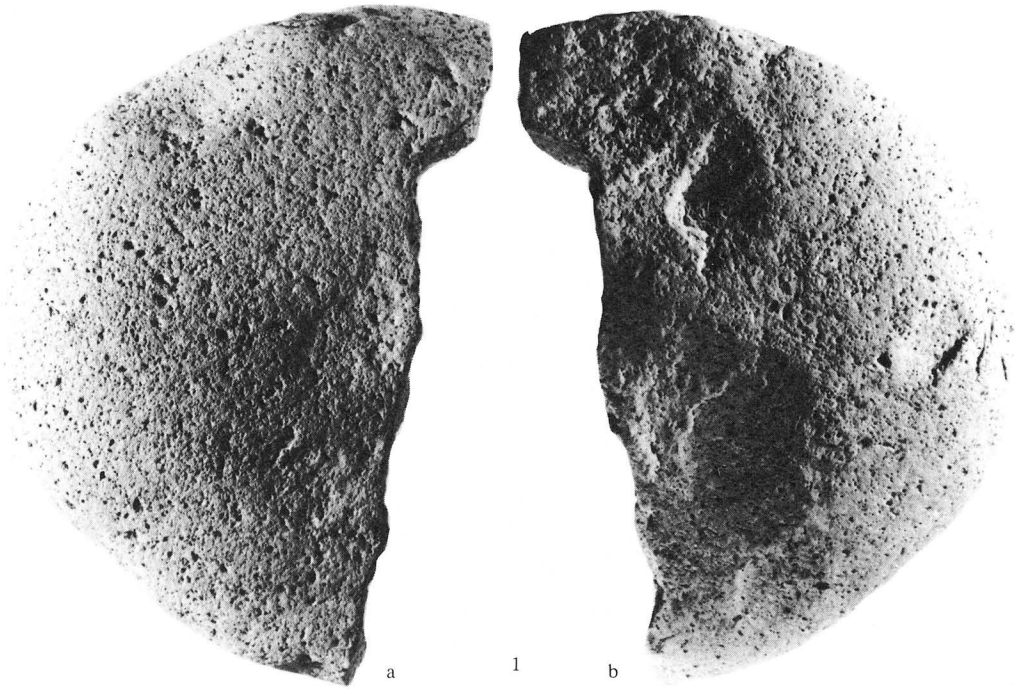
観　察　表

図	遺構名	堆積土	口　径	器　高	最大径	底　径	施文と調整	胎　土	分　類	備　　考
1	9 D	検出面	(29.7cm)	——	(34.9cm)	——	平縁、斜位ＲＬ結節縄文	砂粒多	ⅩⅢ1a2	体部下半に炭化物付着

第60図　9号土壙出土土器

出土土器



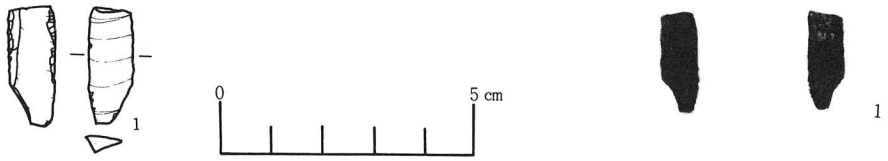


観　察　表

単位：mm, g

図	遺構	堆積土	長　さ	幅	厚　さ	重　量	礫の形態	使用痕・他	分　類	石　材	登録番号
1	9 D	2	(149.8)	(242.2)	(47.5)	2,600	G	a、b両面に磨痕(a)	Ⅵ－1	安山岩	2441

第61図　9号土壙出土石器（1）

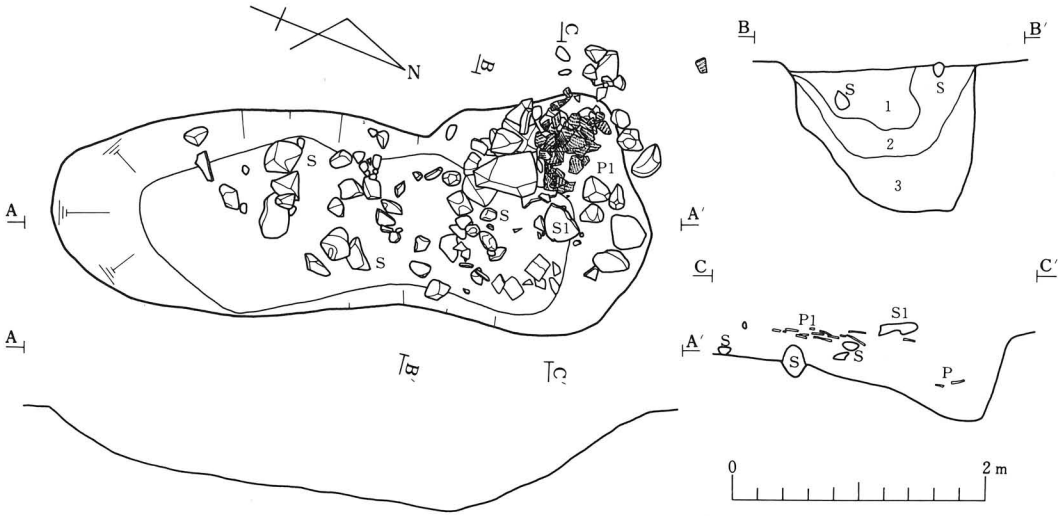


観 察 表

単位：mm

図	遺構名	堆積土	名 称	長 さ	幅	厚 さ	備 考	石 材	登録番号
1	9 D	1	S・F	23.0	9.0	3.0	両端欠損	珪質頁岩	2444

10 号 土 壙



10号土壙観察表

地区名	検出面	堆積土	平面形態 上端	平面形態 下端	平面規模 cm 型	平面規模 cm 上端	平面規模 cm 下端	深さ cm	壁角 長軸	壁角 短軸	底面状態	上端長軸方向	分類
P−11(c)	Ⅵ層上面	3	不整長楕円	不整長楕円	大	237×97	172×66	25〜40	160°	130°	凹凸状、斜位	N−24°−W	G

第62図　9号土壙出土石器(2)・10号土壙平面図

10号土壙土層註記表

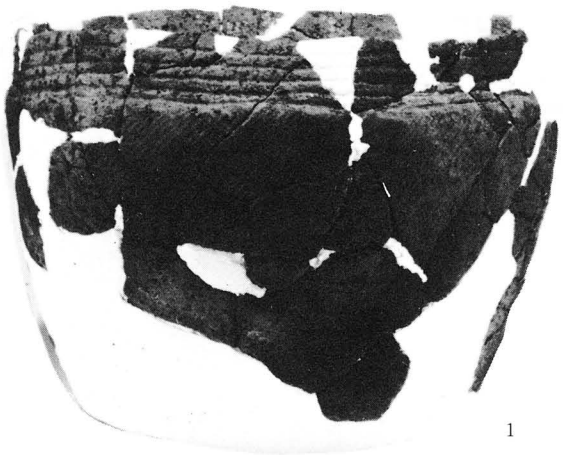
堆積土	色　調	土　質	粘　性	しまり	備　考
1	7.5YR3/2　黒褐色	粘土質シルト	やや強い	やや良	焼土ブロック。挙大の礫少量。
2	7.5YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	やや強い	やや不良	焼土ブロック多量。挙大の礫多量。
3	7.5YR5/4　褐　色	粘土質シルト	やや弱い	やや不良	焼土ブロック。2～3cm大の礫多量。

10号土壙出土遺物数量表

※( )内数値は復元土器数

堆積土＼遺物	土器									石器			
	復元土器	口縁部	体部	底部	群別 VI	VIII	XI	XIII	不明	スクレイパー	剝片	石核	礫石器 VI-1
検出面	1	2	10	—	1	1	—	1(1)	10	—	3	—	1
1	—	3	28	—	—	—	1	—	30	1	2	1	—
2	—	—	—	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—

出土土器

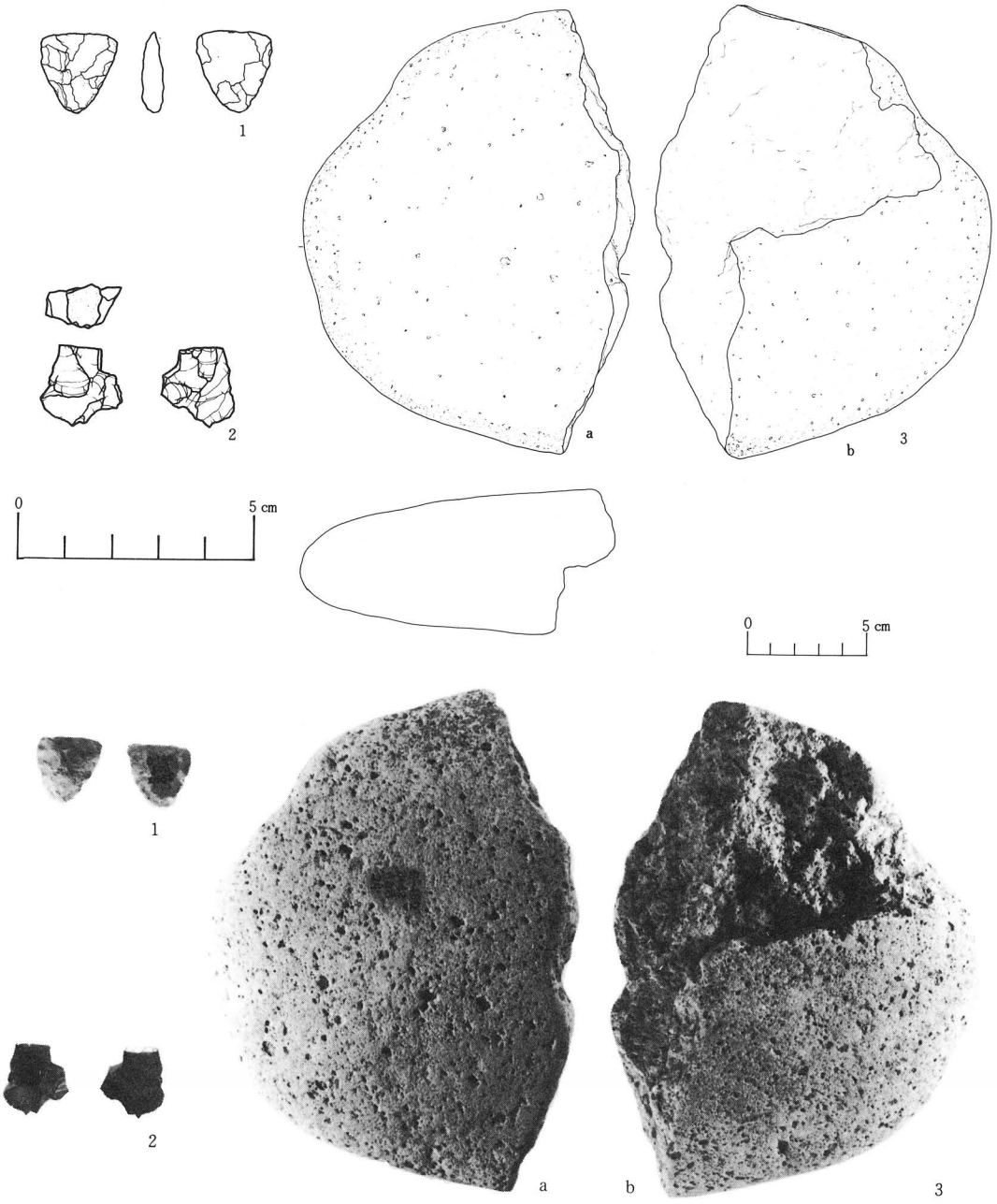


観　察　表

図	遺構名	堆積土	口　径	器　高	最大径	底　径	施　文　と　調　整	胎　土	分　類	備考
1	10D	検出面	25.7cm	——	28.0cm	——	平縁、頸部5条沈線、体部横位L縄文	砂粒多	XIII1b3	——

第63図　10号土壙出土土器

出土石器



観　察　表

単位：mm.g

図	遺構	堆積土	名　称	長さ	幅	厚さ	備　考	分類	石　材	登録番号
1	10D	1	スクレイパー	16.5	16.0	4.0	風化が著しい	—	流紋岩	2458
2	10D	1	石　核	16.0	17.5	9.5	———	—	珪質頁岩	2458

図	遺構	堆積土	長さ	幅	厚さ	重量	礫の形態	使　用　痕　・　他	分類	石　材	登録番号
3	10D	検出面	(189)	(142)	(62)	1,500	G	側面を除く全面に弱い磨き(a)がある。 破損面の稜は鈍い。	Ⅵ-1	安山岩	2442

第64図　第10号土壙出土石器

(4) 時 期 不 明

梨野A遺跡検出の遺構の大半はここに含まれ、埋設土基1基(4号)、ピット61個(6～66号)、土壙24基(11～34号)が検出された。

これら遺構はⅢ層、Ⅳb層排土後のⅤ層、Ⅵ層上面で検出されたが、出土遺物の点で　1.出土遺物がない　2.時期決定遺物を出土しない(出土遺物は全て自然堆積状況を示し、多量の遺物を出土しても縄文時代各時期の遺物を含み、堆積土層間にも時期的差異を見出せないもの)　3.遺構内出土遺物に一括性があっても時期決定遺物とは成り得ない(剥片のみの集中)もので、重複関係、遺構の形態の点からも縄文時代のどの時期に所属するか不明なものである。

土壙は規模では、小型7基(11・12・21～25号)、中型13基(13～17・26～33号)、大型3基(18～20号)、半掘の為規模不明のもの1基(34号)、形態では、B類1基(12号)、C類12基(11・12・17・19・22～24・27・29～32号)、D類3基(16・21・26号)、E類4基(14・15・18・28号)、F類1基(20号)、分類外1基(33号)、攪乱、半掘による分類不態なもの2基(25・34号)に分けられる。

以上検出遺構中で代表的あるいは特徴的な4号埋設土器、6号ピット、11～20号土壙については図版を掲載したが、他の遺構に関しては全体図、遺構観察表、出土遺物数量表を参照されたい。

4号埋設土器(第65図)

Q－7グリッド北隅に位置し、Ⅳb層排土後Ⅴ層上面で単独に検出された。体部下半をわずかに残す底部破片で直立して出土した。底部には焼成後の底部穿孔(外面より)がある。掘り方及びこれに伴う遺構は検出されなかったが、出土状況が特異であり、底部穿孔という点よりこの土器は埋設されていた可能性も十分考えられ、一応埋設土器として取り扱った。

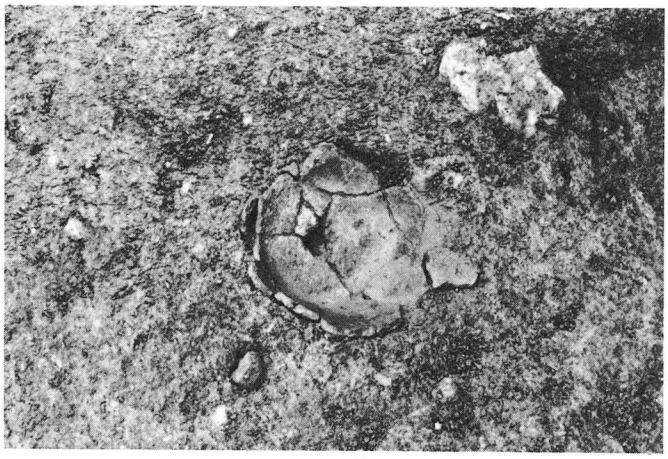
土器は大部分を欠失している為、所属時期は不明である。

6号ピット(第66～72図)

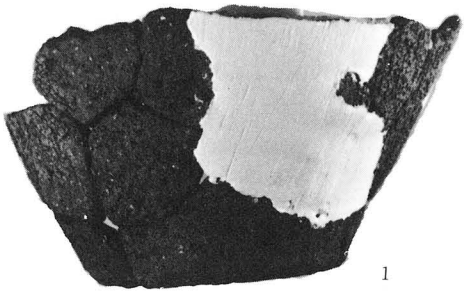
K－'6グリッド北東隅に位置し、Ⅲ層排土後Ⅴ層上面で検出された。剥片を中心とする石器88点が、径15cmの範囲に集中し、かつ重なった状態で出土した。検出面では遺物を中心として炭化粒のひろがりもみられたが、遺構プランは認められず、約5cm下げたⅥ層上面で上端規模40×20cm、深さ15cmの不整楕円形の落ち込みが不明瞭ながら検出された。落ち込みは形状が明確に把握出来ず、これら石器を伴う落ち込みかどうかは断定出来ない。しかしながら、これら石器の上のものと下のものとはレベル差があるという点より、何らかの落ち込み内に入れられていたことは確かで、石器のひろがりより、一応石器はピットに入られていたものと考える。

出土石器は剥片を主として、石匙1点、石錐1点、スクレイパー13点(ノッチ1点、「不定形石器」1点含む)等があり、この内接合資料5例(20点接合、9点接合、3点接合、2点接合、2

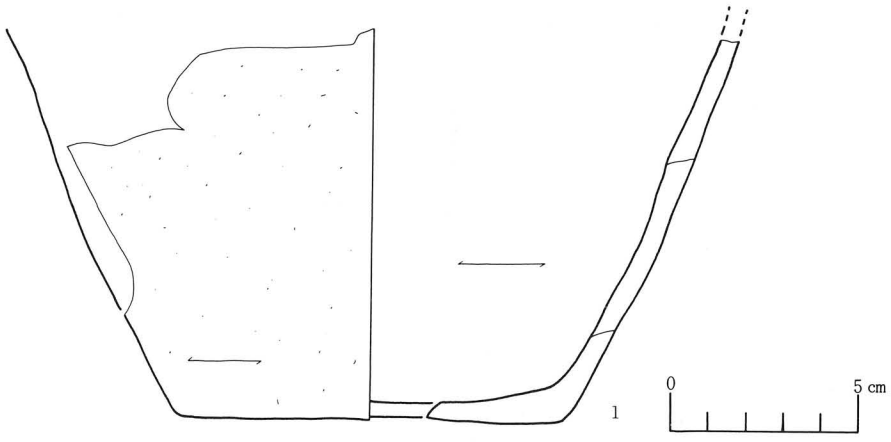
4 号埋設土器



出土土器



1



1

観 察 表

図	遺 構 名	層位	部位	器形	法量	施文・調整		備考
							底部	
1	4 号埋設土器	Ⅴ	体部下半～底部	深鉢	10.5cm	外面：磨き 内面：横位磨き	穿孔一径2～2.5cmの不整形・焼成後の外方加寧 内外面磨き・内面高さ２cmまで浅黄橙色	内外「ひび割れ」外面橙色 外面(高さ２～15cm)黒色炭化物付着 } 二次加熱か

第65図　4 号埋設土器

点接合が認められた。尚、下部落ち込み内の土壌、石器集中部の土壌のフローテーション結果では、チップ類は含まれていなかった。

11号土壙(第73図)

Ｍ－７グリッド西隅に位置し、Ⅲ層排土後Ⅵ層上面で検出された。13号土壙、14号土壙を切っている。上端長軸規模１ｍ弱の浅い小型Ｃ類土壙である。壁面、底面には地山礫が若干みられる。堆積土は単層である。

堆積土中より土器片56点(第Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ群土器を含む)、石器６点を出土している。

12号土壙(第74～77図)

Ｐ－11グリッド南西隅に位置し、Ⅲ層排土後Ⅵ層上面で検出された。上端長軸規模約90cmの上端平面形不整楕円形、下端平面形円形、深さ22cmの浅い小型Ｂ類の土壙である。南東側上端が少し崩落している。堆積土は２層から成り堆積土２層中には多量の炭化粒を含む。

堆積土２層下部から底面上を中心として、剥片、チップを多数出土し、これらの多くは同一母岩で、剥片６点は接合関係がみられた。また、これら資料はＱ－12グリッドⅠ層出土の剥片と同一母岩、接合関係を示す。

堆積土１層より小土器片22点(第Ⅵ・Ⅶ群土器を含む)、堆積土１・２層より上記資料を含めた石器200点が出土している。

13号土壙(第78～79図)

Ｍ－６グリッド南東隅に位置し、Ⅲ層排土後Ⅵ層上面で検出された。上端東側を一部11号土壙に切られている。上端長軸規模160cmの浅い中型Ｃ類の土壙である。底面、壁面とも地山礫がみられ凹凸状を呈す。堆積土は単層である。

堆積土より土器片70点(才Ⅴ・Ⅵ・Ⅷ・Ⅸ群土器を含む)、石器６点が出土している。

14号土壙(第79図)

Ｍ－７グリッド西隅に位置し、Ⅲ層排土後Ⅵ層上面で検出された。上端南側を一部11号土壙に切られている。上端長軸規模約110cmの中型Ｅ類の土壙である。底面は狭く、強く凹状を呈す。堆積土は３層から成り、堆積土３層中には多量の炭化粒が含まれる。

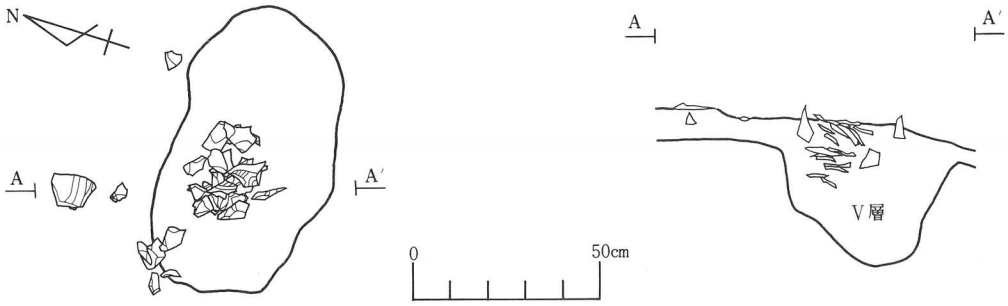
堆積土３層から、小土器片27点(時期の判るものは出土せず)、石器５点が出土した。

15号土壙(第80～81図)

Ｍ－７グリッド南西側に位置し、Ⅲ層排土後Ⅵ層上面で検出された。上端長軸規模約160cmの中型Ｅ類の土壙であるが、短軸断面はすり鉢状よりもやや開いたＵ字形を呈す。壁面には部分的に地山礫がみられる。堆積土は２層から成る。

検出面及び堆積土１層から、土器片81点(第Ⅴ・Ⅵ・Ⅷ・Ⅺ群土器を含む)、石器10点を出土している。

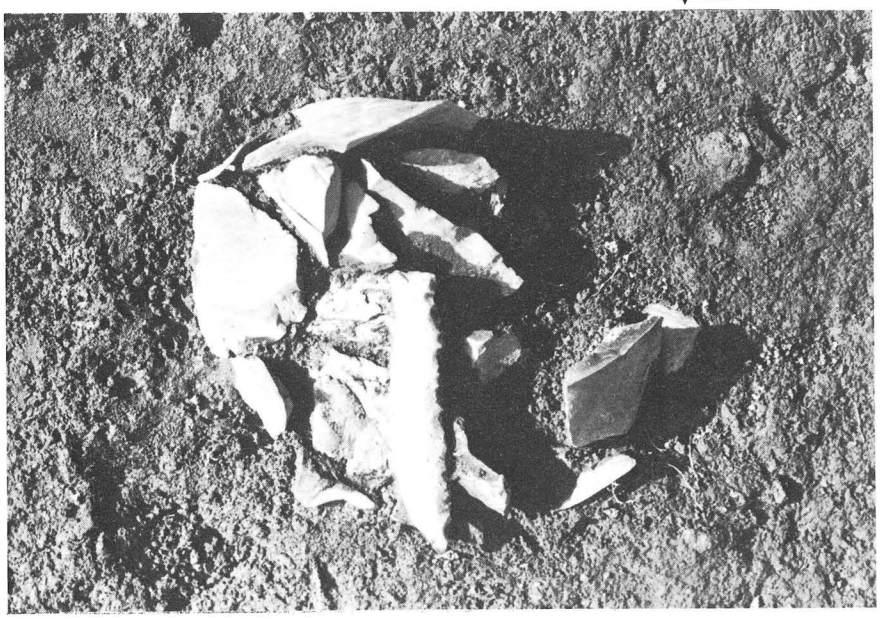
6 号 ピ ッ ト



遺物出土状況

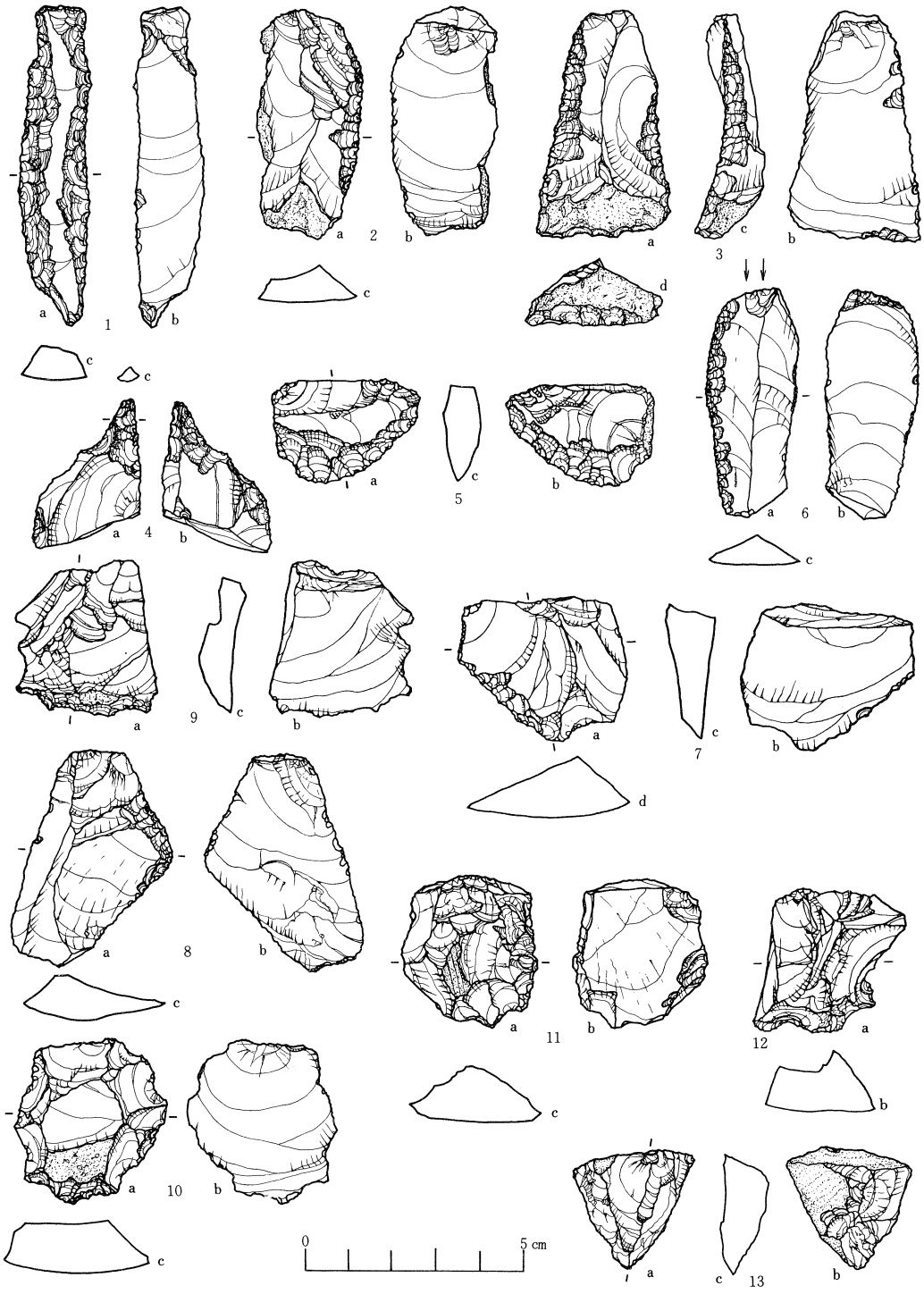
↑ 西より

↓ 南より



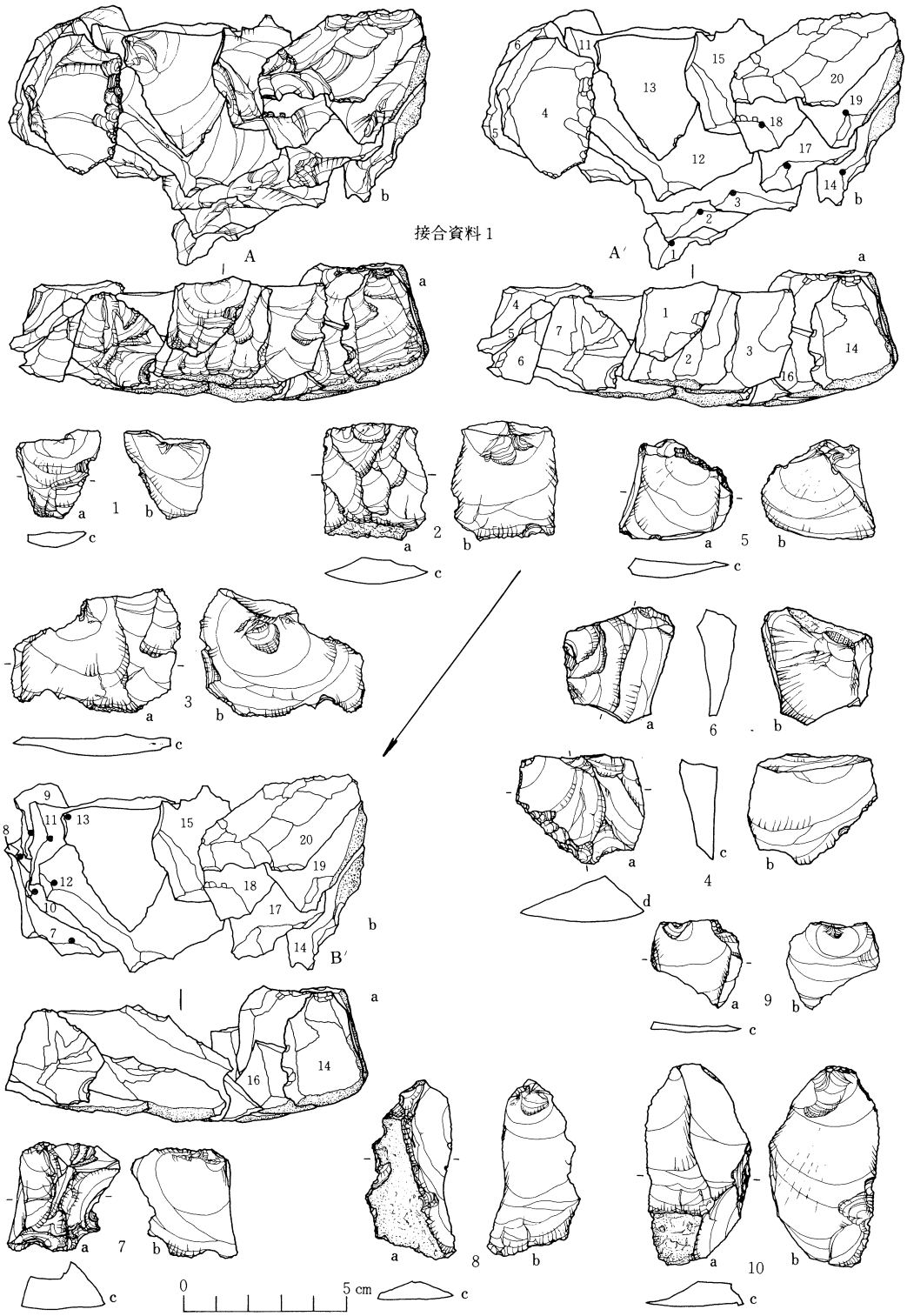
第66図　6 号ピット平面図

出土石器



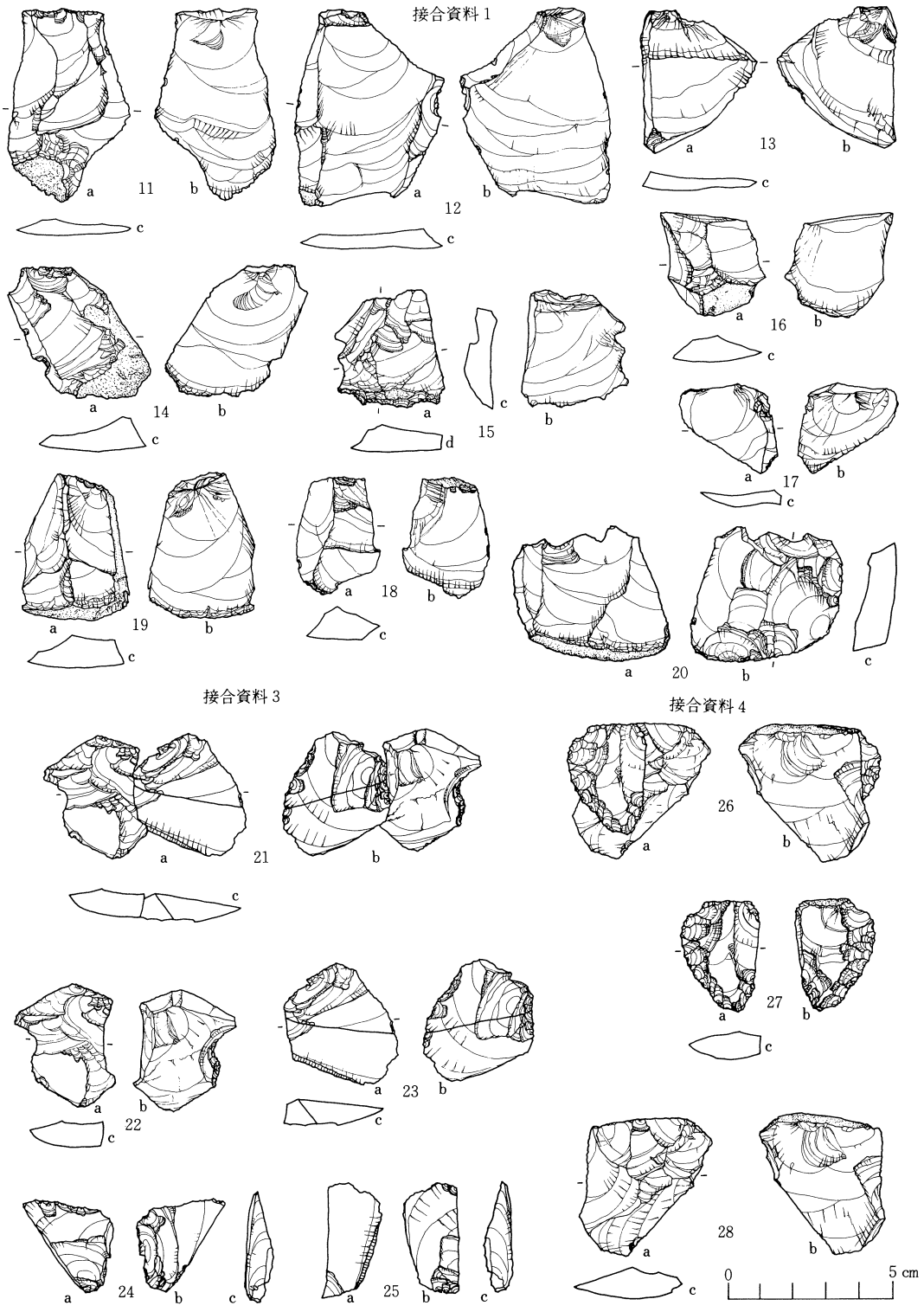
1.石匙　4.石錐　6.ビュアリン（彫刻刀形石器）、2．3．5．7～12.スクレイパー　13.石核

第67図　６号ピット出土石器（１）



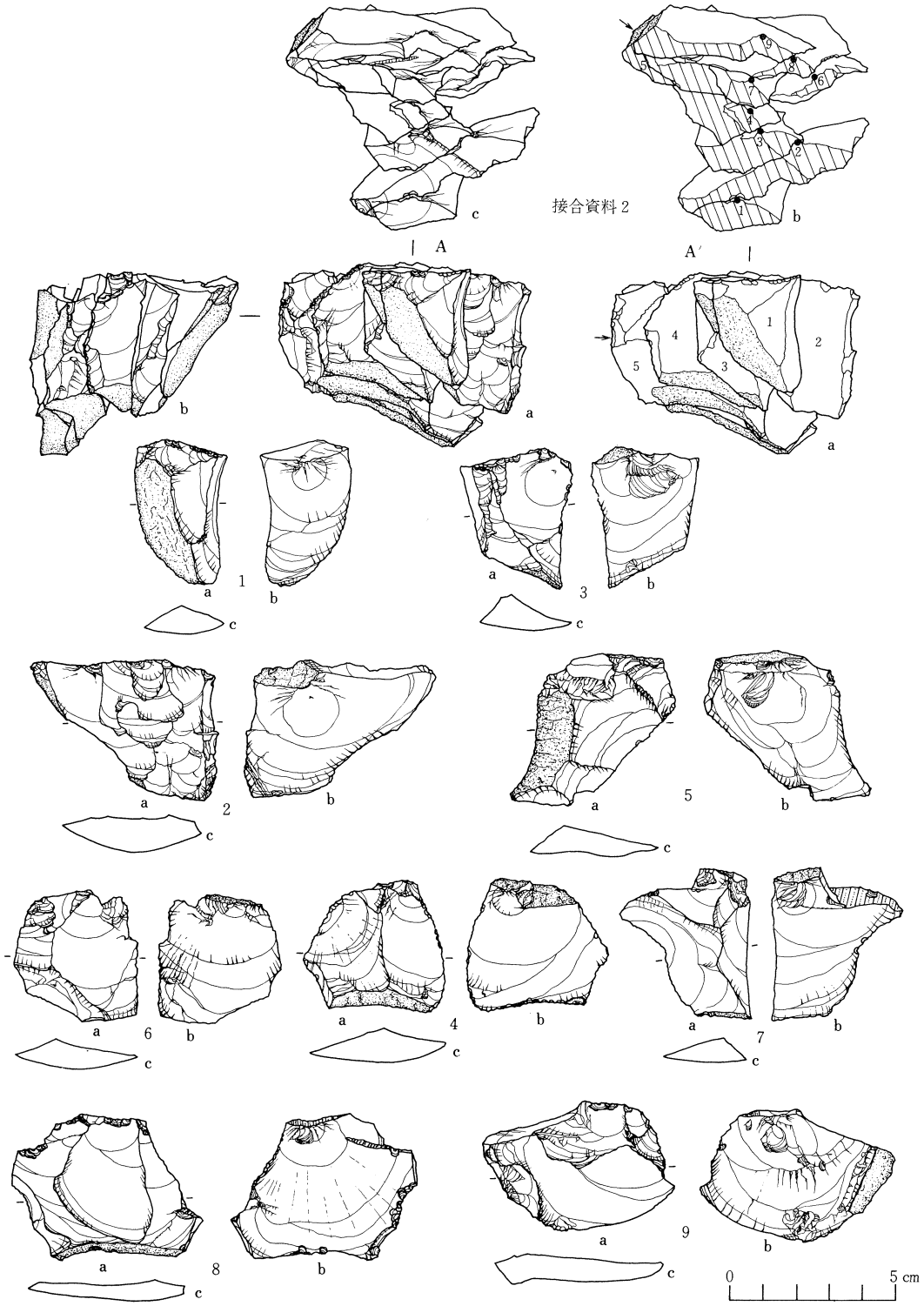
A′b 図、B′b 図の黒点は剥片のバルブの位置を示す。またA′図、B′図の番号は、石器の番号に一致する。

第68図　6号ピット出土石器（2）



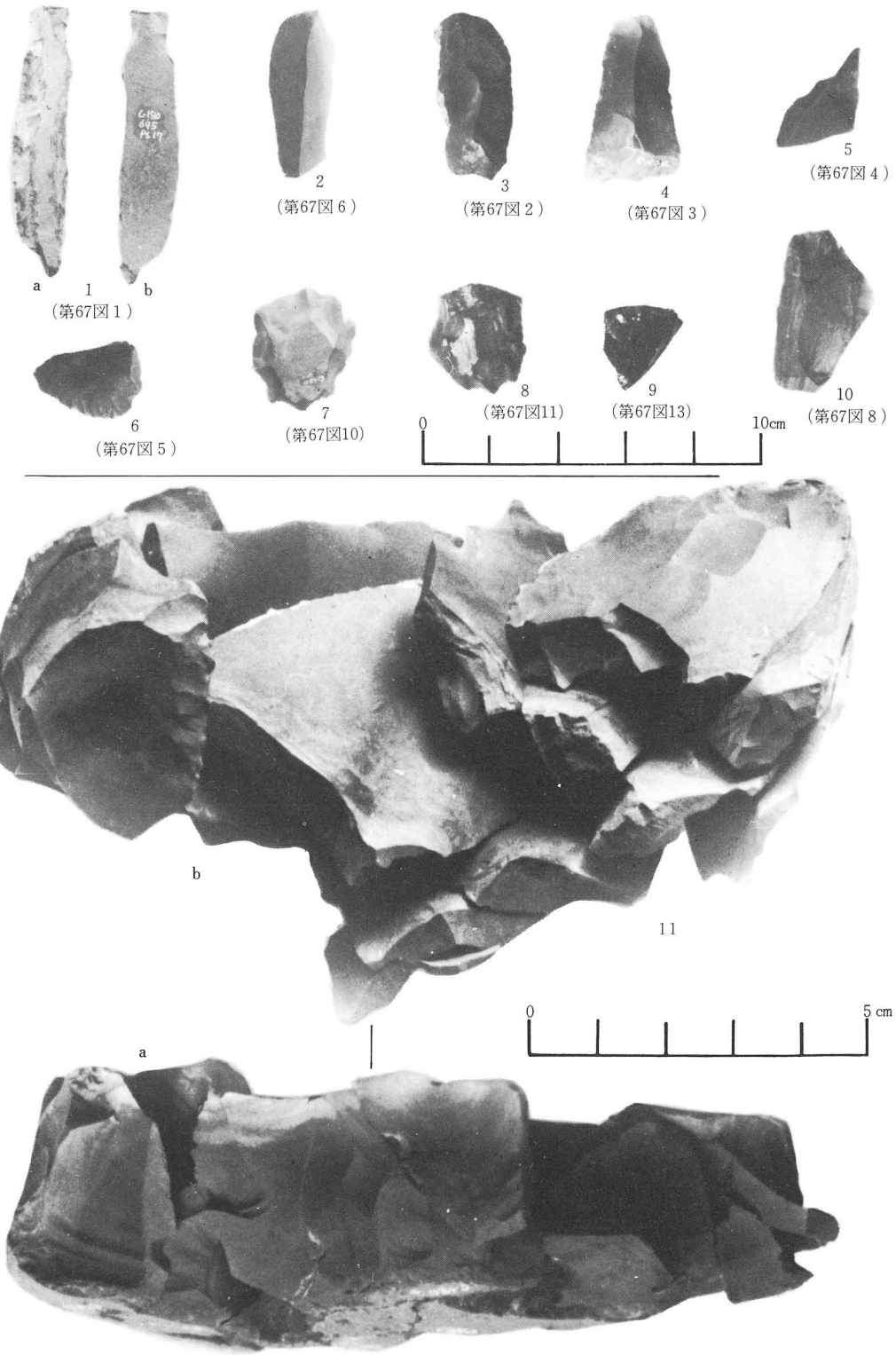
11～20．接合資料１　21～25．接合資料３　26～28　接合資料４

第69図　６号ピット出土石器（３）



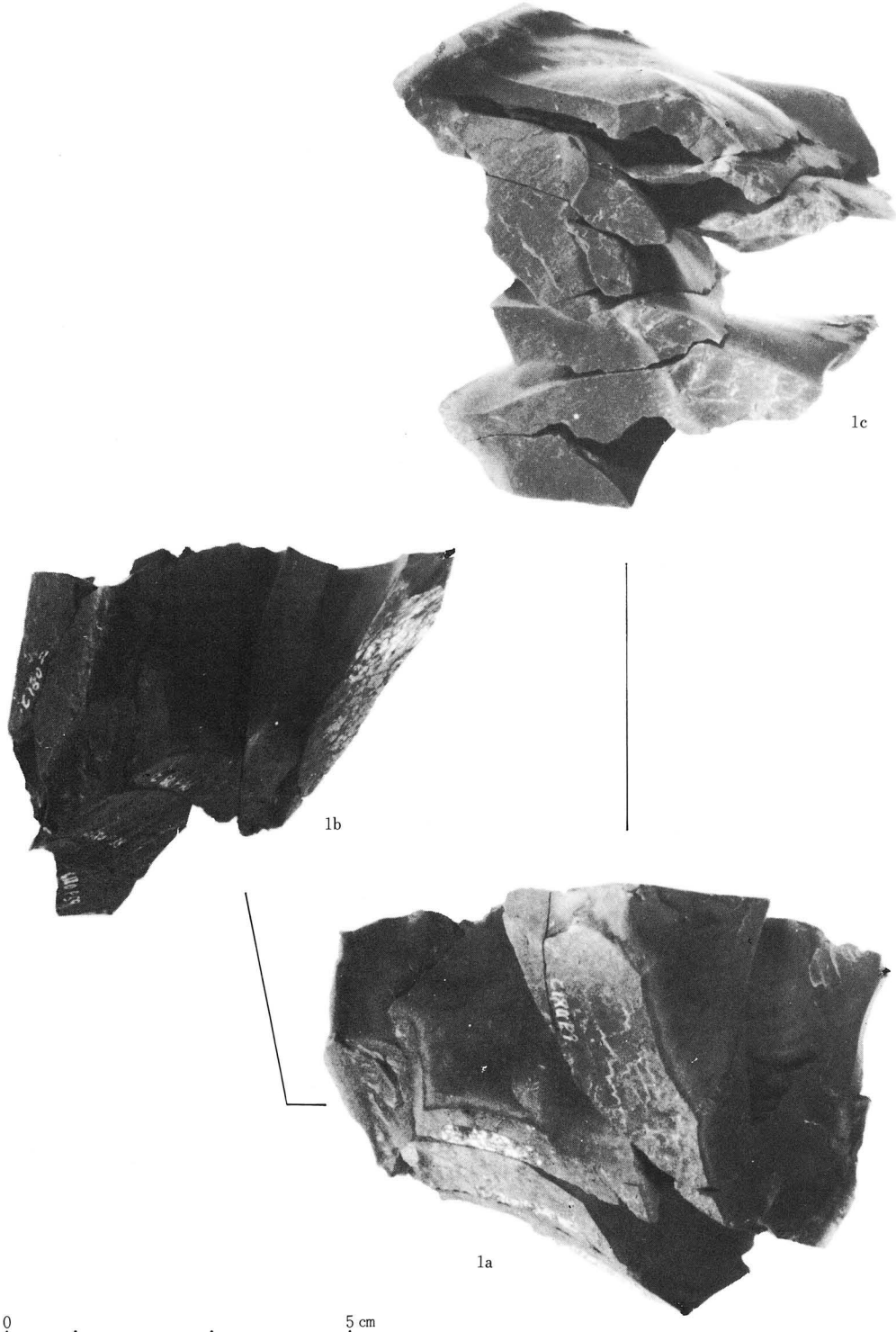
A′b図の斜線部は打面、黒点は剥片のバルブを示す。またA′図の番号は石器の番号と一致し、矢印は剥片5に対する加撃方向を示している。

第70図　6号ピット出土石器(4)



1.石匙　2.ビュアリン（彫刻刀形石器）　5.石錐　3、4、6～8、10.スクレイパー　9.石核　11. 接合資料１

第71図　６号ピット出土石器（５）



接合資料２

第72図　６号ピット出土石器(６)

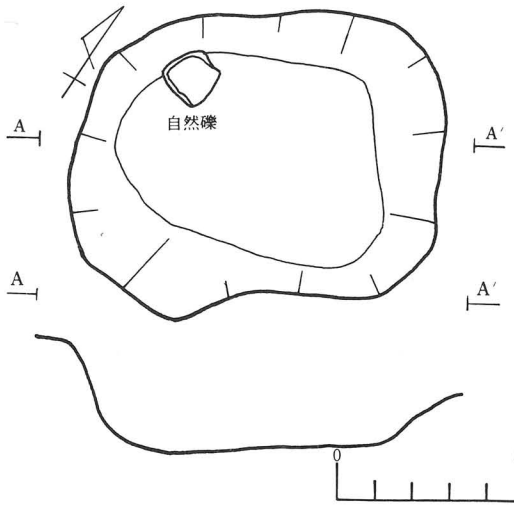
第2表　6号ピット石器計測表（1）

No	石　材	長さ×幅×厚　cm	名　　称	登録番号	備　　考	図番号
1	頁　岩	2.57×2.60×0.44	剥　片	C180 ネ	接合資料No 1（母岩別資料 1）	68図－1
2	〃	3.58×3.19×0.65	〃	〃　ナ	〃　〃	〃　2
3	〃	3.63×5.32×0.68	〃	〃　フ	〃　〃	〃　3
4	〃	3.48×3.87×1.25	スクレイパー（s）	〃　P.39	〃　〃	67図－7 68図－4
5	〃	2.65×3.06×0.56	剥　片	〃　P.18	〃　〃	〃　5
6	〃	2.86〈×3.57〈×1.20〈	〃	〃　P.61	〃　〃	〃　6
7	〃	3.30×4.21×1.50	スクレイパー（デ）	〃　P. 3	〃　〃	67図－12 68図－7
8	〃	4.82×4.10×0.50	剥　片	〃　ソ	〃　〃	〃　8
9	〃	2.64×2.74×0.28	〃	〃　P.31	〃　〃	〃　9
10	〃	6.10×3.29×1.04	〃	〃　P. 1	〃　〃	〃　10
11	〃	5.90×3.63×0.51	〃	〃　P.54	〃　〃	69図－11
12	〃	6.03×4.41×0.59	〃	〃　P.13	〃　〃	〃　12
13	〃	4.31×3.57×0.58	〃	〃　レ	〃　〃	〃　13
14	〃	3.96×4.31×0.87	スクレイパー（ノ）	〃　P.50	〃　〃	〃　14
15	〃	3.51×3.39×0.85	〃　（e）	〃　P.30	〃　〃	67図－9 69図－15
16	〃	2.99〈×3.37〈×0.72〈	剥　片	〃　P.16	〃　〃	〃　16
17	〃	2.93×3.43×0.47	〃	〃　タ	〃　〃	〃　17
18	〃	3.45×2.56×0.97	〃	〃　P.37	〃　〃	〃　18
19	〃	4.45×3.48×0.97	〃	〃　P.43	〃　〃	〃　19
20	〃	4.14×4.40×1.07	石核（剥片素材）	〃　P.47	〃　〃	〃　20
21	〃	2.79×3.44×0.74	剥　片	〃　ツ	〃	
22	〃	3.89×3.86×1.13	〃	〃　P.28	〃	
23	〃	3.82×4.18×1.38	スクレイパー（デ）	〃　P.48	〃	
24	〃	4.13×2.76×0.88	剥　片	〃　P. 9	接合資料No 2（母岩別資料 2）	70図－1
25	〃	4.16×5.57×1.13	〃	〃　P.35	〃　〃	〃　2
26	〃	4.33×3.32×1.06	〃	〃　P.24	〃　〃	〃　3
27	〃	4.10×4.29×1.10	微細剥離痕のある剥片	〃　P.46	〃　〃	〃　4
28	〃	4.50×5.14×1.01	剥　片	〃　P.38	〃　〃	〃　5
29	〃	4.10×3.78×0.86	〃	〃　P.14	〃　〃	〃　6
30	〃	4.52×4.49×0.79	〃	〃　P.36	〃　〃	〃　7
31	〃	4.57×5.68×0.69	二次加工のある剥片	〃　P.59	〃　〃	〃　8
32	〃	3.99×5.86×0.99	剥　片	〃　ニ	〃　〃	〃　9
33	〃	4.05×5.74×0.85	微細剥離痕のある剥片	〃　P.63	接合資料No 3（母岩別資料 3）	69図－22
34	〃		二次加工のある剥片	〃　P.55	〃　〃	〃　24
35	〃		二次加工のある剥片	〃　P. 8	〃　〃	〃　25
36	〃	4.09×3.64×0.90	剥　片	〃　P.40	接合資料No 4（母岩別資料 4）	〃　28
37	〃	3.38×2.29×0.84	スクレイパー（s）	〃　ワ	〃　〃	69図－27 67図－5
38	〃	3.46×3.93×0.90	剥　片	〃　P.45	接合資料No 5（母岩別資料 5）	
39	〃	4.10×3.56×0.69	〃	〃　P.60	〃　〃	
40	〃	3.43×4.62×0.51	〃	〃　P.19	〃	
41	めのう	4.44×7.29×0.76	〃	〃　カ		
42	頁　岩	3.55×2.26×0.76	〃	〃　ホ		
43	〃	7.82×4.90×1.14	微細剥離痕のある剥片	〃　ヌ		
44	〃	6.59×4.40×2.14	剥　片	〃　ハ		

第３表　６号ピット石器計測表（２）

No	石　材	長さ×幅×厚　cm	名　　称	登録番号	備　　考	図番号
45	頁　岩		砕　片	C180 リ		
46	〃	5.34×7.92×0.79	剥　片	〃　イ		
47	〃	4.28×3.72×0.72	微細剥離痕のある剥片	〃　オ		
48	〃	3.07×4.10×0.68	二次加工のある剥片	〃　ロ		
49	めのう	2.39×1.93×0.66	剥　片	〃　ト		
50	頁　岩		砕　片	〃　チ		
51	〃		〃	〃　ヘ		
52	〃	3.46×5.20×0.94	スクレイパー（ｅ）	〃　P.65		
53	〃	5.23×3.56×1.36	二次加工のある剥片	〃　P.44		
54	〃	7.37×1.59×0.69	石　匙	〃　P.17	縦長、二重パティナ	67図－１
55	〃	3.87〈×2.26〈×1.43〈	剥　片	〃　P.27		
56	めのう	3.73×3.41×1.66	石　核	〃　P.58		
57	頁　岩	4.05×3.52×0.80	剥　片	〃　P.49		
58	めのう	3.98×4.53×0.65	〃	〃　P. 5		
59	頁　岩	3.71×3.58×1.18	微細剥離痕のある剥片	〃　P.15		
60	〃	3.56×3.50×1.71	二次加工のある剥片	〃　P.22		
61	〃	5.85×5.92×1.15	剥　片	〃　P.62		
62	〃	5.03×3.60×1.11	二次加工のある剥片	〃　P. 4		
63	〃	4.67×3.49×0.68	微細剥離痕のある剥片	〃　P. 2		
64	〃	5.01×4.65×0.94	二次加工のある剥片	〃　P.57		
65	〃	3.82×5.40×0.82	剥　片	〃　P.33		
66	〃	2.53×2.84×0.69	二次加工のある剥片	〃　P.32		
67	鉄石英	2.62×2.08×0.63	剥　片	〃　P.12		
68	頁　岩	2.00〈×2.95〈×0.29〈	〃	〃　P.20	折れている	
69	〃	2.15×2.39×0.31	〃	〃　P.52		
70	〃		砕　片	〃　P.53		
71	〃	1.91〈×2.44〈×0.43〈	剥　片	〃　P.34	折れている	
72	〃	3.18×2.72×0.90	〃	〃　P.10		
73	〃	2.34〈×1.99〈×0.73〈	〃	〃　P.26	折れている	
74	〃	3.35×5.07×1.27	スクレイパー（ｓ）	〃　P.11		
75	〃	2.07〈×2.54〈×1.00〈	二次加工のある剥片	〃　P.21		
76	〃		剥　片（？）	〃　P.56	風化著しく	
77	〃	3.40〈×2.35〈×1.10〈	剥　片	〃　P.25		
78	〃	3.72×2.88×0.90	〃	〃　P.41		
79	〃		砕　片	〃　P.23		
80	〃		〃	〃　P. 7		
81	〃	5.21×3.00×1.06	スクレイパー（ｓ・ｅ）	〃　ル		67図－３
82	めのう	5.09×3.50×0.97	〃　（ｓ）	〃　P.64		67図－８
83	頁　岩	5.38×2.53×0.89	〃　（ｓ）	〃　P.42		67図－２
84	〃	4.85×3.55×0.70	ピュアリン(?)＋スクレイパー(s)	〃　P.51		67図－６
85	〃	3.22×2.34×0.82	石　錐	〃　P. 6		67図－４
86	〃	3.39×3.04×1.33	スクレイパー（デ）	〃　ヨ		67図－11
87	〃	3.80×3.50×1.14	〃　（デ）	〃　ン		67図－10
88	黒曜石	2.58×2.76×1.09	石　核	〃　P.29		67図－13

11号土壙



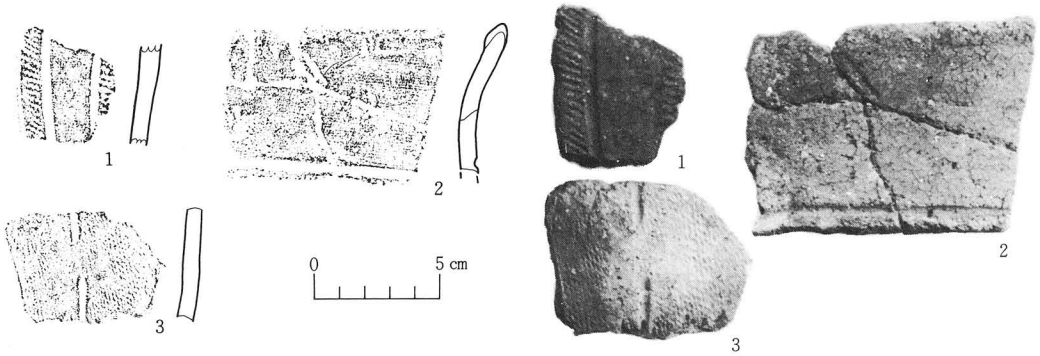
11号土壙観察表

地区名	検出面	堆積土	平面形態 上端	平面形態 下端	平面規模cm 型	平面規模cm 上端	平面規模cm 下端	深さ cm	壁角	底面状態	上端長軸方位	分類	備考
M-7(d)	Ⅵ層上面	1	不整楕円	不整楕円	小	97×78	74×53	28	120°	若干凹状	N-80°-E	C	13D、14Dを切る

11号土壙出土遺物数量表

遺物 / 堆積土	土器 復元土器	口縁部	体部	底部	群別 Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	不明	石器 スイクパレー	剥片	チップ	石核
検出面	—	2	19	2	1	—	—	22	2	1	1	1
1	—	2	30	1	—	5	1	27	—	—	—	1

出土土器

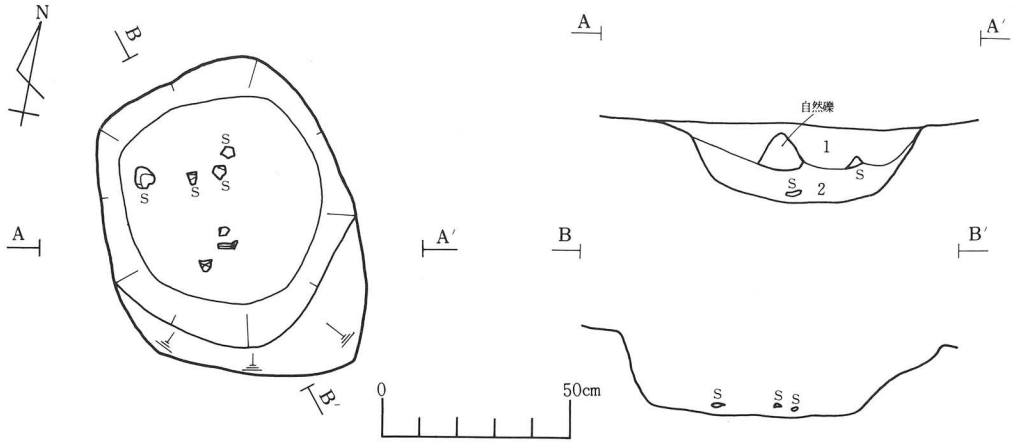


観察表

図	遺構	堆積土	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	11D	1	体部	深鉢	縦位LR縄文→縦位弧状磨消縄文	Ⅸ?	———
2	11D	1	口縁部	深鉢Ⅰ	横位研磨→横位沈線文	Ⅷ	口唇部内面肥厚
3	11D	1	体部	深鉢Ⅰ	縦位R撚糸文→縦位鎖状沈線文・弧状沈線文	Ⅷ1b	外面の一部に黒色の付着物

第73図　11号土壙平面図・出土土器

12 号 土 壙



12号土壙観察表

地区名	検出面	堆積土	平面形態 上端	平面形態 下端	平面規模cm 型	平面規模cm 上端	平面規模cm 下端	深さ cm	壁角 長軸	壁角 短軸	底面 状態	上端長軸方位	分類	備考
P−11(d)	Ⅵ層上面	2	不整楕円	円形	小	89×65	56×52	22	115°	105°	若干凹状	N−42°−W	B	南壁崩壊

12号土壙土層註記表

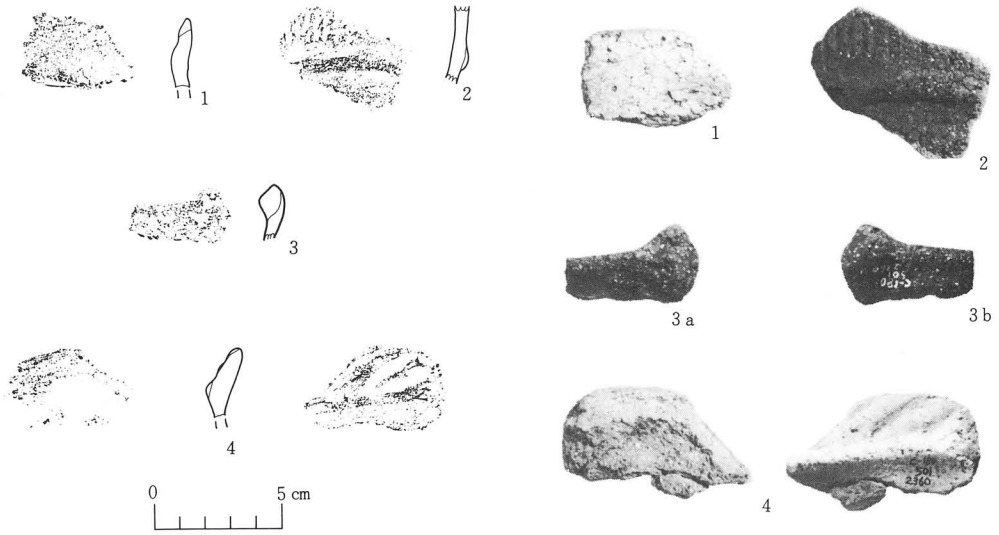
堆積土	色調	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR3/3 黒褐色	シルト	やや弱い	やや良	1～2㎜凝灰岩粒。1㎝の赤みかかった凝灰岩粒少量。
2	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	やや強い	やや不良	5㎜凝灰岩粒少量。5㎜炭化物ブロック。炭化粒多量。

12号土壙出土遺物数量表

遺物 / 堆積土	土器 復元土器	土器 口縁部	土器 体部	土器 底部	土器 群別 Ⅵ	土器 群別 Ⅶ	土器 群別 不明	石器 石鏃	石器 スクレイパー	石器 剝片	石器 チップ
1	—	4	18	—	1	1	20	—	—	2	—
2	—	—	—	—	—	—	—	1	3	23	172

第74図　12号土壙 平面図

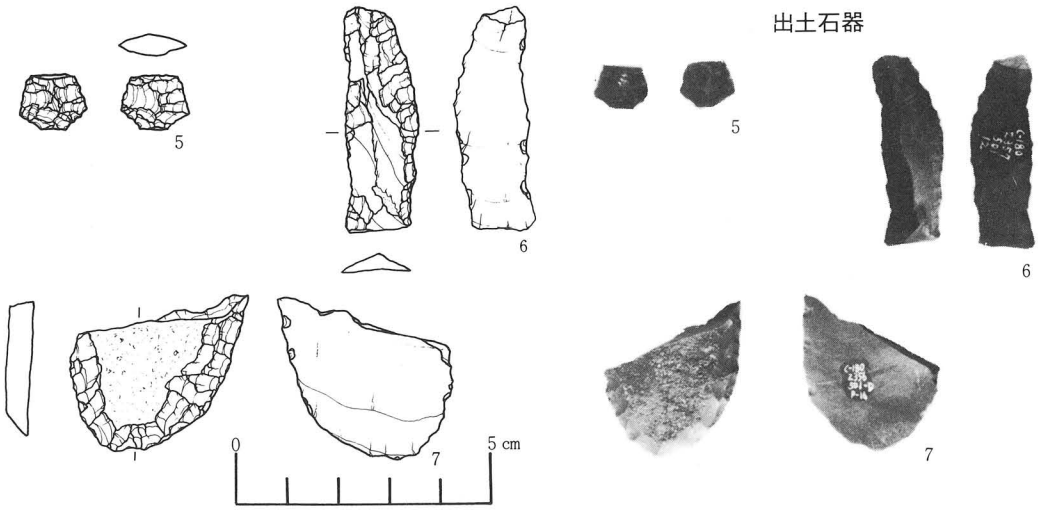
出土土器



観　察　表

図	遺構	堆積土	部　位	器　形	施　文　・　調　整	分類	備　考
1	12D	1	口縁部	深　鉢	研磨	—	内面凹線状に凹む
2	12D	1	体　部	深鉢？	縦位L撚糸文・隆線文→磨き	Ⅵ	———
3	12D	1	口縁部	？	研磨	—	———
4	12D	1	口縁部	深　鉢	外面：剝離、一部研磨残存　内面：連続斜位隆沈線文	Ⅶ	———

出土石器

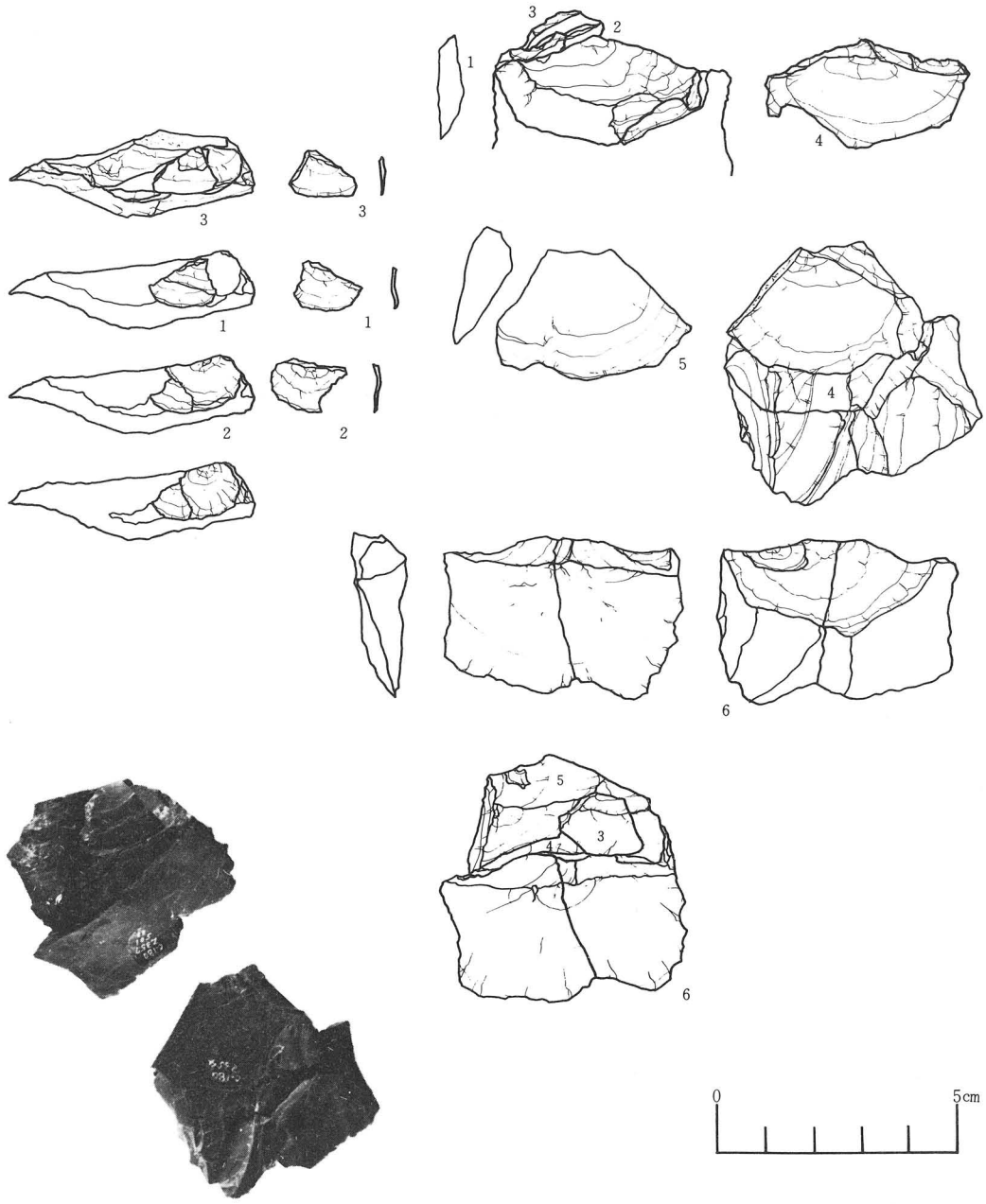


観　察　表

単位：mm

図	遺構	堆積土	名　称	長さ	幅	厚さ	備　考	石　材	登録番号
5	12D	2	石　鏃	(6.0)	13.0	(4.0)	先端部と基部が破損	メノウ	3003
6	12D	2	スクレイパー	45.0	14.2	3.0	背面に調整が集中	珪質頁岩	2357
7	12D	2	スクレイパー	(31.0)	(35.0)	(5.0)	基部が破損	珪質頁岩	2356

第75図　12号土壙出土土器・石器（1）

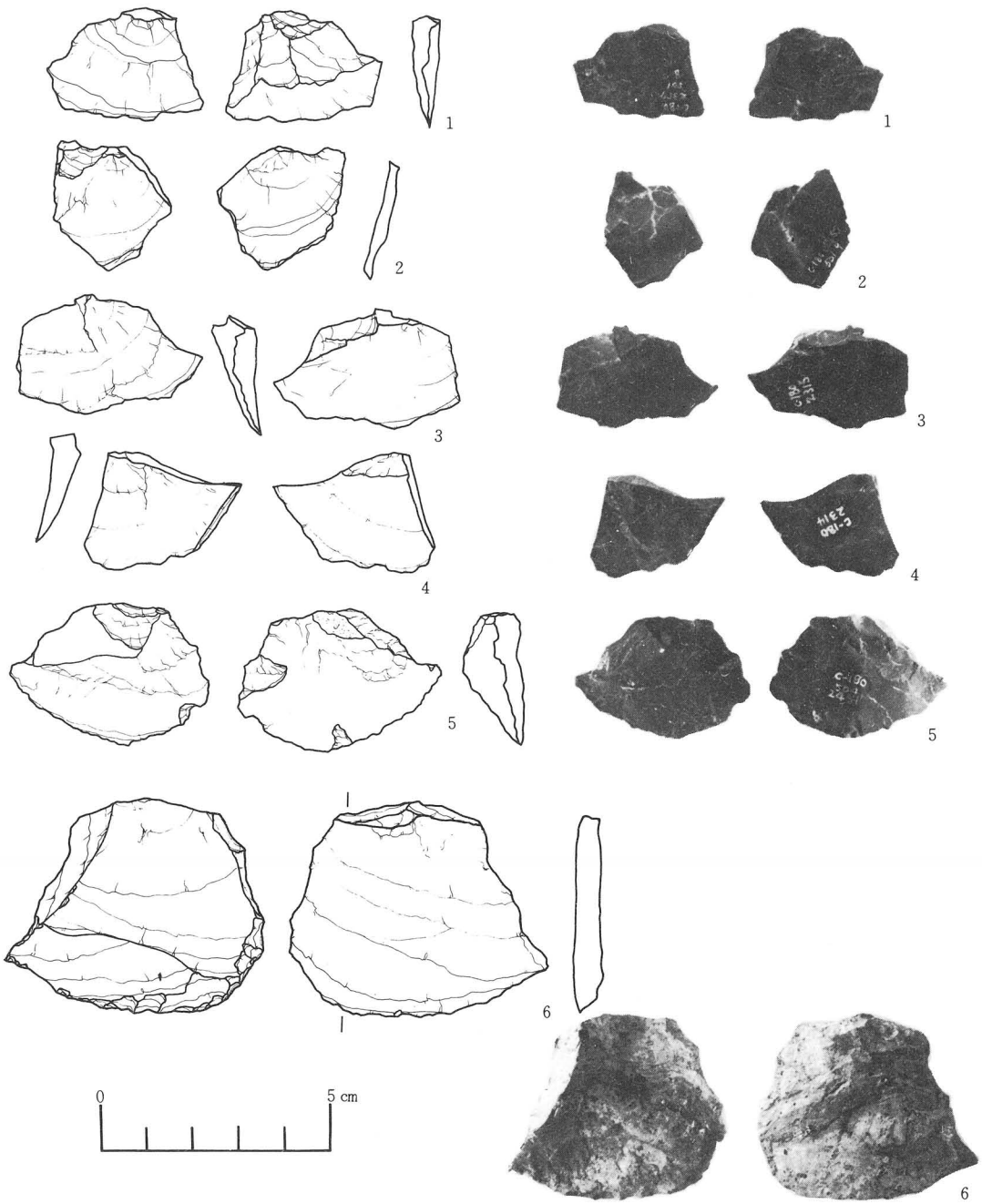


観　察　表

単位：mm

図	遺構名	堆積土	名　称	長さ	幅	厚さ	備　考	石　材	登録番号
1	12D	2	剝　片	10.0	13.0	0.8	接合 同一母岩 （分類番号No-13）	珪質頁岩	2357－11
2	12D	2	剝　片	10.5	15.0	0.9		珪質頁岩	2357－13
3	12D	2	剝　片	10.0	14.5	0.8		珪質頁岩	3003
4	12D	2	剝　片	23.0	43.0	4.5		珪質頁岩	2356
5	12D	2	剝　片	27.0	40.5	9.0		珪質頁岩	2356－1
6	Q-12(d)	Ⅰ	剝　片	35.0	50.0	12.0		珪質頁岩	2357

第76図　12号土壙出土石器（2）



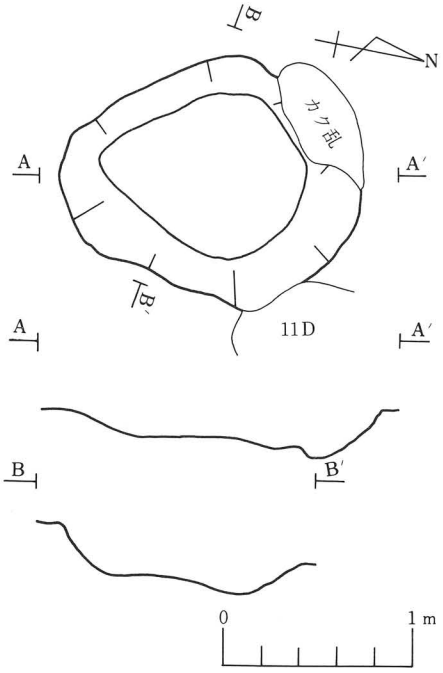
観　察　表

単位：mm

図	遺構名	堆積土	名　　称	長さ	幅	厚さ	備　　考	石　材	登録番号
1	12D	2	剝　片	23.5	34.0	5.5	同一母岩（分類番号No－13）	珪質頁岩	2357－8
2	12D	2	剝　片	27.0	26.5	2.5		珪質頁岩	2357－9
3	12D	2	剝　片	26.0	40.0	9.3		珪質頁岩	2315
4	12D	2	剝　片	26.0	34.5	6.0		珪質頁岩	2314
5	12D	1	石　核	31.0	44.0	14.0		珪質頁岩	2351
6	12D	2	スクレイパー	47.0	56.0	6.0	同一母岩（分類番号No－50）	流紋岩質岩	2357

第77図　12号土壙出土石器（3）

13 号 土 壙



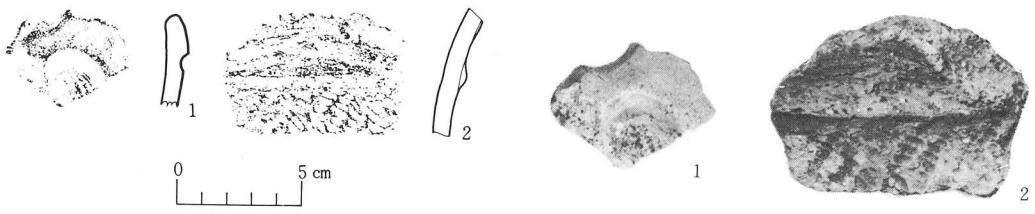
13号土壙観察表

地区名	検出面	堆積土	平面形態 上端	平面形態 下端	平面規模 cm 型	平面規模 cm 上端	平面規模 cm 下端	深さ	壁角	底面状態	上端長軸方位	分類	備考
M－6（d）	Ⅵ層上面	1	不整楕円	不整楕円	中	160×132	110×89	26	135°	凹凸状	N－2°－W	C	11Dに切られる

13号土壙出土遺物数量表

遺物 / 堆積土	土器 復元土器	土器 口縁部	土器 体部	土器 底部	土器 群別 Ⅴ	土器 群別 Ⅵ	土器 群別 Ⅷ	土器 群別 Ⅸ	土器 群別 不明	石器 スイクレー	石器 S・F	石器 剥片
1	—	15	51	4	2	3	9	1	55	1	1	4

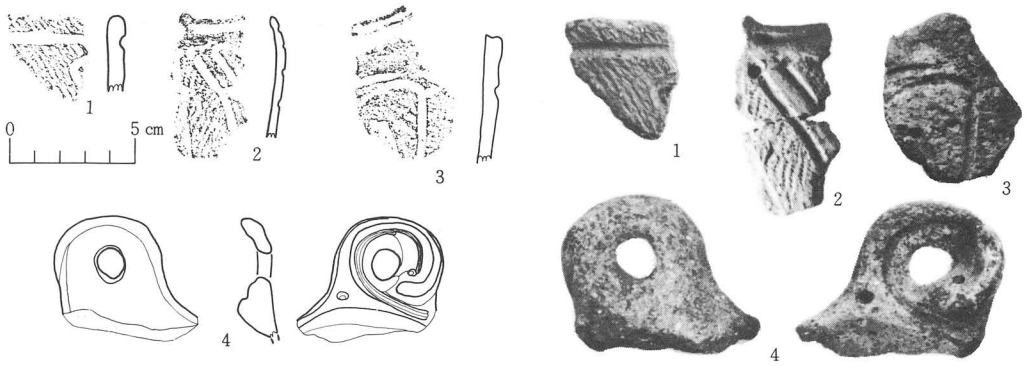
出土土器



観 察 表

図	遺構名	層位	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	13D	1	口縁部	深鉢？	横位ＬＲ縄文・隆線文→沈線文・穿孔→磨き	Ⅴ1c	———
2	13D	1	体部	深鉢	隆線文→横位ＬＲ縄文→磨き	Ⅵ	———

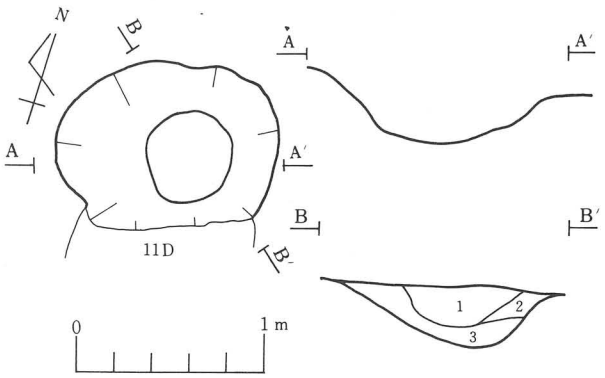
第78図　13号土壙平面図・出土土器（1）

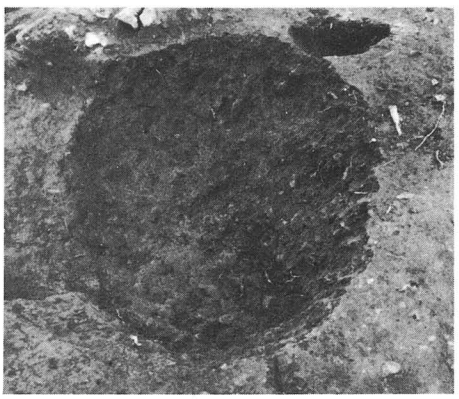


観　察　表

図	遺構	堆積土	部　位	器　形	施　文　・　調　整	分　類	備　　考
1	13D	1	口縁部	深　鉢	縦位Ｒ撚糸文→沈帯？ 縦位波状沈線文	Ⅷ8a？＋1b	——
2	13D	1	口縁部	深鉢Ⅳ	(突起)横位ＬＲ縄文→盲孔＋斜行磨消縄文・貫通孔	Ⅸ 2	縄文の節は細かい
3	13D	1	口縁部	深　鉢	縦位ＬＲ縄文→弧状沈線間磨消縄文	Ⅷ 1a	——
4	13D	1	突起(口縁部)	深　鉢	(環状突起―貫通孔・盲孔・盲孔間沈線文)	Ⅷ $11a_1$	——

14　号　土　壙





14号土壙観察表

※（　）内は残存数

地区名	検出面	堆積土	平面形態		平面規模 cm			深さ	壁角		底面	上端長	分類	備　　考
			上端	下端	型	上端	下端	cm	長軸	短軸	状態	軸方位		
M－7(d)	Ⅵ層上面	3	楕円	円	中	114×(88)	47×43	38	145°	130°	凹状	N－64°－E	E	11Dに切られる

14号土壙土層註記表

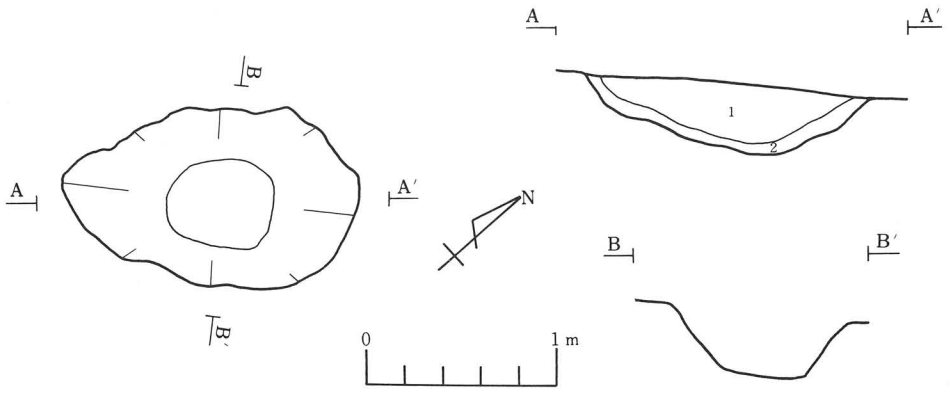
堆積土	色　調	土　質	粘　性	しまり	備　　考
1	10ＹＲ3/4 暗褐色	粘土質シルト	やや強い	やや良	小礫。
2	10ＹＲ3/4 暗褐色	シルト	弱　い	やや良	炭化粒少量。
3	10ＹＲ2/3 黒褐色	粘土質シルト	強　い	やや良	炭化粒多量。黄色小粒子。焼土少量。

14号土壙出土遺物数量表

遺物／堆積土	土器					石器		備　　考
	復元土器	口縁部	体部	底部	群別 不明	ポイント	剝片	
3	—	1	23	3	27	1	4	堆積土1、2層は無遺物層

第79図　13号土壙出土土器(2)、14号土壙平面図

15 号 土 壙



15号土壙観察表

地区名	検出面	堆積土	平面形態		平面規模 cm			深さ	壁角		底面	上端長	分類
			上端	下端	型	上端	下端	cm	長軸	短軸	状態	軸方位	
M－7（d）	Ⅵ層上面	2	楕円	円	中	156×96	56×48	42	140°	125°	凹状	N－43°－E	E

15号土壙土層註記表

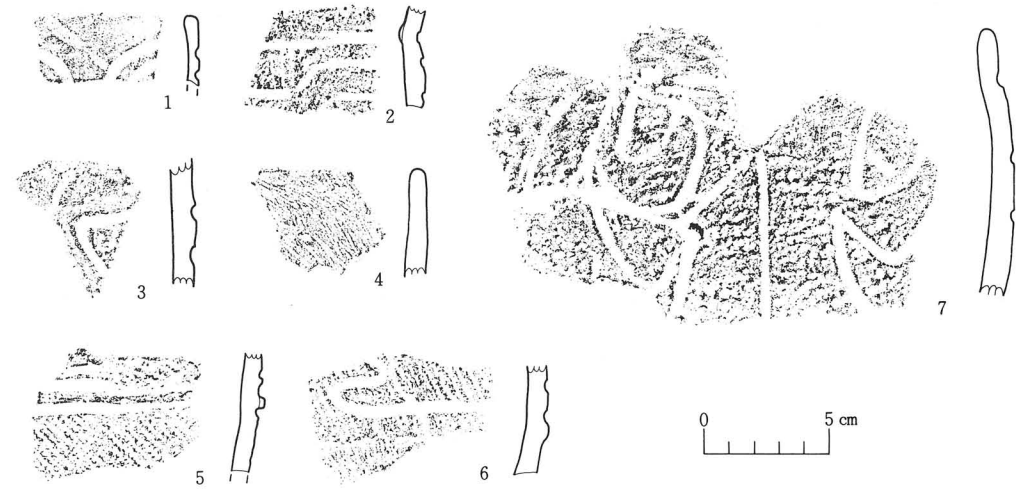
堆積土	色調	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR⅔ 黒褐色	粘土質シルト	やや強い	不良	炭化粒多量。
2	10YR⅜ 暗褐色	粘土質シルト	やや強い	やや良	炭化粒。小礫。

15号土壙出土遺物数量表

遺物／堆積土	土器									石器		備考
	復元土器	口縁部	体部	底部	群別 V	群別 Ⅵ	群別 Ⅷ	群別 Ⅺ	群別 不明	スイクパレー	剝片	
検出面	—	—	10	—	—	—	—	—	10	—	—	堆積土2層は無遺物層
1	—	9	58	4	5	2	5	2	57	7	3	

第80図　15号土壙平面図

出土土器



観　察　表

図	遺構	堆積土	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	15D	1	口縁部	深鉢	沈線文→磨き	Ⅳ1c	——
2	15D	1	体部	深鉢Ⅰ？	縦位L撚糸文→弧状沈線間磨消撚糸文	Ⅷ1a	6と同一個体
3	15D	1	体部	深鉢	縄文→弧状沈線間磨消縄文	Ⅷ1a	——
4	15D	1	口縁部	深鉢	縦位R撚糸文→研磨（口唇部）	Ⅺ1e	——
5	15D	1	体部	深鉢	縦位LR縄文→横位隆沈線文→渦状・弧状磨消縄文(or沈線文)	Ⅷ1a（or1b）	——
6	15D	1	体部	深鉢	下位隆帯？→縦位L撚糸文→入組状沈線間磨消縄文	Ⅷ1a	2と同一個体
7	15D	1	口縁部～体部	深鉢	横位LR縄文→弧状沈線文→研磨(口縁部)	Ⅷ1b	縄文の節は不整形である。

第81図　15号土壙出土土器

16号土壙（第82図）

Ｎ－７グリッド北西隅に位置し、Ⅲ層排土後Ⅵ層上面で検出された。上端南西側を一部20号土壙に切られている。上端長軸規模160cmの浅い中型Ｄ類の土壙である。堆積土は２層から成る。

堆積土Ⅰ層から土器片30点（第Ⅳ・Ⅵ・Ⅷ・ⅩⅠ群土器を含む）を出土している。

17号土壙（第83図）

Ｎ－７グリッド北西側に位置し、Ⅲ層排土後Ⅵ層上面で検出された。上端北側を一部20号土壙に切られている。上端長軸規模115cm以上の浅い中型Ｃ類の土壙である。堆積土は２層から成り、堆積土１層中に炭化粒を多量に含む。

堆積土１層から土器片37点（第Ⅵ・Ⅷ・ⅩⅠ群土器を含む）、石器４点を出土している。

18号土壙（第84～85図）

Ｊ－８グリッド北西隅に位置し、Ⅲ層排土後Ⅵ層上面で検出された。上端長軸規模約280cmの大型Ｅ類の土壙で、底面が極端に狭く壁面上部と下部に段を持つ。壁面、底面は地山礫が見られ、凹凸状である。堆積土は６層から成るが、5a層中には多量の炭化物が含まれる。

堆積土１・２層中から、土器片53点（第Ⅴ・Ⅷ・ⅪⅠ群土器を含む）、石器18点（底面からも出土）が出土した。堆積土２層出土土器片１点と、35号土壙（古墳時代）堆積土１層出土の土器片１点とが接合している（第85図１）。

19号土壙（第85～87図）

Ｊ－８グリッド北東隅に位置し、Ⅲ層排土後Ⅵ層上面で検出された。南側の一部を27号土壙、攪乱に切られている。上端長軸規模３ｍを越すが、深さ20cmの非常に浅い、大型Ｃ類の土壙である。底面には地山礫がみられかなり凹凸状を呈す。堆積土は４層から成る。

堆積土１層を中心に土器片122点（第Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ群土器を含む）、土製円盤２点、石器16点を出土している。

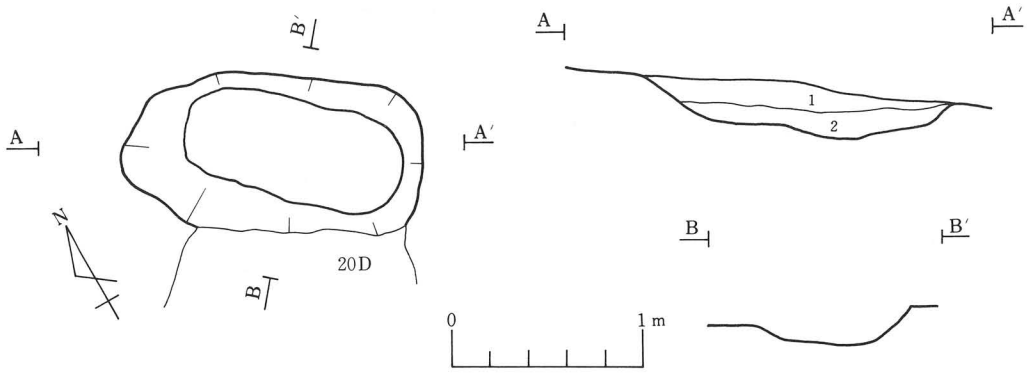
20号土壙（第88～91図）

Ｎ－７グリッド北西側に位置し、Ⅲ層排土後Ⅵ層上面で検出された。16号土壙、17号土壙を切っている。上端長軸規模２ｍの大型Ｆ類の土壙で、短軸断面形が顕著なすり鉢状を呈し、底面積は狭い。堆積土は４層から成る。

出土遺物は堆積土４層を除く各層より土器片271点（第Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ・ⅩⅠ群土器を含む）、土製円盤６点、石器51点の多量な遺物を出土した。尚、堆積土３層出土の剥片１点、石核１点とが接合している。

佐　藤　甲　二

16 号 土 壙



16号土壙観察表

※( )内は残存数

地区名	検出面	堆積土	平面形態		平面規模 cm			深さ cm	壁角		底面状態	上端長軸方位	分類	備考
			上端	下端	型	上端	下端		長軸	短軸				
M-7(a)	Ⅵ層上面	2	楕円	長楕円	中	160×(82)	118×52	24	135°	145°	凹凸状	N−56°−W	D	20Dに切られる

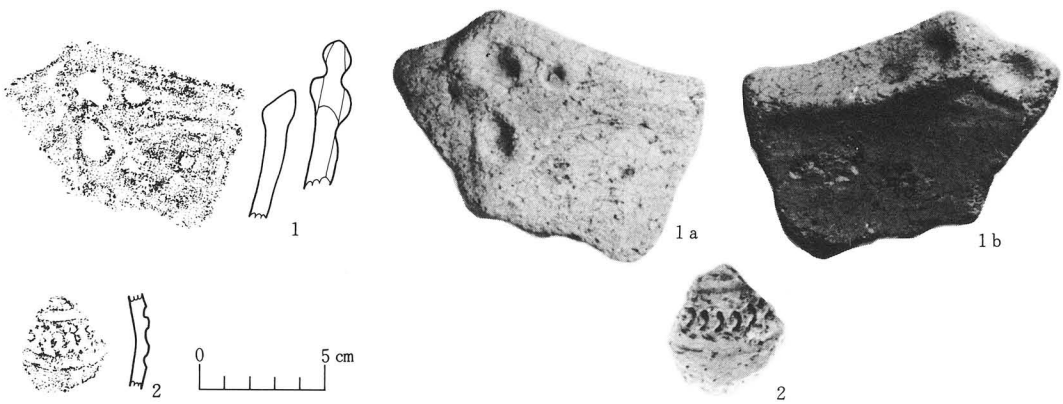
16号土壙土層註記表

堆積土	色調	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR⅔ 黒褐色	シルト	やや強い	やや良	炭化粒。
2	10YR⅔ 暗褐色	粘土質シルト	やや強い	やや良	炭化粒少量。

16号土壙出土遺物数量表

堆積土＼遺物	土器									備考
	復元土器	口縁部	体部	底部	群別 Ⅳ	Ⅵ	Ⅷ	Ⅺ	不明	
1	—	7	21	2	1	1	2	3	23	堆積土2層は無遺物層

出土土器

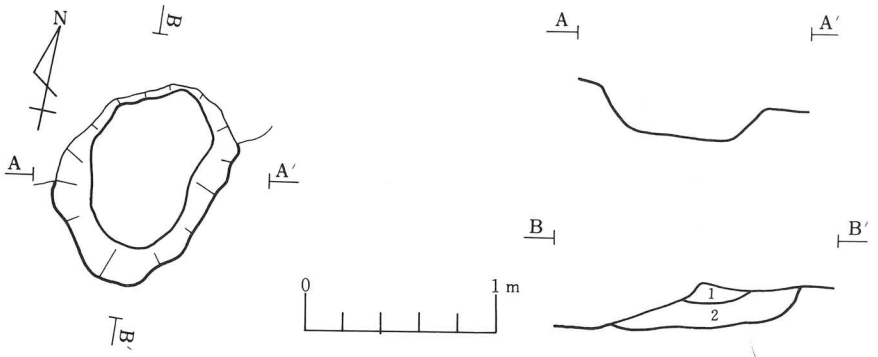


観察表

図	遺構	堆積土	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	16D	1	突起	深鉢	(山形突起—外面:盲孔(大小各1)・内面:弧状隆線＋横位隆線＋盲孔(2))・輪形隆文　・横位研磨	Ⅷ11b$_1$	——
2	16D	1	体部	—	縦位RL縄文→刺突文→沈線文→磨き	Ⅳ	——

第82図　16号土壙平面図・出土土器

17 号 土 壙



17号土壙観察表

※（ ）内は残存数

地区名	検出面	堆積土	平面形態 上端	平面形態 下端	平面規模 cm 型	平面規模 cm 上端	平面規模 cm 下端	深さ cm	壁角 長軸	壁角 短軸	底面状態	上端長軸方位	分類	備考
N-7(a)	Ⅵ層上面	2	不整楕円	不整楕円	中	(112)×82	88×55	24	140°	130°	平坦	N−6°−E	C	20Dに切られる

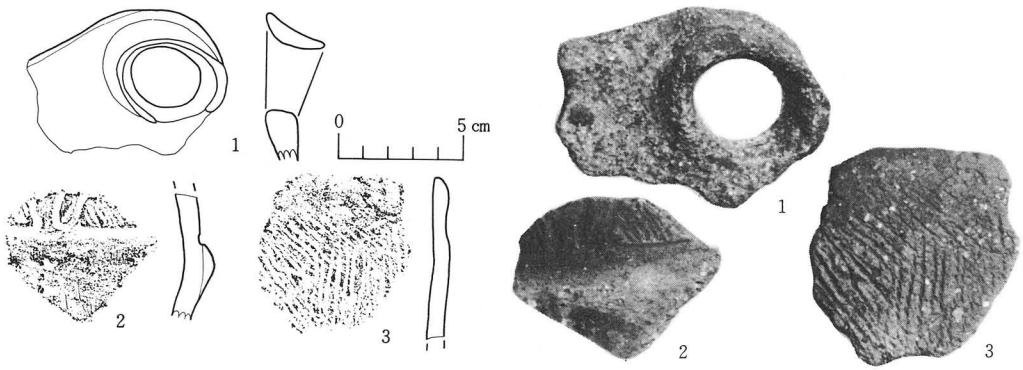
17号土壙土層註記表

堆積土	色調	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR½ 黒色	シルト	弱い	不良	炭化粒多量。
2	10YR⅔ 黒褐色	シルト	やや強い	やや良	———

17号土壙出土遺物数量表

堆積土＼遺物	土器 復元土器	土器 口縁部	土器 体部	土器 底部	土器 群別 Ⅵ	土器 群別 Ⅷ	土器 群別 Ⅺ	土器 群別 不明	石器 剝片	備考
1	—	6	25	6	2	1	2	32	4	堆積土2層は無遺物層

出土土器

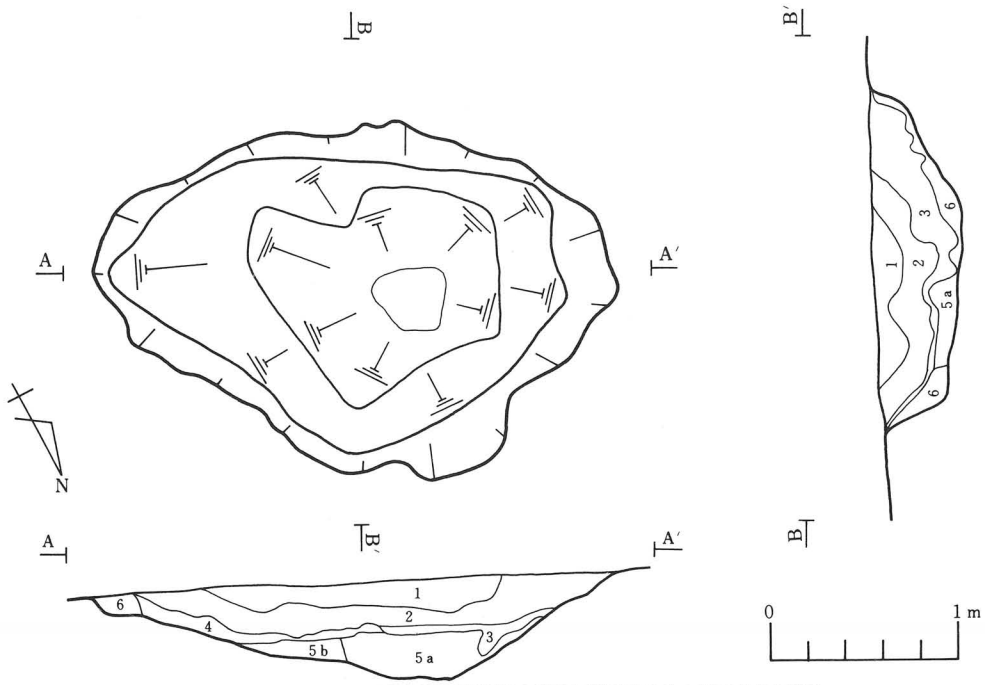


観察表

図	遺構	堆積土	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	17D	1	口縁部	深鉢	———	——	磨滅がひどい
2	17D	1	体部	深鉢	縦位R撚糸文→弧状磨消縄文	Ⅷ1a	体下部で逆「く」の字に強く屈曲する
3	17D	1	口縁部	深部	縦位・斜位R撚糸文→研磨(口縁部)	Ⅺ2c	———

第83図　17号土壙平面図・出土土器

18 号 土 壙



18号土壙観察表

地区名	検出面	堆積土	平面形態		平面規模 cm			深さ	壁角		底面	上端長軸方位	分類
			上端	下端	型	上端	下端	cm	長軸	短軸	状態		
J-8(c)	Ⅵ層上面	6	不整楕円	不整円	大	277×178	39×34	54	150°	115°	凹状	N−63°−W	E

18号土壙土層註記表

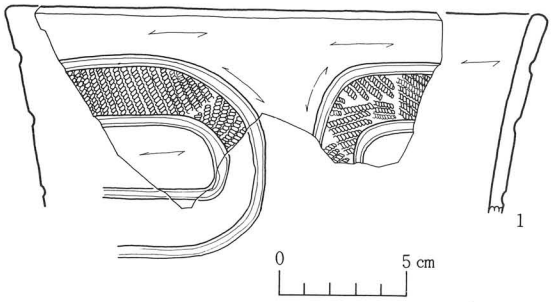
堆積土	色調	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	やや強い	やや良	黄褐粒少量。青灰色粒少量。赤褐色粒微量。
2	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	やや強い	やや不良	青灰色礫多量。礫少量。
3	10YR2/3 黒褐色	シルト質	やや強い	やや不良	炭化粒。焼土多量。
4	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	やや強い	やや良	黄褐色、青灰色の円礫。
5a	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	やや弱い	やや不良	黄褐色粒少量。赤褐色粒少量。炭化物多量。
5b	10YR3/4 暗褐色	シルト	やや弱い	やや良	黄褐色礫。青灰色礫。赤色礫。
6	10YR3/3 暗褐色	シルト	やや弱い	やや良	黄褐色粒多量。青灰色粒少量。

第84図　18号土壙平面図

18号土壙出土遺物数量表

遺物 / 堆積土	土器								石器			備考
	復元土器	口縁部	体部	底部	群別 V	群別 Ⅷ	群別 Ⅺ	群別 不明	スクレイパー	剥片	礫石器Ⅱ	
1	—	5	19	—	1	2	1	20	1	4	—	堆積土3～6層は無遺物層
2	—	3	26	—	2	—	—	27	2	6	1	
底面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	—	

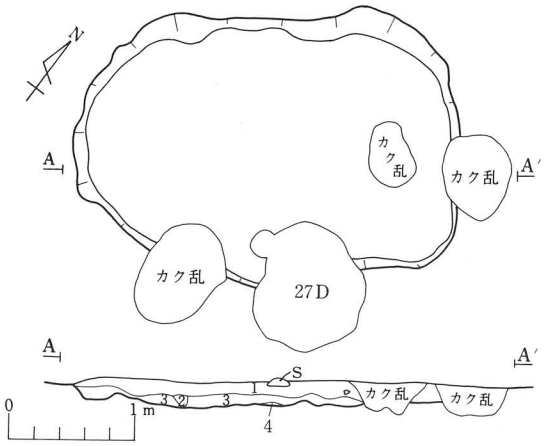
出土土器



観察表

図	遺構	層位	部位	器形	口径	施文・調整	分類	備考
1	18D	2	口縁部～体部上半	深鉢	(15.5cm)	横位・斜位ＲＬ縄文→沈線文→磨き	V1c	35号土壙出土のものと接合

19 号 土 壙



第85図　18号土壙出土土器19号土壙平面図

19号土壙観察表

地区名	検出面	堆積土	平面形態 上端	平面形態 下端	平面規模 cm 大	平面規模 cm 上端	平面規模 cm 下端	深さ cm	壁角 長軸	壁角 短軸	底面状態	上端長軸方位	分類	備考
J-8(b)	Ⅵ層上面	4	不整楕円	楕円	大	306×213	288×194	20	130°	140°	凹凸状	N−52°−E	C	27Dに切られる

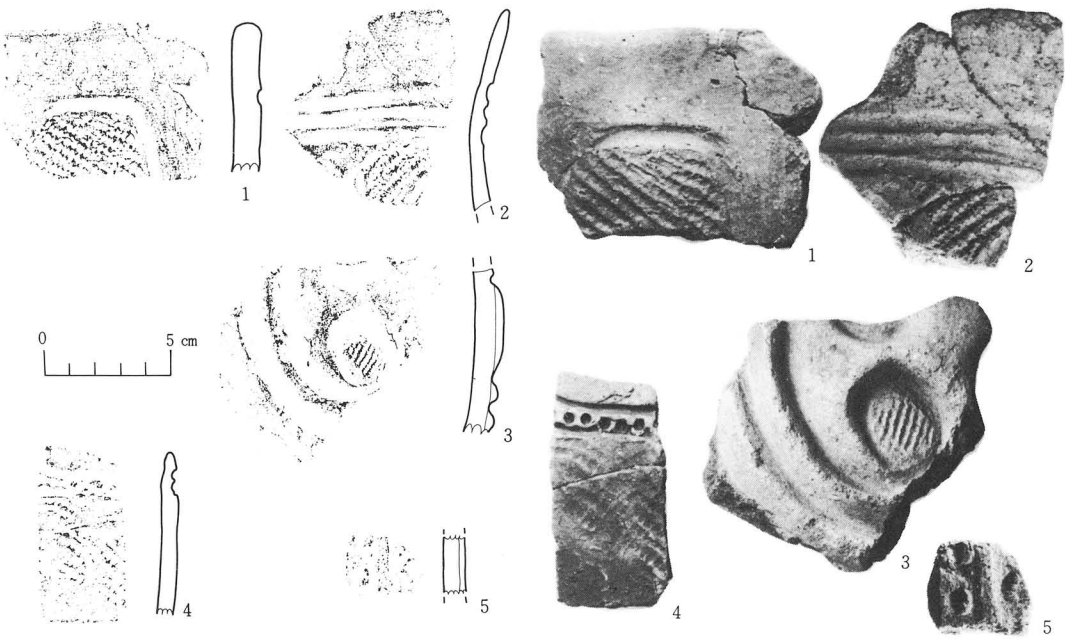
19号土壙土層註記表

堆積土	色調	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	やや強い	やや良	炭化粒。小礫。
2	10YR3/4 暗褐色	シルト	弱い	やや不良	炭化粒少量。
3	7.5YR4/4 褐色	粘土質シルト	やや強い	良	礫ブロック多量。
4	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	やや強い	良	礫ブロック・炭化粒少量。

19号土壙出土遺物数量表

堆積土＼遺物	土器 復元土器	口縁部	体部	底部	群別 V	群別 Ⅵ	群別 Ⅶ	群別 Ⅷ	群別 不明	土製円盤	石器 ピエスエスキーユ	石器 スイバレー	石器 S・F	石器 剝片	石器 石核	石器 礫石器 Ⅲ	石器 礫石器 Ⅵ-1	備考
1	—	7	73	7	6	1	—	8	72	2	2	1	3	4	1	1	—	堆積土4層は無遺物層
2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
3	—	2	31	—	1	—	1	1	30	—	—	—	—	1	1	—	—	
底面	—	1	1	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	1	—	—	—	

出土土器

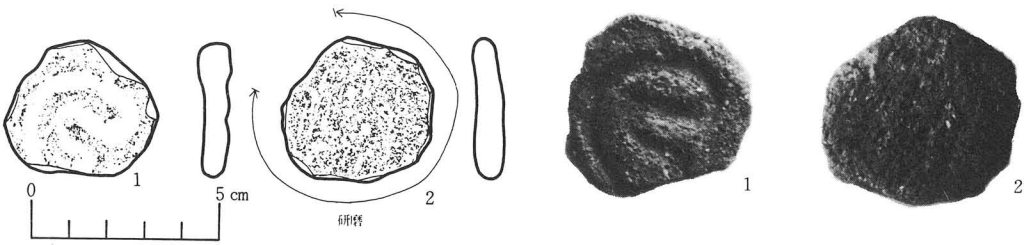


観察表

図	遺構	堆積土	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	19D	1	口縁部	深鉢	縦位LR縄文→沈線文→磨き	V1c	——
2	19D	1	口縁部	深鉢	縦位RL縄文→沈線文→磨き	V1d	——
3	19D	1	体部	深鉢	縦位RL縄文・隆線文→沈線文→磨き	V1・3	——
4	19D	1	口縁部	深鉢V	斜位LR縄文→「横位並行沈線→連続小円形刺突」文→研磨(口唇部)	Ⅷ5a	突起or波状口縁 方形区画文の可能性
5	19D	3	体部	深鉢	縦位隆線文→連続鱗状刺突文	Ⅷ5b	0.5〜2mmの灰白粒を多量に含む

第86図　19号土壙出土土器

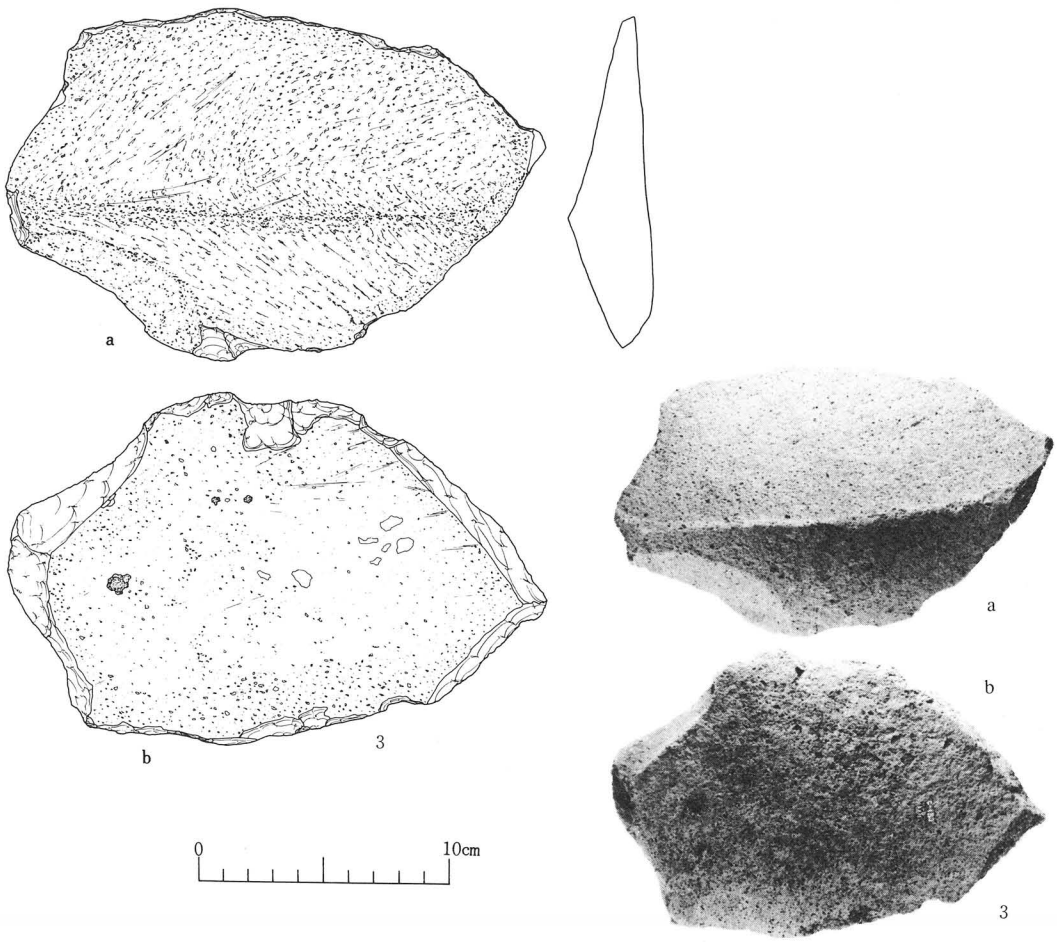
出土土製品



観　察　表

図	遺構名	堆積土	大きさ	mm	厚さmm	重量g	形態	打欠回数	研　磨　率	部位	時　期
1	19D	1	中型	40×35	5	10.2	楕円形	7	打ち欠きのみ	体部	後期初頭
2	19D	1	中型	40×38	5	13.2	不定形	8	50%以上	体部	——

出土石器



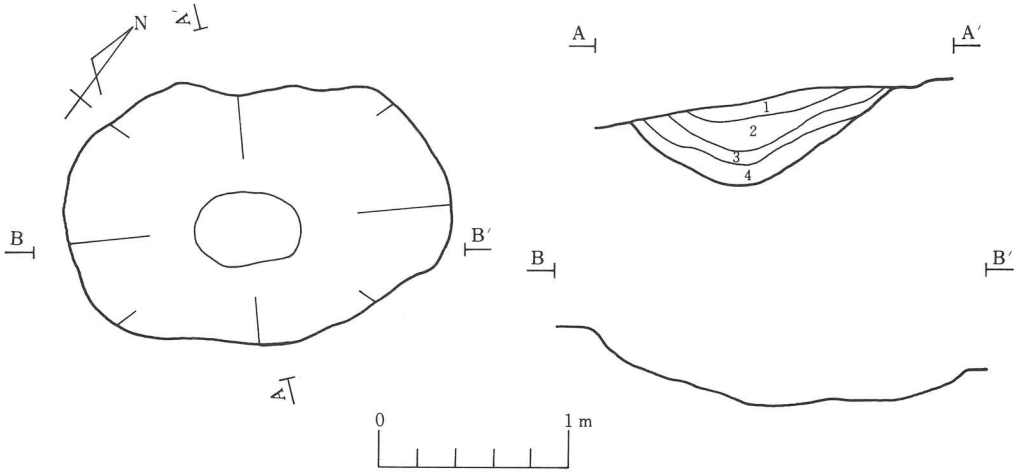
観　察　表

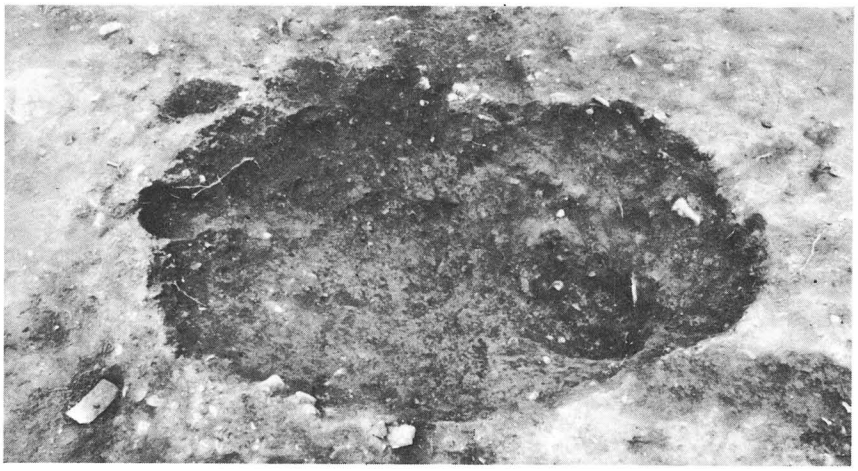
単位：mm.g

図	遺構	堆積土	長　さ	幅	厚　さ	重　量	礫の形態	使用痕、他	分類	石　材	登録番号
3	19D	2	301.8	209.6	45.8	3,000	G	a、b両面に磨痕(a)	Ⅵ-1	安山岩	667

第87図　19号土壙出土土製品・石器

20 号 土 壙





20号土壙観察表

地区名	検出面	堆積土	平面形態		平面規模 cm			深さ	壁角		底面	上端長	分類	備考
			上端	下端	型	上端	下端	cm	長軸	短軸	状態	軸方位		
N-7(a)	Ⅵ層上面	4	楕円	楕円	大	200×142	55×40	52	155°	140°	凹状	N−45°−E	F	16D、17Dを切る

20号土壙土層註記表

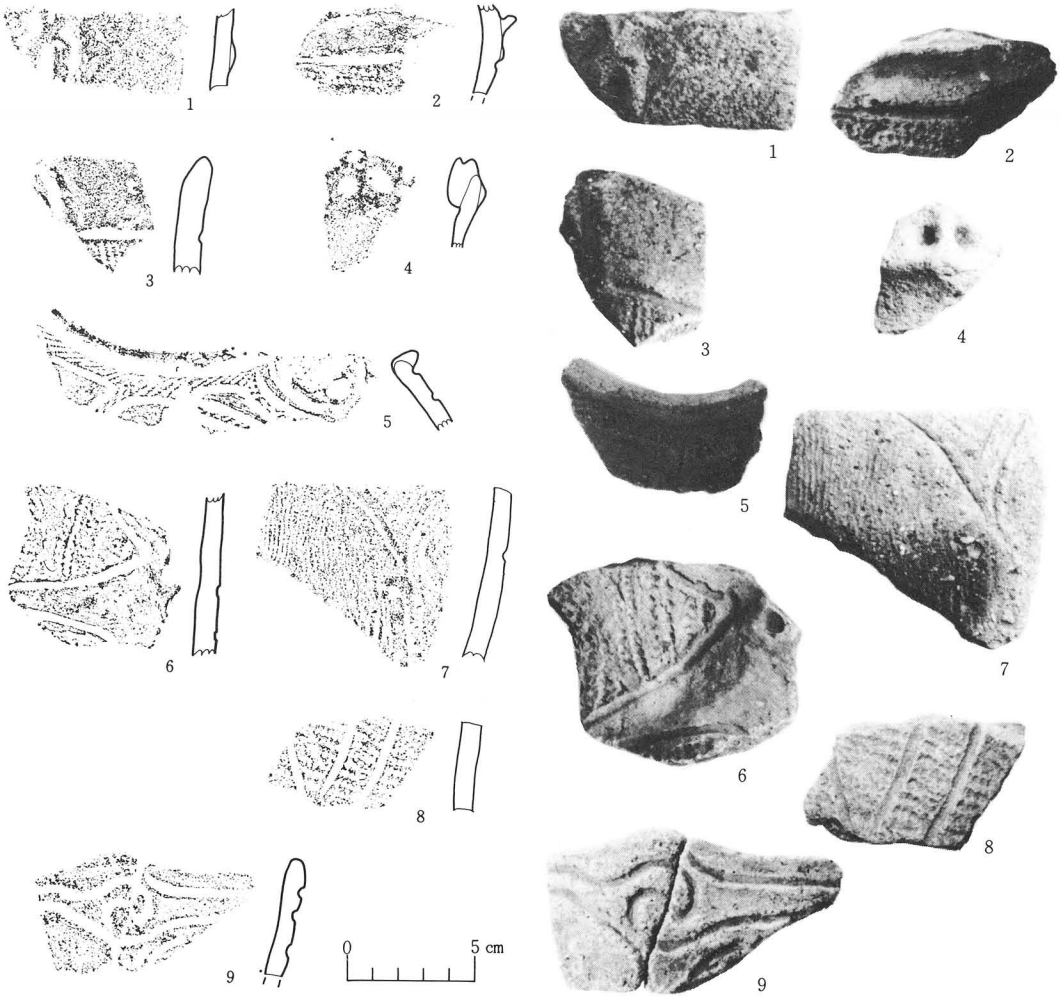
堆積土	色調	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR3/3 黒褐色	シルト	弱い	不良	炭化物少量。
2	10YR2/1 黒色	粘土質シルト	やや強い	不良	炭化物多量。
3	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	やや強い	不良	炭化物少量。
4	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	やや強い	やや良	———

20号土壙出土遺物数量表

遺物／堆積土	土器											土製円盤	石器										備考
	復元土器	口縁部	体部	底部	群別 V	VI	VII	VIII	IX	XI	不明		石鏃	石錐	ポイント	エスキーユピエス・	スイパレー	S・F	剝片	チップ	石核	礫石器 VI-1	
検出面	—	3	36	4	—	1	—	3	—	—	39	—	—	1	—	—	3	—	4	2	—	2	堆積土4層は無遺物層
1	—	13	66	10	—	3	1	3	—	2	80	6	1	—	—	—	—	—	8	1	—	—	
2	—	16	65	11	1	3	—	10	—	2	76	—	—	—	1	—	4	—	8	—	—	—	
3	—	9	34	4	—	—	—	2	1	—	44	—	—	—	—	1	—	13	—	—	1	—	

第88図　20号土壙平面図

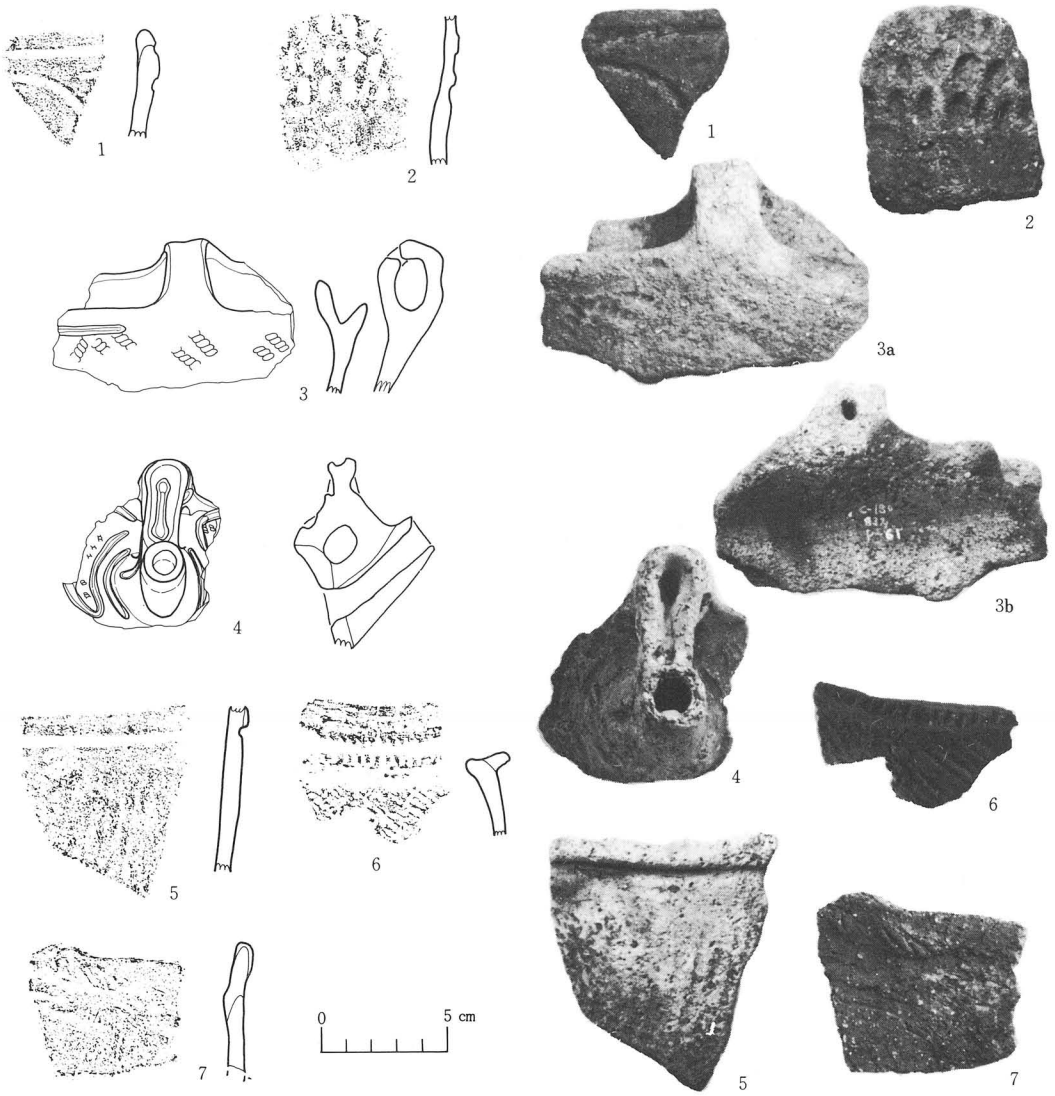
出土土器



観　察　表

図	遺構	堆積土	部　位	器　形	施　文　・　調　整	分　類	備　　考
1	20D	検出面	体　部	深　鉢	横位ＬＲ縄文→縦位鎖状隆線文	Ⅷ6a	
2	20D	1	体　部	深　鉢	縄文→沈線文→研磨	Ⅷ	鍔状隆帯をもつ
3	20D	2	口 縁 部	深鉢ⅡA	縦位ＬＲ縄文→沈帯？・弧状沈線文(口縁部)	Ⅷ8a？+10？	
4	20D	検出面	突起(口縁部)	深　鉢	(山形突起―外面:盲孔$_2$・頂部:盲孔$_1$・内面:盲孔$_1$)	Ⅷ11b$_{1+2}$	
5	20D	3	口 縁 部	壺　Ⅱ	横位LR 縄文→弧状磨消縄文＋盲孔・並行弧状沈線文	Ⅷ1a or Ⅸ	金雲母を少量含む
6	20D	2	体　部	深　鉢	横位ＬＲ縄文→弧状沈線間磨消縄文・盲孔	Ⅷ1a	
7	20D	2	体　部	深　鉢	撚糸文→弧状細沈線文	Ⅷ1b	砂粒(1～4mm)を多量に含む磨滅している
8	20D	3	体　部	深　鉢	横位ＬＲ縄文→弧状沈線文	Ⅷ1b	
9	20D	1	口 縁 部	深　鉢	横位渦状沈線文→ナデ状研磨	Ⅷ1b	

第89図　20号土壙出土土器(1)

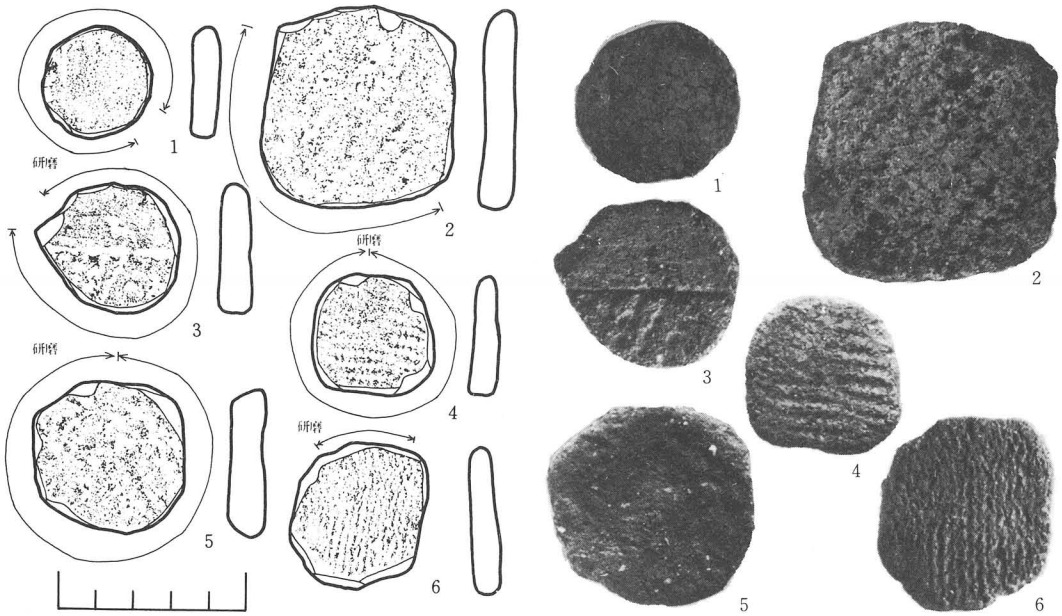


観　察　表

図	遺構	堆積土	部　位	器形	地　文　・　調　整	分　類	備　考
1	20D	検出面	口 縁 部	深鉢	沈帯？→渦状沈線文→研磨(口唇部の研磨はていねい)	——	
2	20D	2	体　部	深鉢	横位連続縦位楕円形刺突文→研磨	Ⅷ5b	
3	20D	1	口 縁 部	深鉢	(突起＝縦位把手—内面：貫通孔) 斜位ＬＲ縄文・沈線？	Ⅶ or Ⅷ	二段口縁
4	20D	1	注口部(体部)	壺	(突起＝縦位把手—注口：盲孔・盲孔間沈線文)縦位ＬＲ縄文→→対称弧線間磨消縄文	Ⅷ1a	
5	20D	2	体　部	深鉢	・縄文　・隆沈帯？	Ⅷ	
6	20D	2	口 縁 部	甕	・縦位ＬＲ縄文　・連続刻み状刺突文→研磨(頸部)	Ⅷ5b	
7	20D	2	口 縁 部	深鉢	縦位ＬＲ縄文→横位ナデ	Ⅺ3a	

第90図　20号土壙出土土器(2)

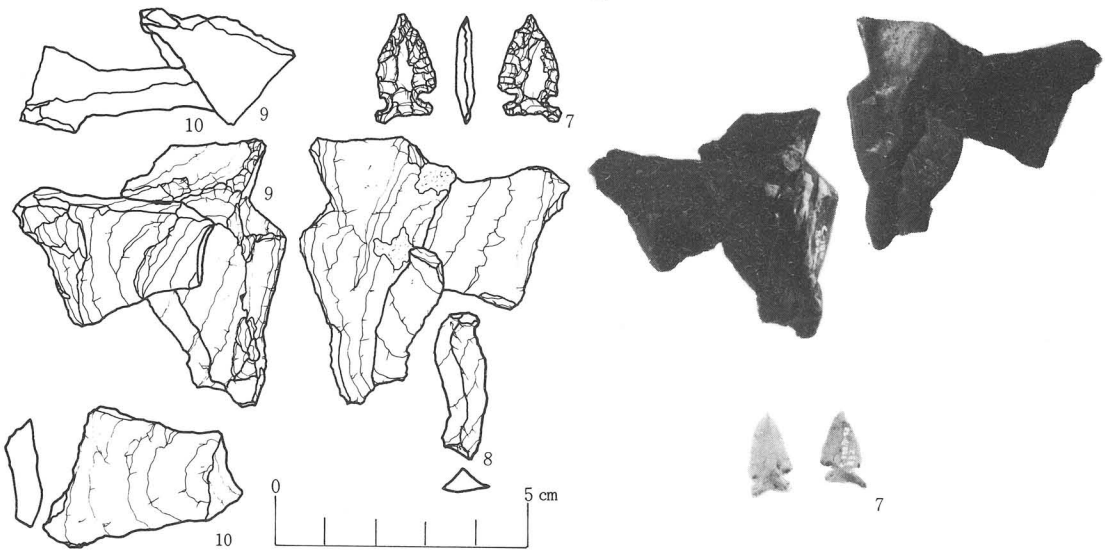
出土土製品



観　察　表

図	遺構名	堆積土	大きさmm		厚さmm	重量g	形　態	打欠回数	研磨率	部　位	時　期
1	20D	1	小型	29×28	8	7.8	円形	—	100%	体部	—
2	20D	1	大型	54×48	7	28.4	方形	5	50%未満	体部	—
3	20D	1	中型	35×32	7	11.5	円形	—	100%	体部	—
4	20D	1	中型	31×31	6	8.4	方形	—	100%	体部	—
5	20D	1	中型	42×40	10	20.4	円形	7	100%	体部	—
6	20D	1	中型	47×37	6	12.5	方形	6	50%未満	体部	—

出土石器



観　察　表

単位：mm

図	遺構	堆積土	名称	長さ	幅	厚さ	備　考	石　材	登録番号
7	20D	1	石鏃	21.5	12.0	3.6	アメリカ型石鏃	珪質頁岩	832
8	20D	3	剝片	29.0	10.0	5.0	接合、さらに(登録番号431の)剝片とも接合	チャート	862
9	20D	3	石核	30.0	53.0	22.0	同一母岩、分類番号No10	チャート	862

第91図　20号土壙出土土製品・石器

第4表　7～66号ピット遺構観察表

※(　)内は残存数

遺構名	地区名	検出面	平面形態		平面規模cm		深さ	壁角	底面状態	上端長軸方位	備考
			上端	下端	上端	下端	cm				
7 P	I-8(a)	Ⅵ層上面	円	円	31×27	18×18	10	135°	平坦	——	——
8 P	I-9(b)	〃	円	楕円	35×33	22×18	18	105°	平坦	——	——
9 P	J-6(d)	〃	円	楕円	65×56	41×22	40	100°	凹凸状	——	——
10 P	J-6(c)	〃	円	不整円	47×41	28×23	20	110°	若干凹状	——	——
11 P	J-7(c)	〃	楕円	不整楕円	68×52	29×22	22	120°	若干凹状	N－59°－W	——
12 P	J-7(c)	〃	不整楕円	不整円	60×48	30×27	42	115°	平坦	N－84°－W	13Pを切る
13 P	J-7(c)	〃	不整円	不整円	50×(44)	28×24	16	125°	平坦	——	12Pに切られる
14 P	J-7(c)	〃	円	不整円	40×34	21×18	31	110°	若干凹状	——	——
15 P	J-8(c)	〃	不整楕円	不整楕円	58×48	44×36	26	100°	若干凹状	N－23°－E	上面1風
16 P	J-8(c)	〃	円	楕円	42×36	19×15	22	115°	平坦	——	35Pに切られる
17 P	J-8(c)	〃	不整楕円	楕円	66×55	49×38	34	100°	平坦	N－79°－W	——
18 P	J-9(c)	〃	楕円	楕円	50×33	32×18	20	115°	若干凹状	N－38°－W	——
19 P	K-7(d)	〃	不整円	円	30×28	21×20	23	120°	平坦	——	——
20 P	K-7(d)	〃	不整楕円	不整円	33×26	16×15	14	120°	平坦	N－27°－W	——
21 P	K-7(a)	〃	円	円	24×22	13×12	21	105°	平坦	——	——
22 P	K-7(d)	〃	不整円	円	46×42	28×25	13	125°	平坦	——	——
23 P	K-7(d)	〃	不整円	円	50×46	38×36	25	120°	若干凹状	——	——
24 P	K-7(a)	〃	楕円	不整楕円	33×25	24×19	11	115°	段差あり	N－48°－W	——
25 P	K-7(a)	〃	楕円	楕円	62×40	42×27	15	130°	若干凹状	N－75°－W	——
26 P	K-7(d)	〃	楕円	不整楕円	47×25	30×18	16	120°	若干凹状	N－51°－W	——
27 P	K-7(d)	〃	円	楕円	28×26	17×12	12	110°	平坦	——	——
28 P	K-7(a)	〃	不整円	不整円	34×30	22×19	14	110°	若干凹状	——	——
29 P	K-7(a)	〃	円	円	17×16	9×8	9	110°	平坦	——	——
30 P	K-7(a)	〃	楕円	楕円	26×16	14×9	14	120°	平坦	N－8°－W	——
31 P	K-7(a)	〃	不整楕円	不整楕円	56×50	46×32	36	105°	若干凹状	N－51°－W	32Pを切る
32 P	K-7(a)	〃	不整楕円	不整楕円	46×38	38×24	22	115°	平坦	N－64°－W	31Pに切られる
33 P	K-7(a)	〃	不整円	楕円	68×68	44×36	54	100°	平坦	——	——
34 P	K-8(b)	〃	楕円	楕円	54×38	23×16	20	100°・115°	若干凹状	N－31°－W	
35 P	K-8(b)	〃	不整円	楕円	41×35	18×14	25	100°	平坦	——	16Pを切る
36 P	K-8(b)	〃	不整円	不整円	25×22	14×12	14	110°	平坦	——	——
37 P	K-8(a)	〃	楕円	円	49×37	12×12	28	125°	平坦	N－82°－E	——
38 P	K-8(b)	〃	不整楕円	不整長楕円	49×32	34×16	10	135°	凹凸状	N－34°－E	——
39 P	K-8(a)	〃	楕円	楕円	52×39	38×26	14	115°	若干凹状	N－50°－W	——
40 P	K-8(a)	〃	不整円	楕円	41×35	20×15	18	120°	若干凹状	——	——
41 P	K-8(b)	〃	——	——	(42)×40	(23)×21	15	115°	平坦	——	上面カク乱
42 P	K-8(d)	〃	不整楕円	不整楕円	46×32	16×10	25	115°	平坦	N－54°－W	——
43 P	K-8(d)	〃	円	隅丸楕円	34×29	25×21	14	105°	若干凹状	——	——
44 P	K-8(c)	〃	不整楕円	不整円	40×30	24×20	46	100°	平坦	N－65°－W	
45 P	L-6(b)	〃	不整円	不整円	22×20	14×12	11	110°	平坦	——	——
46 P	L-7(c)	〃	不整楕円	不整長楕円	51×38	37×12	18	105°・130°	若干凹状	N－38°－W	
47 P	L-7(a)	〃	不整楕円	不整楕円	39×31	22×16	22	105°	平坦	——	——
48 P	L-7(d)	〃	円	方	40×38	21×17	42	100°	若干凹状	——	——
49 P	L-7(c)	〃	円	不整円	21×20	10×9	8	115°	若干凹状	——	——
50 P	L-7(c)	〃	楕円	不整楕円	66×50	45×26	25	110°	平坦	N－26°－E	——
51 P	M-6(b)	〃	楕円	長楕円	64×42	23×10	17	125°・135°	平坦	N－58°－E	——
52 P	N-6(b)	〃	不整楕円	長楕円	45×28	29×8	22	105°	平坦	N－61°－W	——
53 P	N-7(c)	〃	円	円	22×20	11×9	34	100°	平坦	——	——
54 P	K-13(b)	Ⅴ層上面	不整円	円	53×45	26×24	29	110°	若干凹状	——	中段あり

遺構名	地区名	検出面	平面形態 上端	平面形態 下端	平面規模cm 上端	平面規模cm 下端	深さ cm	壁角	底面状態	上端長軸方位	備考
55P	K-13(b)	Ⅵ層上面	楕円	楕円	35×26	21×14	26	100°	平坦	N－8°－W	――
56P	K-13(b)	Ⅴ層上面	円	不整円	33×30	23×20	24	105°	若干凹状	――	――
57P	K-13(b)	〃	円	不整円	32×28	18×17	15	105°	平坦	N－50°－W	――
58P	M-13(b)	Ⅵ層上面	楕円	不整楕円	66×49	48×36	35	110°	若干凹状	――	――
59P	P-9(a)	Ⅴ層上面	円	不整楕円	26×22	16×12	26	110°	若干凹状	――	――
60P	P-9(a)	〃	不整円	円	32×27	16×16	16	120°	若干凹状	――	――
61P	P-9(a)	〃	円	不整円	30×26	20×16	26	100°	若干凹状	――	――
62P	P-9(a)	〃	円	不整円	37×35	24×21	54	105°	平坦	――	――
63P	P-9(a)	〃	円	円	30×27	23×22	18	100°	平坦	――	――
64P	P-11(d)	Ⅵ層上面	円	不整楕円	42×37	13×8	42	100°	平坦	――	中段あり
65P	P-12(d)	〃	不整円	不整円	32×28	22×18	25	100°	平坦	――	――
66P	P-12(a)	〃	不整円	不整楕円	42×38	32×26	28	95°	平坦	――	――

第5表　21～34号土壙遺構観察表

※( )内は残存数

遺壙名	地区名	検出面	平面形態 上端	平面形態 下端	平面規模cm 型	平面規模cm 上端	平面規模cm 下端	深さ cm	壁角 長軸	壁角 短軸	底面状態	上端長軸方位	分類	備考
21D	K-8(b)	Ⅵ層上面	不整楕円	長楕円	小	80×58	54×26	20	120°・135°		平坦	N－42°－W	D	――
22D	K-8(a)	Ⅵ層上面	不整楕円	不整楕円	小	80×61	66×44	17	130°		若干凹状	N－57°－W	C	――
23D	M-6(a)	Ⅵ層上面	楕円	楕円	小	74×52	56×32	22	120°		平坦	N－56°－E	C	――
24D	K-13(c)	Ⅴ層上面	不整楕円	不整楕円	小	90×73	55×40	25	130°		凹凸状	N－2°－W	C	――
25D	K-13(d)	Ⅵ層上面	楕円？	楕円	小	(72×50)	60×45	18	115°		平坦	――	―	上面カク乱
26D	J-8(c)	Ⅵ層上面	不整楕円	長楕円	中	135×88	94×44	23	110°・135°		平坦	N－56°－W	D	上面1風
27D	J-8(b)	Ⅵ層上面	不整楕円	不整楕円	中	115×87	80×58	18	115°		平坦	N－39°－W	C	19Dを切る
28D	K-7(c)	Ⅵ層上面	不整楕円	円	中	110×90	50×44	40	140°・130°		平坦	N－27°－W	E	――
29D	K-8(b)	Ⅵ層上面	不整楕円	不整楕円	中	116×88	86×63	22	135°		平坦	N－20°－E	C	――
30D	L-7(b)	Ⅵ層上面	不整楕円	〃	中	112×70	60×34	22	130°		凹凸状	N－71°－W	C	――
31D	N-7(a)	Ⅵ層上面	不整楕円	〃	中	143×104	116×80	11	140°・120°		若干凹状	N－77°－W	C	――
32D	O-6(b)	Ⅵ層上面	不整楕円	〃	中	120×94	103×76	14	150°		若干凹状	N－30°－W	C	――
33D	M-13(c)	Ⅵ層上面	不整楕円	不整形	中	126×100	110×74	52	100°・115°		段差あり	N－55°－W	―	――
34D	D-9(a)	Ⅴ層上面	――	――	―	――	――	―	――		――	――	―	北側未掘

第6表　7～66号ピット出土遺物数量表

遺構名＼遺物	土器 口縁部	土器 体部	土器 底部	土器 復元土器	土器 群別 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅷ	Ⅺ	不明	土製円盤	石器 剥片石器 石鏃	ポイント	エスキー・ユ	スクレイー	S・F	M・F	剥片	チップ	石斧	礫石器 Ⅲ	Ⅴ
8P		16										16		1		1	3			2				
9P	1	17							2			16												
12P		9										9												
13P		3						2		1														
15P	1	8									1	8								5				
16P		2										2		1										
17P		2										2												
20P		1							1															
22P	1	4										5												
23P	1	4							1	1		3												
25P		7						1				6												
27P		2										2												
28P		5	1			1						5												
29P		1										1												
30P		2										2												
31P	1	20			2			1	1	1		16	1			1	2	1		4	2			
32P	1	16										17												

遺構名＼遺物	土器												土製円盤	石器										
	口縁部	体部	底部	復元土器	群別									剥片石器						剥片	チップ	石斧	礫石器	
					Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅷ	Ⅺ	不明		石鏃	ポイント	エスキース・ピエス	スイバレー	S・F	M・F				Ⅲ	Ⅴ
33P	2	23					1			1		23												
34P		1										1								1				
38P		1						1																
39P		2										2												
40P		2										2												
41P		4										4						1						
42P		3						1				2								1				
43P		4										4												
44P		1										1												
46P		1								1														
47P		3	1									4												
48P		4										4												
50P		2										2												
51P	1	11						1		1		10				1	3			1				
52P	1	6						1		1		5												
54P		8						1				7						1		4				
55P		1				1																		
57P		1										1									1			1
58P		4										4												
61P		2									1	1											1	
62P		6																						
63P	1	20								1		20												
64P		3						1				2												
66P																				2	2	1		

※ 7・10・11・14・18・19・21・24・26・35・36・37・45・49・53・56・59・60・65号ピットは無遺物

第7表　21～34号土壙出土遺物数量表

遺構名＼遺物	土器											石器								
	口縁部	体部	底部	復元土器	群別							剥片石器						剥片	チップ	石核
					Ⅰ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅷ	Ⅺ	不明	石鏃	石錐	エスキース・ピエス	スクレイパー	S・F	M・F			
21 D	1	7							1	1	6							3		
22 D	1	10									11									
23 D		3									3									
24 D		6			1						5			1				2		
25 D		1									1									
26 D	1	1	1								3							4		
27 D		1	1								2									
28 D		1									1									
29 D		3									3									
30 D	6	69	3						2	2	73	1			2	1		3	3	2
31 D	3	51	6			1			8		52	1								
32 D	6	31	3					2	4	2	32							4		
33 D	2	25					2				25	1						2		
34 D	2	6							1		7		1		1			1		1

4．出土遺物

（1） 土　　器

梨野Ａ遺跡出土の縄文土器総数量は、完型及び復元土器資料31点、破片資料約40,000点（口縁部2,028点、体部約38,000点、底部979点）である。（体部破片は数量が特に多かった為、概算数量である。）

これら資料の内、１）時期決定出来る文様（地文も含む）が認められるもの　２）検出状況より時期決定が可能なもの　３）特殊な器形なもの　を第Ⅰ群から第ⅩⅢまでの群別資料として取り扱った。従って、ａ）細片のもの　ｂ）地文のみ、無文のもの　ｃ）風化・磨滅の著しいもの　ｄ）底部破片　の多くは群別資料から除外された。

群別資料として、完型及び復元土器資料30点、破片資料1,865点（口縁部871点、体部977点、底部17点）が、その対象数量となった。ただし、１号住居跡炉土器埋設部出土土器（復元土器資料）１点は、当住居跡が検出状況より、所属時期が中期後葉か末葉のいずれかに決められない為、群別資料より除外した。

佐　藤　甲　二

第８表　出土土器数量表

		完形復元土器資料	破片土器資料 合計	口縁部	体部	底部
出土総数量		31	約40,000	2,028	約38,000	979
群別資料総数量		30	1,865	871	977	17
群別	第Ⅰ群	——	38	4	34	——
	第Ⅱ群	——	121	2	119	——
	第Ⅲ群	——	5	3	5	——
	第Ⅳ群	——	7	——	7	——
	第Ⅴ群	4	445	140	304	1
	第Ⅵ群	8	165	87	78	——
	第Ⅶ群	2	20	17	3	——
	第Ⅷ群	4	681	365	316	——
	第Ⅸ群	1	13	10	3	——
	第Ⅹ群	——	1	1	——	——
	第ⅩⅠ群	3	179	179	——	——
	第ⅩⅡ群	1	6	——	——	6
	第ⅩⅢ群	7	184	63	111	10

※頸部は口縁部に、台部・脚部は底部に含めた。

第９表　群別土器出土地点別数量表

出土地点＼群		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	ⅩⅠ	ⅩⅡ	ⅩⅢ
基本層位	Ⅰ	2	5	—	1	56	21	2	95	1	—	22	53	53
	Ⅱ	—	3	—	—	9	1	—	24	—	—	3	—	39(1)
	Ⅲ	23	23	4	3	153	81(4)	9(2)	329(1)	6	1	94(3)	6(1)	23
	Ⅳa	—	19	—	—	6	3	1	25	1	—	3	—	42
	Ⅳb上	2	2	—	—	28	4	—	18	—	—	6	—	19(1)
	Ⅳb	3	37	—	—	11	1	4	2	1	—	—	—	4
	Ⅳc	—	19	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
表採		1	—	—	—	1	—	—	3	—	—	—	1	—
遺構内		6	9	1	2	165(4)	50(4)	6	138(3)	5(1)		43	—	10(5)
風倒木痕内		1	4	—	1	20	12	—	41	—	—	11	—	1
合計		38	121	5	7	449(4)	173(8)	22(2)	685(4)	14(1)	1	182(3)	7(1)	191(7)
比率		2％	6％	1％未満	1％未満	24％	9％	1％	36％	1％	1％未満	10％	1％未満	10％

※数値は完形及び復元土器＋破片数、（　）内数値は完形及び復元土器数、比率は少数点以下四捨五入

第Ⅰ群土器(第92～95図)

第Ⅰ群土器は早期中葉に位置づけられる貝殻・沈線文系土器である。全て破片資料で総出土数38点、内4点口縁部を出土したが底部は出土していない。胎土中に繊維を含むものはない。文様の違いにより以下の2類に分けられる。

第1類　沈線文のもの(第92図1)

この類に属するものとして体部下半と思われるものが1点出土している。沈線によって鋸歯文らしい文様が数段重ねられている。内面はていねいな縦位の磨きによる調整が行なわれている。器厚0.7cm、焼成良好な内外面赤褐色を呈する精製土器である。

第2類　貝殻腹縁圧痕文のもの　文様構成によってa、bに分けられる。

a、貝殻腹縁圧痕文が沈線、「く」字状連続刺突文に沿って展開するもの(第92図2～4・6～8、93・94図、95図1～4)

第1群土器のほとんどがこの類に含まれ、36点出土している。沈線と沈線、沈線と「く」字状連続刺突文、「く」字状連続刺突文と「く」字状連続刺突文の組み合せによる平行線文を直線状、曲線状に引き、これに沿った内側、外側に貝殻腹縁を斜位に連続圧痕して幾何学的な文様が構成される。平行線は二本を基本としており、これを数段重ねたり(第92図8、第94図7～10)、もう一条の沈線、「く」字状連続刺突文を加えて三本にする場合(第92図3)もある。平行線の上や脇に円形の小刺突が付くものもある(第93図5・9)。口縁部資料は4点出土しており、ともに波状口縁で、口縁部外面に内側に貝殻腹縁圧痕文を充填させた平行線がめぐる。口縁内側には貝殻腹縁が連続圧痕される(第92図8、第93図1)。加えて口唇部に「く」字状連続刺突文による鋸歯文が入れられるもの(第94図3)がある。92図8は口縁部平行線文(「く」字状連続刺突文)の一部が波状口縁頂部で口唇部まで延びて瘤状部分を作り、その内側に小円形刺突が加えられている。93図1は外面口縁部にも貝殻腹縁が連続圧痕されている。ともにやや外反する器形で、外面が斜めに切られたような断面形を呈す。94図は口縁部から体部にかけての同一個体の遺物である。波状口縁下の体部上半には、口縁部平行線文と組み合わさった平行線文によって菱形文(3)、体部には平行線文内に「く」字状連続刺突文による波状文(6～10)がみられる。

体部には内屈する器形(第92図4)が1点ある。沈線には1～2mm幅のものがあるが、「く」字状連続刺突文はほぼ2mm幅である。器厚0.7cm前後、胎土には石英を含むものが多い。焼成は良好なもの、やや不良なものの両者がみられ、内外面色調は黄褐色を主とするが、褐色、赤褐色のものも観察される。口縁部内面にはていねいな横位の磨きによる調整が行なわれている。

b、貝殻腹縁圧痕文が単独に文様を構成するもの(第92図5)

体部資料が1点出土している。上部に太い沈線が「八」字状に引かれ、この下に、沈線に沿わずに稜杉状の貝殻腹縁圧痕を横位に連続施文した、帯状文が2段めぐっている。内面はていね

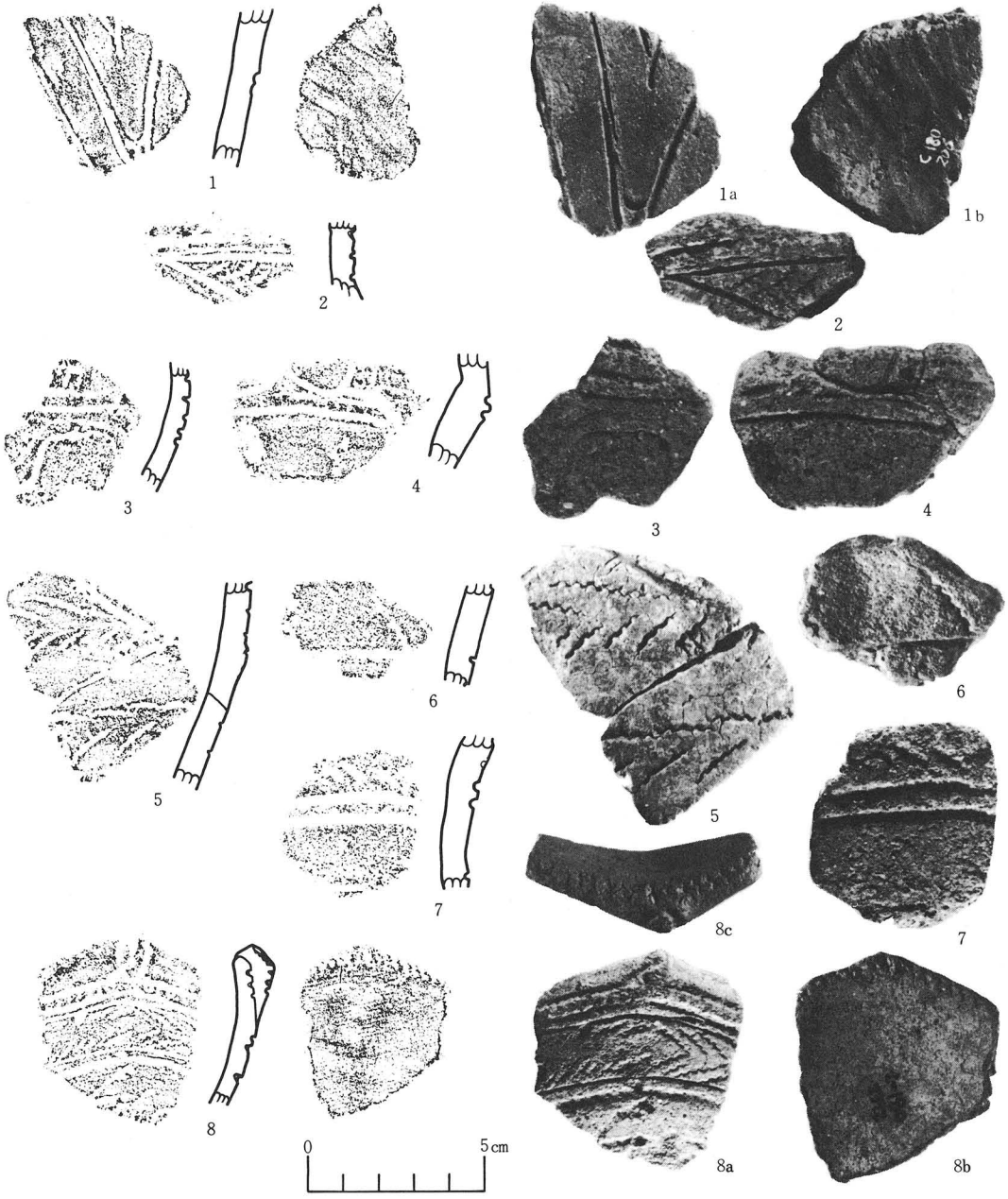


図	地区・遺構	層位	部位	外面施文	内面施文・調整	器厚mm	胎土	焼成	色調	分類	備考
1	K－7(b)	Ⅲ	体部	沈線文	磨き	7～8	精製、石英微量	良好	赤褐色	Ⅰ1	
2	35D	堆1	体部	平行線文(沈線＋く字状刺突文)、沈線→貝殻文	磨き	7	砂粒	やや不良	褐色	Ⅰ2a	
3	36P	堆	体部	平行線文(沈線、沈線＋く字状刺突文)→貝殻文	――	6	石英・砂粒多量	やや不良	赤褐色	Ⅰ2a	内外面磨滅
4	M－13(c)	Ⅲ	体部	平行線文(沈線)→貝殻文	磨き	9～10	石英、砂粒多量	やや不良	黄褐色	Ⅰ2a	
5	K－8(a)	Ⅲ	体部	沈線文→貝殻文	磨き	8	精製	良好	暗黄褐色	Ⅰ2b	
6	M－7(d)	Ⅲ	体部	平行線文(沈線)→貝殻文	――	7	石英多量、砂粒	やや不良	黄褐色	Ⅰ2a	内外面磨滅
7	M－13(b)	Ⅲ	体部	平行線文(沈線＋く字状刺突文)→貝殻文	――	7～8	石英微量、砂粒	やや不良	黄褐色	Ⅰ2a	内外面磨滅
8	K－13(b)	Ⅳb	口縁部	平行線文(沈線＋く字状刺突文)→貝殻文	磨き、貝殻文	5～10	精製、石英、砂粒微量	良好	黄褐色	Ⅰ2a	

第92図　第Ⅰ群土器(1)

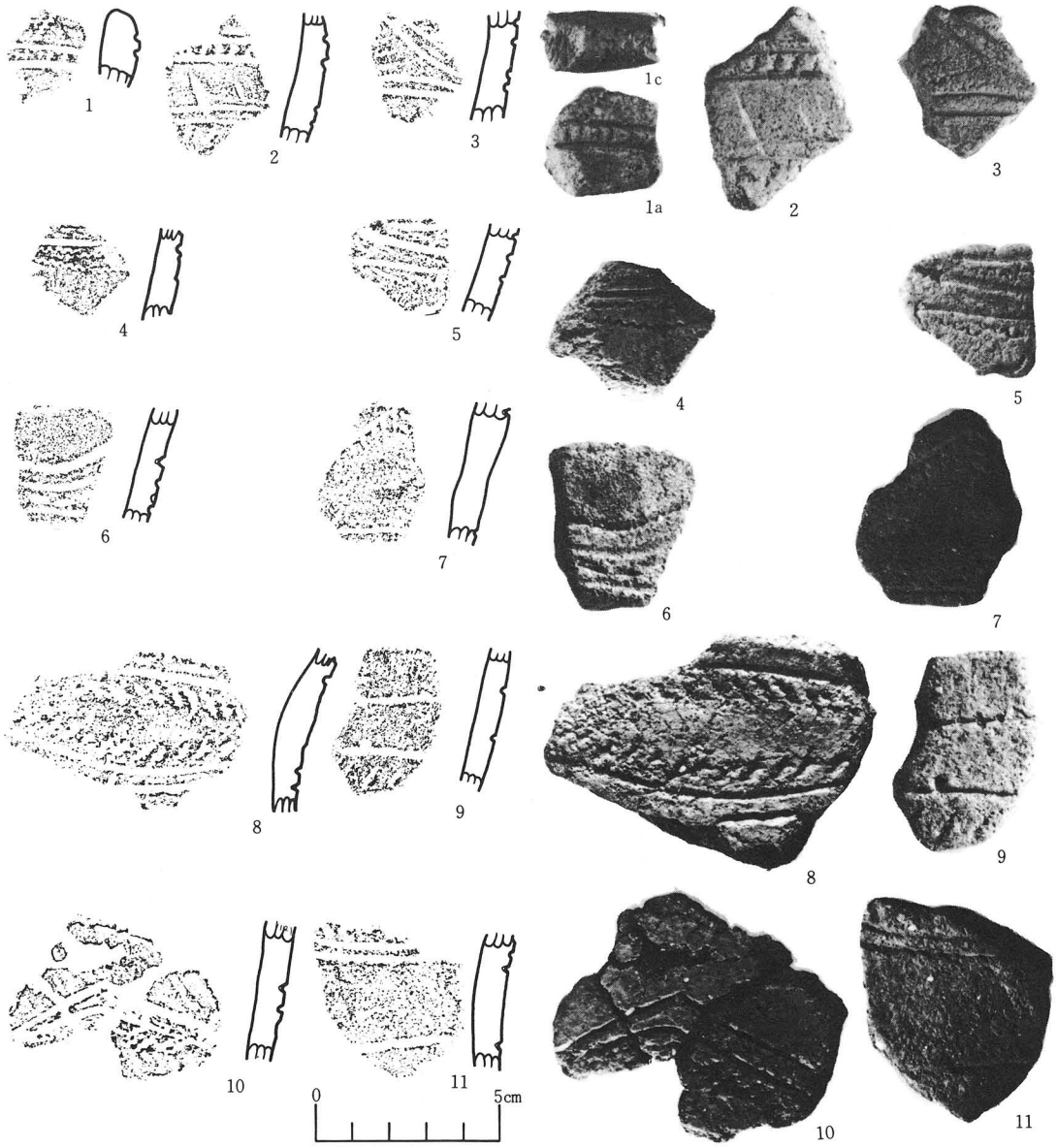


図	地区・遺構	層位	部位	外面施文	内面施文・調整	器厚mm	胎土	焼成	色調	分類	備考
1	K－8(a)	Ⅲ	口縁部	平行線文(沈線)→貝殻文	磨き、貝殻文	8～10	精製、砂粒微量	良好	黄褐色	Ⅰ2a	同一個体か
2	K－8(b)	Ⅲ	体部	平行線文(沈線)→貝殻文	磨き	7～8	精製、砂粒微量	良好	黄褐色	Ⅰ2a	
3	K－8(b)	Ⅲ	体部	平行線文(沈線)→貝殻文	磨き	8	精製、砂粒微量	良好	黄褐色	Ⅰ2a	
4	24D	堆	体部	平行線文(沈線)→貝殻文	磨き	6～7	石英微量、砂粒	良好	赤褐色	Ⅰ2a	——
5	J－8(b)	Ⅰ	体部	平行線文(沈線)、沈線→刺突	磨き	7	精製、石英微量	良好	黄褐色	Ⅰ2a	——
6	31P	堆	体部	平行線文(沈線＋く字状刺突文)、沈線→刺突	——	7	石英多量	やや不良	赤褐色	Ⅰ2a？	内外面磨滅
7	K－7(d)	Ⅳb	体部	沈線→貝殻文	——	7～8	石英微量、砂粒	やや不良	褐色	Ⅰ2a	内面磨滅
8	L－7(c)	Ⅲ	体部	平行線文(沈線＋く字状刺突文)→貝殻文	——	7～8	石英、砂粒	やや不良	褐色	Ⅰ2a	内面磨滅
9	表採	——	体部	平行線文？(沈線)→刺突、貝殻文	——	6	石英、砂粒多量	やや不良	黄褐色	Ⅰ2a	内外面磨滅
10	35D	堆1	体部	平行線文(沈線＋く字状刺突文)→貝殻文	磨き	7	石英、砂粒	やや不良	褐色	Ⅰ2a	——
11	1風	堆	体部	平行線文(沈線＋く字状刺突文)、沈線→貝殻文	——	7	石英、砂粒	やや不良	褐色	Ⅰ2a	内外面磨滅

第93図　第Ⅰ群土器(2)

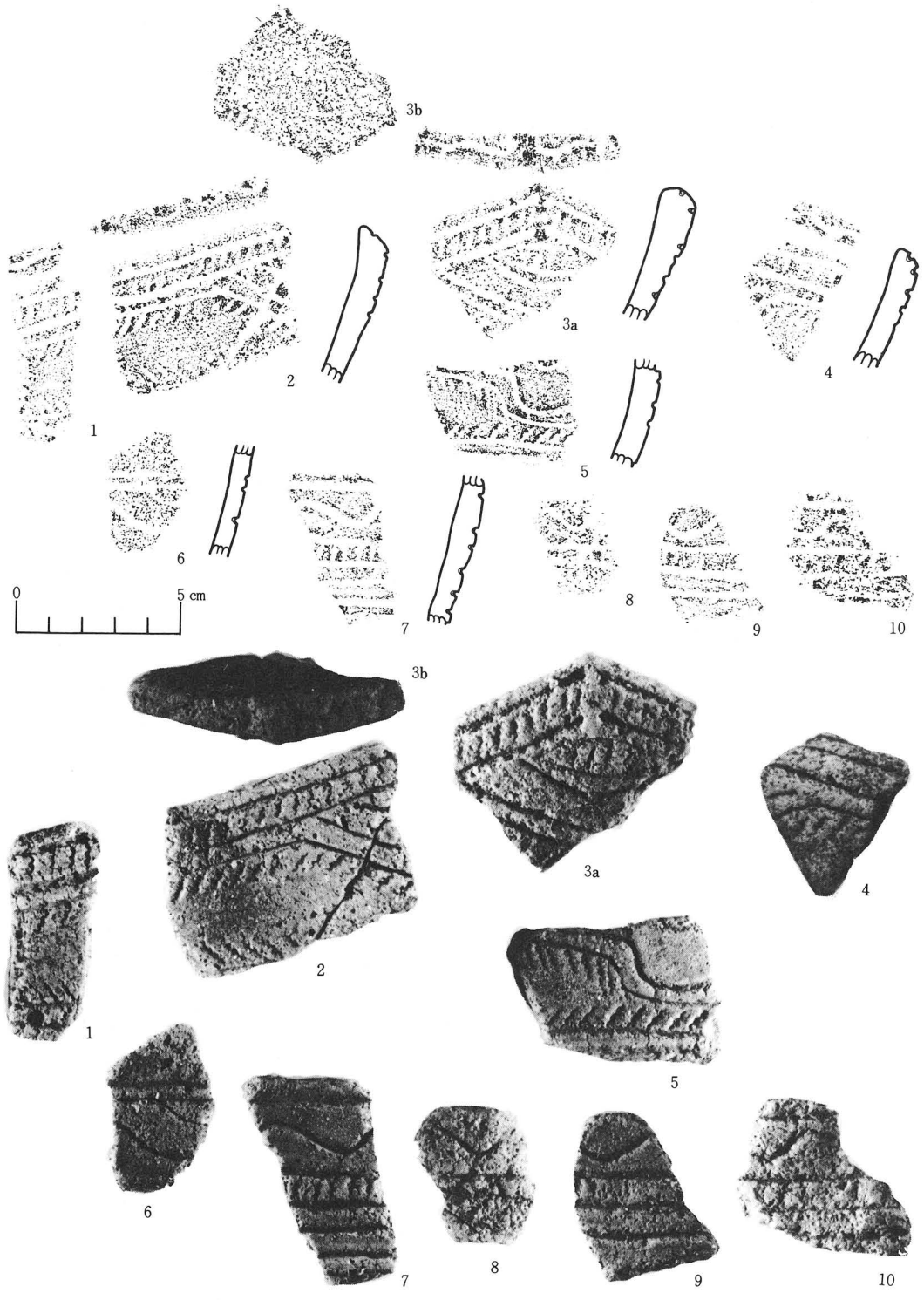


図	地　区	層位	部位	外　面　施　文	内面施文・調整	器厚mm	胎　土	焼　成	色調	分類	備　考
1～10	K－7 (a．d)	Ⅰ・Ⅲ	口縁部～体部	平行線文(沈線、沈線＋く字状刺突文、く字状刺突文)、く字状刺突文、沈線→く字状刺突文、貝殻文	磨き、貝殻文	6～9	石英多量、砂粒	やや不良	黄褐色	Ⅰ2a	同一個体

第94図　第Ⅰ群土器(3)

いな横位の磨きによる調整が行なわれている。器厚0.8cm、胎土には石英を含まず非常に精製された、焼成良好な、内外面暗黄褐色を呈する土器である。

第1類は千葉県城ノ台貝塚[註1]出土の田戸下層式土器に、第2類の一部は宮城県明神裏遺跡[註2]出土の土器に類例が求められ、第1類は田戸下層式併行、第2類は明神裏Ⅲ式から大寺下層式の時期に比定される。

佐藤甲二

註1．吉田　格「千葉県城ノ台貝塚」『石器時代』第1号　石器時代文化研究会　1955の第三類A類土器
2．白石市史編さん委員「明神裏遺跡」『白石市史別巻考古資料篇』白石市　1976

第Ⅱ群土器（第95～99図）

第Ⅱ群土器は早期末葉のいわゆる条痕文系土器である。全て破片資料で総出土数121点、内口縁部2点で、底部は出土していない。胎土中に植物繊維を含む。この内磨滅風化したものを除く59点は、内外施文、焼成、色調より以下の4類に分けられる。

第1類　外面縄文、内面条痕文のもの。隆線の有無によりa、bに分けられる。

a　外面に隆線をもつもの（第96図1）

口縁部資料が1点のみ出土している。外反する平縁口縁で、口縁上端に隆線を一条めぐらしている。隆線中央には横位沈線が引かれ、その上・下に縄文原体圧痕による刻みが加えられている。外面には隆線貼付後に横位ＬＲ多条縄文が施文され、内面には幅広の条痕文（0.4cm幅）が施文されているが体部まで続かないようである。器厚0.8cm、繊維を多量に含む焼成不良な、内外面とも黒褐色を呈する土器である。

b　外面縄文施文のみのもの（第95図5～8、96図2、98図1）

体部資料のみで29点出土している。外面縄文施文は横位回転のＬＲ多条縄文を主とし、わずかにＲＬ多条縄文もみられる。内面条痕文には条痕幅がa同様広いもの（0.4cm）と細いもの（0.2cm）の2種類あるが、後者の方が多い。器厚0.7cmのものが多く、1cm前後のものも数点ある。繊維を多量に含み焼成不良なものが多い。外面色調は黄褐色のものが主であるが、褐色、黒褐色、赤褐色のものもある。

第2類　外面縄文　内面無文のもの（第96図3、97図、98図2）

体部資料のみで23点出土している。外面縄文施文は横位回転のＬＲ・ＲＬ縄文とも認められるが、ほとんどが多条縄文である。器厚は第1類同様0.7cm前後のものが多いが、わずかに0.5cm前後の薄いものもある。内面に繊維痕を明瞭に残す焼成不良のものが多い。外面色調は黄褐色、褐色のものを主としているが、赤褐色のものもある。

第3類　内外とも無文のもの．隆線の有無によりa・bに分けられる。

a、外面に隆線を持つもの（第98図3）

体部上半破片が1点のみ出土している。低い隆線が横位にめぐり、これに上部より下垂する隆線が直交している。隆線上も無文である。体部上半の横位隆線部でかるい屈折点を持ち、口

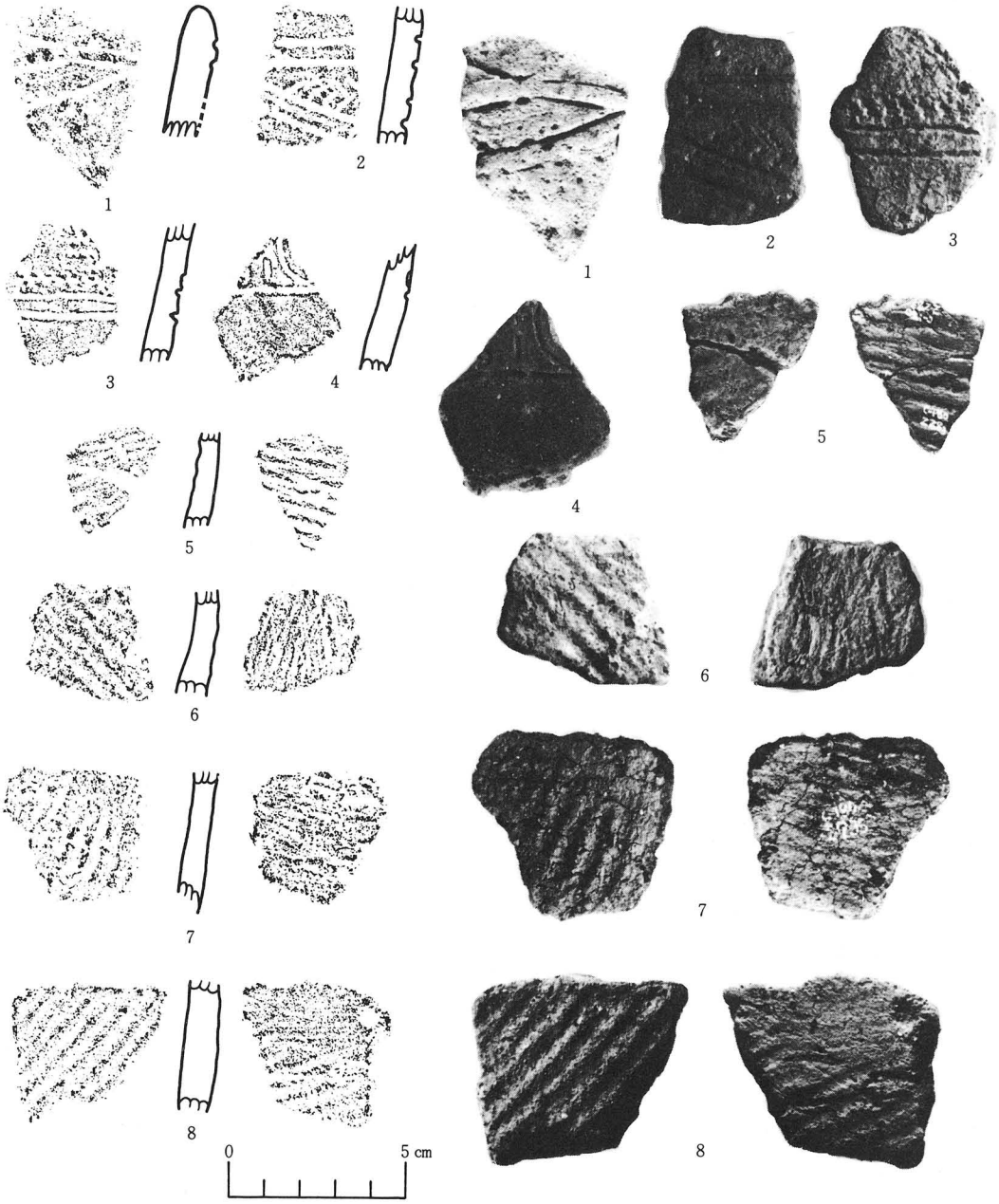
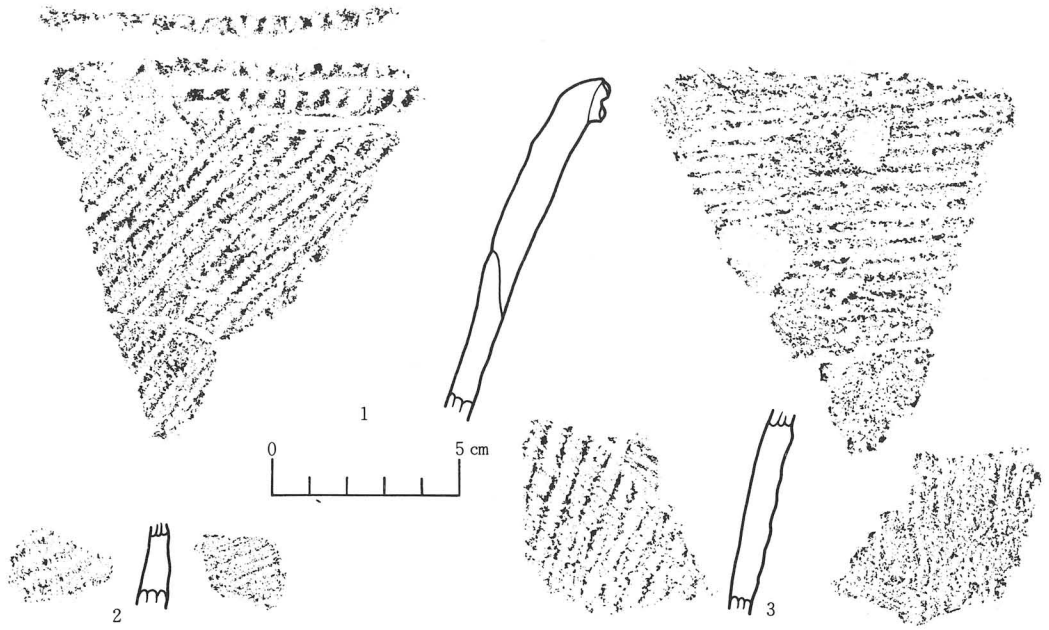


図	地区	層位	部位	外面施文	内面施文・調整	器厚mm	胎土	焼成	色調	分類	備考
1	K−13(d)	Ⅳb	口縁部	平行線文(沈線)→貝殻文	——	9	精製、石英微量	やや不良	黄褐色	Ⅰ2a	内外面磨滅
2	L−6(c)	Ⅲ	体部	平行線文(沈線)→貝殻文	——	7	石英多量、砂粒	やや不良	褐色	Ⅰ2a	内面磨滅
3	K−7(a)	Ⅲ	体部	平行線文(沈線＋く字状刺突文)→貝殻文	磨き	7	石英、砂粒	やや不良	褐色	Ⅰ2a	——
4	J−8(b)	Ⅲ	体部	平行線文(沈線)、沈線→刺突	磨き	8	精製、石英微量	良好	褐色	Ⅰ2a？	——
5	K−13(c)	Ⅳb	体部	縄文	条痕文	5～6	繊維少量、石英微量、砂粒	やや不良	黄褐色	Ⅱ1b	外面磨滅
6	K−13(c)	Ⅳa	体部	縄文	条痕文	6～7	繊維多量、石英・砂粒微量	やや不良	黄褐色	Ⅱ1b	外面磨滅
7	K−13(b)	Ⅳc	体部	横位LR縄文	条痕文	6	繊維多量、石英多量、砂粒	不良	褐色	Ⅱ1b	——
8	K−13(c)	Ⅳb	体部	縄文	条痕文	8	繊維多量、石英多量、砂粒	不良	褐色	Ⅱ1b	外面磨滅

第95図　第Ⅰ群土器(4)・第Ⅱ群土器(1)



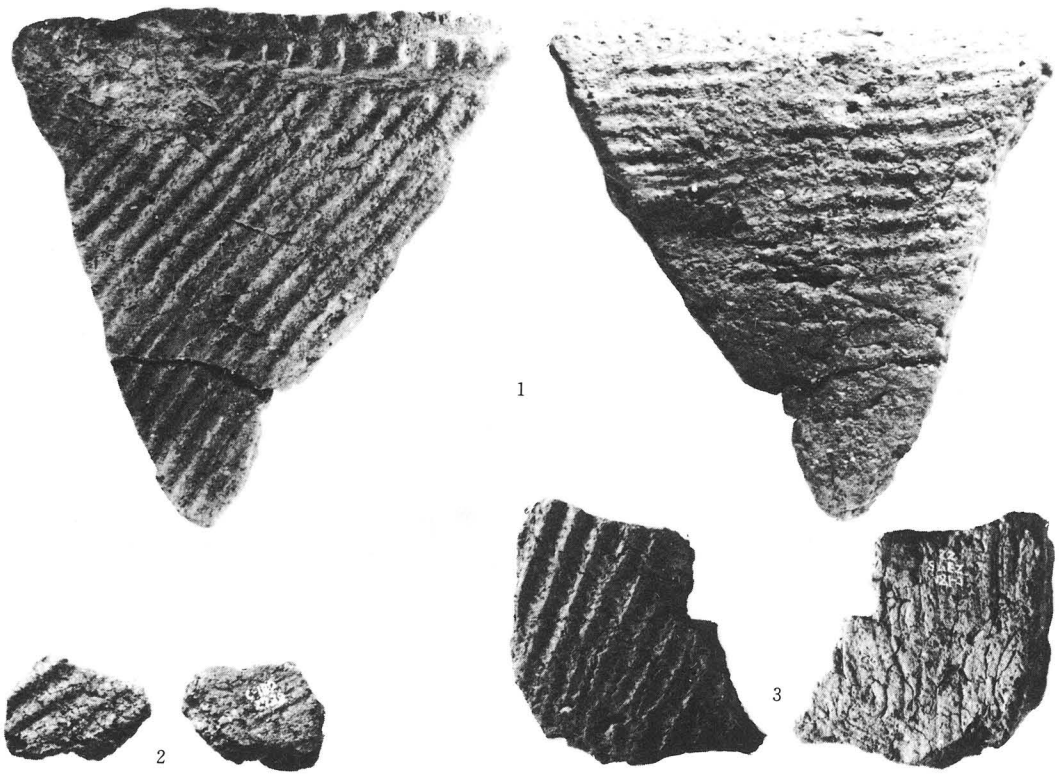


図	地　区	層位	部位	外　面　施　文	内面施文・調整	器厚mm	胎　　土	焼成	色調	分類	備　考
1	K－13(c)	Ⅳc	口縁部	隆線（沈線＋縄文原体圧痕）→横位ＬＲ多条縄文	条痕文	7～9	繊維多量、石英多量、砂粒	不良	褐　色	Ⅱ1a	——
2	K－13(b)	Ⅳc	体　部	横位ＬＲ多条縄文	条痕文	4～6	繊維少量、石英多量、砂粒	不良	黒褐色	Ⅱ1b	——
3	K－13(b)	Ⅳb	体　部	横位ＬＲ多条縄文	——	7	繊維多量、石英微量、砂粒	不良	褐　色	Ⅱ2	——

第96図　第Ⅱ群土器（2）

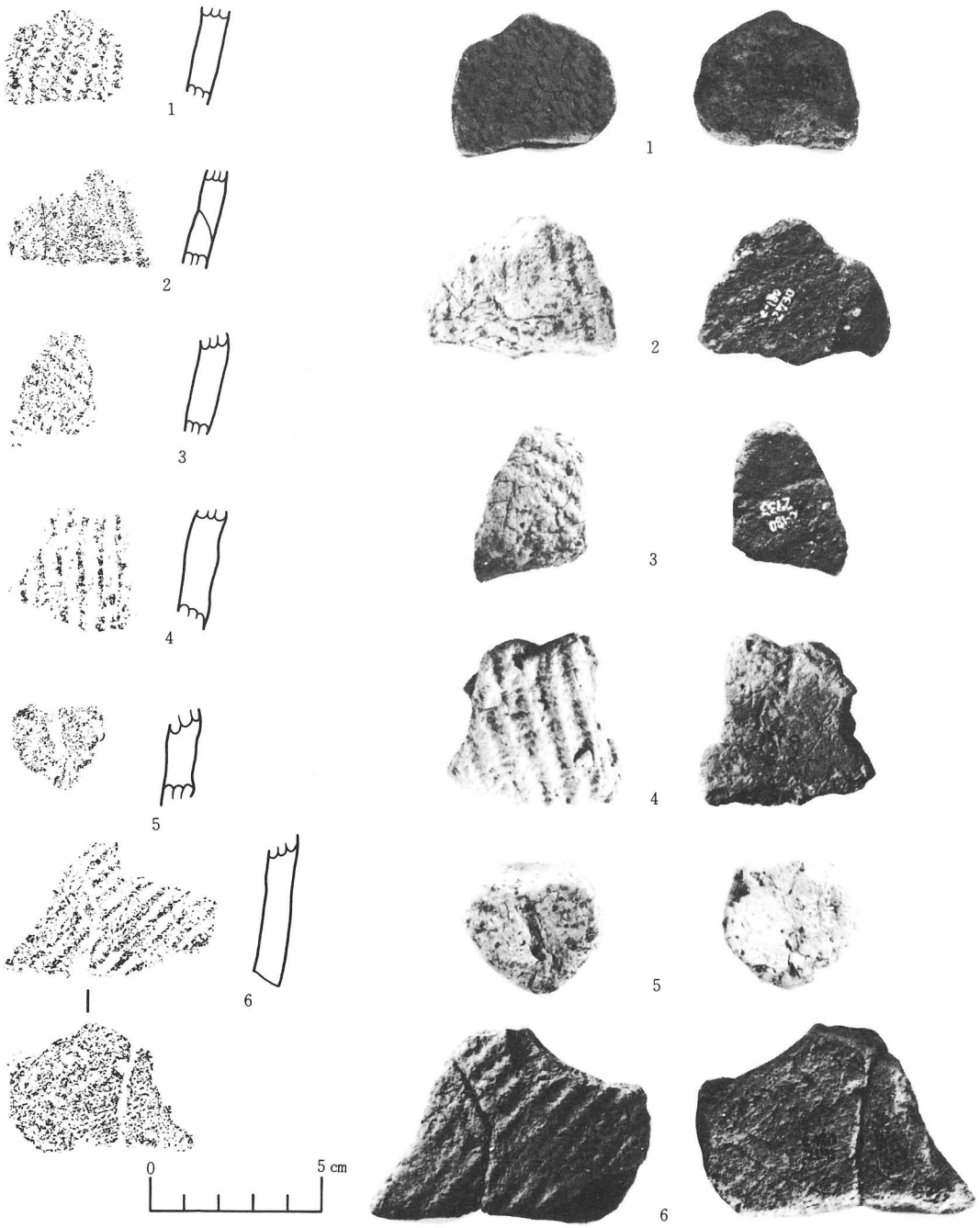
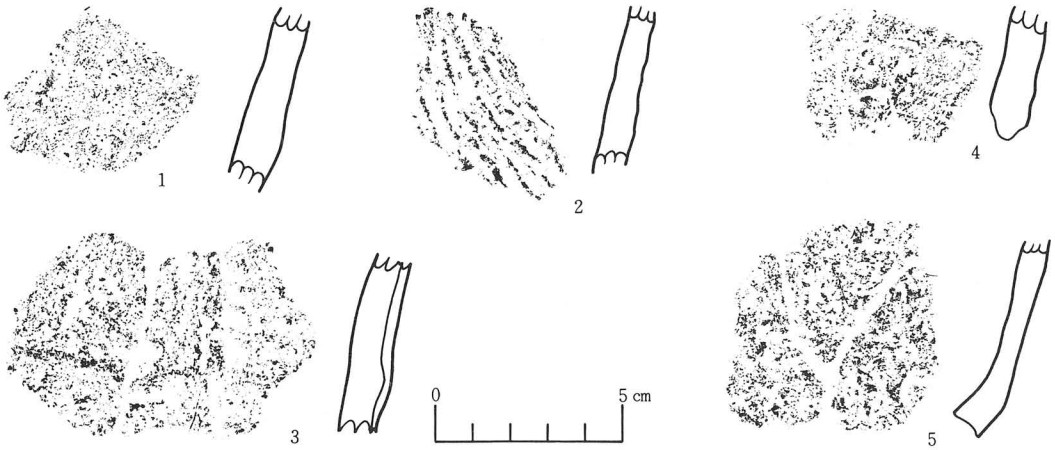


図	地　区	層位	部位	外　面　施　文	内面施文・調整	器厚mm	胎　　土	焼　成	色　調	分類	備　考
1	K－13(c)	Ⅳa	体部	横位ＬＲ縄文	——	7	繊維多量、石英微量、砂粒	やや不良	黄褐色	Ⅱ2	——
2	K－13(c)	Ⅳc	体部	縄文	——	7	繊維多量、石英多量、砂粒	不　良	赤褐色	Ⅱ2	外面磨滅
3	K－13(b)	Ⅳc	体部	横位ＲＬ多条縄文	——	7	繊維多量、石英多量、砂粒	不　良	褐　色	Ⅱ2	——
4	O－6(b)	Ⅲ	体部	横位ＲＬ多条縄文	——	9	繊維多量、石英微量、砂粒	やや不良	黄褐色	Ⅱ2	——
5	K－13(c)	Ⅳc	体部	縄文	——	8	繊維多量、石英微量、砂粒	不　良	黄褐色	Ⅱ2	外面磨滅
6	K－13(c)	Ⅳa	体部	横位ＬＲ多条縄文	——	8	繊維、石英、砂粒	不　良	褐　色	Ⅱ2	土製円盤？

第97図　第Ⅱ群土器(3)



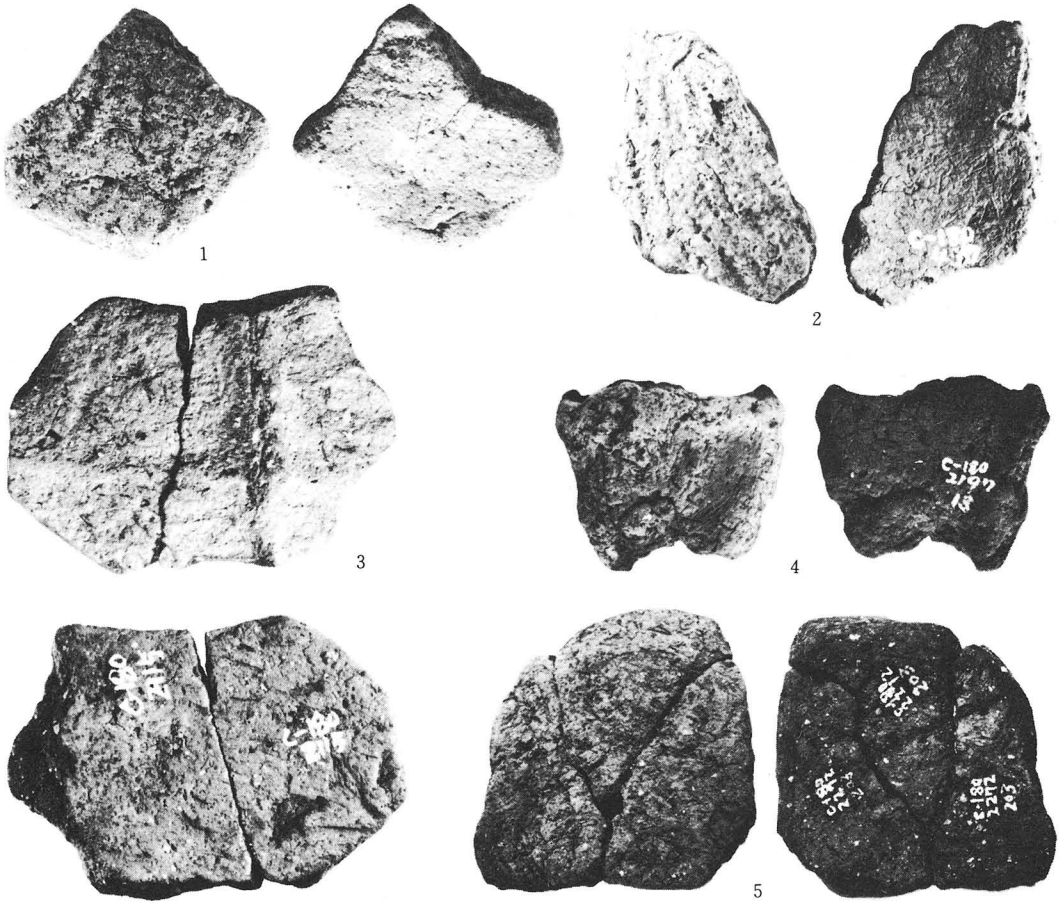


図	地区・遺構	層位	部位	外面施文	内面施文・調整	器厚mm	胎土	焼成	色調	分類	備考
1	K－13(c)	Ⅳc	体部	横位LR多条縄文	条痕文	9～11	繊維多量、石英多量、砂粒	不良	褐色	Ⅱ1b	内面磨滅
2	O－7(d)	Ⅱ	体部	横位RL縄文	――	7～9	繊維多量、石英・砂粒微量	やや不良	黄褐色	Ⅱ2	――
3	K－13(c)	Ⅳa	体部	隆線	――	8	繊維多量、砂粒多量	不良	暗黄褐色	Ⅱ3a	――
4	M－13(b)	Ⅲ	体部	――	――	10	繊維多量、石英・砂粒微量	やや不良	黄褐色	Ⅱ3b	――
5	5風	堆	体部	――	――	7～10	繊維多量、砂粒多量	不良	褐色	Ⅱ	内外面磨滅

第98図　第Ⅱ群土器(4)

縁部に向ってゆるやかに「く」字状にひらく器形かと考えられる。器厚0.8cm、繊維痕を内外面に明瞭に残し、砂粒を多量に含む焼成不良の土器で、内外面とも暗黄褐色を呈する。

b、内外面とも無文のもの（第98図４、99図１）

体部資料のみで３点出土したが、この内２点は底部付近のものと思われる（第98図４、99図１）。繊維痕を内外に明瞭に残し、焼成は不良である。外面黄褐色、内面黒褐色を呈す。

第４類　外面沈線文、内面条痕文のもの（第99図２・３）

口縁部、体部資料が各１点出土しているが、同一個体の可能性もある。外面は半截竹管状施文具による平行沈線によって鋸歯文等の直線文が施文され、口縁上端部、体部には横位隆線がめぐる。隆線上には半截竹管状施文具による刻みが加えられる。内面条痕文は条痕幅約0.2cmの細いものである。口縁はやや外反する平縁であると思われる。器厚１cm前後、繊維を少量含み、焼成は他のⅡ群土器に比べて良いが、やや不良の部類に入る。外面色調は暗黄褐色を呈する。

K－13グリッド北東側検出Ⅵc層中からは第Ⅱ群土器１類、第２類のみ出土している。第Ⅱ群土器は型式の上からは素山Ⅱb式以後のものであるが、羽状縄文、撚糸文、帯状文が存在しない点より船入島下層式とは区別される。第３a類は無文ではあるが、体部上半の横位隆線及び器形の点より素山Ⅱb式との近似性が窺える。また、第４類は、仙台市北前遺跡[註1)]、石巻市南境貝塚[註2)]第二層土器中に類例を求められる。　佐　藤　甲　二

註　１．仙台市教育委員会「北前遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書第36集』1982　の第２群土器
２．後藤勝彦他「埋蔵文化財第四次緊急調査概報－南境貝塚－」『宮城県文化財調査報告書第20集』宮城県教育委員会1969　の第２群第２類土器。

第Ⅲ群土器（第99・100図）

前期中葉に所属する土器群である。半截竹管状施文具による鋸歯文と刻みを持つ隆線を特徴とする。全て破片資料で５点出土している。いずれも繊維は含まず、内面に文様は持たない。

３点（第99図４～５、第100図1）は、半截竹管状施文具による平行沈線によって鋸歯文が施文されている。100図1はやや外反する平縁口縁で、口縁部に横位の鋸歯文が２段めぐり、体部には縦位の鋸歯文が展開する。この間には横位の隆線が２段めぐり、その上に半截竹管状施文具による刻みが加えられている。内面には横位のナデによるていねいな調整が施こされている。焼成良好な、内外面褐色を呈する土器で、文様構成の上では第Ⅱ群第４類に類似する。

他の２点は地文を縄文とするもので、縦位の隆線上に刻み（半截竹管？）を持つ突起状の口縁部破片（第10図３）、細い１本沈線による縦位の鋸歯文の体部破片（第10図２）である。

縦に鋸歯文が展開する類例として宮城県大木貝塚[註1)]出土の大木３式土器中に認められ、半截竹管状施文具による沈線文、刻みを持つ隆線、１本沈線文も同型式内に包括さる文様[註2)]であることより、これらⅢ群土器は大木３式に比定されよう。　佐　藤　甲　二

註　１．伊東信雄他「縄文時代－前期大木３式」『宮城県史34（資料篇11）』1982
２．興野義一　「大木土器理解のために（Ⅲ）」『考古学ジャーナルNo.18』1968

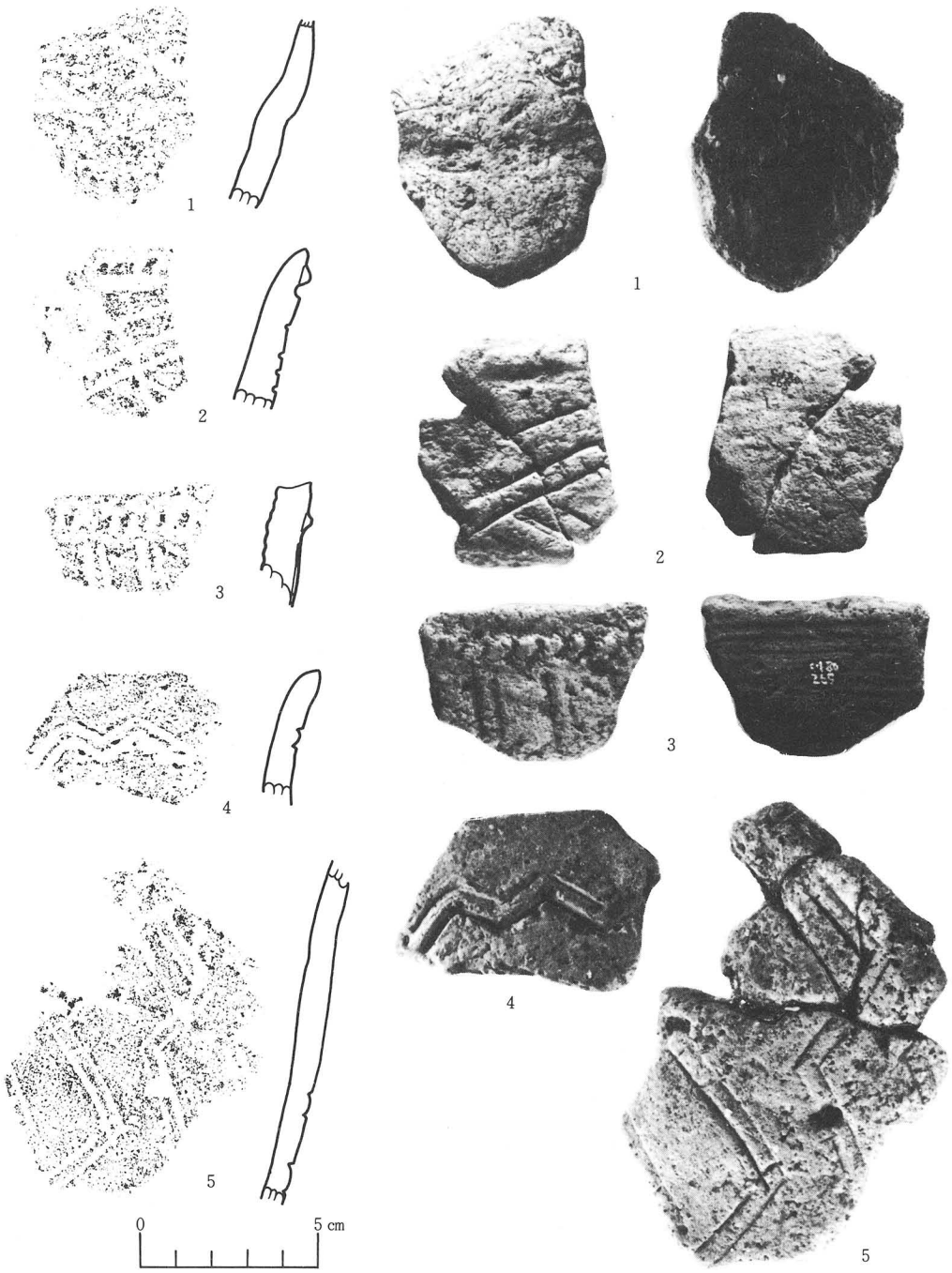


図	地区・遺構	層位	部位	外面施文	内面施文・調整	器厚mm	胎土	焼成	色調	分類	備考
1	M−13(b)	Ⅳb	体部	——	——	5～7	繊維多量、石英・砂粒微量	やや不良	黄褐色	Ⅱ3b	——
2	K−8(d)	Ⅲ	口縁部	隆線(刻み)、平行沈線文、沈線	条痕文	7～10	繊維少量、石英・砂粒微量	やや不良	暗黄褐色	Ⅱ4	同一個体か
3	K−8(d)	Ⅲ	体部	隆線(刻み)、平行沈線文	条痕文	10	繊維少量、石英・砂粒微量	やや不良	暗黄褐色	Ⅱ4	
4	M−7(a)	Ⅲ	口縁部	平行沈線文	——	7	石英、砂粒多量	良好	褐色	Ⅲ	内面磨滅
5	33P	堆	体部	平行沈線文	——	7	石英、砂粒多量	やや良	褐色	Ⅲ	内面磨滅

第99図　第Ⅱ群土器(5)・第Ⅲ群土器(1)

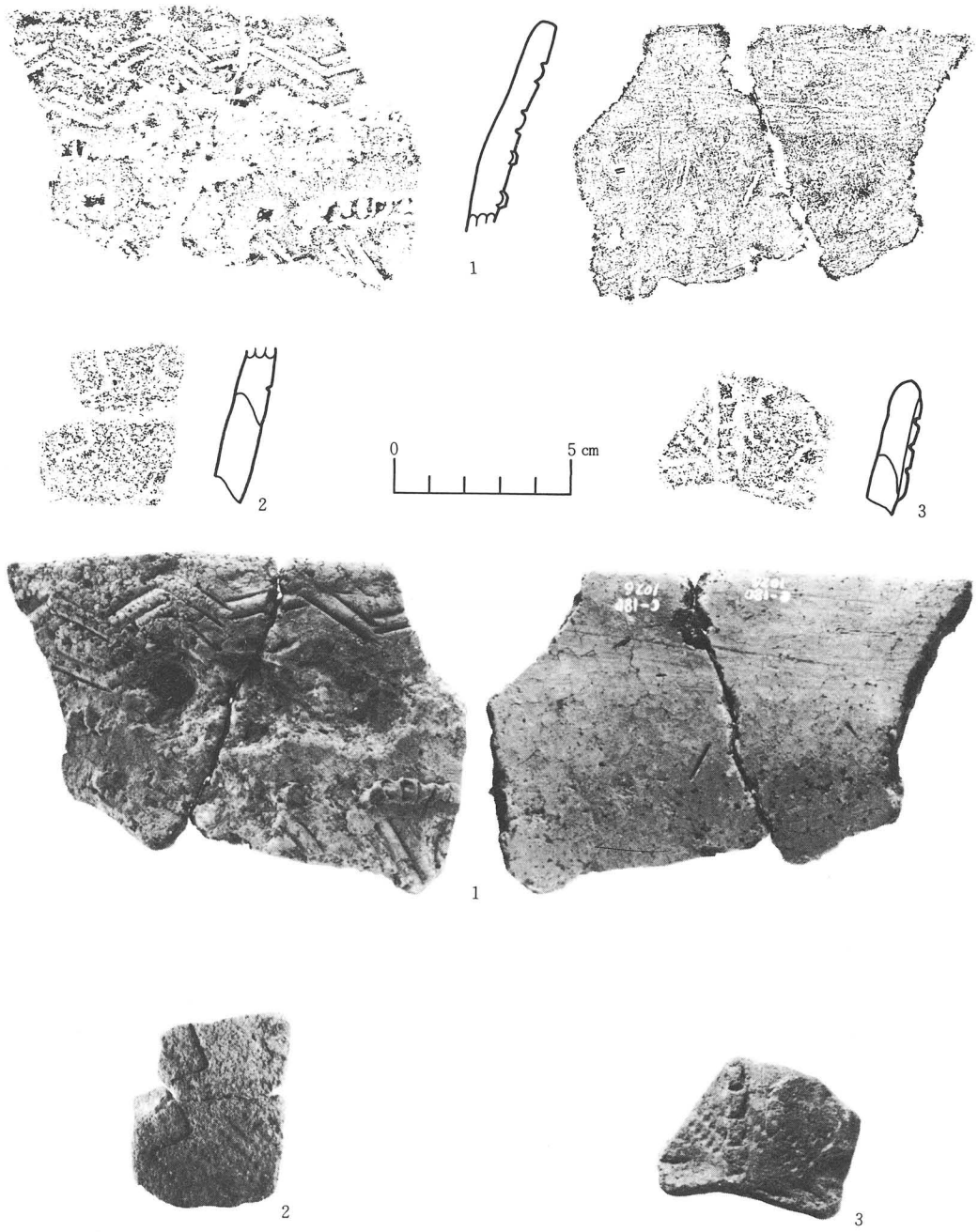


図	地　区	層位	部　位	外　面　施　文	内面施文・調整	器厚mm	胎　　土	焼　成	色　調	分類	備　　考
1	K－8（b）	Ⅲ	口縁部	平行沈線文、隆線(刻み)	ナデ	7	石英、砂粒多量	良　好	褐　色	Ⅲ	——
2	J－7（b）	Ⅲ	口縁部	横位ＬＲ縄文→隆線(刻み)	——	6～8	精製	やや不良	暗褐色	Ⅲ	——
3	K－7（c）	Ⅲ	体　部	横位ＲＬ縄文→沈線文	——	8	精製	やや不良	褐　色	Ⅲ	——

第100図　第Ⅲ群土器（2）

第Ⅳ群土器（第101図）

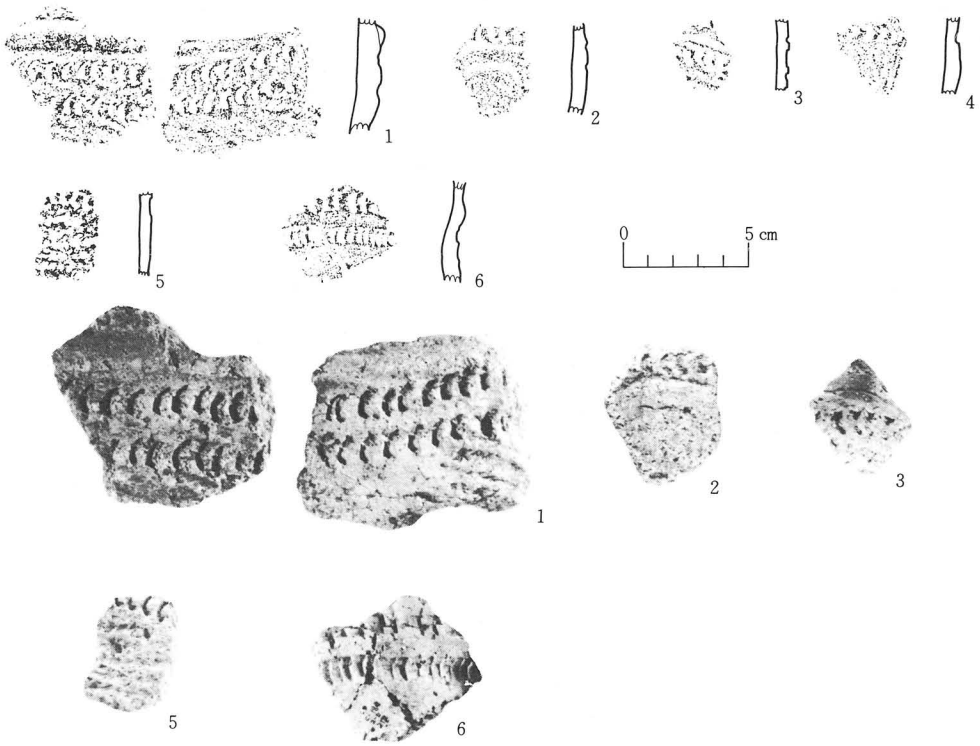


図	地区・遺構	層位	部　位	器　形	施　文　・　調　整	備　考
1	Ｊ－7	Ⅰ	体　部	―――	縦位・斜位ＬＲ縄文・隆線文→刺突文・沈線文	――
2	Ｌ－7（a）	Ⅲ	体　部	―――	沈線文→刺突文→磨き	――
3	Ｋ－7（d）	Ⅲ	体　部	―――	刺突文・沈線文→磨き	胎土に金雲母を含む
4	Ｌ－7	Ⅲ	体　部	―――	縦位ＬＲ縄文・沈線文→刺突文	――
5	31D	堆	体　部	―――	斜位ＲＬ縄文→刺突文	胎土に金雲母を含む
6	1風	堆	体　部	―――	刺突文→磨き	――

第101図　第Ⅳ群土器

第Ⅳ群土器は、体部資料が７点出土している（第101図、第82図２）。半截竹管状の施文具による連続刺突文をもつものである。全て小破片のため全体の器形や文様構成は不明である。

１は地文・隆線文の後に連続刺突文が施文されたもので、やや内弯している。２～４・82図２は沈線文が伴ない、３・82図２は２条の沈線の間に連続刺突文が施文されており、２・４は沈線文施文後に連続刺突文が施文されたものである。６は押引き連続刺突文が施文されている。胎土中に金雲母が含まれているもの（３・５・82図２）もある。

出土層位は、基本層Ⅰ層・Ⅲ層・土壙堆積土であり、出土地点にもまとまりは見られなかった。これらの土器群と類似した資料は、南方町青島貝塚[註1)]や同町長者原貝塚[註2)]などから出土しており、縄文時代中期前半に位置づけられている。

註、１．南方町史編纂委員会『南方町史』1975
　　２．宮城県教育委員会「長者原貝塚」『宮城県文化財調査報告書第78集』　1981

第Ⅴ群土器（第102～107図）

第Ⅴ群土器は、復元資料４点、口縁部資料140点、体部資料304点、底部資料１点の総点数449点出土している。これらの土器は基本層及び住居跡、埋設土器、ピット、土壙などから出土している。ここでは基本層出土のものと、住居跡以外の各遺構出土のものを一括して扱う。

これらの土器は、第１類・文様をもつものと第２類・地文のみのものに分けられる。さらに第１類は文様帯によって以下のａ、ｂ、ｃ、ｄに細分される。

ａ．口唇部に文様帯をもつもの

ｂ．口唇部直下から体部まで文様帯をもつもの

ｃ．口唇部直下が無文帯となり、その下部から体部まで文様帯をもつもの

ｄ．口縁部が無文帯となり、体部に文様帯をもつもの

また、これらの文様帯を形成している文様の施文技法と文様形態は

・隆線文によって施文される渦巻文・楕円文・「∩」文・横位隆線文

・隆線文と沈線文（隆線文→沈線文の順位に施文され、完全に沿っているものは隆沈文とする）によって施文される渦巻文・楕円文・「∩」文

・沈線文によって施文される渦巻文・楕円文・「∩」文・横位沈線文

がある。これらの文様帯は口縁を基調としたものであるため、先ず口縁部資料を分類し、体部資料及び底部資料は文様の施文技法と形態によって分類する。

第１類　文様をもつもの

ａ・口唇部に文様帯をもつもの（第102図１）

口唇部に横位の沈線文による渦巻文が施文され、それが突起部分に延びているものと考えられる。口縁部分は内弯し、隆沈文による楕円文が施文され、地文としてＲＬＲ縄文が施文されている。

ｂ・口唇部直下から体部まで文様帯をもつもの

これは、文様施文技法により、b_1、b_2に分けられる。

b_1・口唇部直下に隆線文あるいは隆沈文による渦巻文が施文されるもの（第102図２～５）

これらは、口縁部が内弯し、体部に沈線文による縦位渦巻文が施文されるもの(2)、沈線文による縦位渦巻文・楕円文あるいは渦巻文が施文されるもの(3)、隆線文による円文と沈線文による楕円文あるいは渦巻文が施文されるもの(4)と、頸部で逆「く」の字状に折れ、口縁部が内傾する波状口縁で、口唇部直下の渦巻文から隆沈文による隅の角張った変形「∩」文が施文されたもの(5)がある。

b_2・口唇部直下に沈線文が施文されるもの（第102図６～８）

内弯ぎみの波状口縁であり、口唇部直下の沈線文が口唇部に向かって延びているためb_2類と

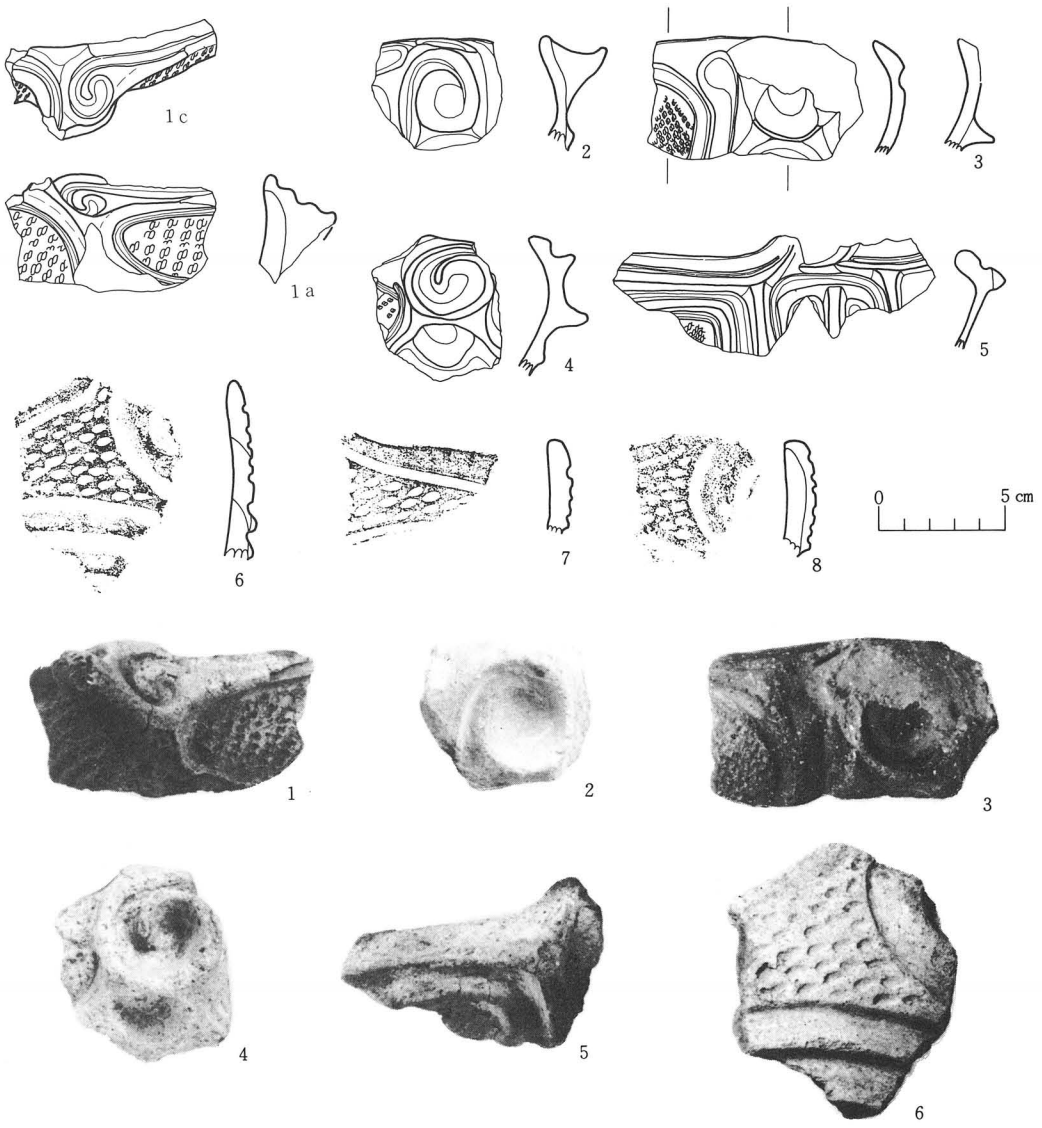
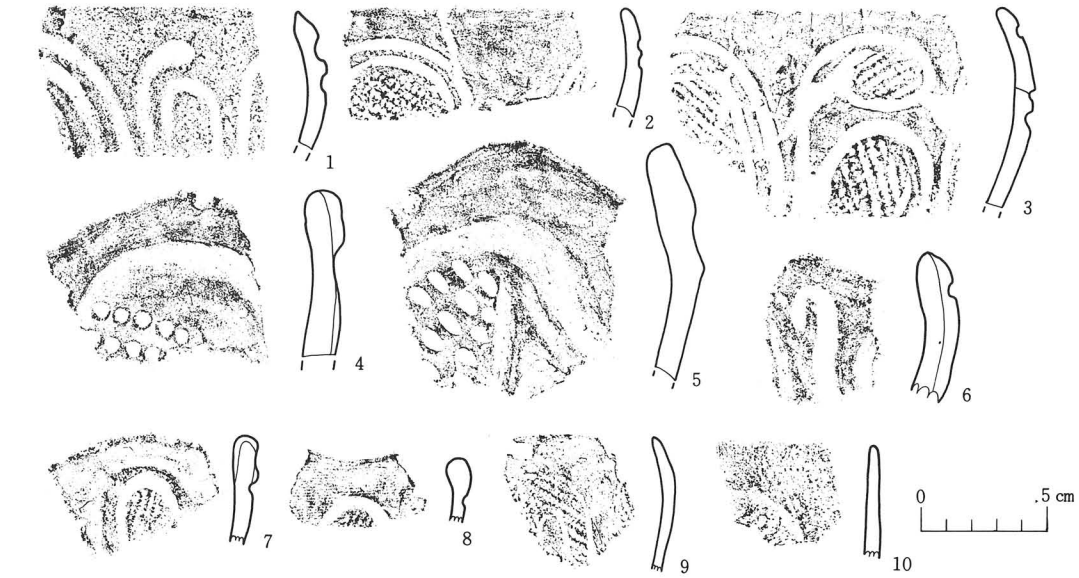


図	地　区	層位	部　位	器　形	施　文　・　調　整	分　類	備　　考
1	K－7(d)	Ⅲ	口縁部	深鉢	縦位ＲＬＲ縄文→隆線文→沈線文	Ⅵ1 a	―――
2	L－7(a)	Ⅲ	口縁部	深鉢	隆線文→沈線文→磨き	Ⅵ1 b_1	胎土に金雲母を含む
3	J－8(d)	Ⅲ	口縁部	深鉢	縦位ＬＲＬ縄文・隆線文→沈線文→磨き	Ⅵ1 b_1	胎土に金雲母を含む
4	N－7(b)	Ⅰ	口縁部	深鉢	横位ＬＲＬ縄文・隆線文→沈線文→磨き	Ⅵ1 b_1	―――
5	P－11(d)	Ⅲ	口縁部	深鉢	横位ＬＲ縄文・隆線文→沈線文→磨き	Ⅵ1 b_1	―――
6	I－7(d)	Ⅰ	口縁部	深鉢	隆線文→沈線文→刺突文→磨き	Ⅵ1 b_2	―――
7	J－7(c)	Ⅲ	口縁部	深鉢	沈線文→刺突文→磨き	Ⅵ1 b_2	胎土に金雲母を含む
8	K－13(d)	Ⅳa	口縁部	深鉢	隆線文→沈線文・刺突文	Ⅵ1 b_2	―――

第102図　第Ⅴ群土器(1)



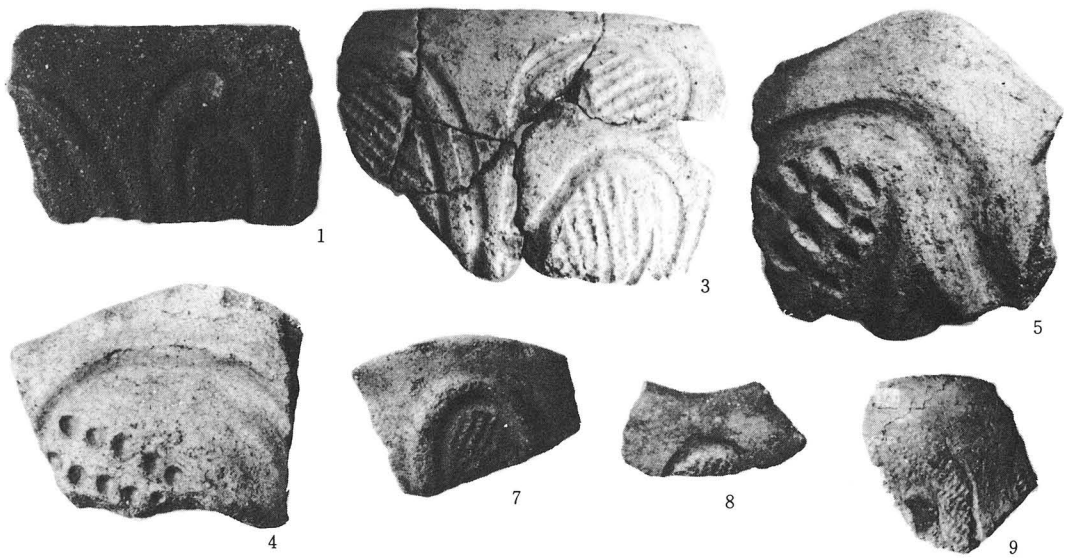
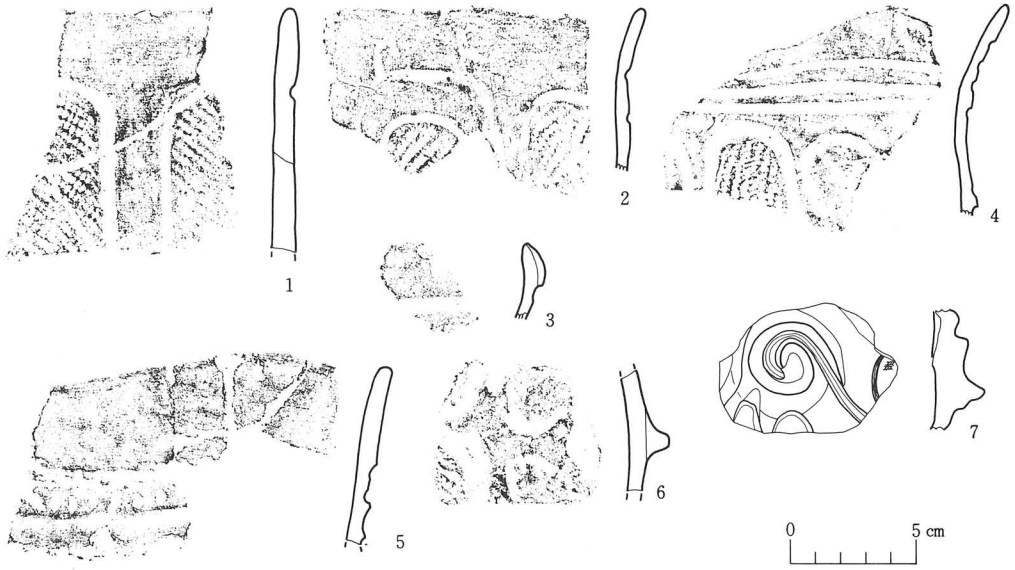


図	地　区	層位	部　位	器　形	施　文　・　調　整	分　類	備　　考
1	N－7(d)	Ⅲ	口縁部	深鉢	縦位ＬＲ縄文→沈線文→磨き	V1 c_1	―――
2・3	N－7	Ⅲ	口縁部	深鉢	縦位ＬＲ・ＲＬ縄文→沈線文→磨き	V1 c_1	同一個体
4	Ⅰ－8(c)	Ⅰ	口縁部	深鉢	沈線文→刺突文→磨き	V1 c_1	―――
5	J－7(a)	Ⅲ	口縁部	深鉢	隆線文・刺突文→沈線文→磨き	V1 c_1	―――
6	K－7(b)	Ⅲ	口縁部	深鉢	沈線文→磨き	V1 c_1	胎土に金雲母を含む
7	J－7(b)	Ⅲ	口縁部	深鉢	縦位ＲＬ縄文・隆線文→沈線文→磨き	V1 c_2	―――
8	N－7(a)	Ⅲ	口縁部	深鉢	縦位ＲＬ縄文→沈線文→磨き	V1 c_2	胎土に金雲母を含む
9	K－13(b)	Ⅳb	口縁部	深鉢	沈線文→縦位ＬＲ縄文→磨き	V1 c_2	胎土に金雲母を含む
10	N－7	Ⅰ	口縁部	深鉢	縦位ＬＲ縄文→沈線文→磨き	V1 c_2	第106図4と同一個体

第103図　第Ⅴ群土器(2)



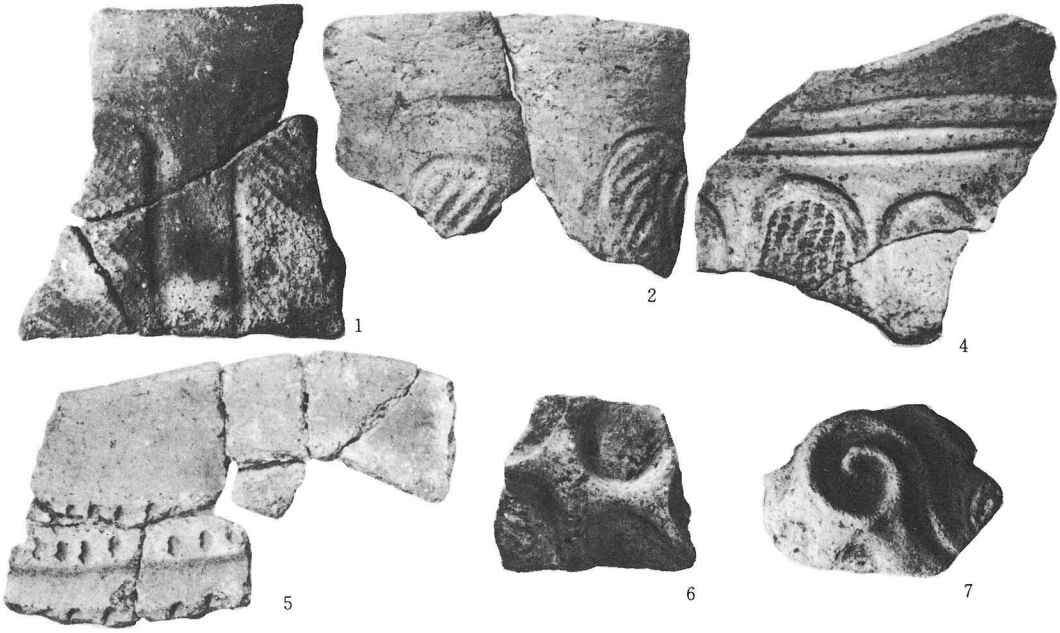


図	地区・遺構	層　位	部　位	器形	施　文　・　調　整	分類	備　　考
1	N－7(c)	Ⅲ	口縁部	深鉢	横位ＬＲ縄文→沈線文→磨き	V1c$_2$	―――
2	N－7(c)	Ⅲ	口縁部	深鉢	縦位ＬＲ縄文→沈線文→磨き	V1c$_2$	―――
3	K－12(b)	Ⅳb上	口縁部	深鉢	縦位ＲＬＲ縄文→沈線文→磨き	V1c$_2$	胎土に金雲母を含む
4	N－7(c)	Ⅲ	口縁部	深鉢	縦位ＲＬＲ縄文→沈線文→磨き	V1d	―――
5	3　風	堆	口縁部	深鉢	隆線文→刺突文→沈線文→磨き	V1d	―――
6	K－13(a)	Ⅳb上	体　部	深鉢	横位ＲＬ縄文・隆線文→磨き	V1・1	外面スス状炭化物付着
7	N－7(c)	Ⅲ	体　部	深鉢	斜位ＲＬ縄文・隆線文→沈線文→磨き	V1・2	―――

第104図　第Ⅴ群土器(3)

した。隆沈文による渦巻文あるいは楕円文が施文されるもの(6)、沈線文による渦巻文あるいは楕円文が施文されるもの(７．８)がある。

b_1類では地文としてＬＲＬ縄文(３・４)、ＬＲ縄文(5)が、b_2類では刺突文が施文されている。

ｃ・口縁部直下が無文帯になり、その下部から体部まで文様をもつもの

これは文様形態によりc_1、c_2に分けられる。

c_1・沈線文による縦位渦巻文が施文されるもの(第103図１～６)

内弯する平縁で、沈線文による縦位の渦巻文と、二重の沈線文による縦位の楕円文あるいは「∩」文が施文されているもの(１～３)と、内弯あるいは内傾する波状口縁を呈し、太い沈線文によって渦巻文が施文されているもの(４～６)がある。２、３は同一個体であり、４、５には刺突文が施文されている。

c_2・隆沈文・沈線文による楕円文あるいは「∩」文が施文されるもの(第103図７～10、104図1～３、85図１、86図１、78図１、81図１)

内弯する波状口縁のもの(103図７・８)と平縁のもの(９)があり、７は隆沈文によって、８は沈線文によって楕円文あるいは「∩」文が施文され、９は沈線文によって「∩」文が施文されている。直立ぎみの平縁のもの(103図10、104図１、86図１、81図１)、は沈線文によって「∩」文が施文されている。10は第106図４と同一個体である。また外傾する平縁で二重の沈線文によって「∩」文が施文されるもの(104図２)や、楕円文あるいは「Ｃ」字文が施文されているもの(85図１)、口縁部が肥厚するもの(104図３)、穿孔されているもの(78図１)がある。

地文としてc_1類はＬＲ縄文(103図１～３)、ＲＬ縄文(同２～３)が施文され、刺突文(同４～５)を施文するものもある。c_2類はＬＲ縄文(103図７・９・10、104図１・２、86図１、78図１)、ＲＬ縄文(103図８、104図３、85図１)が施文されている。縦位回転施文のものが多い。

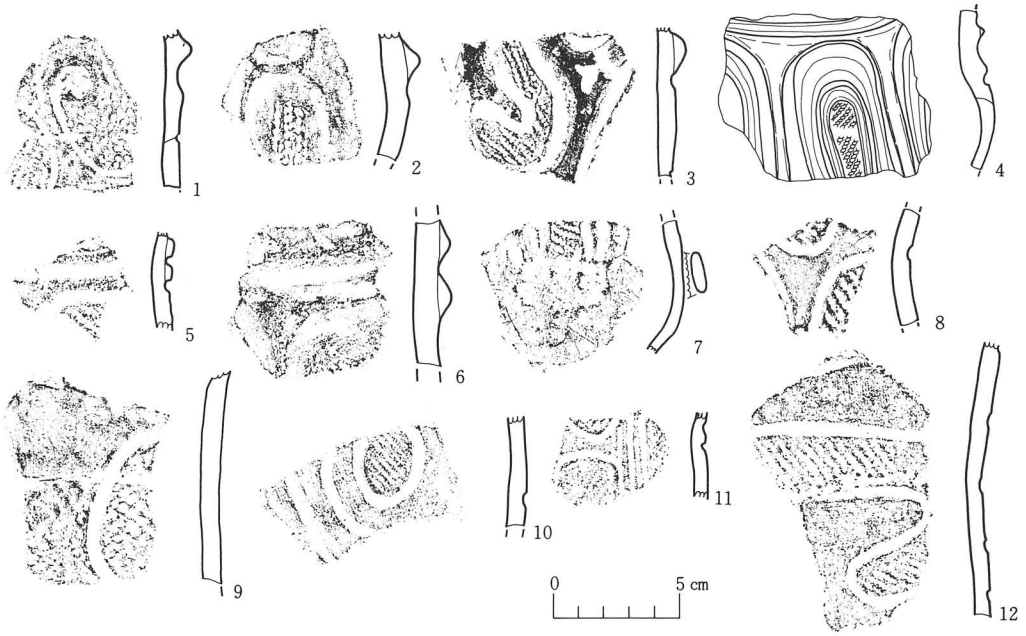
ｄ・口縁部が無文帯になり、体部に文様帯をもつもの(第104図４・５、41図１、86図２)

頸部に横位の隆線文・沈線文がめぐり、口縁部と体部を区画するもの。外反する波状口縁で三条の横位沈線文が口縁部と体部を区画し、体部に沈線文による楕円文あるいは渦巻文が施文されるもの(４、86図２)と、外反する波状口縁で連続刺突文を施した横位隆線文をもつもの(5)外反する波状口縁で、隆線文で口縁部を区画するもの(41図１)がある。地文として４はＲＬＲ縄文、86図２はＲＬ縄文が施文されている。

体部資料・底部資料

体部資料は文様帯が判別できないものである。底部資料については、出土数が１点と少なく体下部の文様が判別できるので体部資料に含めた。これらを口縁部資料の文様の施文技法と文様形態によって分類すると

１．隆線文によって施文される文様→楕円文



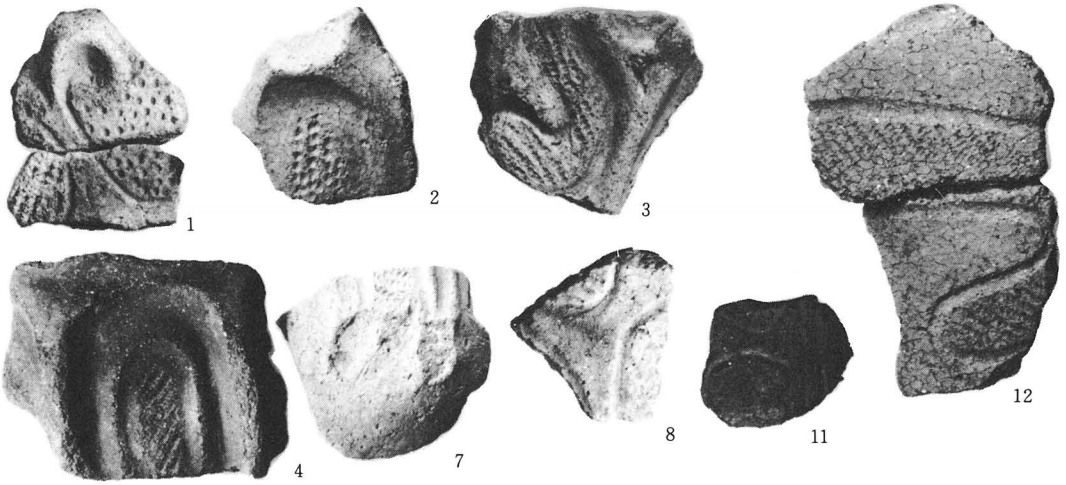


図	地　区	層　位	部位	器形	調　整　・　施　文	分　類	備　　考
1	N－7 (c)	Ⅲ	体部	深鉢	隆線文→横位ＬＲＬ縄文･刺突文→沈線文→磨き	Ⅵ1 ･2	―――
2	I－8 (c)	Ⅲ	体部	深鉢	斜位ＲＬＲ縄文･隆線文→沈線文→磨き	Ⅵ1 ･3	―――
3	K－7 (b)	Ⅲ	体部	深鉢	縦位ＬＲ縄文･隆線文→沈線文→磨き	Ⅵ1 ･3	胎土に金雲母を含む
4	L－6 (b)	Ⅲ	体部	深鉢	縦位ＲＬ縄文･隆線文→沈線文→磨き	Ⅵ1 ･3	胎土に金雲母を含む
5	K－12(b)	Ⅳb	体部	深鉢	横位ＲＬ縄文･隆線文→沈線文→磨き	Ⅵ1 ･3	―――
6	J－8 (c)	Ⅲ	体部	深鉢	隆線文→磨き	Ⅵ1 ･3	胎土に金雲母を含む
7	J－7 (c)	Ⅲ	体部	深鉢	縦位ＬＲ縄文･隆線文→把手→沈線文→磨き	Ⅵ1 ･3	―――
8	K－12(b)	Ⅳb上	体部	深鉢	縦位ＬＲ縄文→沈線文→磨き	Ⅵ1 ･4	―――
9	J－7 (c)	Ⅲ	体部	深鉢	縦位ＬＲ縄文→沈線文→磨き	Ⅵ1 ･4	―――
10	N－7 (a)	Ⅱ	体部	深鉢	縦位ＬＲ縄文→沈線文→磨き	Ⅵ1 ･4	―――
11	M－7 (a)	Ⅲ	体部	深鉢	縦位ＲＬ縄文→沈線文→磨き	Ⅵ1 ･4	―――
12	K－15(b)	Ⅲ	体部	深鉢	横位ＲＬ縄文→沈線文→磨き	Ⅵ1 ･4	―――

第105図　第Ⅴ群土器(4)

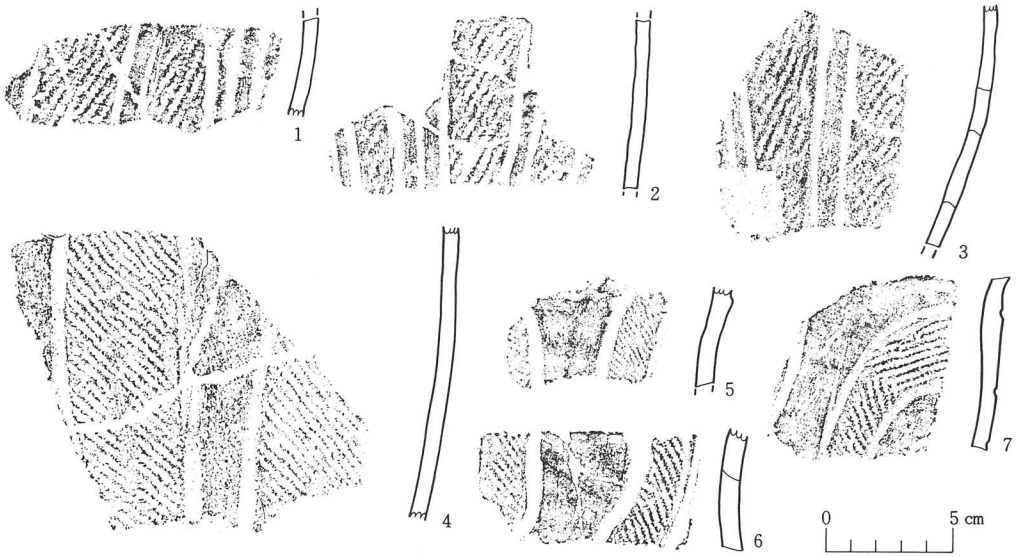


図	地　区	層位	部　位	器　形	施　文　・　調　整	分　類	備　　考
1・2・3	N－7(c)	Ⅲ	体部	深鉢	縦位ＲＬＲ縄文→沈線文→磨き	Ⅴ1・4	同一個体
4	N－7(b)	Ⅰ	体部	深鉢	縦位ＬＲ縄文→沈線文→磨き	Ⅴ1・4	第103図10と同一個体
5	K－13(b)	Ⅳb	体部	深鉢	縦位ＲＬ縄文→沈線文→磨き	Ⅴ1・4	―――
6	Ⅰ－9(d)	Ⅲ	体部	深鉢	横位ＲＬ縄文→沈線文→磨き	Ⅴ1・4	―――
7	J－7(c)	Ⅲ	体部	深鉢	縦位・横位ＬＲ縄文→沈線文→磨き	Ⅴ1・4	―――

第106図　第Ⅴ群土器(5)

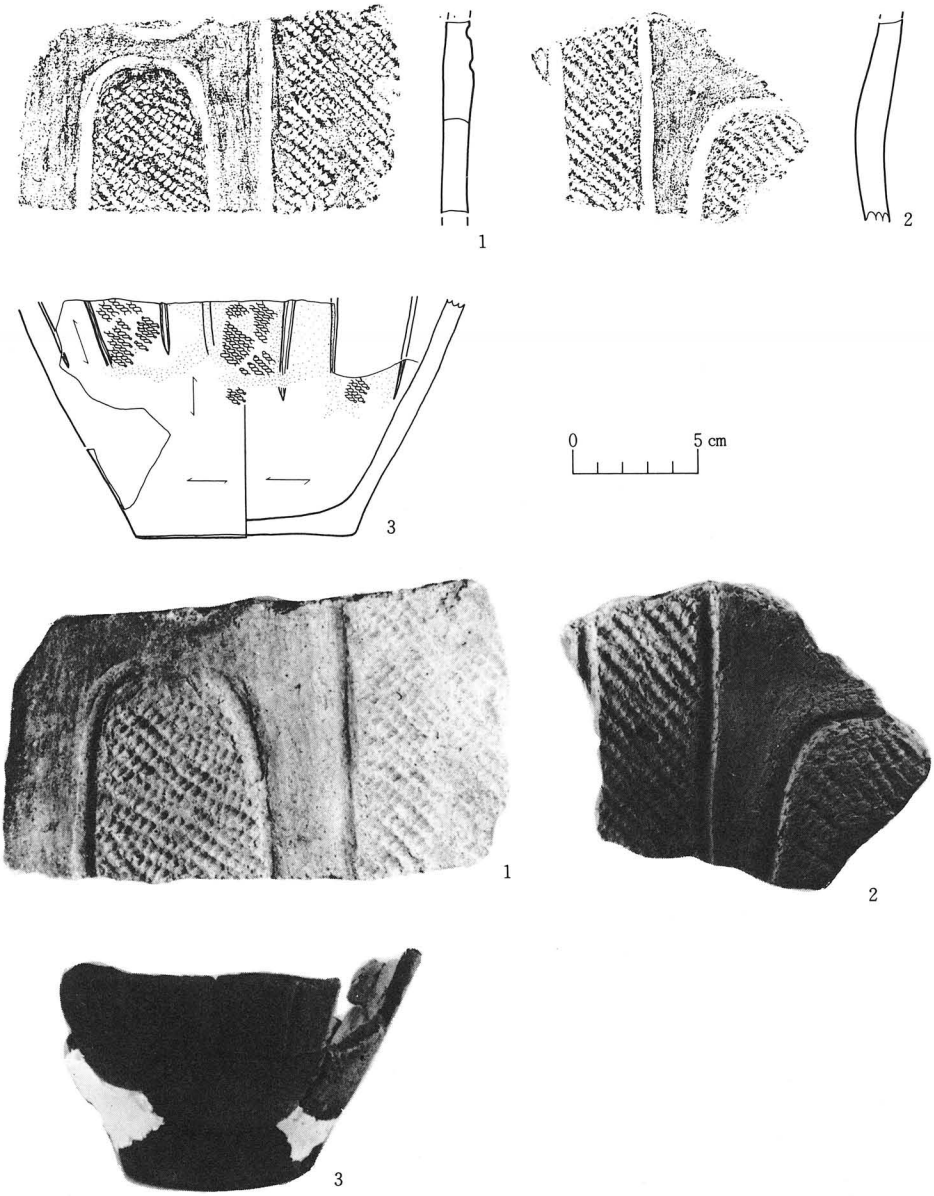


図	地区・遺構	層位	部　位	器　形	施　文　・　調　整	分　類	備　　考
1	N－7(a)	Ⅲ	体　部	深　鉢	縦位ＬＲ縄文→沈線文→磨き	Ⅴ1・4	――
2	M－6(b)	Ⅲ	体　部	深　鉢	縦位ＬＲ縄文→沈線文→磨き	Ⅴ1・4	――
3	3　風	堆	体部下半～底部	深　鉢	縦位ＬＲ縄文→沈線文→磨き	Ⅴ1・4	底径8.8cm 底部磨き調整

第107図　第Ⅴ群土器(6)

２．隆線文と沈線文によって施文される文様→渦巻文

３．隆沈文によって施文される文様→渦巻文・楕円文・「∩」文

４．沈線文によって施文される文様→楕円文・「∩」文

に分けられる。

１．隆線文によって楕円文が施文されるもの(第104図６)、地文としてＲＬ縄文が施文されている。

２．隆線文と沈線文を組合わせて文様を施文するもの(第104図７、105図１)

104図７は隆線文と沈線文による渦巻文から沈線文が延び、別の沈線文による楕円文が施文される。105図１は隆線文による渦巻文から沈線文による渦巻文が派生する。

地文として７はＲＬ縄文、１はＬＲＬ縄文と刺突文が施文されている。

３．隆沈文によって文様を施文するもの(第105図２～７、86図３)

86図３は隆沈文による縦位の渦巻文、105図２は上下に接続した縦位楕円文、３は「Ｓ」字状の変形楕円文が施文されており、４～６は横位の隆沈文から隆沈文による「∩」文が施文されている。また７は体下部の破片で、隆沈文による「∩」文の下端に把手がついていたものである。

地文としてＬＲ縄文(105図３、７)、ＲＬ縄文(86図３、105図４・５)、ＲＬＲ縄文(105図2)が施文されている。

４．沈線文によって文様が施文されているもの(105図８～12、106図、107図、41図２、48図1)

体部中央でくびれ、楕円文が施文されているもの(105図８・９)、楕円文が二ないし三重に施文されているもの(10)、縦位楕円文に数条の縦位沈線文が伴なっているもの(11)、変形楕円文が施文されているもの(12)、「∩」文とその間に縦位の沈線文が施文されているもの(106図１～３、これらは同一個体である。48図１)、「∩」文のみが施文されているもの(106図４、41図２)、変形「∩」文が施文されているもの(106図５～７)、「∩」文と楕円文が施文されるもの(107図1・2)、また107図３は平底で、体部に「∩」文が施文された深鉢の底部と考えられる。

地文としてＬＲ縄文(105図８～10、106図４・７、107図１～３、41図２、48図１)、ＲＬ縄文(105図11・12、106図５・６)、ＲＬＲ縄文(106図１～３)が施文されている。

第２類　地文のみのもの

２点出土しているが２号住居跡からのみの出土であり、２号住居跡の出土遺物の項で扱っているのでここでは省略する。　　主　浜　光　朗

第Ⅵ群土器(第108～113図)

第Ⅵ群土器は、復元資料８点、口縁部資料87点、体部資料78点の総点数165点出土している。これらの土器は基本層及び埋設土器、ピット、土壙などから出土している。これらの土器は第１類・口縁部から体部に文様帯をもつもの、第２類・口縁部のみに文様帯をもつもの、第３類

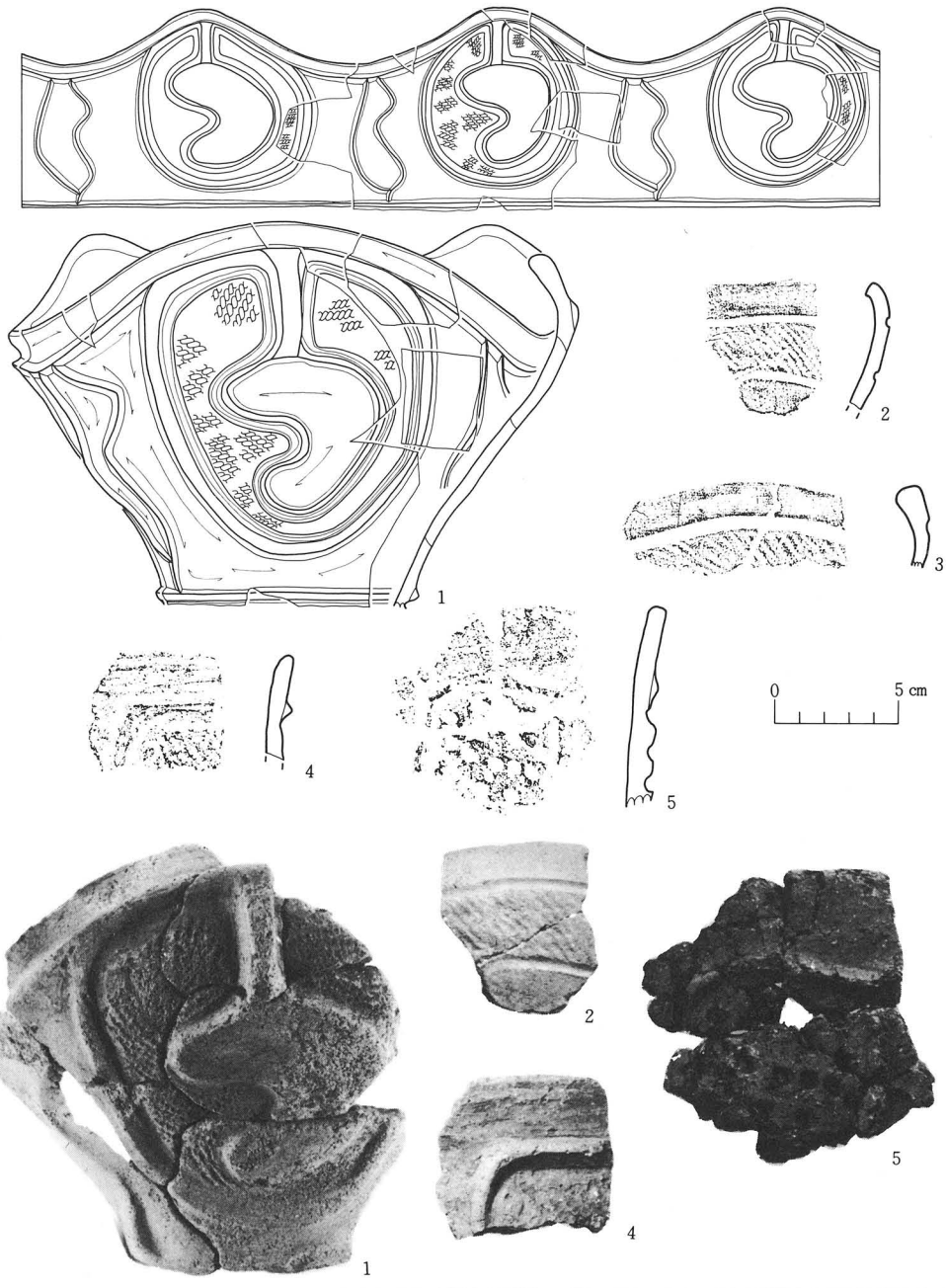


図	地区・遺構	層位	部　位	器形	施　文　・　調　整	分　類	備　　考
1	M－6(b)	Ⅲ	体部下半欠損	深鉢	縦位・横位・斜位LR縄文・隆線文→沈線文→磨き	Ⅵ1a	口径20cm・最大径23cm
2	K－7(b)	Ⅲ	口 縁 部	深鉢	縦位L縄文→沈線文→磨き	Ⅵ1a	――
3	1　風	堆	口 縁 部	深鉢	横位RL縄文→沈線文→磨き	Ⅵ1a	――
4	M－6(b)	Ⅲ	口 縁 部	深鉢	隆線文→横位RL縄文→磨き	Ⅵ1b	――
5	P－11(d)	Ⅲ	口 縁 部	深鉢	隆線文→刺突文→磨き	Ⅵ1b	――

第108図　第Ⅵ群土器(1)

地文のみのものに分けられる。さらに第１類は、文様形態によって以下のａ、ｂ、ｃ、ｄに細分される。

ａ．隆沈文・沈線文による楕円形文様区画をもつもの

ｂ．隆線文・隆沈文・沈線文による「Ｓ」字状文をもつもの

ｃ．隆線文・沈線文による「コ」字状文をもつもの

ｄ．隆線文・隆沈文による方形区画文をもつもの

第２類も同様に以下のａ、ｂに細分される。

ａ．波状口縁頂部から垂下した隆線文が頸部で横位にめぐるもの、これはさらに

①連続刺突文の施文されているもの

②連続刺突文の施文されていないもの

に分けられる。

ｂ．頸部に横位の隆線文がめぐり、口唇部直下から隆線文が垂下するもの

以上によって復元資料、口縁部資料を分類し、体部資料は文様の施文技法、形態によって分類する。

第１類　口縁部から体部に文様をもつもの

ａ．隆沈文・沈線文による楕円形文様区画をもつもの（第108図１～３）

第108図１は頸部が逆「く」の字状に折れ、口縁部が内傾する波状口縁を呈する深鉢で、口径20cm、最大径23cmを計る。頸部に隆線文がめぐり、波状口縁頂部に対応して隆沈文による楕円形を基調とした文様区画を３単位形成している。また、体部に横位の隆沈文がめぐり、体部上部と下部とを区画しており、頸部の隆線文から体部の隆沈文へ隆線文が垂下している。この隆線文は基部の幅に比して高さが低いものである。地文として楕円形区画内にＬＲ縄文が施文されている。２は内弯する平縁、３は内弯する波状口縁で口唇部が肥厚している。両者とも沈線文によって曲線的な文様区画が形成されている。地文として２はＬ縄文、３はＲＬ縄文が施文されている。

ｂ．隆線文・隆沈文・沈線文による「Ｓ」字状文をもつもの（第108図４、５、109図１～３、43図１）

第108図４、５は外反する平縁で隆線文にはさまれた「Ｓ」字状の無文帯が横方向に展開するものである。109図１～３は同一個体である。体部から口縁部にかけて外傾し、口縁部は直立している。沈線文によってはさまれた「Ｓ」字状の無文帯が横方向に展開している。体部部分の無文帯に沈線文が施文されている。地文として、文様区画内に108図４はＲＬ縄文、５は刺突文が施文され、109図１～３は文様区画内や体部文様帯以下にＬＲ縄文が施文されている。43図１は復元資料である。やや外反する小波状口縁の深鉢で、口径24.5cmを計る。鰭状の隆線文と沈線文にはさまれた無文帯が「Ｓ」字状を成し、結合部に鰭状の隆線文が施文されている。口縁部に施

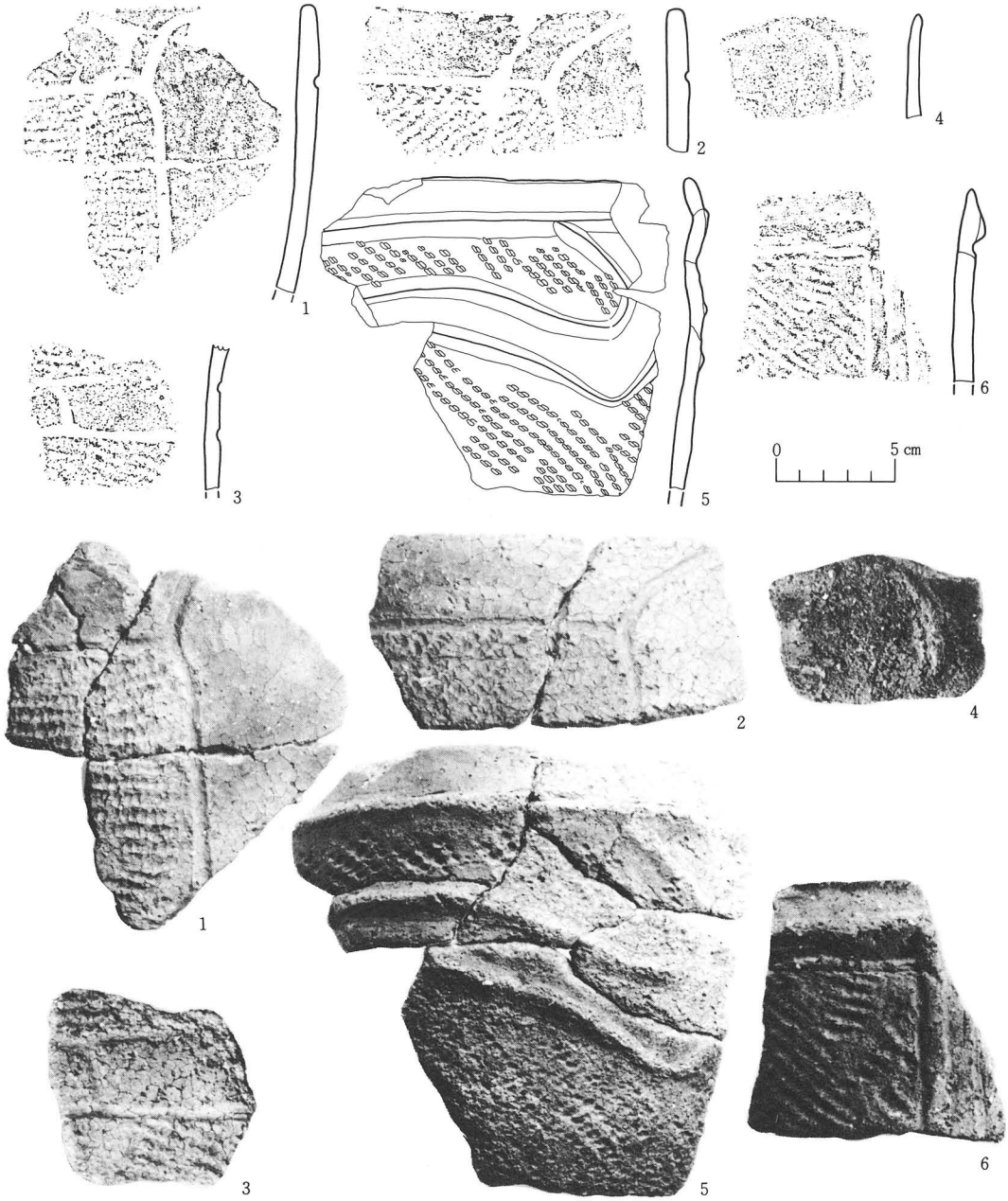
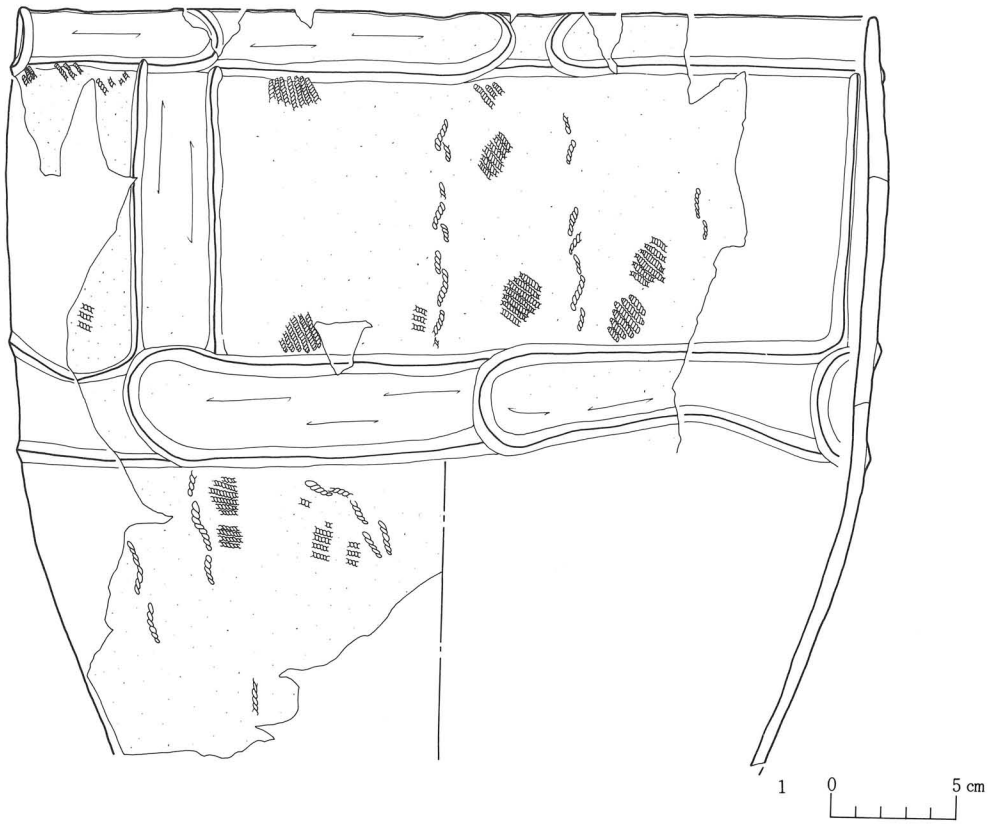
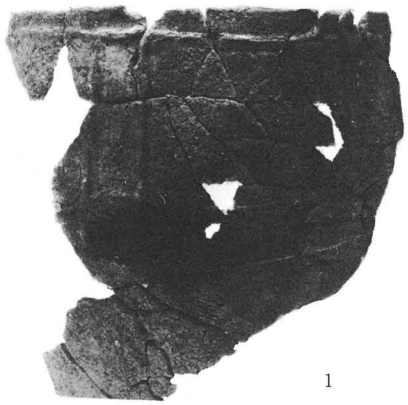


図	地　区	層位	部　位	器形	施　文　・　調　整	分　類	備　　考
1・2・3	K－6(d)	Ⅲ	口縁～体部	深鉢	斜位ＬＲ縄文→沈線文→磨き	Ⅵ1b	同一個体
4	M－6(d)	Ⅲ	口縁部	深鉢	隆線文・沈線文→磨き	Ⅵ1c	―――
5	J－8(b)	Ⅲ	口縁～体部	深鉢	隆線文→縦位ＬＲＬ縄文→磨き	Ⅵ1c	―――
6	J－7(d)	Ⅲ	口縁部	深鉢	縦位ＬＲ縄文・隆線文→沈線文→磨き	Ⅵ1d	―――

第109図　第Ⅵ群土器(2)





1

図	地　区	層位	部　位	器形	施　文　・　調　整	分　類	備　　考
1	M－6(d)	Ⅲ	口縁～体部	深鉢	隆線文→横位・斜位RL縄文＋綾絡文 ・磨き	Ⅵ1d	口径(33.5cm) 最大径(34.5cm)

第110図　第Ⅵ群土器(3)

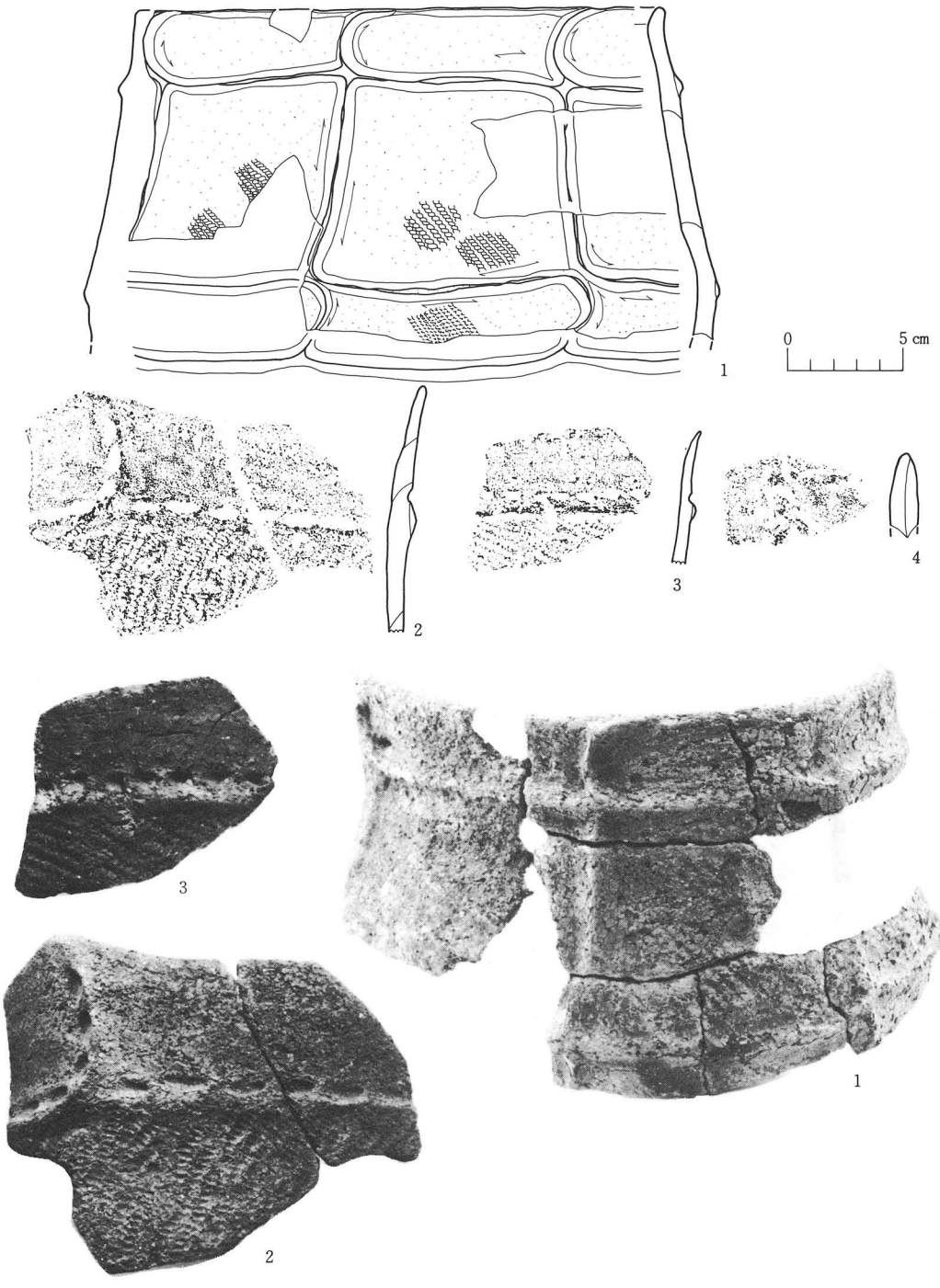


図	地区	層位	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	K－7(c)	Ⅲ	口縁～体部	深鉢	縦位ＬＲ縄文→隆線文→磨き	Ⅵ1d	口径(23cm)・最大径(27.5cm)
2	M－7(d)	Ⅲ	口縁部	深鉢	隆線文→横位ＬＲ縄文・刺突文→磨き	Ⅵ2a①	——
3	Q－12(d)	Ⅰ	口縁部	深鉢	隆線文→沈線文・縦位ＬＲ縄文→磨き	Ⅵ2a①	——
4	K－12(b)	Ⅰ	口縁部	深鉢	隆線文→刺突文→磨き	Ⅵ2a①	——

第111図　第Ⅵ群土器(4)

文された鰭状隆線文が小波状になっている。文様単位は８単位であるが、沈線文と鰭状隆線文による張り出し部分が１単位間隔で３単位あると思われる。地文として、文様区画内にＬＲ縄文が施文されている。

ｃ．隆線文・沈線文による「コ」字状文をもつもの（第109図４・５）

109図４は口唇部近くで外傾するがほぼ直立する波状口縁である。沈線文によって「コ」字状の無文帯を区画している。波状口縁頂部から鰭状隆線文が垂下し、この部分で文様が連結している。５は頸部で逆「く」の字状に折れ口縁部が内傾する平縁である。頸部に隆線文がめぐり、隆線文によってはさまれた逆「Ｌ」字状の無文帯が横位に連結し、連続した「コ」字状の文様展開を呈する。地文としてＬＲＬ縄文が施文されている。

ｄ．隆線文・隆沈文による方形文様区画をもつもの（第109図６、110図、111図１）

109図６はやや外傾ぎみであるが直立する平縁で、頸部に横位にめぐる隆沈文と縦位の隆線文によって方形区画の文様が形づくられている。縦位の隆線文によってはさまれた無文帯に縦位の沈線文が施文されている。地文としてＬＲ縄文が施文されている。110図、111図１は復元資料である。110図はいくぶん内弯ぎみの深鉢で、口径33.5cm、最大径34.5cmを計る。隆線文によって方形の無文帯を形づくっている。地文としてＲＬ縄文、綾絡文が施文されている。111図１は体部がやや脹らみ口縁が内傾する深鉢で、口径23cm、最大径27.5cmを計る。隆線文によって口縁部と体部の無文帯を形成し、縦位の隆線文によって体部を区画し、８単位の方形区画文を形成している。地文としてＬＲ縄文が施文されている。

体部資料

１．隆線文・隆沈文による「Ｓ」字あるいは「コ」字状文をもつもの（第112図３、113図１・２、35図、36図、75図２）

112図３は体部下半が外傾し、体部上半が直立ぎみの深鉢である。底径9.0cm、最大径25.8cmを計る。隆線文による「Ｓ」字状文をもち、体下部に横位の隆線文がめぐり、以下は無文帯になっている。地文として文様区画内、体部文様帯以下にＲＬＲ縄文が施文されている。113図１、２は同一個体である。35図１・２、36図１～３は各々同一個体である。36図は体下部が外傾し上部が内弯する深鉢で、底径14.5cm、最大径32.5cmを計る。113図１・２は隆沈文、35、36図は隆線文によって「Ｓ」字状あるいは「コ」字状文を成すと考えられる。地文としてＬＲ縄文（35図）、ＲＬ縄文（113図１・２）、Ｒ撚糸文（36図）が施文される。また75図２は、隆線文によって文様を区画している。地文としてＬ撚糸文が施文される。

２．隆線文・隆沈文による方形区画文をもつもの（第113図５～７、78図２）

113図５は、隆線文によって横位に無文帯が形成され、６、７は同一個体で縦位の隆沈文の区画内に沈線文が施文されている。地文としてＬ撚糸文(5)、ＬＲ縄文（６、７）が施文されている。

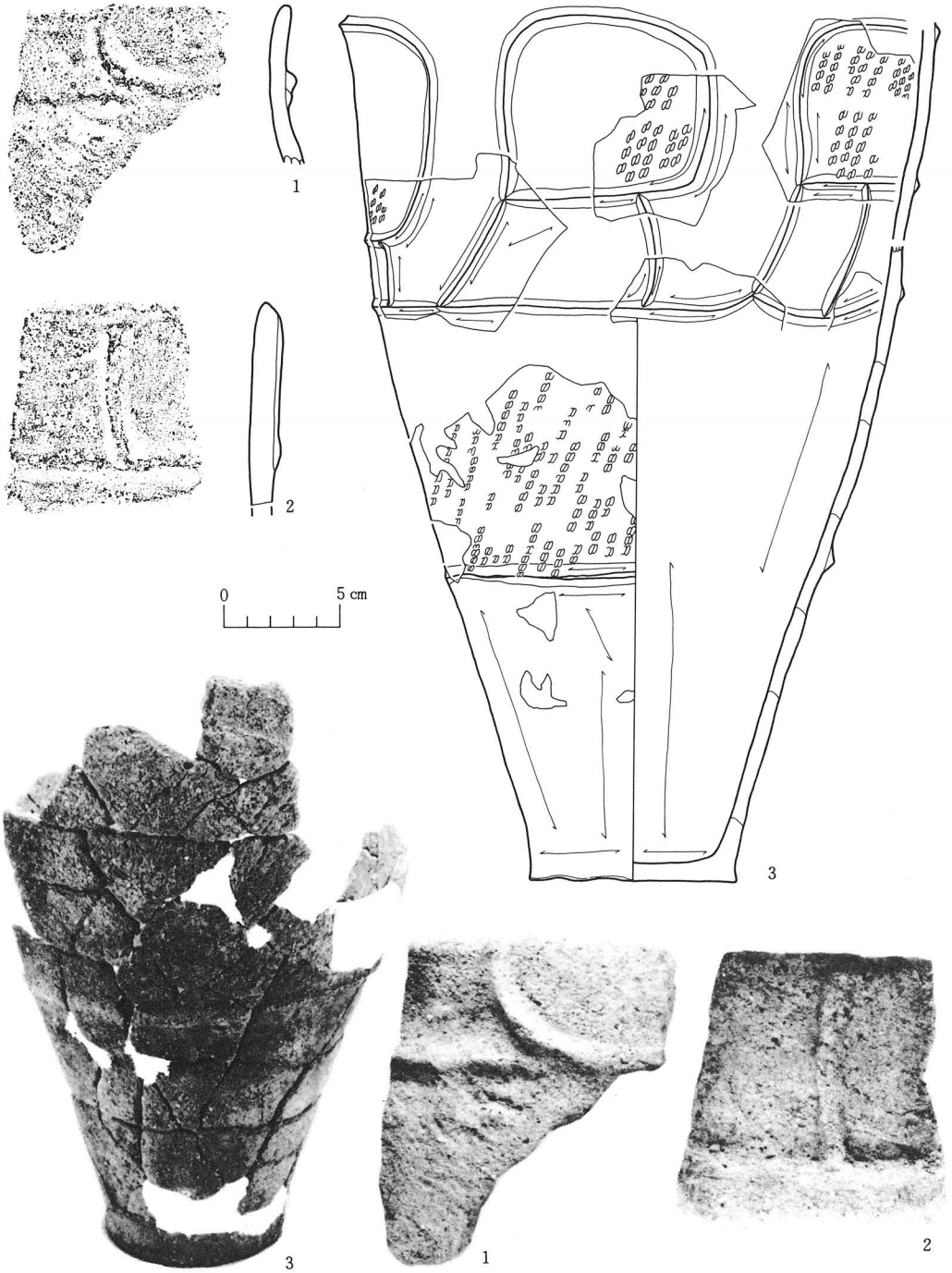


図	地　区	層位	部　位	器形	施　文　・　調　整	分　類	備　　考
1	N－7(a)	Ⅲ	口縁部	深鉢	不明縄文・隆線文→調整(不明)	Ⅵ2a②	―――
2	L－7(d)	Ⅰ	口縁部	深鉢	磨き→隆線文	Ⅵ2b	―――
3	J－7(a)	Ⅲ	体～底部	深鉢	隆線文→縦位ＲＬＲ縄文・磨き	Ⅵ1・1	底径9cm・最大径(25.8cm)

第112図　第Ⅵ群土器(5)

78図２は横位の隆線文とそれに垂下する隆線文によって文様が区画されている。地文としてＬＲ縄文が施文されている。

３．隆線文・沈線文に刺突文が伴なうもの(第113図３・４・８・９、44図４)

113図３は横位の沈線文に鰭状の隆線文が垂下し、沈線文、隆線文に沿って連続刺突文が施文されている。４は隆線文に沿って連続刺突文が施文されている。３、４とも文様区画の形態は明らかではない。文様区画外に地文として縄文(３.原体は不明)、Ｒ撚糸文(4)が施文されている。44図４は隆線文により「Ｓ」字状あるいは「コ」字状文を形成し、この隆線文に沿って刺突文が施文されている。文様区画以下には地文としてＬＲ縄文が施文されている。113図８、９は縦位隆線文と沈線文による「コ」字状あるいは方形の区画をもつもので、縦位の隆線文に沿って刺突文が施文されている。文様区画内及び文様帯以下に地文としてＬ撚糸文が施文されている。

４．体部下部をめぐる隆線文をもつもの(第113図10～12)

113図10～12は体部下部に横位にめぐっている隆線文で、体部の地文がこの隆線以下には見られないことから、体部と体下部あるいは底部を区画するものであると思われる。地文としてＬＲ縄文(11、12)、ＬＲＬ縄文(10)が施文されている。

第２類　口縁部のみに文様帯をもつもの

ａ．波状口縁頂部から垂下した隆線文が頸部を横位にめぐるもの

①連続刺突文を伴なうもの(第111図２～４)

２・３は口縁部が外傾する波状口縁である。頸部の隆線文以下は地文としてＬＲ縄文のみが施文されている。４は突起部分の資料で、頂部から下垂した隆線文を挟む形で刺突文を施文している。

②刺突文を伴なわないもの(第112図１)

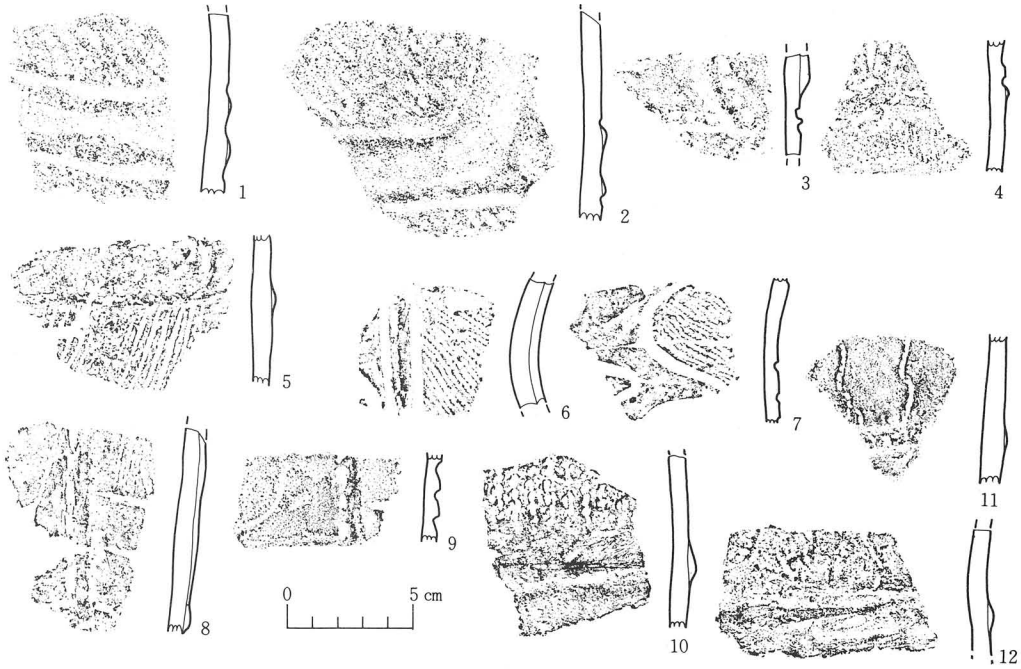
外反する波状口縁で、横位にめぐる隆線文以下に地文のみが施文されているが、摩滅が著しく、原体、施文方向等は不明である。

ｂ．頸部に横位の隆線文がめぐり口唇部直下から隆線文が垂下するもの(第112図２)

ほぼ直立する平縁である。横位の隆線文以下は不明である。

第３類　地文のみのもの(第43図２、44図１～３)

43図２は外傾する波状口縁を呈する深鉢で、口径9.2cmを計る。地文としてＬＲ縄文のみが施文されており、口縁部及び体部下部に磨き調整がなされている。44図１は口縁部が内弯する平縁の深鉢で、口径22.0cm、最大径24.0cmを計る。頸部に横位の沈線文がめぐり、口縁部と体部を区画し、体部にＬＲ縄文のみが施文されている。２～３は同一個体であり、ほぼ直立する波状口縁で、突起部分が肥厚しており、頸部に横位の沈線がめぐり口縁部と体部を区画している。体部にＬＲ縄文が施文されている。44図１～３は縦位回転施文である。　　主　浜　光　朗



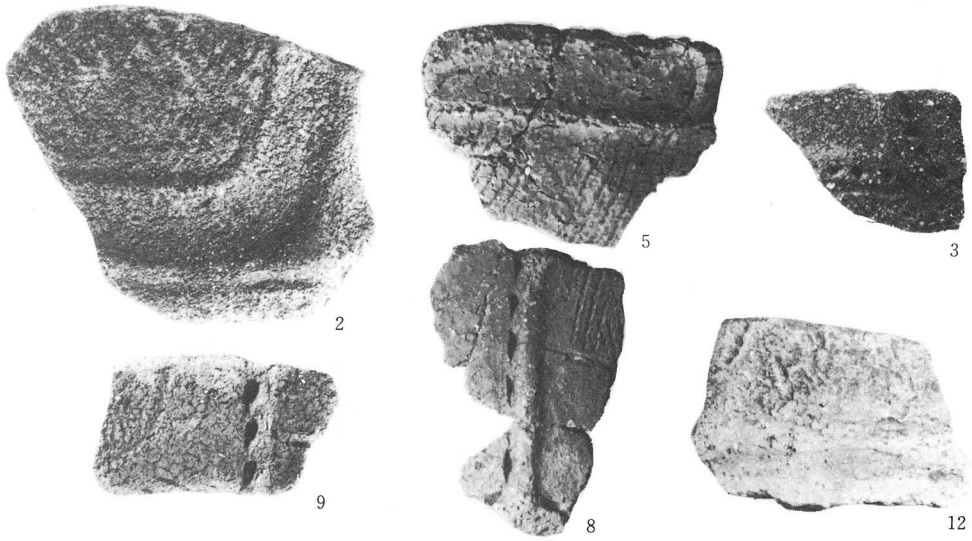


図	地区・遺構	層　位	部位	器形	施　文　・　調　整	分　類	備　　考
1・2	2　住	堆1	体部	深鉢	横位ＲＬ縄文・隆線文→沈線文→調整(不明)	Ⅵ1・1	―――
3	K－13(a)	Ⅲ	体部	深鉢	不明縄文・沈線文→隆線文→刺突文→磨き	Ⅵ1・3	―――
4	L－7(b)	Ⅲ	体部	深鉢	縦位Ｒ撚糸文・(隆線文→刺突文)→磨き	Ⅵ1・3	―――
5	M－15(b)	Ⅲ	体部	深鉢	隆線文→縦位Ｌ撚糸文→磨き	Ⅵ1・2	―――
6・7	P－9(a)	Ⅰ	体部	深鉢	縦位ＬＲ縄文・隆線文→沈線文→磨き	Ⅵ1・2	同一個体
8	L－7	Ⅲ	体部	深鉢	縦位Ｌ撚糸文・隆線文→沈線文・刺突文→磨き	Ⅵ1・3	―――
9	6　D	堆2	体部	深鉢	縦位Ｌ撚糸文・(隆線文→刺突文)→沈線文→磨き	Ⅵ1・3	―――
10	K－13(b)	Ⅳb上	体部	深鉢	斜位ＬＲＬ縄文・隆線文→磨き	Ⅵ1・4	胎土中に金雲母を含む
11	J－8(d)	Ⅲ	体部	深鉢	縦位ＲＬ結節縄文→隆線文→ナデ	Ⅵ1・4	―――
12	N－7(a)	Ⅲ	体部	深鉢	横位ＬＲ縄文・隆線文→磨き	Ⅵ1・4	―――

第113図　第Ⅵ群土器(6)

第Ⅶ群土器（第114・115図）

大木10式末葉から後期初頭にかけての土器で、所属時期を確定できないものである。復元資料２点、破片資料20点であるが、細片等のため文様構成を明確にしえないものが多いための便宜的な分類である。出土層位についても早期から晩期までの遺物が混在している不安定な状況のため、特徴的な点と類例について述べるにとどめる。

口縁部内面に弧状隆線文のめぐる深鉢（第114図１・２）

１・２は同一個体で口縁部がゆるやかに外反しやがて内弯する体部に転ずる様相をみせる深鉢である。外面は磨かれ内面には小突起から連続する弧状隆線文がめぐっている。酷似する例として六反田遺跡出土の大木10式（末葉）の深鉢がある。[註１)]縦位隆線と方形区画沈線で構成されるものである。しかし後期初頭段階でも突起内面に渦状隆線文がめぐる例もあり、[註２)]外面が磨きのみの小片では型式を確定できない。

口縁部に横位刺突文をもつ深鉢（第114図３・４）

３は、口縁部が外傾し口唇部が外方に平担面をつくってやや突出する深鉢である。口唇部外面下部に横位沈線、その下に横位刺突文が一列に施文される。４は口縁部下部に横位刺突文が施文される。口縁部の横位刺突文の類例として大木10式後半段階の西ノ浜貝塚４層出土深鉢[註３)]がある。横位沈線を刺突文の下位に伴う例として青木畑遺跡出土の深鉢があるが、[註4)]同報告書でも時期の断定をさけざるをえない出土状況である。

縦位隆線をもつ深鉢（第114図５・６）

６は横位沈線と方形区画文を構成し縄文施文部と研磨部を対置している。５は、縦位隆線施文後、縄文を充塡している点で大木10式的要素が強い。

環状把手をもつ浅鉢（第114図７）

７は環状把手をもつ浅鉢で大木10式後半段階の西ノ浜貝塚４層出土浅鉢、[註3)]後期初頭の青木畑遺跡出土の深鉢[註４)]の把手部分に近似している。口縁部の横位長楕円形沈線文は、六反田遺跡や当遺跡の後期初頭土器の体部に多くみられる長楕円形沈線文に共通している。

体下部に隆帯のめぐる深鉢（「下位隆帯」のめぐる深鉢）（第114図８、115図）

８・第115図は体下部に隆帯のめぐるほか地文のみが観察される深鉢である。大木10式では前述の当遺跡のほか六反田遺跡[註１)]、西ノ浜貝塚[註３)]出土の深鉢があり、後期初頭の確実な例としては、当遺跡の弧状並行沈線間連続刺突文される深鉢があり（第117図4）、六反田遺跡第４号住居跡では縦位並行沈線間磨消縄文をもつ深鉢と体下部に隆帯がめぐる地文のみの深鉢が、堆積土中であるが共伴している。これらの隆帯は、大木10式に伴う下位隆帯より粗末で不整形である傾向がみられ、８・第115図は六反田遺跡出土の後期初頭の深鉢に器形の点に於いても近似する傾向がみられる。

田　中　則　和

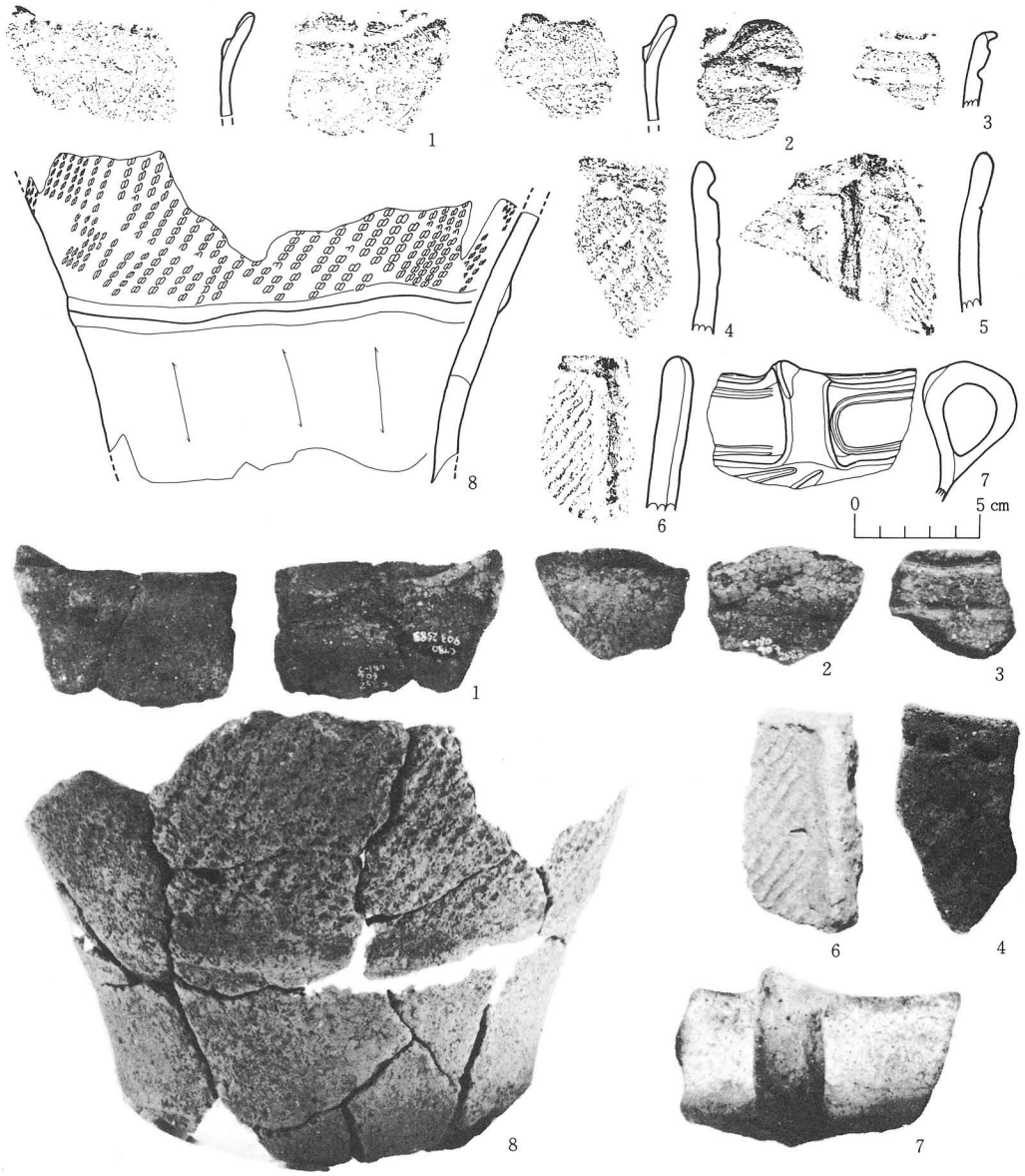
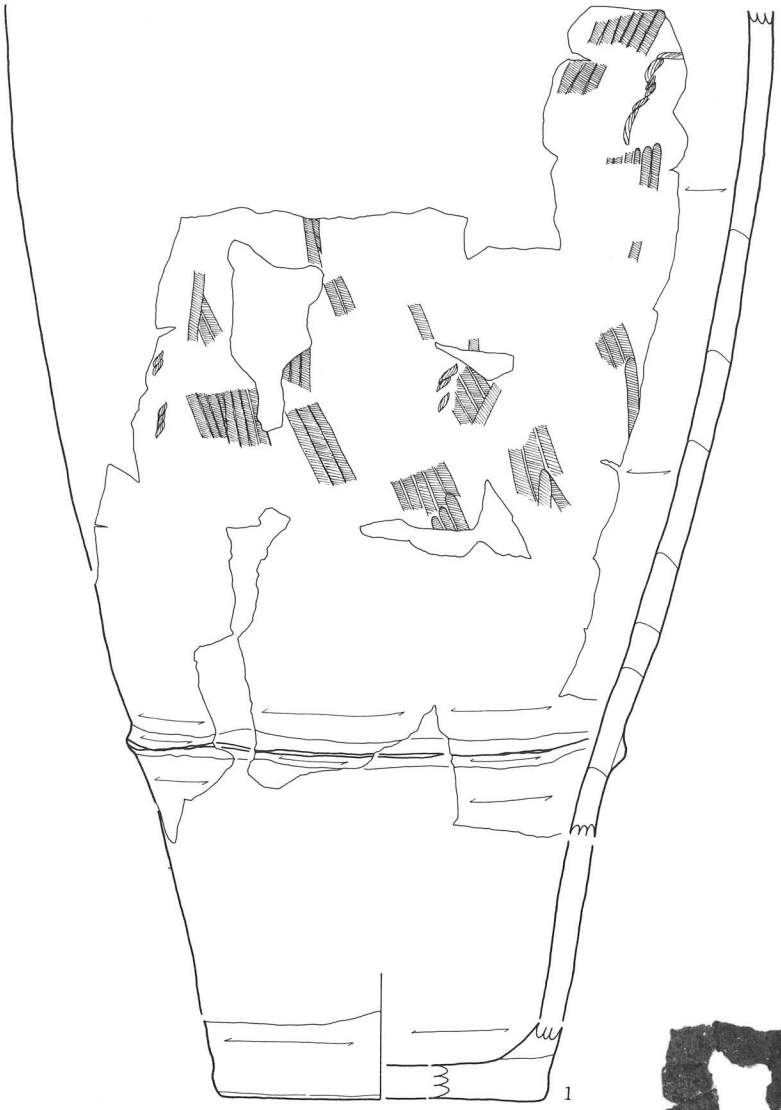


図	地　区	層位	部　位	器　形	施　文　・　調　整	分類	備　考
1･2	Ｏ－10(ａ)	Ⅲ	口縁部	深　鉢	外面：研磨　内面：「弧状隆線＋横位隆線」文	Ⅶ	同一個体
3	Ｎ－７	Ⅲ	口縁部	深　鉢	横位沈線文・連続横位刺突文(一列)	Ⅶ	―――
4	Ｊ－７(ｂ)	Ⅲ	口縁部	深　鉢	縦位ＲＬ縄文＋綾絡文→連続横位刺突文(一列)	Ⅶ	―――
5	Ｍ－７	Ⅲ	口縁部	深　鉢	山形突起・方形区画文(縦位隆線→横位沈線)・縦位Ｌ縄文・研磨	Ⅶ	―――
6	Ｎ－７	Ⅲ	口縁部	深　鉢	縦位隆線→横位Ｌ縄文→縦位隆線に沿うナデ	Ⅶ	―――
7	Ｉ－14(ａ)	Ⅲ	口縁部	深　鉢	縦位把手・横位長楕円形沈線文→研磨	Ⅶ	胎土に金雲母を含む
8	Ｊ－７(ａ)	Ⅲ	体　部	深　鉢	縦位ＲＬＲ縄文→隆帯→研磨	Ⅶ	―――

※以下、本文中の「磨き」と表中の「研磨」は同一意味である。　※以下、口縁部～体部上半の資料は「口縁部」と表示している。

第114図　第Ⅶ群土器(１)

註　１．田中　則和他『六反田遺跡発掘調査報告書』仙台市教育委員会　1981
　　２．第Ⅶ群土器　　本書第131図３
　　３．後藤　勝彦他「西ノ浜貝塚緊急発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書第13集』1962
　　４．加藤　道男「青木畑遺跡」『宮城県文化財調査報告書第85集』1982



1

図	地　区	層位	部　位	器　形	底　径	施　文　・　調　整	分類	備　考
1	J－8（c）	Ⅲ	口縁部欠損	深　鉢	12.7cm	・隆帯　・縦位L縄文→横位研磨（体下部）	Ⅶ	隆帯は不整形

第115図　第Ⅶ群土器（2）

第Ⅷ群土器（第116～131図）

後期初頭の土器である。復元資料4点、破片資料681点出土した。梨野A遺跡出土土器の36％を占め全群土器中最も高い比率である。Ⅰ～Ⅳ層中及び遺構堆積土中に他群土器と共に混在しⅢ層中より329点と最も多く出土している。器形は口縁部形態などにより深鉢Ⅰ～Ⅷ類、浅鉢Ⅰ～Ⅲ類、小型鉢、壺Ⅰ・Ⅱ類、蓋に分類される。以下器形毎に土器分類基準（38～39頁）に掲げる文様形態等による大別11類、文様表出技法等による細別26類に従って述べる。

※但し突起―第11類は除く→観察表参照

深鉢Ⅰ類（第116図１～６）

口縁部が外傾し体部が球形にふくらむもの。口縁部から体上部にかけての外形ラインが「く」の字状を呈する。口唇部外面に横位沈線のあるもの（２～６）は、後述の六反田遺跡後期初頭土器にはないので後期前葉の可能性もある。

１ｂ類：渦状・弧状沈線文のもの(4)

長楕円形沈線文が口縁下部に横位に配される。

４ａ類：沈帯磨消縄文のもの(2)

頸部に縄文施文帯と縄文磨消帯が対置されるもの。

５ａ類：並行沈線間連続刺突文のもの(6)

口唇部の横位沈線下に並行沈線間小円形連続刺突文が「⊥」状に配される。

深鉢Ⅱ類（第116図７～11、117図、118図１・２）

やや肥厚する口唇をもつ口縁部がわずかに外反しややふくらむ体部に転じるもの

Ａ類：隆沈帯により口縁部と体部が区画されるもの。（第116図）

１ａ類：渦状・弧状磨消縄文のもの(7)

わらび状沈線間磨消縄文が、隆沈帯に接続する「Ｃ」字状盲孔間隆沈線文（９類：口縁部縦位装飾文）の直下に縦位に配される。

８ｂ類：上位隆沈帯区画文のもの（７・８・10・11）

口縁部と体部を隆沈帯で区画するもので、口縁部縦位隆沈装飾文（７・８・10）と接続する。

10ａ類：口縁部縦位隆沈装飾文（７・８・９・10）

研磨した口縁部の山形突起より「Ｃ」字状or 逆「Ｃ」字状盲孔間隆沈線文が下垂して隆沈帯に接続するもの（７・８）。逆「Ｃ」字状隆沈線文が下垂するもの(10)がある。

Ｂ類：口縁部から体部まで文様が連続するもの（第117図、第118図）

体部形態は明らかでないものが多いが体上部のふくらみが大きいもの（第118図1）、体上部があまりふくらまないもの（第118図2）がある。口縁部の尖る例もある（第117図7）。

1 a類：渦状・弧状磨消縄文のもの（第117図５・７・８、第118図１・２）

渦状沈線間磨消縄文が体上部に展開するもの(第118図2)方形区画文が磨消縄文手法に転化して小渦状沈線間磨消縄文(大木10式の方形区画文に伴う弧状隆線文の転化か)と結合したもの(第118図1)、盲孔を基点とする逆「J」字状沈線間磨消縄文のもの(第117図8)がある。盲孔ある突起下を中心にし外弯する対称弧線状の沈線間磨消撚糸文が施文されるもの(第117図5)がある。

1 b類：渦状・弧状沈線文のもの（第117図２・３・４）

波状口縁の頂部付近に渦状沈線文が施文され、後研磨されるもの(2)、方形区画文の構成される口縁部の内面に横位楕円形弧状沈線文の施文されるもの(3)がある。

3 a類：「X」状・三角形状・斜行磨消縄文のもの（第117図１）

輪形隆文＋縦位鎖状隆線文(６ａ類)より斜行磨消縄文の展開するもの。

5 a類：並行沈線間連続刺突文のもの(第117図4)

山形突起or 波状口縁で縦位長楕円形沈線間に一列の刺突文があるものとないものとを弧状に対置させるもの。下位隆帯区画文(９類)をもつ。

6 a類：連続刺突隆線文のもの（第117図１）

鎖状隆線文(「鎖」は「押引」状)が隆形隆文を基本として下垂し斜行磨消縄文(3a類)が展開する。

7 a類：方形区画文のもの(第117図３)

9　類：下位隆帯区画文のもの(第117図4)

体上部と体下部を隆帯により区画する。隆帯は断面、不整台形で両辺に粗い沈線状の調整がある。隆帯下は磨きがされているが不完全で地文が残存している。

深鉢Ⅲ類（第118図３～６）

短かく外反する口縁部が逆「く」の字状に屈曲し体部に転じるもの

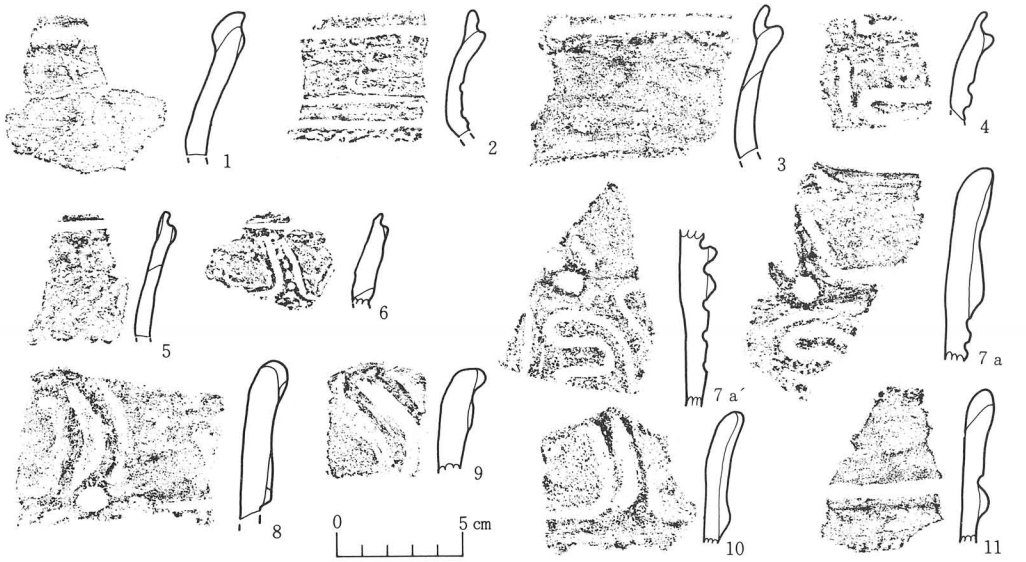
鍔状の隆帯をもつものをＢ類とし、もたないものをＡ類とする。

A類：器厚が薄く口縁端部に最大径をもつもの(３・４)と屈曲部に最大径をもつもの(5)がある。５の口縁部には「８」の字状の輪形隆文が施文されるが、これと組む文様要素は破片のため不明である。

10a類：口縁部縦位隆沈装飾文のもの（３・４）

小山形突起の輪形隆文と屈曲稜線上の輪形隆文間に溝状沈線ある逆「C」字状隆線文(「逆C字状縦位隆沈線文」)が配されるもの。屈曲部、体上部には沈線文の一部が観察される。３・４は、同一個体と思われる。

B類：短かく外反する口縁部が二段口縁的な鰐状隆帯により体部に転じるもの(6)。突起部分に貫通孔が１個あり、器形等は浅鉢Ⅰ類に近い。



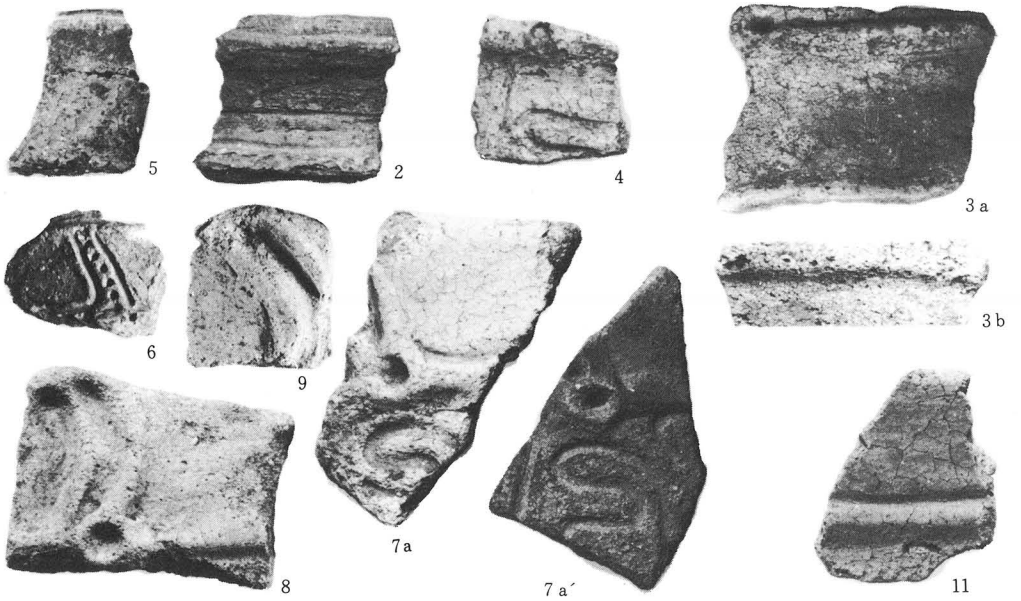
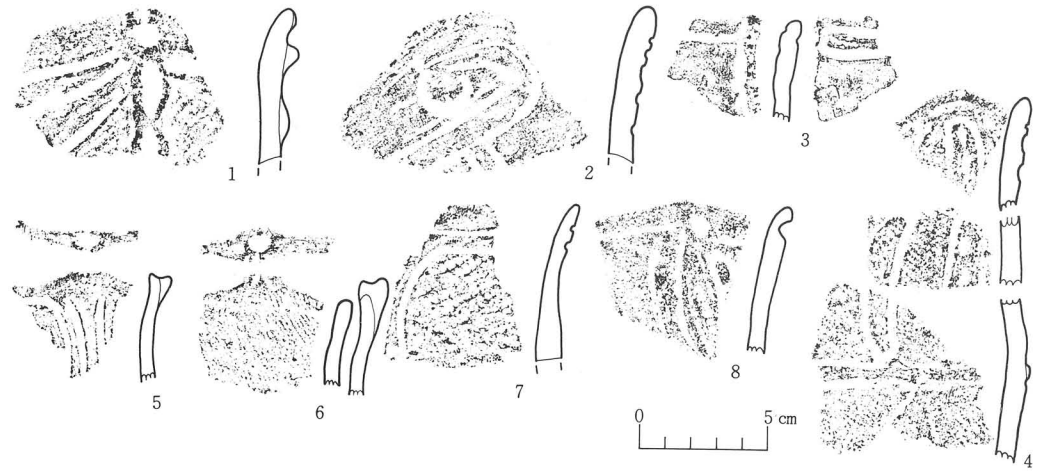


図	地区・遺構	層位	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	J－8(c)	Ⅲ	口縁部	深鉢Ⅰ	凹線(口唇部)	Ⅷ ———	———
2	N－7	Ⅰ	口縁部	深鉢Ⅰ	縦位RL縄文→沈帯磨消縄文・横位沈線文(口唇部)	Ⅷ4a＋4b$_1$	Ⅸ群土器の可能性
3	L－7(b)	Ⅲ	口縁部	深鉢Ⅰ	盲孔＋横位沈線文→研磨	Ⅷ4b$_1$	Ⅸ群土器の可能性
4	M－7(d)	Ⅲ	口縁部	深鉢Ⅰ	盲孔＋横位沈線文・横位長楕円形沈線文・縦位沈線文	Ⅷ4b$_1$＋1b	Ⅸ群土器の可能性
5	32 D	堆	口縁部	深鉢Ⅰ	横位沈線文(口唇部)→研磨	Ⅷ4b$_1$	Ⅸ群土器の可能性
6	M－7(d)	Ⅲ	口縁部	深鉢Ⅰ	横位沈線文(口唇部)・並行沈線間連続小円形刺突文→研磨	Ⅷ4b$_1$＋5a	Ⅸ群土器の可能性
7	K－8(c)	Ⅳb	口縁部	深鉢ⅡA	逆「C」字状盲孔間隆沈線文＋隆沈帯・わらび状沈線間磨消縄文	Ⅷ10a＋1＋8b	———
8	Ⅰ－9(a)	Ⅲ	口縁部	深鉢ⅡA	(小山形突起)隆沈帯→逆「C」字状隆沈線文＋盲孔→研磨	Ⅷ11＋10a＋8b	———
9	表採	—	口縁部	深鉢ⅡA	(山形突起or波状口縁)逆「C」字状隆沈線文→研磨	Ⅷ11？＋10a	———
10	K－13(c)	Ⅳa	口縁部	深鉢ⅡA	(山形突起)隆帯→逆「C」字状隆沈線文→研磨	Ⅷ11＋10a＋8b	———
11	34 D	堆	口縁部	深鉢ⅡA	隆沈帯→研磨	Ⅷ8b	———

第116図　第Ⅷ群土器(1)



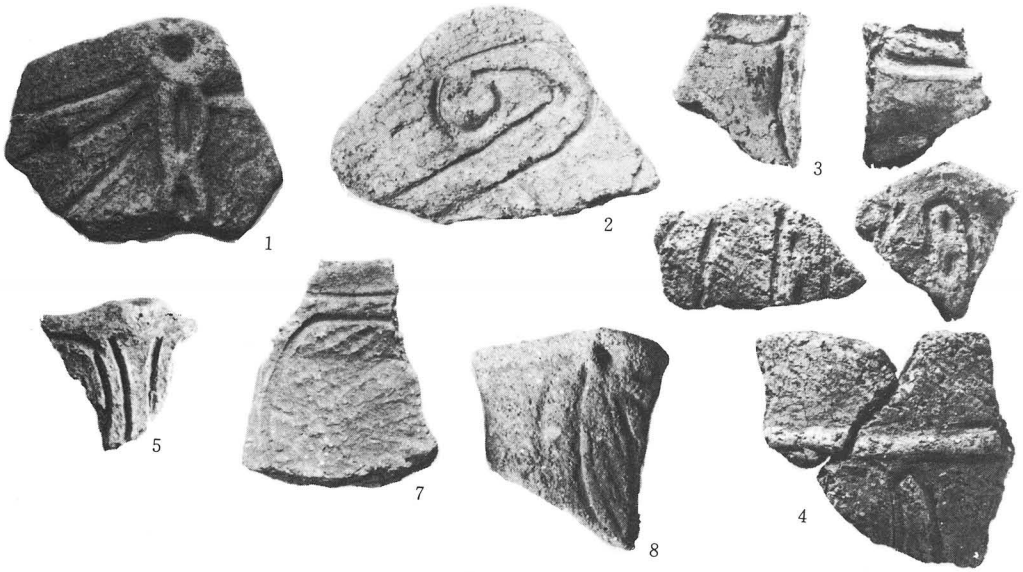
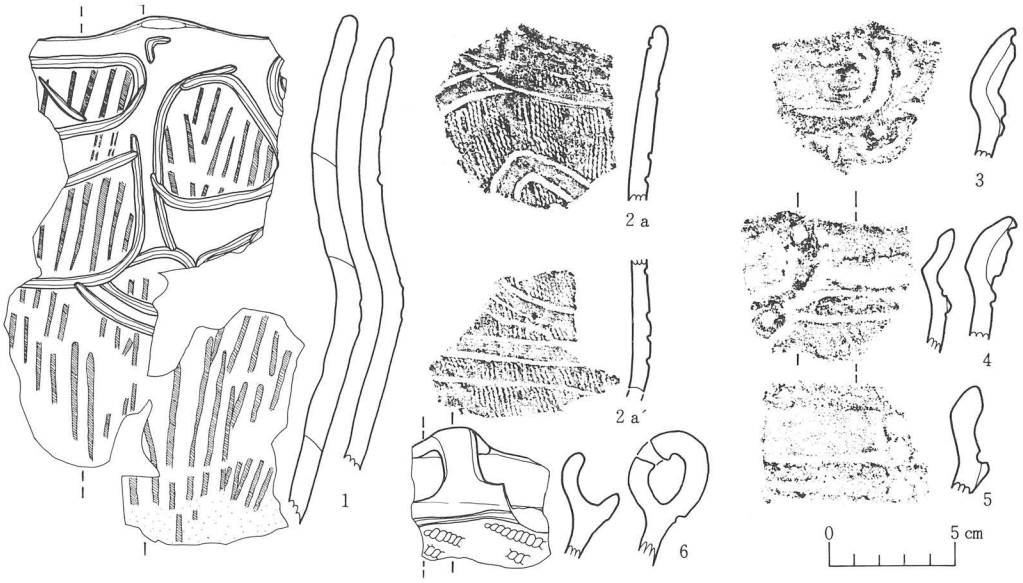


図	地区・遺構	層位	部　位	器　形	施　文　・　調　整	分　類	備　考
1	35　D	堆1	口　縁　部	深鉢ⅡB	輪形隆文＋縦位鎖状隆線文→横位ＬＲ縄文→斜行沈線間磨消縄文	Ⅷ6a＋3a	波状口縁
2	K－6（b）	Ⅲ	口　縁　部	深鉢ⅡB	渦状沈線文→研磨	Ⅷ1b	波状口縁
3	J－8（a）	Ⅲ	口　縁　部	深鉢ⅡB	（小突起）「縦位隆沈線→横位沈線」（方形区画文）ナデ状研磨	Ⅷ7a＋1 b	―――
4	M－6（c）	Ⅲ	口縁部・体部	深鉢ⅡB	縦位ＬＲ縄文→弧状沈線間連続刺突文・弧状沈線文・下位隆帯文	Ⅷ5a＋1b＋9	波状口縁
5	J－8（c）	Ⅲ	口　縁　部	深鉢ⅡB	（山形突起：頂部に盲孔）弧状沈線間磨消撚糸文	Ⅷ$11b_2$＋1a	―――
6	K－7（d）	Ⅰ	口　縁　部	深鉢ⅡB	（山形突起：頂部に盲孔）縦位Ｒ撚糸文	Ⅷ$11b_2$	―――
7	O－6（b）	Ⅲ	口　縁　部	深鉢ⅡB	横位ＬＲ縄文→弧状沈線間磨消縄文	Ⅷ1a	―――
8	K－8（b）	Ⅲ	口　縁　部	深鉢ⅡB	盲孔＋横位沈線文・逆「Ｊ」字状沈線間磨消縄文→研磨（口縁部）	Ⅷb_1＋1a	波状口縁

第117図　第Ⅷ群土器（2）



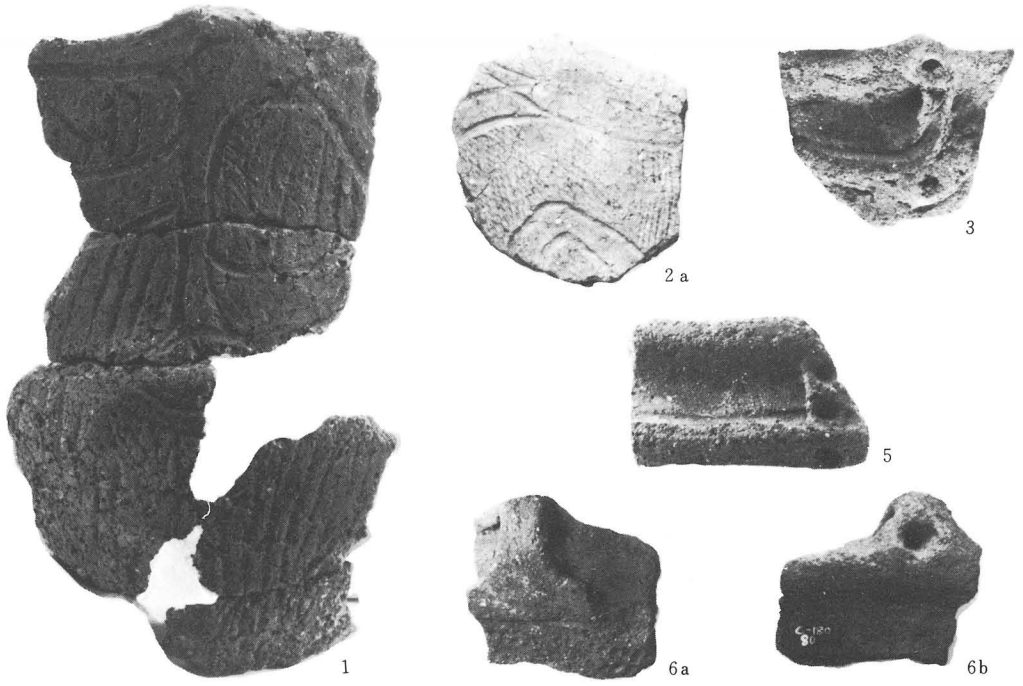


図	地　区	層位	部　位	器　形	施　文　・　調　整	分　類	備　考
1	L－7(b)	Ⅲ	口縁部～体部	深鉢ⅡB	(山形突起)縦位R撚糸文→弧状沈線外磨消縄文＋弧状沈線間磨消縄文	Ⅷ11b＋1a	――
2	L－6(c)	Ⅲ	口縁部・体部	深鉢ⅡB	縦位R撚糸文→弧状沈線間磨消縄文→研磨(口縁部)	Ⅷ1a	波状口縁or突起
3	K－6(b)	Ⅰ	口　縁　部	深鉢ⅢA	(小山形突起)逆「C」字状隆沈線文＋輪形隆文　・沈線文	Ⅷ11b_1＋10a	4と同一個体？
4	K－6(c)	Ⅲ	口　縁　部	深鉢ⅢA	(小山形突起)逆「C」字状隆沈線文＋輪形隆文　・沈線文	Ⅷ11b_1＋10a	3と同一個体？
5	J－8(a)	Ⅰ	口　縁　部	深鉢ⅢA	「8」の字状輪形隆文→沈帯　・盲孔→研磨	Ⅷ8a	――
6	J－7(b)	Ⅰ	口　縁　部	深鉢ⅢB	突起(貫通孔)＝縦位把手　・横位沈線文　・斜位LR縄文	Ⅷ11a	二段口縁的

第118図　第Ⅷ群土器(3)

深鉢Ⅳ類（第119図～121図）

口縁部から体上部にかけて内弯するもの。内弯度が弱く直線的な外傾に近いものをＢ類、口唇部が短かく外反するものをＣ類とし、それ以外のものをＡ類として一括して扱う。

Ａ類：（第119図、第120図１・３・４・７・８、第121図１・２・４～７）

①口縁部から体部まで文様が連続するもの

１ａ類：渦状・弧状磨消縄文（撚糸文）のもの（第119図１・８）

(1)は縦位楕円形の沈線間磨消縄文で上部が一部隆沈文のもの。これは連続縦位三角形状沈線文（３ａ類）と共に文様単位を構成している。(8)は口縁部に渦状沈線間磨消縄文が施文され体部に展開していくものもある。

１ｂ類：渦状・弧状沈線文のもの（第119図１・２・４・７、第120図１）

(1)は縦位波状沈線文の他、１ａ類と組んで口縁部の盲孔間を弧状沈線文でつないでいる。

弧状沈線文を施文後研磨されるもの（第119図2・第120図1）と地文の上に施文されるもの（第119図4－網目状撚糸文・第119図7－縄文）がある。

２ａ類：渦状・弧状隆線間研磨文のもの（第121図１）

２ｂ類：渦状・弧状隆沈線文のもの(5)

３ａ類：「Ｘ」状・三角形状・斜行磨消縄文のもの（第119図３・第120図６）

口唇部の小突起直下の輪形隆文を頂点として三角形状に並行沈線間磨消縄文が展開し連続小円形刺突文が下垂するもの。横位沈線と斜行磨消縄文がみられるものがある(3)。

５ａ類：沈線間連続刺突文のもの（第119図６・７）

②口縁部と体部を区画するもの（第120図４・８・９、第121図４・５・６・７）

逆「く」の字状の屈曲により口縁部と体部を区画するもの（第120図8）、隆沈帯により区画するもの(9)、隆帯により区画するもの(4)、連続刺突隆線により区画されるもの（第121図6）がある。

１ａ類：渦状・弧状磨消縄文のもの（第120図8・9）

口縁部の山形突起より下垂する「８」の字状輪形隆文に縦位に連続する輪形隆文を頂点として対称弧線間磨消縄文が配されるもの(9)があり、盲孔＋縦位波状沈線文と共存する。(8)は山形突起下の「８」の字状盲孔として対称弧線間磨消縄文と三角形状沈線間磨消縄文？が展開するものである。

１ｂ類：渦状・弧状沈線文のもの（第121図５・７）

波状口縁or 山形突起頂部下の盲孔＋鎖状沈線に連続して対称弧状沈線文の配さ

れるもの(5)。弧状沈線文の一部がみられるもの(7)がある。

4 a類：沈帯磨消縄文のもの(第121図7)

口縁部に施文されるが、充塡が磨消かは磨滅等のため不明である。内弯度が強く浅鉢の可能性もある。研磨された帯状部が存在しないことから後期前葉の範囲で考えた方がいいのかも知れない。

5 b類：連続刺突文が単独で文様要素となるもの(第120図4・第121図4・6)

連続小円形刺突文が、横位鎖状隆線文の上位に2列に施文されるもの(第121図6)、波状口縁又は山形突起の口唇部の外面・端部・内面(1個)に小円形刺突文が施文されるもの(第121図4)、波状口縁の頂部と直下に盲孔・輪形隆文が連続するものも一応この類に含める(第120図4)。

6 a類：連続刺突隆線文(第121図6)

横位鎖状隆線文(「鎖」は三角形状の刺突による)により上位の連続小円形刺突文と下位の地文(縄文)施文部を区画している。口縁部と体部の区画帯に属する可能性がある。これは内弯度が強くあるいは浅鉢の可能性がある。

B類：内弯度が弱く直線的な外傾に近いもの(第120図2・5・6、第121図3)

B類は全て口縁部から体部まで文様が連続するという共通性をもっている。

5 b類：連続刺突文単独で文様要素となるもの(第121図3)

不整横位長方形刺突が数列にわたり施文される。第Ⅷ群土器に伴う刺突文の中でこの刺突文の単位形態は、これのみであり、あるいは、大木10式末葉までの範囲で捉えた方がよいのかも知れない。

7 a類：沈線文や縦位隆沈線により方形区画文を構成するもの(第120図2)

沈線により方形区画し地文(網目状撚糸文)部と研摩部を対置している。破片のため、充塡地文か磨消縄文かは不明である。120図5は、沈線文による方形区画文に近いが破片のため正確な文様構成は不明である。

7 b類：連続刺突文による方形区画文のもの(第120図6)

並行沈線間小円形連続刺突文により「↑」状文を構成するものであるが、一応7b類に含めた。器面は地文(撚糸文)・沈線の施文後研磨されている。口唇部が尖っている点は120図5と共通する。

C類：口唇部が短く外反してから内弯に転じるもの(第121図8・9)

1 b類：渦状・弧状沈線文のもの(第121図8・9)

沈帯で口縁部と体部を区面し、わらび状沈線文と横位長楕円形沈線文を施文した後、器面を研磨しているもの(9)、口縁部と体部が段で画され、輪形隆文と長楕円形沈線文をもつもの(8)がある。

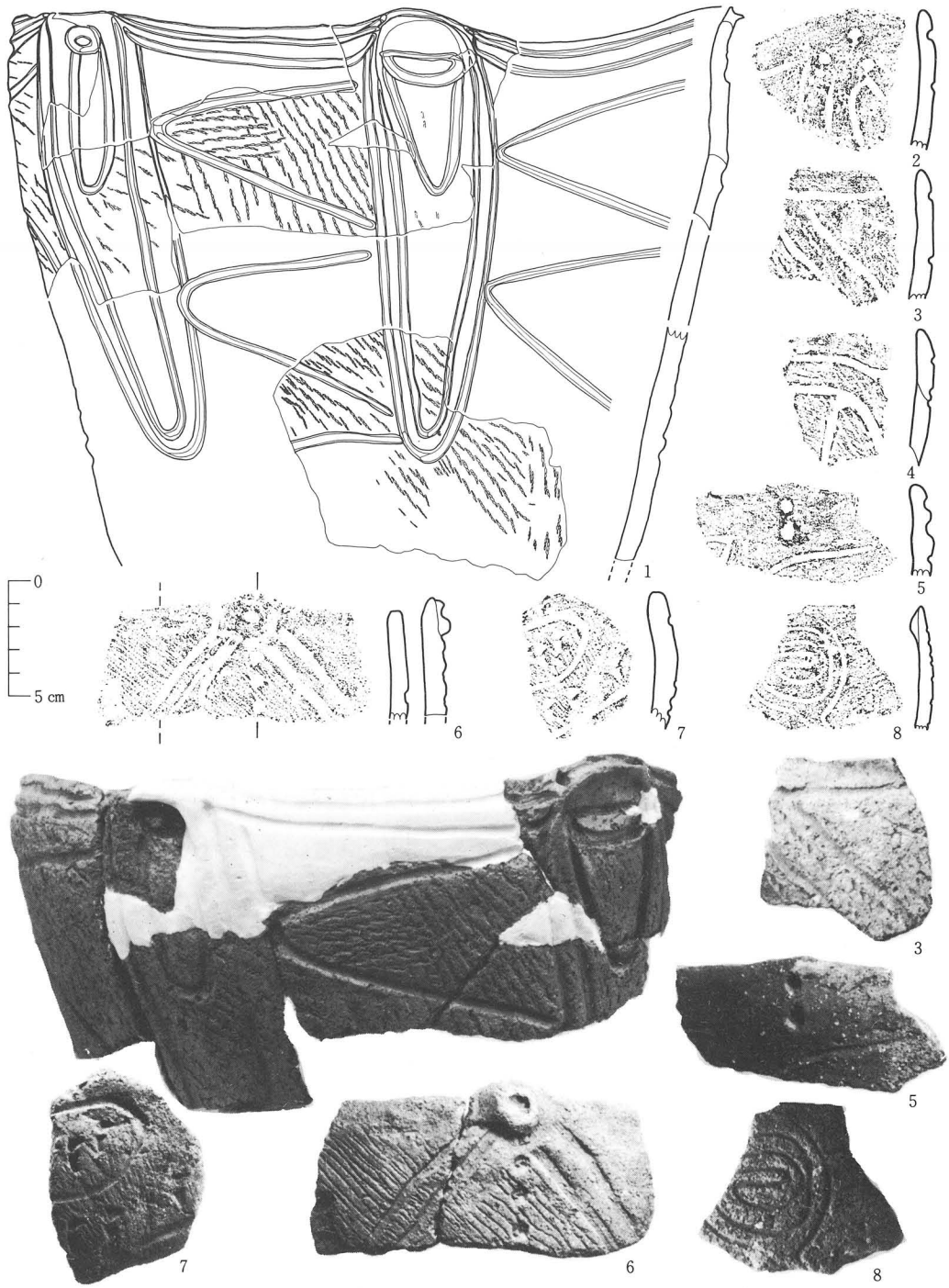


図	地区・遺構	層位	部位	器形	法量	施文・調整	分類	備考
1	O－7(b)	Ⅲ	口縁部～体部	深鉢ⅣA	口径(31.7cm)	(扁平な山形突起：盲孔間弧状沈線文)縦位・横位撚糸文→縦位長楕円形沈線	Ⅷ1a+1b	―――
						沈線間磨消撚糸文(上部隆沈線)・縦位波状沈線文		
2	2 風	堆	口縁部	深鉢ⅣB		盲孔(3)＋対称弧状沈線文？→研磨	Ⅷ1b	波状口縁
3	1 風	堆	口縁部	深鉢ⅣA		縦位R撚糸文→横位沈線→斜行並行沈線間磨消撚糸文→研磨(口縁部)	Ⅷ3a	―――
4	K－13(a)	Ⅳb上	口縁部	深鉢ⅣA		横位ℓ網目状撚糸文→弧状沈線文→研磨(口縁部)	Ⅷ1b	波状口縁or山形突起
5	M－6(c)	Ⅲ	口縁部	深鉢ⅣB		(突起)「8」の字状盲孔・弧状沈線文→研磨	Ⅷ11b+1b	―――
6	J－7(d)	Ⅲ	口縁部	深鉢ⅣB		(小山形突起)斜位R撚糸文→縦位連続小円形刺突文→輪形隆文→斜行並行沈線間磨消撚糸文研磨(口縁部)	Ⅷ11b$_1$+5a+3a	―――
7	1 風	堆	口縁部	深鉢ⅣA		(山形突起)縦位L縄文→弧状沈線間連続不整形刺突文・連続不整形刺突文	Ⅷ11b+5a	―――
8	2 住	堆1	口縁部	深鉢ⅣA		縄文→渦状沈線間磨消縄文	Ⅷ1a	口唇部内面に稜線ある隆線

第119図　第Ⅷ群土器(4)

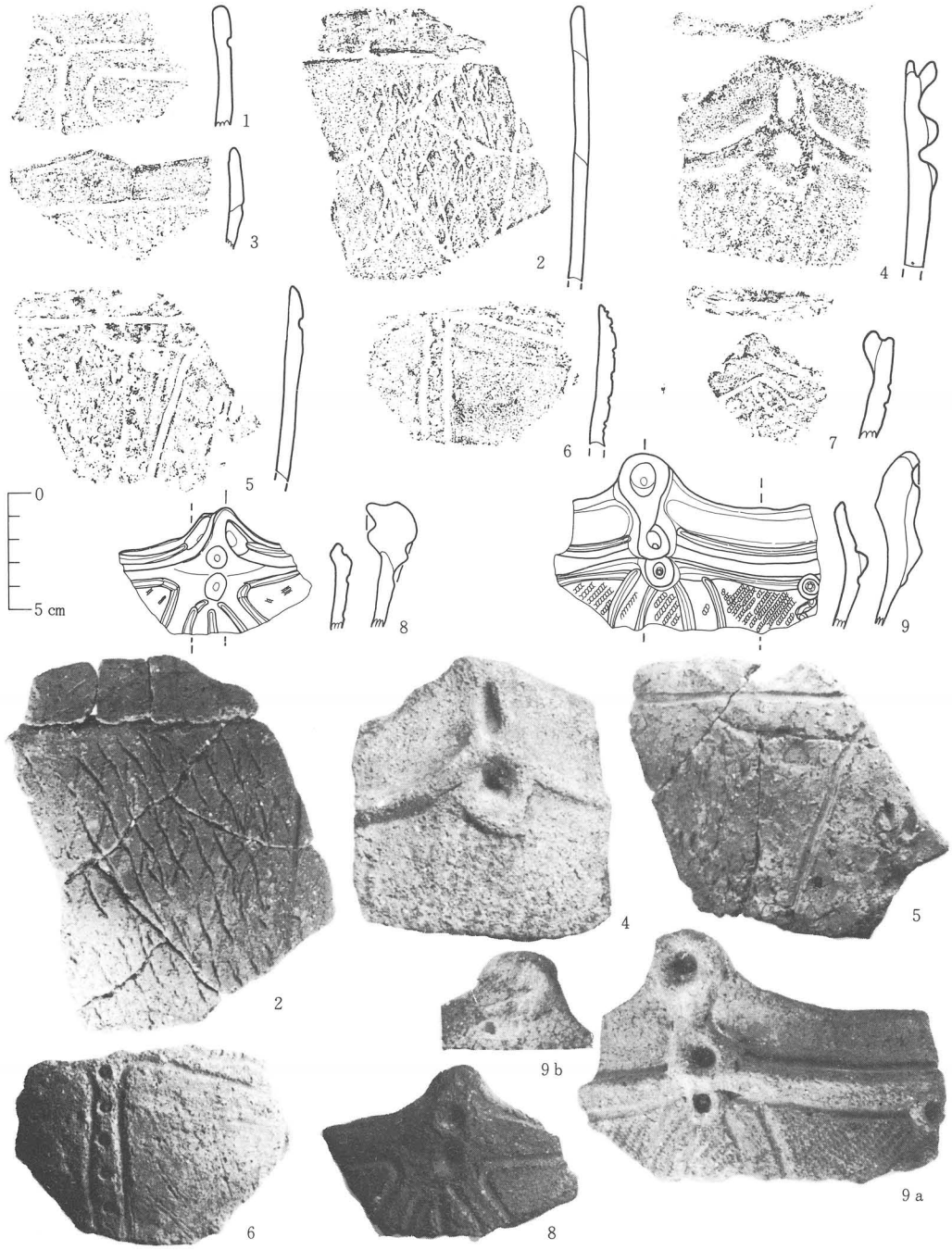


図	地区・遺構	層位	部位	器形	施文・調査	分類	備考
1	N－7(d)	Ⅲ	口縁部	深鉢ⅣA	弧状沈線文→研磨	Ⅷ1b	———
2	P－11	Ⅲ	口縁部～体部	深鉢ⅣB	縦位網目状撚糸文→方形区画沈線間磨消縄文→研磨(口縁部)	Ⅷ7a	———
3	K－13(a)	Ⅳb上	口縁部	深鉢ⅣA	(小山形突起)縦位L網目状撚糸文→横位沈線→研磨(口縁部)	Ⅷ11b	———
4	N－7(a)	Ⅲ	口縁部	深鉢ⅣA	(山形突起：頂部に盲孔)横位隆線文→輪形隆文＋不整盲孔	Ⅷ11b_1+5b	———
5	N－6(c)	Ⅲ	口縁部	深鉢ⅣB	縦位R撚糸文→沈線文　•連続不整刺突文	Ⅷ5b	———
6	K－7(d)	Ⅲ	口縁部	深鉢ⅣB	縦位R撚糸文→↑状`並行沈線→連続小円形刺突」文(「方形区画文」→研磨)	Ⅷ7b	———
7	O－6(b)	Ⅲ	口縁部	深鉢ⅣA	山形突起(口唇部に溝状沈線)　•縄文→弧状長楕円形沈線文	Ⅷ11b_2+1b	———
8	J－8(c)	Ⅲ	口縁部	深鉢ⅣA	山形突起(頂部に盲孔)横位LR縄文→対称弧線間磨消縄文・「8」の字盲孔・盲孔＋横位直状沈線文	Ⅷ11b+4b+1a	———
9	35 D	堆1	口縁部	深鉢ⅣA	山形突起(外面：盲孔・内面：逆「C」字状隆線文)沈隆帯→「8」の字状輪形隆文・横位LR縄文→対称弧線間磨消縄文・輪形隆文＋縦位波状沈線文　•研磨(口縁部)	Ⅷ11b_1+8b+1a+1b	———

第120図　第Ⅷ群土器(5)

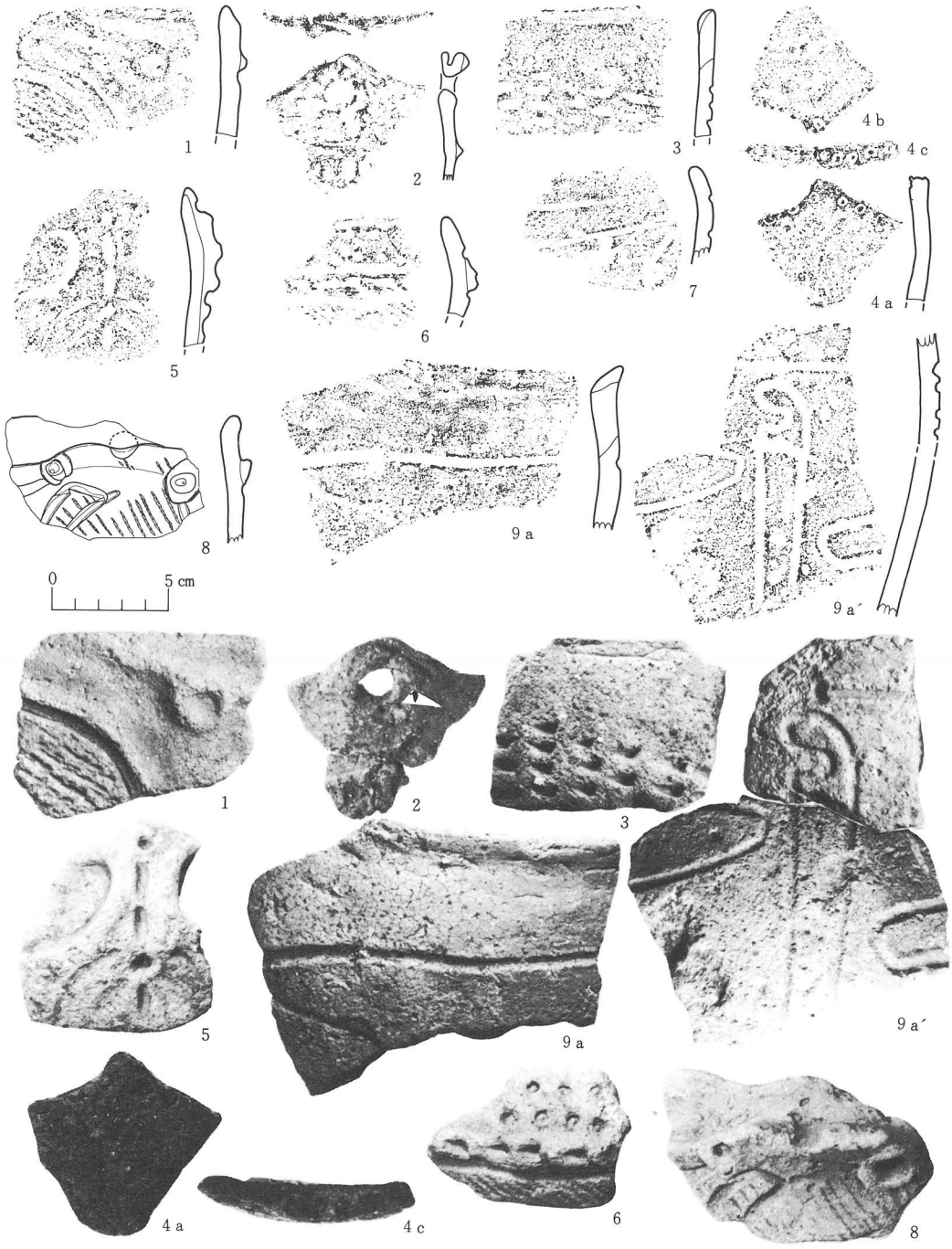


図	地区・遺構	層位	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	N−7(d)	Ⅲ	口縁部	深鉢ⅣA	輪形隆文＋弧状隆線間研磨文・弧状沈線・横位ＬＲＬ縄文	Ⅷ2a	———
2	2 風	堆	口縁部	深鉢ⅣA	(山形突起：頂部に溝状沈線・貫通孔)・逆「C」字状隆線文＋横位隆線文＋連続鱗状刺突文	Ⅷ11a$_1$＋10b＋5b	———
3	L−7(a)	Ⅲ	口縁部	深鉢ⅣB	横位長方形連続刺突文→研磨	Ⅷ5b	———
4	O−6(c)	Ⅲ	口縁部	深鉢ⅣA	(山形突起・口唇部の上端と外面に連続小円形刺突文・内面には１個)	Ⅷ11b＋5b	———
5	L−7(a)	Ⅲ	口縁部	深鉢ⅣA	盲孔＋縦位鎖状沈線文＋対称弧状沈線文・横位対称楕円形隆沈線文	Ⅷ1b＋2b	山形突起or波状口縁
6	M−6(b)	Ⅲ	口縁部	深鉢ⅣA	横位鎖状隆線文→縦位ＬＲ縄文→横位沈線文・連続小円形刺突文	Ⅷ5b＋6a	———
7	M−7(c)	Ⅲ	口縁部	深鉢ⅣA	沈帯磨消縄文　弧状沈線文→研磨	Ⅷ4a？＋1b	———
8	L−7(d)	Ⅲ	口縁部	深鉢ⅣC	縦位把手(貫通孔)・縦位Ｒ撚糸文→長楕円形沈線文→輪形隆文	Ⅷ1b	———
9	K−8(a)	Ⅲ	口縁部・体部	深鉢ⅣC	沈帯文＋盲孔＋わらび状沈線文・長楕円形沈線文→研磨	Ⅷ1b	———

第121図　第Ⅷ群土器(６)

深鉢Ⅴ類(第122図・第123図１～３)

口縁部から体部まで直線的に外傾するもの

１ａ類：渦状・弧状磨消縄文のもの（第122図８）

８は、小山形突起下の盲孔＋輪形隆文＋縦位鎖状隆線文と組んで弧状磨消縄文が施文される。

１ｂ類：渦状・弧状沈線文のもの(第122図１・２・４・５・７・８・９、第123図３)

縦位波状沈線文のもの(第122図1・2・4・5)。11は斜行並行沈線文(３ａ類)と連結して文様単位になっている。９は、並行沈線間連続小円形刺突文(５ａ類)と組む。123図３は頂部に溝状の沈線をもつ。

３ａ類：斜行磨消縄文のもの(第122図３)

３ｂ類：「Ｘ」状・三角形状・斜行沈線文のもの（第122図１）

縦位波状沈線文(１ｂ類)と連結して文様単位になるものがある。

４ａ類：沈帯磨消縄文のもの(第122図６)

4b$_2$類：横位直状沈線文のもの（第122図５）

５ａ類：並行沈線間連続小円形刺突文のもの(第122図９・10)

９は口縁部に並行沈線間連続小円形刺突文が配され弧状沈線文(１ｂ類)に連結している。

６ａ類：縦位連続刺突隆線文のもの(第122図７・８)

８は、小山形突起下の盲孔＋輪形隆文＋縦位鎖状隆線文(「鎖」は三角形状の刺突)と組んで弧状磨消縄文がみられる。

８ａ類：沈帯により口縁部と体部を区画するもの(第122図３？)

この他第122図５・６は方形区画文になるのか明瞭ではない。第123図1は、頂部に盲孔ある小突起をもつ地文のみのもの。２は、口唇部に沈線をもつ点で深鉢Ⅰ類に似るが、地文のみのものである。

深鉢Ⅵ類(第123図４～６)

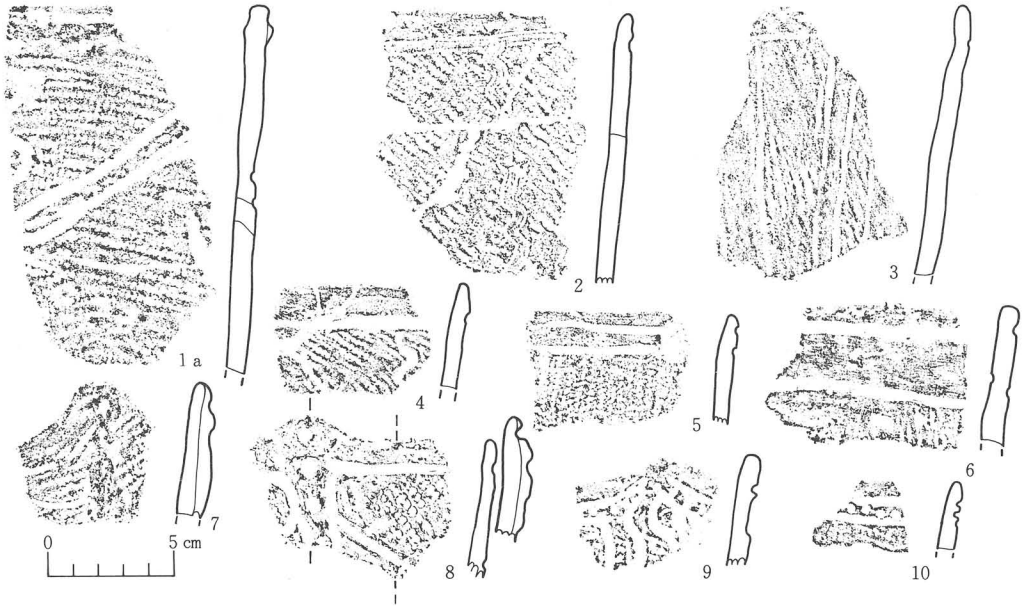
口縁部から体上部にかけては直線的であるが、体中央～下辺に最大径をもってゆるやかに内弯する大型(径20～32cm)の深鉢と思われるものである。

１ａ類：渦状・弧状磨消縄文(撚糸文)のもの(5)

横位弧状鎖状隆線文(６ａ類)に連結して縦位渦状沈線間磨消撚糸文(網目状撚糸文)の施文されるもの。

６ａ類：連続刺突隆線文のもの(４～６)

横位連続小円形刺突文が口縁部と体部を画すようであるが小山形突起に弧状に連



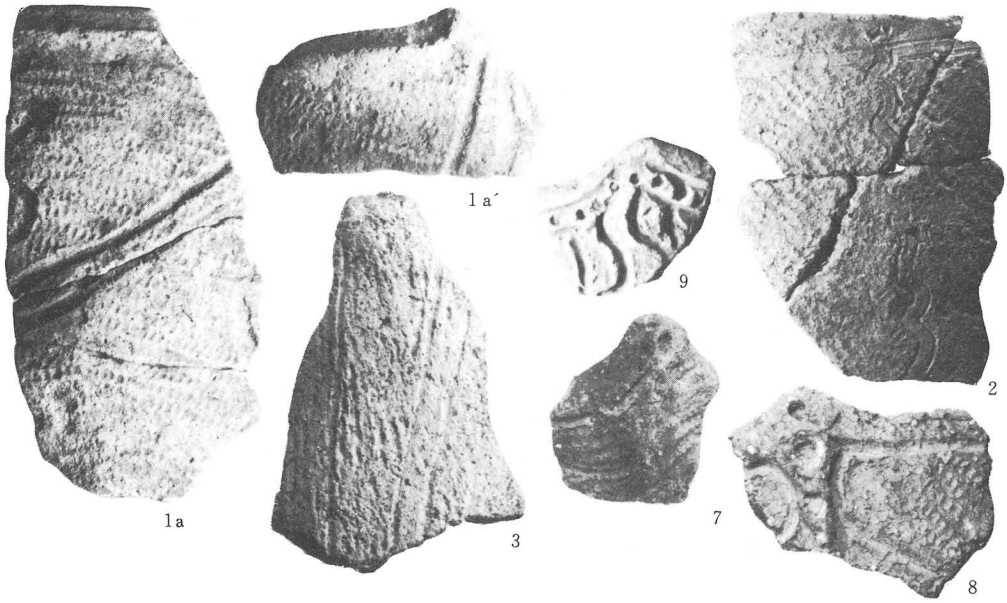
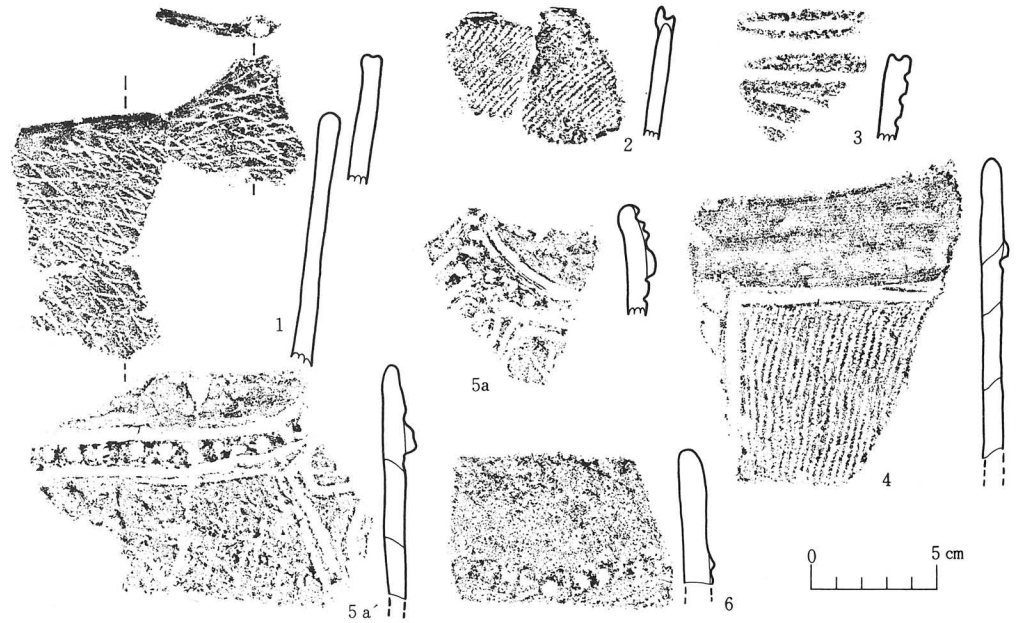


図	地　区	層位	部　位	器　形	施　文　・　調　整	分　類	備　考
1	J－7（d）	Ⅲ	口縁部～体部	深　鉢　V	隆帯（口唇部）→斜位ＬＲ縄文→斜位並行沈線文＋縦位波状沈線文	Ⅷ1b＋3b	――
2	L－6（c）	Ⅲ	口縁部～体部	深　鉢　V	縦位ＬＲ縄文→沈帯文→縦位波状沈線文→研磨（口縁部）	Ⅷ8a＋1b	――
3	O－6（b）	Ⅲ	口縁部～体部	深　鉢　V	縦位Ｒ撚糸文→斜行並行沈線間磨消撚糸文・横位沈線文→研磨（口縁部）	Ⅷ8a？＋3a	――
4	K－12(b）	Ⅳa	口　縁　部	深　鉢　V	斜位ＬＲ撚糸文→沈帯？→縦位波状沈線文	Ⅷ8a？＋1b	――
5	N－7（d）	Ⅲ	口　縁　部	深　鉢　V	縦位Ｌ撚糸文→横位直状沈線文→縦位波状沈線文	Ⅷ$4b_2$＋1b	――
6	O－6（b）	Ⅲ	口　縁　部	深　鉢　V	縦位Ｒ撚糸文→沈帯磨消縄文？→研磨（口縁部）	Ⅷ4a？	――
7	N－7（b）	Ⅰ	口　縁　部	深　鉢　V	（山形突起）＋縦位鎖状隆線文→横位ＬＲ縄文→弧状沈線文→研磨（口縁部）	Ⅷ11b＋6a＋1b	――
8	O－7（a）	Ⅲ	口　縁　部	深　鉢　V	（山形突起：盲孔）盲孔＋鎖状隆線文・縦位ＲＬ縄文→弧状磨消縄文→研磨（口縁部）	Ⅷ$11b_1$＋6a＋1a	――
9	L－8（d）	Ⅰ	口　縁　部	深鉢Ⅴ？	（山形突起）横位ＬＲ縄文→「並行沈線→連続小円形刺突」文・弧状沈線文→研磨	Ⅷ11b＋5a＋1b	研磨は粗雑である。
10	K－6（b）	Ⅲ	口　縁　部	深鉢Ⅴ？	縄文→「横位並行沈線→連続小円形刺突」文→研磨（口縁部）	Ⅷ5a	――

第122図　第Ⅷ群土器（7）



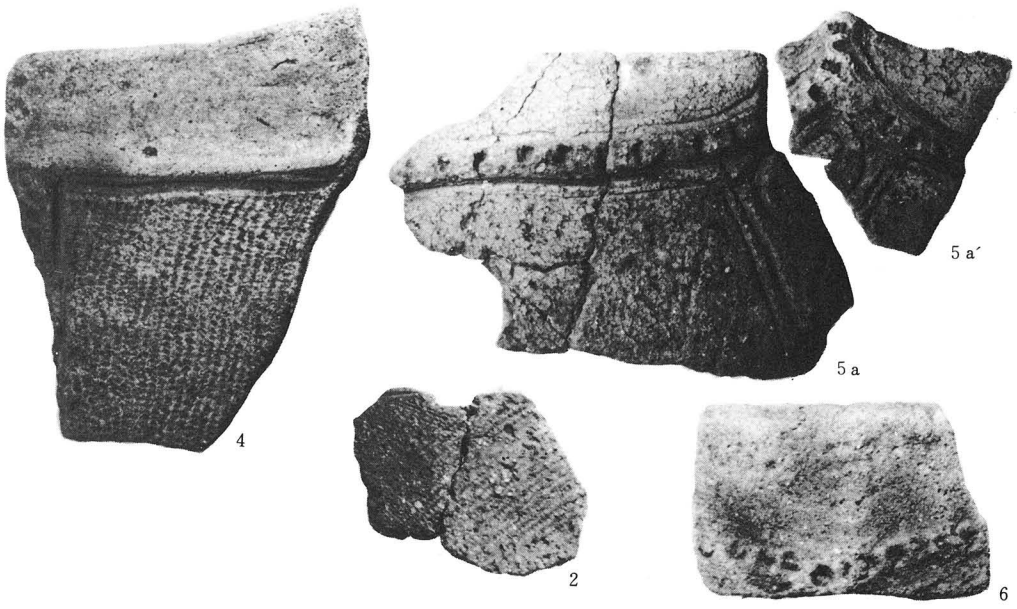


図	地区・遺構	層位	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	32 D	堆	口縁部	深鉢V	(山形突起：頂部に盲孔)横位網目状撚糸文	Ⅷ11b$_1$	——
2	K−12	Ⅳb上	口縁部	深鉢V	横位直状沈線文(口唇部)・斜位LR縄文	Ⅷ4b$_1$	——
3	M−7(a)	Ⅲ	口縁部	深鉢V	溝状沈線文(口唇端部)・弧状沈線文→研磨	Ⅷ1b	——
4	I−8(c)	Ⅲ	口縁部	深鉢Ⅵ	横位隆沈帯文・斜位LR縄文→沈線文間鎖状隆線文→研磨(口縁部)	Ⅷ8b+6a	波状口縁
5	M−6(c)	Ⅲ	口縁部	深鉢Ⅵ	(山形突起)＋並行沈線間不整小円形刺突隆線文＋渦状沈線間磨消撚糸文・網目状撚糸文	Ⅷ11b$_1$+6a+1a	——
6	M−6(d)	Ⅲ	口縁部	深鉢Ⅵ	横位連続小円形刺突文＋盲孔→研磨(口縁部)	Ⅷ6a	——

第123図　第Ⅷ群土器(8)

絡するもの(５)、縦位渦状沈線間磨消撚糸文(１ａ類)とも連結する。６も横位連続小円形刺突隆線文でありやや下った盲孔状の刺突が基点になっている。波状口縁で隆沈帯(８ｂ類)で口縁部と体部を画し輪形隆文？＋縦位鎖状隆線文の展開するもの(４)。破片の側縁から弧状磨消縄文の存在が予想される。

８ｂ類：上位隆沈帯区画文のあるもの(４)

縦位輪形隆文＋沈線間縦位鎖状隆線文(６ａ類)が下垂する。

深鉢Ⅶ類(第124図１・２)

口縁部が外傾し体上部が球形に近くふくらむもので最大径が口縁端部にあるもの、いわゆる甕形に近いものである。器形、文様構成は深鉢Ⅰ類に類似し深鉢Ⅰ類に包括される可能性がある。

１ａ類：渦状・弧状磨消縄文のもの(１)

「８」の字盲孔を中心にして横位長楕円形沈線間磨消縄文が配されるもの。

４ｂ類：横位直状沈線文のもの(2)

盲孔＋輪形隆文の両側に横位直状沈線文がめぐるもの。輪形隆文の下には縦位鎖状隆線文(６ａ類)が下垂する。

６ａ類：連続刺突隆線文のもの(２)

縦位鎖状隆線文が「８」の字状盲孔より下垂する。

深鉢Ⅷ類(第124図３・４・５)

分類しきれなかった深鉢を一括する。３・４は口縁部が短く内傾する点で共通性があるが、文様構成の上で違いがあり、今回はあえて器形・文様について言及しないが、３については、浅鉢Ⅰ類の器形、文様構成に共通する点が多い。

浅鉢

器高より口径が大であると推定されるものを浅鉢とし器形よりⅢ類に分類する。

浅鉢Ⅰ類(第124図６・７)

口縁部が短く内傾し急激に外傾に転じるもの。６には突起＋把手がついている。

５ｂ類：連続刺突文単独で文様要素となるもの(７)

内傾する口縁部と口唇頂部に連続刺突文が施文されるもので口唇頂部の刺突は斜位である。

浅鉢Ⅱ類(第124図８)

内弯する口縁部がやや内傾し、稜帯を形成して急激に外傾に転じるものである。口唇部から稜帯にかけて環状の縦位把手が付されている。

５ｂ類：連続刺突文単独で文様要素を構成するもの(８)

連続小円形刺突文が乱雑に施文されている。

浅鉢Ⅲ類（第124図９）

口縁部～体部にかけて内弯するものである。

１ａ類：渦状・弧状磨消縄文のもの（９）

弧状沈線間磨消縄文が小突起の輪形隆文より下垂する。

小型鉢（第124図10・11）

器厚が４～５㎜と薄く、口縁形態が直線的に外傾し、「深鉢」と分類したものより概して小さいものを、深鉢、浅鉢から除外して小形鉢とした。

１ａ類：渦状・弧状磨消縄文のもの(10)

１ｂ類：渦状・弧状沈線文のもの。11は横位入組状沈線文である。

壺

口径が小さく、体中央部～下部に最大径があるものを壺とし、器形よりⅠ・Ⅱ類に分類する。

壺Ⅰ類（第125図１～３）

口縁部が外傾し「く」の字状に体下部に最大径のある体部に転じるもの。注口をもつもの（３）がある。１ａと１ａ´は同一個体の可能性が高い。

５ｂ類：連続刺突文が単独で文様要素となるもの（１ａ・１ａ´）

６ａ類：連続刺突隆線文のもの（１ａ）

ねじり円筒突起の頂部から鎖状隆線文（細長いえぐるような刺突により「鎖」をつくるもの）が、らせん形をえがいて縦位把手に沿って下垂し、口縁部と体部の境を横走する。

10ａ類：口縁部縦位隆沈装飾文のもの（１ａ´）

小突起の頂部の盲孔と横位鎖状隆線文上の盲孔を結んで溝状沈線ある「Ⅰ」字状隆線文（「Ｊ」字状隆沈線文）が装飾される。

壺Ⅱ類（第125図４～５）

口唇部がわずかに外反（４）又は肥厚し（５）体下部に最大径ある体部になるもの

１ａ類：渦状・弧状磨消縄文のもの（４・５）

４には渦状沈線間磨消縄文が施文される。５も渦状沈線間磨消縄文＋斜行磨消縄文（３ａ類）が施文されている。

４ａ類：沈帯磨消縄文のもの（５）

５の肥厚する口唇部直下に並行沈線にはさまれた縄文施文帯があり上下の研磨部と対置される。充塡縄文か磨消縄文（狭義）かは不明である。

4b$_2$類：横位直状沈線文のもの（４）

６は、口縁部が欠損しており、器形分類できないが特徴的な小楕円形刺突文が横位隆線や体部に横位に連続して施文される（５ｂ類・６ａ類）もので、盲孔＋沈線文と組んで文様を構成している。

蓋（第126図１～５）

１ａ類：渦状・弧状磨消縄文のもの（１）

長楕円形沈線間磨消縄文が円周方向に展開するもの。

１ｂ類：渦状・弧状沈線文のもの（２）

弧状並行沈線文のもの（磨消縄文の可能性あり）

５ｂ類：連続刺突文が単独で文様要素となるもの（３～５）

弧状のもの(4)アトランダムに施文されるもの（３・５）。

体部資料　（第126～129図）

１ａ類：渦状・弧状磨消縄文（第126図６～14）

渦状磨消縄文（６・８ａ・11・14）とそれに組み合うと思われる三角形状沈線間磨消縄文（８ａ´・９・10）及び文様要素は完結していないが、紡垂形状磨消縄文(13)と、(12)のような弧状沈線間磨消縄文がある。

１ｂ類：渦状・弧状沈線文（第126図２・15、第127図１・４、第128図２～８）

第127図１は楕円形沈線文及びその他の弧状沈線文であるが、全体構成については不明である。４は細沈線文で、類例は６号土壙にある（第51図２）。他遺跡の例としては、小名浜Ｃ地点貝塚などで出土しており「称名寺式・掘之内Ⅰ式に併行して継続的に製作された」[註1)]と考えられており、後期前葉の範囲で考えておいたほうがよいのかも知れない。縦位波状沈線文は磨消縄文とくむ（第128図１・３）。

２ａ類：弧状隆線間研磨文（第127図２・３）

２は弧状沈線文、３は横位沈線文・盲孔と各々くむ。

３ａ類：「Ｘ」状・三角形状・斜行磨消縄文（第127図５・６・８・９）

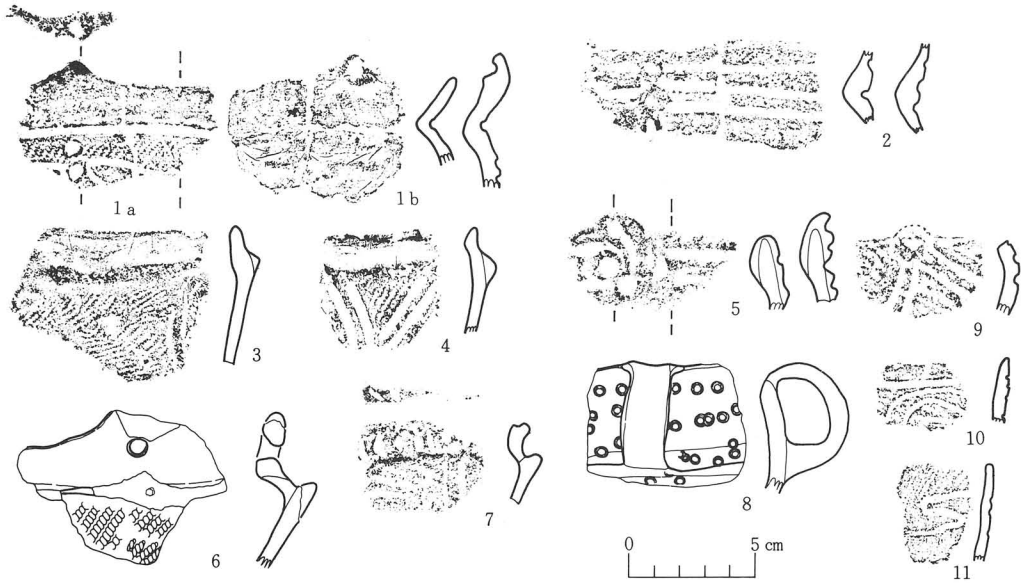
６は輪形隆文＋「Ｘ」状沈線間磨消縄文と思われ縦位連続三角形隆線間研磨（3c類）とくむ。

８は、渦巻逆三角形連続磨消縄文として機能することが多く[註2)]、９は六反田遺跡に類例がある。[註3)]

３ｃ類：「Ｘ」状・三角形状・斜行隆線間研磨文（第127図６）

連続縦位三角形状隆線間研磨文＋盲孔は、「Ｘ」状沈線間磨消縄文（３ａ類）とくむ。

４ａ類：沈帯磨消縄文（第127図７）



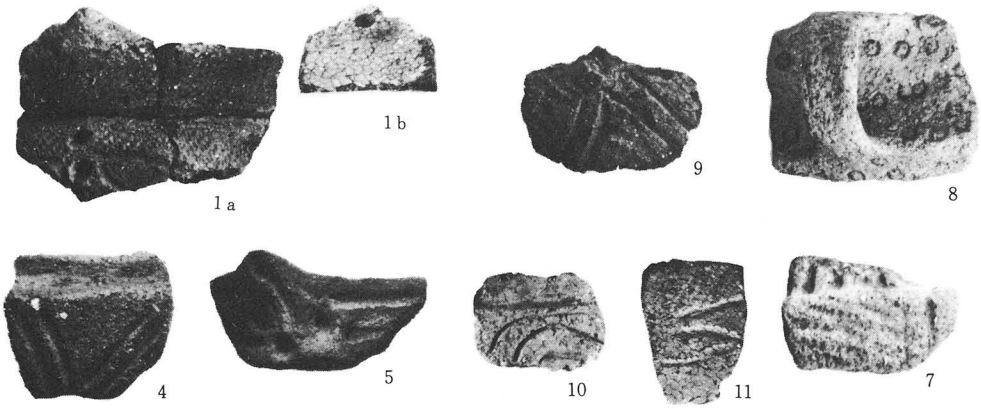
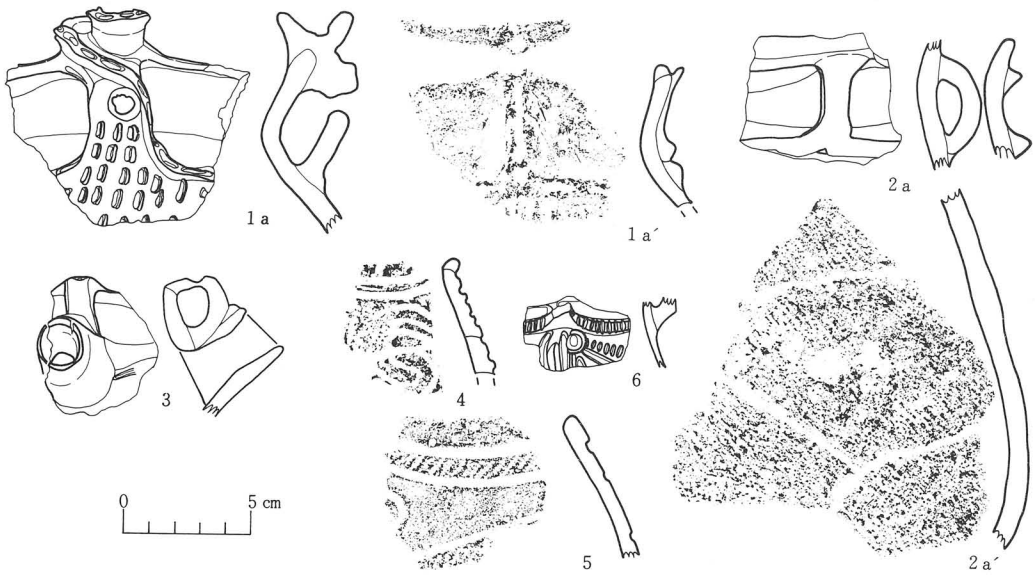


図	地区・遺構	層位	部　位	器形	施　文　・　調　整	分　類	備　考
1	J－7（c）	Ⅲ	口　縁　部	深鉢Ⅶ	(山形突起:頂部と内面に盲孔各1)横位LR縄文→長楕円形沈線間磨消縄文・沈帯?→「8」の字状盲孔→研磨	Ⅶ11b_1＋1a＋8a′	―――
2	K－13(b)	Ⅳb	体 部（頸部）	深鉢Ⅶ	横位直状沈線文→「8」の字状盲孔＋縦位鎖状隆線文→研磨	Ⅶ4b＋6a	磨滅がはげしい
3	K－12(b)	Ⅰ	口　縁　部	深鉢Ⅶ	横位LR縄文→弧状沈線文→研磨(口縁部)	Ⅶ1b	波状口縁?
4	J－8（d）	Ⅲ	口　縁　部	深鉢Ⅶ	横位LR縄文→並行弧状沈線間磨消縄文→研磨(口縁部)	Ⅶ1a	体部内面に黒褐色の付着物
5	K－7（d）	Ⅲ	口　縁　部	深鉢Ⅶ	(小山形突起)＋逆「C」字状盲孔間隆沈線文＋横位直状沈線文＋盲孔・輪形隆文	Ⅶ11b_1＋10a＋4b_2	―――
6	L－7（a）	Ⅲ	口縁部～体部	浅鉢Ⅰ	(突起＋縦位把手：貫通孔・盲孔)横位LR縄文→研磨(口縁部)	Ⅶ11a_1	―――
7	J－7（c）	Ⅲ	口縁部～体部	浅鉢Ⅰ	縄文→縦位並行沈線間磨消縄文?・連続刺突文(口縁部外面と上端)	Ⅶ5b ＋4c?	―――
8	2　住	堆1	口　縁　部	浅鉢Ⅱ	(縦位把手)連続小円形刺突文	Ⅶ5b	―――
9	K－7（d）	Ⅲ	口縁部～体部	浅鉢Ⅲ	(小山形突起)縦位LR縄文→輪形隆文→弦状並行沈線間磨消縄文	Ⅶ11b_1＋1a	―――
10	K－8	Ⅰ	口　縁　部	小型鉢	縄文→縄文→沈帯?・渦状沈線間磨消縄文	Ⅶ1a ＋8a?	―――
11	13　D	堆1	口縁部?	小型鉢	横位LR縄文→入組状沈線文→研磨	Ⅶ1b	―――

第124図　第Ⅶ群土器（9）



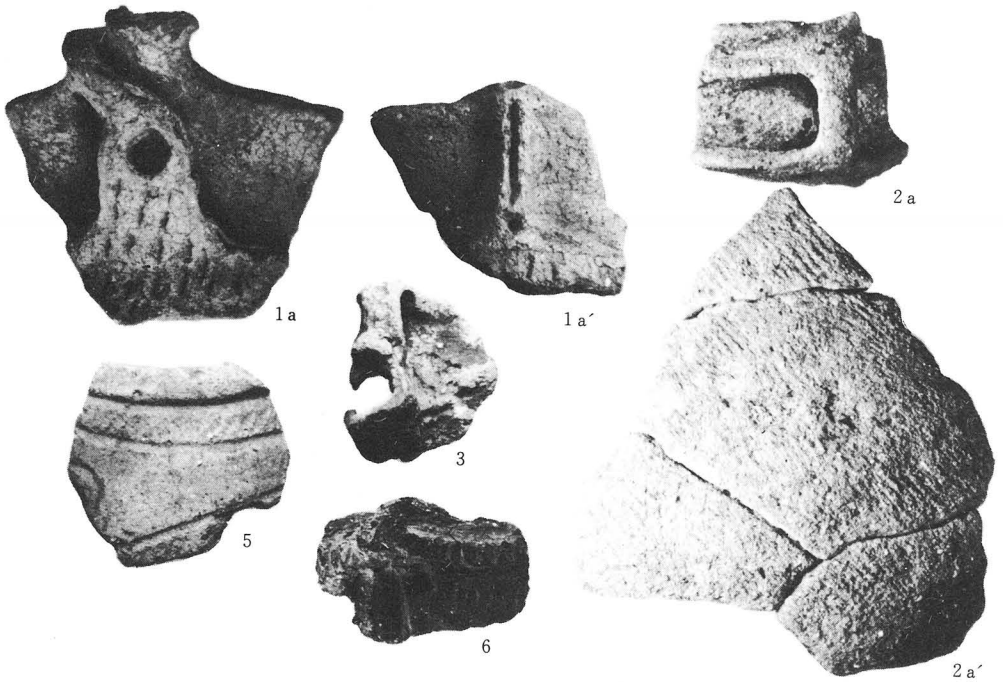
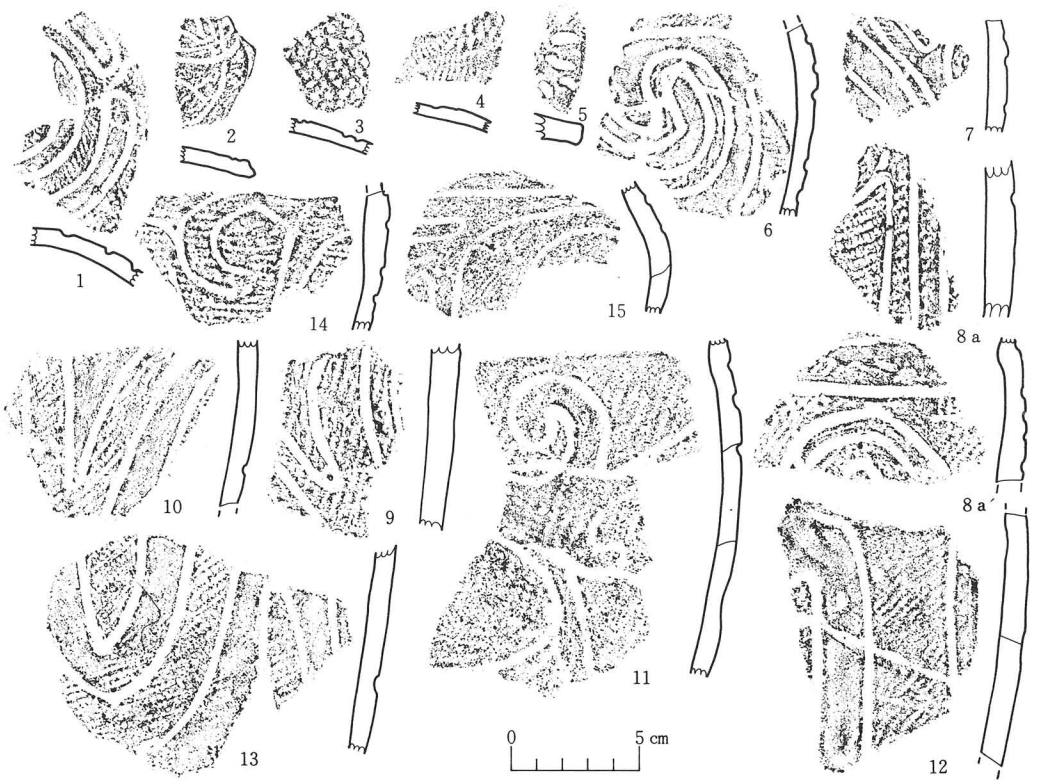


図	地区・遺構	層位	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1a	M－7(d)	Ⅲ	口縁部	壺 Ⅰ	ねじり円筒突起(鎖状隆線文)＋縦位把手(貫通孔)・縦位長方形連続刺突文	Ⅷ11b$_2$＋5b＋6a	同一個体か
1a´	N－7(b)	Ⅰ	口縁部	壺 Ⅰ	(小山形突起：頂部に盲孔)＋「Ⅰ」字状隆沈線文＋横位鎖状隆線文・縦位長方形連続刺突文	Ⅷ11b$_2$＋10a＋5b＋6a	
2	K－7(d)	Ⅲ	口縁部・体部	壺 Ⅰ	稜線ある隆帯＋縦位把手・縦位R撚糸文	Ⅷ8d	――
3	M－7	Ⅰ	口縁部(注口)	壺 Ⅰ	(山形突起：頂部に盲孔＋縦位把手＋注口)弧状沈線文	Ⅷ1b？	――
4	K－12(c)	Ⅰ	口縁部～体部	壺 Ⅱ	・横位直状沈線文・縄文→渦状沈線間磨消縄文	Ⅷ4b$_2$＋1a	――
5	J－7(a)	Ⅲ	口縁部	壺 Ⅱ	沈帯磨消縄文・渦状・弧状沈線間磨消縄文	Ⅷ4a＋1a＋3a	――
6	1 風	堆	口縁部	壺 ―	´(縦位把手)「横位弧状隆線→連続小楕円形刺突」文・沈線＋盲孔＋連続小楕円形刺突文	Ⅷ5b＋6a	――

第125図　第Ⅷ群土器(10)



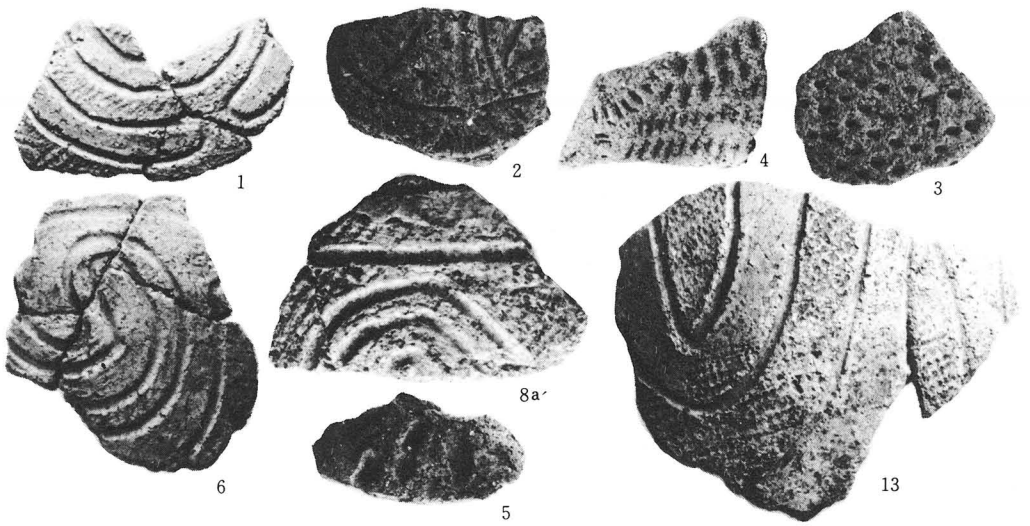


図	地区・遺構	層位	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	O－6（b）	Ⅲ	体部	蓋	横位ＬＲ縄文→長楕円形沈線間磨消縄文	Ⅷ1a	——
2	K－8（b）	Ⅲ	縁辺部	蓋	横位ＬＲ縄文？→弧状並行沈線文・沈帯文（端部）	Ⅷ1b	磨消縄文の可能性あり
3	J－7（d）	Ⅲ	体部	蓋	連続小円形刺突文→研磨	Ⅷ5b	——
4	M－6（b）	Ⅲ	体部	蓋	連続刻み状刺突文（一部弧状）→研磨？	Ⅷ5b	——
5	M－13（b）	Ⅳb	縁辺部	蓋	連続不整楕円形刺突文→ナデ	Ⅷ5b	——
6	O－6（c）	Ⅲ	体部	深鉢Ⅰ	渦状沈線間磨消縄文	Ⅷ1a	——
7	O－7（d）	Ⅰ	体部	深鉢	縄文→弧状沈線間磨消縄文	Ⅷ1a	——
8	N－7	Ⅲ	体部	深鉢Ⅰ	横位ＬＲ縄文→渦状・弧状沈線間磨消縄文	Ⅷ1a	——
9	M－7（c）	Ⅱ	体部	深鉢	横位ＬＲ縄文→弧状沈線間磨消縄文	Ⅷ1a	——
10	31　D	堆	体部	深鉢	斜位ＬＲ縄文→弧状沈線間磨消縄文	Ⅷ1a	——
11	O－7（c）	Ⅲ	体部	深鉢Ⅰ？	斜位ＬＲ縄文→弧状沈線間磨消縄文	Ⅷ1a	——
12	L－7（b）	Ⅲ	体部	深鉢	縦位Ｌ縄文？→弧状沈線間磨消縄文	Ⅷ1a	——
13	K－8（b）	Ⅲ	体部	深鉢	横位ＬＲ縄文→紡錘形状沈線間磨消縄文	Ⅷ1a	——
14	M－7（c）	Ⅲ	体部	深鉢	斜位ＬＲ縄文→渦状沈線間磨消縄文	Ⅷ1a	上下逆の可能性あり
15	N－7（a）	Ⅲ	体部	深鉢	縄文→弧状沈線文→研磨	Ⅷ1b	磨滅がはげしい

第126図　第Ⅷ群土器（11）

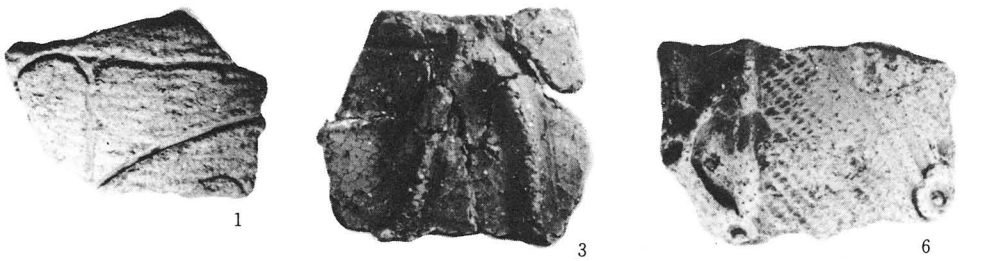
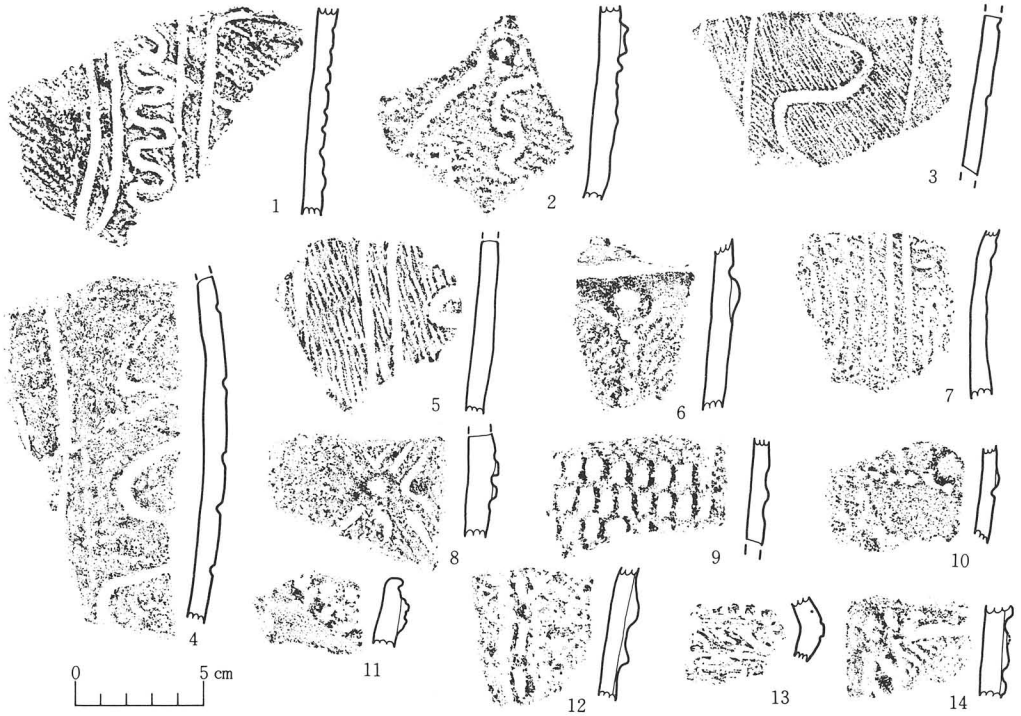


図	地区・遺構	層位	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	K－7(d)	Ⅲ	体部	深鉢	斜位ＬＲ縄文→弧状沈線文	Ⅷ1b	一部磨消縄文の可能性
2	31 P	堆	体部	深鉢	縦位Ｒ撚糸文→弧状沈線文→弧状隆線間研磨文	Ⅷ1b+2a	——
3	M－6(b)	Ⅲ	体部	深鉢	縦位楕円形隆線間研磨文→盲孔・横位沈線文→研磨	Ⅷ2a	——
4	K－13(d)	Ⅳa	体部	深鉢	多条弧状並行細沈経文→研磨	Ⅷ1b	後期前葉の可能性あり
5	J－12(c)	Ⅳb上	体部	深鉢	横位・斜位ＬＲ縄文→縦位・斜位並行沈線間磨消縄文	Ⅷ3a+4c	——
6	N－7(c)	Ⅲ	体部	深鉢	縦位連続三角形隆線間研磨文＋盲孔→縦位ＬＲ縄文→「Ｘ」状沈線間磨消縄文＋輪形隆文	Ⅷ3c+3a	——
7	表採	—	体部	深鉢Ⅰ	沈帯磨消縄文	Ⅷ4a	——
8	N－7(d)	Ⅲ	体部	深鉢Ⅰ？	横位ＬＲ縄文→盲孔・三角形状沈線間磨消縄文	Ⅷ3a	——
9	K－7(d)	Ⅲ	体部	深鉢	縦位Ｒ撚糸文→三角形状・斜行沈線間磨消撚糸文	Ⅷ3a	上下逆の可能性あり

第127図　第Ⅷ群土器(12)



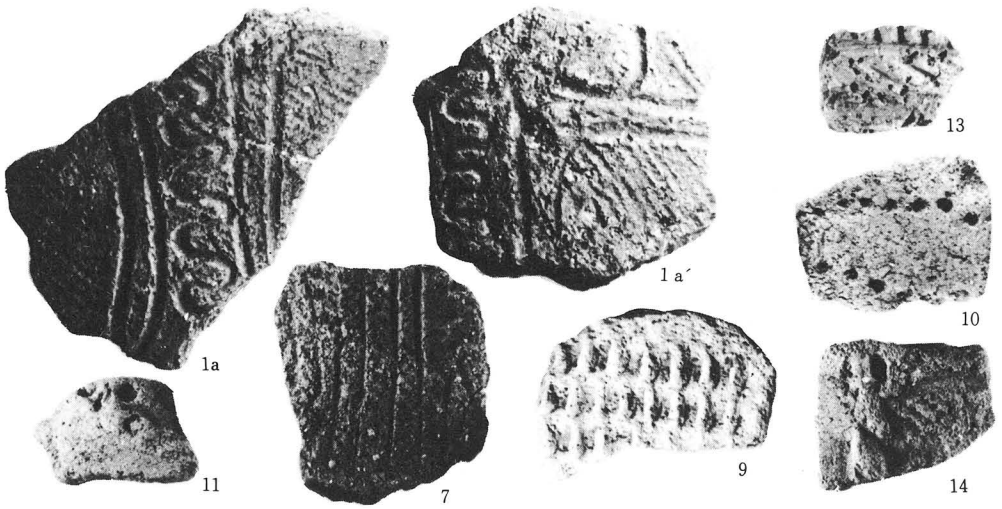
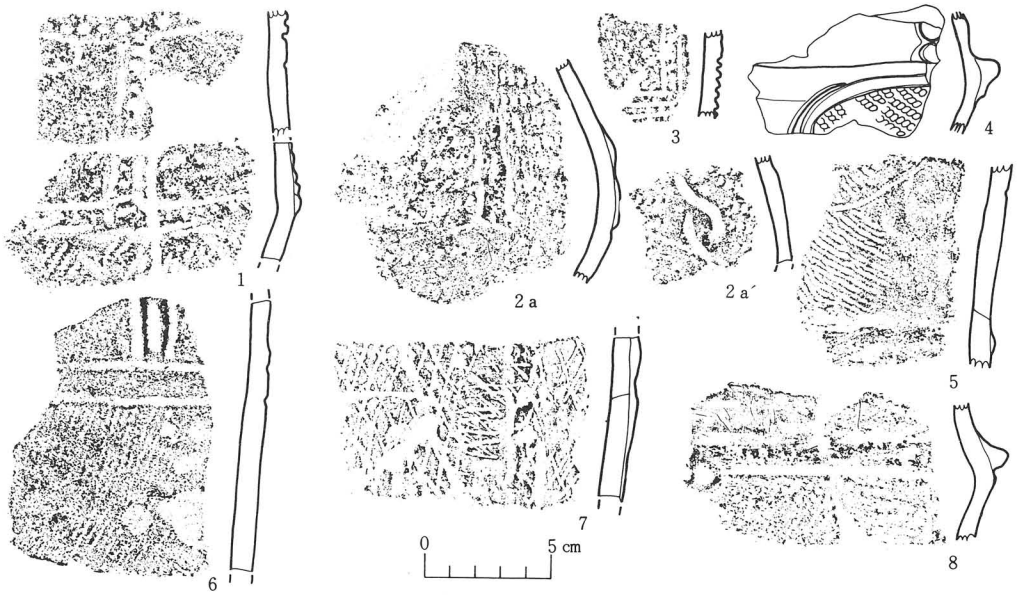


図	地区	層位	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	L－7(a)	Ⅲ	体部	深鉢	横位LR縄文→「縦位並行沈線文→縦位波状沈線文」沈線間磨消縄文	Ⅷ1b+4c	——
2	J－7(b)	Ⅰ	体部	深鉢	横位LR縄文→輪形隆文→弧状沈線文・縦位波状沈線文	Ⅷ1b	——
3	K－7(d)	Ⅰ	体部	深鉢	縦位R撚糸文→「縦位並行沈線間磨消撚糸文＋縦位波沈線文」文	Ⅷ1b+4c	磨消は不徹底
4	M－7(d)	Ⅲ	体部	深鉢	縄文→「縦位並行沈線文＋縦位波状沈線文」→沈線間磨消縄文→研磨	Ⅷ1b+4c？	——
5	K－12(b)	Ⅳa	体部	深鉢	縦位R撚糸文→縦位並行沈線文・縦位波状沈線文？	Ⅷ1b	——
6	N－7(b)	Ⅰ	体部	深鉢	横位LR縄文→沈帯？→輪形隆文→縦位波状沈線文	Ⅷ8a？+1b	——
7	M－13	Ⅳb	体部	深鉢	縄文→縦位多条並行沈線文(弧状のものを含む)連続小円形・楕円形刺突文→研磨	Ⅷ1b+5a	——
8	J－7(a)	Ⅲ	体部	深鉢	「輪形隆文→「X」状隆沈線」文→横位LR縄文 縦位波状沈線文？	Ⅷ3d＋1b？	——
9	M－7(a)	Ⅲ	体部	深鉢	連続鱗状刺突文	Ⅷ5b	——
10	K－6(c)	Ⅲ	体部	深鉢	弧状隆線文？→横位連続小円形刺突文	Ⅷ5b	磨滅している
11	K－7(a)	Ⅲ	口縁部	深鉢	「弧状隆線→連続小円形刺突」文＋(連続刺突隆線文)・連続小円形刺突文	Ⅷ6a+5b	——
12	J－7(a)	Ⅰ	体部	深鉢	縦位R網目状撚糸文→縦位鎖状隆線文	Ⅷ6a	——
13	K－8	Ⅱ	体部	深鉢Ⅲ	「横位隆線＋斜位連続刺突」文・連続刺突文→研磨	Ⅷ6a+5b	——
14	J－7(a)	Ⅰ	体部	深鉢	横位沈線＋輪形隆文＋縦位刻み状隆線文・縦位LR縄文	Ⅷ6b	方形区画文の可能性有り

第128図　第Ⅷ群土器(13)



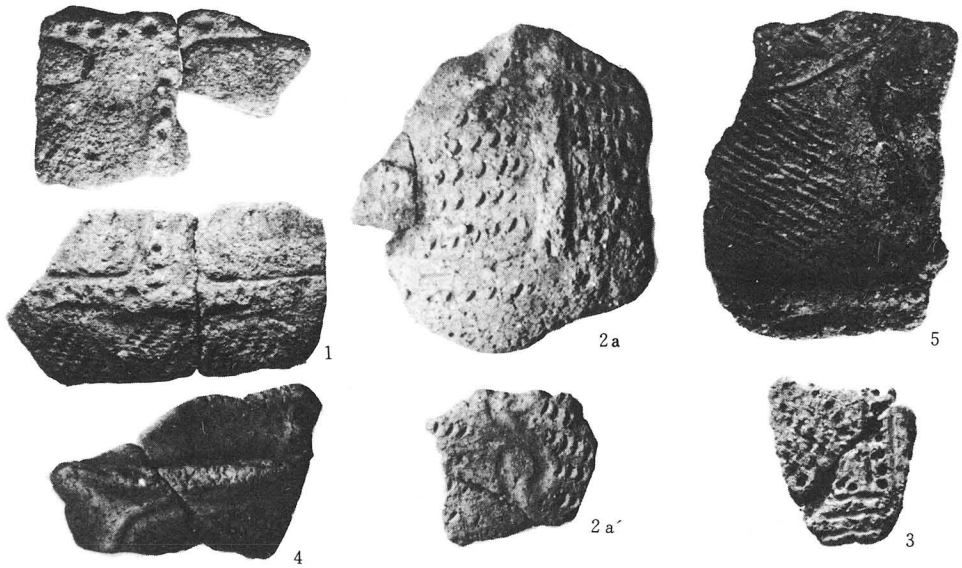


図	地区・遺構	層位	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	M－6(b)	Ⅲ	体部	深鉢Ⅱ	縦位RL縄文→方形区画「隆線→連続小円形刺突→沈線」隆沈線文・横位長楕円形沈線文	Ⅷ7b＋1b	——
2a	M－6(c)	Ⅲ	体部	壺	鎖状隆線文(方形区画文)・連続刺突文	Ⅷ7b＋5b	同一個体
2a´	9－N(c)	Ⅲ	体部	壺	入組状沈線間磨消縄文・連続瓜形刺突文	Ⅷ1a＋5b	隆帯剝落
3	I－9(a)	Ⅲ	体部	深鉢	縄文→方形区画「並行沈線→連続小円形刺突」文	Ⅷ7b(5a)	——
4	J－8(c)	Ⅰ	体部	深鉢	縦位LR縄文を囲む弧状隆沈線文・縦位刺突隆線文	Ⅷ2b	沈線は凹線状
5	N－7(c)	Ⅲ	体部	深鉢	下位隆帯→縦位L縄文→弧状沈線文	Ⅷ9＋1b	——
6	1 風	堆	体部	深鉢	縦位撚糸文→横位並行沈線間磨消縄文＋縦位並行沈線間鎖状隆線文(方形区画文？)	Ⅷ7b？(4a＋6a)	鎖状隆線の「隆部」は扁平
7	K－7(a)	Ⅲ	体部	深鉢	縦位隆線文→縦位R網目状撚糸文	Ⅷ7a？	——
8	O－10(a)	Ⅲ	体部	浅鉢Ⅰ？	縄文→輪形隆文・横位沈線文→研磨	Ⅷ——	——

第129図　第Ⅷ群土器(14)

7は、縄文施文帯と研磨帯(ていねいな研磨)を対置させている。充填手法か磨消手法かは不明である。

4 c類：縦位並行沈線間磨消線文(第128図1・3・4?)

5 b類：連続刺突文(単独で文様を構成するもの)(第128図9・10・11・13、第129図2a 2a')

数列連続して器面の方形の範囲を占めるもの(9)と横位1列のものが、一定の間隔をおいて施文されるもの(10)がある。

6 a類：連続刺突隆線文(第128図11・12・13)

12の縦位鎖状隆線文の「鎖」は、短沈線状のものである。網目状撚糸文と組む。13の横位連続斜位刺突隆線文は、縦位長方形状の連続刺突文と組む。

11の弧状連続小円形刺突隆線文は、同様の連続小円形刺突文と連結している。

6 b類：連続刻み状隆線文(第128図14)

基本的には、6a類の「刺突」と同じである。(隆線を横断状に刻みつける刺突を便宜的に「刻み」と呼ぶ。)

7 b類：方形区画文(連続刺突隆線文・連続刺突文によるもの)(第129図1・2・3・6?)

沈線文と連続刺突隆線文が一体になるもの(1)。沈線文と連続刺突文が一体になるもの(3)。本類が伴なう器形としては、深鉢Ⅱ・壺がある。

第129図7は、縦位隆線文と沈線により方形区画文(7a類)が構成される可能性がある。

第129図6には下位隆帯(9類)がみられる。

突　起(11類)

本来口縁部資料に含めるべきであるが、体部の形態・文様が不明瞭なものを「突起」として一括した。貫通孔の有無により大別、盲孔・凹孔・溝状沈線の有無、位置により細分される。

11 a類：貫通孔のあるもの(第130図1～8、131図1・2・6・9・10)

正面形態が台形を呈するもの(第130図1・2・3・8)山形を呈するもの(第130図4・5・6・7、第131図1)連続山形を呈するもの(第131図2)がある。盲孔をもつものが多く、盲孔間沈線文をもつ130図1の他、130図1・2・3・5・6・7、第131図1・2がある。又、頂部に盲孔又は凹孔をもつもの(第130図1・2・7・8)と溝状沈線をもつもの(第131図1)又、両者をもつものがある(第130図3)。131図9・10は、破片のため正面形態は不明であるが、貫通孔直下より多条並行沈線間磨消縄文の下垂する点で、他の突起と区別される[註4)]。131図6は門前式特有の「中空突起」[註5)]に近似するものである。

11 b類：貫通孔のないもの(第131図3～5・7・8)

正面形態が山形を呈するもの(3・5)　円筒形を呈するもの(4・8)がある。頂

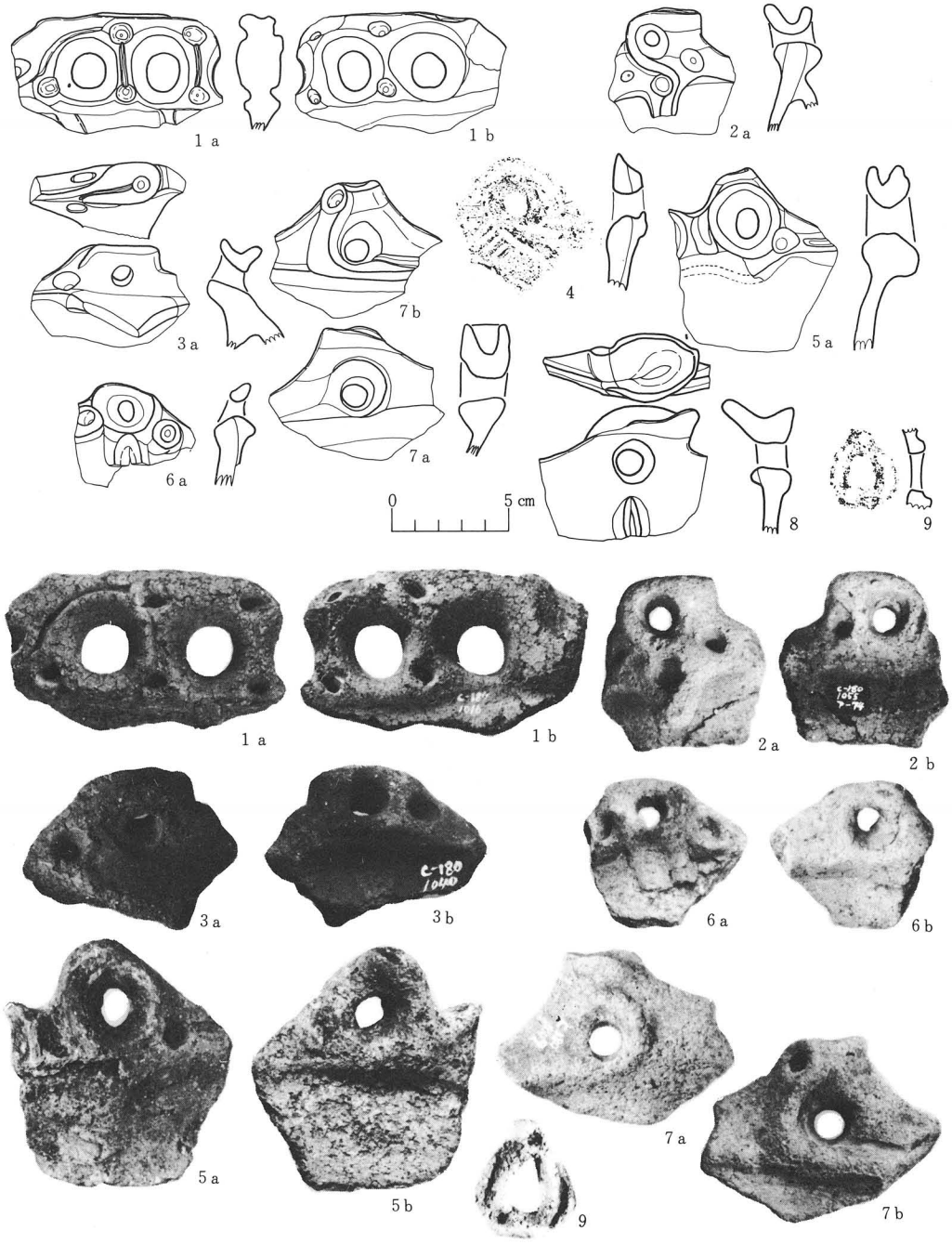
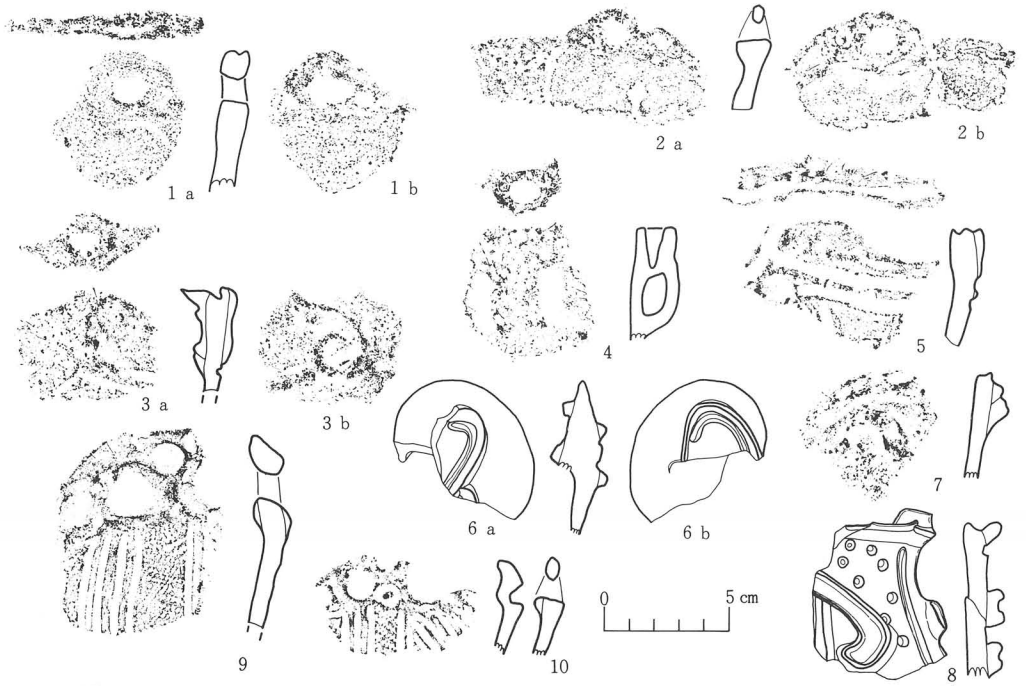


図	地区・遺構	層位	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	M－6(b)	Ⅲ	突起(口縁部)	深鉢	(台形突起一貫通孔$_2$・盲孔間沈線文(外面)・盲孔間沈線文(内面)・盲孔＋凹線(頂部))	Ⅷ11a$_1$+2	体部隆線文？
2	M－7(d)	Ⅲ	突起(口縁部)	深鉢	(台形突起一貫通孔$_1$・盲孔$_1$(内面)盲孔＋凹線(頂部))＋盲孔＋(縦位把手一盲孔)	Ⅷ11a$_1$+2	——
3	*L－7(b)	Ⅲ	突起(口縁部)	深鉢	(台形突起一貫通孔$_1$・盲孔$_1$(内外面)盲孔＋溝状沈線(頂部)	Ⅷ11a$_1$+2	——
4	O－7(b)	Ⅲ	突起(口縁部)	深鉢	(山形突起一貫通孔$_1$・R撚糸文押捺？)＋弧状隆線文・盲孔？	Ⅷ11a	——
5	M－7(c)	Ⅲ	突起(口縁部)	深鉢Ⅰ？	(山形突起一貫通孔$_1$)＋盲孔＋横位沈線文＋横位連続凹文	Ⅷ11a$_1$+5b？	——
6	J－8(a)	Ⅰ	突起(口縁部)	深鉢	(山形突起一貫通孔$_1$ 盲孔)＋縦位鎖状隆線文	Ⅷ11a	——
7	K－7(c)	Ⅲ	突起(口縁部)	深鉢	(山形突起一貫通孔$_1$・「C」字状隆線文＋盲孔(内面)盲孔(頂部)	Ⅷ11a$_1$+2	——
8	1 風	堆	突起(口縁部)	深鉢	(台形突起一貫通孔$_1$・凹孔(頂部)＋縦位鎖状隆線文	Ⅷ11a$_1$+6a	——
9	4 D	堆	突起(口縁部？)	？	弧状盲孔間沈線文	Ⅷ11	突起の一部

第130図　第Ⅷ群土器(15突起１)



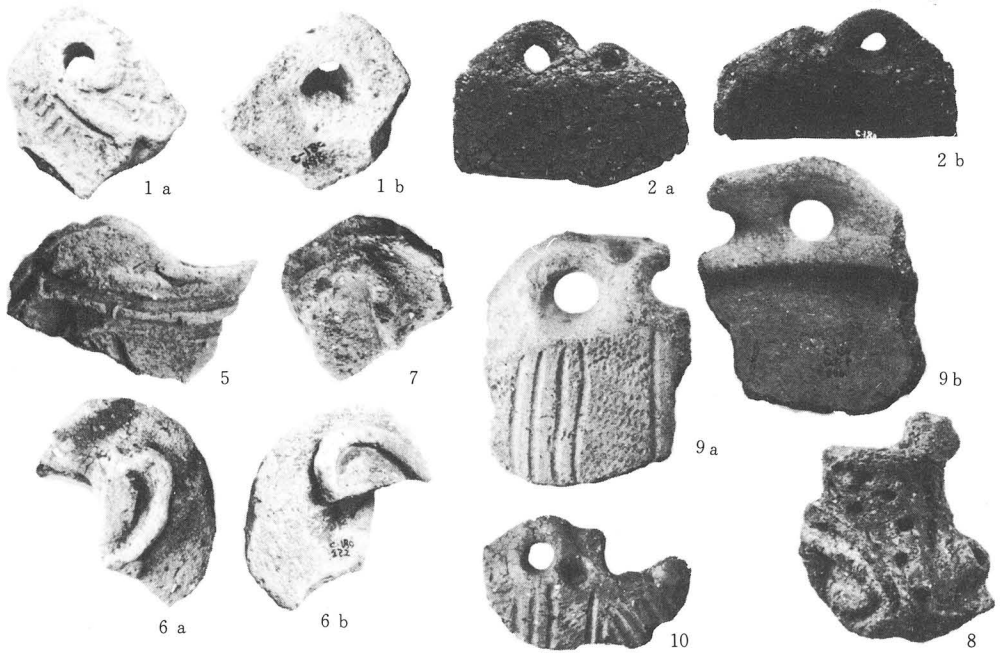


図	地区・遺構	層位	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	表採	—	突起(口縁部)	深鉢	(山形突起・貫通孔$_1$・盲孔$_2$(内面)溝状沈線(頂部))→研磨？	Ⅷ11a$_{1}$	——
2	J−9(c)	Ⅲ	突起(口縁部)	深鉢	(連続山形突起・貫通孔・盲孔→研磨(口縁部)	Ⅷ11a	——
3	1 風	堆	突起(口縁部)	深鉢	(山形突起−「C」字状隆線文(外面)・渦状隆線文＋横位隆線文・盲孔(頂部)	Ⅷ11b$_2$	——
4	K−13	Ⅰ	突起(口縁部)	深鉢	(盲孔(頂部))＋縦位把手	Ⅷ11b$_2$	——
5	K−12(b)	Ⅰ	突起(口縁部)	深鉢Ⅳ？	(山形突起−溝状沈線(頂部))＋凹孔＋横位沈線文	Ⅷ11b$_3$	——
6	K−8(a)	Ⅱ	突起	深鉢	(中空突起？−弧状隆沈線文(内外面))	Ⅷ11a＋2b	——
7	35 D	堆1	突起(口縁部)	深鉢	(山形突起−連続刺突文・弧状鎖状隆線文(外面)盲孔(頂部))	Ⅷ5b＋6b	——
8	P−9(a)	Ⅰ	突起	深鉢	(円筒or朝顔形突起−輪形隆文＋溝状沈線)弧状隆沈線文・輪形隆文・縦位沈線文・連続小円形刺突文	Ⅷ11b$_2$＋2b＋5b	1〜3mmの砂粒を多量に含む
9	30 D	堆	突起(口縁部)	深鉢	(貫通孔・盲孔(外面))横位ＬＲ縄文→縦位多条沈線間磨消縄文	Ⅷ11a$_2$？	Ⅸ群土器の可能性
10	K−13(c)	Ⅲ	突起(口縁部)	深鉢	(貫通孔・盲孔(内外面))縦位ＬＲ縄文→縦位多条沈線間磨消縄文	Ⅷ11a$_2$？	Ⅸ群土器の可能性

第131図　第Ⅷ群土器（16突起２）

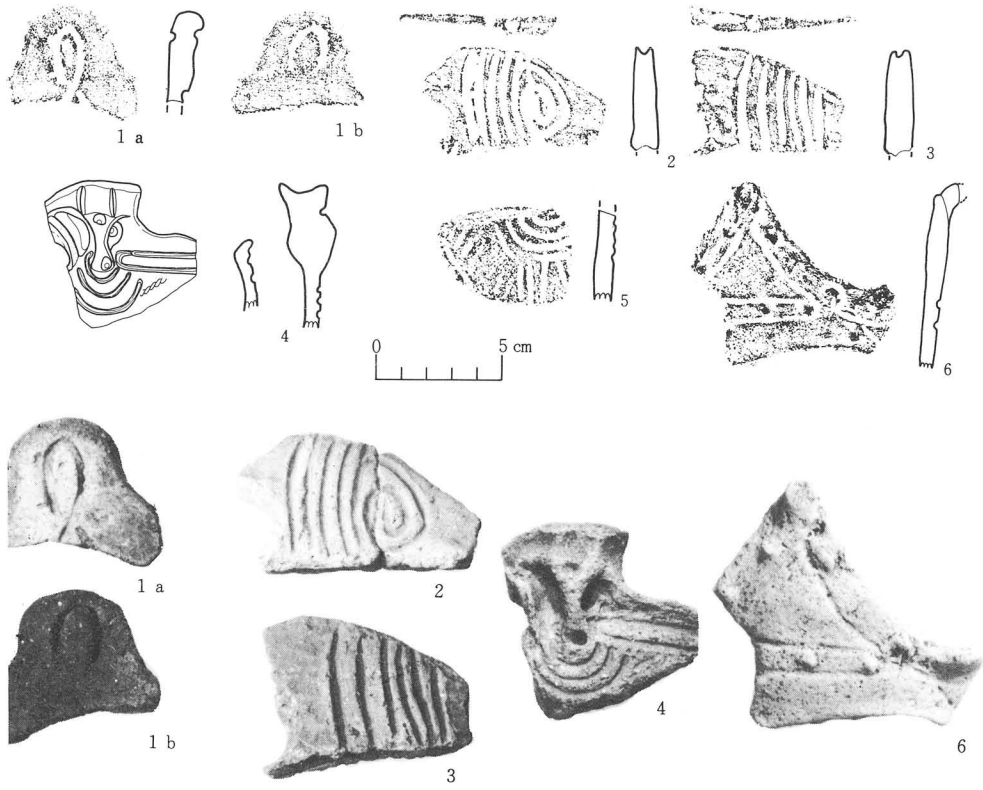


図	地　区	層位	部　位	器　形	施　文　・　調　整	分類	備　考
1	M－7（d）	Ⅲ・	突起(口縁部)	深　鉢	(突起)縦位「S」字状沈線文→研磨(外面)・弧状沈線文(内面)	Ⅸ 1	——
2	P－9（a）	Ⅳb	突起(口縁部)	深　鉢	(突起一貫通孔)多条渦状並行沈線文→研磨	Ⅸ 2	同一個体
3	P－9（a）	Ⅳb	突起(口縁部)	深　鉢	(突起一貫通孔)縦位多条弧状並行沈線文→研磨	Ⅸ 2	同一個体
4	K－13（a）	Ⅳa	突起(口縁部)	深　鉢	(突起一凹孔(頂部))＋(注口)盲孔＋多条弧状並行沈線文＋長楕円形沈線文→研磨	Ⅸ 2	——
5	M－7（d）	Ⅲ	体　部	深　鉢	縦位ＲＬ縄文？→「多条弧状並行沈線文＋斜位多条並行沈線文」間磨消縄文	Ⅸ 2	——
6	M－13	Ⅲ	口 縁 部	深　鉢	三角形状沈線文→連続小突起文→研磨・突起(口唇部)	Ⅹ	大波状口縁

第132図　第Ⅸ群・第Ⅹ群土器

部に盲孔・凹孔などの空間をもつもの(3・4・7・8)と溝状沈線をもつものがある(5)。　　田　中　則　和

註1　馬目　順一他「網取C地点貝塚の発掘」『小名浜』いわき市教育委員会磐城出張所　1968
2　田中　則和　「縄文時代後期初頭土器の文様」『六反田遺跡発掘調査報告書』P134～P155　仙台市教育委員会
3　　同P283
4　多条並行沈線間磨消縄文である点でⅨ群土器に属する可能性がある。
5　及川　洵　他　「出土遺物(1)―土器・石器」『門前貝塚』陸前高田市教育委員会　1974

第Ⅸ群土器(第132図)

広義の後期前葉(初頭～前葉)の土器に属し、①突起や口縁部の文様基点に多条弧状並行沈線文の施文されるもの。②突起より縦位「S」字状沈線文の下垂するものを後述する事由で(考察307頁参照)第Ⅷ群土器より分離して後葉前葉(狭義)の土器とし、前者を1類、後者を2類とした。復示資料1点・破片資料13点出土している。口縁部破片10点、体部資料3点であるが体部資料に関しては、細片が多いなどのために、Ⅷ群土器から分離しきれず、第Ⅷ群土器に含まれてし

まった可能性がある[註1)]。本群土器は、Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ層中に他群土器と混在している。

1類：縦位「S」字状沈線文のもの（第132図1）

突起よりいわゆる縦位「S」字状沈線文が下垂し、内面に「S」字状沈線文の上端のみをとったような弧状沈線文が施文されているものである。仙台湾岸に特有の文様パターンであるが[註2)]1点出土したのみである。

2類：多条弧状並行沈線文のもの（第132図2～5）

突起部分に施文されているもの(2・3)、突起に連続する縦位把手の盲孔を中心に施文され、横位長楕円形沈線文と組むもの(4)、体部上半で、斜位多条並行沈線文と接続して、文様要素となるものがある(5)。

田　中　則　和

註1　91頁図1の遺物のようにⅧ～Ⅸ群土器のいずれにも断定し難く、便宜的にⅨ群土器に含めたものが若干ある。
2　後藤　勝彦「縄文後期宮戸1b式周辺の吟味」『東北の考古・歴史論集』1974

第Ⅹ群土器（第132図6）

後期後葉の土器でⅢ層より1点出土しているのみである。かなり磨滅している。

6は大波状口縁で波状の頂部と谷部に水平方向に突出する突起が配される。大波状口縁のプロポーションに対応して三角形状の沈線がひかれ三角形の頂部の両側やその中央間隔の点に瘤状の小突起が配される。大波状口縁の三角形部分の破片であるが、沈線間等に縄文は観察されない。やや外傾する器形と思われる。類例としては、松島湾岸の台囲貝塚出土土器[註1)]に、大波状口縁である点、瘤状の小突起が配される点が共通する。磨滅のためか、縄文の施文は観察されないが前述の台囲貝塚出土土器を標式とする「西ノ浜式[註1)]」の範疇で捉えておきたい。　田中則和

註1　後藤　勝彦　「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器について」『考古学雑誌』　48巻1号　1962

第Ⅺ群　粗製土器（第133～137図）

中期から後期に属する粗製土器（「地文」のみの土器で文様のない突起をもつもの及び下位隆帯をもつものを含む）。

Ⅰ～Ⅳ層及び遺構内堆積土で他群土器と混在して出土している。復元資料3点の他、破片資料179点である。分類基準（39～40頁）に示すとおり口縁部の断面形態により4類に大別し、地文の種類により14類に細分した。

1類：口縁から体上部にかけて内弯する深鉢（第133図4～14、第134図1～3、第135図1・2）

a：縄文のもの（第133図3・5・7・8、第135図2）

斜位L縄文のもの（第133図5）、斜位LR縄文のもの(9)、横位RL縄文のもの（第135図2）、縦位RLR縄文のもの（第133図8）の他、横位LR縄文で二段三条と思われるも

のがある(3)。

b：縄文＋綾絡文のもの(第134図３)

ＲＬ縄文を結節し縦位に回転し綾絡文を示すものがある。

c：格子状沈線文のもの(133図13)

研磨した後で斜位細沈線を組みあわせて格子状沈線文を表現したものがある。

d：クシ目状沈線文のもの(第133図６・７)

６は５～６ｍの間隔で幅３cm以上の単位が二重に施文され、７も数回の単位同士の切り合いが認められる。同一弯曲を示す弧状の単位は幅約1.5m、長さ４cm以上である。

e：撚糸文のもの(第133図４・10～12・14、第134図１・２)

全てＲの撚糸文のもので、縦位回転のもの(第133図４・12、第134図１)、縦位回転・斜位回転併用のもの(第133図14)、横位回転のものが多く(第133図10・第134図２)がある。第134図１は下位隆帯をもつ。

f：網目状撚糸文のもの(第135図１)

2類：口縁部が直線的に外傾する深鉢(第136・137図１・２)

a：縄文のもの(第136図５～９)

全てＬＲ縄文で縦位回転のもの(７・８)、斜位回転のもの(６)、横位回転のもの(５)、横位回転・斜位回転併用のものがある。

b：内外縄文のもの(第137図１)

外面に斜位ＬＲ縄文が施文され、内面の口縁部に横位、体部に縦位のＬＲ縄文が施文されるものである。

c：撚糸文のもの(第136図１・２・４・10、137図２)

縦位Ｒ撚糸文のもの(１・２・10、137図２)と縦位ｒ撚糸文のもの(４)がある。

d：網目状撚糸文のもの(第136図３)

e：縄文＋綾絡文のもの(第137図10)

3類：口縁部が外反する深鉢(第137図４～７)

a：縄文のもの(７)

縦位ＬＲ縄文のものが１点あるのみである。

b：撚糸文のもの(４～６)

縦位Ｒ撚糸文のものがある。

4類：内弯する浅鉢(第52図３、第133図１・２)

a：縄文のもの

横位ＬＲ縄文のもの(第133図１・２)縦位ＲＬ縄文のもの(第52図３)がある。

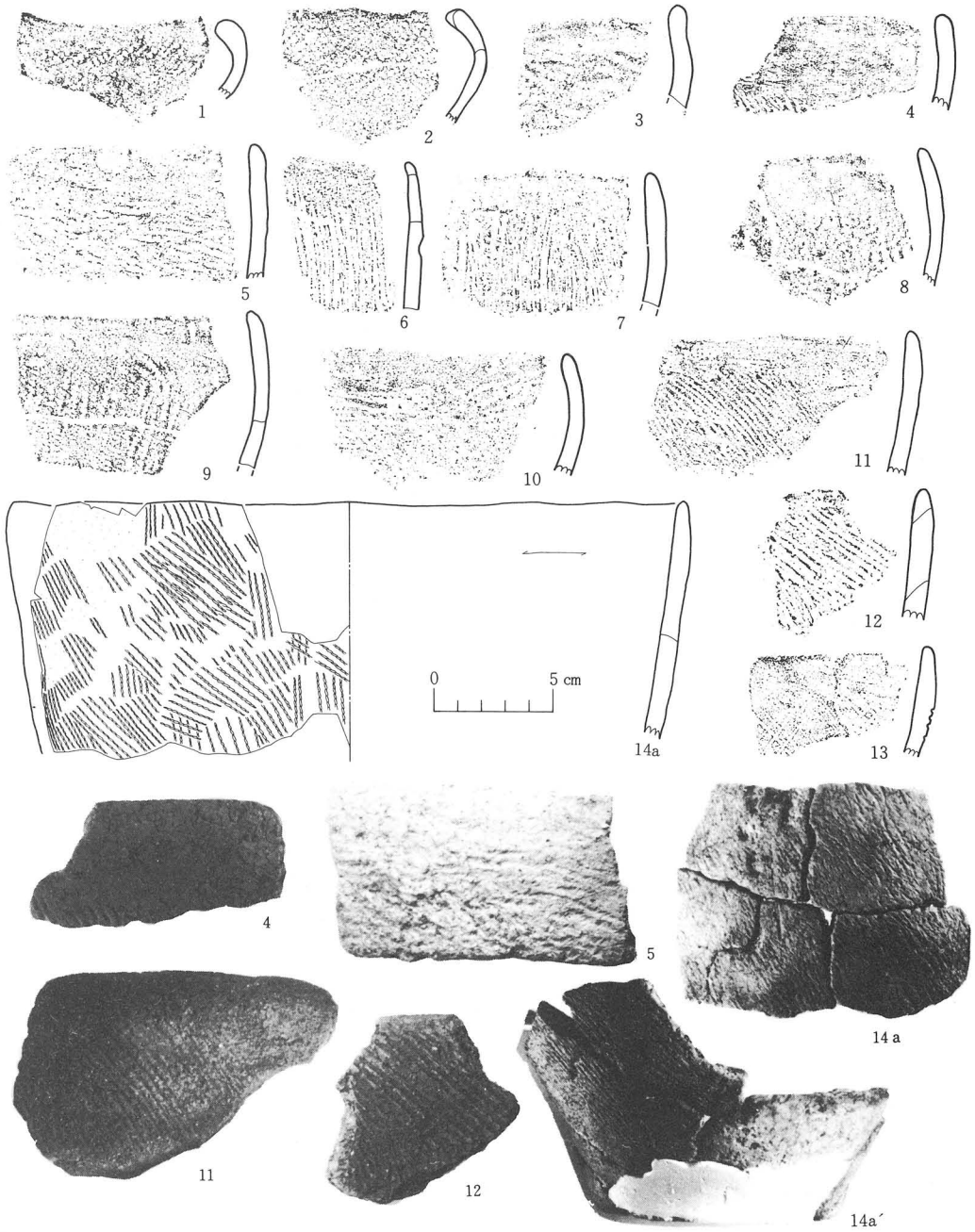


図	地区・遺構	層位	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	M－7（c）	Ⅲ	口縁部	浅鉢	横位ＬＲ縄文→ナデ状研磨（口唇部）	Ⅺ4a	口縁部内面肥厚する。
2	K－13（b）	Ⅳb	口縁部～体部	浅鉢	横位ＬＲ縄文→ナデ状研磨（口唇部）	Ⅺ4a	口縁部内面肥厚・体部内面に黒色の付着物
3	J－7	Ⅲ	口縁部	深鉢	横位ＬＲ縄文（二段三条？）→研磨（口縁部）	Ⅺ1a	胎土に金雲母を含む。
4	2　住	堆1	口縁部	深鉢	縦位Ｒ撚糸文→研磨（上端より3.5cm）	Ⅺ1e	——
5	O－6（b）	Ⅲ	口縁部	深鉢	斜位Ｌ縄文→横位ナデ状研磨	Ⅺ1a	——
6	L－8	Ⅲ	口縁部	深鉢	縦位クシ目状沈線文→ナデ状研磨（口縁部）	Ⅺ1d	口唇部はていねいな研磨である。
7	O－7（c）	Ⅲ	口縁部	深鉢	縦位クシ目状沈線文→ナデ状研磨（口縁部）	Ⅺ1d	——
8	N－7	Ⅲ	口縁部	深鉢	縦位ＲＬＲ縄文→研磨（口縁部）	Ⅺ1a	——
9	I－9	Ⅲ	口縁部	深鉢	斜位ＬＲ縄文→研磨（口縁部）	Ⅺ1a	——
10	J－9（a）	Ⅲ	口縁部	深鉢	（突起）横位Ｒ撚糸文→研磨（口縁部）	Ⅺ1e	——
11	N－7（b）	Ⅰ	口縁部	深鉢	縦位or横位Ｒ撚糸文→研磨（口縁部）	Ⅺ1e	——
12	2　住	堆1	口縁部	深鉢	縦位Ｒ撚糸文→研磨（口縁部）	Ⅺ1e	——
13	K－12（b）	Ⅳb上	口縁部・体部	深鉢	研磨→斜位細沈線→斜位細沈線（格子状沈線文）	Ⅺ1c	——
14	L－6（c）	Ⅲ	口縁部・底部	深鉢	縦位・斜位Ｒ撚糸文→研磨（口縁部：不完全な研磨のため地文残存）	Ⅺ1e	底部は写真のみ。

第133図　第Ⅺ群土器（1）

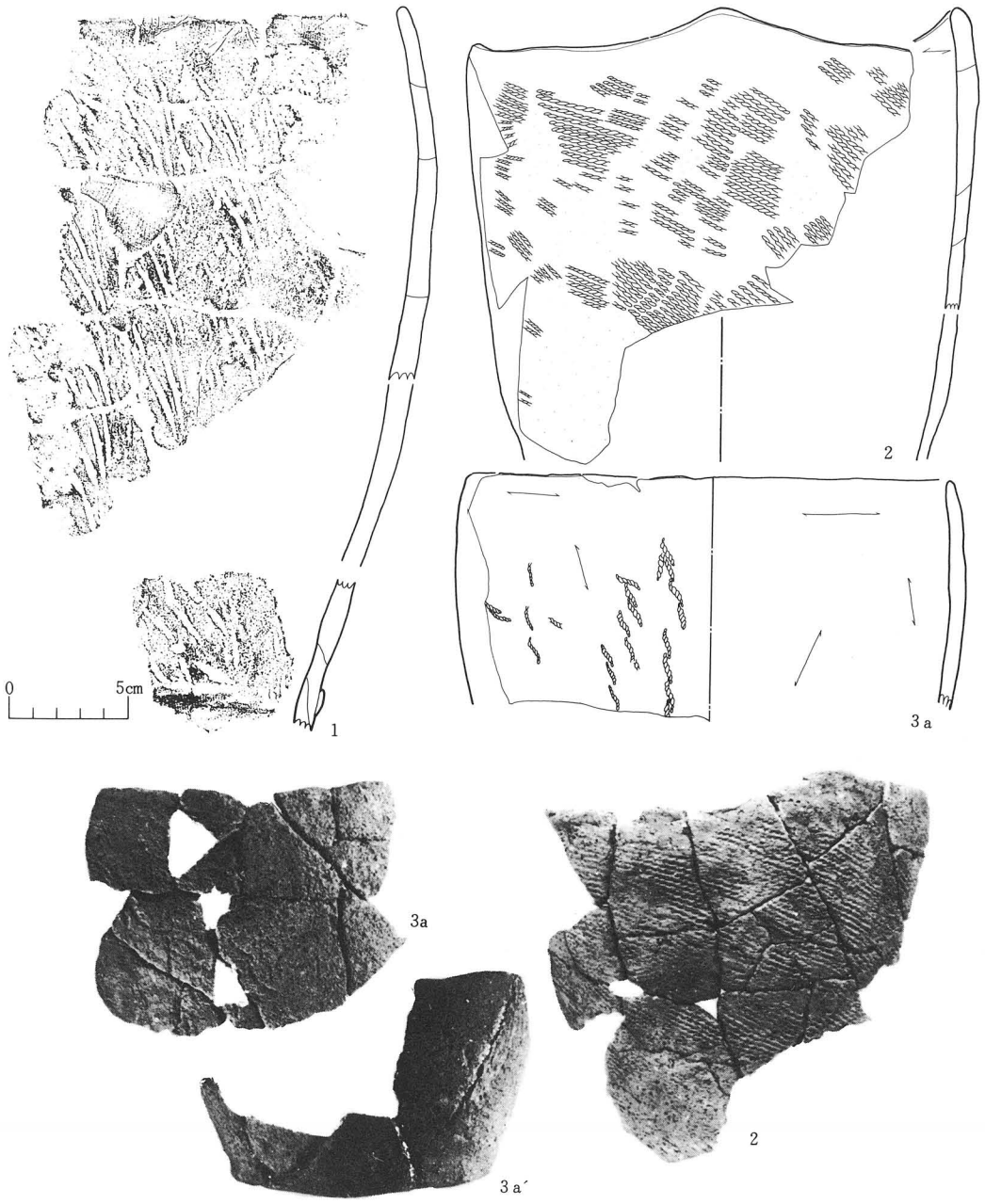


図	地　区	層位	部　位	器　形	施　文・調　整	分類	備　考
1	K－7（a）	Ⅲ	口縁部・体部	深　鉢	下位隆帯→縦位Ｒ撚糸文→研磨（口縁部）	Ⅺ1e	――
2	M－6	Ⅲ	口縁部・体部	深　鉢	横位Ｒ撚糸文→研磨（口縁部）	Ⅺ1e	波状口縁
3	Ⅰ－14（a）	Ⅲ	口縁部・底部	深　鉢	縦位ＲＬ縄文＋綾絡文→研磨（口縁部）ナデ状研磨（体部）	Ⅺ1b	――

第134図　第Ⅺ群土器（2）

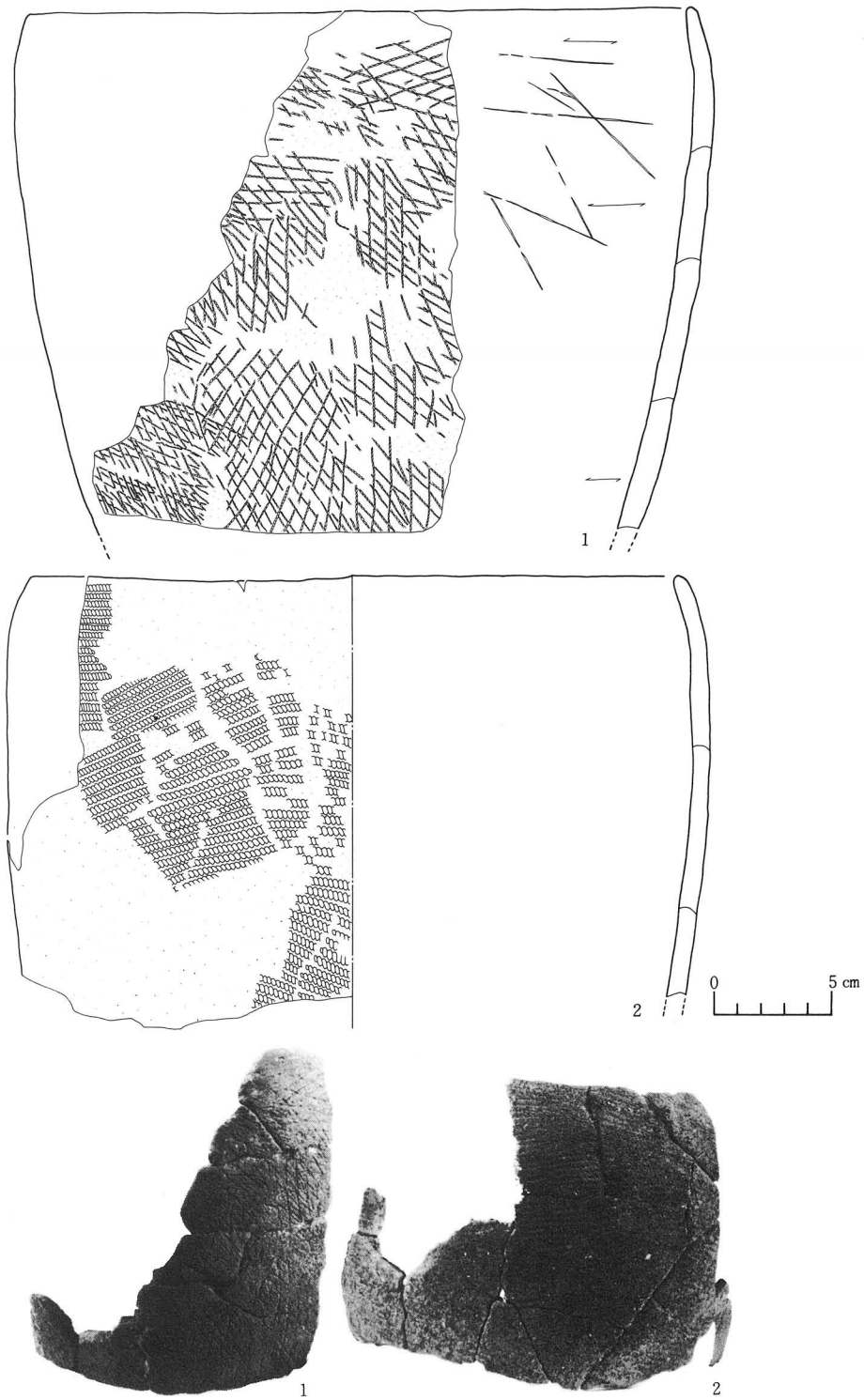
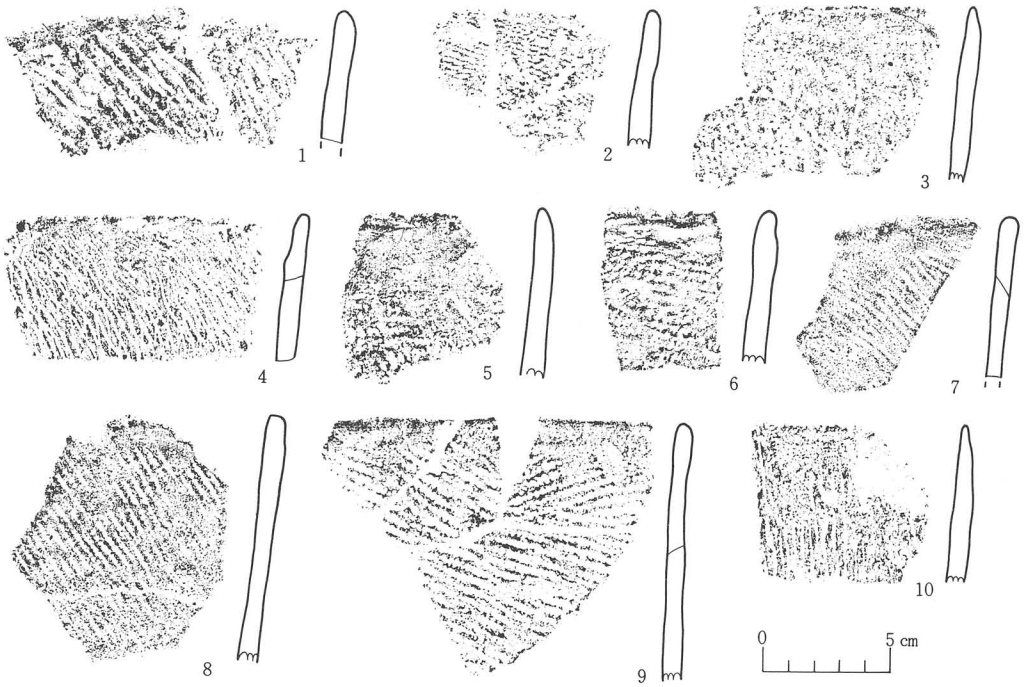


図	地　　区	層位	部　　位	器　形	施　　文　・　調　　整	分類	備　・　考
1	Ｎ－７(ｄ)	Ⅲ	口縁部～体部	深　鉢	縦位・横位Ｒ網目状撚糸文→研磨(口縁部)	Ⅺ1f	――
2	Ｋ－８	Ⅲ	口縁部～体部	深　鉢	横位ＲＬ縄文	Ⅺ1a	――

第135図　第Ⅺ群土器(３)



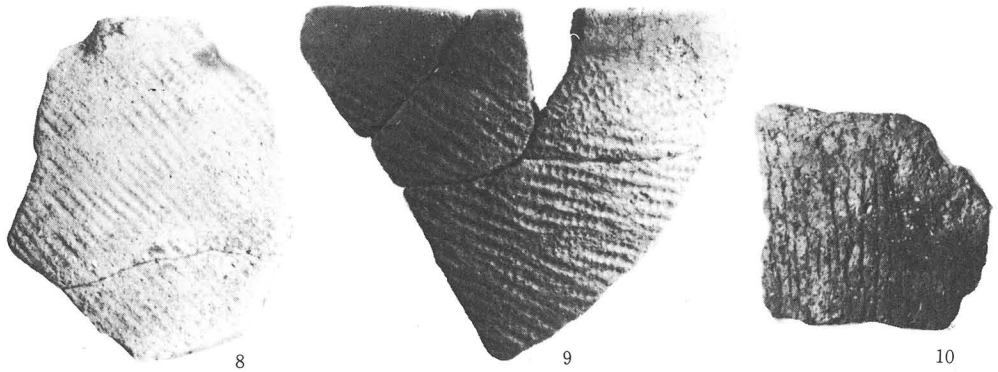


図	地区・遺構	層位	部　位	器形	施　文　・　調　整	分類	備　考
1	K－6(b)	Ⅲ	口縁部	深鉢	縦位Ｒ撚糸文→研磨（口唇部）	Ⅺ2c	——
2	M－6(c)	Ⅲ	口縁部	深鉢	縦位Ｒ撚糸文？→研磨（口唇部）	Ⅺ2c	——
3	K－12	Ⅳb	口縁部	深鉢	網目状撚糸文	Ⅺ2d	磨滅している
4	L－6	Ⅲ	口縁部	深鉢	縦位ｒ撚糸文→研磨（口唇部）	Ⅺ2c	——
5	K－7	Ⅲ	口縁部	深鉢	横位ＬＲ縄文→研磨（口縁部）	Ⅺ2a	——
6	2　住	堆1	口縁部	深鉢	斜位ＬＲ縄文→研磨（口縁部）	Ⅺ2a	——
7	2　住	堆1	口縁部	深鉢	縦位ＬＲ縄文→研磨（口縁部）	Ⅺ2a	——
8	2　住	堆1	口縁部	深鉢	縦位ＬＲ縄文→研磨（口縁部）	Ⅺ2a	——
9	N－7(c)	Ⅲ	口縁部	深鉢	横位・斜位ＬＲ縄文→研磨（口縁部）	Ⅺ2a	——
10	O－7(d)	Ⅱ	口縁部	深鉢	縦位Ｒ撚糸文→研磨（口縁部）	Ⅺ2c	——

第136図　第Ⅺ群土器(4)

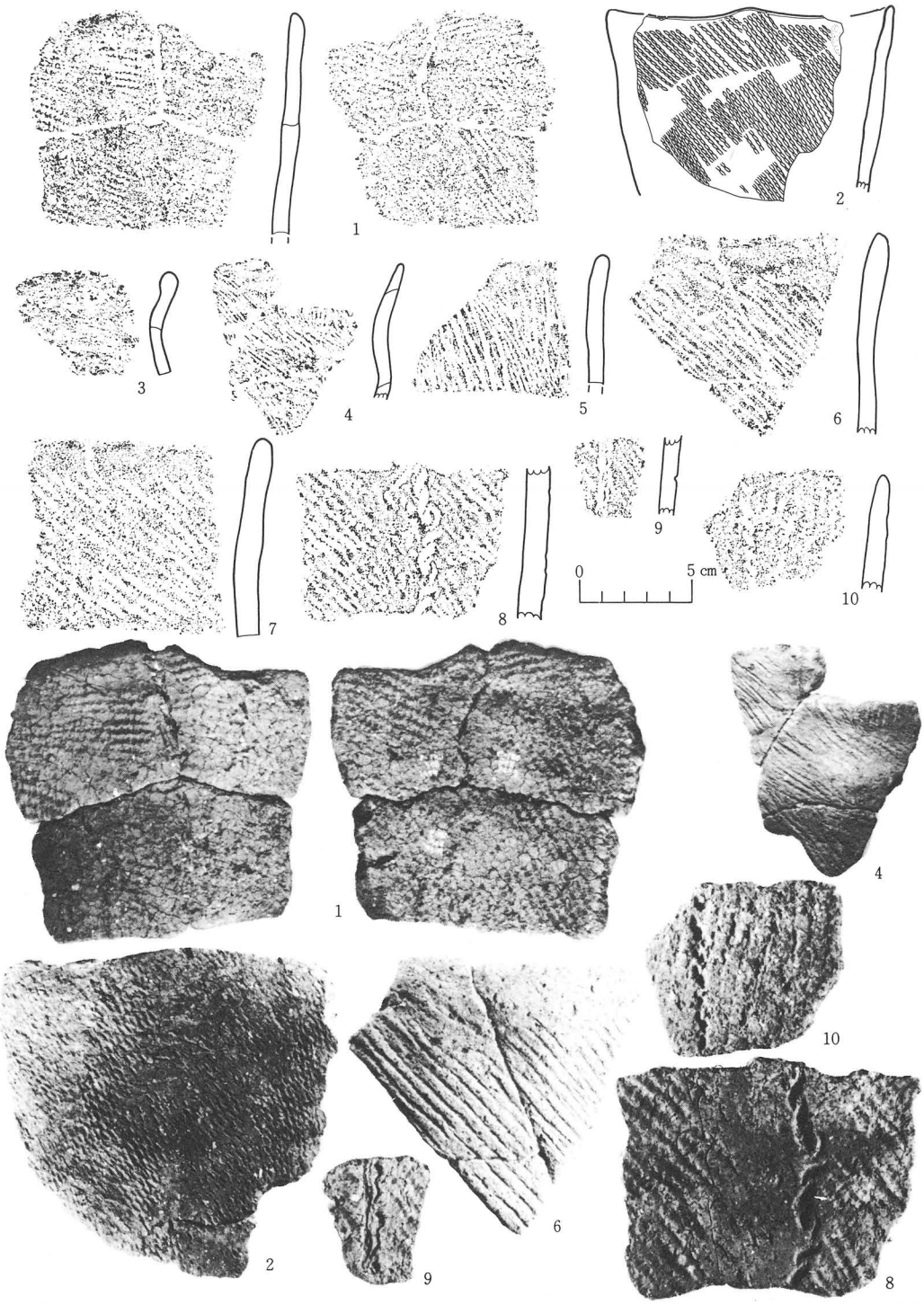


図	地区・遺構	層位	部位	器形	施文・調整	分類	備考
1	10D	堆2	口縁部・体部	深鉢	外面：斜位LR縄文　内面：横位LR縄文（口縁部）・縦位LR縄文（体部）	XI2b	――
2	J－7	II	口縁部～体部	深鉢	縦位R撚糸文→研磨（口脊部）	XI2c	波状口縁
3	K－12(b)	I	口縁部	深鉢	網目状撚糸文？→研磨	XI3	かなり磨滅している
4	3　風	堆	口縁部～体部	鉢	縦位・斜位R撚糸文→研磨（口縁部）	XI3b	研磨は不完全
5	L－7(d)	III	口縁部	深鉢	縦位R撚糸文→研磨（口縁部）	XI3b	研磨は不完全
6	N－7	II	口縁部	深鉢	縦位R撚糸文→研磨（口縁部）	XI3b	――
7	L－7	III	口縁部	深鉢	縦位LR縄文→研磨（口縁部）	XI_a	――
8	I－8	III	体部	深鉢	縦位LR縄文＋綾絡文	XI	――
9	M－6(c)	III	体部	深鉢	縦位LR縄文＋綾絡文（他条で端を縛りとめている）	XI	――
10	N－6(b)	III	口縁部	深鉢	縦位RLR縄文＋綾絡文	XI2e	――

第137図　第XI群土器(5)

第Ⅻ群土器（第138図）

中期から後期に所属するミニチュア土器である。底径４cm以下のものをミニチュア土器として取り扱った。この群に属する可能性はあるが、余りにも細片である為断定が下せないものは当群より除外した。出土数量は７点で、内復元資料１点、底部資料５点、台部資料１点である。出土層位は、表採の台部資料１点を除き、他は全てⅢ層内出土である。遺構内よりの出土は認められなかった。

器形を推し測れるものはほとんどないが、体部が外反する鉢形のものが多いと思われる。これらには、若干ひらき端部に面を持つ低い台が付く場合がある。体部外面は無文研磨されており、内面も調整されているが、底部と体部の接合面付近には指頭圧痕が内外面に明瞭に残る場合もある（底径の小さいものほど明瞭である）（３）。体部の器厚は４mm前後のものが多い。

１は体部が外反する器形で、口縁部を欠失する。体部、底部外面は無文研磨されている。底部端の対角線上には焼成前の刻みが一対入れられている。一方の体部下半には沈線が認められる。刻み内の使用痕については不明瞭で判断が付かない。

これらミニチュア土器は無文の為、所属細時期は不明であるが、当遺跡の群別資料の出土量から推し測れば、第Ⅴ群土器から第Ⅷ群土器の時期に所属する可能性が高い。　　佐藤甲二

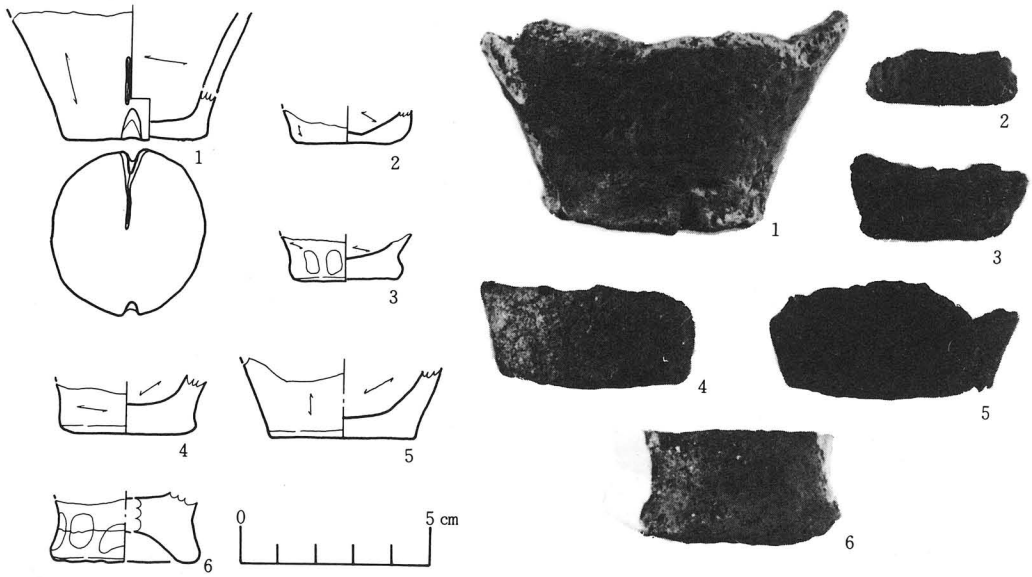


図	地　区	層位	器形	部　位	文様	調整 外面	調整 内面	体部厚 (mm)	底部 外面	底部 内面	底部 径(cm)	分類	備考
1	J－8(a)	Ⅲ	鉢	体部～底部	無文	指頭圧痕、磨き	指頭圧痕、磨き	4～5	無文	平底	3.8	Ⅻ	底部に刻み
2	P－11(c)	Ⅲ	鉢？	体部下半～底部	無文	指頭圧痕、磨き	指頭圧痕、磨き	3～4	無文	丸底	2.8	Ⅻ	—
3	P－9(a)	Ⅲ	鉢？	体部下半～底部	無文	指頭圧痕、磨き	指頭圧痕、磨き	3～4	無文	平底	2.8	Ⅻ	—
4	J－9(d)	Ⅲ	鉢？	体部下半～底部	無文	指頭圧痕、磨き	磨き	5	無文	丸底	3.0	Ⅻ	外面磨滅
5	P－11(d)	Ⅲ	鉢？	体部下半～底部	無文	磨き	磨き	5～6	無文	平底	4.0	Ⅻ	—
6	表　採	—	鉢？	台　部	無文	指頭圧痕、磨き	指頭圧痕、磨き	—	—	平底？	3.5	Ⅻ	—

第138図　第Ⅻ群土器

第XIII群土器（第139～142図）

本土器群は晩期後葉に属する。出土層位は基本層第Ⅰ～Ⅳ層、及び遺構内堆積土である。復元資料7点、口縁部資料63点、体部資料111点、底部資料10点である。うち復元資料、器形のわかる口縁部破片を対象に形態的な特徴により以下のように分類した。

第1類　深鉢形土器

a1類（第54図1、第139図1・2）

無頸であり、口縁部直下（体部上端）に文様帯を有するものである。第54図1は内弯気味の小形深鉢である。口唇部に刻み目と沈線を施文している。体部上端の文様帯には4条の沈線が施文され、中央の2条の沈線の一部を円形に彫去している。口縁部の残存部が少ないため全体の文様構成は不明である。文様の下は撚糸文（R）である。第139図1は体部上端が内弯気味になる。内面に2条の沈線、口唇部に刻み目、体部上端に5条の平行沈線、下位に縄文（LR）が施文される。2は小波状口縁で、体部上端には2条の平行沈線がめぐり、下位の沈線の一部を彫去しているが、小破片のため全体は不明である。

a2類（第60図1）

無頸であり、体部上端に文様帯のないものである。第60図1は体部のふくらむ大形深鉢である。体部には斜行する結節縄文（RL）が施文されている。

b1類（第139図3～6）

有頸で、頸部が無文となるものである。頸部は直立ないし外反する。3・4・6は小波状口縁であるが、3は口唇部に沈線がめぐる。いずれも縄文（LR）が施文される。

b2類（第139図7、第140図1・2）

有頸で、頸部文様帯の上下を沈線で区画しその間が無文帯となる。頸部は直立ないし外反する。7は体部に最大径をもつ。1の口唇部には刻み目が施文される。

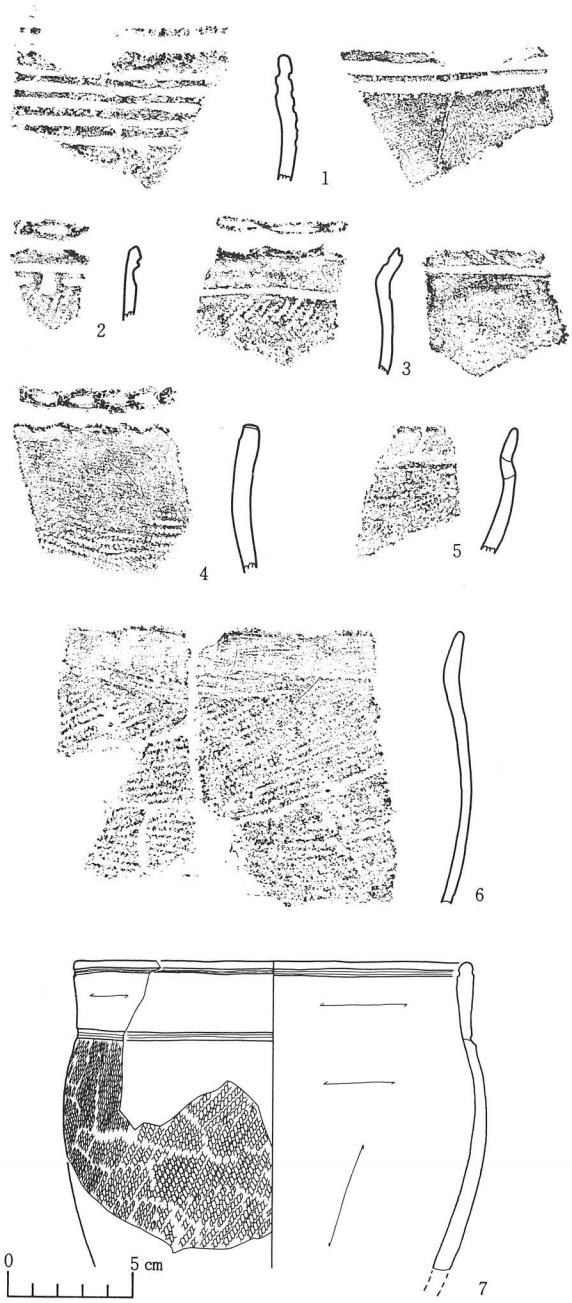
b3類（第63図1）

第63図1は頸部が内傾し体部上端付近に最大径を有する。頸部には5条の平行沈線がめぐる。体部には縄文（L）が施文されている。

第2類　鉢・深鉢形土器

a類（第56図1、第140図3～6）

無頸で体部から口縁部へ直線的ないし外反気味で立上がるものである。第56図1は口縁部まで変化なく立上がる。文様帯の上下を沈線で区画し、3単位の工字状文が施文される。反転する沈線の内部を末広がりの台形状に彫去し、その直下の沈線の一部も逆台形状に彫去している。さらに各単位の間隙を左下りの2条の沈線で充填している。第140図3にも工字状文が施文されているが全体の文様構成は不明である。4～6は2～5条の沈線がめぐっている。



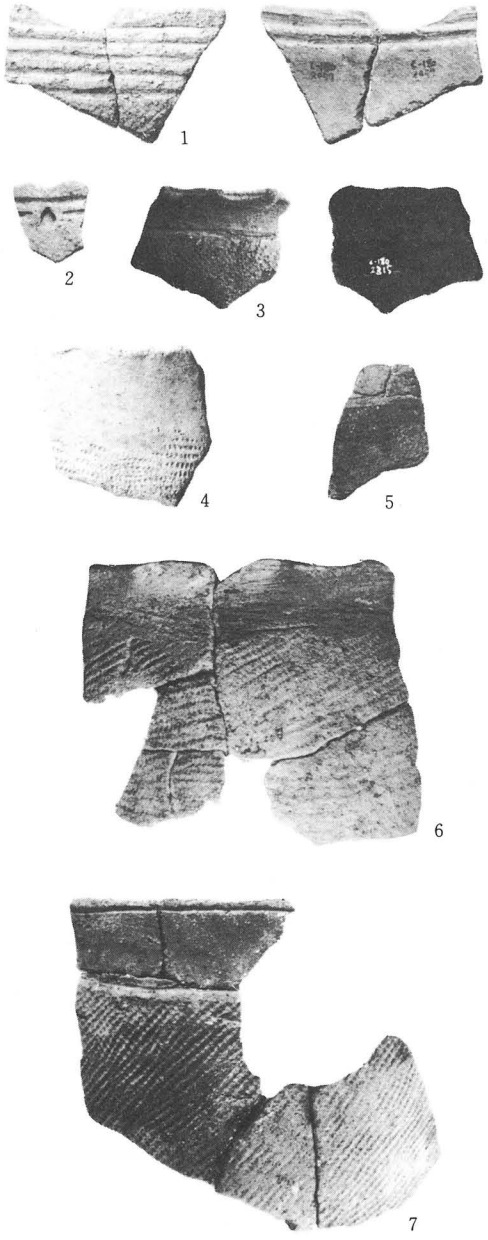


図	地　区	層位	施　文　・　調　整	胎　土	分類	備　考
1	M－13(a)	Ⅲ	内面沈線2条、口唇部刻み目、外面沈線4条、体部横位ＬＲ縄文	砂粒多	Ⅻ1a1	――
2	K－13(a)	Ⅰ	小波状口縁、体部上端工字状文、体部横位ＬＲ縄文	砂粒多	Ⅻ1a1	――
3	Q－12(d)	Ⅰ	小波状口縁、口唇部沈線、頸部研磨＋1条沈線、体部横位LR縄文	砂粒多	Ⅻ1b1	内面炭化物付着
4	K－13(d)	Ⅳb上	小波状口縁、頸部研磨、体部斜位ＬＲ縄文	砂粒多	Ⅻ1b1	――
5	K－13	Ⅳb	頸部研磨、体部横位ＬＲ縄文	砂粒多	Ⅻ1b1	外面炭化物付着
6	K－13	Ⅳb	小波状口縁、頸部削り、体部横位斜位ＬＲ縄文	砂粒多	Ⅻ1b1	――
7	K－13(d)	Ⅱ	内面沈線1条、頸部区画沈線2条、沈線間研磨、体部横位ＬＲ縄文	砂粒多	Ⅻ1b2	内外面炭化物付着　焼成良

第139図　第Ⅻ群土器（1）

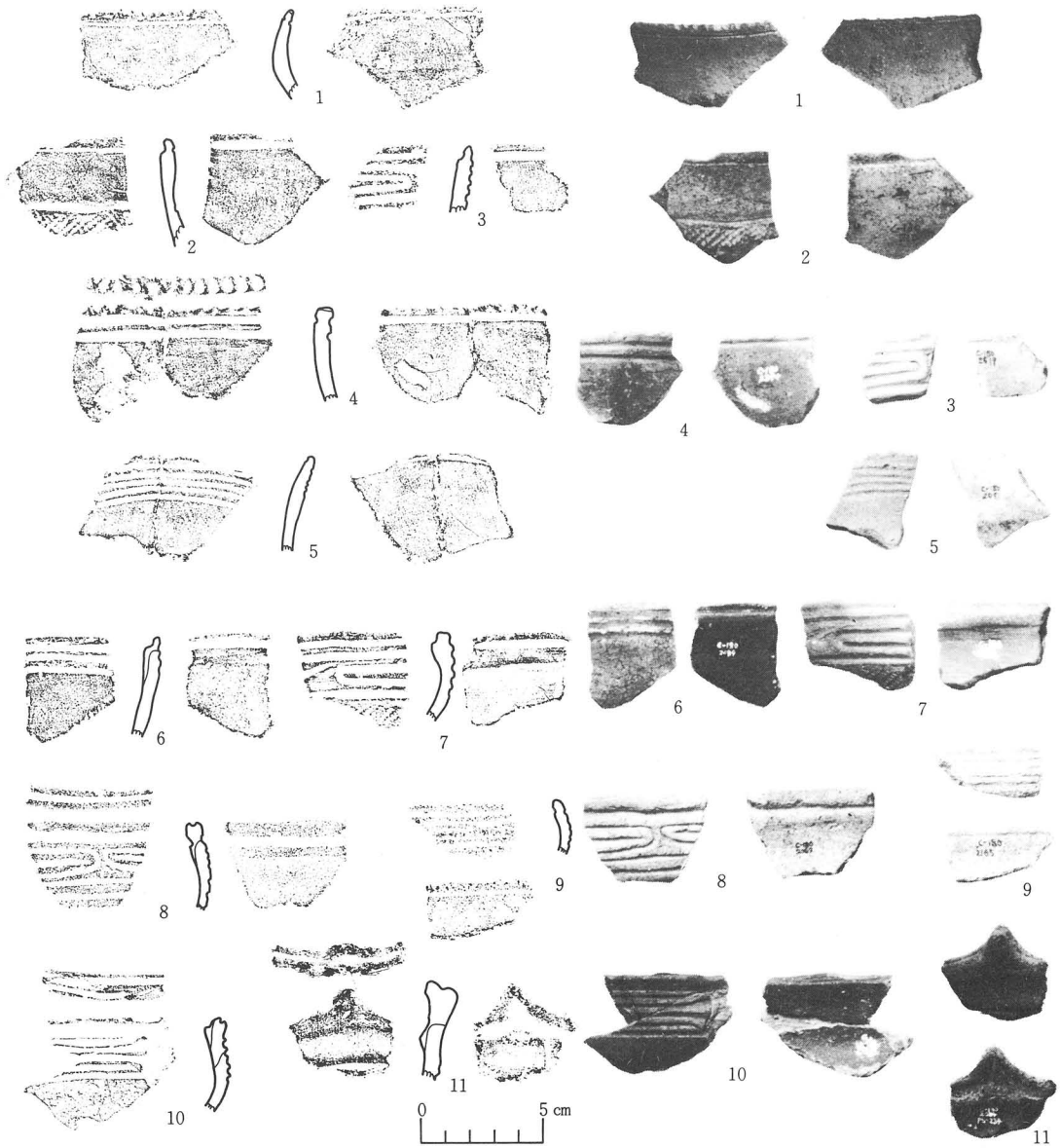


図	地区・遺構	層位	施文・調整	胎土	分類	備考
1	K－13(a)	Ⅳb上	内面沈線1条、口唇部刻み目、頸部区画沈線2条、沈線間研磨	砂粒多	XⅢ1b2	——
2	K－13(a)	Ⅳa	内面沈線1条、頸部区画沈線2条、沈線間研磨、体部横位LR縄文	砂粒多	XⅢ1b2	——
3	K－13(d)	Ⅳb上	内面沈線1条、体部上端工字状文	砂粒少	XⅢ2a	——
4	2　住	堆1	内面沈線1条、口唇部刻み目、体部上半沈線2条	砂粒やや少	XⅢ2a	内外面赤色顔料
5	K－13(d)	Ⅳa	内面沈線1条、体部上半平行沈線5条	砂粒少	XⅢ2a	——
6	J－13(d)	Ⅱ	内面沈線1条、体部上半平行沈線3条	砂粒多	XⅢ2a	——
7	I－14(a)	Ⅲ	内面沈線1条、頸部区画沈線3条、工字状文、体部横位LR縄文	砂粒少	XⅢ2b1	——
8	K－13(a)	Ⅰ	内面沈線1条、頸部区画沈線3条、工字状文	砂粒多	XⅢ2b1	——
9	K－13(d)	Ⅱ	内面沈線1条、頸部区画沈線2条、工字状文	砂粒多	XⅢ2b1	——
10	K－13(c)	Ⅰ	内面沈線1条、口唇部沈線＋B状突起、工字状文	砂粒少	XⅢ2b1	——
11	M－13	Ⅲ	内面沈線1条、口唇部沈線＋突起	砂粒多	XⅢ2b1	——

第140図　第XⅢ群土器（2）

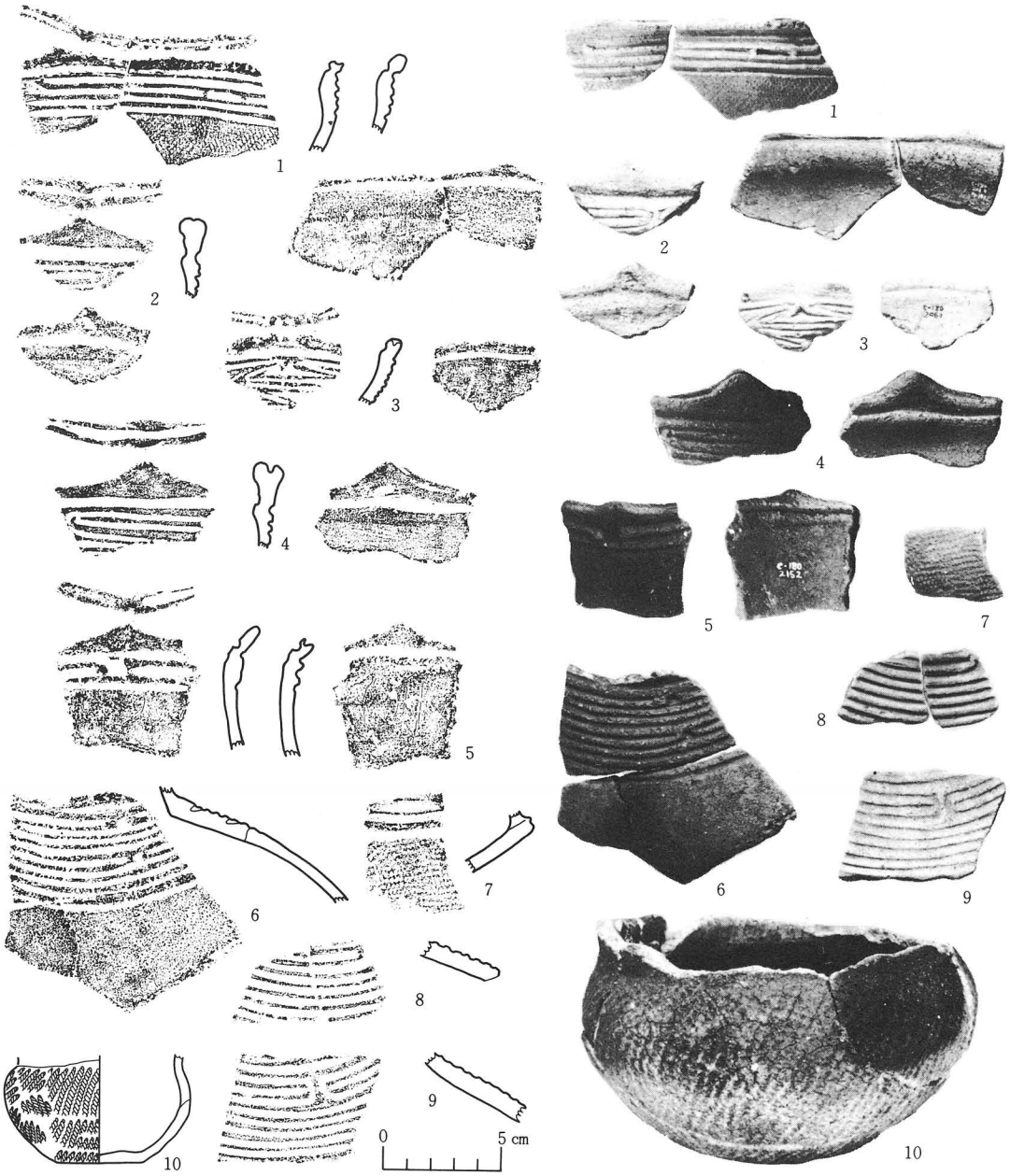


図	地　区	層位	施文・調整	胎土	分類	備考
1	M－13(b)	Ⅲ	内面沈線1条、口唇部沈線＋突起、頸部区画沈線、工字状文、体部横位ＬＲ縄文	砂粒多	XⅢ2b1	――
2	K－13	表採	内面沈線１条、口唇部沈線＋突起、工字状文	砂粒多	XⅢ2b1	――
3	M－13(d)	Ⅳb	内面沈線１条、口唇部沈線＋Ｂ状突起、頸部区画沈線、工字状文	砂粒多	XⅢ2b1	――
4	K－13(d)	Ⅱ	内面沈線１条、口唇部沈線＋突起、頸部区画沈線、工字状文	砂粒多	XⅢ2b1	――
5	K－13(a)	Ⅳb上	内面沈線１条、口唇部沈線＋突起、頸部上端工字状文	砂粒多	XⅢ3	――
6	K－12(b)	Ⅰb	体部上半工字状文	砂粒多	XⅢ3	――
7	K－13(c)	Ⅳa	肩部沈線２条、体部斜位ＬＲ縄文	砂粒少	XⅢ2b2	――
8	K－12(b)	Ⅳa	体部上半工字状文	緻密	XⅢ3	白色針状物質を含む
9	K－13(d)	Ⅳa	体部上半工字状文	砂粒少	XⅢ3	――
10	J－13(d)	Ⅳb上	体部横位ＬＲ縄文	砂粒少	XⅢ3	――

第141図　第Ⅻ群土器(３)

b 1 類(第140図 7 ～11、第141図 1 ～ 4)

7 ～10は頸部が内弯するものである。内面には沈線が施文される。いずれも文様帯の上下を沈線で区画している。7は長楕円文と斜沈線が施文される。8は1条の沈線を含む長楕円文が施文される。9は平行沈線の一部が下方へ彫去され、10は平行沈線の一部を上下逆向きで台形状に彫去している。

11、1 ～ 4は突起を有し頸部が外傾するものである。内面と口唇部に沈線がめぐる。1 ～ 4は文様帯の上下を沈線で区画している。1は平行沈線の一部を台形状に彫去している。2・4は1条の沈線を含む長楕円文が施文される。3は反転する沈線の内部が三叉状に彫去されている。これらはいずれも小破片であり全体の文様構成は不明である。

b 2 類(第141図 7)

7は頸部が幅広く、くびれ部を有する鉢形土器の体部破片と考えられる。

第 3 類　壺形土器(第55図 1 、第141図 5 ・ 6 ・ 8 ～10)

第55図 1 は無文の壺である。底径が大きく体部はほぼ球形で頸部は直立する。体部中央の対称位置に穿孔箇所がある。5は沈線の一部を台形状に彫去している。6・8・9は肩部片で、8・9は平行沈線の一部を台形に彫去している。9は1条の沈線を含む長楕円文が施文されている。10は小形の壺で体部には縄文(ＬＲ)を施文している。

底部(第142図 1 ～ 3)

底部の形態は、平底・台付・脚付の三種ある。1は平底で網代痕がみられる。3は台部で下端に1条の沈線がめぐる。2は脚部で縦位の沈線が施文されている。

本土器群の特徴を文様から挙げれば2種類の工字状文――①平行沈線を台形状に彫去するもの(兀字文)②1条の沈線を含む長楕円文――が存在するという点である。これらの工字状文を含む土器群の類例は、宮城県内では山王遺跡[註1)]、巻掘遺跡[註2)]、鱸沼遺跡[註3)]、梁瀬浦遺跡[註4)]、鹿野遺跡[註5)]、宮沢遺跡[註6)]などにある。これらの土器群は大洞A式あるいはA′式に比定されている。しかし本土器群を両型式のどちらかに比定するには資料に質的・量的限界がある。従ってここでは晩期後葉の土器群と捉えるに留めておく。

吉　岡　恭　平

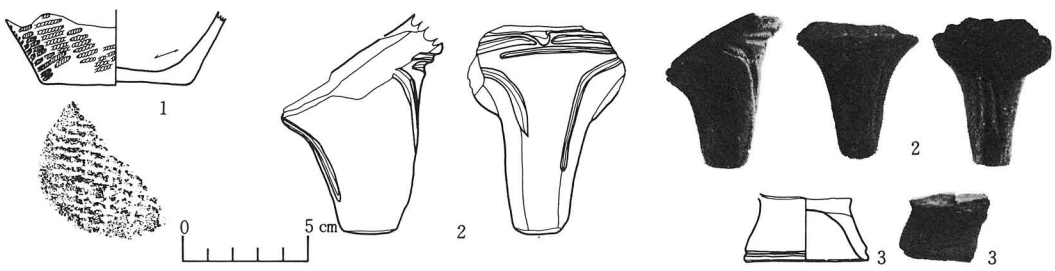


図	地　区	層位	施　文　・　調　整	部位	分類	図	地　区	層位	施　文　・　調　整	部位	分類
1	K-12(b)	Ⅰb	体部斜位ＬＲ縄文、底面網代痕	底部	XIII	3	M－15(d)	Ⅲ	台部下端沈線1条	台部	XIII
2	J-13(d)	Ⅳa	脚部上端工字状文＋縦位沈線	脚部	XIII						

第142図　第XIII群土器(4)

註

1．須藤　　隆　「土器組成論」『考古学研究』1973

2．一迫町教育委員会　「巻掘遺跡」1977

3．志間　泰治「鰡沼遺跡」『東北電力株式会社宮城支社』1971

4．角田市教育委員会「梁瀬浦遺跡」1976

5．芳賀　寿幸「船迫ニュータウン地内遺跡調査報告一鹿野遺跡」1976

6．宮城県教育委員会「東北自動車道遺跡調査報告Ⅲ－宮沢遺跡」『宮城県文化財調査報告書第69集』1980

（2）　土　製　品

土製円盤（第143、144、145図１～６）

土製円盤は105点出土している。Ⅰ層からⅣb層の基本層位から84点、遺構内より14点、風倒木痕より７点出土している（第10表）。基本層位の中ではⅢ層から最も多く出土している。

完形品94点、破損品は11点ある。中央に穿孔のある土製円盤や周辺部に抉りの入ったものは出土していない。土器の口縁部を利用したものが２点、底部を利用したものが３点（ミニチュア土器の底部を利用したと思われるもの１点含む）、輪積痕を利用したものが4点ある。その他は土器の体部を利用している。

完形品の94点について、大きさ、重量、形態、加工について分類した。

１）大きさ

小型…長径と短径がそれぞれ３cm未満のものとした。…12点

中型…長径と短径がそれぞれ３cm以上５cm未満のものとした。…69点

大型…長径か短径のいずれかが５cm以上のものとした。…13点

土製円盤の大きさは、最小が長径23mm、短径21mmで、最大が長径68mm、短径64mmである。中型が最も多く73.4％を占める。

２）重量（第11表）

５gごとに分類した。最も軽いものが4.1g、最も重いものが51.4gであった。５g以上20g未満の間に集中している。特に10g以上15g未満のものが多い。

３）形態（第12表）

おおよそ円形、楕円形、方形（隅丸方形）、不定形に分類した。

円形…41点、楕円形…15点、方形…10点、不定形…28点

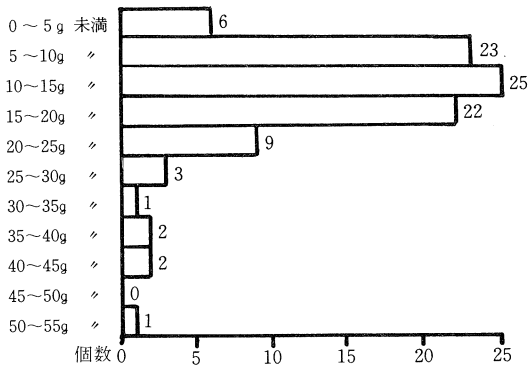
円形が最も多く43.6％で、次いで不定形29.8％である。

４）加工（第13表）

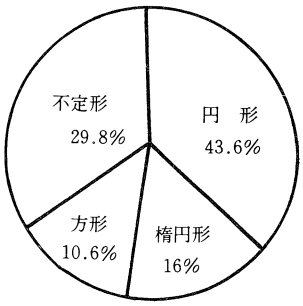
第10表　出土層位と遺構内出土の土製円盤

Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳａ層	Ⅳｂ層	2住	31P	19D	20D	35D	1号風	3号風	5号風
9	2	60	3	10	1	1	2	6	4	3	1	3

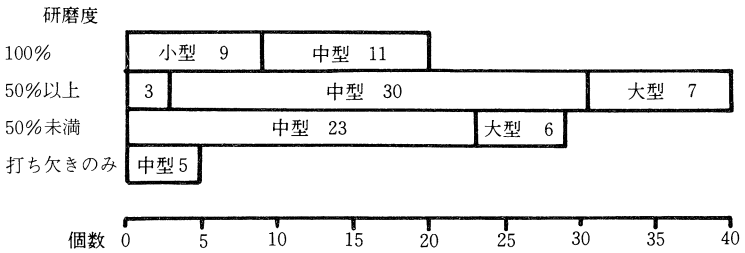
第11表　土製円盤の重量分布



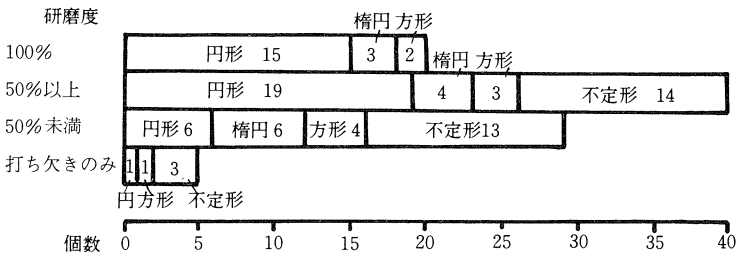
第12表　形態分類



第13表　土製円盤の加工度と大きさ



第14表　土製円盤の加工度と形態



a）土器片から土製円盤に加工する際に周辺部を打ち欠いた回数

回数	4	5	6	7	8	9	10	11	不明
個数	1	3	16	29	15	9	9	4	8

b）打ち欠いた後に周辺部を研磨している割合

周辺部が全部研磨されたもの[註1)]…20点

周辺部が50％以上研磨されたもの…40点

周辺部が50％未満の研磨のもの…29点

周辺部が打ち欠きのみのもの…５点

50％以上研磨の土製円盤が42％、50％未満のものが31％、全周研磨のものが21％、打ち欠きのみのものが６％を占める。全周研磨の土製円盤を含めると50％以上の研磨度の高いものが多い。また、大きさや形態と研磨度についてみると、全周研磨の土製円盤は小型と中型だけで、形態は円形が多く不定形はない。50％以上の研磨のものは中型が多く、形態では円形と不定形が多い。50％未満のものは中型と大型だけで、不定形が多い。（第14表）

周辺部の加工度が高い場合、すなわち研磨度が大きいほど、円形、楕円形と形が整い、小型中型と形が小さくなる。これに対して、加工度の低い場合は不定形が多く形も不ぞろいのままで小型のものはない。

５）土製円盤の所属時期について

一般に土製円盤は縄文時代全般にわたって出土している。当遺跡のものは出土況状より時期が断定できるものはない。しかし、施文より時期の判明できるものは中期後葉が２点、後期初頭が７点だけであった。当遺跡の出土遺物は後期初頭が最も多く、中期後葉がこれに次ぐ。この点より時期不明の土製円盤の多くは、中期後葉、後期初頭の時期に所属するものと思われる。

土錘（第145図７）

土錘はＫ－12(b)グリッドのⅣa層から１点出土している。長径4.7cm、短径1.9cmで厚さ1.3cm、重量が25.3gである。幅２mmの溝が長軸方向に一周した上に短軸方向に一周している。

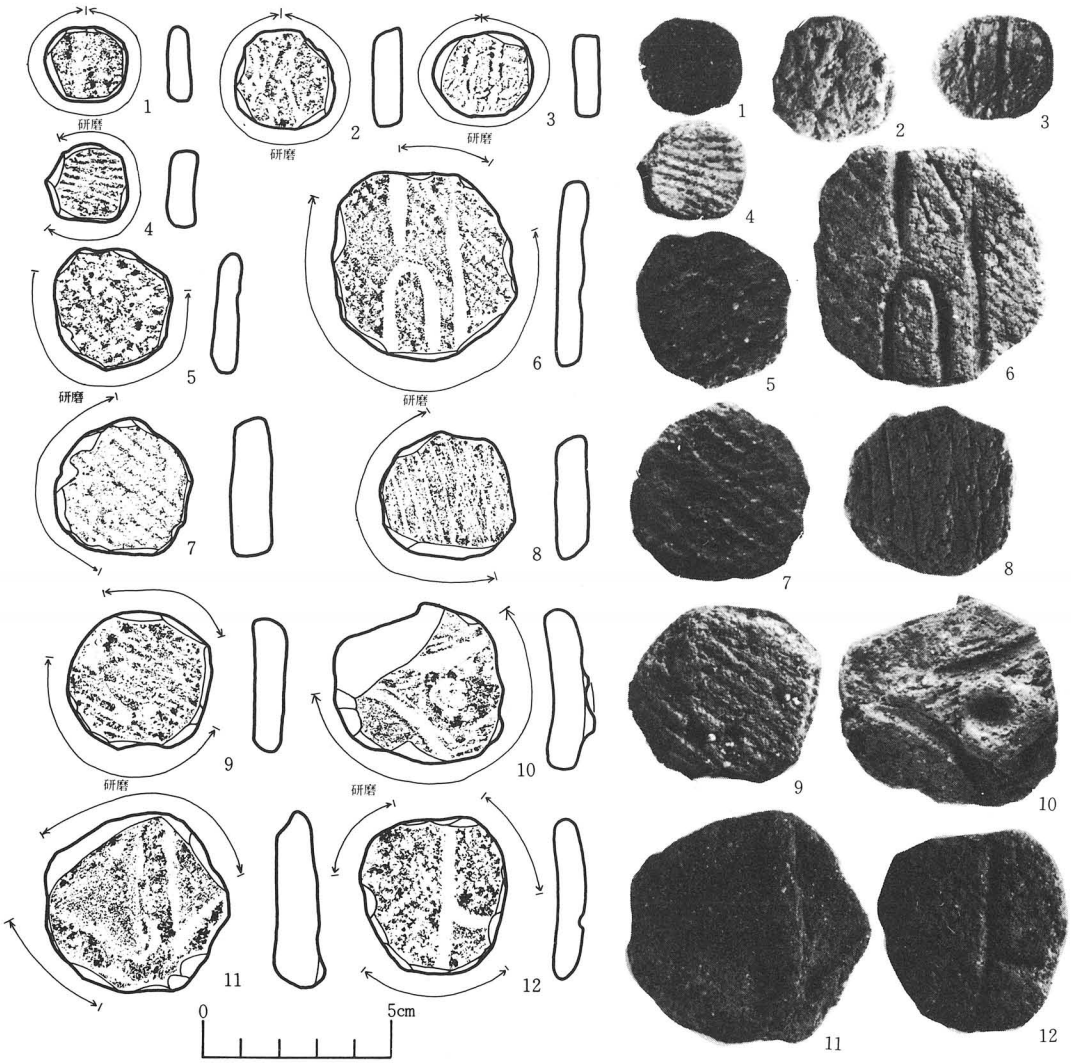
渡辺誠氏の分類[註1)]によれば「第１種Ｃ類」に相当し、時期は「縄文後期中葉から晩期」にわたり、分布は「関東・東北地方と北陸地方」に分布すると言う。当遺跡の後期中葉以後の出土遺物では晩期が圧倒的に多いという点より、この土錘は晩期の時期に所属する考算が高い。

佐藤美智・佐藤幸子

註

１．この中には周辺部の一部が剝落したものがあるが、縁辺部の観察により明らかに100％研磨と認められたものがある。なお、実測図中の研磨範囲は残存周辺部の研磨範囲を記している。

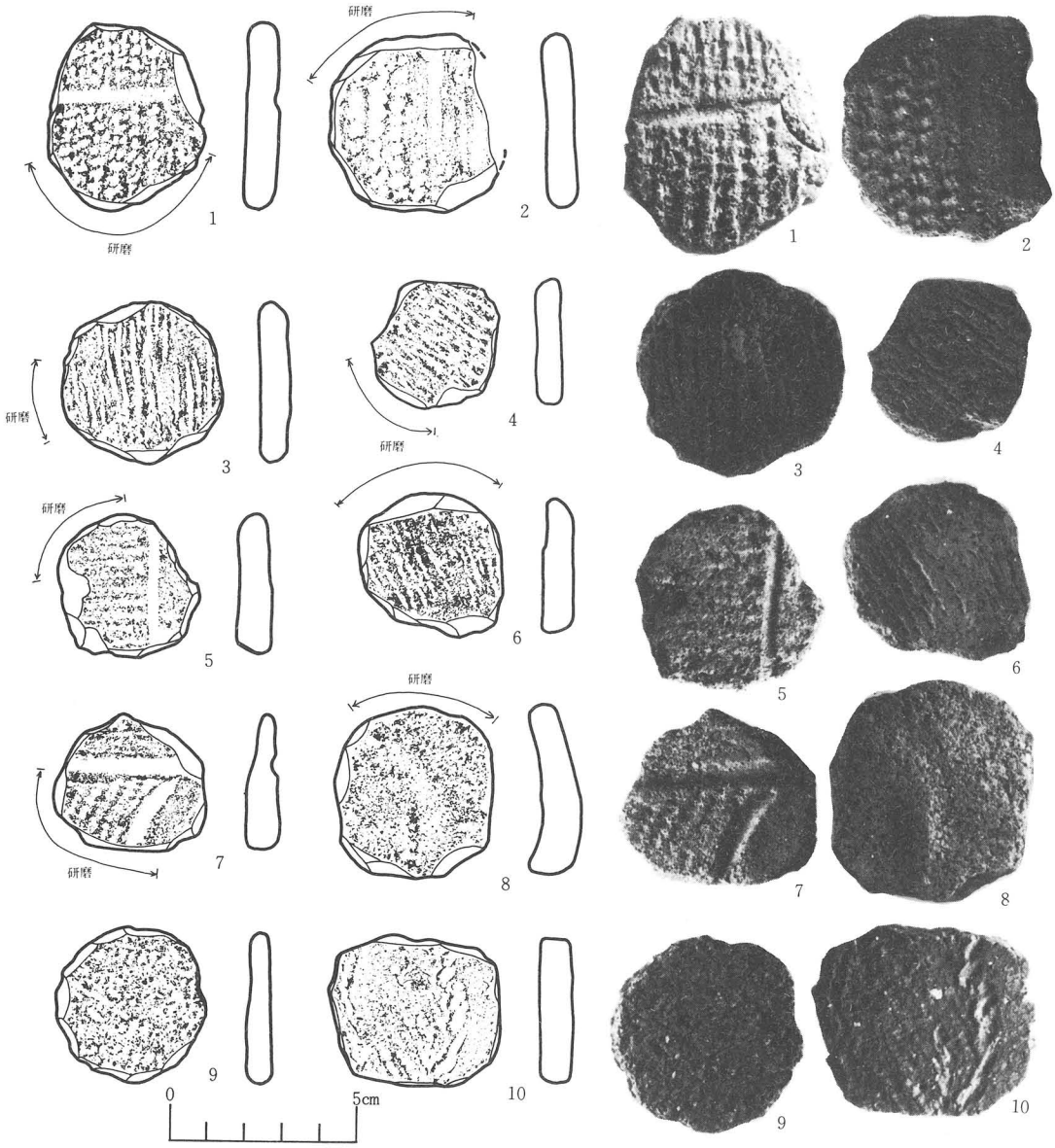
２．渡辺　誠「縄文時代の漁業」『考古学選書』　雄山閣　1973　Ｐ.36～Ｐ.47



観　察　表

図	地　区	層位	大　き　さ　mm		厚さmm	重量g	形　態	打欠回数	研磨率	部位	時　期
1	J－13(d)	Ⅳb	小型	26×24	6	2.9	円　形	—	100%	体部	——
2	K－13(b)	Ⅰb	小型	26×26	8	5.3	円　形	7	100%	体部	——
3	M－13	Ⅲ	小型	24×20	6	3.7	楕円形	—	100%	体部	——
4	N－7(b)	Ⅲ	小型	23×21	7	3.5	方　形	8	50%以上	体部	——
5	K－12(b)	Ⅳa	中型	33×21	8	6.9	円　形	8	50%以上	体部	——
6	K－7(a)	Ⅲ	中型	49×48	7	21.1	円　形	9	100%	体部	後期初頭
7	K－12(b)	Ⅳb	中型	37×37	10	6.4	円　形	8	50%以上	体部	——
8	K－12(b)	Ⅳa	中型	34×33	6	11.7	円　形	8	50%以上	体部	——
9	L－7(d)	Ⅲ	中型	49×48	8	19.9	楕円形	7	50%以上	体部	——
10	O－7(b)	Ⅲ	中型	45×42	9	19.8	不定形	7	50%以上	体部	後期初頭
11	O－7(b)	Ⅳb	大型	51×48	11	28.8	円　形	6	50%以上	体部	中期後葉
12	L－7(a)	Ⅲ	中型	39×36	8	16.1	楕円形	7	50%以上	体部	後期初頭

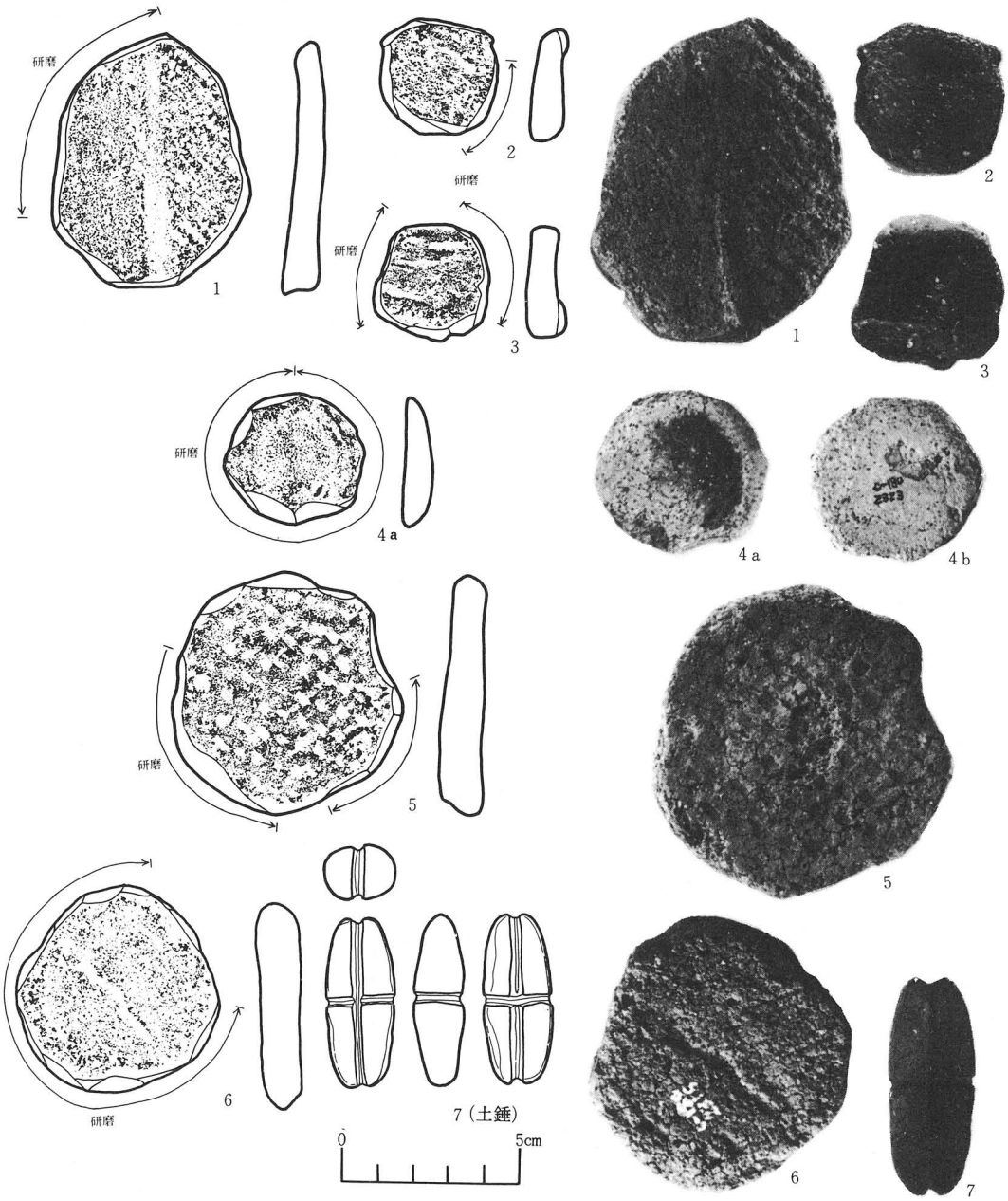
第143図　土製円盤(1)



観 察 表

図	地 区	層位	大きさ mm		厚さmm	重量g	形 態	打欠回数	研 磨 率	部位	時 期
1	K－7(d)	Ⅲ	大型	51×42	9	22.1	楕円形	9	50%未満	体部	——
2	O－7(d)	Ⅲ	大型	51×－	8	21.8	円 形	—	—	体部	——
3	L－7(b)	Ⅲ	中型	44×43	8	18.1	円 形	8	50%未満	体部	——
4	K－7(b)	Ⅲ	中型	36×34	7	10.1	不定形	7	50%未満	体部	——
5	L－7(d)	Ⅲ	中型	39×34	8	15.3	楕円形	7	50%未満	体部	——
6	K－7(d)	Ⅲ	中型	41×38	9	15.3	不定形	7	50%未満	体部	——
7	J－7(c)	Ⅲ	中型	41×36	9	14.7	楕円形	8	50%未満	体部	後期初頭
8	L－7(a)	Ⅲ	中型	46×42	10	25.5	方 形	8	50%未満	体部	——
9	K－13(d)	Ⅳa	中型	42×41	6	13.3	円 形	10	打ち欠きのみ	体部	——
10	N－7	Ⅲ	中型	46×40	8	20.2	方 形	11	打ち欠きのみ	体部	——

第144図　土製円盤(2)



観察表

図	地　区	層位	大　き　さ mm	厚さmm	重量g	形　態	打欠回数	研磨率	部　位	時　　期
1	K－6(b)	Ⅲ	大型	63×55	8	38	楕円形	8	50%以上	体　部	——
2	K－12(b)	Ⅳb	中型	32×31	9	11	円　形	6	50%未満	体　部	——
3	L－6(b)	Ⅲ	中型	31×30	9	11.1	方　形	6	50%以上	口縁部	——
4	K－13(a)	Ⅳb	中型	39×36	8	9.4	円　形	—	100%	底　部	——
5	K－8(b)	Ⅰ	大型	68×64	10	51.4	円　形	7	50%以上	底　部	——
6	Q－12(d)	Ⅰ	大型	55×54	12	44.3	円　形	8	50%以上	底　部	——

第145図　土製円盤（3）・土錘

（3）　石　　器

Ⅰ．石器の出土数量および出土状況

石器の出土数量は、第15表に示した。全出土点数は4169点で、そのうちⅠ～Ⅳｂ層出土石器は全体の72％、遺構及び遺構堆積土が20％、風倒木痕が３％を占める。また、石器のうち打製・磨製石器は1231点（剥片・チップ・石核は2783点）、礫石器は153点、石製品・砥石各１点である。

第146図は、Ⅰ～Ⅳb層出土の石鏃・石錐・「スクレイパー」・「二次加工がある石器（Ｓ・Ｆ）」「微細な剥離痕がある石器（Ｍ・Ｆ）」・石斧・礫石器・剥片・チップ・石核に限定し、各グリッド内の出土状況を示したものである。この図では、特にＫ－13グリッドを中心とした地区がほぼ前記の石器全てにわたって出土点数が最も多く、次いでＫ－７グリッド・Ｍ－13グリッド・Ｋ－８グリッド・Ｊ－８グリッド・Ｌ－７グリッド・Ｐ－11グリッドが各石器の出土割合に差異は有りながら、量的には他の区に比べ多い。以上の出土状況は住居跡・土壙・ピット等の遺構の分布状況と符合している。本遺跡は風倒木痕の存在、援傾斜という地形、後世の耕作等による遺物包含層の攪乱等が予想されたが、以上の石器の出土状況は、遺構と遺物の関係が不充分ながらも保持された状態で保存されていたことを示している。

Ⅱ．出土石器

１．打製石器

(1)　石鏃（第154図２～８・12、179図１～３）

232点出土しているが、形態分類が不可能なほど著しく破損しているものが33点ある。ここでは残りの199点を分析の対象としたが、これらの中で定形品は125点、他は破損品のうち基部の片側もしくは両側が破損しているものが45点で全体の22.9％を占める。

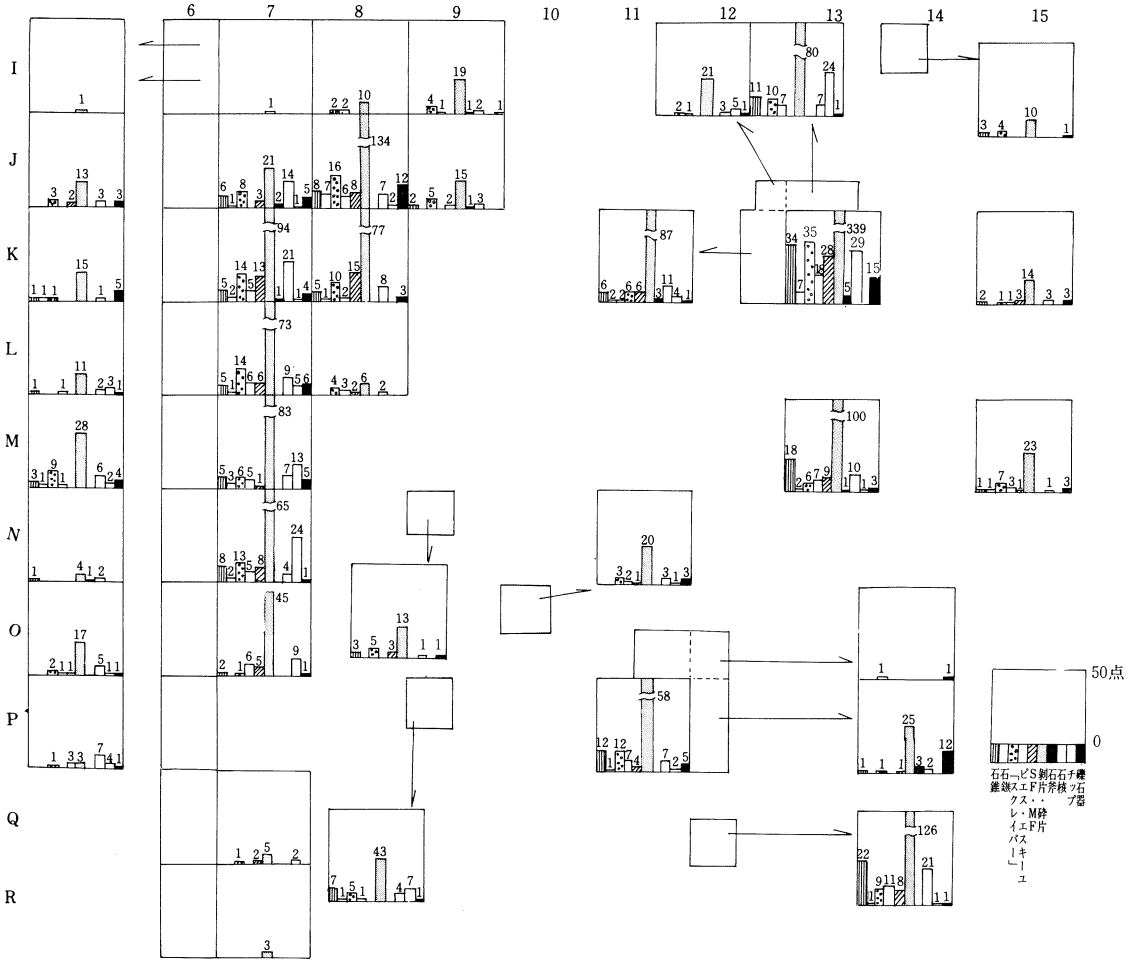
第147図の左図は、第1表（19頁）を図化したものであり、右図は各細分型式の数量を示したものである。この図から、本遺跡においては種々の型式が出土している中で、特に*w*類が138点と全体の69.3％を占め、圧倒的に多く出土していることが理解できる。さらに第148図は、石鏃とポイントの長幅関係と、それに類型を付加したものであるが、Ａのまとまりが石鏃である。石鏃は長さ43㎜前後に分布するものもあるが、幅８～22㎜、長さ10～30㎜の範囲に集中する。Ⅰ～Ⅴ類(○)はこの範囲にまばらに分布し、*w*類のうちⅧ類(▲)は幅８～15㎜の範囲に、Ⅸ類(●)は幅10～18㎜、長さ10～25㎜、Ⅶ類(○)は幅12～18㎜、長さ17～28㎜、Ⅵ類(◆)はしいて言えば幅13㎜、長さ18㎜の位置に集中する傾向がある。他にアメリカ型石鏃が１点（第91図７　152頁）、先端部が丸味をおびているものが２点出土している。

尚、アスファルト（？）が基部に付着しているものが18点ある。

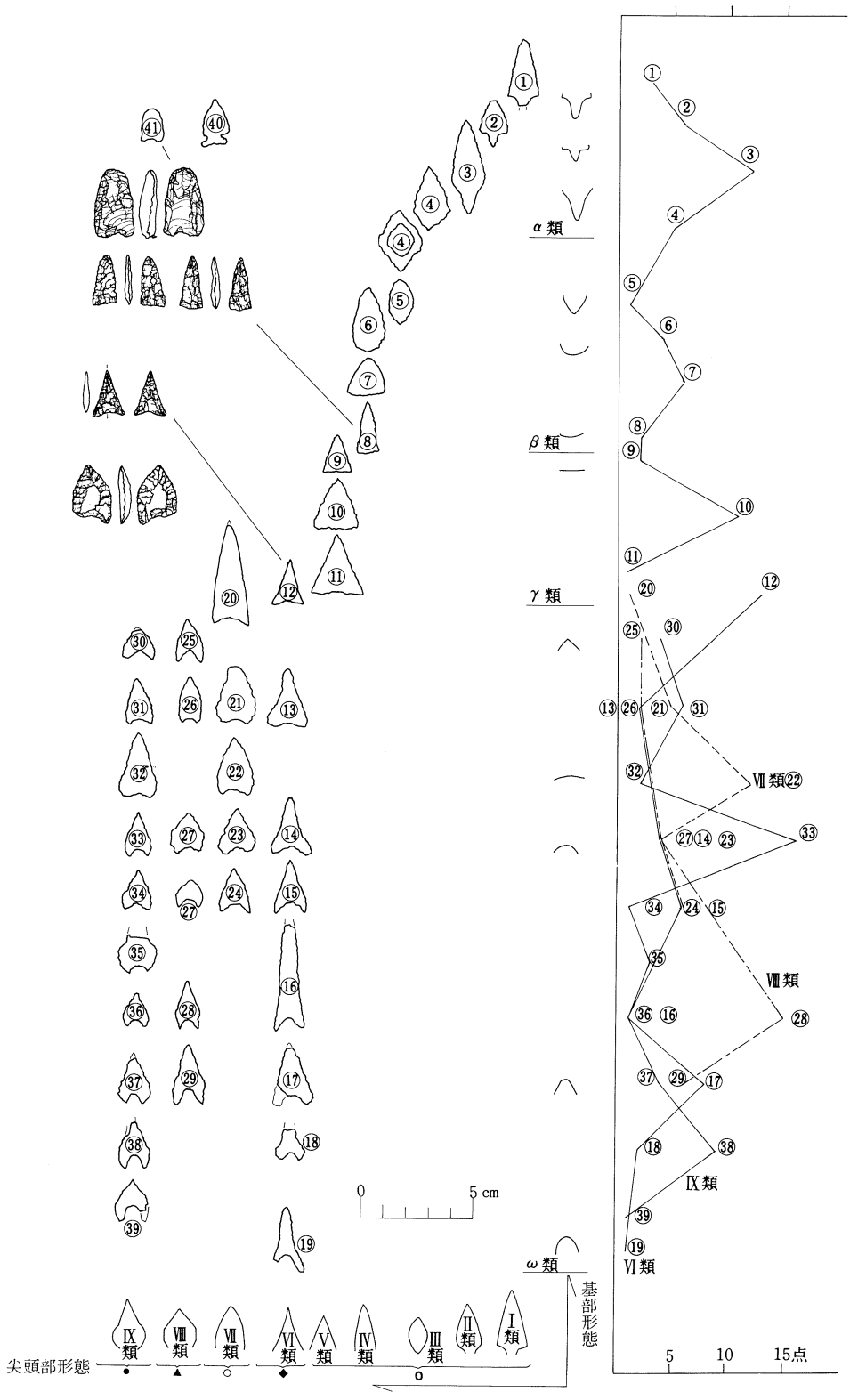
出土遺構・層 ＼ 石器の名称	石鏃	石錐	石匙	ポイント	篦状石器	ピエス・エスキーユ	スクレイパー 「不定形石器」	切断再調石器	S・F	M・F	「スクレイパー」	剥片	チップ	石核	石斧	礫石器	合計
Ⅰ～Ⅳb層	172	41	18	26	7	108	125	9	110	29	221	1698	115	201	17	112	3009
Ⅳc 層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	3
遺構 遺構堆積土	29	7	4	5	3	30	26	0	39	9	35	389	202	18	4	26	826
風倒木痕	6	4	1	3	0	7	1	1	15	0	23	42	6	8	0	4	121
表面採集	25	9	1	3	1	7	21	1	5	4	14	81	13	7	0	11	203
合 計	232	61	24	37	11	152	173	11	169	42	293	2213	336	234	21	153	4169 (7)

• (7)はテンティキュレイト4、ノッヂ1、石製品1、砥石1
• チップは長幅1cmの範囲内におさまるものを示す。

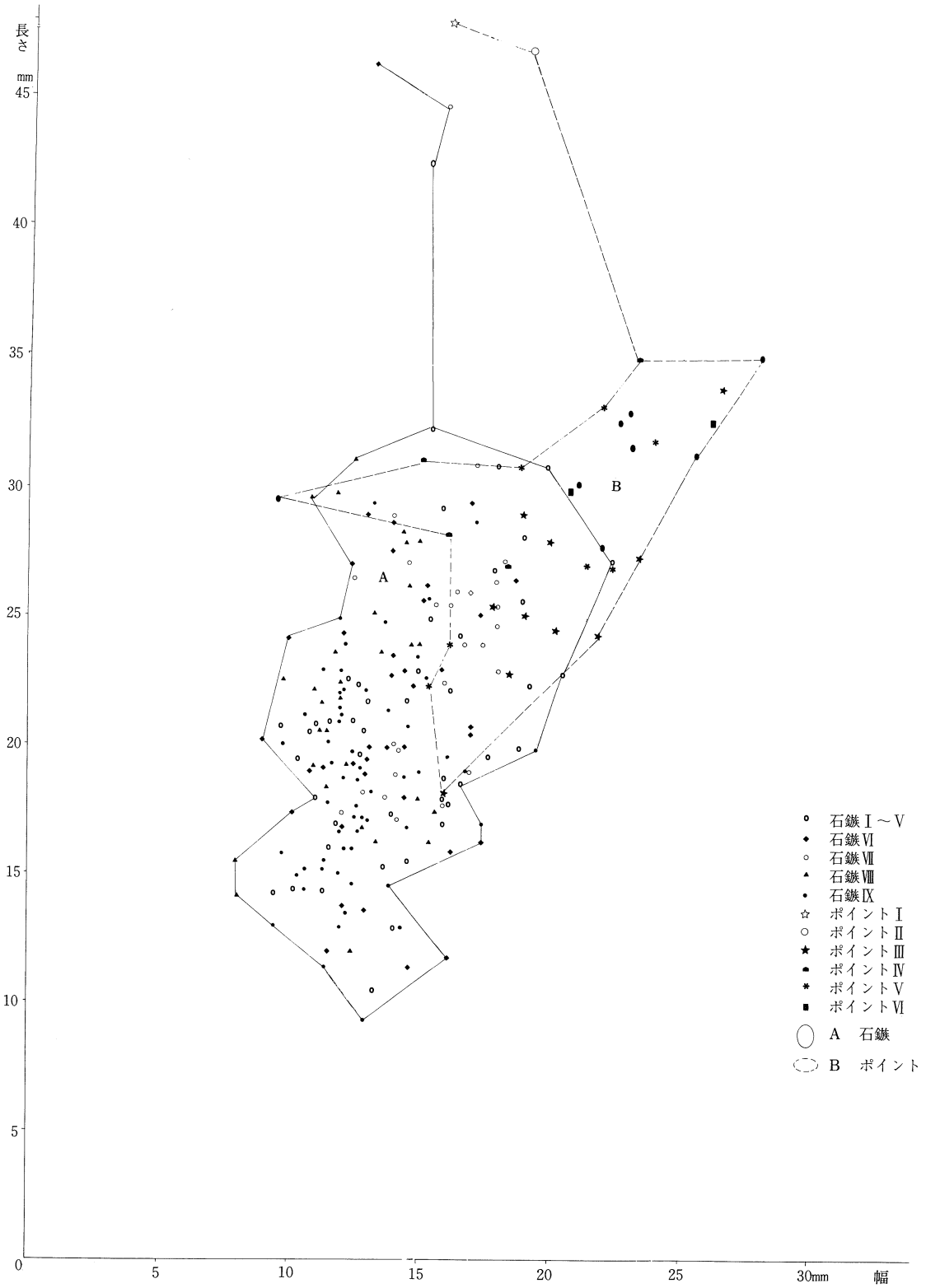
第15表　石器出土数量表



第146図　各グリッド石器出土状況



第147図　石鏃の型式分類及び出土数量



第148図　石鏃とポイントの長幅および型式相関図

(2) 石錐（第154図９～11、155図１～３、179図４・５）

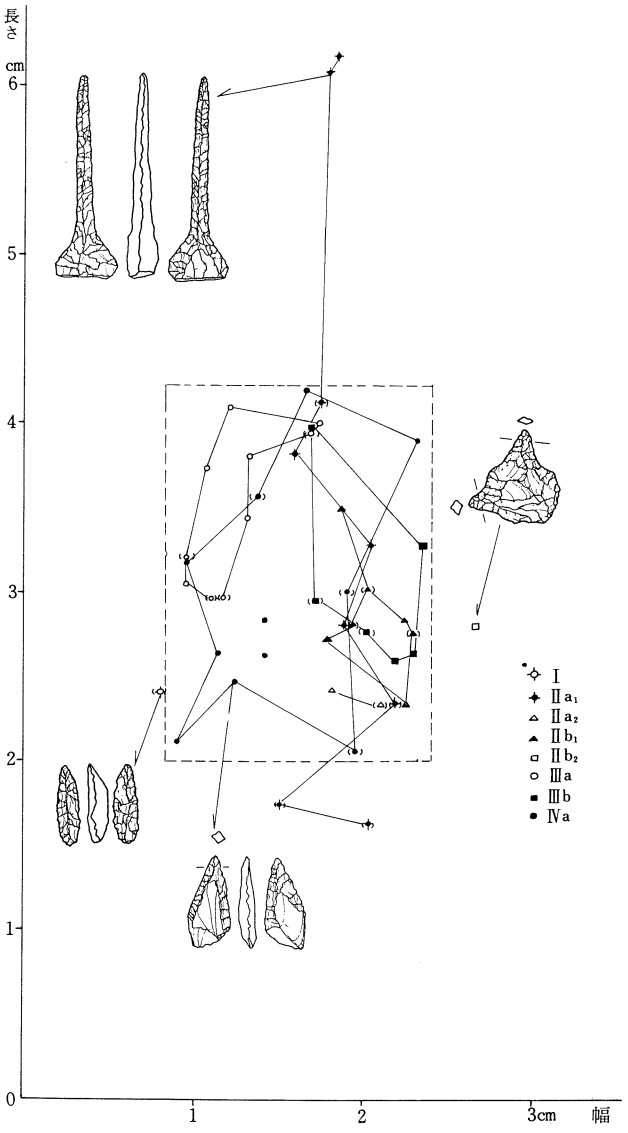
61点出土した。その型式分類と属性観察結果は第16表に、各型式の長幅関係は第149図に示した。この図から長さ２～4.2cm、幅0.8～2.4cmに集中して製作されていることが理解できる。この範囲からはずれるのは、Ⅳb類・Ⅱa_1類でも特異な型式である。集中範囲内においてもⅢa類は長さ3.0～4.5cm、幅1.8～8.5cm Ⅲb類は長さ2.6～4.0cm、幅1.7～2.3cm、Ⅱb_1は長さ2.3～3.5cm、幅1.8～2.3cmの範囲に、Ⅳa類は最も広範囲に分布する傾向がある。

破損品は61点中18点あり、全体の30%を占めるが、特定の型式に破損が限定されるような傾向性は特別認められなかったが、量的に最も多いⅣa類に破損品が少ないのは注目される。

石材は全て珪質頁岩である。

第16表　石錐観察表

類・型		出土点数	破損品	先端部の磨耗
Ⅰ類		1	1	0
Ⅱ類	Ⅱa_1	10	4	0
	Ⅱa_2	2	1	0
	Ⅱb_1	8	4	0
	Ⅱb_2	1	0	0
Ⅲ類	Ⅲa	11	3	0
	Ⅲb	6	3	0
Ⅳ類	Ⅳa	20	2	1
	Ⅳb	2	0	0
合計		61	18	1



第149図　石錐の長幅関係図

(3) 石匙（第156図、157図１～３）

24点出土した。Ⅰ類が８点、Ⅱ類が11点、Ⅲ類が５点である。Ⅰ・Ⅱ類に二重パティナが認められるものが各１点(第156図１、第157図１)、つまみ部の最も抉りの深い部分を中心にアスファルト(？)が付着しているものが１点(第156図４)ある。刃部の形状は平坦もしくは凸状を呈するが、１点のみ凹状を呈するもの(第157図２)がある。

石材は全て珪質頁岩である。

(4) ポイント（第154図１、155図４～11、161図１、179図７）

37点出土した。破損が著しく、形態分類が不可能なものが３点ある。ここでは残りの34点を分析の対象とした。完形品は32点ある。第148図は石鏃とポイントの長幅関係図であるが、Bの

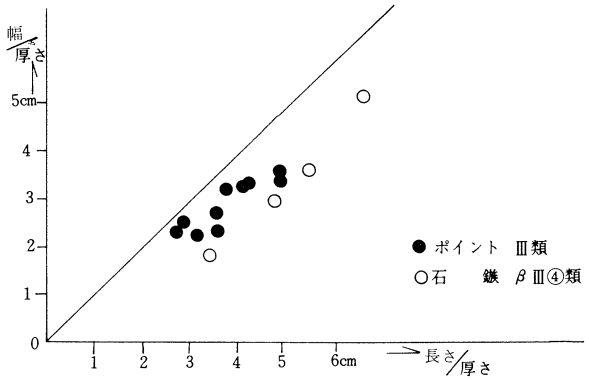
まとまりがポイントである。ここで、A群とB群がオーバーラップする範囲内の特に形態的に類似しているポイントⅢ類と石鏃 Ⅲβ④類との相違点が問題になる。第150図はこれらの型式の幅/厚 長/厚相関図であるが、この図ではこれらは形態的には類似するが、石鏃βⅢ④類がより細身で、より簿手であることが理解できる。

本遺跡出土のポイントの特徴としてⅢ類・Ⅴ類・Ⅵ類などの、素材に未調整部分を残したものが20点と全体の57%を占めることがあげられる。尚、火熱痕とアスファルト(?)が付着したものが1点(第154図1)ある。

石材はめのう1点、玉髄1点、硅化木1点、他は全て珪質頁岩である。

第17表　ポイント観察表

類	出土点数	破損品	火熱痕とタール(?)の付着
Ⅰ類	1	0	1
Ⅱ類	2	1	0
Ⅲ類	12	1	0
Ⅲ'類	8	0	0
Ⅳ類	4	0	0
Ⅴ類	7	0	0
Ⅵ類	3	1	0
合計	37	3	1



第150図　ポイントⅢ類と石鏃βⅢ④類の幅/厚 長/厚相関図

(5) 篦状石器（第163図1～3、179図10）

Ⅰ類が4点、Ⅱ類が3点、Ⅲ類が4点出土した。基部が欠損しているものが2点ある。

石材は全て珪質頁岩である。

(6) ピエス・エスキーユ（第157図4・5、179図6）

Ⅰ類が3点　Ⅱ類が59点、スポール、未製品が90点出土した。Ⅰ類に二重パティナが認められるものが2点(第157図5)ある。

石材は玉髄が3点、黒曜石が5点、チャート23点、他は珪質凝灰岩、頁岩である。

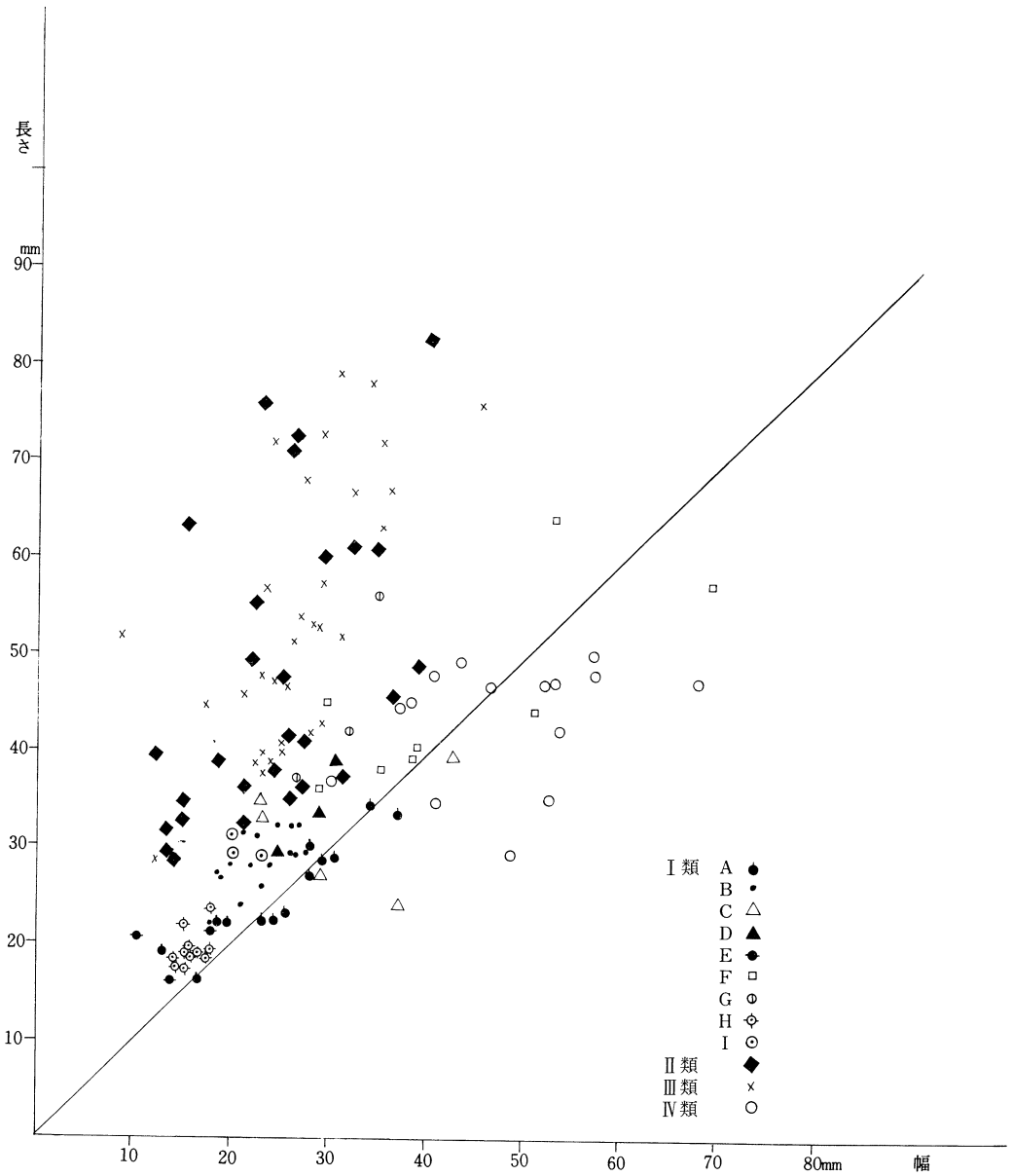
(7) スクレイパー（第158～160図、161図2～7、162図1・2・4～6、163図4～6、178図1～5、179図8・9・11）

出土数量及び「不定形石器」の長幅関係は、第18表、第151図に示した

第18表　スクレイパー出土数量表

	「不定形石器」												切断調整石器	S・F	M・F	「スクレイパー」		
類型	Ⅰ類									Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	Ⅴ類	Ⅵ類	Ⅶ類	Ⅷ類	Ⅸ類	Ⅹ類
	A	B	C	D	E	F	G	H	I									
出土点数	15	20	5	3	4	9	3	11	3	46	36	18	11	169	42	293		

(以上の他にデンティキュレイト4、ノッヂ1がある)

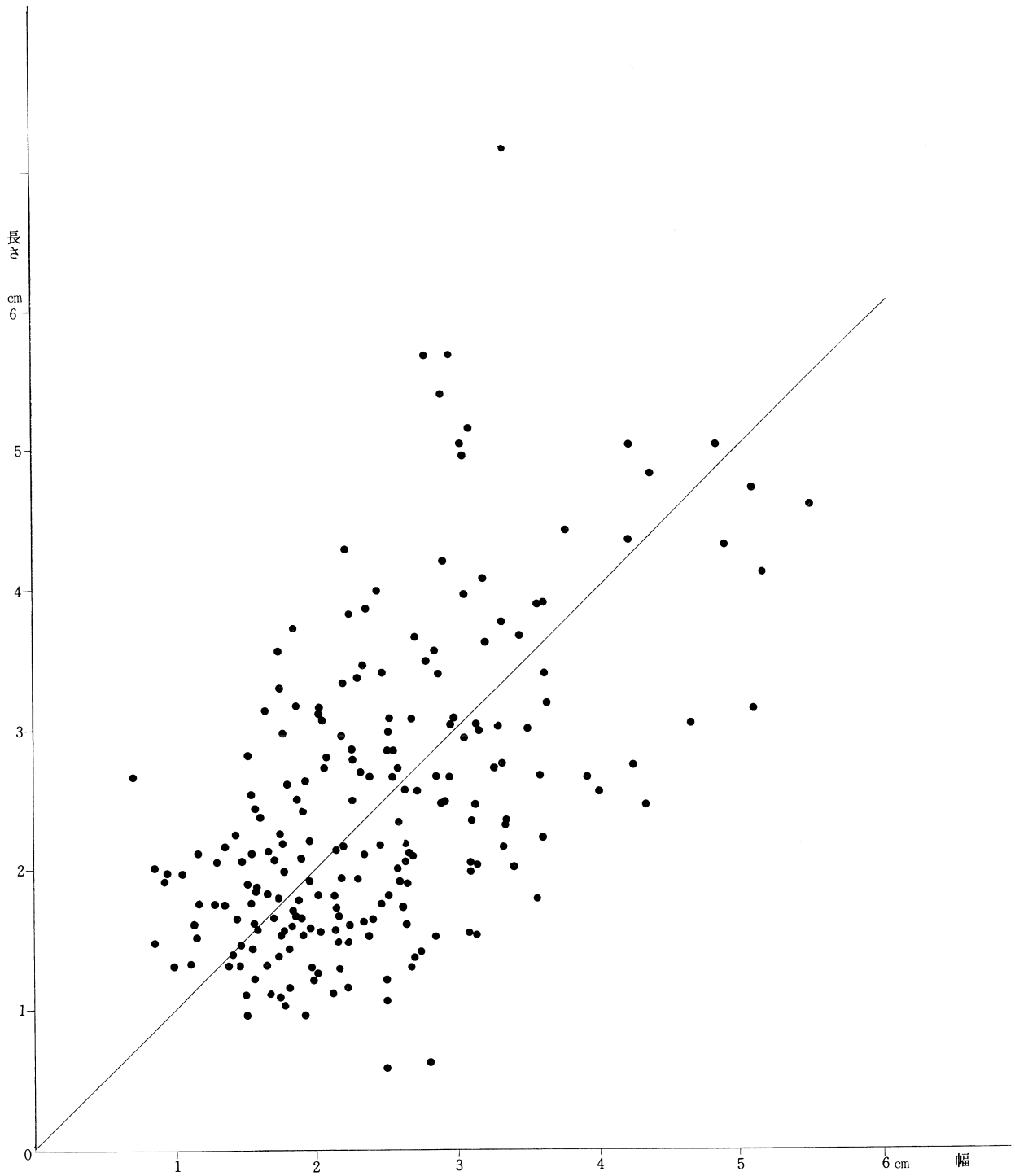


第151図 「不定形石器」長幅関係図

(8) 剝片

2213点出土したが、このうち次の調査区のⅠ～Ⅳb層出土の完形資料に限定して下記の属性観察を行なった。K－13、O－7、M－7、L－7、L－8、N－7、K－7、J－12、J－13、K－12グリッドの総計210点である。

打面の形状は、平坦打面94点、調整打面50点、自然面51点、節理面10点、その他5点で、平坦打面と調整打面が全体の68％を占めた。第152図は長幅関係図である。長さ1～8cm、幅1



第152図　剝片の長幅関係図

～５cmに分布し、特に長さ、幅とも１～４cmに集中する傾向が認められた。以上のことは、長さ、幅がほぼ等しい剥片が多く生産されていることを示している。厚さは図化しなかったが、1.5～11.5mmに分布する中で、特に３～10mmに特に多く集中している。

(9) 石核

234点出土しているが、特に分析は行わなかった。

2. 磨製石器

(1) 石斧（第165～167図、168図１・２）

Ⅰ類が４点、Ⅱa、Ⅱb類が各４点、型式分類が不可能なものが９点、合計21点ある。そのうち20点が破損している。破損の有り方は、刃部９点、基部６点、刃部と基部両者の破損(胴部の一部破損を含む)が５点ある。この中でⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅲ部(第１図　24頁)という破損の有り方が５割を占める。

使用痕としては打痕が９点に認められた。打痕は浅いもの(深さ0.5mm前後)－(A)　と深いもの(深さ0.5～１mm前後)－(B)に分類できる。敲打の範囲は、基部、基部周辺、刃部、刃部周辺、胴部側縁中央部、胴部中央部に分布している。破損と打痕の時間的関係は、恐らく石斧としての機能が失われた後に敲打に用いられたものと、打痕の分布状況から推定される。石材は内亜鉛鉱(?)・硅質岩(堆)各１点、蛇文岩、砂岩、凝灰岩質砂岩各２点、他は安山岩である。

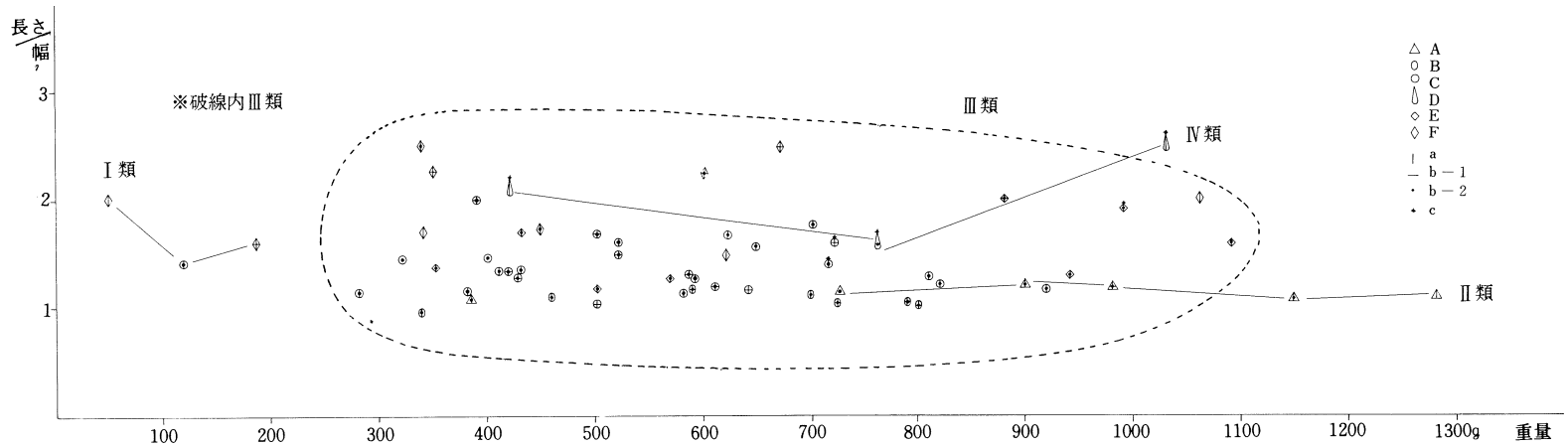
３．礫石器（第169～175図、176図３・４・６・８）

153点出土した。その属性は第153図、第19～21表に示した。礫の形態はC類が最も多く全体の30％を占め、次いでF類　G類が各約25.6％を占める。使用痕の組み合わせは14あるが、このうち磨痕(a)のみのものが全体の31％、磨痕(a)と打痕(b－１)と凹痕(b－２)の組み合わせ、及び磨痕(a)と凹痕(b－２)の組み合わせが各約25％を占める。特に凹痕(b－２)のみに注目し、その数を抽出すれば85点あり、全体の約半数を占める。以上を総合して礫石器の分類を行なったが、Ⅲ類が92点と最も多く全体の約60％を占める。なお、このうちC－α類・F－α類を除く98点の礫はB・C・E・F類と分類されていても、幅7cm、長さ10～15cm、厚さ3～5cm前後と共通している。第153図は、G・H類を除くA～F類の完形資料の長幅指数と重量との関係を示したものであるが、Ⅲ類のまとまりを中心にⅠ類・Ⅱ類・Ⅳ類が分布している。このまとまりの他に２～10kgのG類のまとまりがあり、大局的には、Ⅰ類・Ⅱ～Ⅳ類・Ⅴ類・Ⅵ類と四つに分類できる。尚、石材は安山岩・溶岩・凝灰岩・石英安山岩・砂岩等であるが、安山岩が130点と全体の約85％を占める。

３・４．石製品・砥石（第176図７、168図４）

各１点出土している。４は打製石斧様石器を製作後、砥石に転用したと考えられる。

柳　沢　みどり



第153図　礫石器　長幅/重量関係

礫の形態	点数
A	7
B	15
C－α	2
－β	45
D	2
E－β	9
－γ	6
－β又はγ	3
F－α	6
－β	11
－γ	4
－β又はγ	5
G	24
H	14
	153

第19表　礫の形態と出土点数

礫石器の類型	礫の形態	点数	合計
Ⅰ類	C－α	2	
	F－α	6	8
Ⅱ類	A	7	7
Ⅲ類	B	15	
	C－β	42	
	E－β	9	
	E－γ	6	
	E－β又はγ	3	
	F－β	11	
	F－γ	2	
	F－β又はγ	4	92
Ⅳ類	D	2	
	F－γ	2	
	F－β又はγ	1	
	C－β	3	8
Ⅴ類	H	14	14
Ⅵ－1類	G	22	22
Ⅵ－2類	G	2	2

第20表　礫石器の類型と礫の形態及び出土点数

石材＼使用痕	a	b－1	b－2	b－1＋b－2	a＋b－1	a＋b－2	a＋b－1＋b－2	a＋c	b－1＋c	a＋b－1＋c	a＋b－2＋c	a＋不明	a＋b－2＋不明	a＋b－1＋不明	不明	合計
安山岩	A－1 B－4 C－1 E－1 F－5 G－19 H－10 (41)		C－4 (4)	C－6 (6)	A－2 E－1 F－4 (7)	A－2 B－4 C－11 E－4 F－6 G－1 (28)	B－6 C－17 E－6 F－4 (33)	D－1 E－1 (2)	D－1 (1)	E－1 F－1 (2)	C－3 (3)	A－1 (1)	C－1 (1)	C－1 (1)		130
溶岩	G－2 (2)					A－1 E－2(3)	C－1 (1)									6
凝灰岩	G－1 H－1(2)	F－1 (1)													G－1 (1)	4
砂岩							E－1 G－1(2)									2
凝灰岩質シルト岩	H－1(1)															1
石英安山岩					F－1(1)		B－1(1)									2
不明	H－2(2)	F－2(2)		C－1(1)	C－1(1)	C－1(1)	E－1(1)									8
合計	48	3	4	7	9	32	38	2	1	2	3	1	1	1	1	153

第21表　礫の形態及び使用痕・石材の関係

( )は合計数

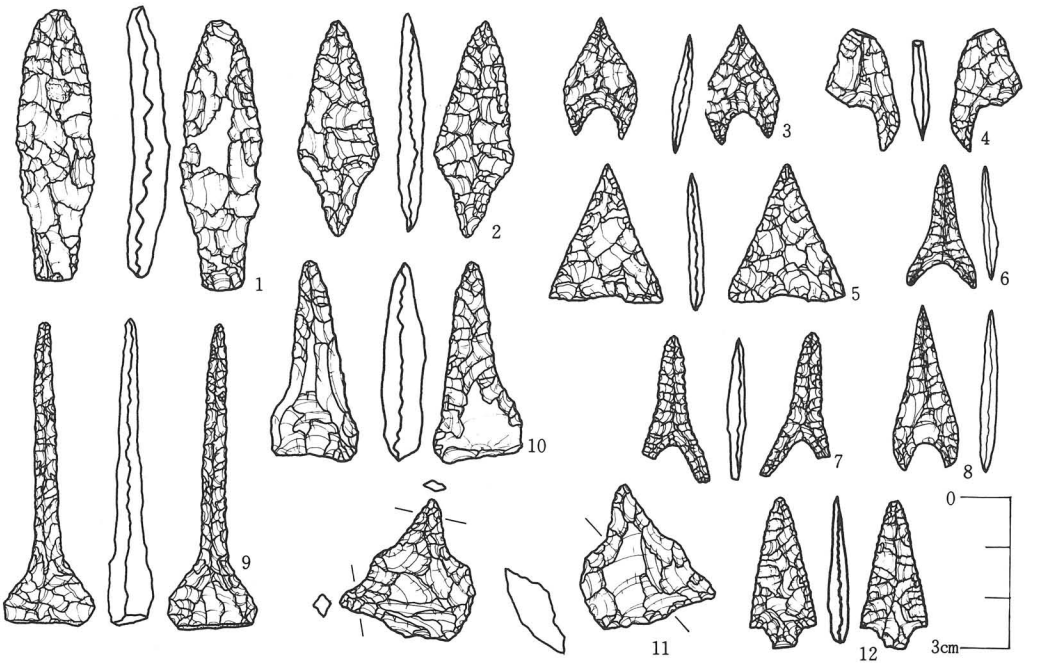
・接合　　堆＝堆積土

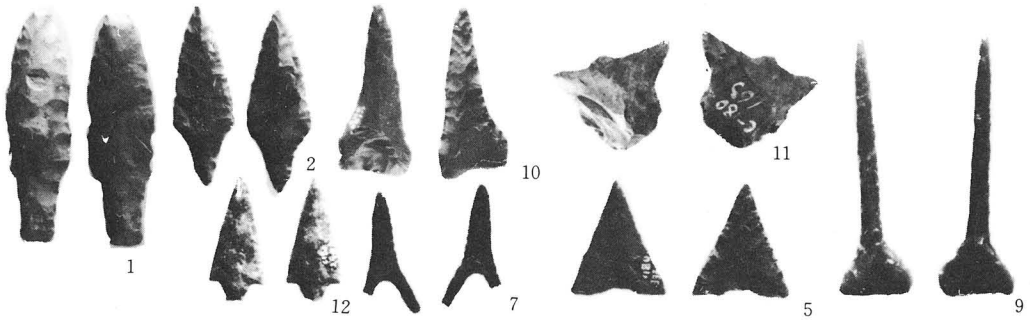
第22表　接合および同一母岩資料

分類番号	登録番号	地　区	遺　構	層　位	名　称	石　材	図番号
1	2245 2245	O－10(a)	———	Ⅲ	石　核 剥　片	珪質細粒 凝　灰　岩	第178図－8
2	2245 2245 2245	O－10(a)	———	Ⅲ	石　核 チ　ッ　プ 剥　片	珪質細粒 凝　灰　岩	
3	302 302	K－7	35号土壙	堆　1	剥　片	珪質細粒 凝　灰　岩	第178図－7
4	692 316	L－6(b) K－7(c)	——— ———	Ⅲ Ⅲ	剥　片	チャート	
5	2001 2354	P－11(a) Q－12(d)	——— ———	Ⅰ Ⅰ	欠損した剥片	凝　灰　岩	
6	2800 2385 2323	表　採 K－13(a) K－13(a)	——— ——— ———	——— Ⅳb上 Ⅲ	欠損した剥片 剥　片	凝　灰　岩	
7	814 575	J－8(b・c) J－8(c)	——— ———	Ⅲ Ⅲ	剥　片 石　核	黒　曜　石	第178図－6
8	934 248	M－7 N－7(a)	6号土壙	堆　1 Ⅲ	剥　片 石　核	珪　化　木	
9	302 226	K－7 J－8	35号土壙	堆　1 Ⅲ	欠損した剥片	流　紋　岩	
10	862 862 431	N－7(a) N－7(a) N－7(d)	20号土壙 20号土壙	堆　3 堆　3 Ⅱ	石　核 剥　片 〃	チャート	第91図－9 〃　8 〃　10
11	2455 82	P－11(c) N－7(b)	——— ———	Ⅲ Ⅰ	石　核 S　F	チャート	
12	2323 2165	K－13(a) K－13(a)	——— ———	Ⅲ Ⅰ	欠損した剥片	チャート	
13	2357－8 2315 2356－16 2357－9 2356－16 2351 2314 2356－16 2356－16 2354 2357－13 3003 2357－11 2356 2356－1	P－11(d) P－11(d) P－11(d) P－11(d) P－11(d) P－11(d) P－11(d) P－11(d) P－11(d) Q－12(d) P－11(d) P－11(d) P－11(d) P－11(d) P－11(d)	12号土壙 12号土壙 12号土壙 12号土壙 12号土壙 12号土壙 12号土壙 12号土壙 12号土壙 12号土壙 12号土壙 12号土壙 12号土壙 12号土壙 12号土壙	堆　2 堆　2 堆　2 堆　2 堆　2 堆　1 堆　2 堆　2 堆　2 Ⅰ 堆　2 堆　2 堆　2 堆　2 堆　2	剥　片 〃 〃 〃 〃 石　核 剥　片 〃 〃 剥　片 〃 〃 〃 〃 〃	珪質頁岩	第77図－1 〃　3 第77図－2 第77図－5 第77図－4 第76図－6 〃　2 〃　3 〃　1 〃　4 〃　5
14	316 215	K－7(c) L－7(b)	——— ———	Ⅲ Ⅲ	剥　片 〃	流紋岩質岩	
15	294 271 294 271	M－7 M－7(a) M－7 M－7(a)	——— ——— ——— ———	Ⅲ Ⅲ Ⅲ Ⅲ	剥　片 〃 〃 〃	流紋岩質岩	
16	2405 2265	P－11(c) P－12(d)	——— ———	Ⅲ Ⅲ	剥　片 スクレイパー	珪質細粒 凝　灰　岩	
17	2241 2348	O－10(a) Q－12(d)	——— ———	Ⅰ Ⅰ	剥　片 S　F	グリーン・タフ	
18	2636 2610	K－13(a) K－13(c)	2号住居跡、P_{15} 7号土壙	堆 堆下部	剥　片	流紋岩質岩	
19	2088 2317	K－13(b) K－13	——— ———	Ⅱ Ⅳb	剥　片	珪質細粒 凝　灰　岩	
20	304 2138 2350	L－7(b) K－15(b) P－11	——— ——— 9　土　壙	Ⅲ Ⅲ 堆上面	剥　片 〃 〃	珪質頁岩	

分類番号	登録番号	地区	遺構	層位	名称	石材	図番号
21	2357	P－11(d)	12号土壙	堆 2	剝片	珪質頁岩	
	2354	Q－12(d)	———	Ⅰ			
22	274	M－7(b)	———	Ⅲ	S F	珪質頁岩	
	2196	M－13	———	Ⅲ			
23	516	O－7(b)	———	Ⅱ	剝片	グリーン・タフ	
	79	J－7(c)	———	Ⅰ	S F		
24	125	I－9(c)	———	Ⅰ	スクレイパー	流紋岩	
	2441	P－11	9号土壙	堆 2	剝片		
	2354	Q－12(d)	———	Ⅰ	剝片		
25	16	I－9	———	Ⅰ	石核	頁岩	
	982	N－6(c)	———	Ⅲ			
26	214	L－7(a)	———	Ⅲ	剝片	珪質頁岩	
	2488	J－13(d)	———	Ⅰ	〃		
	157	K－7(d)	———	Ⅲ	〃		
	38	N－7	———	Ⅰ	〃		
	2057	M－13(a)	———	Ⅲ	〃		
27	2068	K－15(b)	———	Ⅲ	スクレイパー	流紋岩質岩	
	271	M－7(a)	———	Ⅲ	剝片		
	2416	K－13(a)	2号住跡	③	〃		
	2293	K－13	2号住跡	①	〃		
	2315	Q－12(d)	———	Ⅰ	〃		
	1019	M－6(b)	5号土壙	堆 2	スクレイパー		
28	2124	K－15(c)	———	Ⅲ	剝片	凝灰岩	
	2048	M－13	———	Ⅱ	〃		
	2038	M－13	———	Ⅱ	〃		
29	2194	M－13	———	Ⅳb	剝片	珪質細粒	
	2269	M－13(a·b)	5号風倒木	堆		凝灰岩	
30	2269	M－13(a·b)	5号風倒木	堆	剝片	珪質凝灰岩	
	2269	M－13(a·b)	5号風倒木	堆	〃		
	2194	M－13	———	Ⅳb	〃		
	2194	M－13	———	Ⅵb	石核		
	2194	M－13	———	Ⅵb	剝片		
	2194	M－13	———	Ⅵb	〃		
	2194	M－13	———	Ⅵb	〃		
31	1100	表採	———	——	スクレイパー	珪質頁岩	第162図－1
	573	J－8(c)	1号風倒木	堆	〃		第178図－3
	2362	Q－12(d)	———	Ⅰ	剝片		
	261	M－6(c)	———	Ⅲ	〃		
	330	K－6(b)	———	Ⅲ	スクレイパー		第163図－4
32	2071	M－15(c)	———	Ⅲ	剝片	珪質頁岩	
	310	L－7(a)	———	Ⅲ	石核		
33	88	K－8(a)	———	Ⅰ	剝片	珪質頁岩	
	276	K－7(b)	———	Ⅲ	〃		
	303	L－7(a)	———	Ⅲ	〃		
34	2001	P－11(a)	———	Ⅰ	剝片	珪質頁岩	
	82	K－7(b)	———	Ⅰ	S F		
35	2269	M－13(a·b)	5号風倒木	堆	剝片	珪質細粒	
	2194	M－13	———	Ⅳb	〃	凝灰岩	
36	2269	M－13(a·d)	5号風倒木	堆	剝片	珪質凝灰岩	
	2192	M－13	———	Ⅳb	〃		
	2269	M－13(a·d)	5号風倒木	堆	〃		
	2267	M－13(a·d)	5号風倒木	堆	〃		
	2194	M－13	———	Ⅳb	〃		
37	2357	P－11(d)	12号土壙	堆 2	剝片	流紋岩	
	2359	P－11(d)	12号土壙	堆 1	〃		
38	73	L－7(a)	———	Ⅰ	ピエス・エスキーユ	珪化木	
	777	P－6(c)	———	Ⅳb	剝片		
	420	M－7(d)	———	Ⅲ	石核		
	345	N－7(a)	———	Ⅲ	石核		
39	2588	P－12(a)	1号住居跡P8	堆	剝片	チャート	第13図－1
	〃	P－12(a)	1号住居跡P8	堆	〃		第13図－2

分類番号	登録番号	地　区	遺　構	層　位	名　称	石　材	図番号
39	2588	P－12(a)	1号住居跡P6	堆	剥　片	チャート	第13図-3
	〃	P－12(a)	1号住居跡P6	堆	石　核		〃－4
	〃	P－12(a)	1号住居跡P6	堆	〃		〃－5
	〃	P－12(a)	1号住居跡P6	堆	S　F		〃－6
	〃	P－12(a)	1号住居跡P6	堆	剥　片		〃－7
	〃	P－12(a)	1号住居跡P6	堆	石　核		〃－8
40	2679	K－13	2号住居跡炉石組部土器内	埋　イ	剥　片	鉄石英	
	2681	K－13(2)	2号住居跡炉掘り方	B	剥　片		
41	552	K－7(b･c)		Ⅲ	剥　片	珪質頁岩	
	170	J－b(c)		Ⅲ	スクレイパー		
42	2632－1	K－13(d)	2号住居跡炉掘り方	埋　ハ	剥　片		第42図-1
	〃－2	K－13(d)	2号住居跡炉掘り方	埋　ハ	〃		〃　2
43	〃－3	K－13(d)	2号住居跡炉掘り方	埋　ハ	剥　片	珪質頁岩	第43図-3
	〃－4	K－13(d)	2号住居跡炉掘り方	埋　ハ	〃		〃　4
44	〃－5	K－13(d)	2号住居跡炉掘り方	埋　ハ	剥　片		第44図-5
	〃－6	K－13(d)	2号住居跡炉掘り方	埋　ハ	〃		〃　6
45	ネ	K－6(b)	6号ピット	堆	剥　片	頁岩	第68図-1
	ナ	K－6(b)	6号ピット	堆	〃		〃　2
	フ	K－6(b)	6号ピット	堆	〃		〃　3
	P. 39	K－6(b)	6号ピット	堆	スクレイパー		〃　4
	P. 18	K－6(b)	6号ピット	堆	剥　片		〃　5
	P. 61	K－6(b)	6号ピット	堆	〃		〃　6
	P. 3	K－6(b)	6号ピット	堆	スクレイパー		〃　7
	ソ	K－6(b)	6号ピット	堆	剥　片		〃　8
	P. 31	K－6(b)	6号ピット	堆	〃		〃　9
	P. 1	K－6(b)	6号ピット	堆	〃		〃　10
	P. 54	K－6(b)	6号ピット	堆	〃		第69図-11
	P. 13	K－6(b)	6号ピット	堆	〃		〃　12
	レ	K－6(b)	6号ピット	堆	〃		〃　13
	P. 50	K－6(b)	6号ピット	堆	スクレイパー		〃　14
	P. 30	K－6(b)	6号ピット	堆	〃		〃　15
	P. 16	K－6(b)	6号ピット	堆	剥　片		〃　16
	タ	K－6(b)	6号ピット	堆	〃		〃　17
	P. 37	K－6(b)	6号ピット	堆	〃		〃　18
	P. 43	K－6(b)	6号ピット	堆	〃		〃　19
	P. 47	K－6(b)	6号ピット	堆	石　核		〃　20
	ツ	K－6(b)	6号ピット	堆	剥　片		
	P. 28	K－6(b)	6号ピット	堆	〃		
	P. 48	K－6(b)	6号ピット	堆	スクレイパー		
46	P. 9	K－6(b)	6号ピット	堆	剥　片	頁岩	第70図-1
	P. 35	K－6(b)	6号ピット	堆	〃		〃　2
	P. 24	K－6(b)	6号ピット	堆	〃		〃　3
	P. 46	K－6(b)	6号ピット	堆	M　F		〃　4
	P. 38	K－6(b)	6号ピット	堆	剥　片		〃　5
	P. 14	K－6(b)	6号ピット	堆	〃		〃　6
	P. 36	K－6(b)	6号ピット	堆	〃		〃　7
	P. 59	K－6(b)	6号ピット	堆	S　F		〃　8
	ニ	K－6(b)	6号ピット	堆	剥　片		〃　9
47	P. 63	K－6(b)	6号ピット	堆	M　F	頁岩	第69図-22
	P. 55	K－6(b)	6号ピット	堆	S　F		〃　24
	P. 8	K－6(b)	6号ピット	堆	〃		〃　25
48	P. 40	K－6(b)	6号ピット	堆	剥　片	頁岩岩	第69図-28
	ワ	K－6(b)	6号ピット	堆	スクレイパー		〃　27
49	P. 45	K－6(b)	6号ピット	堆	剥　片	頁岩	
	P. 60	K－6(b)	6号ピット	堆	〃		
	P. 19	K－6(b)	6号ピット	堆	〃		
50	2486	K－6	6号ピット	Ⅰ	スクレイパー	流紋岩頁岩	
	2357	P－11(d)	12号土壙	堆　2	〃		第77図-6



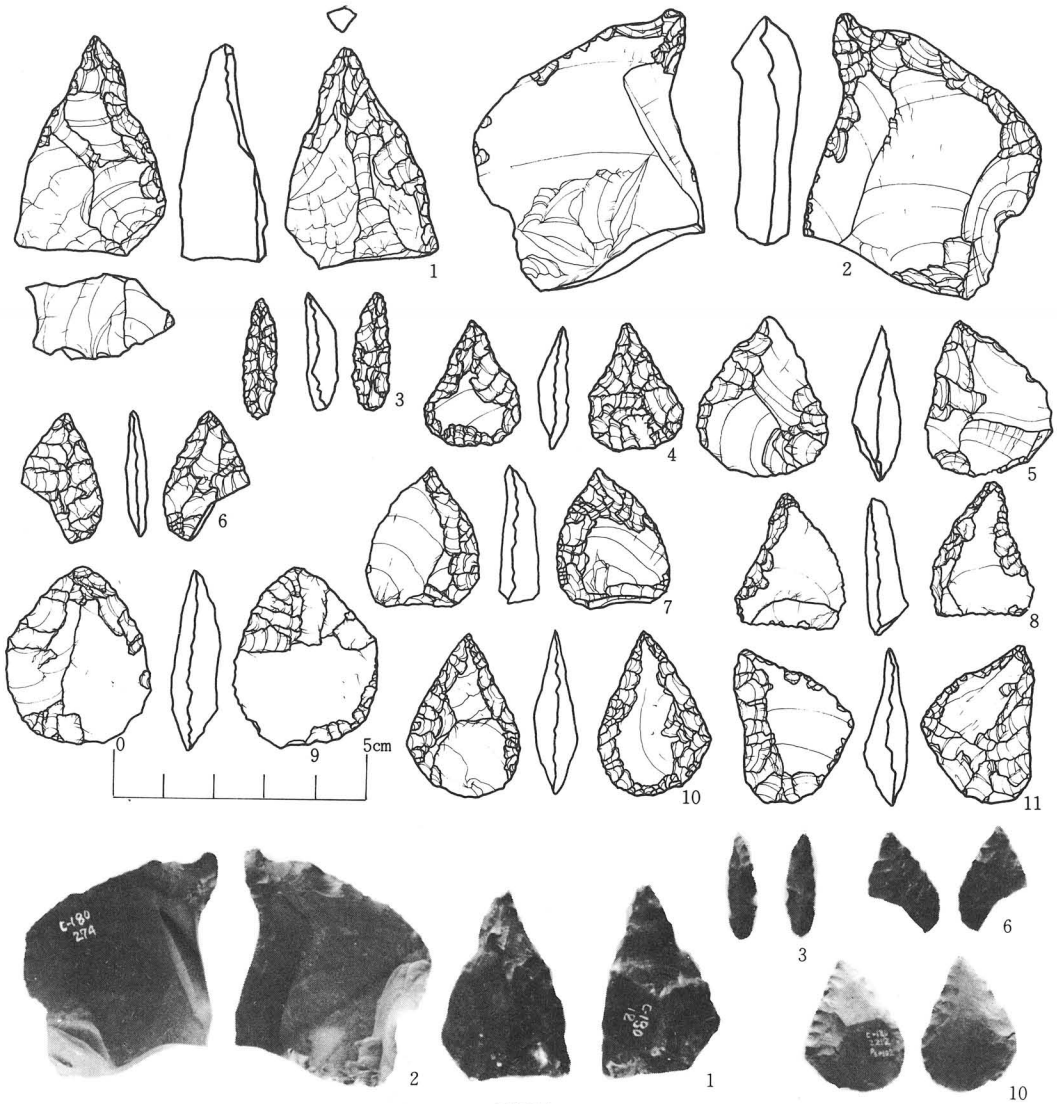


観察表

単位：mm

図	地　区	層位	名　称	長さ	幅	厚さ	備　考	分　類	石　材	登録番号
1	K－13(b)	Ⅳb	ポイント	54.0	15.5	7.0	火熱痕とアスファルト(?)の付着	Ⅰ	珪質頁岩	2381
2	M－13	Ⅲ	石　鏃	43.0	15.5	5.0	―――	Ⅱα②	珪質頁岩	2025
3	M－13(d)	Ⅳb	石　鏃	23.5	15.0	3.5	―――	Ⅸω㉝	珪質頁岩	2055
4	J－9(d)	Ⅲ	石　鏃	24.0	14.5	3.0	先端部と脚部欠損	――	珪質頁岩	193
5	K－6・7	Ⅲ	石　鏃	28.0	23.0	3.0	―――	Ⅴγ⑪	珪質頁岩	333
6	N－7	Ⅰ	石　鏃	24.0	14.0	2.7	―――	Ⅵω⑭	珪質頁岩	59
7	M－7	Ⅲ	石　鏃	29.5	(14.0)	3.5	脚部欠損	Ⅵω⑲	珪質頁岩	273
8	M－7	Ⅲ	石　鏃	33.0	13.2	3.2	―――	Ⅵω⑮	珪質頁岩	184
9	M－13(b) 北東コーナー	Ⅳb	石　錐	60.0	18.0	9.0	―――	Ⅱa_1	めのう	2116
10	N－7(c)	Ⅰ	石　錐	39.5	17.0	8.2	―――	Ⅱa_1	珪質頁岩	380
11	J－7(c)	Ⅲ	石　錐	28.5	25.5	8.0	―――	Ⅱa_1	珪質頁岩	163
12	N－9(a)	Ⅲ	石　鏃	29.2	13.0	4.0	―――	Ⅰα①	チャート	2413

第154図　出土石器(1)

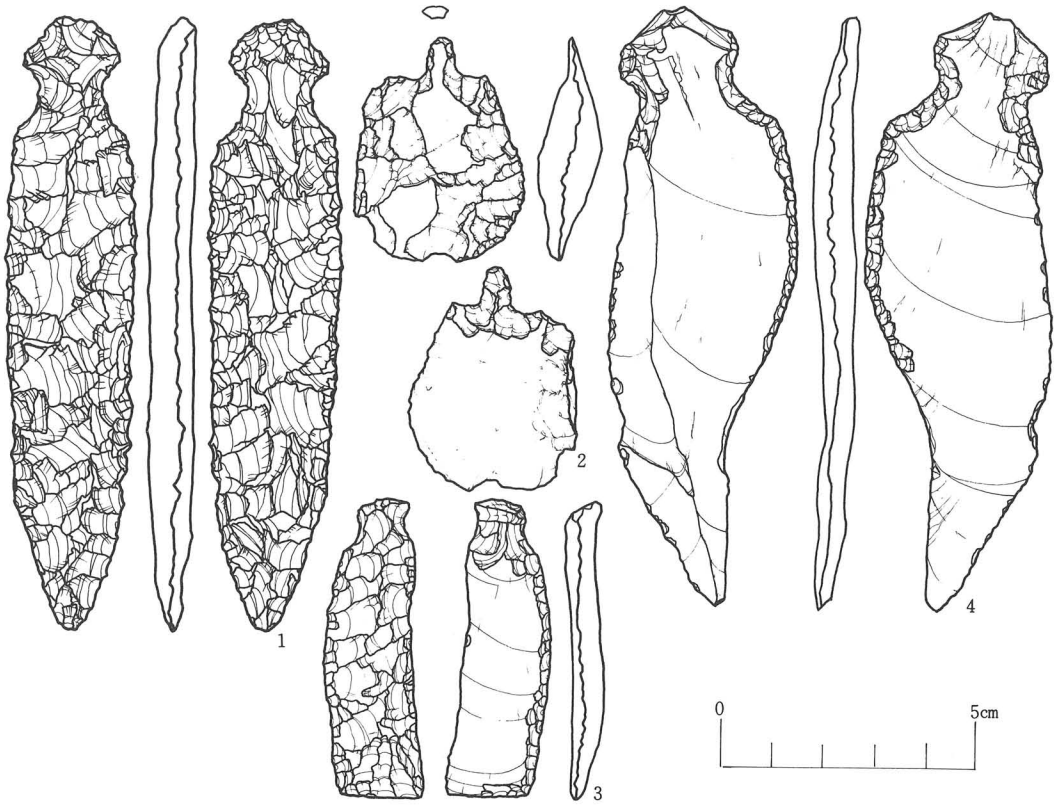


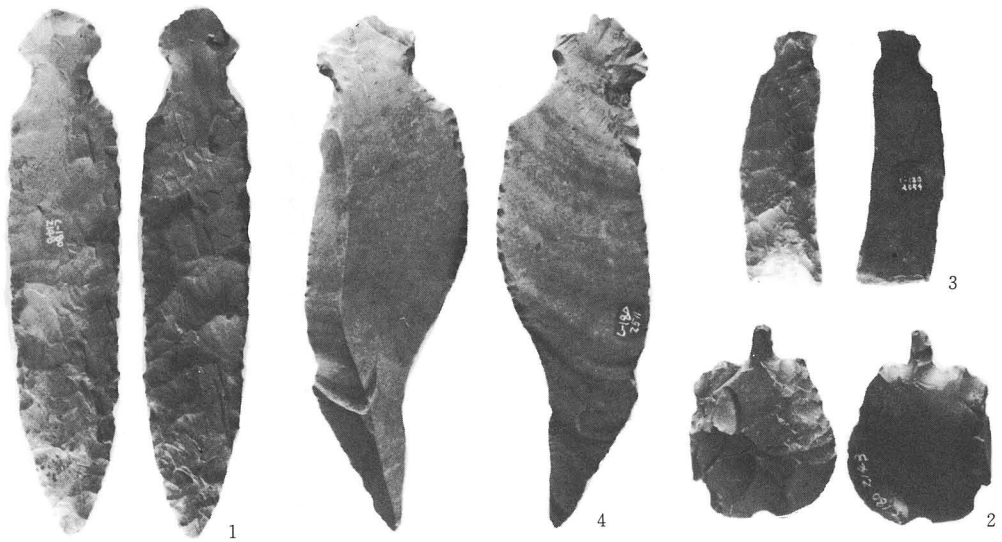
観察表

単位：mm

図	地　区	層位	名　称	長さ	幅	厚さ	備　考	分　類	石　材	登録番号
1	M－7	Ⅲ	石　錐	44.0	30.0	17.0	———	Ⅳa	チャート	12
2	M－7(d)	Ⅲ	石　錐	44.0	51.0	13.5	———	Ⅳa	珪質頁岩	274
3	K－13(b)	Ⅱ	石　錐	24.0	6.2	4.2	———	Ⅰ	珪質頁岩	2074
4	Q－12 (d)	Ⅰ	ポイント	25.5	18.0	7.0	———	Ⅲ	珪質頁岩	2327
5	N－7(c)	Ⅰ	ポイント	32.0	26.0	9.3	———	Ⅲ´	珪質頁岩	467
6	K－12(b)	Ⅳb 上	ポイント	26.0	17.0	4.0	基部欠損	Ⅲ	珪質頁岩	2640
7	M－7	Ⅲ	ポイント	28.2	22.0	8.0	———	Ⅵ	珪質頁岩	
8	N－7(a)	Ⅰ	ポイント	27.0	21.5	8.0	———	Ⅵ	珪質頁岩	57
9	N－7(a)	Ⅲ	ポイント	36.5	29.0	9.0	———	Ⅲ´	珪質頁岩	303
10	K－13	Ⅳb上	ポイント	33.0	12.5	8.5	———	Ⅲ	珪質頁岩	
11	K－7(d)	Ⅲ	ポイント	32.0	24.5	8.5	———	Ⅳ	珪質頁岩	199

第155図　出土石器(2)



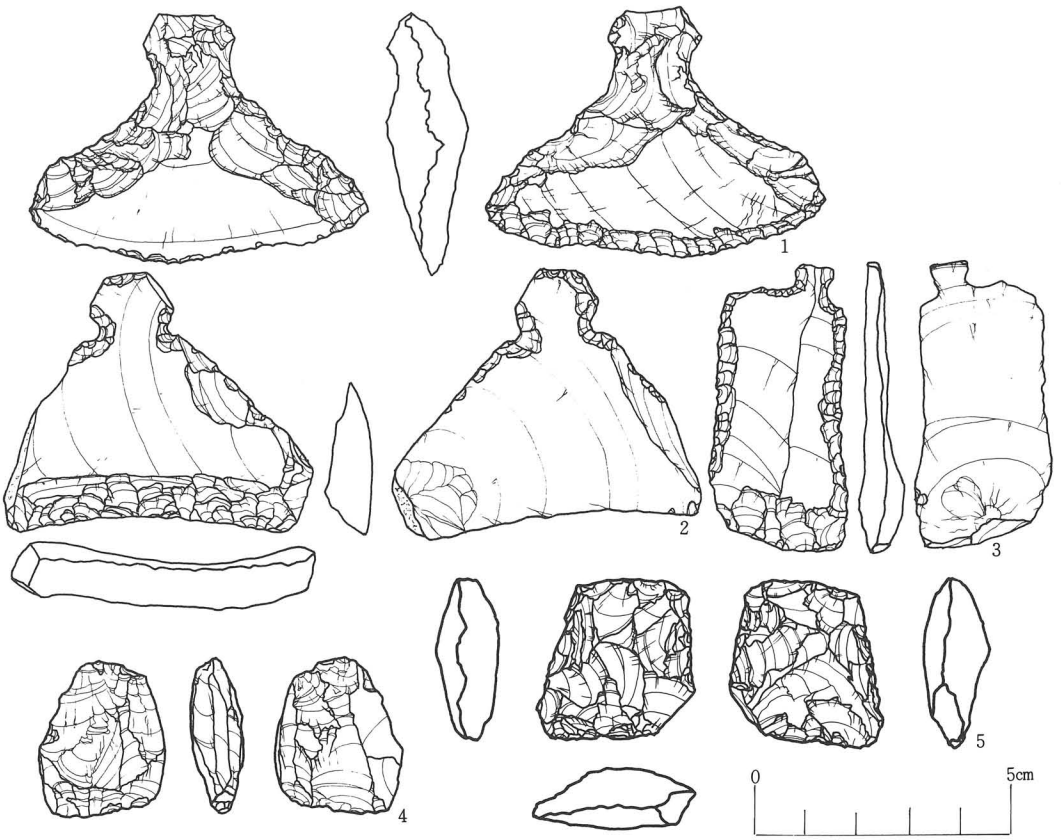


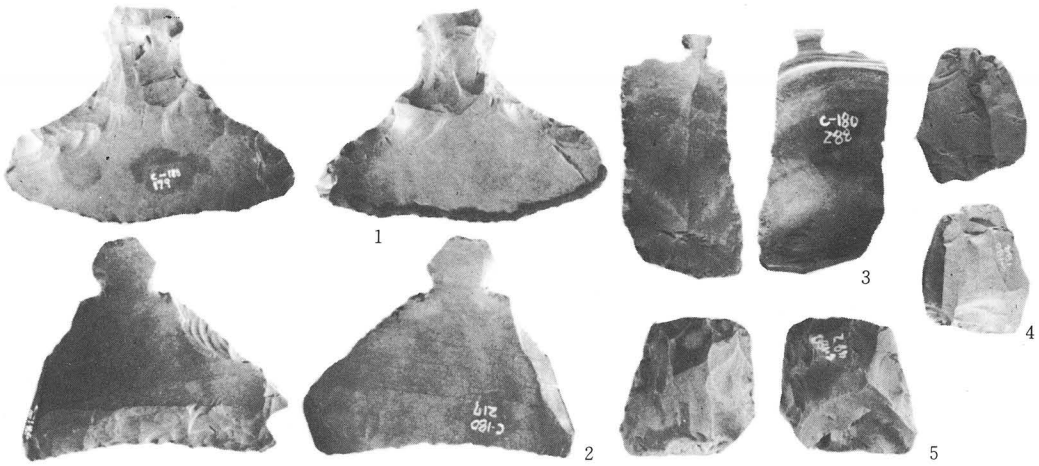
観察表

単位：mm

図	地　区	層位	名　称	長さ	幅	厚さ	備　考	分　類	石　材	登録番号
1	K－15（c）	Ⅲ	石　匙	120.0	25.0	9.1	二重パティナ — 再調整	Ⅱ	珪質頁岩	2148
2	O.P.Q－12	Ⅰ	石　匙	119.0	37.0	8.0	———	Ⅲ	珪質頁岩	2143
3	M－13（d）	Ⅳb	石　匙	45.0	33.2	12.0	———	Ⅱ	珪質頁岩	2054
4	K－13（d）	Ⅳa	石　匙	60.0	18.0	6.0	つまみ部のくびれ部分にアスファルト(?)付着	Ⅱ	珪質頁岩	2511

第156図　出土石器（3）



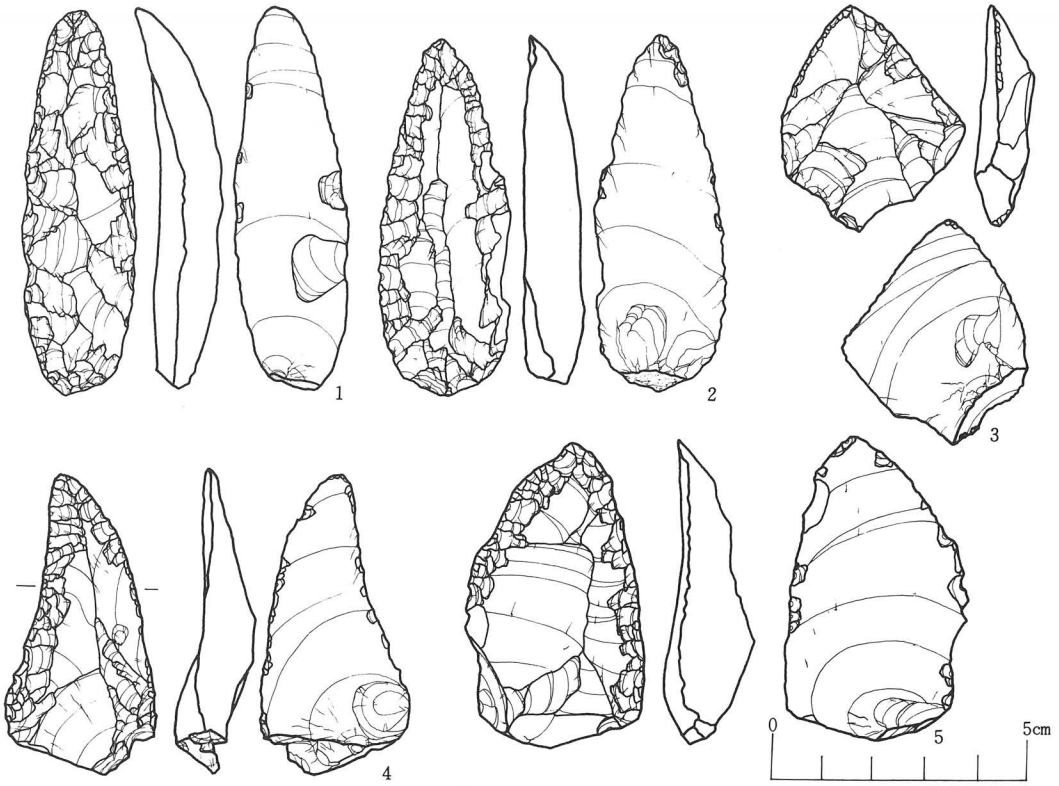


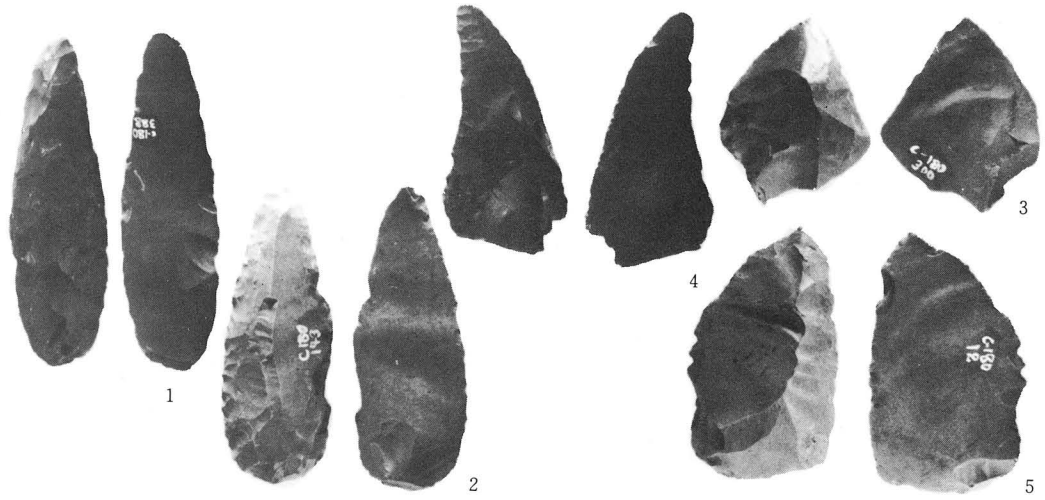
観察表

単位：mm

図	地　区	層位	名　称	長さ	幅	厚さ	備　考	分類	石　材	登録番号
1	J－8（a）	Ⅲ	石　匙	50.0	67.0	16.0	二重パティナー再調整	Ⅰ	珪質頁岩	179
2	L－7（d）	Ⅲ	石　匙	51.8	61.0	12.0	凹状の刃部をつくり出している	Ⅰ	珪質頁岩	217
3	K－7（b）	Ⅲ	石　匙	57.0	27.4	8.0	―――	Ⅰ	珪質頁岩	288
4	J－8（d）	Ⅲ	ピエス・エスキーユ	30.5	25.2	10.3	上下から調整施す、両極打法が認められる	Ⅱ	珪質頁岩	184
5	N－7（c）	Ⅲ	ピエス・エスキーユ	32.0	31.5	11.6	四方から施した調整が背腹全面に及ぶ二重パティナー再調整	Ⅰ	珪質頁岩	492

第157図　出土石器（4）



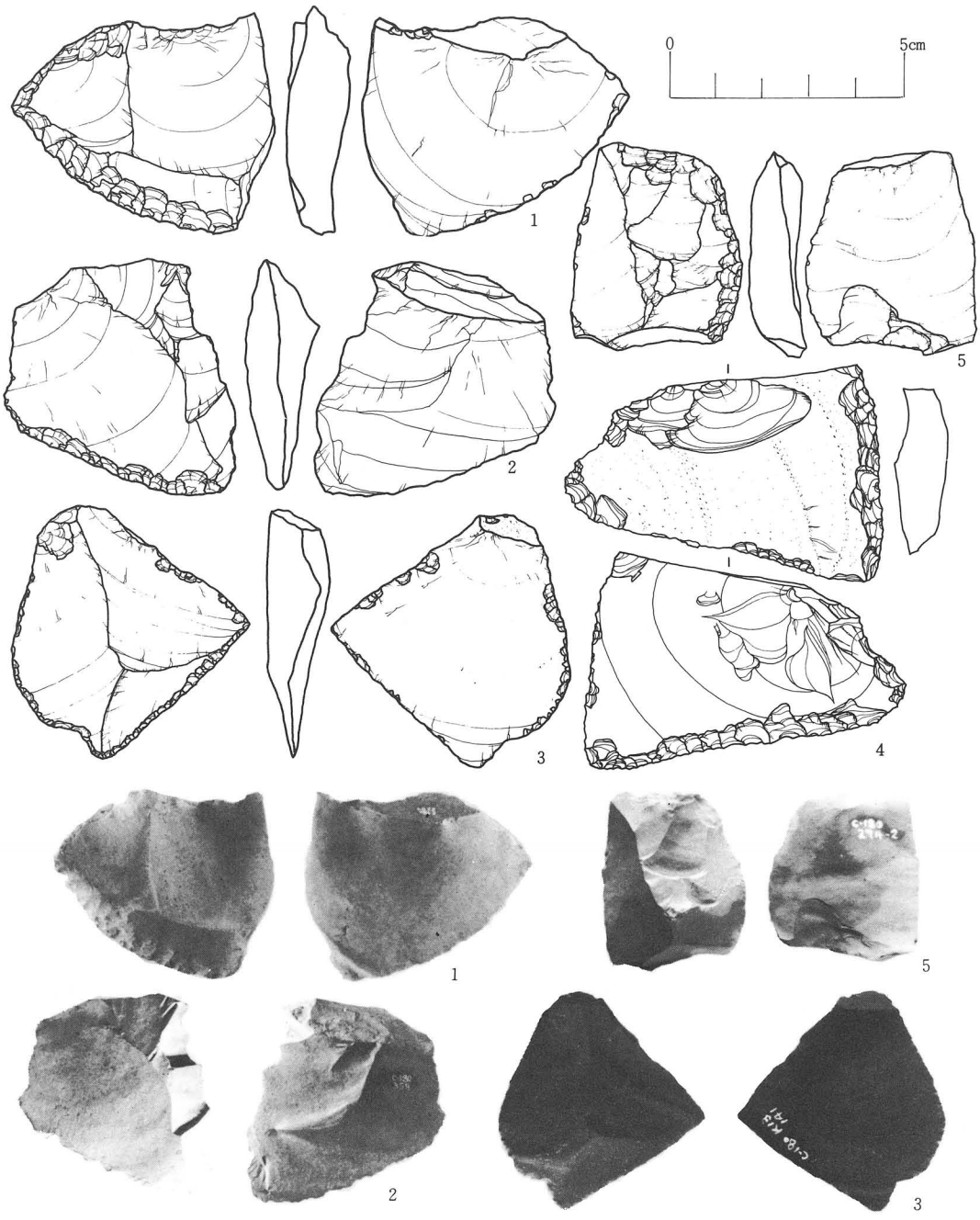


観察表

単位：mm

図	地　区	層位	名　称	長さ	幅	厚さ	備　考	分　類	石　材	登録番号
1	K－8（d）	Ⅲ	スクレイパー	72.2	23.0	10.8	―――	V	珪質頁岩	380
2	K－7	Ⅲ	スクレイパー	70.5	26.0	12.0	―――	V	珪質頁岩	143PS-1
3	J－7（c）	Ⅲ	スクレイパー	45.0	35.8	10.0	所謂斜軸ポイント的	V	珪質頁岩	300
4	J－7（b）	Ⅲ	スクレイパー	60.0	29.5	10.0	―――	V	珪質頁岩	163
5	M－7	Ⅲ	スクレイパー	60.5	34.5	18.0	―――	V	珪質頁岩	12

第158図　出土石器（5）

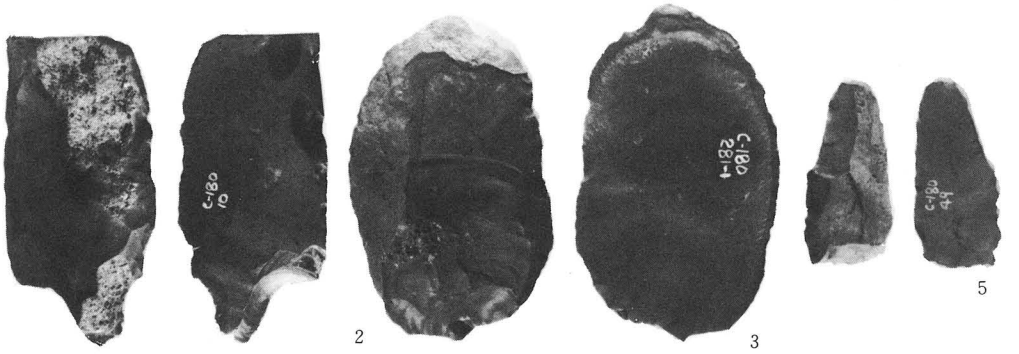


観察表

単位：mm

図	地　区	層位	名　称	長さ	幅	厚さ	備　考	分　類	石　材	登録番号
1	P－12(d)	Ⅰ	スクレイパー	47.0	56.5	13.2	———	Ⅳ	珪質頁岩	2284
2	I－8(サブトレ)	Ⅲ	スクレイパー	48.0	57.0	12.0	———	Ⅳ	珪質頁岩	359
3	K－7(c)	Ⅲ	スクレイパー	47.0	45.0	13.0	———	Ⅳ	珪質頁岩	141
4	79年表採	—	スクレイパー	47.0	67.5	13.0	———	Ⅳ	珪質頁岩	
5	M－7(d)	Ⅲ	スクレイパー	43.0	37.0	11.0	———	Ⅲ	珪質頁岩	274

第159図　出土石器(6)

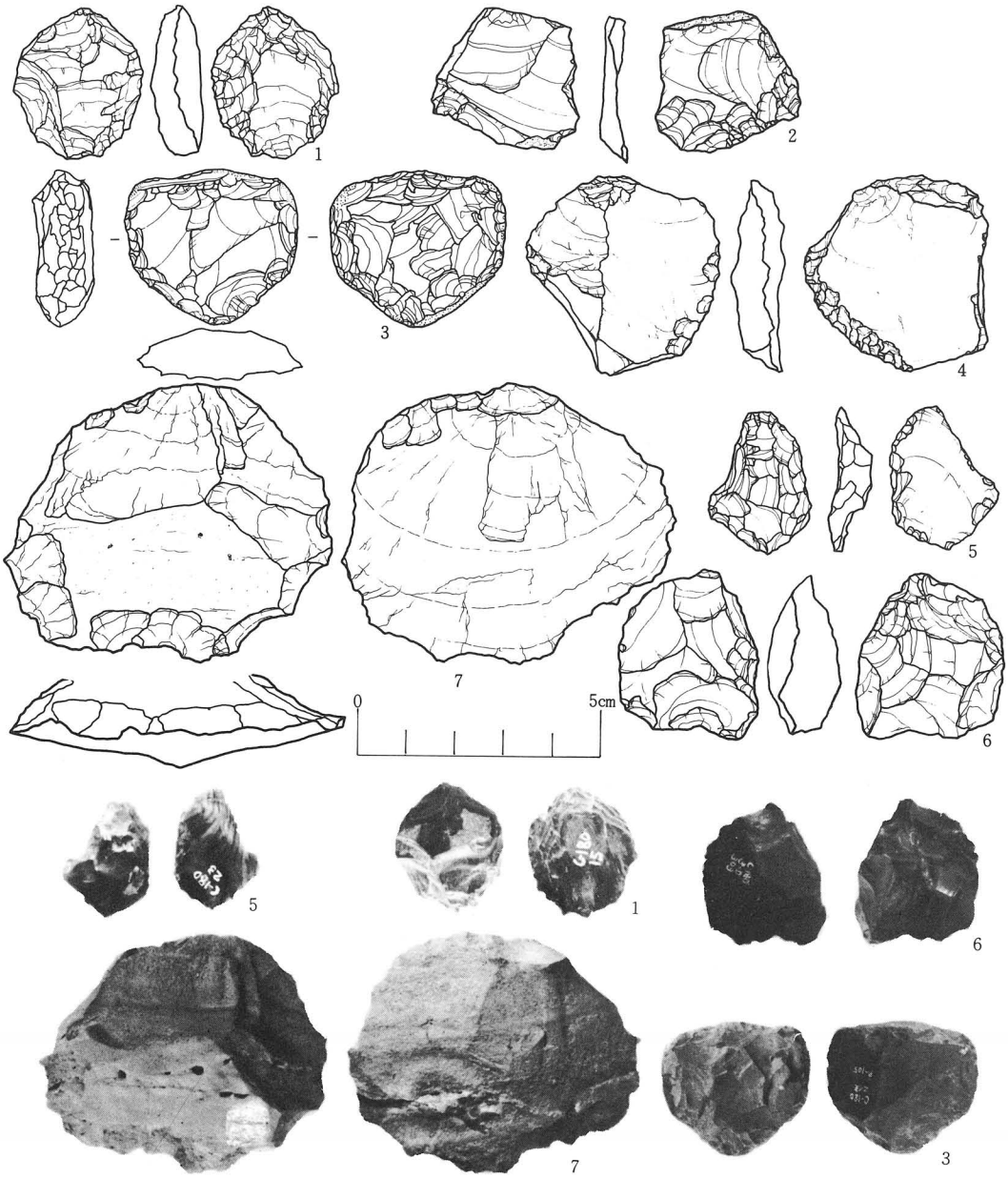


観察表

単位：mm

図	地　区	層位	名　称	長さ	幅	厚さ	備　考	分　類	石　材	登録番号
1	K－8（b）	Ⅲ	スクレイパー	80.2	30.0	11.5	―――	Ⅲ	珪質頁岩	233
2	O－7	Ⅲ	スクレイパー	72.3	35.0	15.0	―――	Ⅲ	珪質頁岩	10
3	J－7（d）	Ⅲ	スクレイパー	76.5	45.0	12.3	―――	Ⅲ	珪質頁岩	281
4	L－7（d）	Ⅲ	スクレイパー	51.5	17.0	7.5	―――	Ⅲ	珪質頁岩	217
5	L－8	Ⅰ	スクレイパー	44.0	21.0	5.0	―――	Ⅲ	珪質頁岩	49

第160図　出土石器（7）

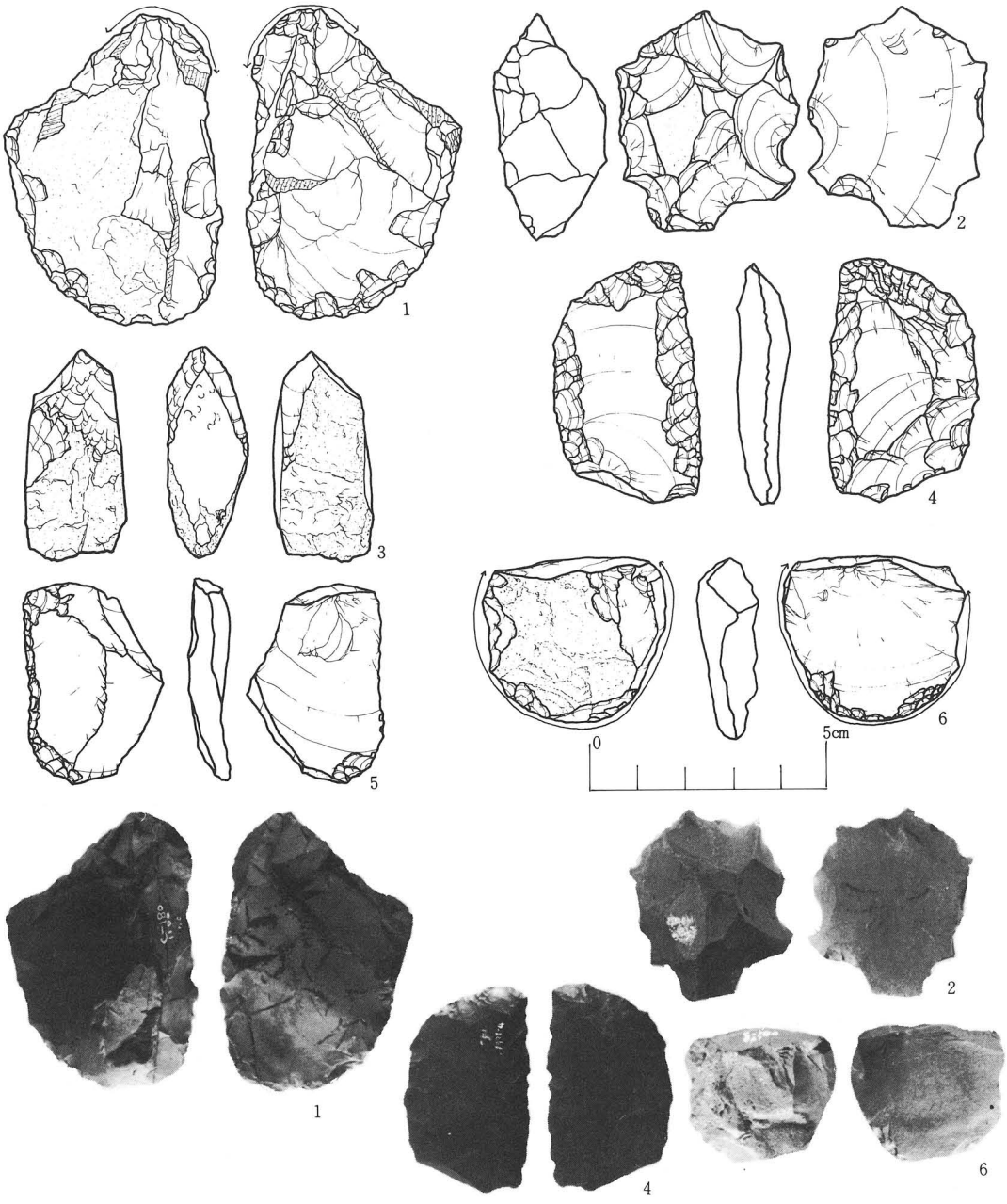


観察表

単位：mm

図	地　区	層位	名　称	長さ	幅	厚さ	備　考	分　類	石　材	登録番号
1	Q－7	Ⅰ	ポイント	32.0	27.0	10.5	———	Ⅳ	珪化木	15
2	N－7（c）	Ⅲ	スクレイパー	28.0	30.5	4.0	———	ⅠA	珪質頁岩	512
3	K－13	Ⅳb上	スクレイパー	32.5	36.0	12.0	敲打による刃こぼれが全周をめぐる	ⅠC	珪質頁岩	2212 PS-105
4	Q－7（d）	Ⅲ	スクレイパー	41.0	40.0	11.0	———	ⅠF	珪質頁岩	774
5	J－7（c）	Ⅰ	スクレイパー	28.0	22.5	7.0	———	ⅠY	珪化木	79
6	L－7（a）	Ⅲ	スクレイパー	34.3	29.0	15.0	———	ⅠB	チャート	303
7	K－12	Ⅳb上	スクレイパー	57.0	68.5	17.2	———	ⅠD	珪質頁岩	2603 PS-26

第161図　出土石器（8）

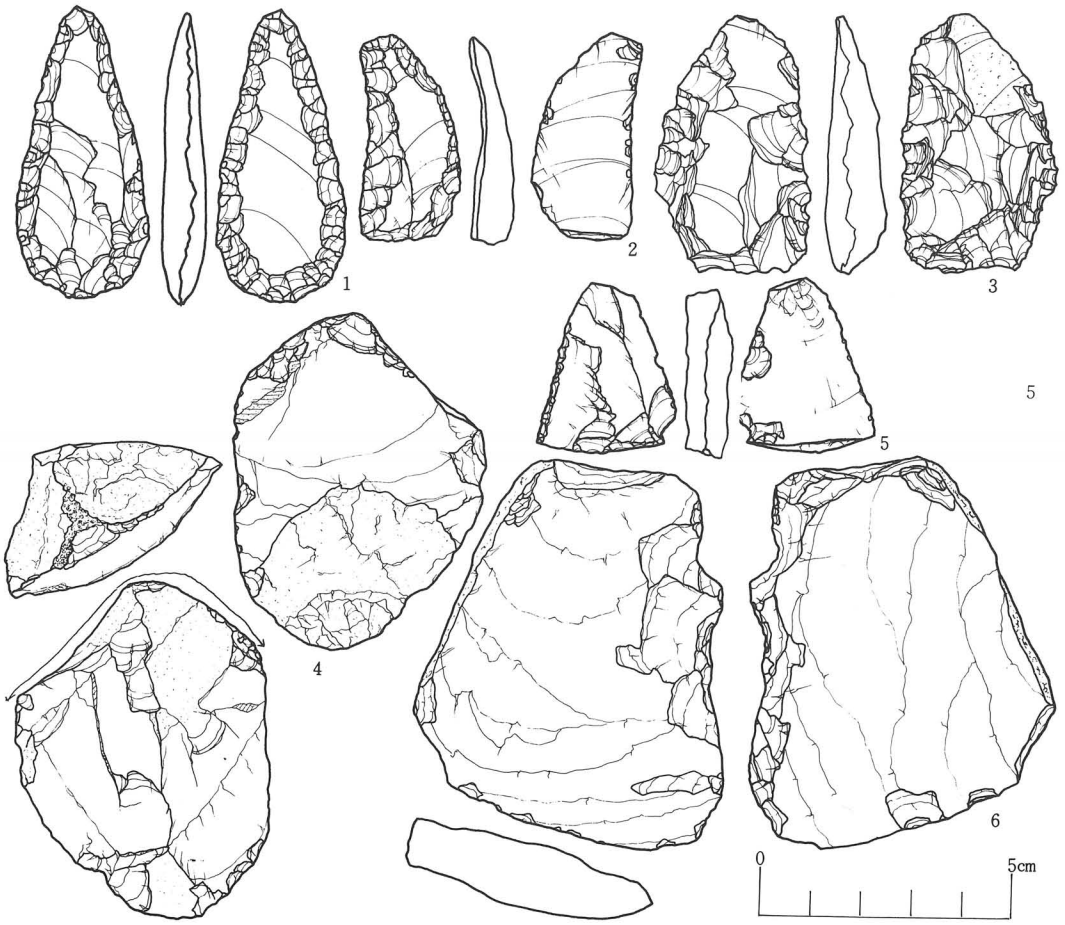


観察表

単位：mm

図	地　区	名　称	長さ	幅	厚さ	備　考	分　類	石　材	登録番号
1	80年表採	スクレイパー	65.3	44.0		←→敲打による刃こぼれ	X	珪質頁岩	1100
2	81年表採	スクレイパー	46.3	37.5	23.0	――	ID	珪質頁岩	
3	81年表採	ピエスエスキーユ又はコア	44.0	20.2	16.5	側面に打撃痕が認められる	II	チャート	
4	79年表採	スクレイパー	51.5	31.5	10.3	――	III	珪質頁岩	
5	80年表採	スクレイパー	42.0	28.0	8.4	――	X	珪質頁岩	1088
6	80年表採	スクレイパー	35.0	38.0	13.0	←→敲打による刃こぼれ	IC	珪質頁岩	

第162図　出土石器(9)

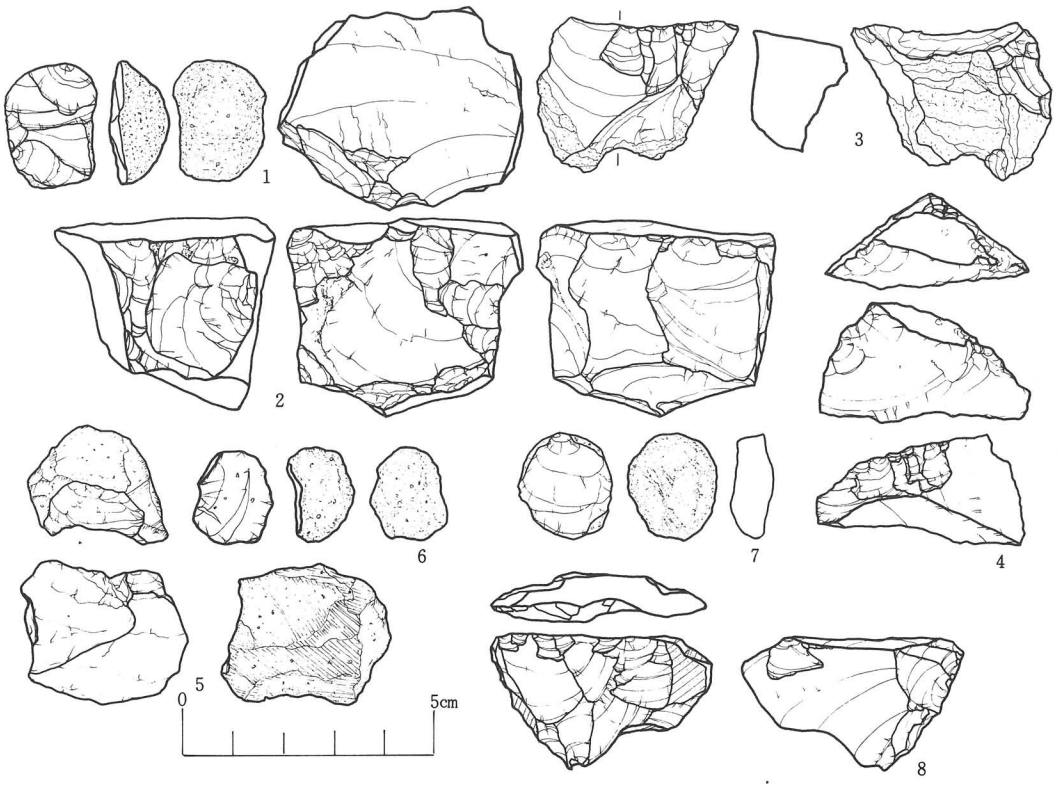


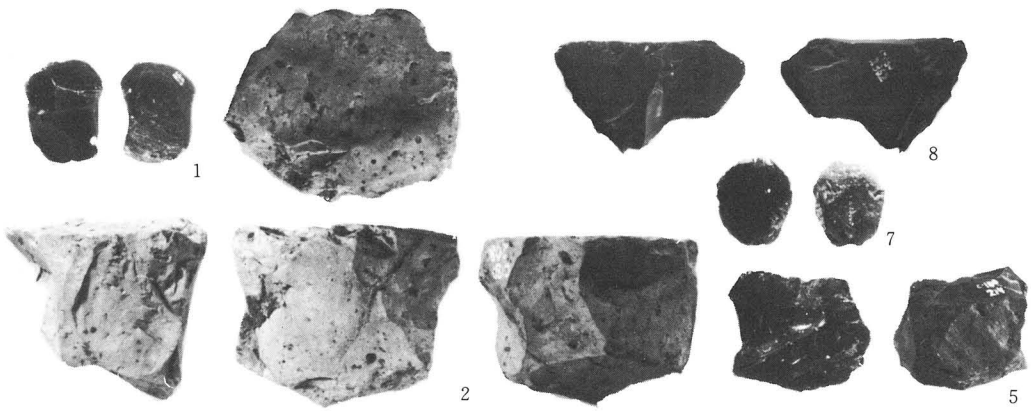
観察表

単位：mm

図	地　区	層位	名　称	長さ	幅	厚さ	備　考	分　類	石　材	登録番号
1	K－13	Ⅲ	篦状石器	58.2	26.0	9.0	———	Ⅲ	珪質頁岩	2316
2	L－7(b)	Ⅲ	篦状石器	41.0	20.0	8.0	———	(Ⅰ)	珪質頁岩	220
3	K－7(c)	Ⅲ	篦状石器	51.2	30.5	12.5	———	Ⅰ	珪質頁岩	1005
4	K－6(b)	Ⅲ	スクレイパー	67.0	49.3	28.5	←→敲打による刃こぼれ	Ⅹ	珪質頁岩	330
5	N－7	Ⅰ	スクレイパー	34.5	22.5	9.0	———	Ⅹ	珪質頁岩	38
6	J－12(c)	Ⅰ	スクレイパー	75.0	62.0	20.0	同一母岩(分類番号No.50)	Ⅹ	流紋岩頁岩	2486

第163図　出土石器(10)



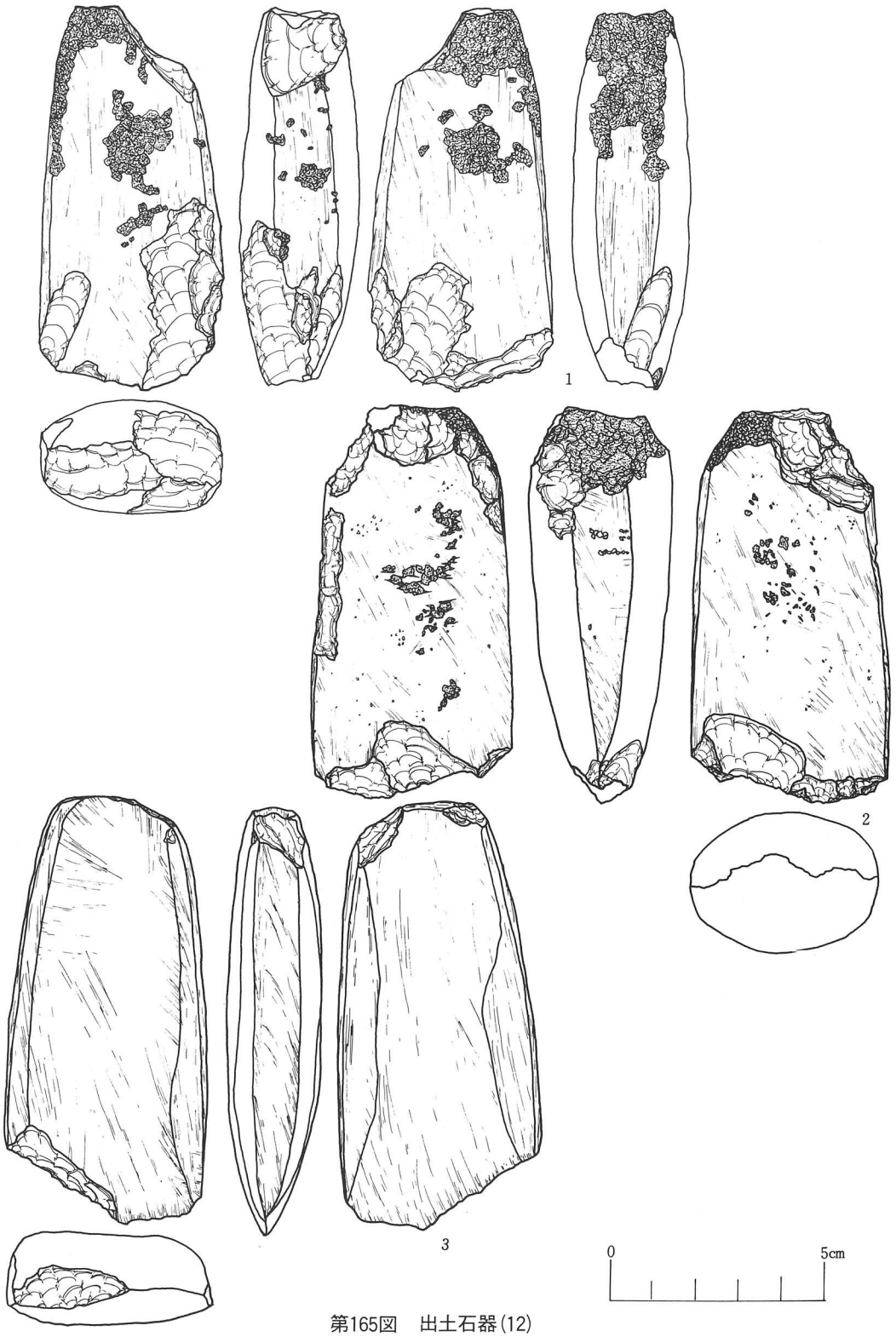


観察表

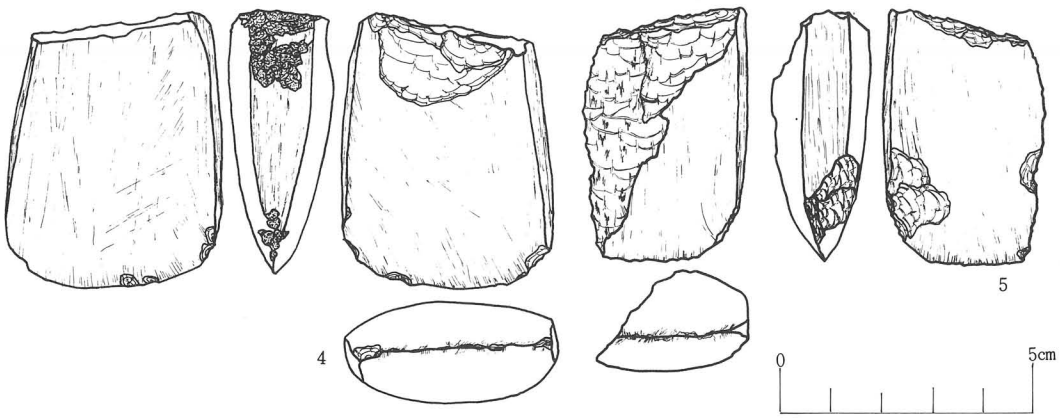
単位：mm

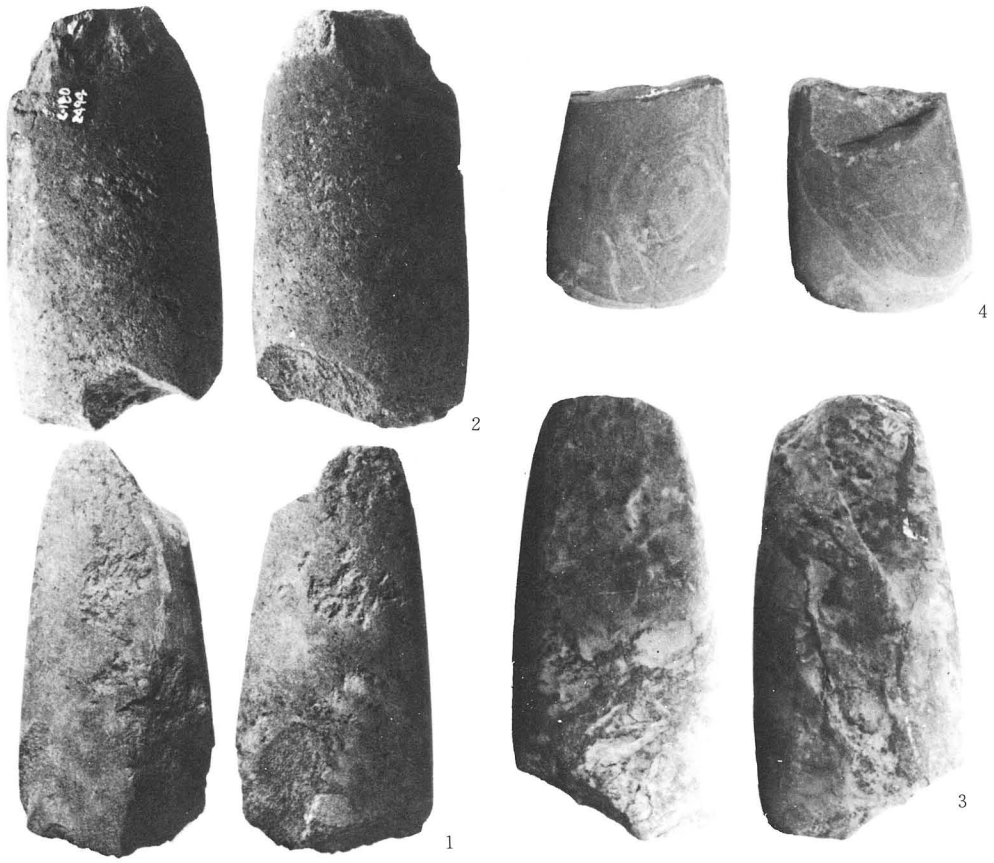
図	地　区	層位	名称	長土	幅	厚さ	備　　考	石　材	登録番号
1	K－7(c)	Ⅳb	石核	25.0	18.0	11.5	――	黒曜岩	599
2	K－7(d)	Ⅲ	石核	38.5	46.5	40.0	――	珪質凝灰岩	208－②
3	K－12	Ⅳb	石核	31.0	40.0	19.5	――	珪質頁岩	2571
4	J－6(c)	Ⅲ	石核	23.5	40.0	19.0	打面に打撃痕がある	珪質頁岩	641
5	L－7(a)	Ⅲ	石核	28.0	34.0	22.5	――	黒曜岩	214
6	M－7	Ⅲ	石核	19.0	16.0	12.5	――	黒曜石	293
7	I－14(a)	Ⅰ	石核	21.5	18.0	9.0	――	黒曜石	2167
8	Q－12(d)	Ⅰ	石核	22.0	43.0	10.0	――	珪質頁岩	2362

第164図　出土石器(11)



第165図　出土石器(12)



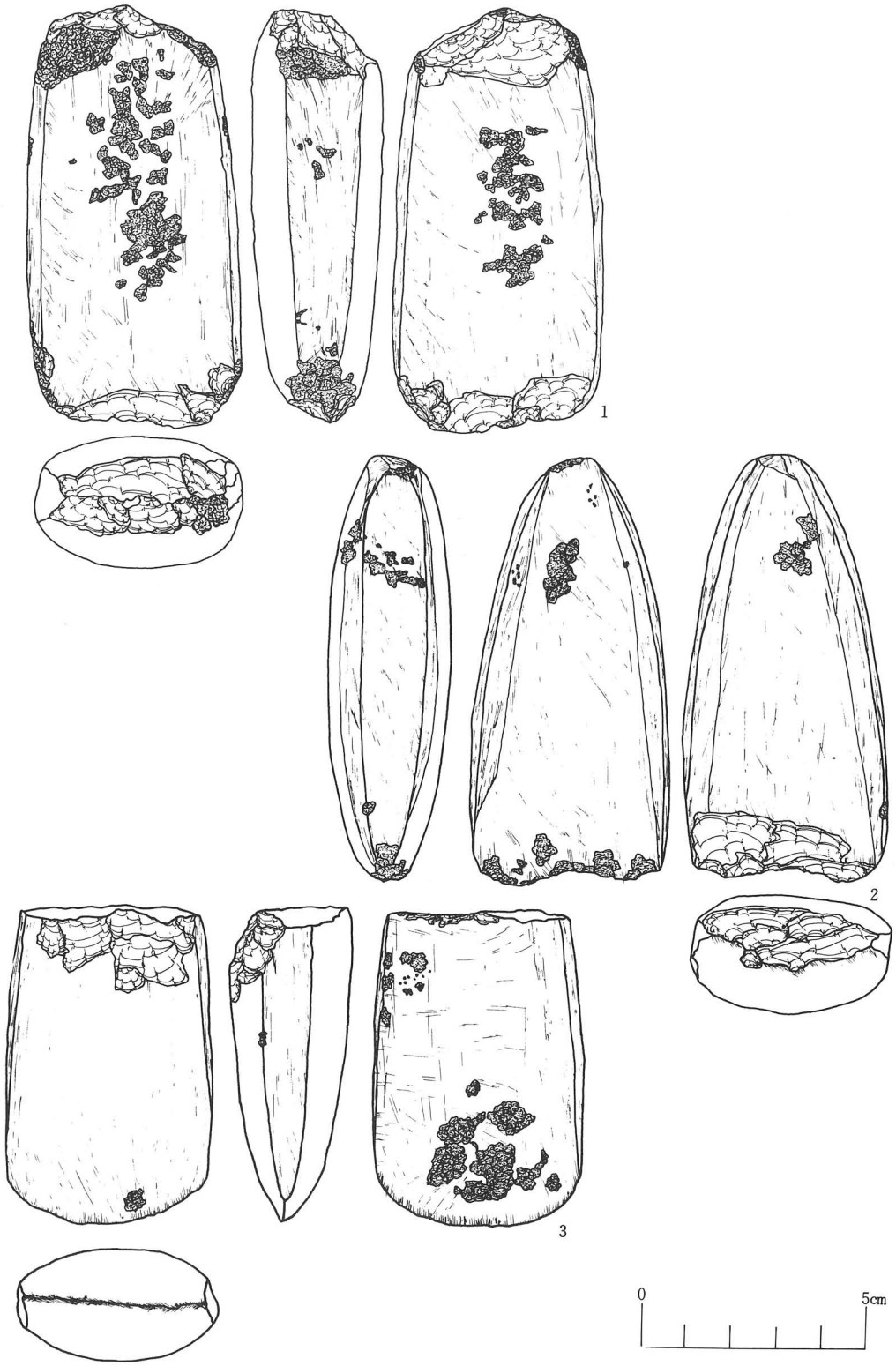


観察表

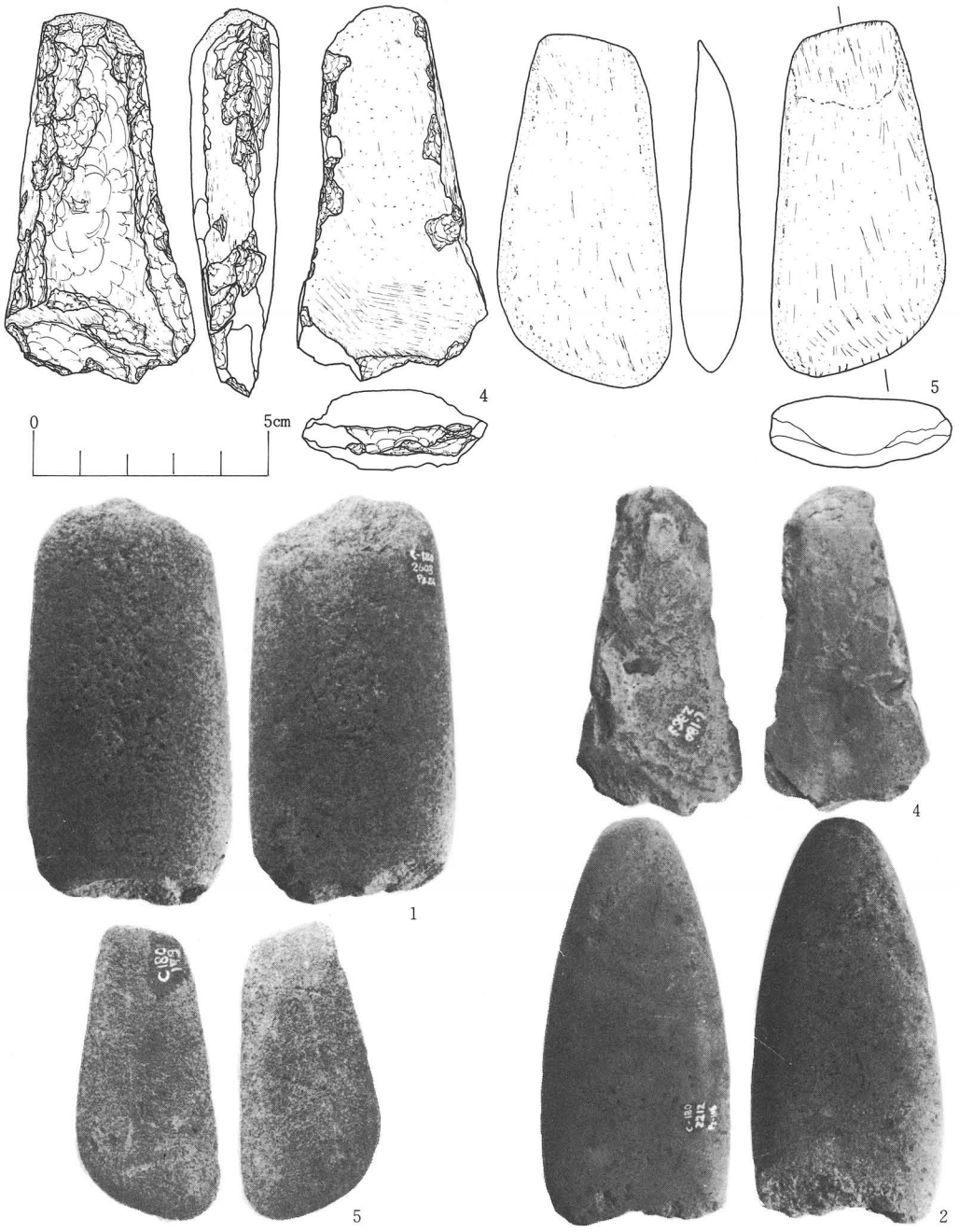
単位：mm

図	地区	層位	名称	長さ	幅	厚さ	破損部	備考	分類	石材	登録番号
1	J－7(d)	Ⅲ	磨製石斧	(90.0)	(43.0)	28.0	基部、刃部	基部、Ⅰの片側面、Ⅱの両面に敲打痕(B)	Ⅱa	安山岩	164
2	K－12(b)	Ⅰ	磨製石斧	92.8	46.7	33.2	———	基部の片面に敲打痕(B)、Ⅱの両面に敲打痕(A)	Ⅱa	安山岩	2494
3	P－12(a)	Ⅰ	磨製石斧	(79.4)	(40.8)	16.9	基部の一部、刃部の一部	———	Ⅰ	珪質岩(堆)	11
4	N－6	Ⅰ	磨製石斧	(54.0)	(41.3)	(20.6)	Ⅰ、Ⅱ	Ⅱの片側面に敲打痕(B)	—	凝灰質砂岩	39
5	J－7(a)	Ⅲ	磨製石斧	(52.0)	(32.2)	(20.0)	Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ'	———	—	安山岩	162

第166図　出土石器(13)



第167図　出土石器(14)

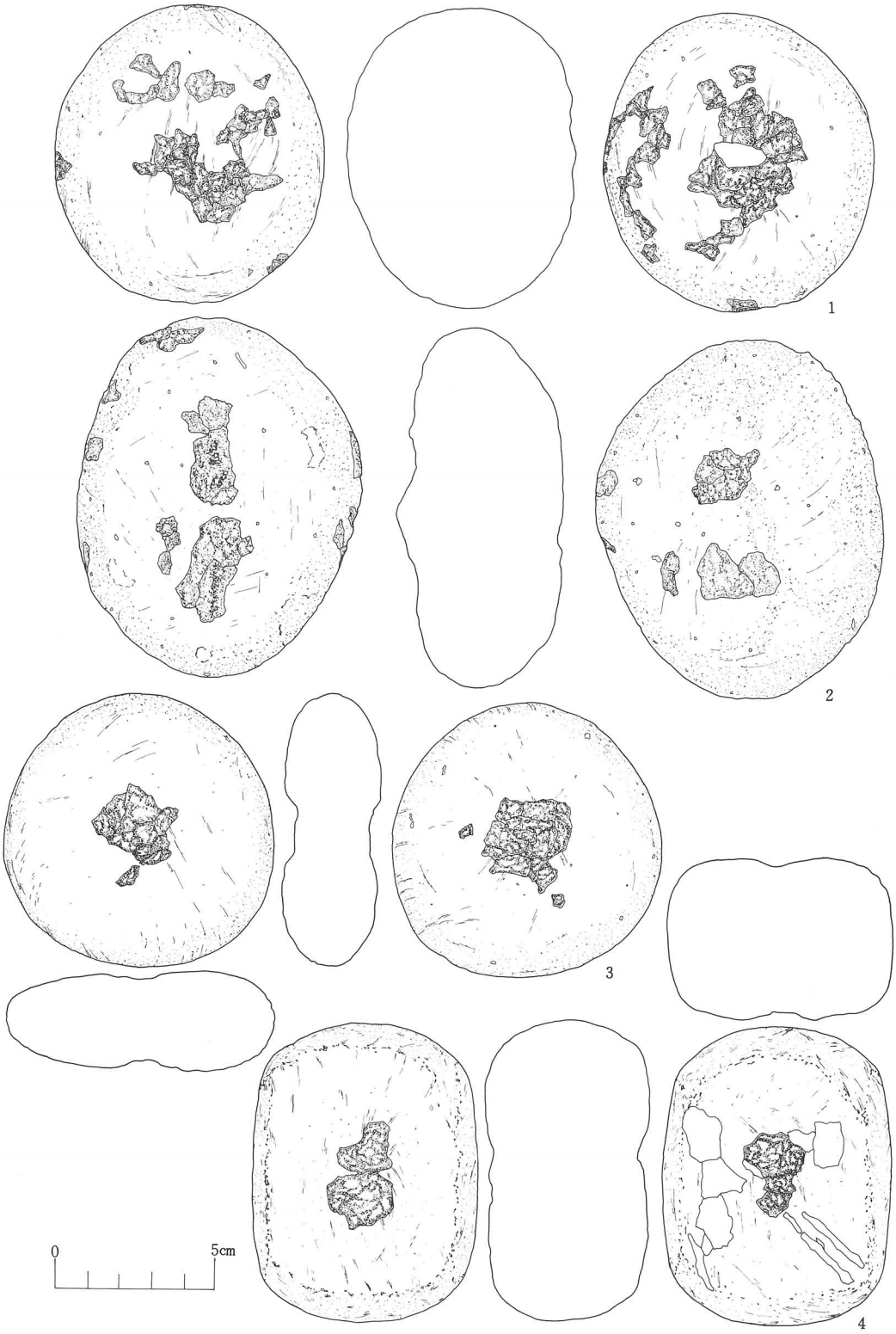


観察表

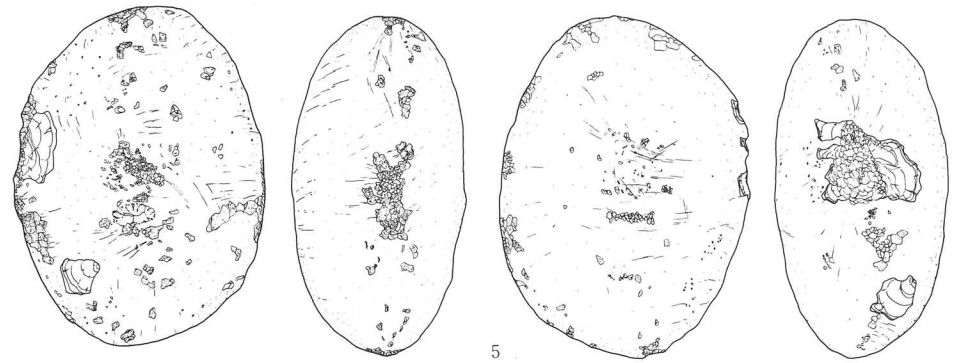
単位：mm

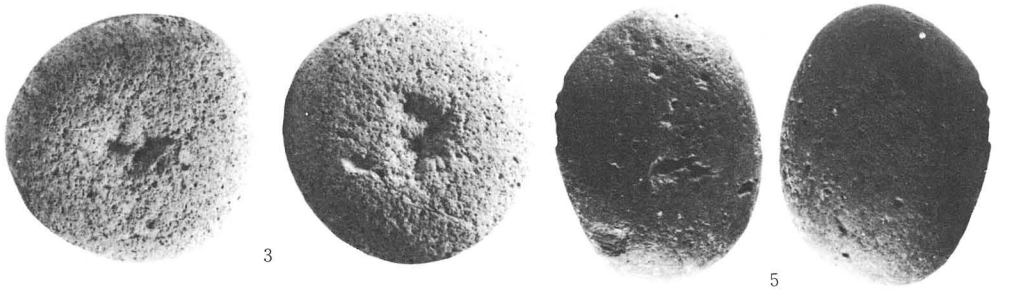
図	地　区	層位	名称	長さ	幅	厚さ	破損部	備　考	分類	石材	登録番号
1	K－12(bc)	Ⅳb上	磨製石斧	96.8	47.8	30.6	基部、刃部	Ⅰ～Ⅲの胴部両面中央部に敲打痕(B) Ⅰの胴部片面及び片側縁部に敲打痕(A)	Ⅱa	安山岩	2603 PS－24
2	P－12(d)	Ⅰ	磨製石斧	(98.7)	(44.0)	25.0	Ⅰ、刃部の一部	基部と刃部とに敲打痕(A)	Ⅱb	安山岩	2284
3	K－12(bc)	Ⅳb上	磨製石斧	(71.5)	46.3	(25.6)	Ⅰ	Ⅲの胴部片面に敲打痕（A～B）	Ⅰ	安山岩	2603 PS－23
4	P－12(a)	Ⅰ	砥石	79.4	40.8	16.9	――	打製石斧(?)様に製作後、砥石に転用	―	不明	2363
5	J－6(c)	Ⅲ	(礫石器)	75.0	37.0	13.0	――	自然礫の細身になる部分を舌状に擦っている	―		173

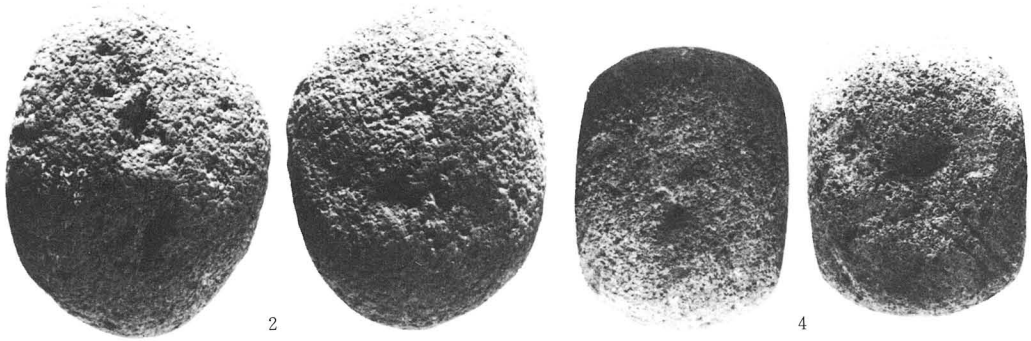
第168図　出土石器(15)



第169図　出土石器(16)





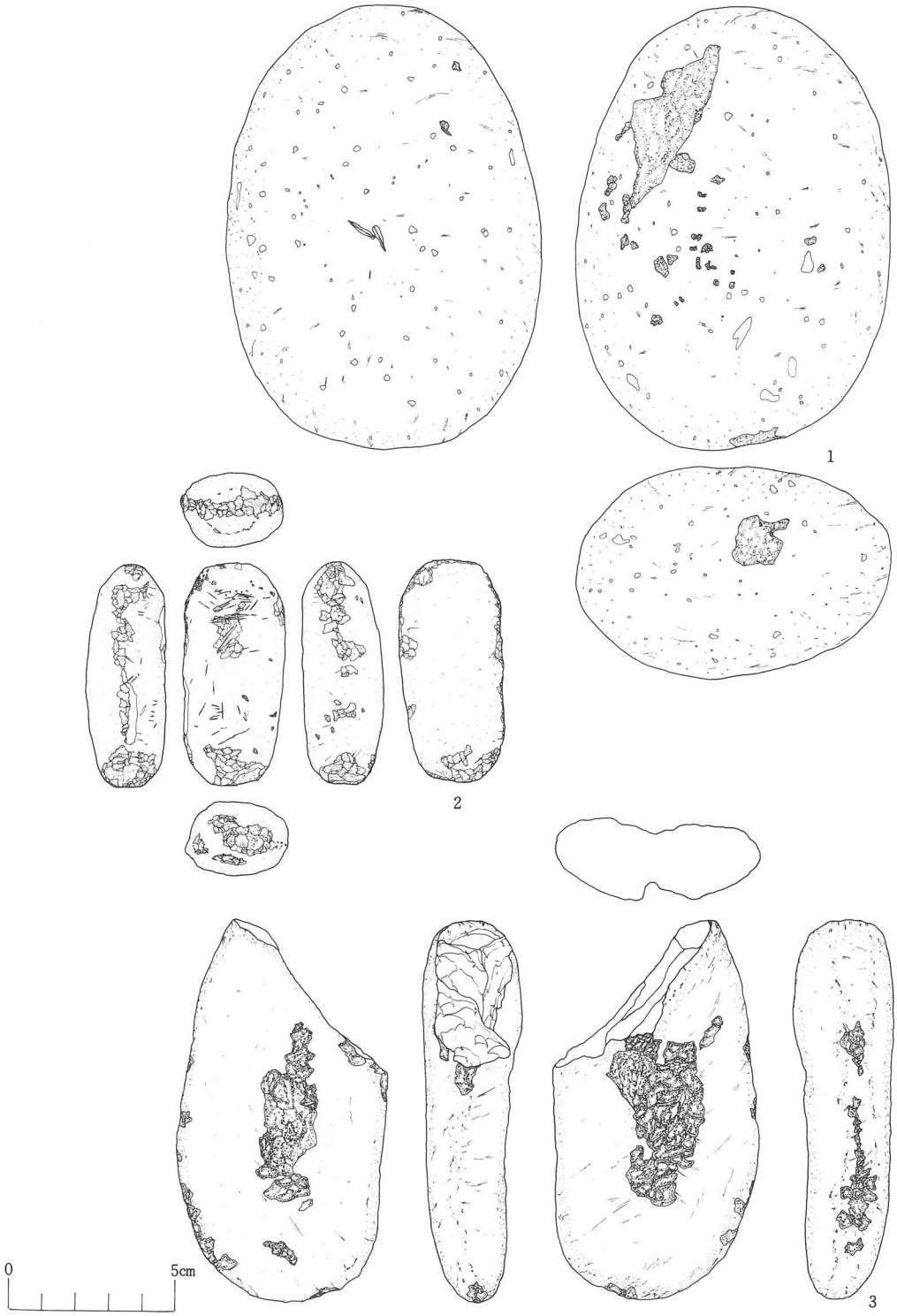


観察表

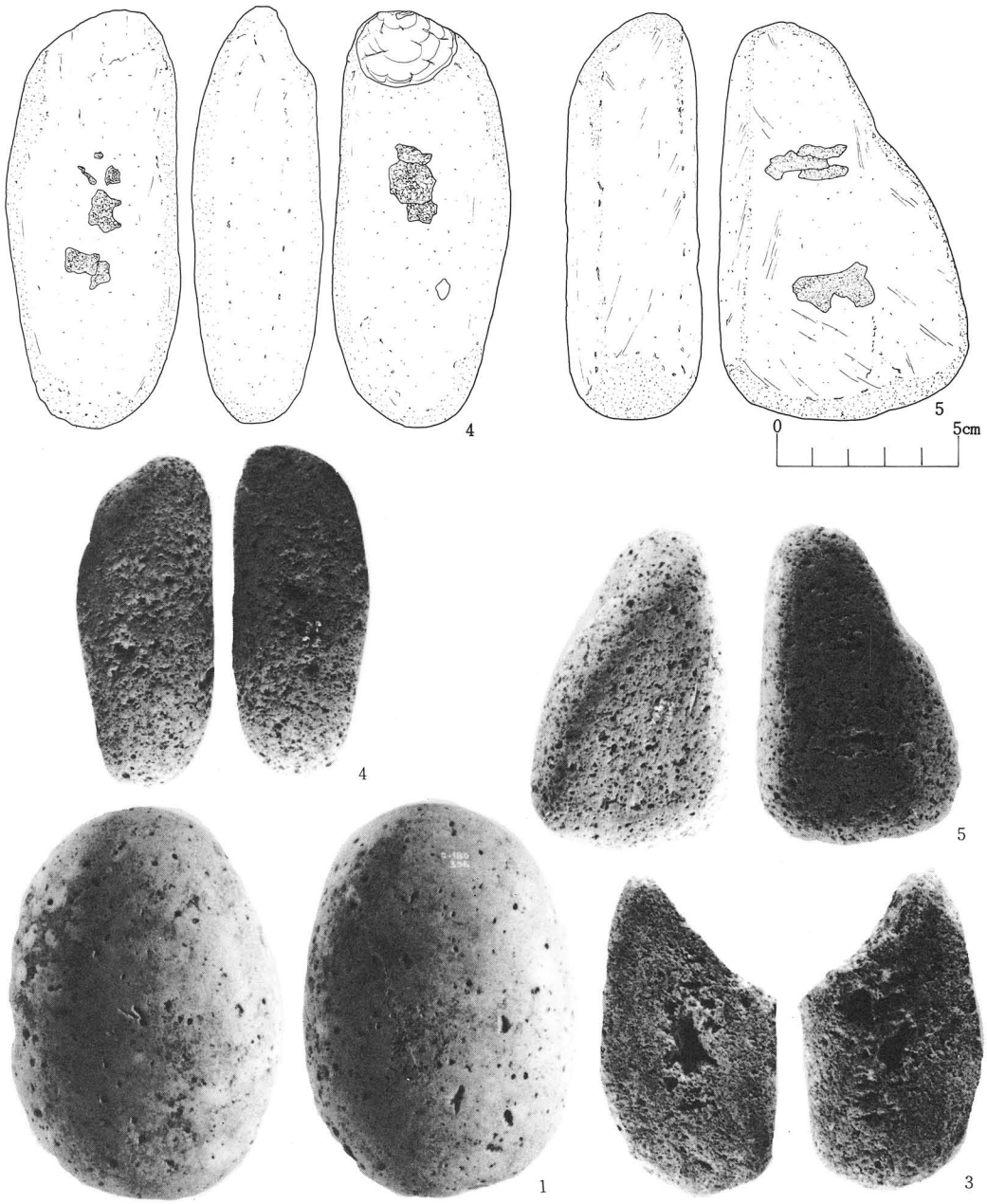
単位：mm・g

図	地　区	層位	長さ	幅	厚さ	重量	礫の形態	使用痕・他	分類	石　材	登録番号
1	L－6	Ⅰ	92.6	79.7	70.5	725	A	両面に磨痕(a) 両面に敲打痕(b-2)	Ⅲ	安山岩	95
2	K－12(b)	Ⅳb上	110.7	86.7	50.9	570	C	両面に磨痕(a) 両面に敲打痕(b-2)	Ⅲ	安山岩	2698
3	O－b(b)	Ⅲ	83.8	85.2	31.4	340	B	両面に磨痕(a) 両面に敲打痕(b-2)	Ⅲ	安山岩	834 PS－55
4	P－12	Ⅰ	91.0	68.9	50.6	590	C	両面に磨痕(a) 両面に敲打痕(b-2)	Ⅲ	安山岩	2747-8
5	K－7(c)	Ⅲ	90.0	66.0	45.0	445	C	両面に磨痕(a) 両面側面に敲打痕(b-1)	Ⅲ	安山岩	649

第170図　出土石器(17)



第171図　出土石器(18)



観察表

単位：mm.g

図	地　区	層位	長　さ	幅	厚さ	重量	礫の形態	使用痕・他	分　類	石　材	登録番号
1	I－7(d)	II	133.0	92.0	61.8	120	C	全面に磨痕(a) 茶・黒色の付着物が一部に有り	III	安山岩	306
2	P－9(a)	I	67.0	30.0	25.0	85	C	両面に磨痕(a) 側面に敲打痕(b-1)	I	不　明	2218
3	P－11(a)	III	115.6	61.8	22.5	190	E	両面に磨痕(a) 両面に敲打痕(b-2)	III	安山岩	2280 PS-9
4	K－13(b)	I	116.8	47.8	34.6	260	E	両面、両側面に磨痕(a) 両面に敲打痕(b-2)	III	安山岩	2462 ①
5	K－10(b)	I	114.2	66.8	37.2	450	F	両面、一側面に磨痕(a) 片面に敲打痕(b-2)	III	安山岩	2462 ②

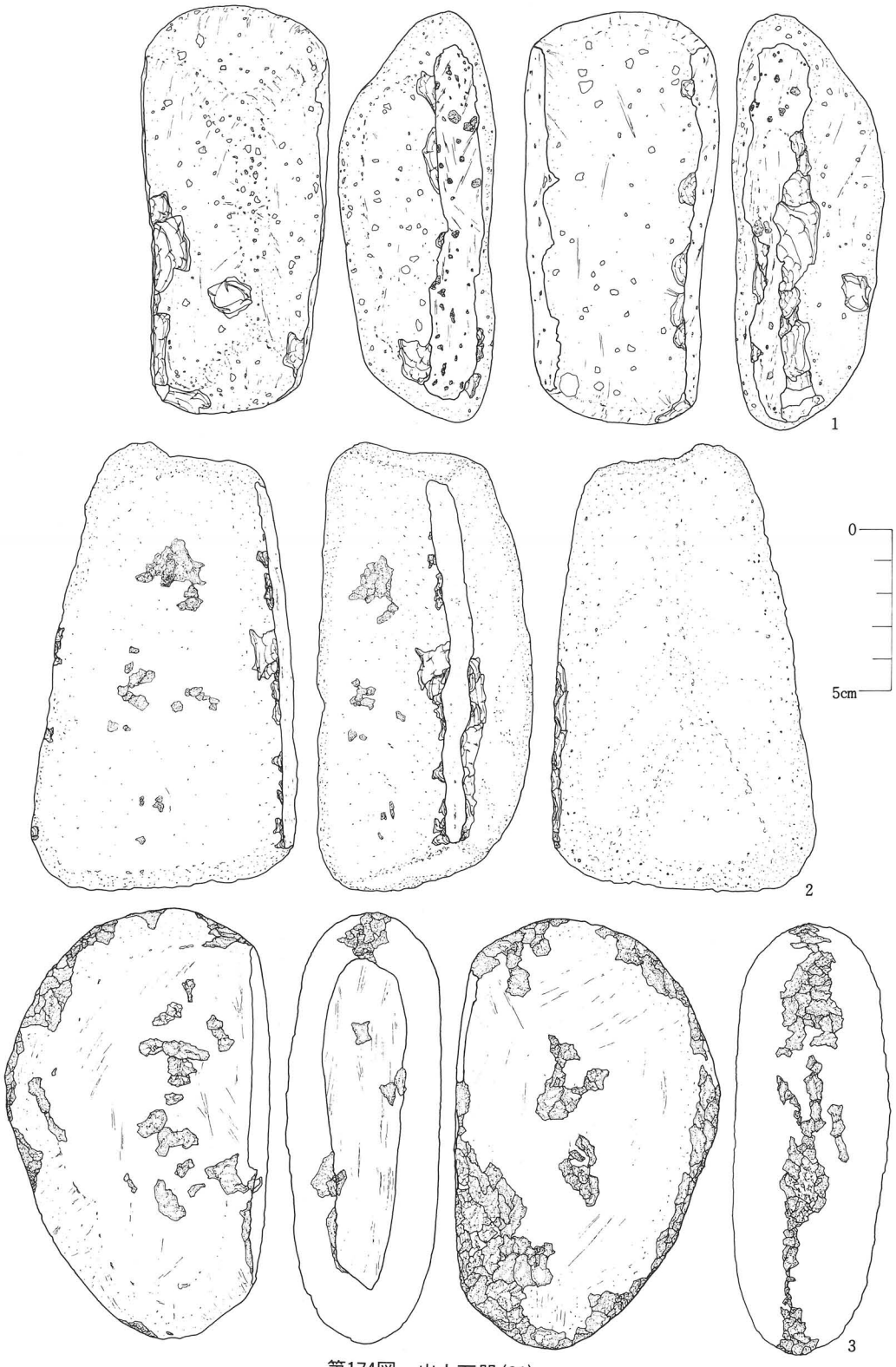
第172図　出土石器(19)

観察表

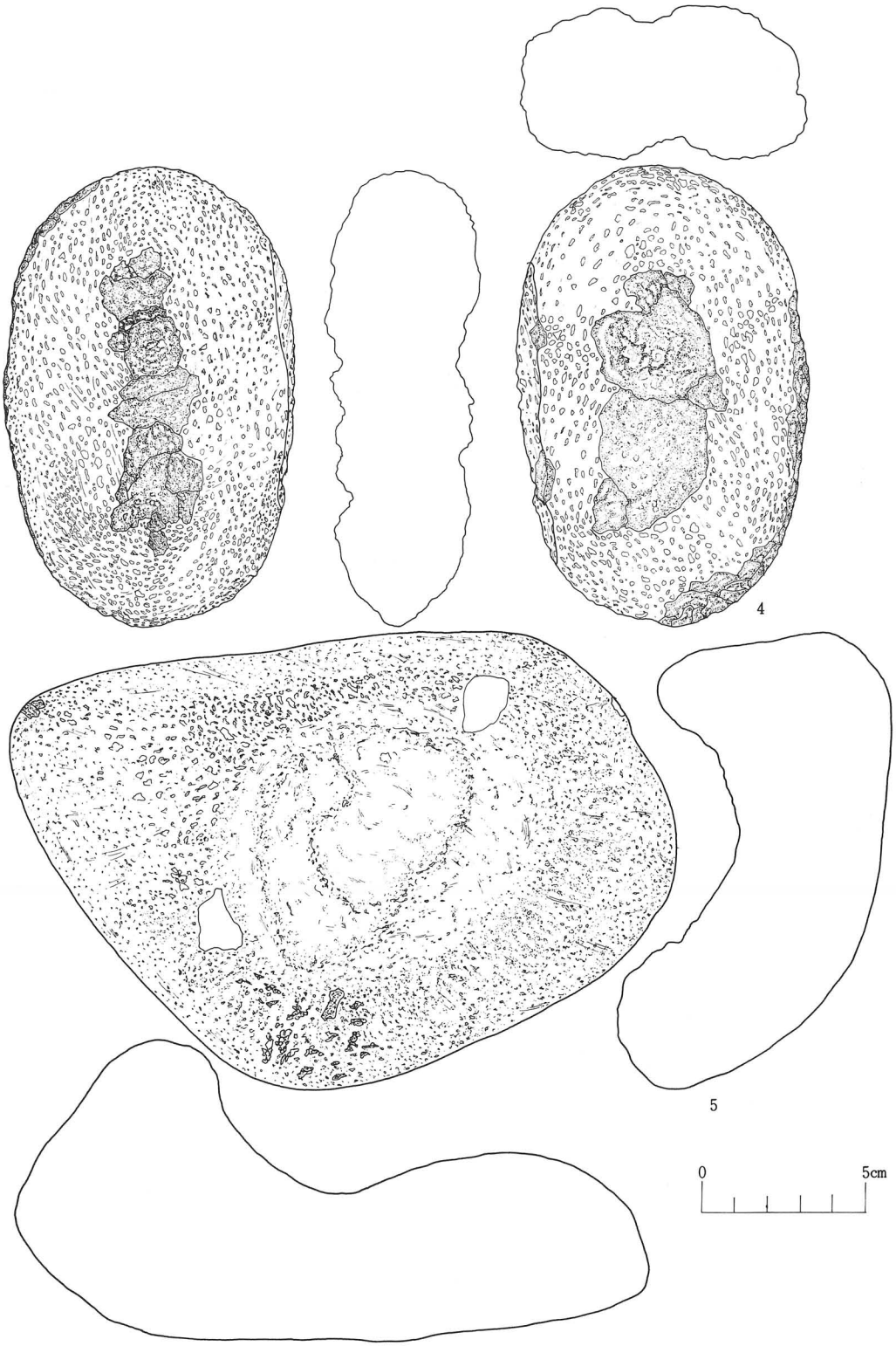
単位：mm.g

図	地　区	層位	長　さ	幅	厚さ	重量	礫の形態	使　用　痕　・　他	分　類	石　材	登録番号
1	K－13	Ⅳb 上	181.0	89.0	57.0	1150	F	a・b両面にスス状の付着物	(Ⅲ)	安山岩	2323

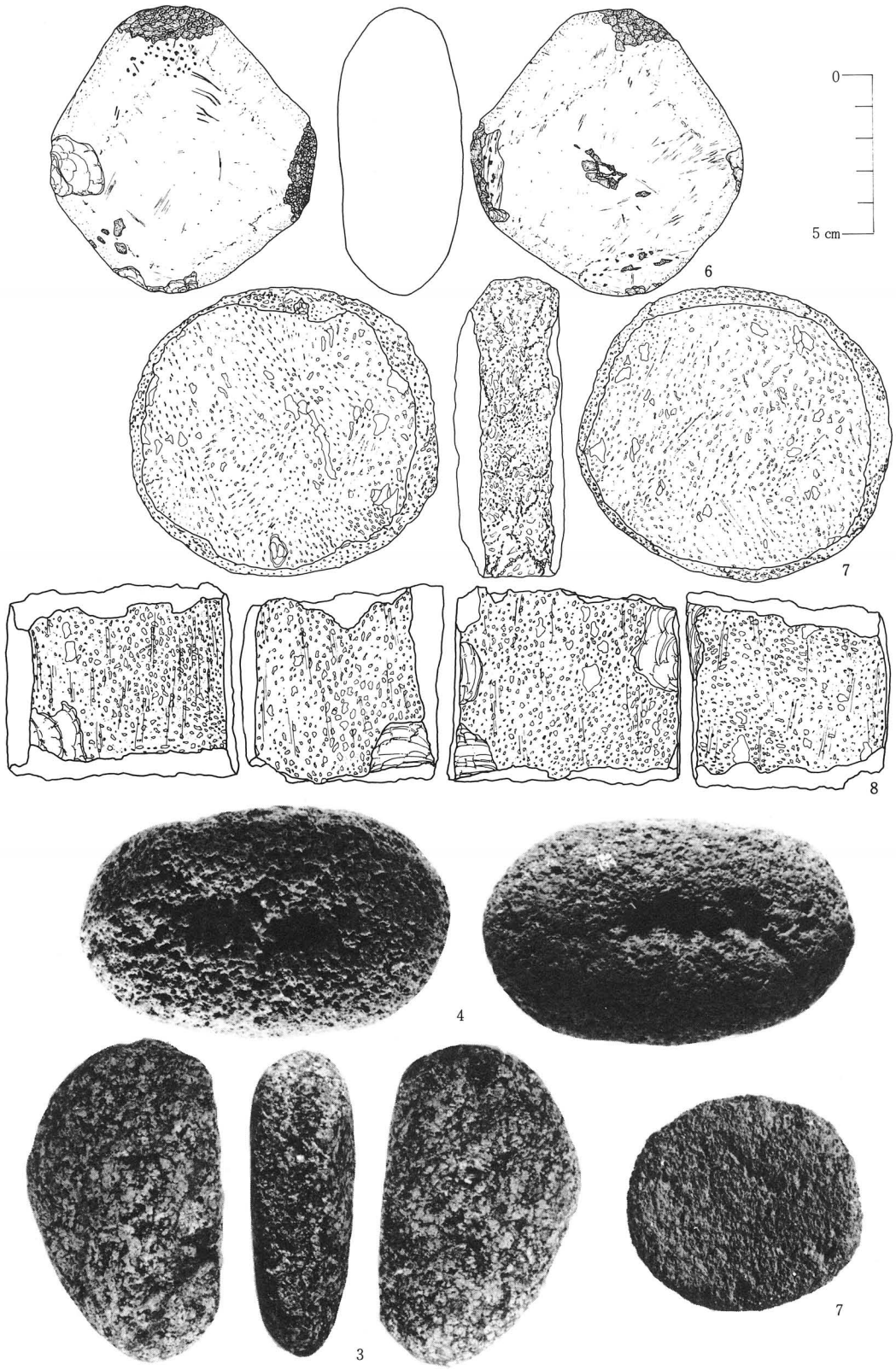
第173図　出土石器(20)



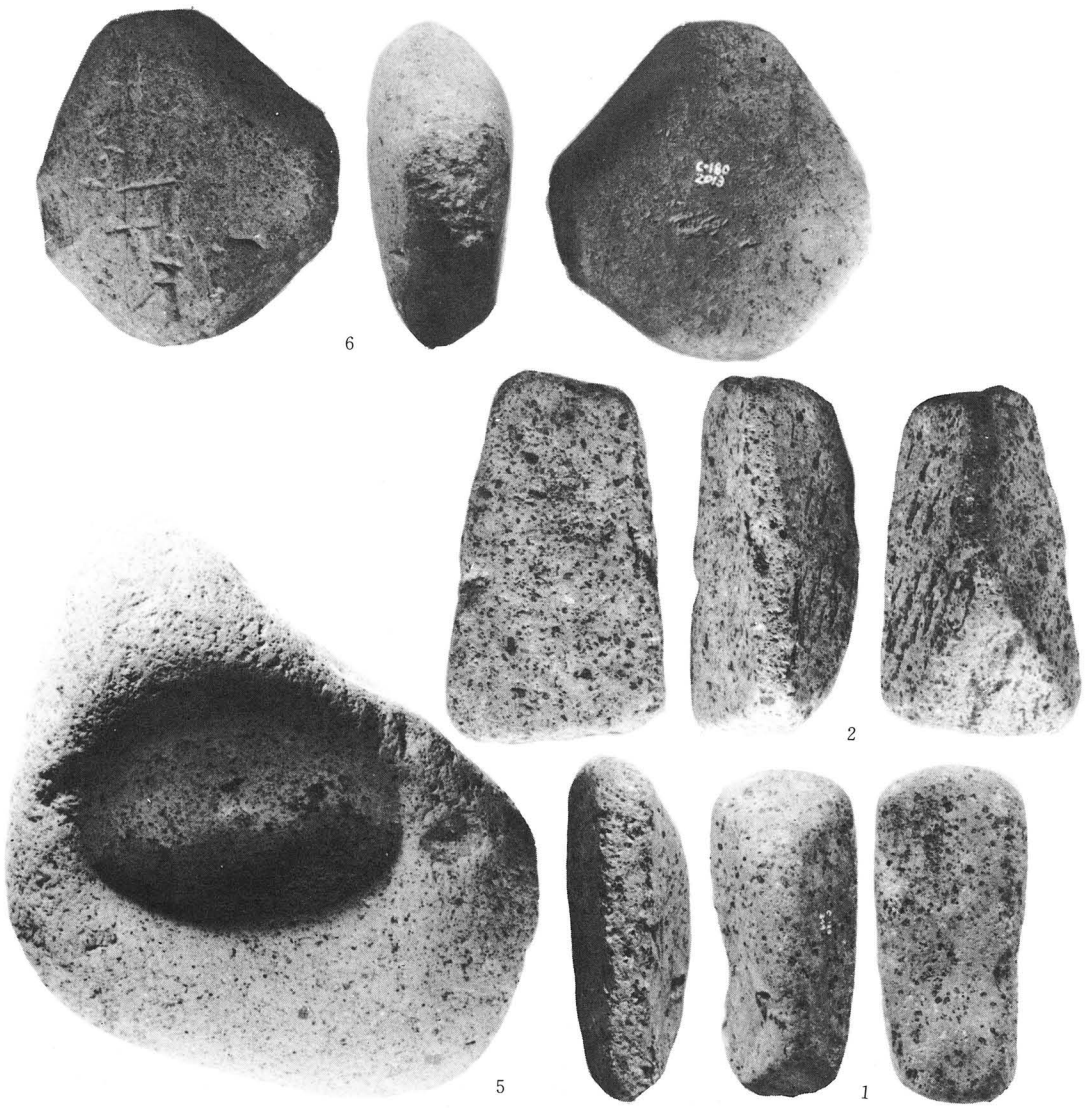
第174図　出土石器(21)



第175図　出土石器(22)



第176図　出土石器(23)

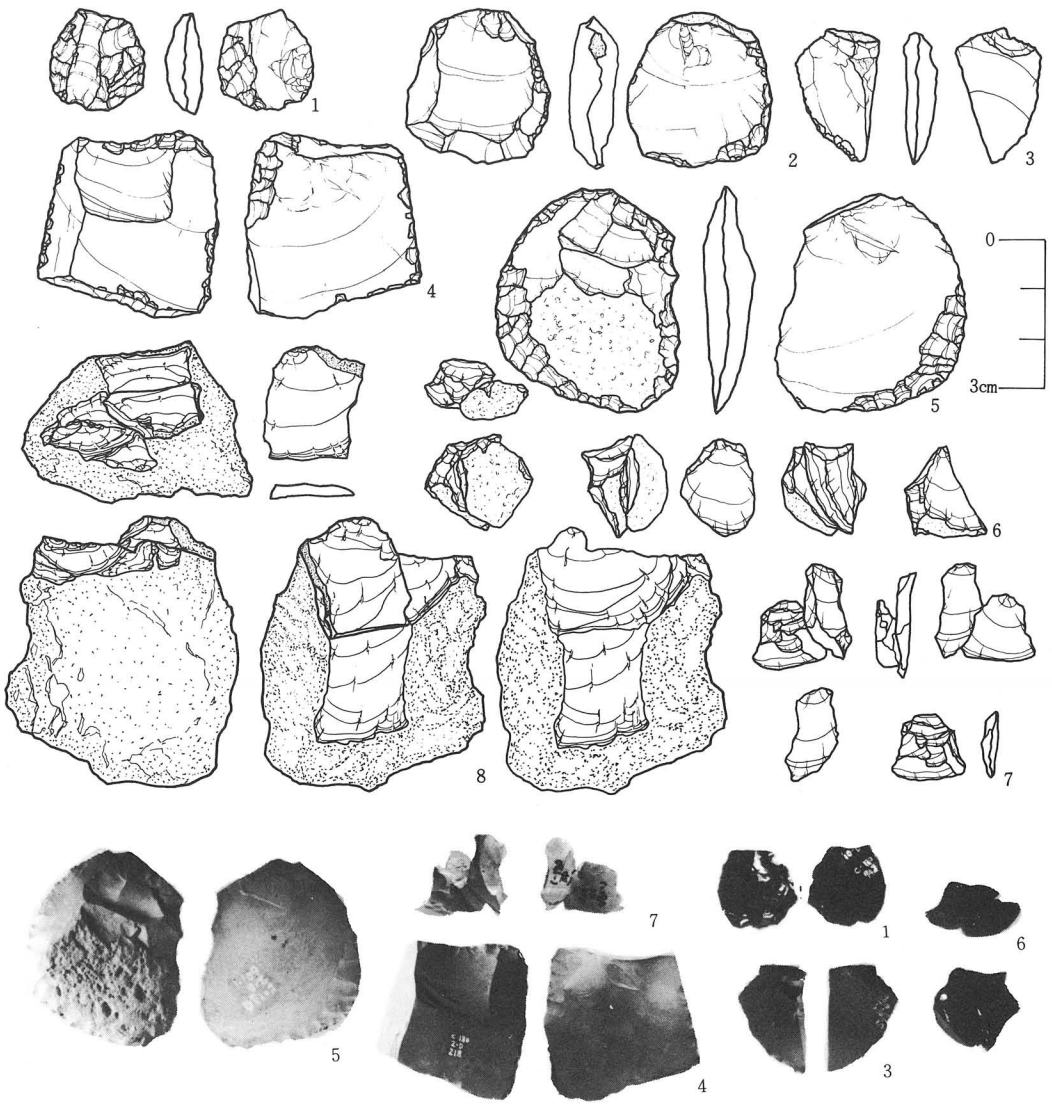


観察表

単位：mm

図	地　区	層位	名　称	長さ	幅	厚さ	重量	礫の形態	使用痕・他	分類	石材	登録番号
1	表　採	—	礫石器	126.0	57.0	47.0	420g	D	両側縁に「擦痕」(c)	Ⅳ	石英安山岩	349
2	M－6	Ⅲ	礫石器	137.0	80.2	65.0	760g	D	両側縁に「擦痕」(c)	Ⅳ	石英安山岩	1036
3	K－13(a)	Ⅳb 上	礫石器	132.0	80.0	47.5	720g	C	片側縁に「擦痕」(c) 両面に敲打痕	Ⅳ	石英内緑岩	2212 PS-112
4	K－7(d)	Ⅲ	礫石器	140.0	89.0	47.0	700g	C	片側縁に「擦痕」(c) 両面に敲打痕	Ⅲ	溶岩	199
5	M－13	Ⅲ	礫石器	300.0	213.0	134.0	10kg	G	皿というより埦状の凹部	Ⅵ-b	安山岩	2749
6	M－13(d)	Ⅰ	礫石器	89.0	82.0	39.0	370g	F	赤い付着物が両面にある	Ⅲ	安山岩	2013
7	K－13	Ⅳb上	石製品	95.0	90.0	33.0	350g	—	両面に磨痕(a) 角部に敲打痕(b-1)	—	溶岩	2316 PS-130
8	M－13(d)	Ⅰ	礫石器	72.0	61.0	62.0	490g	H	四面に磨痕(a)	H	安山岩	2013

第177図　出土石器(24)

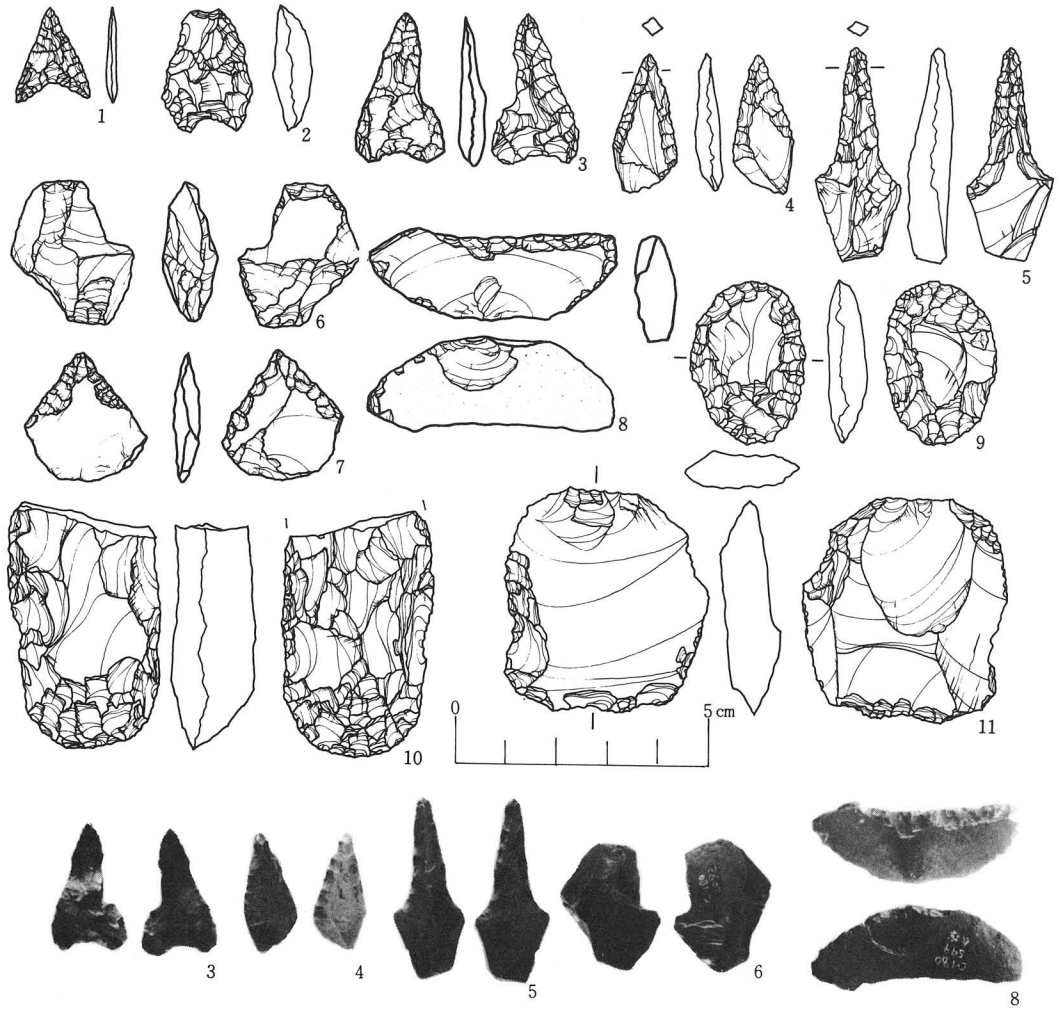


観察表

単位：mm

図	地区・遺構	層位	名称	長さ	幅	厚さ	備考	分類	石材	登録番号
1	J－8(c)	Ⅲ	スクレイパー	19.0	19.0	7.5	――	ⅠE	黒曜岩	742
2	J－8(c)	Ⅲ	スクレイパー	31.0	28.0	8.0	――	ⅠA	珪質頁岩	730
3	1 風	堆	スクレイパー	25.0	16.0	6.0	――	――	珪質頁岩	573
4	1 風	堆	切断調整石器	37.5	34.0	5.4	――	Ⅴ	珪質頁岩	218
5	1 風	堆	スクレイパー	40.5	39.0	10.0	――	ⅠF	珪質頁岩	601
6	J－8(c)+J－8(b・c)	Ⅲ	石核 剝片	19.0 19.0	14.0 14.5	9.0 8.0	接合資料（分類番号No.7）	――	黒曜岩	575+814
7	35D	堆1	剝片 剝片	13.0 19.0	15.0 10.0	2.5 3.0	接合資料（分類番号No.3）	――	珪質細粒凝灰岩	302
8	O－10(a)	Ⅲ	石核 剝片	53.0 23.0	44.0 20.0	32.0 2.5	接合資料（分類番号No.1）	――	珪質細粒凝灰岩	2245+2245

第178図　出土石器(25)



観察表

単位：mm

図	地　区	名　　称	長さ	幅	厚さ	備　　考	分　類	石　材	登録番号
1	79年表採	石　　鏃	19.0	15.0	2.0	―――	Ⅵω⑫	珪質頁岩	
2	79年表採	石　　鏃	24.2	17.6	8.0	先端部欠損	Ⅶω㉑	珪質頁岩	
3	79年表採	石　　鏃	30.0	17.5	5.0	側縁部一部欠損	Ⅵω⑬	珪質頁岩	
4	79年表採	石　　錐	27.5	13.0	5.0	―――	Ⅳb	珪質頁岩	
5	79年表採	石　　錐	43.0	17.0	8.2	―――	Ⅱa_1	珪質頁岩	
6	81年表採	ピエスエスキーユ	29.0	24.0	11.0	―――	Ⅱ	珪質頁岩	2092
7	80年表採	ポ イ ン ト	26.5	23.6	5.0	―――	Ⅴ	珪質頁岩	1012
8	80年表採	スクレイパー	16.5	49.0	7.5	―――	Ⅳ	珪質頁岩	549
9	79年表採	スクレイパー	32.0	22.5	7.5	―――	ⅠB	珪質頁岩	
10	79年表採	篦状石器	49.0	30.0	16.0	基部欠損	Ⅲ	珪質頁岩	
11	79年表採	スクレイパー	44.0	40.0	11.0	―――	(ⅠA)	珪質頁岩	

第179図　出土石器(26)

Ⅴ．古墳時代の遺構と遺物

1．遺構と遺構内出土遺物

古墳時代の遺構としては、土壙1基（35号）が検出されたのみである。

35号土壙（第180・181図）

K－7グリッド北東隅に位置し、Ⅲ層上面で検出された。2号風倒木痕を切っている。上端長軸規模約4m、上端・下端平面形とも不整長楕円形、深さ約50cmを呈する大型の土壙である。長軸が非常に長く、底面は若干凹凸状態で、北東側では1段高くなっている。堆積土は3層から成る。

土壙中央よりやや北西側の上部より完形の土師器の甕が1点ほぼ横位の状態で出土した。他には堆積土1層中より土器片を中心とする縄文時代各時期の遺物が多量に出土したのみである。

当土壙は、Ⅲ層上面で検出されている上、縄文各時期の土壙と形態が異なるという点、加えて土師器の甕が土壙上部に置かれていた可能性が強いことより、所属時期は土師器の年代より古墳時代中期と考えられる。

佐　藤　甲　二

2．出　土　遺　物（第181・182図）

土師器　甕2点があるだけで、35号土壙(第181図1)、Ⅰ－9グリッド第Ⅲ層(第182図1)より出土している。

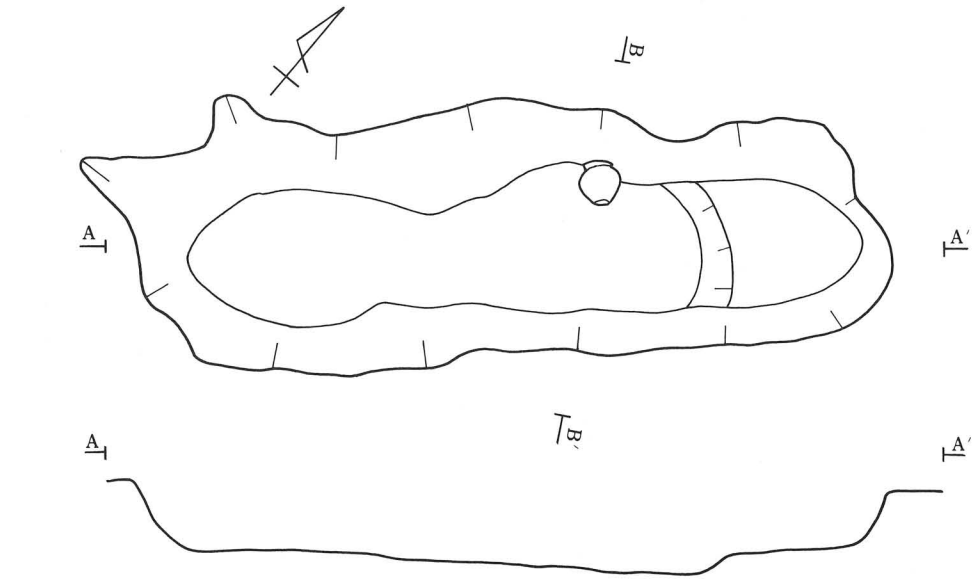
第181図のものは、体部がほぼ球形のもので、口縁部はやや外傾し、端部は丸く、器面全体は厚手である。器高は口径よりも大きく、最大径の位置は体部中央にある。器面調整は口縁部内外面が横ナデ、体部外面が刷毛目後ヘラミガキされ、内面は胎土・焼成が不良のため一部にヘラナデが残るだけである。口縁部には指の圧痕、体部内面には輪積み痕が見られる。さらに外面の体部上半には、黒褐色の炭化物が付着している。

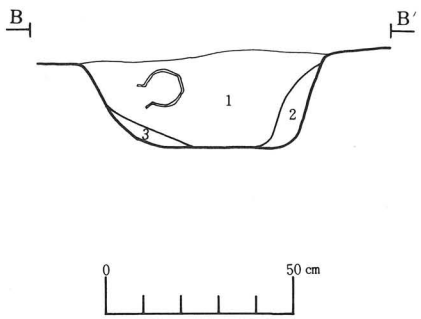
第182図1は、口縁部から体部上半の破片のため全体の器形は不明である。口縁部は外傾し、端部は丸く、器面全体は厚手である。器面調整は、胎土・焼成が不良のため口縁部外面では一部にヘラミガキ、ナデ、内面に横ナデが施されている。口縁部・体部外面に第181図と同様の炭化物が付着している。

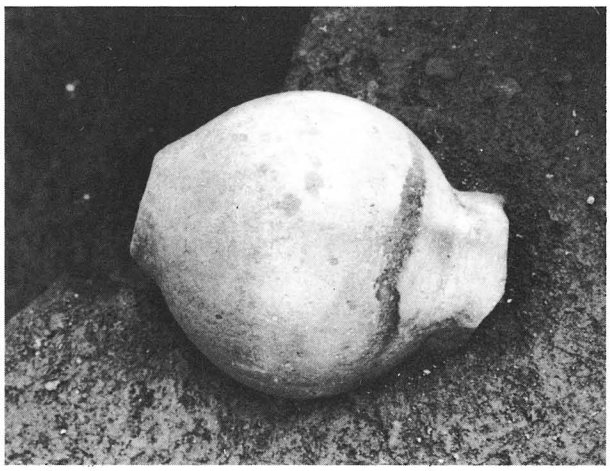
いずれも、個々の出土であり、共伴する遺物はない。氏家和典氏の土師器の編年では、体部が球形となる甕は、古墳時代全般を通じて見られる。栗囲式のものは口縁部と体部との境に段の形成が見られることから35号土壙出土の甕とは区別され、この甕は南小泉式の範疇に含まれると考えられるけれど、共伴する他の器種がなく、明確な時期は明らかでない。ここでは古墳時代中期と位置づけておくが今後の類例の増加に注目したい。

篠　原　信　彦

35 号 土 壙







35号土壙観察表

地区名	検出面	堆積土	平面形態		平面規模 cm		深さ cm	壁角	底面状態	上端長軸方位	備考
			上端	下端	上端	下端					
K-7(b)	Ⅲ層上面	3	長楕円	長楕円	396×134	358×80	27	120°～130°	若干凹凸	N－45°－E	2風を切る

35号土壙土層註記表

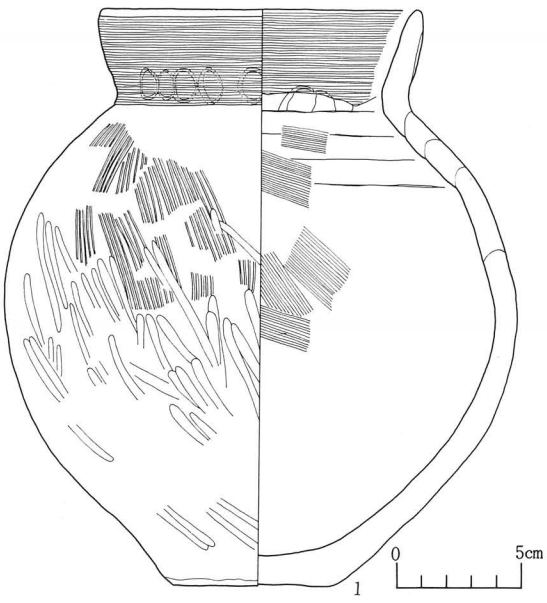
層	色調	土質	粘性	しまり	備考
1	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	やや強い		小礫多量。炭化物。
2	7.5YR4/3 褐色	粘土質シルト			黄色粒。炭化物少量。
3	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト		やや良	

35号土壙出土遺物数量表

遺物 / 堆積土	土師器	縄文土器									土製円盤	石器									備考
	完形	口縁部	体部	底部	群別							石鏃	スイクパー	S F	M F	剝片	チップ	石斧	礫石器		
					Ⅰ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅷ	Ⅺ	不明									Ⅰ	Ⅴ	
1	1	45	268	23	3	19	7	22	9	276	4	2	5	3	1	42	1	1	1	2	堆積土2・3層は無遺物層

第180図　35号土壙平面図

20. 35号土壙完掘状況

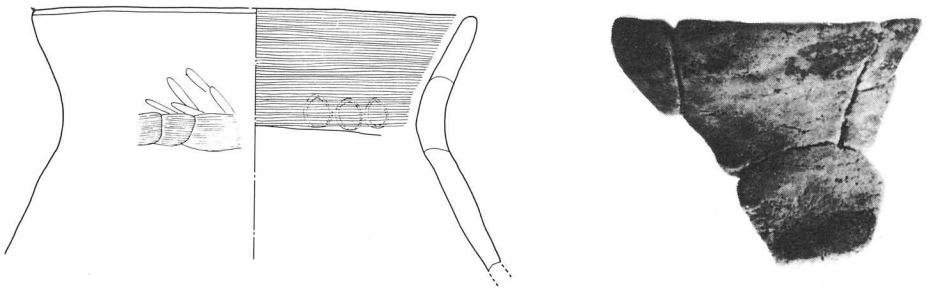


土器観察表

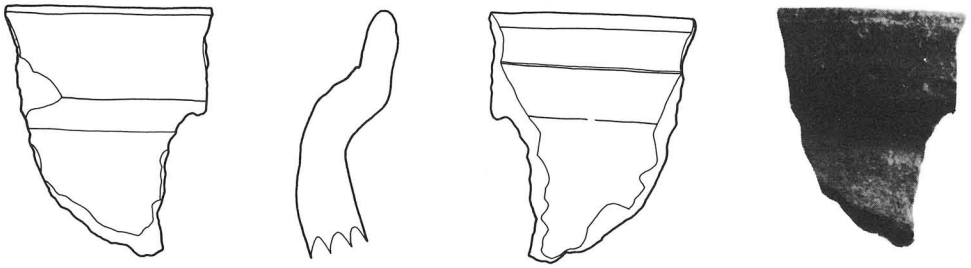
単位：cm

図	遺構	堆積土	口径	底径	器高	最大径	外面調整	内面調整
1	35D	1	12.8	6.3	23.0	20.4	口縁部ヨコナデ、体部ハケメ、ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ、輪積み痕

第181図　35号土壙出土土器



1．土師器甕



2．中世陶器甕

観　察　表

単位：cm

図	地区	層位	口　径	底　径	器高(残存高)	最大径	外　面　調　整	内　面　調　整
1	Ⅰ－9	Ⅲ	(17.6)	――	(10.2)	――	ヘラミガキ、ナデ	ヨコナデ
2	表採.		――	――	(6.6)	――	ロ　ク　ロ	ロ　ク　ロ

第182図　土師器・中世陶器

Ⅵ．その他の遺物（第182図）

その他の遺物として、土師器、赤焼土器、中世陶器の小破片がある。

土師器・赤焼土器は、第Ⅰ・Ⅱ層よりわずかに出土している。製作に際してロクロ使用のものである。土師器坏には、底部の切り離し技法が回転糸切り無調整の底部片１点がある。

中世陶器は、甕口縁部小破片１点（第182図２）が表採されている。口縁帯をもつもので、口縁帯の幅は広い。この破片は県内産のもので室町時代（楢崎彰一氏の御教授）のものである。

篠　原　信　彦

Ⅶ. 考　　察

縄文時代の遺物と遺構の分布

―出土土器を中心として―

Ⅰ　土器の層位的分布（第23～25表）

第23表は基本層位出土の縄文土器口縁部資料1628点（復元土器７点を含む）の各層の出土数量及び割合を出したものである。表24は基本層位出土の土器群別資料1363点（復元土器13点を含む）の各層の割合である。口縁部資料の割合はⅢ層→Ⅰ層→Ⅳ層→Ⅱ層の順となり、Ⅲ層は実に60％以上もの出土量がある。しかし、Ⅲ層はⅠ・Ⅱ層同様群別資料の割合を見る限り各群が混在しており、Ⅳ層の攪乱層的・二次堆積層的な様相を帯びている。Ⅳ層は口縁部資料の割合では10％と出土量が少ないが、これを細分層内（Ⅳb層の上面資料はⅣb層とは区別した）の群別資料の割合でみると、Ⅳa層中では第Ⅻ群土器（晩期後葉）の占有率が高く、Ⅳb層中では第Ⅱ群土器（早期末葉）の占有率が高い。第Ⅻ群土器はⅣb層上面を境にしてⅣb層中では占有率が極端に低くなる。Ⅳc層中になると第Ⅱ群土器の占有率が100％となる。また第Ⅴ群土器（中期後葉）、第Ⅷ群土器（後期初頭）、第Ⅻ群土器の各群について、Ⅳ層内出土数量を細別層別の割合でみると（第25表）、Ⅳa層の占る割合は第Ⅴ群土器では少なく、第Ⅻ群土器では反対に多くなり、第Ⅷ群土器ではその中間的な割合を示す。第Ⅻ群土器中では、Ⅳb層上面を除くⅣb層出土のものはわずか６％しか占めない。以上の点よりⅣ層中に於いて、Ⅳc層は縄文時代早期末葉の包含層として認定出来、Ⅳa層からⅣb層上面にかけては、Ⅳb層中に若干の第Ⅻ群土器を含んでいる点より、縄文時代晩期後葉の包含層と速断出来ないが、その可能性を十分含むと言える。

Ⅱ　土器の平面的分布

１．接合関係（第183図１）

第183図1は６ｍ以上離れた土器、石器の接合関係を示したものである。基本層Ⅲ層間では４例、Ⅰ層と他層・遺構間のもの６例認められる。Ⅲ層間では15ｍ以上も離れる１例（No２）、Ⅰ層と他層・遺構間のものは３例（No６・７・９）認められ、その他のものは10ｍ内外である。Ⅲ層間の接合に限って見るならば、No２を除けば、Ⅲ層中の遺物には多少の移動はあっても大きな移動は認められない。従ってⅢ層は群別資料の割合関係では、二次堆積層的、攪乱層的様相を呈しているが、Ⅲ層中の遺物は原位置より平面的には大きくは移動してないと考える。Ⅰ層と遺構間の接合No７は約40ｍと非常に離れている。No７の遺構が埋設土器で原位置を保っている点、Ｐ－11グリッドの方が埋設土器より標高が高く、埋設土器からの流出は考え難い点より、耕作等によって運ばれたものであると考える。従ってⅠ層中出土の遺物は、平面的にも原位置からかなり